

SprinterS

NEXENON

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは、ヘトロモーガン呼ばれし様々な異形生命体が、移民として住まう未来の世界：

人間と異形が共存する世界では、互いの身体や価値観の違い、そして様々な視点からの偏見や暴虐で溢れ、互いの至上主義が生まれ、終いには人間の数%は異形からの驚異を防ぐために、異能力を手に入れた、争いは激化させていった…。

それを危惧した我が国日本では、互いの至上主義を防ぎ、世界の統制を図るために、警察認可の探偵結社、スプリミナルが秘密裏に立てられた…。

仲間の裏切りによって、事件に巻き込まれてしまった詐欺師の悠樹哲哉は、スプリミナルのメンバーである少年、水原角也と出会い、自信の願いの為にスプリミナルに加入。

メンバー各々に罪を抱えている、明らかに問題アリな組織の中で、悠樹哲哉はどう戦っていくのか…。

# 目次

プロローグ『未来』	1
1—1 『詐欺師Yと少年K』	5
1—2 『詐欺師Yと少年K』	19
1—3 『詐欺師Yと少年K』	35
1—4 『詐欺師Yと少年K』	51
2—1 『少女Tとコーヒー爆弾』	69
2—2 『少女Tとコーヒー爆弾』	84
2—3 『少女Tとコーヒー爆弾』	102
3—1 『自己否定な僕と社長のS』	120
3—2 『自己否定な僕と社長のS』	134
3—3 『自己否定な僕と社長のS』	154
4—1 『Y講習中、K工作中』	168
4—2 『Y講習中、K工作中』	182
4—3 『Y講習中、K工作中』	199
4—4 『Y講習中、K工作中』	221
4—5 『Y講習中、K工作中』	236
4—6 『Y講習中、K工作中』	256
5—1 『一番のSと越権裁判』	272
5—2 『一番のSと越権裁判』	291
5—3 『一番のSと越権裁判』	310
5—4 『一番のSと越権裁判』	336
5—5 『一番のSと越権裁判』	350
6—1 『武装警察隊長H』	366
6—2 『破壊と幸運の隊長H』	392

6—3	『破壊と幸運の隊長H』	412
6—4	『破壊と幸運の隊長H』	432
7—1	『影のKと忍び寄る者達』	446
7—2	『影のKと忍び寄る者達』	463
7—3	『影のKと忍び寄る者達』	481
7—4	『影のKと忍び寄る者達』	499
8—1	『Aの炎、殺戮の信教』	512
8—2	『Aの炎、殺戮の信教』	530
8—3	『Aの炎、殺戮の信教』	552
9—1	『女医M、友との約束』	572
9—2	『女医M、友との約束』	591
9—3	『女医M、友との約束』	610
10—1	『秘書Sと奴隷オークション』	629
10—2	『秘書Sと奴隷オークション』	645
10—3	『秘書Sと奴隷オークション』	663
10—3	『秘書Sと奴隷オークション』	679
10—4	『秘書Sと奴隷オークション』	695

## プロローグ 『未来』

世界というのは、なにが起きるかわからないものだ。

急な政党変更、偉人の死、新商品の発売、宇宙人の襲来、大規模テロ。

誰も予測などできないからこそ、この世界は美しい。

なんてこと、君たちには分かりたくもないものか。

私たちが住まう世界は、君たちの住まう世界から分岐された、遙か未来のお話だ。

旧西暦で2041年と呼ばれた時、どこからきたのか分からないが、まるでお伽噺や小説家の想像から産まれたような、異形のエイリアンや幻獣等の生命体が、私たちの世界を侵略するために襲来してきた。

様々な形と能力を持つその生命体は、地球に住まう生命を次々に虐殺していき、ついには世界人口は1/10まで収束されてしまった。

中には家族をその生命体に殺された人間だっているし、同種族間で疑心暗鬼が起きてしまい、殺害されてしまった者だって少なくない。

なんとか生き残っていた人類は、もう打つ手がないと悟って、死を覚悟していただろう。

しかし、その未曾有の窮地に、立ち向かった者がいた。少しだけ話を変えよう。

君たちは、人間がアウストラロピテクスからどんどん進化していき、今のような美しく力強いダークブラウンや柔らかなパールオレンジ等の色とりどりの肌を持っていることを知っているだろうか？

それと同じ、境地に立ち向かったその人間は、我々の知らない場所で進化していたのだ。

それが『特殊異形能力』

侵略してきた生命体が異形な力を持っていたことにより、人間は学習し、本能が自主的に能力を覚えたのだと思われる。

その特殊異形能力者は、自身の能力を最大限に使用したことにより、叡知のある異形生命体の知能や大きさ、力を、できる限り人間並

に下げることにも成功した。

しかし、その力にも限界と言うものはあり、自信の体力の限度により、襲いかかってきた異形生命体の全てを、人間のように縮めることには無理があった。

そんなピンチの彼を救ったのは、一枚の鏡だ。

彼はそれにヒントを得て、残りの知能のない野獣のような生命体を、そのままの姿で、鏡の中に封じ込めることに成功した。

能力者の命と引き換えに…。

その後、力も知能も失った異形生命体達は、ついには負け戦を悟り、人間たちとの争いを止めたようだ。

だからと言って、元々いた場所へ帰ることもできない愚かな彼らは、後に知能のある異形生命体を異知能生命体、鏡のなかに閉じ込められてしまったその野獣達は無知能生命体と呼ぶようになり、彼らは移民として我々人間と過ごすようになった…。

しかし、その突飛すぎる平和の歴史を伝えるのには難解すぎたがため、私たちはあくまでもお伽噺として教わることにしかできなかった…。

それから月日は流れ、新世界暦2056年…。

ここまでの長い月日のなかで、我が日本は『リージェンにとって住みやすい世界を』という民主的理念を志したことによって、我らの国は歴史的建造技術や装飾を残しながらも、新型携帯端末の製造や自動運転や長距離短時間移動車両、インターネット配達技術等の乗り物の発達、無人レジの推進や自動年齢認識等の接客業の進化、高齢や身障者、リージェンのためのバリアフリー化、自由を尊重するための教育現場の発達等と、様々な近代化整備が成された。

まあ、そうは言うけど、外見や法律等が変わっただけで、2020年くらいからあんまり変わってはいないんだけどね。

だが、一番大きく変わったところと言えば、悪質な心を持った物からの被害を減らすため、我が国は県政を取り払われ、日本は八つの『地方』で呼ばれ、その地域ごとに発達や管理する物が選別され、町の構造などが、昔と変わってしまったと言うことだ。

例えば、今この話をしている私が住んでいるのは『バラードイア』、旧日本の呼び方で呼べば、関東地方だ。

さらに詳しく教えてあげるとなると、バラードイア地方TK市部27区。

ここでは、平和と均衡を守るために、大きな行政や司法、立法等を統制する機関の本部や、警視庁や内閣府等が、一斉にここに集められており、ここで仕事をしている者達は、度々、他の地方への出張が絶えないらしい。

他にも、衣類等の綿製品の研究機関が集められたクルスト地方や、日本発祥の様々な企業が集うプロミア地方と言った、特徴が捉えやすい様々な地方があるのだが、この世界に住む君なら、そこは追々知っていけるだろう。

旧日本の事を覚えている私にとってはとても扱いづらいが、これがリージエンにとって分かりやすいなら、私はこれでいいとは思っているよ。

まあ、反発するような人間もいるがね…。

さて、こちらの世界のことについて話したところで、最後にこの物語についてをお話ししよう

昔から今までに、この新日本の一時の最高犯罪率はなんと25%だ。

その理由の一つとしてはリージエンの増加と考えられている。

所謂、移民増加のデメリット部分とも取れるだろう。

その影響で、リージエンの中では違法行為と共にビジネスを進める団体『ミラーマフィア』の出現が問題視されていたり、一方の人類では『人間至上主義団体』まで出てきており、リージエンへの虐殺までもいる始末だ。

第三者視点で見れば、彼らのやることはお互いに、犯罪立増加の原因と言うことに変わりない。

そんな特殊犯罪の増加を阻止するために、警視庁は特殊な武装をし、テロや重犯罪を防ぐために『武装警察』を設立し、今も犯罪率の現象に勤めている…。

おっと、一つ言っておくが、私は武装警察なんて対したものじゃないよ？

私は武装警察公認である探偵組織の長をやっている。

私たちが目指すは一つ…。

リージェンと純人類の統制がなされ、全ての人々が平和に暮らせる世界…であつたり、そうではなかったり？

まあ、その名前を告げるのは、ここでは控えておこう。

これから始まるのは、一人のお人好みな人間と、各々の罪を背負う我ら組織が、この愚かすぎる世界で、苦悩の雨に打たれながらも、償いのために戦い、生きていく、そんな物語さ…。

おっと、少し話すぎてしまったね。

それでは、私は業務もあるため、ここで失礼しよう。

ん？私に会いたいかい？

なら、またここに来ると良い。

青色の瞳のコーヒーのカフェに…ね。



# 1-1 『詐欺師Yと少年K』

もしも僕があんなところに居なかったら、僕はこんな姿になっ  
ていなかったんだろうか…。

グルルと不気味に唸り声をあげて、マゼンタ色の結晶を自分の意思  
と関係なく斑に肌から生やして腰を抜かしている僕を、この融合獣の  
化け物が、濁った白眼でギョロリと睨み付けている。

異形生命体ヘトロモイガンとか、無知能生命体ノリーイとか、そんな名前で呼ばれているそ  
の化け物は、僕に向けて一筋の涎を垂らし、地面に落ちた亡骸を踏み  
しめて、じりじりと歩み寄る。

「ああ…」

僕は生きることを既に諦めている。

最早、生き残る資格なんて、僕にはないと思っ  
ているくらいなのだ  
から。

なあ、神様…もしも僕があんただったら、こんな化け物絶対に生ま  
なかつた…。

人間の努と哀のカテゴリをなくして、なにもかもを笑って生きてい  
けるような世界を作るだろう。

あの子がもう泣くこともない、笑顔でいられる世界を…。

ギジャアアツツ!!

腹を空かせる化け物は唾を振り撒きながら叫ぶ。

「もうだめか…」

僕はか細く呟き、腹の中に入る覚悟を決めると、唸り声を上げる化  
け物は獲物の食らい付こうと大きく口を広げ、僕はそつと目を瞑つ  
た。

ドガアアアアツツ!

自信の走馬灯を巡ろうとした直後、突然なにか大量の液体が大きな  
鉄の塊に打ち付けられるような音が響いた。

恐る恐るその目を開けると、目の前に広がったのは、水に滴る少年  
が、凹んだ化け物の頭に乗っている光景。

「だーいじょうぶー？詐欺師くん」

後光に照らされながら、僕に向けてニヒルに笑う少年を、その時の僕は綺麗だと思った。

これが僕らにとつて、騒がしい日常の始まりだったことを知らず：



今日は眩い程に晴れ渡っている。

洗濯日和やおでかけ日和とも言われるこの暖かな気候で、この世界の住人は、いつも通りの日常を暮らしている…。

今日は良い天気だね

仕事怠いわあ：

今日はスーパーのタイムセールだ！

EWMのAVヤバイw

TRYangle社の新作ゲーム買った？

僕がこの古くさく、日も入らない部屋の中でこそそと朝食を片付けているころ、きつと街中では、そんな他愛もないことを話しながら、人間と、人間ではない様々な形をした怪人が、澄んだ青空の下に歩いているのだろう。

この世界に住んでいる生命体は人だけではなく、獣人やエイリアンのような生命も生存している。

人々は、その知能のある異形生命体を『ヘトロモーガン・リーゼン異知能生命体（通称：リーゼン）』という名称で呼んでいる。

季節が変わっていく中で、リーゼンの皆も人間と同じように、食物や水分を摂取し、着替え、出掛け、働き、青春を送り、歪み合い、信頼し合い、様々な時を過ごし、そして思い出を抱いて歩く。

そんな普通の生活を送り続けているのだ…。

ただ、人間社会というのは、やはり悪というものだって存在してしまふのがくそつたれな要因だ…。

それは勿論、僕のような純粋な人類でさえも同じく…。

プルルルル!

木製のテーブルの上、幾多もの数がおいてある携帯電話の中の一つが鳴った。

「はい。こちらはカルドニクス社、お客様相談センターですが?」

着信をとった僕は、携帯電話越しにありもしない架空のインターネット会社の名前で応答する。

「あの…インターネットを見てたら、突然会員登録されて、ここに電話しろと表記されたのですが…」

電話から聞こえてきたのは、なにか木管楽器がリードミスで音をはずしたような甲高い声だった。

「あつ、もしかして我が社のサービスに関するお問い合わせでしょうか?」

「そう…ですねえ…。ちよいとその…あれな動画を見てましたらここに…」

「ということは、退会のお手続きというわけですねえ…そうだったら…規約の方に少し書いているのですが…退会手数料がかかりましたねえ…」

「ええ!?それって…どれくらいなんですかね…?」

電話の奥の声がどこか大袈裟に感じるが、電話を掛けてきた人の中には似たような人間もいるため、ここで判断するには早すぎる。

「えっと…本来なら29800円なんですけど…どうやら、お客様は誤認との事ですので殆ど私たちが負担いたします。ですが…やはりサーバーの料金が掛かってしまいました…その分の料金、9800円だけお支払いただけることはできますか…?」

「9800円…ほぼ一万円ですかあ!ああ…わたし、学生でして…あまりお金がなくてえ…」

「ああ…またこれか…」

「学生さん…?あつ!それなら初回無料で大丈夫です!ありがとうございますごさいました!」

「ええ、ちよ…」

先程の甲高い声とは裏腹に、普通の若い男子の声が聞こえると共

に、僕は着信を切った。

奇妙に甲高い声で、学生という言葉を使っているとすると、その電話の主が詐欺に気づいていることが大半だ。

電話をかけてくる理由は、くだらない動画投稿のためか、単純なお遊びか…。

そのため、うちの上司からは、足がつかないように早急に切るのが先決だと言われている。

「はあーあ…」

落胆して大きくため息をつくとき、大の字に寝転がり、僕は木目の染みがついた天井を見上げた。

築80年近いこの古い木造アパートの一階に、この僕、悠樹哲也は、影の世界で大手と言われている詐欺会社の営業所で生計を立てながら、一人暮らしている。

と言うものの、その詐欺の腕は一流とは言える訳がなく、成功したのは挑戦数に比べると、雀の涙程度だが…。

「また冷やかしたった…めんどくさいなあ…」

もしも、第三者視点で自分の姿を端から見るとしたら、僕はただクズな小言をぼやいている怠惰な犯罪者にとらえられるのだろうか。

そんな事を思いながら、僕は携帯を放り投げるように机に置いた。たればな上、馬鹿がつくほどのお人好しと言うのだから、詐欺師に向いてないのは、自分が十分理解している。

数カ月前なんて、老婆に振り込め詐欺をしようとしたら、何時間も孫の話聞かされ、僕自信が号泣して終わっただけなのだから。

こんな馬鹿が詐欺師をしているなんて、本当にお笑いだな。

それでも、僕はとある理由のために、なんとかお金を稼ぐために、詐欺をし続けなければいけないのだ…。

「まあ…頑張るしかないか…。家賃も滞納し始めてるし…。とにかく、事務所行こう…」

すぐるものすらもない僕は、やれやれと立ち上がり、ウォールハンガーにかかった、愛着のあるマゼンタのYシャツを、白いTシャツの上に纏う。

着替え終わると、机においてある携帯電話の電源を全て切り、それとは別のプライベート用のスマートフォンを、いつも使っている濃い灰色の靴に入れてそれを担ぐと、僕は靴を履きながら、古い木製の扉を開けた。

花びらのようにふわりと舞う春の暖かさが僕の体を包み、電線に止まっていた鳥達は、陽気に鳴きながら翼を広げ、空へと飛び去った。

外の世界は、まさに新学期や新生活の始まりといったところか。

それとはうって変わって、僕はそんな陽気な気分には、なれないんだけども…。

「あつ、ユウキさんユウキさん」

しかもその上、僕の住むアパートの大家をやっている、人間の中年女性が、物陰からぬっと現れ、僕の目の前に現れた。

「うっ…い…おっ…：大家さん…：今日は良いお天気でえ〜そのお〜」

家賃を滞納してしまっている僕は、作り笑いで言葉を返した。

僕は彼女の事が子供の頃から苦手だ。

よく、亡き母への偏見的陰口や小言を言ってきたし、今でもそう言う聞きたくない悪口をたまに小言として吐いてくる。

この調子だと、またなにか小言を言われるんだろうな…。

「うんうん、良いお天気ね。はいこれ」

大家さんは機嫌が良さそうに微笑むと、突然一枚の書類を僕に渡してきた。

その書類に大きく書かれているのは、まさに悪魔のような文字…。

「えつとお…：これはなんででしょうかあ…」

「退去願いだよ。家賃の三ヶ月滞納と、隣の店子さんから苦情が来てるね」

「苦情!?!」

ちよつと待て。

とりあえず、確かに家賃の滞納で追い出されるだけなら、明日払うからもう一日だけ待ってくれと言ってなんとかなるし、それでも出ていけと言われたら、仕方ないと諦めるだろう。

でも、さすがに苦情で追い出されるというのは、僕には心当たりが

無さすぎる。

「僕、そんな迷惑かけるような悪いことしてないですよ！騒音をだしたりとか、ペットを飼ったりとかも一切してないですし……。それに、お隣さんなんて居なかつたじゃないですか！」

「数日前に引越してきたんだよ。あんたのところから、電話の着信音みたいなのが沢山鳴るのが気になるんだってさ。私も鬼じゃないから、明後日までに退去してくれりゃ良いよ」

「そんなあ！というか、着信音なんてそんなに大きくないですし、一体どんな人が…」

続きを言おうとした瞬間、懸案の隣部屋から出てきたのは、イルカ型のリージエンだった。

「あ、おはようございます！」

「おはようさん！」

イルカのリージエンはにこりと微笑みながら、スーツを着こんでさっさと行ってしまった。

確かに、イルカは人間よりも耳が良いとは聞いたことがあるが……。

「……とにかく、家賃ならちゃんと今週中にまとめて払いますからー！革新的な当てはないが、少しは交渉になると考えて説得を続けるが、このごうつくばりの大家さんは聞く耳など持たない…。」

「それに、僕だって苦情あるんですよ！上の階の住人さんの部屋から、いつも深夜に天井がギシギシきしむ音と、女の人の喘ぎgoooo…」

不満を募る僕は、上の住人の苦情を言おうとすると、大家さんは僕の口をサツと抑えた。

その瞬間、上の階から出てきたのは、ネズミ型のリージエン…。

「カシムラさんここはお盛んなの。あんたみたいな生涯独身人間に部屋貸しても、少子高齢化が進むだけなの。さっ、帰ってきたら準備しとくれよ」

「生涯独身……ちよつと大家さあんっ!!」

なんとか彼女を止めようとするが、大家さんは僕を追っ払うような素振りをし、自分の住まう部屋の中へと戻っていった。

正直「なんだよこの、ごうつく偏見糞ババア！幼少時代にお前にゲーム機壊された愛息子に捨てられちまえ！」とでも捨て台詞的に言つてやりたかったが、さすがにそんなことしたら僕の命はないと悟り、黙つておいた。

「…はあく。今日は間違いなく、人生最悪の日になるなあ…」

唐突に起きたことに憂鬱になり、思わず猫背になった僕は、もう数日しか住めなくなったアパートに背を向けて、弱々しく事務所へと歩きだした。

まさか、こんな陽気な春の日に、突然追い出されることになるだなんてな…。

まあ…あの子がここにいたら「ハチノスツヅリガのリーゼンよりはマシだよ」なんて言つてはげましてくれるのだろうか…。

「…でも、頑張んなきやな…」

ふう…とため息をつきながら僕は気持ちを改め、自分を肯定するよきな言葉を頭のなかで復唱し、今日という日に向けて歩く。

ただ、僕の災難は、まだ序章の段階だったのだけれど…。



ウザつたいほどの晴天だ。

予想気温は15度、降水量0%だとテレビでは言っていたが、こんなに日が照るとは思つてなかった。

水色のパーカーについた三角形のアクセサリを揺らしながら、僕は大きく伸びをした。

目の前に広がるのは、純人類と異形生命体、つまり人とヘトロモーガンがこの都市を歩いている姿。

僕が生まれていない年の人間にとっては、まさに異常の事だろう。ヘトロモーガン族が地球に進行してもう何年経つたのだろうか…。

この世界で生きているヘトロモーガンは二種類存在し、『ノーイン』と呼ばれる知能を持たない種類は、未だに鏡のなかに生息しており、『リーゼン』と呼ばれる知能を持った物は、今も人間同等の知能を

もって、平然と暮らしている。

その上、リーゼンの中には人類と愛を育んだ個体や、ドナー手術等によって、体の形が変化してしまった者もあり、それを僕らは『異種混合人類』と呼ぶようになった。

そのため、この世界では純粹な人間の血液を持つものも少なくなり、後に人々は純粹な人間を『純人類』と分類することになっていた。そのため、今この前を歩いている人々は、全身がミンクのような表皮を持っている女子高生がいたり、スーツを着て急いでいる蛾のサラリーマンであったり、たつた今、手を繋いで歌いながら通りすがった親子は、親の方は普通に純人類だが、子供は人間の姿なのに肌にはトカゲのような鱗を持っていた。

ここはそんな突飛な状況が普通になっている世界なのだ…。  
「ふう…。今日もあんまりお客さん来ないな…」

そんな中、一応人類である僕は、歩道の片隅に赤いテーブルクロスを引いた一人用の机に肘をつきながら呟いていた。

そもそも、新世界歴とか言うけれども、このバラードイアは旧2020年から状況は変わってないらしい。

せいぜい、ビルの外見や携帯電話、そしてテレビに映る特撮ヒーローや魔法少女が新しくなっただくらいで、人工的技術の進歩って言うのは、もうあまり機能していないみたいだ。

…。  
…。  
…。

昔にすぎりつく人類と自己中心的考えの多いリーゼンが存在するから、犯罪率も上がっているのだろうと僕は仮定している。

「なあ、頼むよお…」

ふと左をみると、その最たる例と言わんばかりに、猪の形をしたリーゼンの男性が、小鬼のような角が生えたリーゼレンスの少女の頭をすりすりとは撫でながら、なにかを頼んでいた。

豚のような形のリーゼンの中には、人間と違って、性に対して邪な心を持つものが多いと言われている。

彼の息づかいが荒く、汗が大量に出ている上、普通の人には感じに



くい異臭を感じるため、恐らく強姦か誘拐一步手前の可能性が高い。  
と、こんな犯罪を食い止めるのが、僕の本業だ。

「ねえ、おじさん」

座っている場所から話しかけると、その猪リージエンは、如何にも我をなくしている目で、僕をギロリと睨んだ。

「あ…う…んだよ…」

それによって目に見えたのは、半鬼の少女が涙目になっている姿だった。

実力行使を好まない僕は、ポケットからコインを取りだして指で弾く。

クルクルと宙を舞ったそのコインが地面に落ちると、コインは裏面を天に向けていた。

「今日は運勢最悪みたいよ。頭上に注意ね」

「はあ…？」

言い忘れていたが、僕は副業として占い師をしている。

コインを投じている瞬間、コインに注目しているその豚の人相から、今後の運勢を占っていたのだ。

まあ、正直言うと、自分の占いは我流なもんだから、当たるのは十分の九位だ。

だから、当たらないときは必ずあるのだが…。

ガンツ！

「いってえー！」

このように、このドスケベ豚野郎の頭に花瓶が落ちてきたように、僕の占いは当たってしまう。

「うあ…くっ…」

頭に強い衝撃が走った事でよろめく豚に、僕は先程占った結果の内、もう一つだけアドバイスを告げてみる。

「あと、道端にも注意ね」

キキーツ！ガアン！

そう告げ終わった頃には、よろめいた拍子に車道に出ていた豚が、車にぶつかってしまった。

「あ、遅かった…」

ヴェインテージ物の外車に思い切り退かれてしまった豚は、顔を真っ赤にしながらか立ち上がり、ノシノシと車に向けて歩いていく。

「てめえ…どこ見て運転してんだバカ野郎…」

苛立つ豚は、ぶつかつた車に向けて、生意気に怒号をぶつけると、その美しい白い色のドアがガチャリと開いた。

「ああ？…んだとゴラア…」

すると、車から降りてきたのは、スーツ姿で電子タバコを吹かせる、如何にも強面で大柄な妖狐のリージェン。

運転していた彼が睨み付ける視線と目を合わせてしまったその豚の性欲は、自信の股間と共に一気にキュツと縮み上がってしまったようだ。

「あつ…いや…その……」

「おい兄ちゃん…。ここは国道なんだからよ…勝手に出てこられちゃ困るんだよなあ…」

副流煙を豚に向けてふうと吹き掛けると、さつきまで真っ赤だった豚の顔が、サーツと血が抜け、青白く変化していく…。

「は…はい…す…すみません……ぶひい……」

「つーかよお…？リージェンは頑丈だからお前の心配はしてねえけど、こつちの車傷ついてんだよ。どうすんの？なあ？大体、最近のチャラチャラした奴は……」

狐のおじ様は、豚の肩に手をやりながら、グチグチと話を続け、その間、あの豚野郎は死を悟っているように震えていた。

ちなみに、狐のおじ様が言うように、リージェレンス以外のヘトロモーション異形生命体は、大体人間よりも防御力が高いため、人間の致死衝撃でも耐えられることが多い。

だから、最近ではリージェンの事故に耐えられる車が主流となっているらしいのだが、今回は旧世界歴2000年モデルの物だから、思い切り凹んでしまった…。

「あ…ありがとうございます！」

すると、鬼のリージェレンスが駆けつけ、僕に頭を下げて礼を言う。

それほど怖かったのか、まだ少し腕が震えているように見えた。

「良いよ。別に、感謝されるようなことしてないし…」

僕はそれだけ言うと、彼女は涙をぬぐいながらニコリと微笑み、感謝かなにかはわからんが、鞆から取り出した袋菓子を机の上におき、何度も何度も頭を下げ去っていった…。

「……まあ、これが仕事だしな…。感謝されるなら貰つとこ」

僕はそう呟きながら、袋菓子を開けると、中身は個包装になっているキャンディで、それを口のなかに放り込んで、また頬杖を付きながら外の世界を眺める。

ソーダキャンディの味がまだ普通に感じれるだけ、この世界はまだ平和な方だ。

犯罪率が増加している世の中ではあるが、僕らがこうやって実力行使無しで生きていると言うことが、どれ程救いな事なのだろうか…。

「ただ、平和の裏にはいつだって不幸が紛れている」

飴を味わい、平和を謳歌している僕に割り込むように現れた老け顔の純人類の男が、僕の机に寄りかかってきた。

想像の邪魔するなよと思いつつ、僕は彼の顔を見た。

「どうかしたの…？サトナカくん…」

僕が聞くと、彼はニヒルに微笑みながら、僕が貰った袋の中から、飴を複数手に取った。

「いやあ、ちよいと良い被写体を探すために散歩をした途中だったのさ。いくつか貰うよ」

「はいはい…。お好きにどうぞ」

郷仲凍利、多分39歳。

印象画アーティストのS, Touriとして世界で活躍している芸術家で、僕の本業である裏組織のリーダーであり創設者だ。

灰色のストールに青色のノーカラージャケットが特徴で、どれだけ近くで彼を見ても、何を考えているのかがよく分からない。

その上、書く絵も恐ろしいと言うか、度し難いと言うか…。

だから、僕は彼のことはあまり好きではない。

「で…本当は散歩って訳ではないんでしょう？」

「ああ…君に、武装警察からの依頼が来ている…」

初めからなにか企んでいた郷仲は、懐から今時珍しい紐付き封筒を取りだし、机の上に置いた。

彼をジトリと見つめながら、僕はそれを手に取り、紐をほどいて中身を見てみた。

写真付きの書類には、どこにでもありそうな何気ない詐欺組織と、鏡の世界でリーゼンを至上するために暗躍する組織『ミラーマフィア』と思わしき生命体の名簿等が、沢山入っていた。

「株式会社ラーア。IT取引をしている子会社と言っているが、本当は多くの人間を詐欺に陥れてきた違法組織さ。詐欺組織だから株式でもないしね。しかも彼ら、今日の午後15時辺りにミラーマフィアと違法薬物の取引をして、大量の資金を調達し、マフィアをバックに正式にIT業界に介入するらしく、その取り締まりをしてほしいとのことだ」

「…詳しいソースはどこ情報？」

「いつものムカデ情報さ」

「ああ…」

組織にしか通用しない隠語を使いながら、僕は書類をパラパラと拝見する。

この組織に入ってから、承る仕事はこんな危険でデープなことばかりだ。

正直めんどくさいが、僕らは免罪符として組織にいるようなものなのだから、仕事を受けるしかない。

まあ、大層な仕事でない限りは僕は死なないし。

「まあ、お金も欲しいから、頼まれた仕事は受けるけどさ…なんで僕なの？キヤマくんやミヤマくんも、今日はバラーディア待機のはずじやないの？」

他のメンバーを頭に浮かべながら首をかしげると、郷仲は僕が持っている書類の中から、選び抜くようにして、一枚の名簿をとりだした。「どうしても…今回は君に行ってほしくてねえ…。君になら…わかるだろう？」

微笑む彼の姿が、また一層に光を遮るように感じる。

郷仲凍利と言う人間は、俗に言うミステリアスに値する者だ。

その上、誰かの不幸であったり、殺人や自殺と言った、残虐なものを芸術品と捉えることが多いサイコパスにも属する。

そんなところで感じる恐怖や、胸のうちに隠している多くの謎が、彼の心理をさらに読みにくいものになっている物だから、彼の考えを当てるには僕が彼の言動と手元にある書類を整理し、改めて占うしかない。

「ふうん…」

郷仲の取り出した書類をさっと奪い取ると、そこには20代ほどの男性の写真が貼ってあった。

ちらりと写るピンク色の上着と、優しげな垂れた目に、焦げ茶色の髪。

この人間が郷仲の考えとなにか関係があると悟り、僕は即座にその人相を見て、未来を占った。

「ははあ、そー言うことね…」

頭の中に飛び込んだのは、ブランド物のアタッシュケースと、身体から生えるキラキラした何か、そして同族の香り…。

写真に写るその人間の、今日一日の運命が大体だけどわかった。

まあ、未来なんて不確定の産物なのだから、分岐する様々な物があるからして、あまり信用はしたくないのだけれど。

「んじゃあ…これ片付けといってくれるんだったら…今すぐに行こうかなあ？」

「御安いご用。そういうと思ってたよ」

契約完了の合図として、僕は悪どくニヤリと無垢な笑みを交わすと、僕は立ち上がり、パーカーにつけられた鮫の歯を模した三角の飾りを揺らしながら、この明るみを歩きだした。

「言ってくる」

郷仲から背を向けながら手を振る。

「いってらっしゃい。頼んだよミズハラくん」

水原角也、14才。

今日はいつも以上に騒々しくなるなど思いながら、本業である探偵組織として、事件現場へと足を進めた。

## 1—2 『詐欺師Yと少年K』

暖かな気温に身を撫でられながら、僕は郊外にそびえ立つ高層ビルを眺めながら歩いていた。

ここから窓の奥でチラリと見えるのは、単純に人々が働いている姿だ。

ライオンのリージェンとオニオオハシのリージェンが書類を元に会話をしていたり、ユニコーンのリージェンが角刈りの人間の上司に叱られていたり、人間のOLが二人、コーヒー片手に休憩をしていたり…。

この国の企業は、世界の荒波に揉まれながらも、リージェン達と共に頑張っているんだな…。

なんて思いながら、僕は目の前の高層ビル…の裏の裏にある小さな一戸建ての事務所についた。

ここが僕の詐欺師としての仕事場の一つであり、元締めのような場所だ…。

カラカラカラ…

「お疲れさまでーす…」

引き戸を明けながら挨拶をすると、部屋に充満する煙草の香りがふわりと匂い、不揃いな形の数名のリージェンと人間が、熱心にパソコンや電話へと向き合っていた。

フィッシング詐欺と振り込め詐欺というやつだ…。

違法に開発されたSIMカードを使った複数のガラパゴスケータイを使って、引っ掛かりそうなカモを見つけ、嘘をついて引っ掻け、逆探知されれば携帯ごと粉碎して削除、フィッシング詐欺は、サイトを突き止められそうになった場合には、すぐさまサイトを削除し、また新しいサイトを作る…。

毎日これの繰り返し。

勿論、これが100%上手く行くという確証はないし、もっと上手

な詐欺師はさらにさらに巧妙なことをしているとされる。

リージェンの頭脳も人間の頭脳も高くなってるもんだし、犯罪率が少なくならない訳だよな…。

「おっ、お疲れさんユウキくん」

なんて思いながらデスクに鞆を置くと、隣の席の同僚が煙草の火を消しながら挨拶をしてくれる。

「お疲れ様です、ハマノさん」

同僚と言いつつも、彼の方が年上なので、僕はいつも敬語を使っている。

それに、彼の腕は僕なんかよりもはるかに上手いし、なにより綺麗な金色に染められたその髪が、イメージとしても詐欺師として出来上がっている。

まあ、これはただの僕の偏見だけでも…。

ただ、ここにいる全員が、僕よりも嘘が上手いのは確かだ…。

だからこそ、ここにいる全員が自分の仕事（詐欺）に精一杯嘘を付き、いつ足が捕まるかわからなくて、『次はお前だ』と言われそうなの状況に、内心ビクビクしていることを、ずっと隠し続けている…。

僕もその一人だ…。

今日も怯えながら、出来ない嘘で詐欺をするために、デスクのパソコンの電源をいれ、椅子に座った。

「そういや、今日カラハシさんは？」

ふと、いつも僕のと成りの席にいる、もう一人の同僚がいないことに気づく。

「今日は休みやって。それより最近どう？良えカモ捕まった？」

「あぁー…あんまりよくないですね…。今日もまた、学生のイタズラだったし…」

「まあーたかクソオ…。最近多いねんなあ…。きつしよくわるい…」

彼は背もたれに体重を掛けながら、最近の世間が考える詐欺防止に向けて不満を垂れた。

それに内心同意してしまう僕はもう立派な詐欺師かもしれないな。

「まあ、仕方ないと言えば…仕方ないんですけどね…。」



「……まあな。こんなんがそんなこと言うたら、普通あかんもんな……」

自分と言う人間に少し落胆、そして反省しつつ、彼はまたデスクへと向かった。

濱野さん自体、この自分勝手や臆病者が多い詐欺師集団の中でも結構優しい分類の人だ。

この集団の多くは、偏見や実力差に失望したり、なにかしら暗い過去を持っているからこそ、世界への復讐とか抗いで詐欺をしている理由が多いらしい。

勿論、僕もその一人で…。

「あー、ユウキくん。ちよつと」

そんなことを思いながら、パソコンに向かっている途中、この詐欺集団の長、つまり社長である人間が僕を呼びだした。

「あつ、はい?」

事務所のなかでよく見える位置にある、彼の大きなデスクに駆け寄った。

「なにか用ですか?」

用件を聞こうとすると、社長は無言でその少し大柄な体を倒し、机の下から、有名なブランドのロゴがかいてある銀色のジエラルミンケースを取り、机の上にドンと置いた。

「君にしか頼めない頼み事がある。詳しいことはこのメモに記載しているが、これを1・2区にある石崎コーポビルディングってところの路地裏で待ち合わせしている同業者の方に渡してほしいんだ」

僕にその指令を出す社長はいつになく真剣な顔で僕に仕事を依頼した。

頼られることは嬉しいのだけれど…なんか、いかにも怪しいというか…。

大体、元々こんな反社会的組織集団が、この役立たずの人材一人にこんな『いかにも』な物を、路地裏に持っていけと言うなんて、なかなかない…。

それに…そんなの絶対に覚醒するための薬物じゃないですかあ

!

落ち着け…とりあえず、冷静に聞いてみよう…。

「あの…良いんですけど…ケースの中身…見せてもらえませんか？」

その”如何にも”なジェラルミンケースを怖がりながら、僕が恐る恐る聞くと、社長は顔をしかめる。

「あ…無理…ですかね…？」

もう無理だろうな。

諦めて白い粉運んで重罪になれ。

怖がるあまりに自分の何処かから聞こえた気がした…。

「わかった」

だが、社長は僕の願いを聞き入れるように立ち上がる。

そして、ジェラルミンケースに取り付けられているナンバーロック錠に、パチパチと三桁の番号を入れ始めた。

まさか見せてくれるとは思わなかった…。

だが、もしかしたら先に物品を見た恐怖で僕を縛り付けて断らせな  
いようにするのか…!?

…。  
なんて思った瞬間、ロックが開き、社長はゆっくりとその鞆を開く

「ひっ…い…白い…ん…あれ？」

ついに覚醒の薬がお出まじだと思い、覚悟していたのだが、その鞆  
の中に、呆気にとられる程なにもなかった。

よく観察してみても、とくに粉が付着したりはしてないし、クツ  
シヨンの内部も隠しているような感じではなさそうだ。

一つ違和感があるとしたら、ケースの中身を新品のビニールが覆つ  
ているだけ…。

「あーあ…あんまり開けたくなかったんだけどなあ…。これ、リー  
ジェンアーティストの n a m a c o とコラボしたプレミア品のジェ  
ラルミンケースでさあ？いや、この会社とたまに会合してる社長がど  
うしても欲しいって言ってて、なんとかオークションで落としたのよ  
…」

社長はそのプレミア品のジェラルミンケースを優しくポンポンと

叩きながら敬意を説明するが…だからってなんでこんなにも怪しき満点で勿体ぶったんだろうか…。

というか、会合のためにオークションする資金があったのかこの詐欺会社に…。

「この取引できなかつたら…我が社の存続にかかわるからあ…ね？」  
「ね？と言われましても…」

この時の社長は、携帯の絵文字のような目をして、どうか頼むとでも言いたげだった…。

まあ、怪しい粉や錠剤等が入ってなかつただけマシか…。

後、今さらだけど…こんな詐欺師集団にも、他業者との関わり合いがあつたんだな…。

「でも僕…そんな社長の事とか知らないし…郵送とかじゃダメなんですか…？」

「大丈夫、ラーアの社員って言って、社長にこれを届けてくれるだけでもう良いから」

社長は、まるで遅刻しそうなサラリーマンのように急いでプレミア品のケースを閉じ、僕の前に置く。

「これ写真ね。あと、最近はミラーマフィアが徘徊してることもあるから、殺されないように気を付けてね。それに、異能力を使う犯罪組織も増えてるって聞いたから、それも注意ね」

彼は僕に、その社長の写真を渡し、昨今の犯罪組織による事件への注意を促した。

「うーん…なんか丸め込まれた感じがするんですけど…」

リージェン至上主義とも言われている団体の犯罪も確かに増えているし…。

こんなしたつぱに頼むなんて…さすがに捨て駒にしか思えないよ  
うな…。

うん、やつぱり怖いからこの話はお断りしよう。

マフィアや犯罪組織なんておぞましいこと、そんなのして命を落としたり、あの子に申し訳がたたない…。

「あの…やつぱり殺されたりしたら嫌だし…今回はあ…」

「あつ、生きて帰ってこれたら大入りボーナス”3万円”を本日手渡し払いね」

「やります」

ああ、金の大バカ野郎。

そしてつられる僕も大バカ野郎だ…。

「んじゃ、よろしくねっ！」

そう言つて、社長は機嫌よく椅子に飛び乗ると、その椅子がくるりと回り、僕から背を向けた。

まんまと社長の掌にのせられてしまった僕は、仕方なしにそのケースを受け取る。

なにも入っていないから軽いはずなのに、何故かデカイ鉛が一つ入っているような重みを感じた…。

「い…いってきます…」

心のなかで、気軽に言いやがってコノヤロウと思うが、このボーナスのためには、嫌でも足を動かすしかない。

しょうがないけれど、たかをくくつて、僕は恐怖の入り口に向けて歩きだした。

「大丈夫う…？ユウキくん…」

自分のデスクを通りすがったところで、顔色を伺うように、濱野さんが僕に聞く。

「正直めっちゃ怖いっす…」

自分から自信の顔が見えるわけないから確証はないけど、多分ロングセラーのホラー映画に出てくる女性の幽霊のように、僕の顔面は蒼白していると思う。

正直、誰かに変わってほしい。

「そうやんなあ…。あつ、じゃあ行く前に、妹ちゃんの様子とか見に行ったらどない？重要任務の前に気を休めたら？」

慰めるように濱野さんが僕にそれを提案してくれた。

僕がこんなに金にすぎり、詐欺を続ける理由としては、唯一の家族である妹の存在があるからだ…。

「あー…仕事終わってからにします。無駄に心配かけるのも、あまり

よくないと思うので…」

あの子の笑う顔を脳に浮かべたら、彼女には少しでも心配はさせたくないと思ってしまう。

それが僕のお人好しと言われる理由の一つであり、詐欺師になりきれない部分なんだろうな…。

「そっか。んじゃ、気を付けてな」

「はい」

濱野さんの何気ない言葉に勇気を貰い、僕は意を決して外へ出る。

外はまだ東日の光が照らしている…。

このケースを単純に届けるだけだ、大丈夫大丈夫と何度も心の中で言い聞かせながら、その足を進める。

今なら、行くなど言えるんだが、もう遅い…。

この行動一つが、今の僕を壊す条件だったなんて…思ってたなかったから…。



郷仲から依頼を受けた僕、少し広めの路地裏にて待機中…。

地面に落ちている踏み潰された吸い殻が、まるで鬱屈や怠惰の吐き貯めのようなだった。

茶色いコンクリート性の壁にへばりついたヤニの香りが、鼻につく。

僕は顔を歪めながらも、その壁に体をくっつけ、影からそつと顔を出して、黒いスーツを来た異形の形をした怪人達の集団を見つめていた…。

”如何にも”と言いたくなるその衣装を着ている彼らは、リージェン至上主義かつ、組織を組んでいる違法組織だ。

これを総称して僕ら人間は『ミラーマフィア』と呼ばれている。

人員のほとんどはリージェンであり、彼らはなんと、ノーインの生息する鏡の世界を行き来しながら、麻薬や違法武器の売買、地上げ、同じマフィアや武装警察との抗争、殺人等、やりたい放題との報告が上

がっている。

それに、リーゼンには普通の人間よりも力だけはあるからこそ、僕らのようなアウトローな集団でなければ、規制や確保は難しい…。そんな糞みたいな奴らが蔓延ったせいで、このめんどくさい組織が出来たわけだ…。

「アニキ。あの詐欺師集団会社の奴等、まだ来ないんすかね？」

ふと、丸いスライム状の体をした緑のリーゼンが、まるで絵に描いたようなピンク色のタコ型エイリアンのリーゼンに声をかける。

そのタコエイリアン型怪人の吹かす葉巻の、甘味と塩のような匂いが混ざった独特の香りが、ヤニの匂いと混ざって気持ちが悪い…。

「ま、すぐ来るだろうよ…。詐欺師と言っても、実権はリーゼンである俺たちが握ってんだ。俺たちハンブル組がこの裏の世界で一番になんのも…：時間の問題さ…。」

ハンブル組とかいう、まあ如何にもダサイ集団のリーゼン達は、ボスの一声によって機嫌を良くし、グフグフと気持ち悪く笑う。

ほんつとに、アニメのワンシーンのように単純思考な集団だな…。

改めて状況を整理すると、タコエイリアン型のリーゼンの親玉が一人、そして緑のスライム型のリーゼンが4人。

スーツを見る限り、武器はハンドガン一つで、相手はリーゼンとしての能力を過信していると見た…。

「この分なら…：すぐ終わりそうだな…。」

僕は大きくあくびをしながら、水色のパーカーにつけられた、銀色の三角の飾りをそつと撫でる。

さつさと終わらせて、帰って甘いカフェオレでも飲みたいものだ…。

なんて呑気に思っていると、突然、ミラーマフィア達の表情が変わった…。

「おっ…：来たか…。」

そつと覗くと、マフィア達の前に、一人の男が現れた。

サングラスをかけ、穴が開いた古着の上に、自分のみすばらしいなりを隠すように、真っ黒いスーツを着ている純人類。

彼が大事そうに抱えているものは、有名アーティスト、namacoによるコラボデザインของジェラルミンケース。

確かに、あのケースは郷仲が用意した前情報通りだ…。

「あれ…？あのピンク上着の純人類じゃないのか…？」

だが、集められていた写真の中を占った時、確かにピンク上着の純人類が、あのミラーマフィアの近くにいた光景が見えたはずだった…。

久しぶりに占いが外れたのか…？

「ブツは持つてきたか？」

すると、タコエイリアンのリージェンがソーダゼリーの香りのする葉巻を吹かしながら、ドスを効かせて純人類にそれを聞く。

「はい。このとおり」

角度と距離的に中身が見えないのが少し悔やまれるが、純人類がケースを開けると、中身をみたリージェン達がニヤリと笑う。

「おお…これだこれえ…」

なにを取引しているのだろうか…？

なんて疑問に答えるかのように、奴らは上機嫌で中身の物を取り出した。

手に持ったのは、ファスナー付のビニール袋に入った白い粉と、取引が禁止されている、ハイドニウムと言われる危険な違法物質。

「これで俺らも上にあがれるぜ…ツハツハツハツハッ！」

ミラーマフィア達は、まるで宴のように笑いだし、タコエイリアンはお手玉のように白い粉をポンポンと投げた。

「いや…そんな玩具みたいに取り出すなよ…」

思わず口から言葉が出たが、奴らのバカ騒ぎの声で掻き消されている。

ここからみて、驚異と思わしき者は約五人ほどしかいないが、ここに敵がいるとも知らず、取引物品の扱いも雑なため、バカの集まりとしか思えない…。

「まあ良いや…とつとと仕事するか…」

あのバカリージェン数名に苦笑しながら、僕はパーカーにつけられ

ている三角の飾りを握る。

だが、次の瞬間…。

「ひ…ひいつー！」

突然響いた弱々しい声が引き金となり、唐突に事件の展開が変わった…。

その声が聞こえ、歓喜していたミラーマフィア達の表情が強張り、ギロリとそこへ視線が向けられた。

「…!?マジか…！」

視線が向けられたのは、僕から見て直線上。

まさに『いない』と思われるいたそのピンクの上着の純人類が、影の当たる路地から出て、尻餅について怖じけていた。

「なんだ…てめえ…！」

マフィア達は拳銃を手に持って、腰を抜かした彼を睨みながら、怒りや脅しを交えて、じりじりと歩み寄る…。

「不味いなあ…こんなところで出会うなんて聞いてなかった…！」

やつぱり、占いと言うのは、必ず一部が外れ、一部が当たる物だ。

本来の結果とは違いつつも、必ずそれが当たってしまうのは、やはりどこか腹立たしきがあるな…。

「しゃーない。人間を助けるのも…僕らの仕事だ…！」

自分の望む未来のため、僕はニヒルに笑いながら、鯨の歯を模したフアスナー飾りを強く握る。

その裏には、水色の結晶が埋め込まれており、握られた瞬間、それがぼんやりと光りだした…。

「いくよ…！」

自分の中にいる自分に向けて声をかけ、マフィアどもの元へと駆け出す。

「肉体<sup>トランス</sup>換装！」

その言葉を唱えると、握りしめるスカイブルーの結晶が強く光を放ち、体を包む。

すると、自信の着ていたはずの服が、水色のラインが入った黒色のパーカーとジャージ状のズボンへと変わる。



これが僕らの仕事着であり、獄衣、そして自分の力を放つための道具だ。

「はあああつー！」

駆ける僕はその場で飛び上がり、タコエイリアンの後頭部に思い切り蹴りをいれると、リージエンの顔は、クシヤツと情けない奇声を上げながら、地面にめり込んだ。

「うわあーアニキイー！」

突然のことに驚く他のミラーマフィア達が、僕の足の下にいる奴の安否を確かめるために声をかける。

心臓は動いているから大丈夫だろうが、肌の感触がぬるぬるグニグニとしていて足が気持ち悪い。

「き…君は…？」

ミラーマフィア達と同じく驚いているピンクの上着の彼は、冷や汗を滴ながら僕に聞く。

「とつとと逃げな。ここは危ない」

「あつ…はい！」

逃避を促すと、彼は恐る恐る立ち上がりつつ、そそくさと逃げ出した。

とりあえず、最悪の状況は免れたと思っておきたいが…。

「てめえ…なにもんだあ！」

足の下で寝転がるタコエイリアンが怒る姿に、僕は笑み、そいつをさらに踏みつけた。

「動くな！スプリミナルだ…！」

僕は警察特殊認可特異行使結社を表すため、武装警察からの依頼書を取り出しながら、高らかに宣言した。



僕が逃げる少し前に時を戻そうか…。

少し鬱屈な気持ちで事務所を出た後、人類と異形な生命体の乗る電車で揺られて約一時間弱、ヤニ臭い広めの路地裏を通り、僕は社長か

ら言われた通りの場所に来た。

「おオー！これこれエ！ずつとほしかつたんだよオ！ありがとうねエ…」

取引人は受け取ったバックを抱き、幾つもある目をキラキラと輝かせながら、僕に礼を言う。

正直、まさか本当に同業者の社長がこんなところにいるとは思わなかった…。

しかも彼は頭蛇人《ゴーゴン》型のリーゼンのため、その姿を見つめれば見つめる程、謎の恐怖が僕の胸の奥から湧き出てくる。

ちなみに、「頭蛇人<sup>ゴーゴン</sup>」型なので、彼が『石にする』と命じて目を合わせる事が無い限り、固まることはないとの事だ。

「しゃ…社長が…満悦なら何よりなんですが…なんで…こんなところに…？」

恐る恐る聞くと、ゴーゴンの社長は見た目に反して気さくに話しはじめる。

「いやねエ…私、ゴーゴンじゃない？だから、普通の店に行く結構怖がられちゃうから…。偏見もあるし…こう言う頼み事するときは、人気がないところの方がいいんだよねエ…。石にすることは無いし、誤ってそうなったとしても、少し経てばすぐに戻るのにイ…」

「そうだったんですね…」  
こんな怖い見た目に見えて、本当は周りに気を配っている人なのか…。

まあ…そんなふんわりとした柔らかな頭から生えている六匹の蛇に、一斉にギョロリと眼を向けられてしまつては、皆に怖がれても仕方がないか…。

「とにかく、そっちの社長さんにはまたお礼いつとくから。君とはここでお別れだねエ」

「そうですね、無事に届けられてよかったです。取引、ありがとうございますいました」

「いやいやー！こちらこそありがとうございますア」

僕と社長は互いに頭を深く下げて礼を言った。

「あ、君のことも良く言つとくからねエ」

「あ、ありがとうございます」

小声で耳打ちをしてくれたゴーゴンの社長は、どの顔もにこりと笑顔を浮かべていて、こんなリージエンとの交流も悪くはないな、なんて思った。

その後、二人は解散となり、僕はこの暗い路地を歩き始めた。

結局、今回の仕事は、単純に企業間の好感度上昇と言う感じの任務なのだろう…。

と言うか、目立つところは嫌だというのは分かるのだが、何故にこんな下手したら通報されそうな取引をしなければならなかったんだろう…。

ここじゃなくても、駅裏のあまり売れてなさそうなラーメン屋とかでも全然良かったのに…。

まあ、そんなことは置いといてとりあえず…。

「変な仕事じゃなくてよかったあ〜…」

心配しっぱなしだった僕は肩の荷を卸し、ふらふらの足取りの苔と黴の湿った臭いのする路地裏を歩く…。

ふつうなら不愉快なこんな匂いも、今は少し快い気がする…。

「それに…ここで更に罪を負ったら…アヤに向ける顔がないからな…。」

こんな時にでも、一番に愛する人間の顔が浮かぶのは、やはり僕が純粋な人類だからなのだと思う。

まあ、リージエンの事とかは全くわからないから、差別かもしれないのが申し訳ないけれど…。

でも、どうしてもどこかに『リージエンよりも人間の方が愛する力が強い』と言う固定概念の下でそれを感じてしまうのだ。

「…もしも僕がリージエンだったら…どうだったんだろうなあ…」

路地裏から見える青空を仰ぎながら、そんなことをふと呟いた。

僕は『たれば』な性格だから、もしもくだったらと言う妄言のよくなものを、僕は何度も繰り返す。

きつと、自分が後悔を繰り返してきた人生だったから、こんな性格

になつてしまつたのだろうか…。

自分自身、この性格は嫌だから、少しでも治そうとしているが、枷として繋がれているように、この性格が一向に治ることがない。

ここまで長く付き合つてきては、もう治ることなんてないか、と諦めきつてはいるのだけれど、いつかりージェンや人間、そんな種族関係なく、うざがられてしまつていゝのではないかと、ずっと不安ではあるのだ…。

「まあいいか…。どうせ僕なんかには誰も寄り付かないんだろうし…。」

ふうと息を付きながら、地面に落ちた吸い殻を踏んだ。

こうやって諦めるしかないというのも、少し腹立たしきがあるのだが…。

「……ん？」

ふと、異様な匂いが鼻を通つた…。

路地裏だというのに、どぶの匂いに混じつて、どこかしよっぱくて甘つたるいお菓子のような香りがあるような…。

「塩ゼリー…？」

考えているうちに頭に浮かんだのは、昔、妹と一緒に、夏に食べたことがある生菓子だ。

しよっぱさが少し強めだったけれど、妹が地味に好きだったお菓子だった…。

「懐かしいな…久々に買つていこうか…：…だっ！」

つい、昔のことを思い出していることに夢中で、思わず壁にゴツンとぶつかつてしまつた。

その拍子で、僕は方向感覚を失い、身体がぐるぐると方向感覚を失い、ふらりと影から出てしまつていたことに気づかなかつた。

「いつてて……」

じんじんと痛む額を撫でながら、僕は目を開けた。

「……う？」

すると、さつきまで見ていた路地裏の景色だったはずが、一転して非日常的なシーンが目の前に飛び込んできた。

「…っ！」

そこには、ゼリー状のリージエンを率いた、タコのような形をしたリージエンが違法薬物や武器を玩具のように持ち、良くは見えないが、古い服を着たサングラスの男と、違法薬物の取引をしていたのだ…。

「ひ…ひいつ！」

元から罪をおかしている自分が初めて見た、形に填まったようなその重罪行為に、僕は思わず悲鳴をあげて腰を抜かしてしまった。

「なんだ…てめえ…」

しかも運悪く、その悲鳴を聞かれてしまい、エイリアンとスライムのリージエンが、ギロリと睨みながら僕に向けて銃を構え、少しずつ歩み寄ってくる…。

「そ…その…えと……」

取り繕おうとするも、焦りと恐怖で言葉が出てこない。

はやく逃げないと殺される。

そんなことはわかってる！

わかっているくせに、なぜ動かないんだ僕！

早くしろよ！

ただその地面につけたケツを浮かせて、脚を動かすだけだろうか！

誰か…僕を動かしてくれ！

誰か…誰か…っ！

「助けて…」

叶いもしないであろう願いを口に出すと、リージエンの持つ拳銃のリボルバーがカチャリと回転し、僕は咄嗟に防御するように腕を前に出し、強く強く目をつぶった…。

「肉体<sup>トランス</sup>換装っ！」

だが、その恐怖はその声と共に、消える。

強い光を肌で感じた僕が目を開けると、そこには黒地に水色のラインが入ったパーカーを着た小柄な少年が、銃を持っていたエイリアン型リージエンの後頭部を思い切り踏みつけていた。

「うわあーアニキイー！」

エイリアンリーゼンを踏みつける少年は、自身の膝の上に腕を乗せた。

何が起きたのかはわからなかった…。

「き…君は…？」

唐突のことに恐れ、震える僕が聞くと、少年はこの情けない顔を見て、無垢に微笑む。

「とつとと逃げな。ここは危ない」

彼の言葉を聞いて、混乱していた僕はハッと我に帰り、このままここにいれば、自身に何が起きるのかわからないことを思いだした。

「あっ…はい！」

抜かしてしまった腰を、よろよろとだがなんとか起こし、もたつく足を動かしながら、僕はその場から逃げだすように走った。

# 1—3 『詐欺師Yと少年K』

独特な匂いが舞う路地のなか、自分がスプリミナルであることを宣言した途端、犯罪者達の空気は一気に緊迫した。

「スプリミナル…ってなんだよ…？」

たじろぎながらスライムたちが顔を合わせるのに、気が抜ける…。やっぱり、このバカリージェン共にはわかつてはなかったようだな。

「警察特殊認可特異行使結社…。様々な特異点のみが集められた、特殊な探偵部隊です…」

取引に来ていた男性が、アタツシケースを抱えながら、タコエイリアン共に向けて、僕らの組織の解説を始める。

「異知能生命体リージェンや異能者を逮捕するために武装警察が作られたのはご存じですよね…？その武装警察がなかなか入り込めない管轄、言わば民事的な事から、マフィアや人間至上主義者の問題を解決するために、密かに作られていた、警察の認可した秘密組織のことです…」

「武装警察…ってことは…俺ら捕まっちゃうんですかい!？」

男の解説を聞いたバカなりージェンの、あまりに間抜けなコメントに、また溜め息が出る。

ミラーマフィアのくせにそんなことも知らないのか…。

「それ以外に…何かあると？」

僕が彼らを睨み付けながらそう言うと、スライム型リージェン達は解説を聞いて恐怖を感じたのか、思わず後ずさる。

ようやく今の状況がやばいと理解したか…。

「てめえ…」

すると、足の下に潰されていたボスの立ち位置のタコエイリアン型リージェンの身体が、怒りで水面のようにユラユラと揺れだした。

「俺を…雑に扱うなあっ！」

潰されていた彼のスーツがビリビリと破けると共に、背中から吸盤のついた触手が八本、一斉に僕に襲いかかる。

「ふっ！」

リージェンの特殊効果の発動に、危機を察知した僕は、直ぐ様上空にジャンプし、一回転をしながら着地する。

「ツチ…攻撃方法本当に蛸だな…」

そもそも、ヘトロモーガンには体質的な攻撃をする物もいて、このようなリージェンでも、触覚を伸ばして翻弄する個体もいるのだ。

「俺を足げにしゃがって…許さねえっ！」

僕の態度に激昂するタコエイリアンは、潮水のような少しベタついた体液を撒き散らしながら、僕に向けて幾つもの触手を伸ばす。

「よつとー！」

それに捕まらないように、地面を転がったり、壁を蹴って翻弄したり、ジャンプで避けたりして、彼の攻撃を避ける。

その間、まさに子供がイマジネーションを膨らませ、画用紙いっばいに描いたような、頭の下に無数の触手があるピンク色のタコエイリアンの身体を観察してみる。

触手のなかに毒針が出てきそうな孔や搾みのようなものはない。

先ほどたばこを吸っていたが、形状的にも普通の純人類と同じだから、なにか口から墨を吐くような気配はないようだし、おそらく、形がエイリアンだから、無重力に強いとか酸素が少なくても良いとかの特徴を持っている可能性がある。

だが、ここで役に立ちそうな特性は一つだけか。

「タコ型エイリアンだから、主攻撃は触手…って訳っ！」

バク転をして触手を避けると、着地時に、タコエイリアンの口角がニヤリと上がる。

「そう言うことだ…っ！」

タコエイリアンは得意気にそう言い放つと、突然、僕の足の付け根にグニヤリとした感触が走る。

「…っ！」

タコエイリアンは、着地した場所を予測し、足を囲むように円形の囲いを作っていたようだ。

僕が着地したその瞬間、日本古来の罾のように獲物の足を縛り、そ



のまま8本の内の6本の触手で、僕の全身を縛り付けた。

「アニキイー！やっちゃまってくださいええ！」

スライムの子分達が囃し立てると、このタコは調子にのっているのか、僕を締め付ける触手が、疎らに力を入れながら、ギリギリと強まっ  
ていく…。

こいつの誇るものは、この締め付ける力の強さということか…。

まあ…こんなことされても無駄なんだけどね…。

アーツアンフォルド  
「特具武装」

僕がそう呟くと共に、パーカーについていた装飾品が変化し、水色  
に光る禍々しい形の長剣が二本触手を切り裂きながら生成され、縛ら  
れて見えなくなっていた両手に握られた。

「ぐああああつー！」

一応、痛覚はあるようで、タコエイリアンは叫び、斬られて体液を  
流す触手を縮こめてしまった。

まあ、こんな派手なことせずとも、抜け出せる方法はあったんだけ  
どもね。

「アニキツー！くそつー！」

スライム達はエイリアンに加勢するため、RPGに出てくるような  
丸っこい姿に変化し、僕の身体に飛びかかってきた。

「うえつ…！」

しかし、どうやら彼らは、ゲーム的に言えば下級スライムモン  
スターのようで、飛びかかって体当たりするしか能がなく、ただベチャ  
ベチャと音を立てながら、僕の身体に延々とへばりついては落ちるの  
繰り返しだった。

「へへっ…どうだ…気持ち悪いだろうー！」

「それだけかいっ！」

そう言いながら、僕は双剣をヘラのように使い、へばりついたスラ  
イムを地面に叩き落とし、襲いかかってくる者は、ペシンと叩き落と  
した。

「く…くそつ…！」

攻撃が全く効かず、悔しがるスライム達は、地面を這いながらまた

人形へと戻っていき、タコエイリアンを守るように、円陣を組んだ。  
「……ってかさ？あんたら銃あんのに、なんで使わないの？」

先ほどからずつと考えていたことを口に出してみると、彼らは少し考えた後、頭の上に電球が浮かぶように、ハッとその事に気づいた。

「ハハハハハハッ！敵に有利なことを教えやがってバカめえ！」

ダメだ……やっぱりバカだこいつら……正直戦いたくねえ……。

「くらええっ！」

勢いづいたリージエン達は、馬鹿正直に威勢良く、銃から弾丸を何発も僕に発射した。

「まあ……僕には効かないんだけどね……」

彼らの放つ弾丸が体に着弾すると、身体の表面が波紋を生じながらゆらゆら揺れ、飛来した弾全てを背面全体から、ピシヤリと音を出しながら受け流した。

「な……なにっ!？」

驚かれるのも不思議ではないだろう。

この世界ではまだあまり広くは知られていないのだが、純粋な人類の中には、普通では考えられない異端過ぎる能力、言わば『異能力』と言うものを発症する人間がいる。

まあ、僕の異能力は特異点として分類されてるため、少しばかり違うのだが……。

まあ、今は一括りに異能力ということにしとこうか。

「てめえ……そんななりしてやがるが……てめえはリージエレンスだったのかあ！」

まあ、このバカ共は僕の力を異能力とは思ってないみたいだ。

てか……こいつらの裏にいるはずの男が『特異点』っていったこと、もう忘れてやがる……。

「まあ……お前らみたいなのに使うと、ただのかっこつけみたいになるのが嫌だけど……。さっさと終わらせるには丁度良い……」

そう言っつて、僕は剣を背中に背負うと、片方の掌を広げて、目の前のリージエン共に向ける。

「な……何する気だ……てめえ！」

「無能にはわからないこと……」

後ずさりをするタコエイリアンを鼻で嗤うと、僕の掌の汗腺辺りから、微細の液体が吹き出し、それはテニスボール大の球体を作り出した。

僕の異能力は簡単に言えば『水を操る』と言うものだ。

「原水圧縮……」

すると、掌に集められた水がテニスボールから、パチンコ玉程の大きさに圧縮されると、僕は人差し指と親指を立て、ハンドガンを表すような形に変える。

水を操ると言うことは、形も方向も速度も、概念以外ならどんなことでも変えることが出来る。

だから、こういうこともできるのだ……。

「<sup>ヴァッサー</sup>弾丸！」

指に少し気を送ると、パチンコ玉大の水球が、音速の早さで発射され、タコ型エイリアンの心臓近くを貫いた。

「があ……っ！」

胸を貫いた水の弾丸は、リーゼンから吹き出す青色の鮮血を纏いながら、背後の壁を凹ませて蒸発し、タコエイリアンは胸を掴みながら、地面に膝をつける。

「ア……アニキイツ!!」

咄嗟の事への驚きと不安に駆り出されたスライム達が、胸を撃たれたタコエイリアンの親分に駆け寄る。

「原水放出！」

僕は再度、身体から幾つもの水の球体を出現させる。

さつきも言ったが、自分の能力は水を操ること。

だから、犯罪者がこのように一つの場所に集まった場合には、こんな便利な物にも変形することができる。

「<sup>グリウンツイマー</sup>監獄！」

少し格好をつけて言うと、僕の腕から放出された大量の水が、まるで鳥籠のような形を作りながら、四体のマフィア達に襲いかかる。

「ウワアアアアッ！」

すると、手から放出された水が周囲ごと彼らを覆うと、まるで檻のような形に変わり、五人のリーゼン達を拘束した。

「なんだこれ……くそっ！」

悔しげに拘束されたスライムが一体、身体を液状にして格子状の間から抜け出そうとするが、その途端に水の檻がスライムを飲み込もうと、姿を変える。

「ひっ！」

スライムの肌に水が掠ること、水が自分の身体を飲み込もうとする感触に恐怖を感じ、脱出を図った彼が思わず身体を引っ込めた。

これこそが、グリユンツィマーの力。

どんな物質であろうが、その空間からは、抜けさせない……。

「ぐ……くそ……」

傷口をおさえながら、こちらを睨むタコエイリアンに、僕は視線を向けながら檻の中に入る。

この水の檻は、僕が近づくだけで形を変えて中へと入ることができないのだ。

リーゼンに近づく僕は、ポケットの中から、下部に針を着け、上部に十字架を乗せた鳥籠の形をした物体を取り出した。

「違法物質取締、あと公務執行妨害……になんのかな？まあいいや、確保」

めんどくさいが、罪状をしっかりと伝え、僕はそいつにその赤き針を突き刺した。

「がああっ！」

すると、タコエイリアンは痛みに苦しみ、叫ぶ。

「痛みは一瞬だ……」

少々ありがちな台詞を僕が吐き捨てると、タコエイリアンの体は、その小さな籠の中へと吸い込まれていくように、少しずつ萎縮していく……。

「ぐ……なん……だ……」

何かを言おうとしたその瞬間、パツン！と軽い音を立てながら、彼の姿は消えてしまった。

今、犯罪者のリーゼンを吸いとったこれは『プリズンシール』と名を付けられている。

僕がこの姿になるときに持っていたパーカーの飾りの材料や、今着ている服の繊維の中に混ぜられている素材『ルストロニウム』と、とある能力持ちの人間の血液の複合によって作られており、針を経由して、一体分の生命体をこの中に保管することができる。

もちろん一生このままなんて事はないし、機材を使えばすぐに取り出せることができ、その上『どんな怪我をしていようが、許容範囲なら完璧に治すことができる』というお手軽で万能な医療器具兼拘束装置だ。

罪人にはもったいない代物だね。

「お…お前…あ…兄貴をどうしたんだよ！」

すると、他のスライム達がこの光景に恐れを感じながら、僕に聞いてきた。

「どうした…うーん…まあ、この中に入れたつてのが早いかな…」

少し暈しぎみに応えてみると、犯罪者スライム達の肌が、少し粘りけが弱くなっているように見えた。

スライム型のリーゼンというのは表情だけではなく、肌の粘度や体内に含む水の量で、抱いている感情が少しわかる。

ここで一つ、そのテストをして見てやろうかな…。

「でも苦しいだろうねえ…意識がある状態でこの小ささまでギュウギュウに圧縮されて…。空気も少なく息苦しい中で、肺や横隔膜が稼働する度に圧迫された身体がミシミシと悲鳴を上げて…。その上、この中には冷房なんてものは一切ついてないから、体温や熱気でほぼ茹で釜状態だし。やっとこの中から出れた頃には、真っ赤な海鮮つみれ状になって出てくるんだろうなあ…」

と、言うがこれのほとんどは嘘だ。

小さく圧縮されるのは本当なのだが、この拘束具は医療でも使うことがあるため、中には麻酔等の医薬品が入っているし、そもそも治すものではあるのだから、痛いわけがない。

だが、スライムの姿を見てみると、その表情はとても怯えて青ざめ

ており、肌も水気がなくなり、まるでゲーセンで取れる意味不明な形のアクリル性の玩具のように固くなっていた。

だから、リージエンというのは面白い。

人間ではなかなか見ることの出来ない表情の変化が、個体によって良くわかるのだから…。

「さて…どうする…このまま一緒にこの中に入る？それとも自首する…？」

「…自首しますっ！」

案の定、返事が早かった。

「はい、よろしい」

僕がパチンと指を鳴らすと、水の檻は崩壊し、僕らの頭上から地面に降り注ぐと共に、蒸発して消えた…。

「じゃ、頼んだよ武装警察の皆さん」

その名を呼ぶと、影から足音を立てながら、僕が今武装している物と同じ素材で、特殊武装された警察官が数名、まるで軍隊のごとく現れた。

「はっ！」

如何にも威勢の良い敬礼の後、彼らは迅速に行動し、リージエン共に逃げられないよう、スライムの身体を、専用の確保ケースの中へと押し込んだ。

「な…いつの間にか！」

急に現れた武装警察の群衆に、拘束された犯罪者達は成す術もないのは言うまでもない。

僕らスプリミナルは、無抵抗のリージエンを特別な理由なく捕獲することは原則禁じられているため、戦っている最中に、携帯端末から通報をしていた。

ただ、今回はタコエイリアンのリージエンが抵抗してきたから、彼だけは無許可で捕獲をさせて貰った。

まあ、そもそも密売の取り締まりの依頼なのだから、これでこっちは咎められては、こんな仕事やってられない。

まだ本当に確保しなければならぬ者はしていないが、とりあえず

はOK……。

「あつ…あの男のこと忘れてた…」

そう言えば、このバカ達の対処に忙しくて、ピンク上着のアイツのことずっと忘れていた…。

「ちよつと聞きたいんだけど…」

僕は、ガチャガチャの玩具のように拘束具のなかで捕まっているスライム達に、聞き込みを始める。

「あんたらはどこ所属だ…？或マスか？遮ルーア…？それとも…ステツラランクか…」

ミラーマフィアの中には、ランクや組が存在し、上級階級の人間を守るために、下級の物達がこのような取引などを行うことがあるらしい。

「そ…そんな大層な！俺らそういうのじゃなくて、兄貴が『新しいミラーマフィア集団を作る』つつったから、付いてきただけで、どこの所属でもないんでやす！」

大体、このようなケースでは、マフィアであることを隠すために嘘をつくことが多いのだが、どうやら現行犯のスライムが言ったその言葉に嘘はなさそうだ。

というのも、こんなに何も考えてなさそうな彼らが、どこかに所属していた場合、その所属している場所をごまかせるスキルを持っているとは思えないし、そもそも『ハンブル組』なんて聞いたことがないな…。

「そもそも、俺らつい最近まで工場で働いてる善良な市民だったんですよー！」

「そうっすよ！あのアホが着いてこいなんて言うからこんな目に！」

「おい、兄貴の悪口言うなよ！」

「いいだろ！あんなのなにも考えてねえタコなんだから！」

というか、捕まったら捕まっただでこんなにスラスラしゃべるんだなこいつら…。

それほど、あの親分的立ち位置のタコエイリアンが信用されていないかったということか…。

「はあ…んじや、今回はただのチンピラだったわけか……。ちなみに、取引で来たあの男は？」

「あいつは…ラーア…だっけか？…っていう詐欺集団グループから『取引したい』って言って俺らを利用しただけで…」

「ラーア…か……」

癪に触るが、郷仲くんの持つてきた情報の通りの人間ではあったわけか…。

なら、あのマゼンタの上着のやつはオトリか…？

取引のことはなにも知らなかったような素振りだったし、写真の情報だけはしっかりとあの書類の束の中にあった、だから、彼が無関係とは考えられない…。

「ちよつと見てくるか…あの人…」

人間も守らないといけない仕事をしている人間としては、彼のことは少々心配だからな。

まあ、もしかしたら、口封じに殺されてるかもしれないけど…。

「とりあえず、後はよろし……」

ドオオオオオオッ！

「…っ！」

武装警察に任せて退散しようとした直後、唐突に鳴り響いた破壊音と共に、この古いビルの壁が崩れ、コンクリートの瓦礫が土ぼこりと共に、路地へと落ちていく。

「ヒッ…なんだあれえ!!」

捕まっているスライムが驚愕する中、壁からぬつと顔を出したのは、巨大なコブラ型の頭と、崩れた壁を掴む虎のような爪…。

ただでさえ、ヤニ臭さとどぶ臭さが漂う裏路地だというのに、一気に獣独特の臭さがこの空間にふわりと舞い、なにも知らないスライムどもが必要以上に怯えている。

まさにそれは怪獣…。

世間名称、キメラ型無知能生命体の登場である。

「あーもう…めんどくさいなあ…っ！」

このような、昔は特撮映画でしか見なかった有害指定生命を駆除す



るのも、僕らスプリミナルの仕事になる。

ただ、これを一人で完全に駆除ができるかはわからないけど…。

「キメラ型ノーイン出現！スプリミナル所属、水原角也！これより、害獣駆除を開始する！武装警察の援護は不要のため！そちらは犯罪者の連行を願う！」

「「お気を付けて！」」

警察の皆が駆除許可と共に敬礼をしたことを僕が確認すると、ノーインは甲高い奇声をあげながら、突如、大鷲のような大きな翼をビキビキと生やし、大きな空へと飛び出した。

このまま、あの化け物が町を襲うと面倒なことになる。

「蒼流！」  
シユトロム

僕は武器を背負い、足の踵から水を噴出させて空を飛び、その勢いでその融合獣を追いかける。

また面倒なことが始まってしまったな…。

空虚な空を飛行して駆けながら、僕はそう思った。



「ハア…ハアッ！」

なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ！  
今までフィクションだと思っていた映像が目飛び込んできて、僕は混乱していた。

いかにもミラーマフィアの括りであろうリージェン達、人間と怪しい薬物の取引をしていたなんてのを知ってしまった。

それだけで済めば良いが、知ってしまった事自体が、反社会的組織にとつては『肅清対象』となってしまうと言う噂だ。

どんなに些細なことでも、マフィアの逆鱗に触れば、地の果てまで追いかけてきて、もしも捕まったら…。

そんな最期は絶対に嫌だ！

ここで死にたくなんかないっ！

とにかく、まずは逃げ込める先を考えろ…。

「ここから一番近いところといえば……。」

「駅……しかないか……！」

あそこなら、一目に触れるからマフィアも派手には暴れられないだろう。

電車があるなら電車を使えばすぐだし、ターミナルがあつたはずだから、タクシーも捕まえられるはずだ。

その後は、職場に戻って事情を説明して、なんとかしてもらおう。元々アウトローな職場なのだから、マフィアと少々の繋がりがあつてもおかしくないし、見られたからと言っても、繋がりがあるなら、きつと許してくれるはずだ。

そうでなければ、まずはずっと胸の中にしまっていた辞表を出して、職場に危険が及ばないようにしよう。

あとは、自分の貯金にアーカル（旧東北地方）にいる親族に全て渡して、アヤのこともなんとかしてもらえるように。

そして、僕はマフィアの手からなんとかしてでも逃げ続けなければ……。

とにかく、今は逃げるしか……っ！

ドンー！

「痛っー！」

つい、今後しなければならぬ事を考え続けていたがために、偶然目の前にいた人間にぶつかってしまった。

「す……すみませ……！」

一言謝り、すぐに立ち去ってしまおうと思ったのだが、顔を上げて、ぶつかった人間の髪の色を見れば、その必要はないとわかった。

「おお……ユウキくんか……！」

少し怪しげな関西弁を聞き、ふっと我に返って周りを見回すと、そこには、自分の職場の従業員全員が勢揃いで僕をみていたのがわかった……。

「ハマノさん……？ それに、皆さんも……！」

「なんや……？ どうかした……？」

焦る僕に向けて、彼は危機感のない表情で首をかしげる。

今もなお、マフィアの仲間が僕を追っていて、数秒後にマフィアが

僕の首を狙ってこちらに来る可能性がある。

そうなたら…彼らの命すらも消える。

「皆さん、逃げてください…！向こうでマフィアが取引してて！僕…それを見ちゃって！ミラーマフィアの評判は知ってますよね!?逃げないと…殺され…」

必死に彼らを逃走に促そうとする最中、ふと僕の頭に疑問が残る。今日の予定はいつも通りにグループ詐欺としての活動が一番だったはずなのに、何故彼らが”ここ”にいるのだろうか？

出る前に濱野さんと軽い会話を交わしたが、僕がここにいるのは、確か社長以外の誰にも伝えられていなかったはず…。

「そう…見てしまったんですね…」

突如、背後から聞こえた声に驚き、後ろを振り向くと、そこには黒いスーツの下に穴の空いた古着を着た一人の男性がアタッシュケースを持ってそこにいた。

「…カラハシ…さん？」

僕にとつて彼は、同じ詐欺仲間で今日は休みだったはずの人間…。

それが、目の前にいるとは、どう言うことだ…？

「あーあ…このままにも見なかったら…アンタもこっち側になれたのにな…」

大きくため息をつきながら、唐橋はスーツの胸ポケットからサンダースを取り出して顔にかけながら、黒く鈍い片手銃を懐から取り出す。

「な…なにを言って…」

ガチャ…

「動くな…」

両手を挙げながら後ずさる僕を止めたのは、重く冷たい銃口と、ほんの数時間前に聞いたはずの声…。

「じゃ…社長…なんで…?」

振り向いた先にいた彼の視線は、いつも見る少し大雑把な眼ではなく、まるで機械のように無垢で、氷雨のように冷たかった。

「君をオトリにしたのは間違いだった…。見事な騙され上手で腕が鈍いと言う観点から選んだものの、まさか見られてしまうとは…」

僕に伝うその声すらも、鉄球のようにどこか冷たく、重苦しい…。

「ど…どういうことですか…？ 一体何を…！」

要領も閃きも常人程度の僕にとつて、今、僕が何故こうなっているのかの情景を冷静に判断処理できること等できる筈がない。

信じていた人間全員が、黒く冷たいハンドガンを持っていて今の状況下と、自身の混乱のせいで、困難を極めているのだ。

「すまないね…これも全て、私たちのためなんだ…」

「我々は強くならねばならない。警察部隊の強化やリージェンが設立した企業の進撃によって、私たちの収益率も厳しくなってきたんです…」

銃を僕に向けながら、少しずつ少しずつ近づいていく二人に、恐怖を感じて後退りしながら逃げ出したかった。

だが、仲間だった人間達が構えている銃口が、次々に僕に向けられていくうちに、ついには僕の背は角のどん詰まりの壁に、ピタリとついてしまった。

「全ては家族を守るため…従業員的笑顔のため…！」

「君には死んでもらいたい…」

唐橋と社長の言っている意味がわからなかった。

何故、命令に従ったはずの僕が殺されなければならないのか。

何故、見てしまったただけなのに僕が殺されないといけないのか。

何故…何故…

「何故、僕なんですか!!僕だって従業員だったはずだ…僕だって!会社のためにやってきた筈だ!僕だってえ!」

ダアンツ!

こんな僕なんかにも、生きる権利はあると言いたかった。

しかし、社長の持つ銃から放たれ、僕の肩を貫いたその弾丸が、それを許さなかった。

「…っ!…いつ…ああああああつ!ハア…あああつ!あああああつ!」

初めてこの身体に浸透するその感覚は、痛いなんて言葉ではすませられない程、絶望的な刺激が強く強く走っていた。

生まれて初めて銃で打たれ、恐怖に飲まれている僕。

ハアハアと過呼吸になりながら、肩から吹き出す赤い血液をなんとか止めたいが為、傷口を手のひらで塞いだ。

撃たれた、血が出た、熱い、怖い、痛い、なんで、辛い、死ぬ、死にたくない。

そんな簡略的でマイナスな感情を表す言葉しか、僕の頭には巡ってこなかった…。

「役に立たない者は排除する…それが会社として…ミラーマフィア『或マス』の一角として君臨するため…」

その言葉を聞くと、僕の目からは涙が流れた…。

この一日の流れが全て、或マスというミラーマフィアが関連していることに、まず一番驚かなければならないのかもしれないが、今の僕にとっては、自分自身が”役立たず”と認定されていたことが、一番のショックだった…。

「ハア…ハア……なんで…なんで…僕は…そんな…」

涙を流しながら、言葉を漏らす一方、ずっと仲良くしてくれていた筈の同僚は、作り笑顔で僕に言葉を吐き捨てた…。

「ユウキくん……ごめんな…。俺も…やらんとあかんねん…。故郷にいる…あの子のために…」

カタカタと腕を震わせながらも、濱野さんは僕に銃を向けている。

涙で滲む視界を凝らしながら全体を見ると、社長と唐橋以外の人間も同じく、カタカタと身体を震わせたり、人を殺すことに恐怖を感じて涙を流したり、中には失禁までしながらも僕に銃を構える奴だっている…。

そうだ…結局人間というのは、社会的圧殺によって心をすげ替えられるんだ…。

それはまさに、詐欺師の道を選んだ僕と同じ…。

彼らの道のために死ぬんだ…僕は…。

「ごめん…アヤ……」

ベッドで眠っている彼女の姿を思い浮かべながら、僕は覚悟を決め、そつと目を閉じた…。

もうなにもかも、この世界の流れに任せていよう。

そうしたら、きつと楽になる筈だから……。

「撃て」

ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！

## 1—4 『詐欺師Yと少年K』

銃声と共に僕は死んだ…。

今までの人生を振り替えれば、こんなヤニ臭い路地で死ぬのは、僕の人生にとつてぴったりすぎるのかもしれない。

ここまで人を騙してきたこんな僕に、光なんて射すはずがないんだ。

そんなことわかっているのに…死ぬのが辛いというのを…こんなにも強く感じることはできるんだな…。

「うわあああああっ!!」

死想に浸っていた刹那、耳の中に差し込んできた断末魔に驚き、僕の開くはずの無い目は、無意識に開いていた…。

「……へ?」

そこには、今まで見たこともない程の大きなクリスタルが鋭く突出し、社長の心臓部分を中心に、彼の身体を大きく貫いていた。

路地の上空から漏れた光が照らすマゼンタ色の結晶…。

血がじわじわと滲み出し、動かなくなってしまった社長。

その心臓を貫く結晶の出本をゆっくりと目で追っていくと、その美しくも残酷なクリスタルは、先ほど確かに撃たれたはずの僕の胸から輝き、大きく強く生え出していたのだ…。

「な…なんだ…これ…」

目に飛び込んできたのは、フィクションで見るような死者のための地獄ではなく、現世と言う名の生者の地獄だったのだ。

僕の身体の所々からグラデーション鮮やかに滲み出してくるように、マゼンタの結晶が肥大していきながら突出している。

感覚的には、痛くも痒くもない。

それよりも先に感じていたのは、目の前でさっきまで生きていたはずの人間が、僕から出た結晶によって死んだ罪悪感。

言い換えてしまえば、”僕が殺した”という罪悪感だ…。

「…っ！撃て！撃てえ!!」

突然のことに焦る唐橋さんが、啞然とする彼らに指示を出すと同時に、一気に目を変えた元仲間たちは、目を閉じる暇もない僕に向けて再度弾丸を連射する。

だが、放たれた全ての弾丸は、僕の身体を傷つくことはできず、まるで僕自身が居ないとすらも思えるかのようにすり抜け、『当たった』という衝撃だけが僕の身体を走り、異常な不快感を覚えた。

「き……効かない……」

僕ですらも何がなんなのかわからない中で、その異形の力を目にした元仲間達は怯え、弾の切れた銃を握りながら、じりじりと後退していく……。

「なんだよ……なんだよこれ……」

未だにメキメキと育っていくマゼンタの結晶と身体に巡るむず痒さが苦しい。

痛くないというのが、これ程に怖いものなのか……。

「ね……ねえ……皆さ……」

ドスツ！

それは僕が一人の仲間に手を伸ばそうとした刹那、腕から生えていた一つの結晶が、急に孫悟空の如意棒の如く延び出し、彼の心臓をぐさりと貫いた。

「ガ……カガ……ガフツ！」

ボール大の太さに肥大した結晶が心臓を貫いた衝撃と、それを見てしまったショックによって、体内から血液が逆流、吐血し、その後彼の体から熱が失われた。

「う……っ！うわあああああつ！」

絶命した人間を見て、僕の身体と言う危険を察知した彼らは、思わず怯えて逃げ出し始める。

「助け……助けてよ……誰かつ！」

なにもわからないこの状況で助けを乞う僕。

それを裏切るように、僕の体から生える結晶は枝のように分離し始めに、次々に延びていく。

ドスツ！ドツ！ドスンツ！



延び出した結晶は、逃げ惑う人々の身体を次々に貫いていく。

それは足や腕には収まらず、肺や腹、酷い者は脳天までも貫かれ、死体がごろごろと地面に転がっていった…。

最早、自分の意思では操作が出来ない恐怖心が僕の中枢神経を包み込む一方、体から生えている結晶はどんどん成長していき、僕の全身を少しずつ包み始めているように見える…。

「ひ…ひい…っ！」

死体が転がり、結晶の枝が広がっていく中で、なんとか逃げ回っていた濱野さんだけが一人、地に足をつけて立っていた…。

「ハ…ハマノさん…僕は…僕は…っ！」

一番親睦が深いと感じている彼に向けて、最早立つことも儘ならなくなっている僕は、四つん這いで彼に近づきながら、必死に助けを求め。

「く…来るな…来るなあ！」

怯える彼は大量の汗と涙をダラダラと流す。

ザスッ!!

だが、彼は僕に手を差し伸べようとする筈もなく、後ろを向きながら逃げようとしていた瞬間、その肩を結晶に突き刺されてしまった…。

「ぐ…がああああっ！」

「っ…ごめんなさい…っ…ごめんなさいっ！」

肩から吹き出す血液を止めようとする彼に、汗腺から焦りと罪悪感を吹き出す僕はひたすらに謝るが、そんなもので許されるわけがない…。

自分から発されるその病的な驚異によって、僕の心がギリギリと締め付けられてい中、彼が僕に向けた視線は軽蔑や怒りと呼ぶにはあまりにも冷たすぎた…。

「この…この…化け物があああっ！」

彼が発したその言葉を聞き、心臓に自らに生える結晶が、グサリと突き刺さったような感覚がし、直後に大粒の涙がまた一粒流れた…。

「バケ…モノ…！」

言葉はいつも、誰かを傷つける。

彼から受けとってしまったその言葉に、僕はもう普通という物ではなくなった。

もう純人類ではない。

僕は、汚らしい怪物だ…。

「僕…は…」

ギジャアアアアアアツ!!

「……っ！」

流れた涙が震えるほどに、大きな鳴き声が響くと共に、天空から飛来したのは、どぶ色の巨大なコブラの頭に、白虎のような体、そして大鷲の翼が生えた異形な生命体…。

無知能生命体だ…。

「な…なん…」

その怪獣が飛来した直後、目の前の彼が死んだのは一瞬だった。

なんだこいつは、と言いかけたであろう濱野の体は、突然現れたキメラ型のノーインによつて、たった一口ごくりと飲み込まれてしまったのだ。

今までみたことの無かったノーインの恐怖に、僕は頭の先から氷水をぶちまけられたかのように、全身をめぐる血の気がサーツと引いた…。

鏡の中にある世界を住み処として、ヘトロモーガン：ノーインが生息しているのは、母からいつも読み聞かせてもらっていた絵本から、昨日見た死亡事故を取り上げたニュースまで、常人並み位には脳に刷り込まれてきた。

そのはずだったのだが、こんな体験を一度も実感した事がなかった僕は、今こちらにギョロリと目を向けているそのキメラに、この世の終わりかの如く、強く強く恐怖を感じている。

だと言うのに、身体から生えるこのマゼンタの結晶は、恐れ等知らず、まだ煌めきを放って今もまだグングンと延び続けている…。

人一人を飲み込んだキメラノーインは、僕から目を向けながらも、転がっている死体にかぶり付き、ギョルギョルとうなり声をあげてい

る。

僕と言えば、さつきまで仲間だった人間を殺したという罪悪感と、その死骸を食い続けるノーインへの恐怖が、未だグルグルと全身を巡っている…。

空っぽな空の下、泥臭い路地の中で、得体の知れないものを生やしながらかたがたと震える自分が一層に惨めに思える…。

「…して…。」

こんなに惨めな僕に、生きる価値などあるのだろうか。

そう感じ始めた頃に頭に浮かんだ言葉を、僕は無意識に吐き出していた…。

「殺して…くれ…。」

もういつそ、死んだ方がましだ。

裏切られたとて、無意識に殺してしまった命には償いをせねばならない。

「誰か…もう…僕は…。」

僕が生きても、このまま妹に合わせる顔もない…。

得体の知れない結晶と共に、得体の知れない能力まで得て、人間数名を殺してしまったのだから…。

「違う…。」

ふと、パニックで忘れていた…。

この結晶が生えてから、僕の体は、何故か『あらゆる攻撃を透かし通してしまう体』になってしまっているのだ。

だから、例え噛みつかれようが、飲まれようが、衝撃が入るだけ…。

「死なない…いや、違う…死ねないのか…死にたくないのか…!?!ちがうんだ…違うんだ…っ!」

状況を冷静に考えてしまったからこそ、流れ込んできたこの混沌に飲まれてしまい、僕は言わば、一種のパニック状態に陥っていた。

自分は死にたくないんだ。

死にたいなんて初めから思っていない。

人を殺しておいて、犯罪を犯しておいてなんだその態度は？

どうせお前はいつまでもそうなんだよ。

ちがう…違う…違うんだ…。

ギジャアアツツ!!

怪獣の咆哮音が路地のなかで乱反射する…。

「もう…だめか…。」

もうどうでも良いかなんて、思っていたいのに、本能は未だに助けを乞うている…。

「誰か…助けて…。」

この苦しみからの解放を願うと、唾を撒き散らしながら大きく開いたその口が僕に向けられた。

これで…もう本当に終わりか…。

永遠にこの腹のなかに住まわねばならないことを決意し、僕はそつと目を瞑った…。

ごめんな、アヤ。

約束…守れなかった…。

ドガアアアアンツ!

事実上の死を覚悟したその時、突然大量の液体が大きな鉛や鉄塊に打ち付けられるような音が鳴り響いた。

唐突な轟音に心臓がビクリと跳ね、何が起こったのか確認するため、僕は恐る恐る目を開いた。

「……っ!？」

その景色を見た僕は驚愕した。

目の前に広がったのは、大量の水の球体がキメラノーインの頭に降り、その頑丈そうな頭を凹ませていた光景。

そして、その頭の上に凜と起立するは、キラリと光る禍々しい形の双剣を持ち、黒地に水色のラインが光るパーカーとジャージを着込んだ、一人の少年…。

弾けた水の玉から出た雫が、僕の頬に着地する頃、少年は上空を見ながら、被っていたフードをあげた。

パツチリ開き、ツンとつった目、果実のように丸い顔と透けるような白い肌、額が大きく露出して、不器用に切られた前髪…。

こんな非常時の中、カメラを打ちのめしてニヒルに笑う彼の姿に、水を被る僕は被写体的な考えで、『美しい』と感じた。

「うっし……。……。おっ？」

彼は僕の存在に気づくと、気絶しているカメラの頭の上から軽々と飛び降りると、剣を二本とも片手に持つて肩に乗せながら、僕に近づいてくる……。

「だーいじょうぶー？詐欺師くん」

頬についた水を拭いながら、彼は僕に向けて安否を聞く。

「なんで…僕のこと……」

「事前情報で君のことは知ってたんだよねえ…特殊な仕事してるものだから……」

「ど…どういうこと……？」

特殊な仕事と事前情報と言う言葉に首をかしげる僕を無視し、彼は話を続ける。

「まあ、でも…こんなに早く結晶化してるとは思わなかった……こんな大変な状況で、君も特異点になっちゃったなんてねえ……」

「とくい……てん？どういうこと…ですか……？」

今まで聞いたことのないその単語と、この延び続ける結晶になにか関係があるのだろうか……？

グルルル…

そんなことを考える暇もなく、気絶していたカメラノーズが目を覚まし、怒りのまま僕らを睨み付ける。

「めんどくさ……。とりあえず、それはあとで言うから、ほれ」

すると、彼は起きるカメラに向けてため息を吐きながら、パーカーの中から、小さな水晶のキーホルダーが投げられた。

すると、足元に落ちたそれを忌み嫌うかのように、僕の体で育つ結晶の侵食がピタリと止まった。

「助かりたいなら拾って。まだ、結晶化が全体に出ていない。掴むだけで、その結晶が消えるから、多分助かるよ」

彼は剣をまた両手に取り、刃先を地面に向けながら、カメラを睨む。

「……僕は……」

だが…僕はそのキーホルダーに手を伸ばすことはできない…。  
というより、伸ばしてはいけないような気がしてならない…。

「助かってはいけない…：僕が…殺したようなものなんだ…僕が…」

数分前から取り憑き始めたその背後霊達は、少しずつ元の形を取り戻そうとしながらも、殺した僕を呪い始める…。

一生この罪悪感を背負うことになると考えれば考えるほど、僕という人間に生存価値がない気がする。

もしも、結晶化なんてことにならなかつたら、被害は僕だけであつたはずなのに…。

「殺す…：…？」

彼は僕の言葉に首をかしげながら辺りを見回すと、少しずつ朽ちていく数々の死体と、キメラによつて踏み潰され、地面にへばり付いている亡骸を見つける。

「…：ああ、そう言うことね…」

その情報だけでなんとなく悟つたように頷きながら、彼はしやがみこんで、僕の肩に手を置く。

「僕は専門外だけど、スプリミナルは能力者の心理ケアも承っている。だから、一個言っておくよ」

彼の言葉に顔を上げると、その少年は手から、パチンコ玉位の水の球体を出現させる。

「特異点は治すことのできない病だ。だから、君が意図的に彼らを殺したとは断定できない」

彼はそう伝うと、デコピンをするように、その水を僕の額にピシヤリとぶつけた。

痛みのない、その冷たい水を当てられたことで、ヒートアップしていた思考が少し覚めたような気がした。

「…僕は…：殺して…ない？」

弱々しくその言葉を返すと、彼は立ち上がり、僕にまた虚無的な微笑みを向ける。

「君が信じたかつたらそれで良いと思うよ」

ビル外の隙間から差し込んだ光が、言葉と共に少年を照らす…。

「殺してない……そう……そっか……」

言葉というのは、時に無責任だ。

たった一つの言葉で、人を傷つけることも、人を治すこともできる。

それが『死ぬ』であろうが『生きる』であろうが。

今放たれた『殺してない』という言葉でさえも…。

「殺したのは……僕じゃない……僕じゃないんだ……」

こんな犯罪者に、一時の安寧と、希望を与えてしまうのだから…。

僕はやっていない。

悪いのはこの力だ。

大丈夫。

こんな犯罪人を肯定する言葉が、頭のなかで湧水のように生まれ続けていた…。

「……まあ、安心できるなら今はこれで良いか……」

僕の姿を見た少年は苦笑いで溜め息を吐くと、先程まで息を潜めていたキメラノーインが、ついに痺れを切らし、少年に向けて爪を立てて振るった。

「うおっとおっ!!」

それに気づき、少年が避けると、地面にボゴンと音をたてながら、穴を開けた。

「ちよっ……タイミング早すぎだろ……っ!」

焦る少年に間髪いれず、キメラはそのまま大口を開けて、彼を飲み込もうとする。

「くっ!」

すると、少年は全身を水に変換させ、口が閉じたタイミングで、水の体を移動させ、キメラの頭の上に乗った。

「わわっ!」

すると、キメラはグルルと唸り声を上げながら、ブンブンと頭を振るい始めた。

「くっ……このっ!」

動くキメラに翻弄されながら、彼がその怪獣の頭にしがみつく。

「…っ！君！」

ハツと気づいた僕は、咄嗟に目の前に落ちているその透明な水晶のアクセサリーを拾って立ち上がる。

「うっ…ああ……」

すると、拾い上げたそのアクセサリーが柔く白く光り出すと共に、僕の体から生え出していた結晶が、体内の中へ戻るように縮こまっていき、ついには皮膚上から綺麗に消え去った。

「すごい…こんなちっちゃい物が…」

「それ握って、トランス肉体換装って言ってみて！それで完全に治ると思うから！」

感動している刹那、少年は僕にそう指示をしながら、双剣をキメラの頭に突き刺す。

すると、その怪獣は痛みに対応するように、さらに頭を振る勢いを増した。

「え…えっ?」

「早くっ！」

「ト…トラン…ス?」

キーン…

戸惑いながらも、言われた通りにその言葉を呟くと、柔く光っていたその光は、甲高い音を鳴らしながら、急に強く発光しだす。

「うわっ！」

すると、光はマゼンタに変わって僕の全身を包み、次の瞬間には、僕が着ていたその服から、少年の物とは少し違う形でマゼンタ色のラインの入った白いパーカーとジャージのズボンに姿を変えた。

「な…なにこれ…?」

今まで見たこともないデザインとその服と、実感もなく突然、着替えさせられた事に、僕は驚いた。

その上、何故か疲れきって重くなっていたこの身体も、まるで風船になったかのように軽く感じる…。

まるで別人の身体になったみたいだ…。

「とりあえず…説明は後っ!!」



捕まっていた少年は一本の剣を抜き取ると、怪獣の頭を踏み台にして飛び上がる。

「シユトローム激流っ!!」

すると、少年は背からジェットのように大量の水を噴出して勢いをつけながら、手に持つ剣の柄頭を、突き刺さっている剣の柄頭に向けて打ち付けると、その剣がカメラの顎を貫き、血のついた剣が地面に突き刺さった。

「す…す…」

まさにその戦い様は、手慣れた狩猟手のようだ…。

ギヤアアアアアアツ!

痛みを与えられた少年に向けて怒るカメラは、穴の空いたアゴからヒュウヒュウと音を鳴らしながら咆哮、そして翼を大きく広げて飛びながら、爪で彼を襲う。

「うわっ!くっ!」

少年はその攻撃を避けながら、背から出していた水を足からの出水に変更し、そのままカメラに水を浴びせながら距離を取った。

「詐欺師くん!アーツ出して!」

未知の能力を駆使したアクションに圧巻している僕に、少年は声をかける。

「ア…アーツ?」

「アンフォールド!」

「アン…フォールド?」

これまた始めて聞く単語を、僕が復唱すると、手に握っていたキーホルダーが、光りながらその形を変えていく。

「うわっ!」

次の瞬間には、そのキーホルダーは、まるで警察が使うような一丁の白い拳銃に変化した。

「予備用の汎用型だから拳銃だけど…っ!とりあえず、それでこのデカイの撃ちまくって!」

少年は足を捻らせてカメラに当てていた水の向きを変えて、地面に向けて飛ぶ。

「は…はいっ！」

それを追うようにキメラが、首を伸ばしながら、少年を追うところで、僕がその拳銃の引き金を引くと、銃口から白い弾丸が発射され、それがキメラの胴体に着弾し、怪獣のバランスを崩す。

「当たった…当たった！」

バランスが崩れ、キメラが地面に落ちたのを見て、拳銃を放ったことすら僕が拳を上げて喜ぶ。

「一発で喜ぶなバカッ！そんなので死なないんだから！」

だが、地面に突き刺さっていた剣を抜き取って飛ぶ少年に、僕は怒られてしまった。

始めてのことに喜んでいた間、キメラは体を起こしてまた翼を広げる。

「ツチ…。屋上にプール…ならっ！」

すると、飛んでいた彼はビルの頂上へ行くと共に、その影に隠れて見えなくなってしまった。

それをしめしめと、キメラが追いかけるように飛ぶ。

「あっ…この！」

僕は何度も引き金を引くが、キメラに着弾するのはせいぜい1／5弾。

獲物を諦めるには少なすぎる弾数だ。

「く…っ！」

「原水圧縮！機関銃！」  
ハルトヴァッサー

キメラを止めるにはどうするべきかを考えようとした瞬間、突然無数の水の弾丸がキメラを襲う。

ギジャアアアアアアッ！

幾もの弾丸によって翼を撃ち抜かれたキメラローインは、一気に地面へと落下した。

「な…上でなにが…!？」

すると、キメラローインを追うように、屋上から地面へ、軽々と着地した少年。

彼の肌は、先程見た物よりも潤いが増しており、まるで水浴びから

上がった赤子のように艶々だった。

「水の充電完了…っ！はあああああっ！」

すると、彼の体内から無数の水の弾丸が出現し、マシンガンのようにキメラへと発射される。

だが、そのキメラの背後には僕も居て、体を貫通した流れ弾が、こちらに襲いかかってきた。

「うわあっ！」

「やべっ！」

突然の飛弾に驚き、思わず防御をしようと、顔の近くに腕を出しながら、目を閉じる。

シユン…シユン…

「うっ…っ…あれ？」

だが、僕の身体は、着弾しようとした刹那にまるでホログラムかのように透過し、水の弾丸の攻撃を貫通させて受け流す。

流された弾丸は壁に着弾し、穴を空けた。

勿論だが、身体は傷一つついてない。

「…まじか…攻撃を一切通さないのか…!？」

少年は僕の体に起きている異常に驚きつつ、血を噴き出しながら、襲いかかってこようとするキメラを避ける。

「詐欺師くん！それが君が新たに手に入れた能力だ！詳しくはどんな感じかはよく分かんないけど、とにかく『攻撃を無効化する』と言うことだけはわかる！それを有効的に活用するんだ！」

彼の即席分析を聞き、僕は改めて自分の体を見つめた。

「これが…能力…？」

確かに、仲間だった人達からの銃撃を受けても、全てがすり抜けてしまい、傷つきも出血もせず、撃たれたと言う衝撃だけが走っただけだった。

攻撃の無効化。

少年の能力に比べると地味に見えるかもしれないけれど、これは結構使えるかもしれない。

「これなら…怪我の心配はない…！」

その利点を考えた上で、これをどう有効活用する…？

ギシャアアツ！

そう考える隙に、キメラノーインは、咆哮しながら、先程よりも一回り小さな驚の翼が背中から再度生成され、奴はついに僕に向けて牙を向ける。

「くっ！」

翼を広げて飛び、頭をグツと伸ばして僕を飲み込もうとするキメラノーインだが、僕の能力が発動されたため、キメラは対象物を飲み込んだかのような感覚だけを口にしまい、そのままゆつくりと空へと飛ぶ。

やはり、獣だから僕の能力を理解するには時間がかかるようだ…。

「待てっ！」

少年は水の弾丸を飛ばすが、その威力が弱まっているのか、キメラにはそれが効かず、更には少年の肌が先程よりも乾燥しているのも確認した。

きつと、彼の能力には上限のようなものがあるのかもしれない…。

「僕もやらないと…っ！」

そう決めて拳銃を握るが、僕は少年のように百発百中というわけではない。

なら、あの怪獣を叩き落とすにはどうする？

ここ最近、詐欺でしか使わなかった頭で考えろ…周りには何にながめる？

苔むしたコンクリート、ヤニと下水の臭いがする壁、貯まった雨を排出するための雨樋。パルプ…。

…そうだ、ここはそもそももう使われていないビルの路地。

リージェンに住みやすい世界を目的とした近代化や、郊外や地方都市の整理、近年の法外組織情勢等のせいで、古いビルは放棄され、そのまま放置されていることが多い。

その上、少年の攻撃の影響で、ビル自体にも亀裂が入っているし、キメラも生えたばかりの翼で上手くは飛べないはず…。

「それなら……っ！」

効くかどうかはまだわからないが、僕は頭に浮かんだその作戦を実行に移すために弾丸を連射し、ビルの壁を何度も何度も撃った。

「なにを……あぁ、そういうことねっ！」

少年がそれに気づいたかのように、続けざまに水の弾丸を乱雑に壁に向けて放つ。

すると、元々ついていたその亀裂が少しずつ上階へとひろがっていき、ついには壁がビキビキと鈍い音をたてながら、瓦礫となって崩れていく。

…ッ！ギジャツ！！

情けない声をあげるキメラを巻き込みながら…。

「うおおおー！」

自分にダメージは無いことはわかっている癖に、やはり瓦礫と共に怪物が落ちてくるなんていう状況に即座に安心などできず、咄嗟に目を瞑ると同時に、それは僕らもろともガラガラと地面へと落下した。



「おっと……」

宙を舞っていた全ての瓦礫が落ちた後に目を開けると、壁だった場所にはビルの内部が露出し、地面はもはや、フィクションの破壊された世界のようにガタガタになっていた。

僕の体はと言えば、下半身は瓦礫に埋まっていたが、ゲームのバグのようにぴよんとジャンプをするだけで、瓦礫の上に飛び乗れた。

「……あっーあの子は!?!」

この作戦に協力をしてきていたが…まさか命と引き換えに彼は瓦礫の下に…!?

周りを見ると、瓦礫の一部に水が付着し、全体的に見てみると、血液が付いている物まで…。

「そんな…そんなまさか…」

ボゴオンッ！

「つだああ！死ぬかと思ったあ！」

自分の心配をよそに、彼が瓦礫の中から出てきた事に、僕は思わずすっこけた。

少し古典的なギャグだな…。

「あつぶなあ！僕が水の特異持ちじゃなかったら死んでたよこれ！」

文句を言いながら、彼は全身を水に変換させて、体が埋まった瓦礫からするりと抜け出し、そのまま瓦礫の上へと足をつけて元の身体へと戻った。

「ご…ごめんなさい！避けられると思って！」

「別にいいよ。いい作戦だと思うし。水の身体だから、ダメージも少ない」

謝る僕をあしらいながら、少年はパーカーについた埃を払い、埋まっていた剣を抜き取って、背中に納刀する。

すると、剣は水飴のようにグニヤリと形を変えながら、パーカーのジッパーについた直角三角形のキーホルダーへと変わる。

「えつと…あれは…？」

周りを見回すと、彼は先程僕が見つけた血のついた瓦礫を見つけ、それを雑に投げて退ける。

すると、そこから虎の毛が露出し、彼はさらに瓦礫を退かし続けると、虚ろになった蛇の目玉と、ボロボロに傷付いた翼が瓦礫の中にあっただ…。

耳を澄ませてみても、生きている証拠となるその音は、もうその怪獣から聞こえては来ない。

この姿を見た人々は、さつきまで生きていたカメラを可哀想と思うのか、それともこれでよかったと思うのか…。

「とりあえず…駆除完了ってことで…後は武装警察に任せるとしよう…。ハア…こんなのポーナス貫わないとやってけないからなあ…サトナカのやつ…。」

亡骸の上で、見事に害獣を駆除した少年は大きくため息をつくくと、彼の着ていたラインの入った黒い服が消え、一瞬にして水色のブランド物のジップパーカーに変化した。

「あ……あの……」

「ああ、戻れって思ったらすぐ消えるよ。そもそも、トランスつてのも言っても言わなくてもどっちでも良いし」

僕が戻り方がわからない事に気づき、少年は水晶に関することを少し解説しながら、戻り方を教えてくれた。

言われた通り念じると、拳銃は即座に元の水晶キーホルダーへ変わり、黒いパーカーも元々着ていた服装に戻った。

「おつと……これ、ありがとうございます。助かりました……」

彼から受け取ったキーホルダーを返そうと差し出すと、少年は首を横に降りながら、受け取りを拒んだ。

「それ、手放したら死ぬよ?」

「え……っ!?!」

唐突に告げられた真実に驚き、思わずキーホルダーを握る手を強めてしまった。

「君は僕と同じ、”そういう人間”になってしまったんだ。死にたくなかったら、絶対に離さずにとっておくことだね」

彼の注意に背筋を凍らせながら、僕は了解の意味を込めて、首を縦に振りながら、キーホルダーを胸元に持ってきて握りしめた。

「ポッケにいれてても良いよ。……てか、僕は元々、君を逮捕するためここに来たようなものだったんだけどもね……」

まるで、ついでのように話された真実に、また驚かされてしまう。

「た……逮捕……っ!?!」

「そつ、スプリミナルとして」

「スプリ……ミ……?」

なにがなんだかわからなくなってきたところで、少年はポケットからカードケースを取り出した。

「まあ今後、君がお世話になるかもしれない場所さ。はいこれ」

彼がそこから取り出した一枚の名刺を、僕は恐る恐る受け取ると、そこには、警察特殊認可特異行使結社と長い名前の社名と、少年の物と思われる名前があった……。

「何時でも良いから、明日そこに来て。場所がわかんなかったら、近所

の人に『青い瞳のコーヒーはどこですか？』って聞いて。来てくれれば、特異点について全部話すから。それじゃね」

少年はそれだけ言い残し、僕に背を向けて歩き出した。

「あ、ちよつとー」

止めようとした瞬間、彼の姿は踵から吐き出された水と共に、上空へと飛んでいった…。

結局、この身体の事は詳しくわからない。

何故、結晶が身体中から生えたのか。

何故、僕が逮捕されなかったのか。

そして…彼はなんなのか…。

「スプリミナル社員…ミズハラ カドヤ…」

名刺に書かれているその名を復唱すると、路地に一筋の風が吹いた。

今日、確かに僕は死んだ。

”今まで無能だった僕”が、銃に打たれて死んだ日だ。

水原角也と出会ったその日、僕という人間は変わる。

普通ではない人間に…。

To Be continue…



## 2-1 『少女Tとコーヒー爆弾』

僕は普通じゃなくなった。

昨日まで、無能で下手くそでお人好しな詐欺師として悪事を働いていたはずの僕、悠樹哲哉。

ミラーマフィアと業務提携するからという理由で、仲間を騙されたショックか、銃で撃たれた衝撃かは分からないが、ひよんなことから、僕の体内から突然マゼンタ色の結晶が、大樹の枝のようにメキメキと生え出した。

まるでライトノベルのフィクションのような嘘みたいな話だけけど、そのクリスタルが、僕を殺そうとした同僚や社長達を殺したのは、残念ながら事実だ。

人を殺したというパニックと、自分への失望によって、自我さえも失いそうになっていた僕の前に現れたのは、水を操る不思議な少年、水原角也。

ニヒルに笑う姿がとくちようてきな彼は、僕に丸い水晶が付いたキーホルダーを渡すと、結晶がみるみるうちに消えた上に『攻撃を無効化する（仮）』能力まで僕は入手してしまった。

異形な能力をもってしまった人間、”特異点”と言う物になってしまった僕に、水原少年はスプリミナルと書かれた名刺を渡し『後日ここに来てくれ』と言ったのだが……。

「結局どっなんだよ……」

スマホを眺める人間やMP3プレイヤーから音楽を聴くトカゲのリージエン等、様々な乗客に紛れて名刺を眺める僕を乗せて、電車はガタンゴトンと音を立てながら走る。

ここに来いと言われたが、その名刺に書いてあるのは、スプリミナル本社ビルと書いてある場所の住所……。

だが、彼が言ったのは『青い瞳のコーヒーの店』だった……。

同じビルなのか…それとも全然違うのかすらもなんかよく分からなくて、何となく困惑している状態で、とりあえず書かれている住所

には来たのだが…。

実は、この名刺には郵便番号と番地が書かれていなかったのだ。名刺として致命的なのではないのかと思うけれど、これも秘密結社的な感じなのかな…。

「乗車ありがとうございました。次は花菜村、花菜村に停まります」  
そんな考えを余所に、電車のアナウンスが鳴る。

「おっと…降りないと」

アナウンスを聞いた僕は座席から立ち上がり、停車した電車から降りる。

暖かい春の空気と駅独特の何とも言えない香りが顔を包み通る。

その空気を切り裂く人混みに紛れながら、僕は駅のホームへと歩き始める。

「てか…この約束以前に、明日の家どうしようかなあ…」

エスカレーターで上階に登りながら考える。

普通でなくったよりも少し前に、僕はあの大家の糞婆から3日以内の退去命令を食らってしまい、明日には出ていかなければならなくなったのだ。

僕は特にそんな悪いことはしていないのに…。

そりゃあ、隣のリージエンが聴覚に強いのに気づかなかった僕も悪いかもしれないけど、そんなにすぐに退去命令を出すなんて奴だ…。

なんて、心のなかでぶつくさ言いながら、電子決済が主流な今時に珍しく、切符を改札に通して外に出た。

「ふう…。暖かくて心地良いな…」

駅から外へ出る時でも、気候は僕を包むし、空って言うのはいつも通りの青色表情を見せている。

今日は僕を嗤っているのか、この場所に人が来たことを喜んでいるのか、綿菓子のような雲が踊っている晴天だ。

少し不純な気持ちを抱えつつ、ブルーディアTK市部27区（花菜村）と呼ばれる場所に、僕はこの足を踏み入れた。

町を歩いていく内、通りすぎる異知能生命体も人類も、仕事や娯楽、

買い物と、普通の人生を送っているように見えて、それがどこか羨ましく見える…。

普通の人生を送るのが大変だと言うのがわかってから、今の僕にとつて、通りすぎる人々の『普通』が少し妬ましく見えてしまっているのかな…。

「あつー！」

すると突然、その声が聞こえると共に、駅から出たばかりだと言うのに、僕の目の前に野球ボールが飛んで来た。

「うわっ！」

思わず目を閉じて防ごうとするが、そのボールは僕の体に当たらず、ただ透けるように通つてから、壁にぶつかって落ちただけだった。

「ああ…：そういや、こんな身体になつたんだっけ…！」

安堵するような、自信の体に嫌悪するような思いを、心に織り混ぜながら、僕は足元に落ちたボールを拾い上げる。

「ごめんなさーいっ！」

すると、赤色のユニフォームを着た、鯉型の子供リーグエンが駆け寄ってきた。

きつと…：これから草野球の試合か練習なのだろうな…。

「気を付けてね」

「すみませんでした…！」

鯉の子供リーグエンは、申し訳なさげに頭を下げながら、僕の手からボールを受けとり、そそくさと走って行ってしまった。

ちゃんと謝れるから、そこまで悪い子ではないんだろうな…。

「ここら辺も…：活気がありそうだな…！」

目的地へと歩きながら、少し妬みがちな僕は、この都市全体を眺める。

洋風と和風が混じった建造が立ち並ぶ近代的外観の中、環境保護のために生え揃う木々は、互いに交わらぬように切り揃えられながらも、生き生きと青葉を付けている。

通りすがっていく物全て、死んだ顔の生命はなく、ここを住処としている子供達も、ふざけ合いながら僕の横を駆けていった…。

ここは本当に居心地が良さそうだ…。

「ちよつと…ここ住んでみたいかも…」

なんて思い、少し浮き立ちながら、ふと通りすがった不動産物件紹介の貼り紙をチラッと見てみる。

「……ウエッ！」

だが、その張り紙全体に立ち並ぶは、家賃約7〜15万円と、僕にとってはなかなか手が延びないお値段の物件ばかりだった。

今まで、少し過ごしづらいとも思っていた月3万円のボロ物件に住んでいた頃が恋しくなってきたし、あのごうつくばりの婆が急に優しい人間に思えてきた……。

「はあ…やっぱり調子にのんなつてことか…」

さつきまで、高揚していた体は、鉛でも飲まされたのかと思うほど、一気にずつしりと重くなった。

元詐欺師に楽を味わう権利などないのかもと思うと、この足がズンズンと重くなっていく…。

その上、昨日取り憑きはじめてた背後霊が、僕の惨めな姿を嘲笑っている声も聞こえるような気もしてきた。

昨夜からずっとそうだ…。

お前が俺たちを殺したとか、お前を許さないとか、そんな言葉の想像ばかりがめぐっていて、うんざりする…。

昨日貰った言葉で、その思いは振り切ったはずなのに。

「まあ…ここらは高嶺の花つてことだな…やめよやめよ……」

大きいため息を付きながら、僕は背後霊連れ回しながら、またこの晴天の下、あまり見慣れないこの町を歩き出した。

しばらく歩いていると、外観が近代的な町から、昭和の時のような少し古くさく感じる町へと変わる。

酸性雨や年間で廃れたコンクリート製のビルが多くなり、かすれた文字の飲食店や、決まった入り口が無いシャツター式の小売店が立ち並ぶ商店街が現存し、通りすがる人も、成人よりも老人の方が増えてきている気もする…。

所謂、レイテストモデル的な感じから、ハイカラに変わった感じと

言おうか…？

天皇は現存しても、元号制度が取っ払われた現代、昭和や平成の時代に等、昔過ぎて生きている筈がないのに、何故か懐かしいとも思えるように感じる…。

リージェン技術の輸入が活発になった今でも、こんなに時代を感じる町並みが残っていたんだな。

趣味の撮影も予て、カメラを持ってくれば良かったとふと思った…。

「おつと…忘れてた」

珍しい街を観察するあまり、つい本来の目的を忘れてしまっていた…。

僕は名刺を改めて取り出して、水原角也の言っていたように聞き込みを始めた。

「すみません…」

まずは、たまたま通りすがった杖を付く老人に、話しかけてみる。

「あの…青い瞳のコーヒーはどこですか…？」

「ん？ああ…アオイちゃんこの…それなら、角曲がったところ右に看板あるから…」

「あ…有難うございます…」

僕が礼を言うと、老人はにこりと微笑み、そのままゆっくりと歩き去っていった…。

「感じの良い人だったな…」

僕はそんなことを呟きながら、言われた通りに歩き出す。

リージェンが介入してから、やはり昔の考えに固執しすぎたり、最新型のを拒否する、言わば『老害』と呼ばれる人間も増えていたようだから、少し怖かった。

それに、国会では『老害処分法案』なんておぞましい法案がリージェンから上がったようだが…お人好しの僕にとって、あまり賛同は出来ないんだよな…。

しかも、廃案にはまだ至っていないのだとか…。

なんて小難しいことを考えながら、そこの角を曲がると『C a f e

フエイバリットはこの先500m！来てね！』と書いてある、なにやら少し可愛らしい看板を見つけた。

水原角也からは『ここ』としか言われてないけど…とりあえず、あのお祖父さんにも、ここが『青い瞳のコーヒーの店』と言われたし…。とりたえず、ここを目指してみるかと思いつ、僕はその道を歩き始める。

足を進めながら、目の前を見据えてみると、そこにはあまり人はおらず、地面の落書きや、貸物件の方が多そうだ…。

どうやらこの先には活気な商店街や住宅地はなさそうで、少し寂しさを感じる。

どんな町にも、こんな空虚っぽい場所はあるんだな…。

「そういや、スプリミナル…って、結局一体なんなんだろうか…」寂しげな通りを歩く僕は、ふと昨日のことを思い返す。

僕がピンチに陥ったら、突然空から現れて、特異点に目覚めた僕と協力をして、やっとノーインを退治すると、どこかに行ってしまった…。

あの後、恐れ多くも怖いもの見たさで取引現場を除いてみると、僕らを殺そうとしたミラーマフィア達は、武装警察に連行されていたし、そもそも最初にみたあのいかにも頭領みたいなのが一人いなかった…。

あんな影のところ武装警察が密かに潜んでいたとは思えない…。あれもスプリミナルという組織による物なのだろうか…。

「とりあえず…また違法なところとかじゃなければいいんだけどな…。」

スプリミナルという組織への不安を感じつつ、ハアと大きくため息を付きながら、僕はまたぼちぼちと足を進めた。

まあ、とりあえずこちらの予定として、彼らからは、ただ特異点というものがなんなのかというのを聞く予定っただけだし、なにか騙されるようなことはないように願いたい…。

それに…明日の家と仕事、そしてアヤのことも考えていかないといけないし…。

「はあ…頑張らないとな…」

自分に現実突きつけて、なんとか立ち上がれるように鼓舞する。  
こんなな晴れ渡った空なのに、自分の心はいつもよりも多い雨が降っているように感じる。

まあ、そんなポエミーなことを考えても、なんにも起きやしないけれど…。

ドンツ!

なんて馬鹿なことを思っていると突然、背中に子供がぶつかった感触が走る。

「あ、すみませ…」

今日はよくぶつかると思いながら、後ろを振り替えると、見覚えのある水色のパーカーと、少し露出した額がそこにあった。

「おっと、こちらこそごめん…って、君か」

「君…えつと…ミズハラくん!」

「あたり。覚えててくれたんだ」

何故か背後を気にする彼に、僕は指を指すと、彼はまたニヒルに微笑む。

まさか、こんなところで偶然ぶつかった人間が、昨日命を救ってくれた少年だとは思わなかった…。

「でも、今はこんなことしてる暇はないんだよ…」

少し慌てる彼は、額に汗が染みだすほど神妙な面持ちだ。

「も…もしかして、またノーインかなにかが…?」

「ノーインよりもヤバイね…。なによりあれは猛獣…超ヤバイやつだよ…」

眉をしかめる彼の口から出てきた、そのおぞましいキーワードに、僕の背筋にぞくりと冷たい物が通る。

昨日よりもヤバイ猛獣…。

大災害を引き起こすほどにデカイ竜やお伽噺で出てくるダイダラボッチのような巨人か…!?

「猛獣って…それはどんn…」

「カアアアアドヤアアアアアアアツ!!」

猛獣がなんなのかを恐る恐る聞き込もうとする刹那、突然、水原くんの背後から、鬼の形相をした女の子が迫り、次の瞬間には、しまつたと逃げようとする彼の頭に、強力な飛び蹴りが決まっていた。

「ゲフウツ!!」

突然現れた彼女は、少し特徴的に跳ねた青色の髪を揺らしながら、彼の身体を思い切り踏みつける。

まさか…これが猛獣…？

「あんた…朝、私なんて言った…？」今日は非番の人が多いから、買い物の間、店番をお願いします” って、ちゃんと言ったよねえ…？」  
水原くんに馬乗りになっている彼女は、顔や拳だけではなく、身体全身から怒りを醸し出しながら、彼にそれを問い詰める。

少し失礼だが、確かに彼はなんとなく約束を破りそうな感じではあったし、彼女の片手には色んな品物の入ったレジ袋も握られているため、言葉の行き違いとかもなさそうだ…。

「だ…だって！うちの店、この時間帯にはあんまり人来ないじゃん！？それにほら…僕、接客よりも占いの方が腕がいいからさ…？そつちで売上貢献を…」

言葉を取り繕って言い訳をする水原くんに、彼女の顔は烈火のごとく赤く染まる。

「だからって…サボってもいい理由にはならん…っ！」

ついに彼女の怒りは、ついに頂点に達し、レジ袋から取り出したのは、タイムセールシールのシールが貼られた新鮮な大根。

これはもしや…昔からフィクション界隈でよくある、お仕置き攻撃的なものなのでは…。

「やばい…水質変…」

「即効重力変化あー！」

ゴツッ！

残念ながら、彼女の怒りを避けようと水原くんが水になるよりも先に、彼女が彼への怒りを乗せた大根による会心の一発の方が早かった。

頭にその怒りを食らった彼は、鈍い音と共にたんこぶを作り、ぐる



ぐるりと目を回しながら、バタリと倒れて失神してしまった。

確かに…彼からしたら彼女は猛獣なのかもしれないということはわかった。

母親にしろ妹にしろ、女性というのはたまに恐ろしいものだからな…。

「ふん…っ！」

サボリ魔へのお仕置きを終えた彼女は、頬を膨らませながら、ポツキリと真っ二つに折れてしまった大根の破片を回収し、レジ袋の中に入れて。

この後は、ちゃんとおいしくいただくようですね…。

「あ……あの……」

それに見兼ねた僕が声をかけると、人がいたことに気づいた彼女は、怒りではない思いで、頬をポツと赤らめる。

「…あっ…す…すみません、こんな路上で……」

あまり外には見せられないような荒ぶりに恥ずかしがる彼女は、水原くんの身体から降りて、前髪を弄りながら僕に近づく。

水原くんよりは少し小さい背丈で、強気に少し釣っている目と、左右と頂点にピヨコンと跳ねた三点の髪、パステルブルー系の色で真ん中に大きく有名ブランドが描かれた長袖を着て、デニムショートパンツと黒いハイソックスの姿…。

まさに、気が強めで可愛らしい元気っ子…と言った感じかな…？

「いや…実は青い瞳のコーヒーを探してて……水原くんと関係あるのかなって…」

僕は懸案のそれについて聞くと、彼女は急に目をキラキラと輝かせ、グイッと僕に迫る。

「青い瞳なら、うちの看板メニューです！もしかして、お客さん!?」

僕に向けられた期待の眼差しが、太陽と同じくらいまぶしい…。

それほど仕事に熱心なのだろう…。

「あ…うん、一応ね……実はちよつと……」

僕は事情説明も予て、水原くんから受け取っていた名刺を見せると、光っていた筈の彼女の目は、一瞬で仕事をする人間の真剣な物へ

と変わった。

「スプリミナルの名刺……もしかして、依頼人……？」

「依頼人……？と……いうわけでもない……と思うんだけど……」

そもそもなんの依頼なのかはわからないのだが……

それに、どう説明すれば良いのかということもわからない……

「えっと……実はその……あつ」

まずどこから話そうか迷っていたが、ふと、ポケットに水原くんからもらったキーホルダーを思い出し、それを彼女に見せてみせた。

「これ……水原くんにもらつて……」

「汎用型の非常用エンブレム……っ！」

日光に照らされて光るそのクリスタルを見て、彼女のその青色の目が、また違う感情を表すものにガラリと変わる。

「つてことは……っ！くうううっ！やったああつ！やつと後輩が来たんだああつ！」

このクリスタルを認識した彼女は、なぜか突然ジャンプをしながら、両手を大きく挙げて喜びだした。

「え………後輩……？」

後輩と言うワードに、僕が首をかしげ、それを余所に彼女はまた僕に顔を近づける。

「私！タチカワ アオイ！14歳！スプリミナルでは一番の下っぱつて言われちゃってるけど……。でも、私の特異でみんなを助けるのが役目！そして、私のコーヒーをみんなに飲んでもらうのが夢なんだ！カフェの店長だけど、任務はちゃんとやるからね！」

彼女はそう言つて、僕に自己紹介やスプリミナルでの働きについてを話す。

この突然ぐいぐい来ている辺り、多分、彼女こと太刀川蒼は、なにか勘違いをしているようだ……

「あつ！君は後輩になるわけだから……気軽にあおい先輩……なんて呼んでもいいんだよおっ？」

得意気にニヤニヤと笑う上機嫌な彼女だが、そろそろ言つてあげないと、気づいたときに傷つくのがひどくなるよな……

「あの…僕、スプリミナルっていうのに入るとかどうかわからないんだけど…」

この期待の眼差しを切り裂くのは申し訳ないが、僕はなんとかそう断りを入れると、彼女の目の煌めきはストーンと消えてしまった。

「え…？は…入らないの…？」

「…そもそも…僕は彼を特異について教えたかったただけなんですけどお…」

露骨に太刀川蒼が残念がるのに少し心を痛めている中、頭を擦りながら水原くんが起き上がった。

「あ、起きた」

彼が失神した第一の原因は、彼への扱いがまあ軽いこと…。

「痛つててえ…それで…詐欺師くん？」

「あ、僕…ユウキ テツヤって名前です…」

そう言えば、彼らにはまだ名前を言っていなかったな…。

「んじや、ユウキくん…。特異について色々教えたいから、まずはC a f e フェイバリットに移動しようか…」

よろめいて立ち上がりながら水原くんがそう言うと、僕らから背を向けて歩きだす。

大根による会心の一撃が、まだ響いているんだろう、歩いている姿も、少しよろめいているように見える…。

「彼…大丈夫…？」

心配して僕が聞くと、彼女はパイとそっぽを向いた。

「日常茶飯事なんで大丈夫。多分」

彼女、本当に水原くんの扱いが雑だな…。

これは彼のことを嫌いだからなのか、それほどに彼のことを信頼してるからなのか…。

「そーいや…彼の言ってた『ここ』って、このカフェのことだったんだな…」

少し迷っていたことについてふと独り言を呟くと、彼女がそれに反応する。

「またカドヤがテキストなことだったの？ごめんね…」

彼を氣遣うその言葉は、まるで母親のようだ…。

この二人は結局どういう関係なんだろうか…。

「大丈夫大丈夫…。でも、聞いたことないお店だったから…ちよつとね」

「フエイバリットは全国に届けたいスタイルというより、地域を大切にしたいお店だからねえ…。ちなみに、私が店長なんだよ！」

謝罪にあしらうと、彼女はまた僕に顔を近づけながら、cafeフエイバリットについて、楽しげに話す。

「へえ…。」

お店についての熱があるのは、なんとなく感心するのだが、14歳で店長というのはどういうことなのだろう？

法律とかで色々グレーゾーンな気がするし、そもそも14歳でお店を持つのは大丈夫なのだろうか…。

と、これ以上、追求しすぎたら、フィクションの意味がなくなるだろうからやめとこう…。

それに、色んな食料品が入ったレジ袋や大根での会心の一発で、なんとなく家事とかは一通りに出来そうだなとは思っていた。

「ほら、すぐそこなんだから、歩きながら話そう」

一方で、一人ズンズンと進んでいた水原くんが、痺れをきらして僕らを呼び始めた。

「あ、うん…。」

少し悪いことをしただろうかと思いつつ、僕らは小走りで水原くんの裏につき、改めてこの静かな街路を歩きだした。

しかし、歩いていけばいくほど、人の気配が減っている気がする…。だからといって、曇り空が発展していつて怪しげになるわけでもなければ、建物から延びる影が濃くなっていたり、湿気が強いわけでもない。

数台だが、自動車も通る。

人がいなくても、太陽はこの街を暖める。

人は少ないのに、何故か居るととても心地のよい街に思う…。

だが、店までもう少し道は長そうだ…。

「えつと……タチカワさん……」

今のうちに聞きたいことを少しでも聞いておこうと、僕は彼女の名前を呼ぶと、太刀川蒼は笑みを浮かべつつも、少し眉をしかめる。

「堅苦しいよ。アオイでいいよ」

初対面の他人の僕に呼び名を要求する辺り、どうやら彼女はフレンドリーな性格のようだ…。

「じゃあ…アオイちゃん。君も、スプリミナルの一人…なの？」

「うん。ナンバー10番!とは言っても…本当はもつと昔から居るんだけどねえ〜…」

彼女は両方の掌で数字の10を作りながら、そう言った。

スプリミナルという組織には、番号も決まっているのだろうか…?

まだまだもう少し疑問が残る…。

「へえ…昔からってことは…お父さんかお母さんが…そのスプリミナルっていうのに居たりするの?」

もつと昔からと言うことについても疑問に思っていたため、続けて僕は質問をする。

「うーん…半分正解で半分間違い…って感じかな…」

しかし、彼女は先程のようには答えず、首を軽くかしげる。

半分とはどう言うことなのだろうか…?と考えているのを汲み取ったのか、水原くんがこちらを向く。

「アオイには、両親が居ないんだよ」

彼の補足から、彼女の真実を聞いてしまった途端、僕の心臓がドクリと波打った。

まさか、こんなに明るい子が孤児だったなんて…。

「そう…なんだ…なんか、ごめんね…」

知らなかったとは言え、悪いことを聞いてしまった。

「良いよ。それはカドヤも同じだし」

しかし、立て続けに地雷を踏んだように、聞いてしまった彼らの過去に、また僕の心がドクンドクンと大きく波打つ。

まさか、彼の方まで訳アリだったとは…。

「ご…ごめん、ホントに…こんな軽々しく聞いちゃって…」

申し訳ないと感じた僕は、頭を下げながら彼らに急いで謝る。

「こんなに墓穴を掘ってしまったのは初めてだ…。」

「別に良いよ。僕には両親なんて居なくていいから」

「私も、サトナカさんや皆がいてくれるから、毎日楽しいよ」

だが、この少年期の二人は、僕が真実を知ったことを、あつさりとは許してくれた。

なにか嫌な思い出があるのか、親という存在に対して少し冷たくあしらう彼と、親に対しては特になんとも思っておらず、明るく返答する彼女…。

温度差があるが、とにかく二人とも『親がいない』という現実を全くもって気にしていないようで、少し安心した…。

ただ、アオイちゃんが『サトナカ』という名前を出したとき、水原くんの顔が「面白くねえ」とでも言いたげに歪んでいたのだが、そこは特に聞かないようにしておこう…。

「まあ、それに…：スプリミナルって、そういう訳アリの人が集まるところだし…？」

「訳アリ…？」

とは…：一体どういうことなんだろうか…？

「そ、スミウラくんやアカギくんも、なかなかヤバイ奴らだしね」

「でも、ユウゴくんやアキラさんは優しいよ。いつもお店手伝ってくれるし。誰かさんと違ってね？」

「う…：ま…：まあ、スプリミナルってそういう組織ってことで…」

二人はスプリミナルについて話すのだが、なんか、間接的に勧誘されてる気がするし、結局『訳アリ』の意味が全くわからない…。

それに、なんかまたあおいちゃんの視線がキラキラとおねだりムードな感じだ…。

「ぼ…：僕には合うかどうか分からないし…：それよりも前にとりあえず、僕は特異点っていうのについて、まずは知りたいかな…」

「チエー…：折角後輩できると思ったのに…」

あおいちゃん…：やっぱり勧誘するつもりだったんじゃないですか…。



## 2-2 『少女Tとコーヒー爆弾』

「ええ……」

あまりに唐突な出来事に、僕は思わず間抜けな声を出してしまった……。

爆発した店は、内装だけ焼け焦げただけよようで、外装には一応傷はなさそうだ……。

火事を疑ったが、割れた窓から流れる黒煙は、そこまで大きくはないし、少しずつ小さくなっていくように見えたため、多分、燃え移っていると言うような事はないだろう……。

「わ……私の……お店……が……」

そして、あおいちゃんが想像以上にショックを受けているのが心配だ。

漫画のようにわなわなと身体を震わせ、もう半泣きの状態でお店を見ている……。

「が……外装は大丈夫だから……！中をなんとかすれば！ね!？」

なんとか彼女を励まそうとするが、すぐには立ち治れなさそうだし……。

なにかを大切なものを失くす思いはわかるから、これから塞ぎ混んだりしないか少し心配だ……。

「……?」

そんな中、水原くんが僕らに向けて人差し指を自信の口に添えて立てる

「ちよつと、静かに……。なんかおかしくない……?」

その言葉を聞いた僕らが、ハテナを頭の上に浮かべていると、水原くんが手を引き、店の影にそつと身を隠した。

「……っ!」

彼の言葉の真意に気づいた彼女の目がガラリと変わる。

「おかしい……って、そもそも爆発した時点でおかしい気が……」



「しっ！」

僕が小声で呟いた瞬間、二人は息を合わせて僕を黙らせる。

言われた通りに声を潜めると、僕らはそつとその店内を見ている…。

「……なんだ……ここにはシヨボくれた客以外……誰も居ないのか……？」

窓から見えたのは、ハンドガンを手に持ち、黒い狐の面と全身黒のライダージャケットとパンツを着た女性。

その手元には、灰色のスウェットとメガネを着けた女の子が、腕と胴体をぐるぐる巻きに縛られて、地面に座らされている。

そして、狐面の女性の裏、カウンターの下では、同じく口と上半身を縛られた、老若男女問わない人々が数名、その女性に怯えているかのように、身体を縮こめて震えていた…。

「スプリミナルの奴らあつ！とつとと出てこい…っ！さもないとこのガキバラすぞお！」

狐面の女性は、人質の女の子の首を絞め、その頭に銃を突き付けながら、激昂する。

「な……なにあれ……なにあれなにあれなにあれえ！」

こんななフィクションドラマの型にハマったようなシーンを実際に見て、僕は混乱せざるを得ない。

というか、昨日からこんな物騒な初体験ばかりでそろそろ疲れてくる…。

「落ち着いて。大丈夫だよ」

さらには、僕よりも年が小さい筈のあおいちゃんが、なにも動揺せず僕を落ち着かせている光景に、これまた自分が情けなくなってしまう…。

「籠城か……。多分、言動から見て怨恨だよな。スプリミナルの組員になにかしら恨みがあると見える…」

さらには、あおいちゃんとそこまで年の差はないであろう水原くんは、もう早々に状況把握を始めている。

流石……こんな詐欺師を救える程の力を持つ少年だ…。

「考えられる理由としては……やっぱり、救えなかった命……とかかな…」

あおいちゃんの一言から、二人は向かい合い、犯人の動機についてを話し始める。

「それか……スミウラくんやサトナカくんに恨みとか……」

「サトナカさんは無いとして、絶対シユウくんでしょ。あの人恨み買いきょうなことしかしないもん。それかコウヤさんの顔がキモいからとか？」

「それ、イツジくんに失礼な気が……」

流石と言わざるを得ない。

目の前に銃を持った狂人がいるって言うのに、動じないその冷静さと共に誰だかわからない名前の人を弄ることができる彼らの心臓に……。

何にも知らない僕にとつては、もうなにがなんだか……。

「とにかくそんなこと良いから！とにかく逃げた方が良いんじゃないの!?だって、君たちが狙われてるんだし！」

「なに言ってるの！ここで逃げたら、地元の人たちにこれ以上の被害が出る！それに、一人捕まってるのに！」

彼女らを思つて、僕は撤退の提案をするが、あおいちゃんはそれをすぐさま否定した。

僕の方が大人の筈なのに、すごく冷静で的確なことを言われて本当に情けない……。

門外漢の自分はもう下手なことを言わない方がいいか……。

バアン！バアン！

そんな思いから現実へと引き戻そうとするかのごとく、店内の籠城犯が、また弾丸に火をつける。

「どこに居やがるスプリミナルウ！とつとと姿をみせろお！」

怒りに任せたその咆哮は、道を走る白猫がびくりと身体を振るわせるほどだった。

まるでここら一体に雷が落ちたようで、正直この状況には怖さが強く強く主張している……。

「結構な興奮状態だね……超やばそう……」

それでも怖じけず、物影から、犯人の行動を観察する水原くんと、あ

おいちゃん。

「こつから…できる限りどうやって平和的解決を行うか…だな」

二人は再度向き合おうと、今度はこの状況の打破の方法を話し合い始めた。

「どうする…？いつそ、カドヤが水をブワアツ！と大量に出して溺れさせるとか…？」

「それ、お客さんも溺れるからダメでしょ…」

あおいちゃんは少し自信を持って大きく手を広げるが、水原くんの反応はいまいちなようだ。

「それより、アオイが重力操作でこの店ごと吹っ飛ばすのが早い気がするけど…」

「出来るわけではないでしょ！大切なお店なんだからっ！」

からかいつつも代案を出す水原くんに、あおいちゃんが顔を真っ赤にして怒る。

どうやら、あおいちゃんの性格はとにかくドンドン前に行くタイプで、水原くんは冷静分析でからかい上手タイプと言った感じだろうか…。

そして、二人の仲が良いのもよくわかった。

なのだが、こんな分析よりもまず先に、大人として、僕もこの状況の打破を、少しは考えないといけない…。

被害をなるべく最小限にして、犯罪者を逮捕する方法。

下手くそなりにでも考えるために、物影からそつと顔を出して、改めて店内の状況を見てみよう…。

ビルの一階に建てられていると言っても、店内はなかなか広く、内装はドームのような円形に近く、周りにはテーブル、奥にはカウンターがある喫茶店。

その店内では、ならんであったはずのテーブルとイスがなぎはらわれ、中心部辺りに、該当する狐面の女性の犯罪者が椅子に座って鎮座し、スウェット姿の女の子の髪を掴んで人質にしている。

人質の子は足と腕を縛られて地面に尻をつけられ、足元に出来た水溜まりから、恐怖で失禁しているようにも見える。

カウンター席に配備されていた筈の椅子も取り払われ、下に押し込まれているかのように、九名の老若男女、人間人外問わずのひとびとが、口を塞がれて縛られ、怯えて彼女をみていた。

もしもここで彼らが突入すれば、犯人が逆上して、人質やカウンター下のお客さん達を殺すと言う可能性もなくはない…。

完全に命を手玉にとられたような状況だ。

武装警察や彼らなら、もつと上手い作戦を考えられるだろうけれど…。

「あの……」

曇天に切り込むように、申し分けなさげに僕が手を上げると、二人が一斉にこちらに振り向いた。

命が犯人の手中にある状況の中、素人なりに整理をした上で、一つだけ案が思い浮かんだ。

「なに？」

「えっと…なにかしらで相手を引き付けて、そこでお客さんや人質を救出するのは……どうだろう……？」

正直、採用されるような自信はないのだが、あくまでも一案の提出だけでもと思い、恐る恐る僕はその説明をする。

二人がこちらをじつと見つめる視線。

そこから醸し出される、如何にも否定されそうなシチュエーションが怖い…。

「なるほど……オトリ作戦ねえ……」

しかし、返ってきた言葉は否定なんかじゃなかった。

「難しく考えすぎて、こういうベタな作戦があるのも忘れてたね……」

こんな門外漢の僕の提案を聞いた二人は、自分の盲点に気づいて、ほうほうと首を縦に振る。

言いたいことが伝わったことも良かったが、なにより否定が無かったことが嬉しかった。

「うちのお店、カウンターの所に裏口もあるから、確かに奇襲なら行けなくはない……。あつ！」

すると、あおいちゃんがなにかを思い付いたようで、パチンと手を

叩く。

「じゃあ、私がオトリになって、あの人の持つてる銃をバシツ！と落とす！それで、後からカドヤが水剣フルスとかのーツ技使ってバスつと！」  
「それは無理。さっきの爆発、聞いたでしょ？多分、ダイナマイトか超高性能爆弾、ニトログリセリン辺りを隠し持つてる可能性がある…」  
川の流れを断ち切るような水原くんの言葉を聞いて、彼女の言葉の勢いと目のハイライトが弱まっていく…。

「そっか……」

「てか、水剣フルスはアーツの技じゃないし…」

せつかく思い付いた案が通らなかつたことに、あおいちゃんは少しよぼんとしてしまった。

「でも、オトリは良いアイデアだと思う。ありがとユウキくん。アオイ」

だが、水原くんが僕らにそう言うのと、あおいちゃんは先程とはうってかわって、嬉しそうにニツコリと微笑む。

彼女は本当に感情が激しい子なんだな…。

ただ、自分がなんとか考えた凡案を受け入れてもらえたことは、僕もなにげに嬉しかったり…。

「そうくると…オトリは僕がなつた方がいい。僕の特異なら、銃くらいは全然避けれるし、アオイとユウキくんの特異なら、奇襲もできると思うから…」

「なるほど……了解！」

水原くんがまとめて提言した人質救出案に、あおいちゃんは敬礼をして了解した。

簡略化して整理をすると、水原くんがオトリとして犯人の前に出て交渉等をし、その隙に僕とあおいちゃんが特異を使って救出と確保を…。

「……ってあれ!?了解じゃなくて…僕もカウントに入つてない!」

ここで僕は、ようやく言葉に乗せられてしまったことに気づいた。

その上、鮮やかにスプリミナルの仲間入り扱いをされてる気がするし…。

「ほら、そんなこと良いからトランスして、作戦開始！」

「了解！」

水原くんは僕の疑問をそんなことと言うし、あおいちゃんはそれにノリノリだ…。

「え…ええ…。」

まあよく言いくるめられた感が否めないし、腑に落ちないが…こうなっては引き返せないし、そうになるとKY（通称、空気読めない奴）と思われるかもしれないから、とりあえずは郷に従つとこうか…。

渋々そう思いつつ、僕はポケットの中にしまっていた水晶キーホルダーを手に持ち、水原くんはパーカーの飾り、あおいちゃんは履いているハイソックスに手を触れると、それはそれぞれの色へと光出す…。

「<sup>トランス</sup>肉体換装」

「ト…トランス…。」

三人それぞれの思いで叫ぶと、自らの服装がスプリミナルの仕事着へと変わる。

水色、青緑、紅紫に光るラインと、正式メンバーを表す黒地と汎用型の白地のパーカーと、僕ら二人は長袖のジャージなのだが、あおいちゃんだけはなぜかショートパンツの装いになっている。

これに変身するのは二回目だけれど、相変わらず身体感覚が軽く変わるの慣れない物だな…。

「んじゃ、そっちは頼んだから…」

水原くんはそう言うのと、率先して喫茶店の出入り口から店内へと入っていった。

「うん！いくよ、テツヤくん！」

「は…はあい…」

一方で、あおいちゃんがヤル気満々で僕の手を掴み、二人で影に身を潜めながら、ここそと店の裏口へと移動した。

本当になにもできない僕が行っても良いもののだろうか…。

心配になるが、こうなってしまうてはもうやるしかない物だ…。



僕の発言と水原くんが考案として出来上がったオトリ作戦が、ついに開始された。

店の中は、いまだに整脈と戦慄に包まれており、それに一筋の光を与えようかとも言うように、少年が扉を開く。

「おい、望み通り来てやったぞ」

なめられないようにか、傲然な態度で水原くんは犯人に向けてそう言って、その頃には、僕らも裏口からそっと店内へと侵入していた。

先程の爆発でガラスは割れ、換気は十分なのだろうが、木が焼け焦げた匂いがまだ少し舞っている…。

カウンターの従業員側の方へと身を潜めながら、タイミングをうかがうように、そっと二人の状況を観察し始めた。

「……知ってるぞ…あんたはナンバー2……水のアークウイザード…」

「そういうのは知ってもらえてんのね…まあ、ありがたいことかなあ…」

籠城犯は敵である彼を睨み付けながら銃を向けるが、水原くんは手を上げて危害を加えるつもりはないと言うことを表している。

「胸につけている武器を置け。さもないとこの子を殺す…」

カチャリと銃を揺らしながら要求をするが、それでも水原くんはそれに応じず、高圧的にフツと鼻で笑うだけだった。

「……あーあ…君、今日はアカギくんがクルスト出張でよかったねえ…？…こんなの見られてたらもう丸焦げだよ？」

彼は無粋に笑いながら、彼女を煽りはじめた。

また素人の考えで申し訳ないが、多分話題をほんの少し変えることで、彼女に混乱を招こうとしているのか、はたまた恫喝を加えようとしているのか、だろう…。

前の職場で似たようなことをしている人をみたことがあるからわ

かる。

「わかっている！だからこそ今日を狙ったんだ！」

「じゃあ、なんでユウカくんを人質に選んだ…？君の敵は何なんだ…？」

これによつて事情を話させようとしているのだろうが、彼女は面からはみ出ている耳を赤くする…。

「バアン！バアン！」

「ぐちゃぐちゃとうるさいっ！」

怒りの込められた発砲音が店内へと響き、人質たちに恐怖を煽る…。

憤怒の彼女が放った言葉を聞く限り、籠城犯はある種、自己主張が強そうだった。

そのような場合『自分が思うからそうなんだ』という考えを持っているものが多く、詐欺にはなかなか掛かりにくい。

と、またも前職の同業者が言っていたことの復唱である…。

「とにかくそれを早く足元に置け…。さもないと…。」

「わかったわかった。殺すんだろ」

人質への危険を伴わないよう、籠城犯の要求に答えるため、水原くんは渋々、胸につけられたブランドアクセサリーを千切る。

「その代わり、足で踏ませてもらつていい？これないと死んじゃうんで」

「いいから早くしろ…。」

水原くんが聞くと、籠城犯は了承、そして再度命令をする。

「どうも…」

それを、水原くんは地面に落とすと共に、爪先で三角形の角度の広い場所を踏むと、彼女は満足げにフンと鼻で息を吐いた。

焦げ臭い地面に落ちてても、そのアクセサリーは日光に照らされてキラリと光っている…。

自分の武器を失ったとしても、水原くんは動じることなく、ただただじつと籠城犯の行く末を見ていた…。

その一方、カウンターの裏で、捕らえられている客の脅えた声が、微



妙に聞こえるのが少し辛い…。

突然、銃を持った人が現れて、スプリミナルを呼ぶためだけに爆発までさせたのだから、きつと怖いに決まっている…。

「どうやら…特異点のこと、よく知ってるみたいだね…」

助けねばと緊迫している中、僕の隣で、犯人と水原くんの会話を聞いていたあおいちゃんが、おもむろに呟いた。

「よく知ってる…って、どういうこと…?」

「特異点は、ルストロニウムっていう物質で作られた物質がないと、全身が結晶に包まれて死んじゃうの」

なるほど…。

確かに、結晶から繊維、食用にまでできる万能原子、ルストロニウムというヘトロモーガン由来の物があつたと言うのは、中学くらいの時に科学の授業で習っていた記憶がある。

しかし、まさか特異点にとって、そんな便利な効果があつただなんてしらなかった…。

「てか…だから君も持ってたんじゃないの…?」

「いやあ…僕は水原くんに貰っただけで…助かる以外は、なにかわかんなくて…」

「もう…あのデコチビめ……」

説明不足の彼に向けて、あおいちゃんは小声で舌打ちする。

本当…仲が良いのか悪いのか…。

とにかく、このルストロニウムという原子が、どれ程に偉大で栄光的なものかがよくわかった…。

だからこそ、水原くんは足で踏んでるということか…。

「でも、あの人はまだ知識不足みたいだね…」

「知識不足…?」

その言葉に該当する僕が首をかしげると、彼女は膝を立てて自分の履いているソックスを見せた。

よく見てみると、その靴下にはダイヤ型のワンポイントがある…。

「これとか、テツヤ君が今持つてるキーホルダーのことを『エンブレ

ム』って言うんだけどね。これもルストロニウムで出来てるのはもちろんなんだけど、ここから出た服とか武器とかも、全部ルストロニウムなの。だから、トランス後の場合には、エンブレムを手放しても、結晶化で死ぬことはほとんどないんだよ」

彼女はワンポイントに指をさしながら、自分の持つキーホルダーの本質を解説してくれた。

「そうだったのか…」

そう言えば、このキーホルダーについても、彼から全く知らされてなかった…。

エンブレム…。

どういう原理構造かは知らないけど、これが彼らの肝になってるわけだな…。

「じゃあ…あの人はそれを知らないってこと…?」

「かもね…。スプリミナルの情報開示は極力に狭められてるから、きつとインターネットのガセネタに踊らされたのかな…」

あおいちゃんの推測には何となく納得がいく…。

確かに、スプリミナルという存在に至っては、僕も全く知らなかった。

正直、自分は武装警察で事足りてると思ってた。

だが、確かにそれにしては全盛期よりも犯罪率が抑えられ過ぎかもしれないと思っただし、SNSとかでも陰謀説が浮上していた。

その中で、たまたまスプリミナルの存在を知って、あることないこと書いて、それに騙される奴がいるのだろう…。

それが今、銃を握りしめている彼女だったということか…。

「てか…君、なにが目的?僕らになにを求める…?」

ふと、水原さんの口から出たその質問が気になり、カウンターに隠れた僕らは、また聞き耳を立てはじめた。

「…リージエン国家の至上…。そのためには…あなた達を淘汰しなければならぬ…私はそう思っているからだ」

リージエンの至上か…。

確かに、たまに街頭ビジョンや通りすぎる電気屋のテレビでみる

ニュースで見るな…。

「君は人間なのに…?」

「リージエンは憚られ過ぎた!リージエンはもつとこの国を収めなければならぬ!この世界はそのためにある!」

声を荒げる彼女の言葉に、どこか強く、そして偏ったリージエンへの愛が感じられる…。

この世界では、それぞれの同族至上主義が存在しているらしいが、まれに団体を作るほどではないけれど『別種族を至上する思想』というのも存在している。

これは多分、人間のなかにある、他人を思うという性善説によるものかもしれない。

誰かを助けたいという思想が暴走すると、よからぬ事態へと走ってしまう、それが外国人だけではなくリージエンのような別種族にも値されているようだ…。

「もうリージエンと人間は同等なのに…か?」

僕も気になっていたことを、水原くんが切り込んだ途端、彼女は床をガン!と音を立てて踏みつける。

「全く同等じゃない!リージエンが虐げられてきた事実を…:風化してはならないんだっ!」

バアン!バアン!

怒りや興奮と共に放たれた二発の弾丸は、天井の柱にめり込み、何人もの人質が「ヒツ…」と脅えた声をあげていた。

感情論に踊らされている相手を説得するのは、もう無駄なのかもしれない…。

「興奮状態だ…。これじゃ…:ゆっくり奇襲しようとしても、警戒心も高そうだし、なかなか捕まえないかもね…」

まさに、あおいちゃんの言う通りだ。

籠城犯はそれほどにリージエンのことを考えている上、人間を守ってくれこの組織を恨んでいる。

リージエンのためならばと思いきすぎて、最早、命すらも擲ちなげそうな勢いだ…。

「ど…どうすれば…」

自分のエンブレムのなかに装備している弾丸で、人を攻撃する力や度胸など無い僕には、今は、この小さな女の子に頼るしか方法はなかった。

こんな頼りの無さすぎる男で、本当に申し訳無いけど……。

「オトリ作戦…フエイズ2かな……」

「フエ…フエイズ…2?…」

おもむろに口に出したその言葉と共に、あおいちゃんはクラウドチングスタートの構えへと体制を変えると、履いている真っ黒いソックスは、青と緑の中間のような色でぼんやりと光出す…。

「アーツアンフォルド特具武装」

その言葉と共に、彼女のソックスは光と共に形を変える。

それは、水原くんの持っていたあの剣のように禍々しい結晶の形をベースとし、まるでロボットアニメや機械系漫画などでよく見る、レッグアーマーのような形へと変化した。

「うお…ブーツ…?…」

太ももの半分を覆い、影の中でも宝石的な美しさを醸し出すブーツ状アーマー。

それに驚く僕に向けて、彼女はニツと広角を上げる。

「見てて…私の特異で、あの人の動きを止めるからっ!」

「え…っ!?!」

あおいちゃんは自信をもってそう宣言すると、ブーツにそっと触れる。

「アタシ・グラビティ…マイナス…ツ!」

「うわっ!」

その言葉を口に出した途端、彼女は跳ぶ。

その飛距離、まさに人間離れしている上、まるで宇宙空間にいるかのように、通常よりも長く長く宙に滞在している。

それはまさに、闇夜に浮かぶ月のように…。

「その籠城犯っ!もう悪さは許さないっ!覚悟っ!!」

フワフワと宙を浮かぶあおいちゃんは、まるで正義のヒーローとで

も言うかの如く、籠城犯に指をさして、高らかに宣言する。

でも、それ言っちゃったら奇襲じゃないんじや……。

「…っ！お前は！」

それに反応せざるを得ない籠城犯は、浮かんでいる彼女に銃を向ける。

「アタシ・グラビティ！プラス！」

その瞬間、彼女は自分の体に手を触れながら叫ぶと、ロングブーツの装甲が光り、そのまま籠城犯に向けて落ちていく。

その速度は普通に落ちるよりも早く、空気を切り裂くような感覚がこちらにも伝わってくるほどだ…。

グラビティ…重力操作…？

これが彼女の特異…ということか…。

「く…っ！」

籠城犯は諦めること無く、銃を二発撃つが、そのうちの一発が彼女の体を掠めて傷をつけただけだった。

「はあああつ！」

傷ついた頬から少量の血を流しつつも、彼女は片足を籠城犯に向ける。

所謂…ライダーキックと言うやつだろうか…。

「確保っ！」

間もなく、彼女の特技が決まる。

きつと、僕だけではなく誰もが勝機を悟ったと思う…。

「…ふふっ…」

それに該当するは、犯人も同じ…。

「…？」

彼女のからだだが、籠城犯の狐面に着弾する、あと数ミリの場所に到達した時、彼女は声を出して微笑んでいた。

「…っ！」

その瞬間、突然グンと地面に引っ張られるように、彼女の体制が崩れていく。

「あおいちゃんっ!？」

狐面の犯人がそつと避けると共に、あおいちゃんの身体はうつ伏せになって地面に打ち付けられてしまった。

「これ…は………」

反撃をしようと彼女はなんとか立ち上がろうとするが、体を少し動かすだけしかできず、混乱しているように見える。

「もしかして……ハイドニウムの弾丸が…!?!」

彼女が動けないその原因を水原くんは悟る。

ハイドニウムも、昔習ったことがある。

ルストロニウムを化学反応で形として生成する際、どうしても出してしまう産業廃棄物だ。

これ自体、地面に生めてしまえば、土となるだけだから、そこまで害はない筈だが…。

「そんな…販売が禁止されるはず…っ!」

「ミラーマフィアから調達した…。リージェンの至上のためだって交渉したら、快くOKしてくれたわ………」

二人の未知に立ちふさがるかのように、籠城犯は自信や嘲笑を言葉にのせながら、その出所を話す。

そう言えば確かに、ハイドニウムだけは販売禁止の部類に入っていた…。

どうせ、ごみを売っても一銭にもならないのは分かるのだが、それがなぜなのかはわからなかったが…。

「たしか知ってるわよお…?この弾丸に入ってる化学物質は、特異を調整してくれるルストロニウムとは違って”特異を消し去る”物質なんだって……?」

なんて思ってたなら、すぐくタイミングよくハイドニウムが何故弾丸に使われているのかの解説が聞けた。

なるほど、特異点にとつてハイドニウムは危険物質だったのか…。  
というかこの人…少し調子にのりがちな面があるのか、色々喋りがちな…。

「この…っ!」

このあおいちゃんのピンチに、水原くんは素早く爪先でアクセサ

リーを蹴って手に取り、武器を出そうとする。

しかし、籠城犯はそれを見逃さず、彼が迫ってこようとするその瞬間に銃口を向ける。

「動かないことね。これがハイドニウムだったらどうするの…？」

籠城犯のその言葉ひとつで、水原くんは、下手に動けなくなってしまう。

確かに…全身の力が抜けてしまうほどの劇物が入っている弾丸は、昨日特異点になった僕でも、食らいたくはない。

彼女の思考は、何枚も上手だったのだ…。

「やれやれ…ナンバー10の重力娘まで潜んでたなんて…さすがスプリミナル…隠密行動もお手のものね…」

籠城犯は鼻で彼らを嗤い、二人は悔しげに彼女を眺める。

「く…っ！ー私は…まだ…っ！ー」

それでも諦めないあおいちゃんは、歯を食い縛りながら立ち上がり、体がプルプルと震えては、ボタンと地面に引き付けられてしまう。

まるで、磁石によって地面にくっつけられているかのように…。

「ツハツハツハツハ！愉快ねえ…あんなに強いと思われるいたスプリミナルが…こんなに弱いなんて…っ！ー」

勝機を悟り、高らかに笑うその声が、天井に空回りして、人質達に絶望を与える…。

頼みの綱は消えた。

もしも他のメンバーが来ても、二人を出汁に使われるかもしれない…。

だとしたら、この状況で動けるのは僕だけだった…。

「どうすればいいんだよ…僕は…」

急に逮捕メンバーに加えられた僕は頭を抱えていた。

特異点になって2日、まだ生まれたばかりの赤ん坊ほどの身の丈しか知らない。

正直、ここから逃げ出してしまいたい。

スプリミナルなんか入るわけないし、こんな僕がここで役に立てる

わけがない…。

けれど、今ここでやらなければ、この背後にいる人たちはどうなる？

そんな言葉が、僕の頭の中でポンとわき出た。

僕が戦わなければ、犠牲は増えてしまうかもしれない。

僕が僕なりにでも戦わなければ、僕に取り憑いてしまった背後霊達に、また延々と後悔を喰らわされてしまう…。

そうだ、僕は行かねばならない。

「考えろ…：僕ができること…：もしも僕がアオイちゃんだったら…：僕になんて言う…？」

未だ足りない頭で、改めて全てを整理しろ。

僕の背後にはリーゼン人間問わず、老若男女が約9人程度だったはずだから、まずは彼等の安全を保障しないといけない。

僕はトランスと言うものをしていて、その影響か身体が少し軽い。

特異は自分が受ける攻撃だけを無効化する。

このキーホルダー…：エンブレムというらしいが、そこから拳銃が出る。

しかし、相手は爆弾を持つてる可能性があるし、もしも先立ってハイドニウムと言うやつを撃たれたら、きつと僕もあおいちゃんみたいになる。

それに籠城犯は、間接的にあおいちゃんを盾にしているから、水原くんはなかなか手を出せない。

「とつととそれ、地面に置きなさい。なにかされたら困る…：」

「ツチ…：」

その上、たつた今、籠城犯からの命令によって、水原くんの手からエンブレムが離されてしまった。

そのため、すぐに戦える人材は僕だけ…。

「…：ちよつと待て…：」

確かに、彼は今、武器を持っていない。

だが、彼には確か”水を弾丸にして発射する技”のようなものがあったか…？



なら、なぜ不意打ちで攻撃をしない？

人質になにかあったら困るため？

確かにそうでもあるが、彼の腕なら、人質に当てないように角度を変えられることも出来なくはないはず…。

「そうか……！」

推測ではあるが、彼はきつと、僕という存在を公にしたくないのかもしれない。

それに、僕がやるべきことを為してくれると、信じてくれているから…。

そんなわけではないかもしれないけど、今はそう思ってみることにする。

それなら、この状況で僕がすべき仕事は…。

## 2—3 『少女Tとコーヒー爆弾』

火薬や焦げの匂いが取れてきた空間の中、僕はカウンター出口からそつと現在の状況を見る。

「こんなので済むなんて…スプリミナルもこれでおしまいかしら…」  
彼女は二人を煽り、きつと仮面の奥で笑みを浮かべているだろう。  
言葉から察する上、それ程に今の彼女は勝機を感じていると思う。  
「そんなこと…ない…っ！」

それでもと声をあげるのは、床に這いつくばるしかない、蒼い瞳の少女…。

「あんたなんか…カドヤや…リユウセンくんや…サトナカさんが…なんとかしてくれる…っ！私はそう信じてる！」

ダアン！

言葉で対抗しようとしている彼女を黙らせるためか、籠城犯の持つ拳銃から放たれた弾丸が、彼女の顔の真横に着弾する。

「黙りなさい。口答えしたら今度は当てる…」

ドスを効かせて籠城犯はあおいちゃんに警告をする。

普通、ここまで顔面に近い場所へ発砲されたら、恐怖で動けなくなるだろう…。

けれど、今の彼女は恐れよりも悔しさが勝っているようで、床にしがみつきのながらも、歯を食い縛り、籠城犯をひたすらに睨んでいた…。

「なによ…その目は…」

怒りと悔しき、二人のその眼光が感情を乗せながら交わっている。

その状況こそ、今、僕に出来ることをするには最適だ…。

「…皆さん、こちらです…」

彼女が気を取られている隙に、僕はカウンター出口からそつと顔を出し、人質になっている人々に声をかけた。

すると、僕を見つけた一人の老人が、同じく捕まっている人々に顔で合図を送ると、全員が僕の存在を認知し、安堵の表情を浮かべる。

この恐怖から抜け出せる光を見つけたことで、今にもはしやぎそう

な雰囲気をしていたが、僕は彼らに向けて人差し指を立ててサインを送る。

「静かに！ ゆっくり…手前から一人ずつ来て下さい…。あの人に気付かれないように…」

僕はそう言うのだが、そんなことよりも、早くここから助けたいと言わんばかりに、数名の眼光は悲観を醸し出している。

その視線に、僕はふと、どこかの漫画で見た事を思い出した。

災害や第三者による恐怖に身を乗っ取られた者は、とにかく助かりたいという願いから混乱をしている。

だから、これからどうすればいいかの判断を聞くよりも前に、言ってほしい言葉があるのだと…。

だから、僕はそつとその言葉を彼らに、投げ掛ける。

「大…丈夫です…っ！ 絶対に…逃げ出させるから…！」

言葉と言うのは、ビックリする程大きな力がある。

こんな元詐欺師の大丈夫でも、彼らは心から安堵と信頼を僕に向けてくれるのだから…。

「ゆっくり…」

僕の言葉と共に、手前にいた老人が、音を立てぬようにゆっくりと僕に寄ってくる。

このまま彼らを全員、勝手口まで移動することができれば、水原くんとあおいちゃんが動ける。

遠目から僕らの行動を確認した水原くんは、僕の考えを素早く汲み取り、僕に向けて「こつちはまかせろ」とアイコンタクトを送った。

「あのさあ…リージエン至上って言うけど…そんなにリージエンが偉いのかね…？ 昔にすがつてるとかなんとか言ってるの、まるで外国が日本にいちやもんつけてるみたいじゃん…。」

一人ずつ避難している状況をみられぬように、水原くんは籠城犯の思念を逆撫するように、静かに暴言を投げつける。

「それに…恩義がなに？ 受けた屈辱？ それは人間だって同じだろう？ リージエンの進行さえなければ、人間は人間だけの世界で未来を歩めた。君が恨むようなスプリミナルなんて作らなくてもよかった。そ

んな根本を覆せると思ってるの？それ以上に君はなにを求めてるわけ？」

「だまりなさい……」

水原くんの計画的な煽りに、籠城犯はどうやら引掛かったようだ…。

「…君の言葉はまるで五月に飛ぶ蠅のようだな。ただ一つの達成のために、中身のない言葉と武器…。まさに害虫だな…。お前の威嚇した爆弾と同じように、叫んで迷惑かけて消える。それで満足か？」

一人、また一人とゆつくりと逃げ出している中、籠城犯の怒りがふつふつと沸き立っているのがわかる…。

それに怖がる者も数名いるが、それを表すための言葉や表現は、死の危機が隣り合わせなこの数分間だけは、我慢しなくてはならない…。

少しずつ少しずつ避難していくにつれて、一つ、また一つと水原くんの言葉で、籠城犯の怒りの蝟燭に火がともされていく…。

「それに…リージエンなんて……」

「だまれだまれだまれえ!!」

ダアン！ダアン！

灯された怒りの火がついに業火へと達したとき、音を立てて放たれた二発の弾丸が水原くんの頬を掠め、店の柱に突き刺さる。

「私は…私はリージエンに何度も救われた…その恩を返すんだ…私…はあー！」

喉が張り裂けそうなほどに叫ぶ籠城犯だが、水原くんはそれに全く動じていないようで、ただニヒルに笑みを浮かべている。

「ほら怒った…。だから嫌なんだよ…リージエンなんかを至上しようとするような馬鹿どもは…」

「だまれだまれだまれえええええつ!!」

怒りが頂点に達した籠城犯は、針のような数々の罵詈雑言で煽り続ける彼に向け、何度も何度も弾丸を放つ。

だが、水原くんはギリギリのところまで避けるため、それが当たることはない。

だが、籠城犯の姿に怯え続け、最後まで残ってしまったのは、髪を二つくりにした一人の女の子だった…。

速さを重視して、手前から避難誘導してしまったがために、恐怖に支配されかけている子供が最後になってしまったのは申し訳ない…。

「大丈夫…：もう少しだよ…」

だが、今の僕に出来ることは、確証ない言葉をかけてでも、この子を傷一つなく、無事に家に帰してあげることだ…。

「君で最後…：慎重に…：ゆっくり…」

僕の言葉を信じ、女の子は今にも嗚咽を漏らしそうな表情のまま、ゆっくりゆっくりお尻を滑らせながら、安心させるために微笑む僕に近づいてくる…。

「当たらないねえ…？ハイドニウム使いすぎてんじやないの…？もしかして…：ハイドニウムはあの一発だけとかあ…？」

「うるさいっ!!」

未だ煽りつづける水原くと、バンバンと銃を放ち続ける犯人。

銃声と口論に怯えつつも、僕を信じて少しずつ逃避を図る女の子に、僕は精一杯手を伸ばした…。

あと少し…：あともう少し…。

大きな音を立てぬように、近づいてくること、後数センチ…。

もう少して彼女は助かるだろう。

この後は水原くんがなんとかして…。

ガチャン!

「…っ!」

そんな思いは裏腹、突然机の上からコーヒーカップが落下し、大きな音がこの店に響いた。

「誰だっ!」

音に気づいた籠城犯が、女の子に向けて銃口を向ける。

僕か女の子が急いでしまったが故、無意識にカウンターを揺らしてしまったのかもしれない…。

「ヤバ…!」

企みを知られた水原くと僕は、偶然に言葉を揃え、この状況の危

機を重く見る。

「子供……あんた……他のやつらはどうしたあつ！」

興奮している彼女は、僕が見えてはいないようで、逃げようとしていた女の子に、ずんずんと迫っていく。

「答えろおー！」

獲物を見つけた獣のように大声を浴びせる籠城犯に怯え、また大粒の涙を流しながら、女の子は首を横に振る。

それに、さらに怒ったのか、籠城犯は拳銃の弾丸をリロードし、彼女の頭に銃口を向ける。

「まずい……っ！」

この瞬間の僕は必死で、なんの考えもなく、そこから飛び出してしまった。

役に立てるわけがないお前が何故飛び出す？なんて言われそうだが、その答えは簡単だ。

僕が、お人好しな性格だからだ。

女の子が殺されようとされるなら、僕はその子を救わないといけな

い。

「テツヤくん！」

あおいちゃんの掛け声と同時に、その引き金は引かれようとした。その間、多分約2秒以下。

カウンターから出た僕は、命を刈り取られそうな女の子を、思い切り押し倒す。

バアンツ！

すると、発砲された弾丸はその子を貫通せず、僕の心臓部分を貫いた。

だが、それは僕の身体を傷つけるはずがなく、弾丸は嫌悪感と共に、床へと着弾した。

「……っ……そんな……バカな！」

昨日はあんなに嫌だったこの能力が、今では心強くさえも感じてしまっている……。

「君、大丈夫…？」

能力を發揮しながら、僕は女の子に声をかけると、彼女は少し呆気に取られたような顔をしながらも、首を縦に振る。

見る限り、なんの怪我也なさそうで、僕は心から安心した。

「急いで逃げて！お母さんのところまで！」

僕が指示をすると、女の子はまた一つ頷いてから立ち上がり、僕にそっと「ありがとう」とだけ言って、走って逃げていった…。

よかった…これで僕の仕事は、一応終わりだ…。

「悪いね…：僕はどうかやら、無効化の特異点みたいでね…」

立ち上がりながらニヤリと微笑んでカッコつけるが、心臓はバクンバクンと聞いたことの無いほど大きな音を立てている。

正直、無効化とはいえ心臓を弾丸で撃たれるなんて怖すぎるからな…。

「そんな…：そんな能力あっ！」

「ありなんだよ…ユウキくんならねっ！」

僕の能力を知った籠城犯が混乱に捕らわれている内、水原くんはパーカー飾りのエンブレムをまた拾い上げると共に、それは双剣を形作る。

「しまった…！」

油断した彼女は、僕から水原くんへと、銃口を向けようとする。

「ユウ・グラビティ…プラス！」

しかし、いつの間にか籠城犯の近くに移動していたあおいちゃんが、彼女の身体を触りながら叫ぶ。

すると突然、籠城犯の身体が銃を持つ方の腕から、ガクンと地面に落ちた。

「お前…！」

「引っ掛かったよね…。ハイドニウムの弾丸は撃たれたその瞬間の数分までしか効果はない！一生無効化だって騙されちゃった？」

彼女はニヤリと笑いながら、自信の特異を発動させ、それに引っ掛かった籠城犯は、あおいちゃんを睨みながらも、なんとかその重たい腕を上げようとする。

まさか籠城犯を騙していたとは…さすがプロと言ったところか…。

「源水放出！」

そう思っていた刹那、水原くんの着ているパーカーの背に描かれた丸のデザインから、大量の水が噴出する。

フリスシュートルーム  
「激蒼流！」

そのまま彼は、激流に身を任せながら、素早く剣で銃を切り裂き、そのまま彼女の身体を蹴り飛ばした。

「ぐうっ…！」

そのキックを諸に受けてしまった籠城犯は、水に滴りながらも壁に叩きつけられる。

「く…くそ…っ！」

しかし、それでも諦めようとしないう彼女は、痛みに耐えながらナイフを取り出して立ち上がり、彼らに対抗しようとする。

しかし、それを見逃さないのがスプリミナルの重力娘(?)だ。

「アタシグラビティ・プラス！」

あおいちゃんは即座に犯人の懐には入り、掌の付け根を殴ってナイフを落として、そのまま腕を挿んで背中に回し、重力操作で彼女を床に押し倒した。

その手付きはあまりにも鮮やかで、こうやって説明がなんとかできる自分がすごいと思うくらいだ…。

「捕った！爆発テロで一時確保しますっ！」

背中に自信の体重と重力の特異を乗せながら、あおいちゃんが籠城犯に通告すると、彼女は抵抗する力が抜けたように床に頬を付けて項垂れてしまった。

すると、あおいちゃんは彼女の身体をペタペタと触りはじめる。

「なにを…？」

「多分、これ以上なにかを隠していないかの確認だろうね」

なるほど…水原くんの言うとおり、爆発物を隠していないか調べないと危険だ…。

あおいちゃんは、全身を触り終えたところで、僕らに向けて腕で大きくバツのマークを出した。



「これ以上の爆発物的なものは無し…：か…：」

水原くんが武器をパーカー飾りに変化させながら言うと、僕はようやく胸を撫で下ろせた。

「よかったあ…：」

正直、昨日の騒動と同じか、下手すればそれ以上に感じてしまうほど緊張した…。

とにかく、誰も傷つけずに逃がすことができてよかった…。

こんなド素人でも、役に立てることはあるのかと思うと、また頑張れそうな気もする。

焦げた匂いが消えたこの場所で、僕はそんなことを思った。

「ナイス判断、ユウキくん」

振り返ると、水原くんがニヒルに笑いながら、僕にそういった。

「あ…：ありがとう…：」

年下だが、彼に誉められると、何か照れるものがある。

恋愛感情的なアレではないけれど、どこか先輩のような暖かさを彼から感じるのだ…。

圧倒的な年下だけだね。

とにかく…：やつとこの事件は解決したわけだ。

…：けれど、少し気になることがある。

あの爆発は…：結局なんだったんだろう…：？

威嚇するとしても…：派手すぎる気がするし、やっぱり少し気になることが…。

カチツ！

そう考えていた刹那、突然その軽い音がこの空間に響いた。

「なにか聞こえた…：？」

首をかしげるあおいちゃんだが、その下で彼女の口からフツと吐息が漏れる。

「爆弾…：だよ…：」

すると、籠城犯の被っている狐の仮面の中から、長方形の小さな端末が床に転がった。

それは、一発で爆弾のスイッチだとわかるほどの、小さくて重厚的な端末で、それを見た僕らの背筋は冷却スプレーを大量にかけられたかのように一瞬で冷えきった。

「っ！あんだー！」

「私の思いどおりにならないなら……こんな場所……あなた達もろとも碎け散ってしまえっ！」

目的達成に至らなかったが為か、遂に狂ってしまった籠城犯はそう叫び、真の勝機を悟って笑う。

その態度に怒るあおいちゃんは彼女の顔を地面にゴツンと押し付けた。

「ば……爆弾……爆弾……そんな……」

当たり前だが、こんな状況に陥ったことのない僕は、まるで突然警報が鳴り響いたかのようにパニック状態になっていた。

「どこに隠してたんだそんなのっ！くそ！」

「解除！解除！」

爆弾というパワーワードに、さすがの水原くとあおいちゃんも冷静さを欠き、爆弾を探し始める。

「無駄だ！一度起動すれば、爆発までは止まらないっ！爆発まで約二分……私の勝ちだああああっ!!」

爆弾を仕掛けた張本人は、打ち付けられた衝撃で仮面がずれ、笑っている口だけが露出していた。

僕らは慌てて爆弾と思わしきものを探すが、一分間必死に探してみても、どこにもそんな物はない……。

「もーっ！こうなったら……どこにあるか吐くまで、この人の体内を全部調べあげるしかあ……」

全く見つからないからか、あおいちゃんはついにやけになり始めてきている。

「そんなもの探してる途中に爆発するし、こいつ自己犠牲できそうな性格に見えないから多分無い！」

だが、籠城犯の服を掴む彼女を、水原くんが止めつつ、引き続き爆発物探しを続けている。

ちなみに、ふざけているように聞こえるが、確かに体内に危険物を仕込んで犯行をするケースは昔見たテレビで聞いたことがあるから利には叶っている。

「どうする…どこにある…？」

混沌の中で、自分もひたすらにそれを探している。

コーヒーカップが入った棚の中、カウンターの下の僅かに空いた隙間、積み重ねられている空きダンボールの中…。

爆発まではせいぜいあと一分なのに、何も見つからない。

もはや過呼吸になりそうなパニック状態だ。

このまま逃げ出した方がいいのではないか？

なんで逃げないのか？

人殺しがこんなことをして罪償いのつもりか？

取り憑いていた背後霊が、また声を揃えて僕にその言葉を投げつける。

それでも、やらないと行けない。

冷静になれ僕よ。

今は偽善という言葉を押し殺せ。

周りをもっと見回せ。

他にはどこになにがあつて、どこに仕掛けられる？

救助の際にカウンター裏を通っていたが、目立つ場所には爆発物らしきものはなかった。

棚や机の下はもう二人が見てしまっているし、水原くんの言葉通りなら、犯人の身体の中にはきつとない。

仮面の裏に仕込めるようなものでも絶対に無いだろうし…。

「ん…？あいつに自己犠牲をする度胸はない…？」

そう言えば、聞き逃しそうになっていたが、水原くんが籠城犯の性格を即座に捉えていた。

自分は自己犠牲はできないと言う視点を、少し変えて考えてみた…。

自己犠牲ができないのであれば”他者に犠牲を押し付けること”ならできるとは思わない。

「…っ！」

それを盾に隠せる場所といえば…。

「失礼！」

それに気づいた僕は、縛られていた人質の女の子の縄をほどき、そのまま上着のスウェットを捲る。

「あつた…っ！」

すると、そこにはキャミソール越しの胴体に、グルグルに巻かれている幾つものダイナマイトと、残り時間を示すタイマーがつけられていた。

籠城犯は、万が一逃走することとなった場合には、この子を捨てて、この店ごと爆発しようとも考えていたに違いない…。

「そんな…まさかユウカちゃんに巻き付いてるなんて…っ！」

あおいちゃんが驚愕する傍ら、人質の女の子は猿轡代わりの布を噛みながら、悲観の目で僕を見ていた。

「やばいな…あと約50秒…。少ない時間で取ってからどうやって爆破させないようにするかだ…。」

水原くんは少し考えはしているが、その一秒が僕らにとっては命取りだ。

体だけが反応しているからだと思いたいが、二人はその場から退避する体制にまで入ろうとしている。

確かに、爆弾を解くよりも、ここでこの子を置いて逃げ出した方が、直接的被害も比較的少ないのかもしれない。

この女の子を見捨てる覚悟が、もうこのプロ二人には出来ているんだ…。

「これなら…。」

だけど…素人の僕は諦めたくない。

一つの打開方法を思い付く僕は、ダイナマイトが繋がれたその糸を噛む。

「何してるんだ!？」

「この子を！助けないとー！」

焦る水原くんの問いに応えると、固く結ばれていた糸が一本噛み千

切れ、彼女を縛るもう一本の紐も、口に咥えて引っ張る。

「取ってからどうする気だ!? もう30秒きつたぞ!」

彼の狼狽の言葉傍ら、二本目のヒモが一本目よりも簡単にブツンと千切れる。

「…っ!とれた!」

この後にどうするかは、前ほど思い付いている。

爆発をできる限り押さえ込むには、なにか抑えつけるものが必要だと、昔見た実検検証のテレビ番組で言っていた覚えがある。

その中でもこの数十秒の間で用意できるものを、自分なりに考えてみると、やはり人体が一番手っ取り早いのではないかと思っていたところだ。

だが、一人の命を犠牲にして、それを抑え込むにはリスクがあまりすぎる。

「皆…逃げて!…ここは僕がなんとかするから!」

けれど、自分ならそのリスクは少ない…。

「なんとかって…:…君、もしかして特異で押さえ込もうと!」

水原くんの言うとおり、自分の特異を使えば、この爆発の被害をきつと最小限に抑えられるから…。

「早く…っ!…これが爆発する前につ!」

噛みきつた爆弾を腹に抱えて彼らに逃走を促すが、ここに残っている四人は、ここからなかなか逃げ出そうとはしない…。

「ダメだよ…:特異点になったからって、まだテツヤくんの特異の本質がわかってな…!」

あおいちゃんが、僕の事を止めてくれる言葉を言ってくれただけでも嬉しかった。

「いいからっ!いけえ!」

だが、だからこそ僕は彼女らを逃がさねばならない。

叫ぶ僕に驚いた二人を置いて、僕はこの店の角で、爆弾抱えてしやがみこんだ。

特異の本質がどうかとか、そう言うのは昨日の水原くんを見て分かっている。



topやStartの文字があった。

籠城犯のはつたりか…？

いや、ならばなぜ籠城犯は逃げ出さずにそこにいる…？

パチパチパチパチ：

すると突然、カフェの奥にある扉が開き、そこから拍手をする音が聞こえてきた…。

「いやあ…良いものを見せてもらったよ。ユウキ テツヤくん」

その部屋から出てきたのは、青色の上着と灰の千鳥格子のストールを巻いた、老け顔の男性…。

どこか引き込まれそうな彼の目を見ると、まるで師走に降る驟雨のような冷たい物と同時にそれに負けずに灯る小さな焚き火のような暖かい物を感じる…。

「…あなたは…？」

初対面の僕が彼に問うと、驚くあおいちゃんが急いで間に割って入る。

「サトナカさん！」

「サ…サトナカ…さん？」

彼女がその名を知っている限り、彼もまたなにかスプリミナルの関係者なのだろうか？

まあ、例えそうだったとしても今さら驚きはしないが…。

「ふう……あー痛かったあ…」

すると、次には籠城犯であった女性が、黒い狐面を脱ぎ、整った丸く綺麗な顔を露出させると、ポケットからメガネを取り出して着けた。

「えっ！カ…カナエさん!?なんで!？」

「ごめんね、騙しちゃって」

驚くあおいちゃんに向けて、カナエという女性は手を合わせて眉をしかめながら微笑む。

これにはさすがに驚かざるを得ないだろう。

あんなに暴言やめちやくちやな信仰の言葉を吐いていたのに、まさ

か彼女と知人だったとは…。

というか…もしかしたら、彼女もスプリミナルのメンバー…？

「まっ、一芝居うったってことだよ。ユウキくんのを力量を図るためにね」

「ま…まさかミズハラくんも…グルで…？」

僕は籠城犯役のカナエへの驚きが覚めやまないまま水原くんに聞くと、彼は笑みを浮かべながら僕に向けて指を指す。

「正解。まあ、カナエくんには、ちゃんと手加減したけどね」

完っ全に騙された…。

あんなに臨場感溢れる交渉術やキツクを決めていて、それを疑えと言われる方が無理だよな…。

「で…でも、人質は!?常連さんばかりだったのに!?!」

同じく騙されていたあおいちゃんが、声をあげて彼らに聞く。

「言ったとおり、常連さんが快く手伝ってくれた。今度食事代無料にする代わりに」

「でもでも…この水溜まりは!?!」

「臨場感やリアリティがある方がいいだろう?あえてだよ」

「でもでもでも!この爆発は!?!」

「あ…:…:ごめんなさい…:それ、私の異能が誤爆しちゃって…:」

次々に気になってきたことを質問してくれるあおいちゃんと、それに適当する答えを返してくれる三人の社員。

なんとも仕掛人側の用意周到さを感じる…。

というか、人質だった子もスプリミナルの一人だったんだな…。

「まあ、爆発はさすがにカナエと私も計算外だったよ」

「いやあく…:まさか、手袋外れたらこんな爆発するだなんて知らなかったからさあ…:」

「(…:…:…:ごめんなさい!…:こんなことしちゃって!」

サトナカさんとカナエさんが、笑いながら会話を交わす中、人質だった女の子が慌てて頭を下げる。

「大丈夫大丈夫。私が認知してなかったのが悪いんだし、これくらいならちゃんと治せるから」



カナエさんは優しく活発な微笑みを浮かべながら、彼女を安堵させるように言葉を並べる。

あんなにむやみやたらに銃を撃つたり、怒ったりしていた時とは大違いだ…。

彼女には俳優並みの演技力がありそうだな…。

そんなことを思っている傍ら、あおいちゃんの顔がいつの間にか真っ赤になっているのに気づく。

「カドヤー！なんで言ってくれないの！カナエさんの上に乗っちゃったじゃん！」

その刹那、彼女はこれまでの行いを恥じらいながら、水原くんには八つ当たりをする

そりゃあ…親しい人に思い切り重力操作をかましてたら、申し訳なさで潰されそうになるよね…。

「だって…アオイって嘘苦手だろ？途中でやめて絶対に言うと思っただよ」

「それに、アオイちゃんはなかなかおしゃべりな一面あるしね〜」

「その上、よく突っ走ってしまうからねえ…残念ながらそういうことさ」

しかし、彼女の性格の核心をついているであろう、心ある様々な口撃が、彼女の胸にぐさりぐせりと突き刺さっていく。

「グフウー…そんな目で見られてたなんて…事実だけ…」

口撃を受けてしまった彼女は、苦しそうに胸を抑えながら、バタリと倒れてしまった。

ここまで言い当てられたことが余程ショックだったんだろうな…。

「あ…あの…」

と、そんなコメディ漫画のような空間の中、空気になりつつあった僕は、ようやく手を上げて存在を表す。

「おっと、すまない。とにかく、こういうことだから、騙してごめんね。ユウキ テツヤくん」

僕に気づいてくれたサトナカさんは微笑みながら謝罪をする。

「い…いえ…大丈夫です…」

自分の性格もあるだろうが、やはり、彼の笑みには尻込みしてしまう程の、恐怖のような尊敬の念のような、そんな決して下に見てはいけないなにか、が含まれているな…。

「とうか…あなたは…スプリミナルの人…ですか？」

「ああそうか…君と私は初対面だったね…」

控えめに僕が問うと、彼は少し身なりを整えながら、自己紹介を始める。

「私の名前はサトナカ トオリ。しがな画師であり、このスプリミナル本部の最高責任者さ……」

郷仲という人間の、微笑みを浮かべながら伝うその言葉には、驚愕しざるを得ない。

「最高責任者……とうかとは……あなたが一番偉い方っ!？」

確かに、目の奥に感じる何かしらの感情とか、偉そうに出てきた感じとか、そういう”なにか大物感”と言うのは出ていたけれど、こんなに特殊組織のボスだと実感しない人は始めてだ…。

正直、初めは街中にいるちよつとすごい人くらいにしか思えなかったし、自分の想像していたのは、顔に傷があったり、筋肉ムキムキだったり、そんな感じだったんだよね…。

「まあ、あまり信じてもらえてなさそうだけど、そういうことさ」

なんか自分が心のなかで思っていた言葉を感じられた気がする…。

「そしてなにより、おめでどう」

彼がそう言うと、周りにいる4人も揃えて拍手をした。

あおいちゃんだけは状況を見て、少し遅れての拍手だったけど…。

「君は、入社試験に合格した。自分自身の特異をしっかりと理解した上で、人を守ろうとする行動ができる。それは、スプリミナルにとっては最低条件だからね」

「最低…条件…?」

スプリミナルのボスから伝えられた、この盛大すぎるに値するドツキリの真意を聞き、僕の頭の上には、沢山のはてなマークが浮かぶ。

自分の特異を知りたいというのはまだ分かるのだが…入社試験とは…?」

「なにがなんだか分かんないって顔してるね」

水原くんも、郷仲さん同様に僕の心を読んでいるかのように言葉を  
伝う。

本当になんなんだこの二人は…。

「じゃ、続きは上でお話ししようか」

見かねたカナエさんがそう言うと、スプリミナルである彼らは、奥  
の部屋へと足を向ける。

「ようこそ、Cafeフェイバリット兼、スプリミナルの本拠地へ」

社長、郷仲凍利。

彼の言葉と共に、僕はその現実の中の不思議な空間に誘われる…。

新たな出会いは、新たな道を作る。

それが吉か凶か、それは塞翁が馬、誰にとつても分からない。

怖さと優しさの両方を持つ、普通っぽい一人の男とのこの出会い、

僕はせめて末以上ではあつて欲しいと思つた…。

To be continue…

### 3—1 『自己否定な僕と社長のS』

なにか懐かしい匂いがする…。

原因がわからないから、言葉で現せられないその香りに、僕は昔通っていた学校を思い出しながら、エレベーターを降りた。

ほとんど口外されていない存在、警察特殊認可特異行使結社。

その社員が集まるための基地……とは名ばかりで、少し古びているカフェの付いた、昭和を感じる古ビルの外見で、自分の想像とは大きくかけ離れていた。

部屋の内部も、普通のオフィスのような空間だが、リージェン繁栄時代の技術も使われていて、タッチパネルや外を見渡せるようなエレベーター、そしてまるで四次元かのように、様々な部屋がこのビルのなかにぎっしりとつまっている…。

「わあ……」

尚且つ、連れてこられたこの社長室が一番の見所だ。

昔ながらの木彫の外見と共に映える、絶景と言わざるを得ない町並みが見える大きな窓がとても印象的だった。

「すごいでしょう？ここもリージェンの輸入技術なんだって」

につこりと微笑みながら、あおいちゃんは僕にそう言った。

確かに、こんなにすごい光景は始めてで、まるでこどもの頃に戻ったのようにワクワクしている。

カメラを持ってくれば良かったと心底思った。

「普通の4階建てくらいのオフィスビルのはずだったのに……こんなに高い位置にあったんだ…」

「いや、本当は4階建てのビルだよ。これはあくまでも映像の一種さ」感動している傍ら、郷仲さんが軽くここのからくりを話す。

「この街で凶悪犯罪があった場合、すぐに指令が出せるようにしてあるのさ。長として、これはとても重要だからね」なるほど…。

たまに、漫画やアニメで見る悪役のボスがこんなでつかい窓の前で鎮座してることが多いけど、カツコつけてただけではなくて、一応、利に叶った理由があったのか…。

「すごく考えられてるんですね……」

「まあ、これの方が僕らも現場に駆けつけやすいしね」

水原くんは窓に親指を指す。

その窓の先で、鳥が飛んでいったのが見えた。

こんなにアンティーク溢れる部屋の中だが、この窓以外にも、部屋全体には近未来的な物が隠されているのだろうか…。

「コーヒーどうぞ〜」

そんな事を考えていると、僕の目の前に一杯の珈琲が差し出される。

「あ…どうも……」

僕はカップに入ったそれを受けとり、会釈する。

それを持ってきてくれたのは、籠城犯役だった女性だった。

「私は、その事務課の課長を勤めてるサトナカカナエと言います。

さつきはごめんね」

彼女はお盆を抱えながら、先程の事について謝罪を踏まえ、改めて自己紹介をする。

「いえ……大丈夫です…」

あの演技の印象があるから少し引き気味にはなるが、彼女が本当にあの性格ではないというのはわかっている。

だから、そんなに怖じ気づくな。と、頭のなかで自分に言い聞かせながら、受け取ったコーヒーを一口茶屋飲んだ。

「あ…美味しい……」

珈琲独特の苦さのなかに、木の実のようなマイルドな甘味がある。

自分はブラックは飲めないから、必ずミルクと砂糖はいれるのだが、それをいれなくても良いと思えるほどの甘酸っぱさが、このコーヒーにはあった。

そりゃあ、これが看板商品として売れる筈だな…。

「ありがとう。あおいちゃんが挽いて淹れるともつと美味しいんだけど

ねえ」

郷仲 叶がそう言うのと、あおいちゃんは『それほどでも』と頭を掻いて照れ笑いをしていた。

例え、初対面があまりよくななくても、中身を見ればちゃんという人なんだということは分かるんだ。

コーヒーをまた一口飲みながら、僕はそう思った。

「さて…君の知りたいことは、特異点についてだったね…」

社長室の中心に置かれた大きな机の上に、いつの間にか座っていた郷仲さんは僕に確認する。

「あ、はい…」

コーヒー片手に僕が返事をすると、彼はそれを返すように微笑む。

「解説してあげよう。ミズハラくん、少し手伝ってくれるかい？」

「へいへい……」

郷仲さんは身軽に机からスタツと降りると、水原くんの近くに寄り、彼を標本として、僕に特異点の解説を始めた。

「良いかい？特異点と言うのは、人間の進化の一つだ。人間がアウストラロピテクスから、今の姿に変わっていったのは、わかるだろう？」

彼は少し不満げな顔をした水原くんの肩を掴む。

「は…はい」

「旧世界歴の2041年、異形生命体ヘトロモーガンが進行し、地球が危機に貧した時、一人の英雄が『見たこともない力』を使って、ヘトロモーガンを異知能生命体リジエと無知能生命体ノイに分けて、世界に近郊をもたらした…」

「そういう…おとぎ話がありますよね…」

昔、絵本で何度も読んだことがあるから、そういう紀元があるかもしれないと言うのはとりあえずわかる。

ただ、年齢が上がるのが、大学に進もうが、それ以降それが本当だと教育されることはなかったから、きつと、それはフィクションだと、多くの人間が思っていた筈だ。

「いや…それは決してお伽噺などではないと私は思っている」

だが、郷仲さんはそれを真つ向から否定する。

「その証拠が、彼のような特異点だ」

「こういうことね」

そう言うと、水原くんは手のひらから水の球を出現させ、ふわふわと宙に浮かせる。

確かに、こんな人間が存在してることで自体、旧西暦の人からしたら、それこそお伽噺に近いことだよな…。

「人間は、リージェンからの勢いに負けぬよう、目には見えなくても知能やアイディアは大きく進化していった。だが、リージェンは身体的に人類の上を行っている…。身体能力特性があるからね…」

確かに、リージェンは姿がそれぞれだからこそ、様々な特性がある  
と昔から聞かされたことがある。

例えば、僕が前に住んでいた階の隣に住んでいたイルカ型のリージェンは、イルカの特徴がそのまま身体に反映されているようなものだから、聴力が人間よりも発達していたし、この前入った安い中華飯店でも、サラマンダー型のリージェンが、口から火を吹いて、炒飯に仕上げをしていた。

それ以外にも、エイリアン型はテレパシーであったり、蝶や鳥型は翼を介した飛行能力と、そんな人間には到底真似できない特性があるのだ。

「この世界の数パーセントの人間は、本能的に『ヘトロモーガンの特性から、身を守らなければならない』と言う物に目覚め、知能だけではなく、英雄と同じ、異形の能力を持つようになってしまった」

「それが、特異点と言うことですか…?」

「そうなのだが…少し違う。人間が進化していく内に手に入れた力は『異能力』と『特異点』のどちらか二つだ」

郷仲さんの説明に、僕は首をかしげる。

「その…どこが違うんですか?」

そもそも、特異点がどんなものなのか、と言うことすらよくはわかっていないし、その上で特異点や異能力と言った異形の力の、なにが違うのかすらもわからない…。

というか…ほぼ同じにも聞こえるんだが…。

「異能力と言うのは、手から爆破エネルギーを出したり、ゴミを植物に

変えたり、虎に変身したりと、普通の人間には出来ないことをするんだ」

「それだと…特異点と同じじゃないんですかね…?」

「確かにそうだね。しかし、特異点と言うものはその能力が更に強化されてしまったもの、つまり『強すぎる異能力』なんだ。例えば、先程言ったゴミを植物に変えると言うものが特異点になったら”あらゆる物が植物になる”となるね」

彼の手振りでの解説を聞き、僕は学修はするが、自分が特異点になつたときを思い出すと、それだけではまだもう少しだけ疑問が残る…。

「後、普通に異能力に目覚める人間は、なんの前触れもなく突然、それを目覚めてそれつきりだ。特に提言できるようなデメリットはない。しかし…」

すると、郷仲さんは水原くんの着ているパーカーの飾りに手を掛ける。

なにをする気だろうかと思つた次の瞬間、カチャンと音を立てながら、少年のパーカーからエンブレムのアクセサリが外された。

「うっ……ぐっ……」

その瞬間、彼は服の心臓部分をつかみ始め、皮膚からは快晴と同じ色の結晶が、少しずつ少しずつ姿を表し始めた。

それは、僕が特異点となつたあの日と同じ…。

「特異点が目覚めた場合、その能力は一気に暴走。その能力の強さを体現するかのように、肌からは結晶のようなものが浮き出すんだ。それは、どんな能力の特異でも同じ。それを私たちは『結晶化』と呼んでいる」

「そ…それは僕も体感したんで、ミズハラくんのそれを！」

苦しむ水原くんを見て焦る僕だが、郷仲さんは冷静で、彼の近くにそつとエンブレムを近づけると、枝分かれを始めようとしていた結晶の侵食が、ピタリと止まる…。

「この結晶化を止めるには『ルストロニウム』と呼ばれる特殊な物質で作られた物に触れるのが絶対条件だ」



そう解説をしつつ、郷仲さんは水原くんのパーカーにパーカー飾りを再度装着すると、皮膚に侵食していた結晶は消え、元の少年らしい白い肌へと戻った。

「ツハアー・あー…しんど…」

水原くんは少し息を荒げながらも、結晶からの侵略を防ぎ、人間の体を保つ。

見るだけで昨日の事を思い出して、僕の全身に心霊現象の時のようなひんやり感が走る…。

「結晶化を止められなかった場合、ほとんどの人間は身体を結晶の中に包まれた後、臓器まで全て人間ではないものになってしまう、死んでしまう…と、考えられている…」

彼の告げた最後の動詞に、僕は首をかしげる。

「そこは…推測なんですか…?」

スプリミナルは異形生命体ヘトロモーガンや特異点等が絡んだ特殊事件の専門家というイメージがついていたから、そういうものは全て明確に分かっているものなのだと思っていた…。

「一応ね…。というのも、しつかりとしたデータは警視庁側が管理していて、私たちのような認可組織でも秘密だからね…」

「へ…へえ…」

言ってしまうえば、自分達も知りたいけれど、あくまで探偵組織だからそう言うところは、警察機密情報として見せてもらえない…ということなのかもしれない…。

「だが、特異点は強力が故に発症する人間はあまり多くはない。逆に多いのは異能力の方だ」

郷仲さんはそう言うと、水原くんから離れ、椅子側へ移動したかと思ふと、机に備え付けられた引き出しの中から、一枚の紙を取り出す。

「異能力はデメリットが少ないが故、人の性格すらも変えてしまう可能性が考えられている。その例の一つが『人間至上主義団体』だ…」

彼が僕に見せたその紙には、白色を下地に所々血のような赤黒い色で彩色され、まるで人間の目を模しているような独特なマークが闇のような真っ黒い線で描かれていた。

どこか恐怖心がそえられるこの画像には見覚えがある。

「人間至上主義については知ってます。たまにネットニュースとかでデモがあつたつて言うのをみたことが……」

たまに、インターネットの記事に添付されている、政府へのデモの画像の中にプラカードを持っている物が多くいるのだが、その人混みの中で、小さくその国旗のようなマークが描かれているのを、何度か見たことがある。

それに、この人間至上主義団体の活動は、インターネット上の草の根運動を見たことがあつて、SNSではリージェンへの人種差別的な発言を促していたり、如何に人間がすごいのか、如何にリージェンが愚かなのか等と言った投稿や、デモの様子を撮影して動画投稿サイトに載せる、等といった物が多い。

まあ、それが結果的に何の意味を為すのかはわからないけれど……

「しかし……私たちの追う人間至上主義団体は、君の想像できるような生ぬるいものじゃない……」

彼がそれを話し始める時、目の奥からは、どこか熱く燃える怒りのような物を感じた……

「人間至上主義団体、私たちは“ヴィーガレンツ”と呼んでいるが、彼らは異能力を行使して影で多くのリージェンを虐殺している……。それは罪のあるものでも、ないものでも……関係は無しだ……」

顔と感情から笑みを外した彼が人間至上主義団体について話している時の音程は、先程の好意的な物よりもさらに下。

それほどに、彼にはヴィーガレンツへ憎しみがあるのかもしれない……

「その異能力を使う人達が……そんなおぞましい悪意をもって……。それに、人間を至上するために関係ない命まで奪うとは……」

口頭の解説であつても、ヴィーガレンツという存在の隠れた恐怖に、僕は一時の不安を感じた。

ただのインターネットの草の根運動に、そんな本性が隠れているとは思つてもいなかった……

すると、郷仲さんは自分がヒートアップしていたのを気づいたの

か、ふうとため息をついて、また感情の見えない笑みを浮かべた。

「もちろん、異能力者が全員悪なのかと言われると、決してそうではない。今日、人質役になってくれた事務員のユウカくんは、異能力者だが、私たちの味方だよ」

「そういや、あの女の子、爆発は自分の能力が引き起こしたと先程言ってたな……。」

「あれが異能力か……。」

「悪い行為に走ってしまうという症例が多いだけ……という感じですかね?」

「まあ、そう言うことだね」

よくわかっているねと言いたげに、彼の口角が少し緩み、その目に写っていた怒りの感情は、また冷ややかな感情と奥に通ずる暖かさで、かき消されていた。

「そして、私たち特異点が行う事は『人間と異形生命体との統制を図る』と言うものだ」

彼が大きく手を広げる後ろにあるのは、大きな水色の球体を中心として、その球を囲う円、そこから左右対称に様々な方向へと伸びる白線と白い球が描かれているマークのようなものが、社長室の中の額縁が飾られていた。

「これが彼らスプリミナルのシンボル……。」

「統制……言わば、世界平和ですかね……?」

「まあ、少し似てはいるね。リージェンからも、人間からも、頼まれた依頼をこなすと言うのが、まずは根本の活動。その上で大きな目的というものは『人間とリージェンの自由を守るため、ミラーファイアとヴィーガレンツの駆逐』と言うものでもある……。」

郷仲さんがそう伝えた瞬間、その場にいた彼以外の三人のスプリミナルメンバーの眼光が鋭くなったように見えた。

「互いの至上主義をある程度消さなければ、この世界の統制を達成することは出来ない……。だからこそ、私たちは武装警察と連携して、ミラーファイアとヴィーガレンツ、特異点を行使してでも、彼らを止める。それこそが、スプリミナルの目標ということだ……。」

互いの至上主義の撲滅…。

「なんとなく…わかったようなわからないような…。」

あまり推理機能には優れていない自分が理解するには、まだ少し時間がかかる…。

けれど、行きすぎた正義や思想を押しえないと行けないのはなんとなくだけどわかる。

暴走した正義がテロや戦争に発展することなんて、2000年代よりも前からわかってたんだから…。

「まあ、詳しいことはおいおいわかっていけば良いき。簡単に言えば、綺麗事をするお仕事ってだけだからね」

「はあ……。」

少しはぐらかされた気もするが、とにかく、スプリミナルはこの世界の統制を守るために、リー<sup>ミ</sup>ジー<sup>ラー</sup>エン<sup>マ</sup>至上主義<sup>ファイ</sup>や人間至上主義<sup>ア</sup>の働きを止めようとしているのだけはわかった。

彼らが法に触れるような悪いことをしていると言うわけではないことはわかったし、さらに深いところは、ここから追々……。

「…ん？おいおい？って…？」

その単語の違和感を感じ、僕は首をかしげた。

「そうだねえ…単刀直入に言えば…。」

すると、郷仲さんはコーヒを一囀含むとする僕に向けて、その言葉を告げる。

「ユウキ テツヤくん。君、スプリミナルに入らないかい？」

「ブフツ！」

一応うつすら予想はしていても、本当にその通りの勧誘をされたら、含んでいたコーヒを吹き出すほど驚いてしまう物みたいだ。

「ぼ…僕がですか!? そんな、僕はなんも出来ない元詐欺師ですよ!」

その上、お人好しで役立たずというのもこの台詞に追加したいほどだ。

後ろの二人が特異点としてどれだけ有能かと言うのはあの盛大なドッキリを経てわかったし、叶さんの演技力だとか、郷仲さんの地位を見ても、スプリミナルのスペックの高さは甚大だ。

「それに…僕が詐欺師の間でも、一番役にたたないってこととか…知りませんよね…?」

この人たちと比べてしまえば、僕の存在なんて無能極まりない…。「え、詐欺師だったの!？」

「アオイは黙ってて」

今さら知ったあおいちゃんとそれを黙らせる水原くんには、僕は少し脱力し、それに間髪いれず郷仲さんは口を開く。

「そうだねえ…。まあでも、君のことは昨日の任務でちよつと調べさせてはもらったんだよ…。株式会社ラーアで働く下っぱの詐欺師。各務グラフィックス専門学校芸術写真コース中退。ピンク系統の上着と跳ねた天然の茶髪が特徴で、何度もバイトをするも、何度も失敗。たどり着いた先で詐欺師となつてしまい、ラーアの故き社長であるハヤメにスカウトされる。好物はカツ丼と甘い物で、苦手なものは辛すぎる物。趣味は写真撮影で特技は家事、そして…。」

「ちよつと待つてくださいいなんでそんなに知ってるんですか」

「二「そりやあ、スプリミナルですから」」

メンバー四人で声を揃えられても…。

探偵組織だからここまで調べあげたと考えれば、わからなくはないけれど、ここまでしつかり調べあげられると、やはり怖いものだ…。

「その上、君の特異点は異能保持者でさえも羨むスーパーレアケースだ。『あらゆる攻撃を無効化する』という物なのだから…」

「そ…そりやあ…能力自体はすごい物だとは思いますが…。でも、僕はそんなすごい人間じゃないんです！弱いし、臆病だし、なんか攻撃される度に違和感するの気持ち悪いし…皆さんの足を引っ張るのは目に見えてますから！」

ほんの少し自画自賛を含んでいるような気もするが、自分だけが攻撃を無効化したところで、誰かを攻撃できるような物ではない。

水原くんやあおいちゃんのように水や重力を操れたりするような、そんなスーパーヒーローが使えるような、すごいものでもないし…。

「とにかく…僕は…無理だと思えます…」

ひたすらに自分を卑下する姿を見て、郷仲さんは小さくため息をついた。

「そうか…しかし…私はそうとは思えないがね…。なぜなら…」  
ガチャン！

彼が言葉が続けようとしたその時、社長室の中にある、僕らが出入りしていなかったもう一つの扉が開いた。

「パパ…ママ…?」

扉を開けたのは、キャラクター物のTシャツを着た小さな女の子だった。

短い髪を揺らしながら、寝ぼけ眼を擦っている。

「おっと、起きたかい?イチカ」

郷仲さんは彼女を見てニコリと微笑むと、女の子は今だ覚めない眠気に目を細めつつ、叶さんの方へと歩み寄った。

「さつき、すごいゆめみたよ…。プルキュアがいつぱいできたの…」  
寝ぼけた声で女の子は微笑みつつ、カナエさんと郷仲さんに話す。

「良かったわねえ。プルフローズンには会えた?」

「あえたあ。かわいかったあ…!」

「それは良かったねえ」

「パパ、またいっしょにプルキュアごっこしてねえ…」

「うんうん。よろこんで」

楽しげに女兒向け魔法少女アニメを話している三人…。

「あ…あの…」

微笑ましい平和を感じる光景に水を差すのは申し訳ないが、少し彼らの空間に割って聞く。

「なんだい?」

「えっと…サトナカさんって…子持ち…ですか?」

もしやと思つて聞いてみると、彼は子供の頭をそつと撫でながら、答える。

「子持ちというか…」

「私たち、夫婦ですのぞ」

二人で仲良く声を揃えると共に、二人の間に挟まれている娘さん

は、ニコリと微笑みながら小さなピースサインを作って僕に向けた。

「え…ええ…」

その答えを聞いた僕は少し引ききみだった。

確かに、凍<sup>イチ</sup>治<sup>カ</sup>叶と名のつけられた女の子の顔のパーツを観察してみると、なんとなく二人と共通しているものがある。

柔らかそうな目は叶さんに似ているし、どこことなく静けさのある雰囲気は郷仲さんに似ていて、どちらかという父親要素の方が強い…。

しかし…これは良いのだろうか…？

「今、年の差婚って思ったかい？」

「いや、そつちじゃなくて！あの…スプリミナルなのに…家族いても良いのかなってふと…」

家族がいると、足枷になる。

そんな小説の悪役の台詞じみたことを思っているが、それは現実的にも同じだと思ってる。

詐欺師をしていた頃、いつ警察や裏社会のやばい奴らが、病院に押し入ってきて、妹を人質にとるかと思うと少しビクビクして、一時には、一筆かいた書類か拳銃辺りを持ち歩いておこうかと考えてしまっただった。

あくまでも、病院と言う囲いがあつたから大丈夫だったのだろうか…そう言う、悪しき目が少なそうな場所だからこそ、医者や患者を装って妹を殺されたらなんて思ってしまうから…やはり少々怖い…。

ここはそれ以上に危険なのではないかと感じているから、尚更だ。そう思っていると、途端に彼は僕の思想を鼻で笑う。

「そんな固定概念はここにはないさ」

すると郷仲さんは、今度は水原くんとあおいちゃんの近くに寄る。「この本拠地は地域の密着度が高いから何かあつたらすぐに分かるし、武装警察の目もこちらに行き届いている。それに、ここはどんな人でも加入OKさ。詐欺師だろうが、子持ちだろうが、孤児だろうが…どうだい？君も…」

彼の言葉と共に、そこにいる人間全員の視線が僕に向けられた。

それはまさに、” 对人的な危険を犯すリスクがあっても、ここにいくか” 逮捕との危険を背負いつつも、妹にとつてはまだ安全な方” か、という選択を今まさに僕に迫っているよう。

「僕は……その…」

少し冷静に考えてみると、常連さんがこんな臨場感溢れることをしてくれるのだから、確かに彼の言うとおりなのかもしれない。

それに、彼らは特異点のスペシャリストのような物なのだから、きつとここにいれば、自分の特異点との向き合い方も分かる気もするし、強い人たちがいるからこそ、リスクすらも緩和される可能性もな

くはない。

自分にとつてのメリットが、あるといえばある。

どちらの道を選んだとしても、壊れそうな橋がかかっているくらいで、崖つぶちというわけでは決してないだろう。

だが…。

「……考えときます…」

自分には、まだここに入ってもうまくやっつけていけるという自信がない。

こんな自分がいきなり武道派の探偵だなんて無理な話だと思うし、詐欺師の時と同じく逆恨みで殺されたくない。

それに、先程も言ったけれど、自分は役に立てるような人材じゃないというのが一番の理由だ。

ここに入っても本当に大丈夫なのか…もう少しだけ考えてみたいのだ…。

「エエー…入って欲しいのになあ…」

「仕方ないよ。ユウキくんにも事情はあるんだろうし。こんなもん、城跡に数分で決めろつてのが無理なんだよ」

肩を落としてまで、最後まで期待してくれていたあおいちちゃんには申し訳ないと思う反面、水原くんは特に引き留めもしない程、ドライだ。

けれど、事情を悟ってくれているのはありがたいし、それくらいの期待度のほうが、まだ気が楽で良いと思える。



けれど、誰の本心も自分には見えることはないから、ここにいる全員が、僕に対してどう思っているのかを想像すると、恐怖すら考えそうになる…。

「……あ、事情で思い出した。僕、ちよつとこれから行くところあるの  
で、今日はこれで…」

一度、この少し息苦しい空間から抜け出したいと思い、僕は所用を  
思い出したことを理由に、そそくさと扉へ向かった。

「ああ…。前向きに考えてくれると嬉しいよ。ユウキくん」

空虚な笑みを浮かべる郷仲さん。

その後ろでは、彼の娘が僕に向けて小さく手を降っており、後の社員も僕を見つめているだけだ。

彼らに僕を追う様子はなかったことが、何故か少しホツとした。

「はい…それでは……」

頭を下げながら、別れの言葉だけを告げて、僕はその部屋から出た。

少し冷たいタイル張りの廊下、僕は壁に身を寄せて歩きながら、先程の問いについて考えていた。

自分はこれからどうすれば良いのか。

というのを、この地域に来てからずっと考えていたが、ここに来てから、その迷走の思いが、さらにさらに深くなっていた気がする。

道が二つに狭まっているように見えても、重要なのは選んでからどこへ向かえば良いのか…。

元ド下手詐欺師の僕にとっては、詐欺師を詐欺にかけてやることよりも難しい問題なのかもしれない…。

To be continue…

### 3—2 『自己否定な僕と社長のS』

エタノールと薬物の匂いがふわりと鼻を通る…。

まだかまだかと待機する病人と、歩き流れる人々の様子は、まるで枯れかけているシクラメンの並ぶ花壇のようだ。

それを他所に、丁度、僕が扉の前に到着すると同時にエレベーターが開き、それに乗り込んでボタンを押すと、上階めがけて動き出した。「元気かな…」

ポツリと呟きつつ、壁に背をつけながら、エレベーターの起動音だけを聞いていた。

花菜村から二つ程隣の街にある病院、そこには僕にとって大切な人間がいる。

僕の用事と言うのは、その子のお見舞いだ。

昨日はここに来れなかったから、彼女は心配しただろうか…？

そんな心配を胸にしていると、エレベーターから到着のアナウンスが流れ、扉が開いた。

そこから降りると、消毒液の匂いの中に、煮物や洗剤のような生活感のある匂いが混じっている…。

点滴片手にリハビリをする人や、病室内でテレビをみている人等、チラリと見える病人同士の生活に「治る見込みのある人は良いな」と少し僻みながら、僕はナースステーションの受け付けに着く。

「すみません。ユウキアヤノの見舞いなんです…今、大丈夫ですか…？」

僕が声をかけると、受付の人は、少しだけパソコンを動かし、改めてこちらを向いた。

「今の時間は大丈夫だと思えます。どうぞ」

「ありがとうございます」

微笑む看護師に礼を良い、僕は彼女の待つ部屋へとまた歩き始めた。

あの子が体を拭いている途中だったりしたら困るからな…。

「うむう……」

だが、お見舞いに行く道中だと言うのに、こんな僕の頭の中では、まだ先程の勧誘の話が頭を巡っている。

「どうしようかな……入るか……入らないか……」

彼女のことを思うと、あまり危険なこととはしない方が良いとは思う。

けれど、特異点として知りたいことが知れて、自分が彼らにとって役に立つことができる郷仲さんが言ってくれるのだとしたら、スプリミナルに入ってもメリットはあると思うんだ。

しかし、身体的にも精神的にも、それなりのリスクが伴うと言うところであつたり、その『役に立つ』と言う認定が貰えるなんて確証はないというデメリットも大きい。

「……もしも……」

もしも、母が生きていたなら、僕がスプリミナルに入るのを止めるのか……止めないのか……。

たればからその想定を考えることすらできない僕に、入社資格など本当にあつたのだろうか……。

ただ、自分の特異点を狙ってるだけなんじゃないのか？

なんて考えすぎて、そのまま人間不信になつてしまえば、もう末期だ。

「まあ、いつか……。とりあえず、暗い顔せずに行かないと……」

そうだ、今はスプリミナルではなくて、お見舞いに来ているんだ。

あまり考えないようにしなければと、その悩みを今は胸の奥に封じ込め、僕はその部屋の扉を開いた。

カーテンが閉まった暗い部屋の中、その子はただ静かに息をしながら夢の世界に心を投じている……。

やれやれとため息を吐き、僕はその遮光性の窓掛けを一気に広げると、日の光が差し込み、点滴袋の中に入った液体が光り、真っ白な病室と彼女の体を包んでいるベッドが露になった。

「おはよう。アヤ」

未だに眠っている妹に僕は声をかけつつ、近くに備え付けられている椅子に腰をかけた。

「今日はどんな夢見てるの?」

日に背を照らされる僕は、彼女に声をかけるけれど、返ってくる訳がない。

彼女は昔、とある災害事故に遭ってからずっと眠ったまま、所謂、植物状態と言うやつだ。

どれだけこの暖かな日の光を浴びせようが、優しく声をかけようが、ギョツと手を握ろうが、返ってくるのは耳を澄ませなければ聞かない寝息だけ…。

「そっか…。あ、まだ母さんに会いに行っていないよね?僕を差し置いて母さんに会いに行くのはズルいよ?」

だからお見舞いに来たときには必ず、彼女から言葉が返ってきたことを妄想して、他愛もない話を続ける。

さっきの僕の言葉の後には、きつと「また新しい物語を描いていた」と言ってくれたと思うし、この言葉から返って来たのは「まだそんなことできないよ。そんなの死んじゃってるし」とブラックジョーク気味に笑ってると思う。

こんな姿を第三者に見られたら、僕は精神異常者にカテゴライズされるかもな…。

「そう…。そうだ、昨日と今日は沢山の人にあつたよ。年下の子が二人と、年上の夫婦の方と。皆、悪い人には見えなかったかな」

僕は特異点が発症してからのここ最近の事を、彼女に少しだけ話した。

僕の妄想のなかでは、彼女はニコリと微笑んで、楽しそうだねと言ってくれたが、その後「お仕事の調子はどうか?」と聞かれてしまった。

「ああ…仕事のこと聞く?…うん」

こういう時、普通なら心配をさせないように誤魔化するのが先決なのかもしれない。

「兄ちゃん…またクビになっちゃったんだ…。倒産だつて…」

けれど、家族にだけはそう言う隠し事はあまりしたくない。

スプリミナルの事とか特異点のことは、機密情報だろうから、家族でさえも言えないのだけれど、それならせめて自分の事くらいは言つてあげないと、よけいに心配されてしまうから…。

「まあ、こんなことでは、兄ちゃんめげないからな！すぐに新しい仕事見つけて、アヤをすぐに退院させてやるからな！」

意気込んでそう言つて、妹からは「無理しないでね」と言われる妄想をする。

時に冷静になった瞬間、その一連の動作全てが、虚しく思えてくきてしまうこともあつて…。

「だから…早く起きてくれよな…」

胸の奥から少しずつ、なにか塩臭いものが込み上げてくる…。

僕はなにをやつてるんだろう…。

またそんな思いがこの体を巡る。

自分を揶揄し続けて、揶揄され続けて、その末には、生きているだけで、この空っぽの空間に押し潰されそうな程、自分自信が惨めで惨めでしたかたがなく思えてきてしまうんだ…。

けれど、綾乃という存在があることで、なんとかその思いと生が繋ぎ止められている。

「そろそろ…兄ちゃん寂しくなってきたんだよ…」

だが、その存在自体がもう四年も眠っている…。

寂しいと言つても気分は晴れないし、虚しいと思つても彼女が目覚めることはない。

どんなことを願つても、起きる気配はないのだ…。

「早く起きてくれないと…兄ちゃん…安心できない…だろ…。」

両目から流れた大粒の涙が、きれいに除菌清掃されたタイルに落ちていく。

もう嫌だつて逃げたしたいときだつてある。

何度この子のお見舞いに来たか、幾らこの子の入院費を払ったか、何回この子の身の回りの事をしてあげたのか…。

どうでも良いやなんて、言つて居直ることができたらどれだけ楽な

のだろうか。

こんな僕にはそんな権利すらない。

「…ダメだ…涙止めないと…」

僕がめげてはいけないんだ。

アヤが目覚めた時に、僕がいなければ、一人ぼっちになってしまった挙げ句、今の僕と同じ感情になってしまおうと思うから…。

アヤのために生きる。

アヤには僕しかないんだ。

いつか彼女が目覚めるのを期待して、これからも自分は働いていかなければならない。

例え、その仕事が危険なものであったとしても…。



新人が去ってから、僕が一息つけたのは、ようやく店を片付け終わったときだった。

「ああ…疲れた…」

綺麗に洗い終えた椅子に座り、ピカピカに磨かれた机の上に頬を付けて突っ伏し、大きく息を吐いた。

焦げていた店は水洗いやらワックスがけやらをしつつ、たまたま帰ってきた特異点の仲間にも手を貸してもらって、ようやく元のアンティーク調カフェに戻った。

ただ、完了したのはもう夕焼けが出そうな時間帯の頃だったのだが…。

「カドヤくんもアオイちゃんもお疲れ様あ…。ごめんねこんなにしちゃって」

こんなにした張本人である叶くんは、娘の子守りをしながら陳謝する。

「ほんつとだよ…特異点の集団じゃなきや、ここ直すのに一ヶ月はかかってたね」

「アハハ…申し訳ない…」

「ごめんね」

苦笑いの叶くんに合わせて凍治叶くんまで謝る。

「別にイチカくんが謝ることじゃないよ。これが仕事だから別に良いよ」

そう言つて、僕は彼女の謝罪を受容した。

嫌いというわけではないのだが、子供は皮肉混じりのジョークが通じないから少し苦手だ。

ちよつとしたことも本気で捉えられてしまうと、調子が狂つてしまうから。

にしても、親に合わせて娘が謝罪をする姿には、カンガルーかイブクロコモリガエルか、そんな親子連れの動物を思い浮かべてしまふな。

まあ、これで清掃作業は終わつたし、後は昨日の報告書さえ書き終われば、それで今日の業務は終わりだ。

今日は色々と疲れたな。

主に叶くんと佐香くんの暴走にだけど…。

「はい。お疲れ様のカフェオレ」

先程まで明日の仕込みをしていたあおいが、いつものカフェオレが入ったコーヒークップを僕の目の前に置いた。

「ありがと…アオイ…」

顔をあげ、いつもの甘い味付けのカフェオレを啜ると、体の芯から疲れが溶け出していくような感覚が走る…。

「これだな…」

なんて、少しおっさん臭いことを言つてリラックスすると、今度はあおいが机に頬をつける。

「ハア…：せつかく後輩増えると思つたのになあ…：」

彼女は残念そうな顔を浮かべながら、大きくため息を付いた。

やはり、あおいは悠樹くんのことを少し引きずっていたようだ。

まあ、彼女の性格のことだ、折角の念願であつた後輩候補からの返事が、想像していかないものだったら少し凹むか。

あおいは長い間”戦力外” 感じてだったわけだし…。

「しかたないわ。いきなり入れって言われて、即答できる人なんていないもの…」

「そうですねえ…諦めないと…。なんだけどなあ…」

娘を膝に置いてあやす叶くんが、あおいを宥めるけれど、やはりあまり納得は出来ないようだ。

まあ、そもそも初めから本人に入ってくれそうな気はしていなかったが、今まで勧誘した中では、結果的に必ず全員が加入しているわけだから、流れ的には少し期待してしまうよな。

しかし…その勧誘を決定した社長も、予測をしていたのだろうか…。

「…あれ？そーいや、サトナカくんどこ？」

周りを見回すが、先程まで手伝ってくれていた郷仲くんの姿がここに居なかった。

違う生業の方に言ったのだろうか？

「病院だつてさ、四年目検診の結果取りに行くつて」

僕の予測を切り裂くように、あおいが郷仲くんの行き先を伝うと、叶くんが少しため息を溢す。

「そっかあ…なんだかんだで四年なのね…」

彼女の言葉を聞くなり、もう四年か…と僕とあおいも少し感慨深くなった。

確かに、ため息をつきたくなるほど、あれは大きすぎた災害だった。  
ヘトロモীগン  
異形生命体が襲来して以降、災害が少なくはなったのだが、あの時だけは、思い出すにも無惨だったと思う。

あの血溜まりの光景が、いまだに僕の目に焼き付いているのだから…。

「なにが？」

しかし、その災害を知らない齡四の少女は、顔を見上げて母に聞く事くらいしか、情報を集める手段はない。

「イチカが四歳になったな〜？つて話」

「そっかあ〜」

叶くんが、その災害がなんだったのかを誤魔化すのは、きつと悲し



き人災をまだ幼い子供に聞かせたくないからだろう。

あらゆる悲しい事件は、決して忘れてはいけけないのかもしれないけれど、それを体験していない小さな子供に無理やりその怖さを押し付けるのは、僕は大人によるエゴではないかと思うのだ。

それが逆効果になってしまって、トラウマを植え付けてしまったのは困るだろうし、なにより忘れてしまいたい程悲しいことがあるのは、僕にだってわかるから…。

「あーあ…入ってくれれば良いんだけどなあ…」

なんて少し締めつけぼく考えている時でも、あおいはしつこい程に彼の加入を願っている。

「まあ、あくまで保留だから、明日になったら心が変わることだってあるよ」

彼女のしつこいため息に呆れ混じりでそう言うが、あおいの顔は未だに晴れない…。

「そうかなあ…」

「それに…4年以上いるならわかるでしょ…？もしも罪人が入社を拒否したら…ってこと…」

「わかっているから喜んでたんだよ…」

実はスプリミナルには一つ『絶対に入った方が良い』という条件が成されている。

社長である郷仲は、新人にそれについてを一切言わないのだが、この条件を言ってしまうえば、100%に近い確率で、皆が首を縦に振る。

それなのに彼が言わないのは、郷仲にとつてそれが『可否の自由を阻害する』として、絶対に口外しないようだ。

郷仲は自由と調和を重んじる人間であるから、拒否も領収も自由であり、決して否定してはならないと、緊急事態のアラートのように、僕らにも繰り返してその言葉を告げてきた。

「…まあでも、あの人の性格なら、どっちを選んでも後悔はしなそうだけどね…」

出会ってまだ二日ではあるが、彼の言動や行動をみる限り、あまり『自分は悪くない』と自発的に思えることが出来ない性格のように見

えた。

「確かに……なんか抱えてそんな人だったもんね……。それでも、ここに来てくれると嬉しいんだけどなあ……」

あおいの言うとおり、彼の中で抱えているものが、その自己否定や自信への低評価に干渉しているのだろう……。

誰にだって、抱えてるもの一つや二つくらいある。

それにズケズケと踏み込んで事情を聴こうなんて気はさらさら無い。

だが、そう言ったものが行動に影響してしまっているのは、少々面倒なものではあるよな……。

—それは君もだけどね……

僕への嫌がらせかのように聞こえてきたその声に、僕は苛立ち、小さくため息をつく。

「うっさいな……」

自分でわかっているんだから、出てくるなよバケモノが……。

「なんか言った?」

おっと……心のなかで言っていたつもりが、声に出してしまったようだ。

「なんでも……」

僕は素っ気なく言葉を返し、またその甘いカフェオレに口をつけた。

とにかく、新人がどう動くとか、スプリミナルに入るか入らないかなんて、自分には興味がない。

窓から見える、落ちていこうとする太陽のように、結局は流れに任せるしかないし、それを覆そうなんて気も起きるわけがないのだ。

けれど”結局、悠樹哲哉はここに入るだろう”と、僕は心のなかで、自分の中のバケモノと、賭けていたりする……。



空が朱みがかってきた。

この真っ白な部屋での楽しくも切ない時間と、別れを告げねばならない。

この部屋がまた少し寂しくなるが、僕はそつとカーテンを閉じて、眠っている妹に向けて、にこりと微笑んだ。

「じゃあ、兄ちゃんまた明日来るからな。おやすみ」

僕はそう言つて扉を開き、眠る妹から『おやすみ』と声が返つて来る妄想をしてから、部屋を出た。

「…ふう……」

虚しいと思いつつ廊下を歩く。

今日までにやってきた事が報われてほしいと思つてきたことなんて何度あるだろう。

精神異常者だとバカにされているのではないかという思いも、いつまで妹にすがつてるんだと思われるのではないかと言う恐怖も、そろそろ現実を見ろなんて言う絵空事も、なんとかこの地面と一緒に踏み潰してきた。

それでも、人生なんて報われないものだ。

今も通りすぎた病室から聞こえる「よくがんばったね」に妬んでしまっている思いだつてあるのだから。

妹は頑張れる力すらないのに、僕は死ぬ程頑張っているつもりなのに…。

そんな負の感情すらも、消えちまえと床に捨て、僕はエレベーターのボタンを押した。

エレベーターが来るのを待つ。

携帯はほぼ全部捨ててしまったから、暇を持て余せるものがない。詐欺をしていた事実を消さなければならなかったが故、プライベートの携帯電話すらも捨てるしかなかった。

いくら携帯電話を捨てても、僕が詐欺師であつた事実、死んでも消えない。

けれど、それだけでも少しは心がマシになったのは事実だ。

だからこそ、今日は少し冷静な判断ができたのかもしれない。

詐欺師を辞めれているわけではないのだろうけれど、こんなことで

少し高揚する自分が、僕はなによりも嫌いだ。

「もしも…」

自分を否定し続けて頭に浮かんだのは、結局は一つのたらればだ。

「もしも…アヤじゃなくて僕だったら…」

妹がああなつてから、いつまでもずっと考えている…。

僕が彼女の代わりだったら、きっと何もかもが上手く言っていたと思う。

アヤは、たまに少し突っ走ったりすることはあるけど、自分よりも要領は良いし、正義感も強く、礼儀も正しい。

だから、スプリミナルに入れといわれても、きっと彼女はすぐにOKサインを出してくれると思う。

でも、ぼくは結局そうじゃなくて、今も特異点になったとしても、そんなにすぐに物事を決められるほどの性根は持っていない…。

それが、また少し悲しくて辛くて…。

チーン

エレベーターが到着し、目の前の扉が開いた。

自分自身への嫌悪と、誰にも見られたくない第三者からの目への恐怖に、頭を押さえつけられる。

視線を床に反らしながら、僕はエレベーターに乗った。

扉がしまり、慣れ親しんだ消毒液の香りと僕を共に運び出した。

「もしも…僕が…」

暇さえあれば、結局また自己否定になるんだ…。

「もしも私が君だったら。まずは明日のことを考えるかな」

「…：…やっぱりそ…うおおうっ!？」

たらればを繰り返そうとしていたところに聞こえた声。

それに驚いて後ろを見ると、そこには、丁度昼頃まで話していたスプリミナルの社長がいた…。

「やあ」

呑気に彼は笑みを浮かべながら手を振った。

「さ…サトナカさん…!?!なんでこんなところに…もしかして、つけてきました!?!」

「ハハッ。私にそんなストーカー趣味はないよ」

スプリミナルにいた時とは違い、少し気さくに笑う彼は、手に持っているクリアファイルを僕に見せる。

「私は事故の経過観察結果を貰いに来ただけさ」

どのような事故かはわからないが、そのパワーワードを聞き、僕の心臓がドクンと小さく波打つ。

「事故…？サトナカさんが…ですか…？」

「いや、これはカナエのさ」

彼の微笑みながら否定する姿にまた胸の鼓動がなる。

「奥さんが…でしたか…。」

自分はお人好しでたればな人間であって、よく地雷を踏む男だ。

これのせいで、昔やっていた仕事を解雇されてしまったことがあるし…。

ただ、今回ばかりはその時以上に不謹慎かつ失礼に値する場所を踏んでしまった…。

申し訳なさすぎて、今すぐこのエレベーターの天井で僕の体を押し潰して欲しい程の遺憾に襲われている…。

「あまり気負いはしないでおくれよ。私はそんなことで怒ったりしないからね」

「え…あ、はい…」

彼は僕の感情を汲み取ってそう言ってくれ、僕は少し戸惑いながら返事をした。

郷仲さんと出会ってから、数時間しか経っていないのだけれど、彼はまるでエスパーかメンタリストのように、どこかボクの心を見据えているような気がして少し不気味に感じる。

一応、彼にはそんな気はないと言われればそれまでなのだが…。

とりあえず、僕の発言に腹を立てていないのはありがたい。

「そうだ…まだエレベーターが降りるまでに時間はある。少しだけ昔話をしようか。私と君との親睦を深めるためにね」

エレベーターが下りていく中、彼は壁に寄りかかって、身体を僕と対面させる。

「あ…はい…」

でも、昔話で親睦を深めると言われても、あまり乗り気ではないんだが…。

「私の妻と子供は、一歩間違えてたら死んでいたんだ…」

ほら…やっぱり少し重めの話だ…。

地雷を踏んだ自分が悪いと心に言い聞かせ、僕は会話を続けた。

「事故で…ですか？」

「ああ…」

まあ、それでも重すぎる話は、あまり好きではないから、嫌なところは流し聞こう。

そう思っていたのだが、彼が次に口に出した言葉に、僕の中では興味のカタゴリーのスイッチが押される。

「君は『鏡面発光事件』というのを知っているかい？」

この事件の名前は、僕がこの世で忌み嫌う物であり、密かに真相を追い続けているものだった…。

「知ってます！鏡面がまるで核爆弾が落ちた時のように光って、多くの方が体調不良や喪失をしたって言う…。」

これが、四年前に起きた大災害。

異形生命体ヘトロモーターガンがこの世界に来てから、台風や地震と言った大きすぎる自然災害はほぼ一切起こっておらず、そこから時を数えても、この事件だけが唯一とも言える大災害になっている。

先ほど言った通り、ノーインの住まう鏡の中から、突然、強力すぎる光が放たれたのが事の発端だ。

それを浴びてしまった生命体は、身体が一瞬で消滅したり、風船のように破裂したり、意識だけがどこかへ行ってしまったように倒れたり、医学や科学的には全く説明が出来ないと言われてしまうほど、甚大な身体的障害が多くの人間に起きてしまった。

それによって政府は対応に終われ、武装警察含む警視庁全体やレスキュー隊だけではなく、自衛隊まで駆り出される始末だった…。

しかし、光を浴びた人間全てに身体的障害を患ったわけではなく、中には何事もなく無事だった人間もいるし、意識が無くなっても、

数カ月後にはピンピンした姿で目覚めたという人間もいる。

死んでしまったのは、なんの繋がりもトリックもない、不特定多数の人間…。

だからこそ、これに事件性はないとし、災害として片付けられたのだ。

「えげつすぎる…災害でしたよね…」

「ああ…私たち家族は一次被害では無事だったのだが、妻は第二次災害の被害にあった。その時の妻は出産間近でね…。鏡面発光で妻の身体に以上は全くなかったんだが、近くで運転していたトラックが…彼女の近くにね…。」

鏡面発光事件が多くの人に認知されているのは、勿論一次被害の経験談や未だに残る実被害が多いのだが、災害として認可される引き金となった要因として、二次被害も大きく関係している。

例えば、郷仲さんの奥さんが体験したような、運転をしていた人間が死に、コントロール不能になった車が人に突っ込んで犠牲になった物。

二次被害としてはこれが一番多かったらしい。

他にも、一部地域で飛び散った血液や内蔵の清掃が遅くなって病にかかってしまったり、自分だけが生き残ったという自責の念が爆発して自殺してしまったり…。

そのような事実をなかなか認知はされないのだが、その被害は一次災害とは引けを取らないほどに酷いものだったらしい…。

「事故の目撃者によると、胎児だけならぬ内蔵すらも、ぐしゃぐしゃに潰れてしまっていた…と言っていたよ…。」

肝が冷えるような感覚が走る。

二次的被害にあった人間の気持ちは、一概には分からないけれど、それにもしも会ってしまったらというたらればを想像すれば、恐怖で身の毛がよだつどころか、心臓がキュツと縮み上がる…。

その上、事故に遭ったのが最愛の人だけではなく、生まれていない愛する我が子と共だったなら、絶望感も相当だ…。

「そ…それで…どうなったんですか…?」

僕は怖いもの聞きたさで恐る恐る聞くと、彼は大きくため息をつく。

「その連絡を聞いた時…私は慌てて病院に行ったよ…。もしかしたら、もうどちらにも会えないかもと思ひ、泣きながら走った…。」

そう語ってくれる彼の目は、はじめてあつたあの時よりも一層に冷たい。

それは恐れの手たさではなく、あの災害の日を思い出す悔しさや悲しき、恐れのようにも見えた…。

「でも…カナエさんは…生きてますよね…?」

僕がそう言うと、彼の目の曇りは一気に晴れる。

「ああ。病院に言ったとき、カナエはピンピンしていたよ。傷もなにもない上に、あの時お腹にいたイチカも生きていた…。それは何故だったと思う?」

問いを問いで返すような言葉に、僕は焦った。

「え、そ…それは…お医者さんの腕がすごかったから…とかですか?」

なんとなく思ひ付いた言葉で答えてみるが、彼は首を横に振り「いや」と僕に不正解を告げる。

「カナエとイチカが助かったのは、特異点のおかげさ」

特異点…。

まさかこんなところでそのワードが出てくるとは思っていなかった…。

「当時、鏡面発光事件の影響を受けず、たまたま事故を見ていた『治療』の特異点を持った女性が、カナエを救ってくれたのさ」

「そんなことが出来たんですか…!」

そもそも、治療の特異点なんてあつたのか…。

「ああ。あの時は…本当に神を感謝したよ…。当時、神なんてものは、山奥のボロ小屋の中で首を吊っているような物だと思っていた私からね…」

少し独特な表現だが、なんとなく、僕にもその意味がわかる…。

今まで受けた苦痛を考えてみれば、神様なんてそんな物だと感じ



る。

ただ、その表現と言葉に込められた感情に、郷仲さんがあの時、如何に誰も信じられていなかったのかというのも、なんとなく感じられた…。

「元気に生きれて、本当に良かったですね…。」

僕は作り笑いで言葉を返す。

冷静に考えてみれば、特異点はなんでもありの能力という印象があるから、確かに万能の治癒をもっている人間だっている…。

ただ、その奇跡のような出会いが、彼らのような人間を救った。

その経験から、水原くんが病とすら謳っていた”特異点”という概念が、この世に存在しても良いのではないかと言う思いを、彼の心に定義されたのかもしれない。

「僕の妹とは…違いますね…。」

そんな奇跡を妬んでしまった僕が、つい呟いてしまったその言葉に、郷仲さんが反応する。

「君には…寝たきりの妹さんがいるんだってね…。」

スプリミナルは、そこまで知っているのか…。

「はい…。アヤノという妹がいるんですが…。鏡面発光事件による一次被害をもちに受けてしまって…。」

話すのは心苦しいが、どうせ隠したところで探られる。

「アヤは、事件当時に仕事のために外出したんですが…その途中で被害にあって…。」

当時のことは、今も鮮明に覚えている。

あの日、自分があの子を止めていれば、疲れきって寝てしまっていなければ、後少しでもいいから話しておけば、なんて後悔をいつもしている…。

自分だけが生き残って、アヤは今も夢の中という状況に、僕の心はいつもギリギリと締め付けられている…。

そのせいで、もしも自分がアヤの代わりになれたら、と言うたらればを繰り返して、もう四年も経っている…。

辛くて辛くてしかたがなくても、臆病だから死ぬことも出来なく

て、死んだとてアヤを一人にすることになる…。

「それで、治療費を稼ぐために詐欺を…と……」

また郷仲さんの推測が見事に当たっているもんだから、また少し胸に痛みが伴う。

「はい…。まあ、僕はお人好しの下手くそなので…あまり大きな収入にはならなかったですけど…」

それに、詐欺会社は倒産したしな…。

仕事はなにをしても失敗で、受け入れられることすらないから、僕一人で罪を重ね続けるしかなかった。

それがこの結果だ。

どれだけ詐欺で治療費を稼いでも、未だにアヤが起床することもないし、今や変な能力も目覚めてしまつて…。

「……ずっと…抱えてきたんだね。一人で」

僕に向けられた憐れみの言葉に、ほんの少しだけ慰められる。

「……でも、僕が頑張らないと行けないから…一応兄貴ですし……」  
罪を諦めきつた今では、もうこんな感情論でしか考えられない。

これからも自分はこうして生きていくんだろう。

たった一人、誰にも理解はされずに、この世界の片隅で妹のために罪を重ね続ける。

最期には、その因果が応報して逮捕されるか、マフィアやノーインに殺されて死ぬか…。

このまま完璧なる墮落人生の道に、きつと歩んでいくしかないんだろう。

「……詐欺を選んだこと、後悔はしていないのかい？」

自分が勝手な想像を浮かべていた刹那、唐突に郷仲さんが僕に聞く。

「どういうことですか…？」

意味がわからないことを問うと、腕を組んで壁にもたれていた彼は、そこから背を離すと共に腕を開いた。

「人生というのは大きなキャンパスだと仮定する。始めに誰もかベタ塗りをする”命”というベースカラーに、次はどんな色を乗せるか？

次はどんなものを描くか？次は何の加工をするか？作品作りと言うのは、まずそれを想像する」

彼の言葉を聞きながら、僕はその言葉の通りにキャンパスを、そしてそこに、いろんな色を塗りつける想像をしてみる。

「しかし、その絵を描く上で、塗ってしまった色というのは、水彩だろうが油絵だろうが、そのままの元の色に戻すには、なかなか難しい…」  
確かに、どんな物にでも黒等の色をこぼしてしまえば台無しになってしまうだろう…。

この消毒液とエレベーター独特の匂いが降り混ざった空間を一枚の紙として、それに血の臭いを表す色が追加されれば、一気にこの場所は、恐怖や緊迫に支配されてしまう。

「君が塗った『詐欺師』という色で、どんなものができあがった？どんな自分が表現できていた…？」

「……それは…」

その答えとしては、“僕が思ったものとは違う”となる。

元から無能という存在だった僕に、詐欺師という黒色を足されてしまえば、立派な屑という心像の完成だ。

描けば描くほどに、自分という人間がマイナスに定義されていくのだと感じている…。

「少し話を変えよう……。私からスプリミナルの誘いという色を受け取ったとき…君はどうしたいと思ったんだい？」

質問を変える郷仲さんに、僕は狼狽えた…。

「チューブからその色を排水溝に吹き出して、全て洗い流したいと思った？それとも、その色を使って、新たな世界を描きたいと思った？」

「それは…」

なんとか返す答えを見つけようとする自分だが、なんとなくその答えに『自分が役に立たないと思うから』というのは、相応しくないと思った。

「……よくわからないんです…。そりゃ…スプリミナルに入れば、特異点に関することがもつとわかるとは思うんですけど、なんか…足が

でなくて……。ただ：『怖い』という思いが：先行してるんだと思つてます……」

俯きながら言葉を繕う自分は、本当に臆病だ。

新しいことをするのに、いちいち勇気を出さねばならないのが億劫に感じるほど、僕という人間は自分に自信がない。

自分ではない誰かに、背を押してもらいたいとすらも、どこかで思っているのかもしれない。

他力本願の臆病者に：役に立つことなんてできるわけがないんだ……

「…怖いと言えるということは……君には”恐れを定義することができる”ということになるね……」

ふと、彼が発したその言葉を聞き、僕は顔を上げた。

「私は、鏡面発光事件による二次被害によって、君の描けている”恐れ”という色を捨ててしまった……。この存在は、私に出来ないことを君には出来て、君は自分自信をしっかりと描ける力を持っているという証明となっている」

「恐れなんか？：ですか？」

「恐れなんか？、だよ」

喜怒哀楽の喜と楽だけで生きていたい。

そんなことくらいしか考えたことのない自分にとって、その言葉は新鮮で刺激的な物だった。

恐れがなんのためにあるのかなんて、普通に生活して気づくものなんかじゃないし、自分では、その存在がなんのためにあるのか、曖昧よりも散らかった言葉でしか表現はできない。

けれど、その恐れという物も自分を証明するための概念であり、間違ひなく自分を表現できる色だと、郷仲凍利は語り、僕はその言葉に間違ひなく魅了されている。

しかし、彼の中から恐れが無くなったと言うのはどういう事なのだろうか……。

〈ポーン！一階です〉

郷仲さんのことを少し考えている内に、エレベーターからアナウン

スが鳴った。

「一つ君に言っておこう…」

郷仲さんが話し始めた途端、エレベーターの扉が開くと、そこから漏れだした逆光が、彼の小さくも大きな背中を映えさせる。

「君の中にある色は一つじゃなければ、人生というキャンパスも決して小さなものではない。芸術への発達に働く可能性は無限大だ。だからこれからも、他人の物ではなく、君自信の色で自身と言う存在を定義”してみたまえ。難しそうに聞こえるが、君には簡単なことだよ…」

振り向き様、僕に向けて無感情の笑みを浮かべたその姿は、昨日僕を救ってくれた、あの少年の姿に似ていた…。

「自身を…描く…」

他人の物ではない、自分だけの感情で描くという言葉を聞き、僕の心は、新たなカメラのフィルムがパチンとハマったように、なにかなくしていた物を思い出した感覚が走った。

背を向けて歩きだす彼の姿は、スプリミナルの長としてではなく、郷仲凍利と言う一人の人間として、なにか大きな大きな感情を背負っているような、そんな気がした…。

T o b e c o n t i n u e …

### 3—3 『自己否定な僕と社長のS』

少し息苦しかったエレベーターを降りると、僕は駆けだし、多くの患者がいる診察の待合や、咳声の聞こえる総合受付を通りすぎ、郷仲凍利を追った。

「待ってください…っ！」

ようやく追い付いて声をかけたとき、彼はゆっくりと僕に顔を向ける。

「なんだい…？」

彼が僕に向けたその時の瞳は、日の光を得て、エレベーターの中よりも澄んでいるように見えた。

通りすぎる人々は、向かい合う僕らを気にも止めない。

彼の事を少しでも知れた今の僕になら、スプリミナルの事とか、自分の思っていることを、あまり臆せずになんでも言えそうな気がしていた。

拳を握り、僕はゆっくり口を開く…。

「その…スプリミナルって…」

ダダダダダッ！

ついにそれについて問おうとしたその瞬間突然、入口から一本の機関銃の連射音が聞こえる。

僕はビツクリして肩を揺らしつつ、音が聞こえた方向を向く。

「お前ら…静かにしろおッ!!」

出入口の前、金の短髪と迷彩柄の服を装った男が、怒号を吐き出しながら、天井に向かってマシンガンを撃つ。

先ほどまで、誰の行動も目に止めなかった院内に、多くの感情を具現化したような悲鳴が響き、この空間を一気に恐怖が占拠した。

「お前らのせいだ…お前らのせいだ！あの子は死んだんだあ!!」

激昂する男は、何度も何度も弾丸を放ち、患者や医師達を威嚇する。「殺してやるう！全員皆殺しだあ!!」

怒りに我を忘れているのか、張り裂けそうなほどに、声が喉から震

えている。

迫真の叫びに恐怖し、泣いている子供達は親に抱き抱えられ、一人の老人は神に祈るように手を合わせていた…。

「あ…あれは…!?!」

「言動を聞く限り…逆恨みだらうねえ…」

銃声に脅える僕とは裏腹に、郷仲さんは悠長に、患者や看護師達へ脅迫や威嚇を続ける男を眺めている。

「ど、どうするんですか!?!これじゃあ、他の人に被害が…」

焦りもしない郷仲さんの肩を揺らしていると、ポケットの中からカチャンと金属と宝石がぶつかる音がし、自分に少しの冷静さを取り戻させる。

「そうだ！僕の特異なら…」

弾丸を受けても大丈夫だと思い、僕はポケットからキーホルダーを取り出す。

しかし、自分がトランスをして彼に立ち向かおうとしたところ、郷仲さんは手を出して止めた。

「ユウキくん。覚えておきたまえ」

横顔から見て感じるは、少しの怒りと仕事開始の意気。

スプリミナル首領、郷仲凍利は、青色のジャケットの中から、軸にラメの入った藍色の小筆を取り出し、塵を落とすように振る。

「スプリミナルは必然か偶然か、君のような自身を定義できない人間が多く集まっている。ここで働き、戦っていくうちに、自分という人間を見つける者もいれば、未だにそれを模索し続ける者だっている…」

彼はスプリミナルへの言葉を紡ぐと共に、先程取り出したその小筆が青く発光し、少しずつその光を強める…。

「それに絶望するか、希望となるかなどわからない。しかし、空っぽだった自らの偶像に、色を付けられたと言うことだけで、そこには必ずメリツトが存在する」

鳴り続ける銃声に負けじと、光は少しずつ身体を包もうとするり

「そしてそれは、私という人間も値する」

そして、彼による全ての言葉を僕に伝え追えると、青き光は彼を包む。

「肉体換装…」

スプリミナル戦闘開始の合言葉。

それが彼の口から出ると共に、郷仲凍利の姿は黒き下地に青色のラインが光る、ロングパーカーとパンツ、そしてそれが逆転したようなカラーリングのストロールに変わると、彼は自分の顔を隠すように、そのフードを深く被った。

それは水原くんやおおいちやんの姿とは違って、なにか威厳のようなオーラが発されているように感じられる…。

これが、彼の戦闘スタイルということなのか…。

「あ…う…てめえ…だれ…」

ガキインツ!!

犯罪者が彼に銃を向けるよりも、一体どんな特異をもっているのだろうか？と僕が考えるよりも、患者達が彼の存在に首をかしげるよりも早く、その驚異的な強さが、この院内に瞬速で轟いた。

その技は、病院のタイルの床を伝い、ターゲット以外に一切の被害を被らせることなく、一瞬で男の体を氷で包み込んでしまったのだ…。

秒の単位にも直せない時間で作り上げられた氷の芸術品は、地面から枝分かれするような模様を作り出し、柱となる巨大彫刻は、犯人の悲痛な姿を中心として人間の様々な表情を表現する。

まるで”神にすぎる多くの人間”を表しているようだった。

その彫刻が病院の窓から差し込む日光に照らされると、その芸術の美しさが、より豪快かつ繊細な物へと極まった。

昨日感じた美しさと同じだ…。

今、この手の中に愛用の一眼レフ『M—DF 1027』があつたなら、是非ともこの美しき芸術を撮影し、自らの永遠の思い出として、人生の最期まで残っていたいとすら感じてしまった…。

「あ…アガツ…」

機関銃ごと凍らされてしまった男からは、凍った空気に喉が焼かれ



ていくように、キリキリと悲痛な音が聞こえる…。

「氷結のモメント……。我が芸術を守ってくれたこの病院を…決して傷つけやしない……」

発砲犯に向けて呟くスプリミナルの長…。

その姿、まるで太古から数えても、指折りと言われる歴戦の王者の一人のようだった。

「ぐ……ぐ……」

恨み節を言いたいのであろうが、喉から血が滲み出しているのが見えるため、痛くてなにも言えないということだろう…。

「うーむ…まあ、被害者はこつちだから良いだろう…責任は私にあるし……」

郷仲さんはそう言うと、パーカーのポケットの中から、鳥籠と針が合体したような、赤黒いアクセサリのようなものをとりだすと、それを氷塊に思い切り突き刺す。

すると、針の先端が刺さった場所から、水中にとじこめられた犯人の体が、その籠の中に少しずつ吸い込まれていく…。

パンツ！ガラガラガラガラ…

次の瞬間、奇々怪々な事に、バレーのブロッカーのようなかなりの背丈があった男が、手のひらサイズの小さなアクセサリに吸い込まれてしまった。

変身できるアクセサリだけでなく、この人間を吸い込んでしまう奇妙な籠も、スプリミナル独特の器具なのか？

ドンツ！

「うわあっ！」

そう考えている刹那、大勢の看護師や患者、医師達が僕を押し退けて、郷仲さんに群がった。

「ありがとうございます…っ！本当にありがとうございますっ！」

「あなたは命の恩人じゃ…なんと感謝したら良いか……」

「お陰でこの後の検診もできます！感謝を申し上げますっ！」

多くの人間の謝意に流されてしまった僕は、ひたすらに感謝をされている郷仲さんの表情を遠目から見ていた…。

「いえいえ…」

様々なありがとうが溢れている囲みの中、郷仲さんは彼らに丁寧に返事を返している…。

その表情は、パーカーからちらりと出ている口角から、これまでに一切見せなかつた満面の笑みを浮かべているように見えた…。

「さ…サトナカさん…すごい…。」

これまでの数々の彼の行いを振り返り、僕は思わずそう呟いていた。

犯罪者に対する迅速な対応と、一般人への対応、そして誰も傷つけない正確さと瞬く間に敵を凍らせるほどの強い能力…。

外見だけなら、普通のおじさんというだけなのに、その仮面の裏に隠された高いスペックは、口からでは説明ができないほどの強さ…。

その力こそ、彼が社長という座についている理由になっていることに、自分の中でなんとなく合致がいった。

そして、郷仲さんのこの立ち振舞いを見ると、僕は昨日自分を救ってくれた少年の面影を思い出す。

もしかしたら、水原くんは彼を無意識に真似ているのかもしれない。

その行為こそが、彼への信頼感と首領としての存在感の大きさを表しているのかもしれない…。

郷仲凍利は優しさや静かさの中に、誰かを守るための鋭き刃を隠している。

それがきつと、スプリミナルボスとしての資格なのだろう…。

「いやあ…少々対応と処理に追われてしまった…すまないねユウキくん」

未だフードを深く被っている郷仲さんは、愛想を降り巻くようにに微笑みながら、僕に駆け寄り、その後ろでは、今でも多くの人が彼に向けて頭を下げていた。

「感謝されるのは有りがたいが、私は社長だから、こつから責任問題追及があるだろうから、大変だね」

ブラックジョークを交えて笑う彼だが、社長責任とか、そう言うのがよく分からない自分は、とりあえず苦笑いで応答するしかなかった。

そのまま、僕らは病と感謝で溢れるその病院から出た。

この街は、もうすっかり夕日の橙色に染まっていて、目の前を通りすぎた一人のサラリーマンは、疲れた顔で家路を歩いている。

夕日に照らされた街…そこには僕ら、二人だけ…。

「じゃあ、私はこれで……」

病院から出て少し歩いたところで、郷仲さんは瞬時に元の姿に戻ると共に手を振り、西向きに足を向けた。

ブラックジョークの通りに、彼はこれから社長としての責務を全うしなければならぬのだろう…。

彼は自分なんかよりも強くて、優しく、なにかを背負う責任があるから、邪魔をしてはいけない…。

「……あの」

しかし、それでも自分は彼の歩みを止めさせる。

「なんだい？」

疲れや怒り等の感情を表情に全く浮かばせず、ニヒルな顔で振り向く郷仲さん。

先程聞けなかったことを、僕は今ここで、勇気をもって聞かねばならないのだ。

夕日に励まされつつ、少し息を整えて、それをついに口に出す。

「スプリミナルに入れば…僕もそうなれますかね…」

ずっと聞きたかった僕の言葉に、彼は首をかしげる。

「どういうことだい…?」

「……ここに入って…『無効化』という特異点を伸ばせば、あなたのように、守るものを守るようになれますか!? 誰かの命を、救うことができますか!?!」

僕は彼に強く聞く。

たられればお人好しな上にヘタレな癖した自分が、水原くんやお

いちゃん、郷仲さんの姿を見て、改めて誰かを救いたいと思ったんだ。子供の頃に一人の女の子を救ってから、声や思想には出来ずとも、ずっとそんな物になりたかったのだと思う。

水原くんのようなまだ大人ではない子達の強さと、郷仲凍利という人間と彼の持つ言葉の力が、僕の背中を押してくれて、ようやくそう決心が出来たんだ…。

ヒーローを目指しているわけではない。

僕は、守りたいものを守りたいだけなんだ…。

「これは…誰の言葉でもない…。僕の思いです…」

まだ継ぎ接ぎだらけの言葉だけれど、これが紛れもない自分の本心なんだ。

元詐欺師の自分なんか罪滅ぼしか？等と言われるだろう。

僕自信、罪は消せないと思っっているから、勿論そういう意味ではないし、誰かを救い続けていたら、きっといつか起きてくれるであろう妹にも、しっかりと顔向けをできるだろうから…。

守るためにスプリミナルに加入したい。

僕はその色を、自分のキャンパスに塗ってみたいのだ。

「……私に他者の運命の決定権はないが、言葉くらいならかけてやれる」

彼がその口を開こうとしたその時、夕日が西へと落ち、橙の光が街を攪乱するように、強く輝く…。

「きみならなれる…。強い特異点として…皆を守る存在に……」

屑みたいな存在の僕に、そう告げてくれた彼の姿は、西日に照らされ、逆光に伸びる影が僕の影を隠した。

やはり、言葉というの不思議なものだ。

自分で何度言い聞かせても、その気持ちには全く変わらない癖に、誰かにそれを言われたら、なぜか強く実感ができる。

それが、強き者からの言葉であるのであれば尚更だ…。

そして、刻まれた言葉は、僕の背を押す。

「僕、入ります…」

伸びる影の中、僕は真に決意した…。

「スプリミナルに、入れてください！できることなら、なんでもします！」

何処にも行き場がない僕には、ここしか残されていないとも思っ  
た。

なにをしようが、誰かよりも下に比べられて、結局たどり着いた詐  
欺の道でも、役立たずと言われ、誰にも見向きもされぬ。

何度悔し涙を流したか、何度怒りで我を失くしそうになったか、何  
度未来になれなかった日々を過ごしてきたか。

自分のくそつたれな性格と性分のせいで、たった一人の妹すら守れ  
ない。

そんな僕に、水原角也も太刀川蒼も郷仲凍利も、手を差しのべてく  
れた。

例え能力目当てだったとしても、それに応えて発揮するのが自分で  
あり、それを操れるようになって自分がそれに見合う人間になる。

そして、彼のように強くなって、妹や誰かを守れるようになりたい。  
自分は、このスプリミナルという場所で、役立たずから脱却し、願

いを叶えるんだ…。  
「スプリミナルへようこそ…ユウキ テツヤくん…」

冷たくも暖かい感情を感じる笑顔と、僕に伸びる絵具の染み付いた  
掌。

僕は忘れかけていた本当の笑顔を浮かべながら、力強いその腕を  
握った。

人間万事塞翁が馬、禍福は糾える縄の如く、沈む瀬あれば浮かぶ  
瀬あり等という、似たような諺が頭の上に浮かぶ。

スプリミナルに入ることが決まったとしても、結局なにがどうなる  
のかはわからない。

けど、自分の意思で彼についていくと決めたんだ。  
今度こそ、誰かを守れる強さを持てるよう、この誓いを夕焼けと彼

の腕に結んだ。

「……あつ、でもその前に、家探さないとなあ…。明日までに出ていか

ないと……」

「そういや、スプリミナル加入は良いんだけども、その前に僕が住む家の事を忘れていた……」

「とりあえず、今からでも不動産屋に行つて、安めのボロアパートでも探さないといけないな……」

「ああ、言い忘れてたけど、スプリミナルは基本寮制だよ」

「え？」

「何て思つてたところに、郷仲さんがスプリミナルの福祉対応等についての説明を始めた。」

「給料は歩合制だけど、携帯端末は支給、電気代や水道代などを含む寮の費用は無料。近くにスーパー含む商店街あり、休暇あり、好きな時間に休憩可能、しかし依頼放棄禁止。タバコ等の娯楽基本自由」

「な……めちやくちやホワイト……」

「と言うより、放任主義家庭のニートというか……」

「でも、これまでのようにノーインや犯罪者との戦闘をしなければならぬから、それだけ手厚い保証があるのは納得かもしれない……」

「ただ……君の情報は警察にもう報告されているんだけどもねえ……」

「ふあつ!?!」

「天国のような職場への感動から一変、サラッと吐き出された衝撃的事実に、更に驚かざるを得なかった。」

「ちなみに、スプリミナル加入を拒否した場合、君は詐欺罪で武装警察へ連行、約3年半に渡る詐欺罪によつて現日本刑法に乗っ取り10年以上の懲役と罰金でした……と、種明かししておこうか」

「もしか……彼は元からそのつもりで僕を勧誘しようとしたのでは……」

「なんて思っている、彼の浮かべる笑顔の意味を悟り、怖すぎて身が震えてきた……」

「さ……先に言つてくださいいよおおおっ!」

「母さん、僕は彼を選んでよかったのか、少し心配になりました。」



バラードディア：旧関東地方：。

こんな都市部でも、夜空と言うものが見えるのは、この場所だけだ。星が瞬くこんな夜、私は大久の書類を片手に、ビルの裏口からビルの中へと入る。

腕時計を見て、急がねばと思いつつ、タイミング良く停止したエレベーターへと乗り込んだ。

「ふう…」

特殊部隊の社長というのは本当に面倒な職業だ。

我らは元々アウトローな集団だから、世間や大きな存在には、白い目で見続けられるのは仕方がないことだ。

しかし、その大きな存在と言うものが、あまりにも”その後”と言うものを見すぎている。

現に先ほども、病院内での発砲事件の処理について、変に大目玉を食らってしまった。

—何故、許可をする前に特異を使用した。

—近くの武装警察隊員を呼ぶという選択肢もあつただろう。

—あなたは社長という自覚はあるのか？

—もしも関係のない人間を凍らせたらどう責任を取るつもりだった？

—貴様是我々警視庁側を侮辱しているのかね

思い出しても耳が痛い、この社会というものはそれが常識だからしょうがない。

だが、私も一人の人間だから、しっかりと答弁をした。

相手側が関係のない人間を傷つけられてしまうのを危惧して特異を使用したし、武装警察が到着した頃に医者がやられたりしては後に患者が大事になってしまう可能性も危惧した。

社長という自覚があるからこの判断をしたわけであり、関係のない人間を凍らせそうになったことがあるからこそ、今の私がいる。

私の対応が、警視庁を侮辱していると言うように捉えているのであれば、その人間はあまりにも浅はかだ。

正直、鼻をほじってアホ面を見せながら『ああ、そうですか』とだけ言ってテキストに流していたかったところだ。

警視庁長官がいれば、私と全く同じことを言つて、重役共を黙らせるような気もするが、一番命を狙われているであろう彼が、私を怒るだけのために現れるはずがない。

そもそも、彼らの言う責任問題というのはしつこすぎるのだ。

責任を取ることは勿論大切かもしれないが、それを追及しすぎる彼らは何様のつもりなのだろうか？

一度でもノーインに食われそうになりながらも討伐したことはあつたのか？

異能力者に全身を締め付けられ、骨をボロボロに砕かれたのとはあるのか？

マフィアによる発砲で、全身を蜂の巣にされたことはあるのか？

私が今までに受けた苦痛に比べれば、彼らの代替案すらない言及等、痲痺程度だ。

下手すれば人が死んでしまうかもしれない状況の中で、周りや身の丈を気にして犠牲者を出すよりも、自信のある特異の使い方で犠牲者を出さずに犯罪者を確実に確保した方が効率的だ。

私が出したこと等、警察学校の未熟者が無理をした位で済ませれば良いものを、頭の固い連中は本当に高飛車な白痴だ…。

そんな、上の人間による辱しめを受け続けていたから、いつの間にか夜を迎えてしまっていた。

とりあえず、やることを早く全てを終わらせて、先ほど想像した絵を白紙に描きたいものだ。

個展も迫っているのだから、上の人間は無駄な時間を削らせないで欲しい物だな…。

チーン！

そう思っていると、エレベーターが止まり、扉が開いた。

一応、私の部下に当たる者達はもう全員来ているのだろうか？

そう思っていると、出口の前で、ガタイの良い一人の男がガードマンのように礼儀正しく起立している姿が目に見え、飛び込んできた。



「お疲れ様です。郷仲社長」

とある一流企業の元社長秘書であった彼は、今でもその癖が抜けず、一応、私の秘書として働いてくれている。

「ハハハ…あまり堅苦しく言わなくても良いよセタクン」

正直、私は秘書をつけて良いような人間ではない。

だから、あくまでも形だけ秘書にしているだけだ。

瀬田という人間は仏頂面だが、気配りが出きる青年で、私から書類の入った封筒を優しくそつと受け取った。

「はい。それよりも、皆さん揃っています」

「うむ」

彼と共に、私は照明に照らされた廊下を歩く。

外を見ると、未だ電気が付いている場所が遠くに見えた。

我々のように、夜遅くでも働いている生物がこのバラードイアだけならぬ、この日本に残っているのだと思うと、残業と言う文化は愚かに思えてしまうな。

これを次の絵の題材にするかと考えつつ、私はスプリミナルの会議室の中へと二人で入っていく。

そこには私を含めて10の精鋭が、遅刻してきた私に元気に冷たい眼を向けていた。

うむ、いつも通りだ。

「全員呼び出しといて…なんのようだ…」

出口の近くにいる彼が、痺れを切らして私に聞く。

相変わらずだと思いつつ、私はサークル上に囲まれた机の右真ん中、電子ボードが背後備え付けられた場所に座る。

「全員を集めたのは他でもない。まもなく設立4年を迎えるこのスプリミナルだが、新たに新人隊員を迎えることになった」

それは勿論、悠樹哲哉のことだ。

彼が持つ能力が、希少すぎる無効化の能力と知らない彼らは、今さら足手まといだとふんぞり返るものが多かった。

「ほう…ついにこの隊にも1人目が来るわけですか…」

”物質を別の物質に変えられる特異”を持つ者は、新人の存在に興

味を示しているようで、机に肘を乗せてニヤリと笑う。

「へえ…。今度はどんなアーツになるのか、楽しみですね」

”全身から炎を出し、操れる特異”を持つ者は、優しく微笑み新人の加入を歓迎している。

「ふん…。どんな能力かはしらねえが…歯向かってきたら俺がねじ伏せるだけだ」

”体を鉄類に変える特異”を持つ者が、腕を組んで嘲笑する辺り、余程に彼を侮り、見下しているようだ。

「俺は新人に手加減などはしないぞ？どんな奴だろうが、着いてこれなければ、それで戦力外だ…」

”自分の周囲にある影を操る特異”を持つ者は、槍のように鋭く冷たい眼光を私に向けている。

彼も新人を歓迎する様子はないようだ。

「僕も…新人になるなら容赦はしないよ。ちゃんと、使えるかどうか見極めないと…」

”自分と自分の周りにある水分を操る特異”を持つ者も、歓迎しないかのようにそう言うが、正直、彼は少しつれない人間だから、本心は顔見知りである新人のことを気に掛けているのだろう。

「カツコつけてんじゃないわよ。どんな奴だろうと、結局治すのは私なんだから」

他の社員を見かね、”自分の血液を媒体としてあらゆる怪我を治せる特異”を持つ者が、見たこともない人間を嘲笑する彼らを、叱責するようにそう言った。

「でも、私は楽しみッ！やっその後輩ができるんだよ！」

”自分と自分の触れたものの重力を操る特異”を持つ者は、ピョコンと跳ねるように椅子からお尻を上げ、新人を心から楽しみにしているようだ。

「俺は、皆さんの支持に同意するだけです…」

”体からあらゆる植物を生やせ、操れる特異”を持つ者には自分の心はなく、私の隣で直立不動で全てを他者に一任しているようだ。

「まあ…皆、仲良くしてやってくれ。彼はまだ覚醒すらしていない。

それまでは…私も手加減などはしないよ…」

”水分を媒体として、全てを凍らせることが出来る特異”を持つ者、つまり私は、スプリミナル特異点の者達全員にそう言う、彼らはため息を交えながらも、はいはいと首を縦に振っていた。

普通の社長なら『なんだその態度は』と言つて激怒するのだろうけれど、スプリミナルの場合はこれで良い。

彼らは社員であり、同じ穴の貉だ。

私に命令をする権利があつても、彼らにそれを実行する義務はない。

しかし…新人となる悠樹哲哉を侮るのも今のうちだ、と私は感じている。

彼はきつと、この世界にある特異点の誰よりも強くなる。

それ程、強力すぎる特異に目覚めてしまったのもあるが、彼の強くなりたと言ふ目は、あの日の私か、それ以上だったと思うから…。

彼のこれからは、私は楽しみだ。

「新人については、これで終わりだ。各自、また出会つた時に挨拶位はしておくこと」

『了解』

テキストだが、彼らは声を揃えて答えた。

まあ、悠樹哲哉にとつて、ここが良い場所になることを願つておこ  
うか…。

「さて…それじゃあ次は、ミラーマフィア『或マス』への対策についてだ…」

To be continue…

#### 4—1 『Y講習中、K仕事中』

真つ白い日光が窓を通り、会社の内装を照らす。

朝の涼しい風に、街行く人は清々しい気持ちで今日を行くのだろうが、低血圧で倦怠感に惑わされている僕は、億劫に猫背になりながら、職場へ行くために建物内を歩いていた。

朝と言うものは憂鬱な存在だ。

夜、溜まりにたまった一日の疲れを癒すためにようやく休めたと思えば、パツと目が覚めると、いつの間にかそいつはやって来ている。ベッドと言う名の生活必需品タイムマシンが恨めしく思ってしまうが、かといつてそこに潜り込まなければ、翌日には寝不足で頭が壊れそうなほど痛くなる。

だから朝と言うものは嫌いなんだ。

しかもそれだけではなく、なんとなく今日は、昨日よりもまた面倒なことが僕の元へと流れ込んで来そうな気がするのだ…。

まあ、スプリミナルの規則として、どんだけ面倒でも僕は入社しないといけないんだけれども…。

「ハア…おはようございまーす…」

溜め息一つ付きながらオフィスルームの扉を開くと、そいつは窓を背に向けている重役専用の椅子に腰を掛け、今日配達されたであろう新聞を開いていた。

「おはよう、ミスハラくん」

今日もウザったく浮かべる無感情な笑顔が気に入らない。

今も蔓延する様々なウイルスが可視化されているような気分だ。

「いやあ…今も昔も、偏向報道が多いもんだねえ…。でも、新聞紙は画材になるから良いものだ…」

挨拶を無視してデスクの椅子に腰掛ける僕には全く動じず、郷仲は新聞を読みながら普通に話を続けた。

こういうマイペースと言うか天然と言うか…そう言うのが気に入く

わらないんだ僕は…。

こいつなんかと一緒の空間にいるのが腹立たしいという気持ちが半分、けれどこいつがいなくてこの社が成り立たないから仕方がないと諦める気持ちが半分…。

ああいかなんでこいつのことが好きなのかわからないな…。

「あれ…そういや、今日はサトナカくんだけだったっけ…？」

嫌いとは言うが、この社を仕切っているのは彼なのだから、シフトの確認については彼に聞かないといけない。

嫌いな奴が目の前になると、嫌いすぎて話もしたくないと言う人間もいるが、僕はそこまでひねくれてはいない。

「今日は、TRY an g i e の三人がノーイン討伐の依頼を受けて、街に行っている。アオイくんはいつものお店番で、後は非番か出張だね。でも、ミヤマくんは午後から別地区の医療機関の視察から帰ってくるらしい」

読んでいた新聞を机に置きながら、郷仲は応答した。

それにしても、彼の重厚な低い声は、いつ聞いても少し身の毛がよだつ…。

フィクションの悪役のボスはこんな声が好ましいのだろうかと思ってしまう程。

長くここにいる自分にとっても、彼の抱えているなにか恐ろしいオーラにはまだまだ慣れないものだ…。

「そう…んじや、今日のフリーは僕だけってことね…」

頭の後ろで腕を組みながら床を蹴り、椅子と僕の身体をくるくると回転させた。

フリーと言っても、一概に”自由”というわけではない。

事件がない時こそ、ふとした時に来るかもしれない依頼であったり、警察では手に追えない事件に備えなければならない。

というのが、スプリミナルとしての基本業務だ。

そのため、粗方の隊員は街に出てパトロールしたり、社内に待機し、貯まった報告書の製作や可能な限り他の課の手伝い等を行うことが多いのだが…。

「よし、んじや、占い行こう。今日はどれくらい稼げるかねえ」  
そんなこと、僕がするわけない。

とは言っても、サボっているわけでない。

ストリートの占い師をするというのも、立派な街の観察と待機なのだから、別に社則を破ってるわけではないし、自分にはそこまで体力がないから、もしもパトロールをしまくって、ふとした時に足がポツキリと折れたりしたら大変だからね（棒）

「とゆるわけで、用事があつたら電話かメールで呼んで」

デスクの真下にしまつてある占いセットを取り出し、僕は軽快な足取りで、扉の方へ向かおうとする。

「そうか、それなら今から用事だ」

だが無情にも、郷仲がそれを止めた。

「はあ？」

事件とやらは、僕らの思う通りに自粛をしてくれるようなものではなかったようだ…。

「金城コーポレーションという中企業の社長が、緊急事態でスプリミナルを呼んでいるらしい。動けるのは君だけのようだ」

依頼書類の入った封筒を手に、彼は僕に向けて仕事を回そうとするのだが…。

「はあ…この前はユウキくんの件でバカなスライムと戦つて、一昨日は猿芝居に付き合わされて、昨日は非番なのに引越しの手伝い、そんで今度は緊急事態？さすがに子供を酷使しすぎなんじゃないですかサトナカ社長さん？」

お生憎様あいにくさま、今の僕には、素直に指令を聞いてやれるほどのやる気は存在していない。

少し比喩法を使ってみると、三徹で小さな家を作り終え、少々バーニアウトシンドローム気味になっている大工のよう、という感じだろうか…。

「とは言っても…君しか出れる人間はいないだろう？それに、スプリミナル機密保持のため、私が現場に出ることはあまりできない。それに、今日はイチカを保育園へ送つてあげて、その後にはS・Tour

iとしての業務も待ってるもんでね」

「私用ばかりじゃねえか」

ダメだこいつ、社長業務よりも創作活動にまた身を置くつもりだ…。

「なにがなんでも、今日は僕は行かない。だってめんどくさいから」社長の怠惰への呆れと、自分の仕事への億劫がさ加減が強すぎてうっかり本音が出る…。

なにせ悠樹くんの騒動も大変だった上に、あの後、武装警察側からビル倒壊に関する報告書を書けと言われてメチャクチャめんどくさかったのだから…（ちなみにまだ制作中）

それで、その翌日の猿芝居に付き合わされ、さらにその次には引越し作業の手伝い…。

休憩自由の職場であっても、結局は業務完了までの労働もあるし、それに伴う事務課への申請やら、趣味の占いの時間やらも含めて、今日もまた沢山時間をとられたら堪ったもんじゃない…。

「そう…：ならば、私が行こうか…」

大きいため息を付きつつ郷仲は立ち上がって書類を脇に抱えてゆつくりと歩きだす。

「しかしそう来ると…：イチカの世話は誰がするのだろうか…」

また始まったよ…。

普通ならこれで黙っとけば済む問題なのだが、ここからが大変なのだ…。

「今日はカナエは新人研修で忙しいし、最近イチカは膀胱が緩いのかオネシヨをしやすくしてね…。そのための世話から、朝食の世話、着替え、洗濯、掃除、それから…：…」

誰も仕事をしたがらない時、こいつは独り言のように私情を話し、僕らの選択を狭めるような口撃をするのだ…。

「勝手にこつちに責任転嫁しないでもらえる!?!」

と、反論をしたところで、弁明テクニク的に有利な立場の郷仲くんが、諦めに動じるわけがない。

「あつ、そろそろイチカ起きてくるねえ…：…。今日は漏らしてないと

良いけど…」

「あー、ハイハイ！行けば良いんでしょ！行けば!!」

「んじゃ、頼んだよ」

で、結局こうなる。

待ち合わせ場所は封筒の中に入れてるからと、うざったらしくニコニコ微笑みながら、僕に依頼書類を渡すその姿が、また癩に触る…。

この野郎とでも殴ってやりたいが、反応速度スキルからなにからなにまで上位の彼に歯向かうなんかバカのことだ。

「この計算付サイコパス親父め…」

僕は吐き捨てるように彼にそう言っつて、封筒を乱暴に受け取った。

自分は実は本を読むことが好きで、昔、日本古来の忍術に関する本を読んだことがある。

その書物の60頁<sup>ページ</sup>ぐらいの所に“五車の術”という人の感情を巧みに使って聞き出すと言うのが記載されていたのだが、彼のこのメンタリズム的口撃は、その技に似ている気がする…。

自分も含めて、この忍術に乗っかってしまう連中が、善悪ひっくり返して何人もいるものだから、僕自信もまだまだ未熟者だと感じてしまふな…。

ただまあ…依頼を解決して金をもらうか、嫌いな奴の娘（幼女）のおしっこを片付けるか、と選択を迫られるとなったら、自分は依頼を受ける方がマシだな…。

「はあーあ…んじゃ、行くか…」

めんどくささに身を駆られながらも、僕は立ち上がり、しぶしぶ出口へと歩きだす。

こんな手に引つ掛かる自分への落胆を忘れ、依頼を遂行させようと気持ちを入れ換えた。

とその前に、一応依頼者との待ち合わせ時間を確認しないといけないため、僕は扉の上に備え付けられた時計に目をやった。

「……あれ?」

その時計の長い針は『XII』を、短い針は『IX』を刺している。ちよつと待て…。



確か…『IX』ってアラビア数字では……。

「……あつー！」

しまった！やられた！

「今9時なんだからイチカくんいないくない!?!」

バタンツ！ガチャツ！

気づいた時には、郷仲くんは僕だけを残し、オフィスルールの奥、社長室への出入り口を使って逃走した。

それだけならまだしも、終いには部屋に鍵まで掛けやがった…。

「あの野郎…絶対、今日も絵描くな…」

郷仲への怒りで拳を震わせてももう遅い…。

そもそも、郷仲凍利という人間は、考えることがわからない上に、こういう自由人のような考えるが先行しているから尚、腹立たしい。

彼は社長であると共に、天才の言葉をもらうほどすごい画家を兼業しているため、その二足のわらじがとても大変なのはわかる。

だけど、絵ばっかり描いてないで、こっちの本業もちゃんと時間作って向き合えつつーの…。

「あーあつー！リーダーがあんなのでこの先が思いやられるね！」

あいつに聞こえるかどうかはわからんが、わざと大きな声で僕は嫌みを吐き出しながら、出口の扉を開けた。

「おつとー！」

そんな中、開いた扉の向こうから、新人が躓いて転びそうになりながら、オフィスルールのなかに入ってきた。

「おお…おはようユウキくん」

扉を開けたらいきなり僕が出てきたことに少し驚いていたようだが、彼はすぐに冷静になり、体勢を立て直した。

「水原くん。仕事？」

「ああ…めんどくさいけど、依頼が来てねえ…。他に任せたいけど、今日はあおいも店番、他のメンバーも非番や出勤中で社長もそれに該当…。あー、めんど…。」

いけない、彼への返答ついでに、思わず郷仲への文句を言ってしまった。

「まあ…がんばって…」

予想通り、彼は苦笑いで相槌を返してくれたが、少し申し訳なかったな…。

「そつちもねえ〜…」

愚痴り終えた僕と、それを聞き終えた彼は、互いの健闘を祈り、互いへと手を振って見送った。

先日は、彼のいないところで、使えるかどうかを見極める…なんて僕にしては少々カッコつけた言葉を言ったが、とりあえずは人の愚痴を聞いてくれる点では役に立っているようだな。

まあ、重要なのは現場で役に立つのかということだし、初日だからあまり期待はしていないのだけれど…。

「あつ、ミズハラくん、もう新人くん来てる？」

部屋から出て扉を閉めてエレベーターに歩き始めると、目の前から叶くんが歩いてきて、少し遠目から僕に聞いた。

「来てるよ。サトナカくんは引きこもってるけど」

言葉の皿に皮肉を盛って彼女に投げつけるが、スルースキルの強い大人は、そんな弱い口撃筈が聞くはずがない…。

「ああ…実は、数日後に品評会があつて、その追い込みみたい。トウくんが迷惑かけてごめんね」

生意気なガキの言動にも動じず、世に言う冷静な大人の対応をする叶くん。

しかし彼女は一応妻だから、夫の思いはできるだけ擁護していたいようだ…。

「まあ良いよ。司令塔が死んだら、元も子もないし…：僕は僕で、依頼に行ってくる」

叶くんの家族愛を思い、郷仲を少しは肯定することを言ってやりながら、僕はまた歩きだした。

「気を付けてね！」

すれ違いざま、笑顔で見送ってくれる彼女に向けて、僕は手をひらりと振った。

依頼前の社員の不安をかき消すためか、単純に彼女は笑顔が好きな

のかわからないけれど、叶くんは僕らだけじゃなく、色んな人についても笑顔を見せてくれている。

30代後半であっても、とても若々しく見える彼女が、僕らのような社会不適合者を笑顔で見送るそのスタイルは、嫌いではない。

彼女と別れた後、僕はエレベーターのボタンを押し、到着を待つ。

「中企業の社長ねえ……」

ふと、さつき受け取った封筒から書類を取り出し、そこに書かれた情報に目を通した。

どうやら、依頼人の立場的に考えても、今回の依頼も一筋縄では行かなそうだ。

ちなみに”あまり乗り気ではない”というのは、あくまでも自分の怠惰というだけだから、しよるいの写真に載っている依頼人とは全く関係ないことだけは言っておく。

「ふう……まつ、がんばりますか……」

小さく息を吐いて、人並みに気合いをいれつつ、たったいま開いた扉の中へ、僕は足を踏み入れる。

怠惰と気合いが織り混ざる中、今日も今日とて、僕の騒々しい一日が始まった訳だ……



昨日まで詐欺師だった僕は、目を疑うような様々な出来事を経て、特殊な探偵組織スプリミナルに加入することにした。

生きてこのかた、24年住んでいたアパートを後にして、誰にも流されず、僕自信が決めたことへの一步を踏みしめた。

「これどこやったっけな……」

早朝、僕は段ボールを開く。

昨日、事務の人に案内された社員専用の寮は、まるでビジネスホテルの一室のような広さで、収納もあれば、ベッドまで支給されていた。家電等はさすがに支給されなかったが、ずっと使ってきた物があるし、前のアパートとは違い、ガスや電気もしつかり通る上に、風呂と

トイレ別の上に、Wi-Fiまで完備されている。(以前は家賃払ってない嫌がらせでちよくちよく切られてたのに)

自分なんかこんな良いところを使っても良いのか?と思ってしまうが、長い間住んできたあの家と別れて、少し寂しさもあったりはするな…。

「よいしょつと…。」

なんてことを考えつつ、僕は段ボールから取り出した電子レンジを、冷蔵庫の上に置いて、ヒューズをつなげた。

スプリミナルに加入を決め、前の大家に感謝を告げた後、スプリミナルの事務員の方達(ついでに駆り出された水原くんも含む)と一緒に、なんとか全ての荷物を運び終えたのが、昨日の夜前の頃だった。引越しがとりあえず完了した後、僕はそのまま眠ってしまった。次に起床したが早朝の5時前。

出社時間の9時までには時間があつたため、引越しの途中、寮の近くのコンビニで買った朝食を食べながら、片手間に荷物の整理をしていた。

「はあ…やつと作業終わった…」

そんな荷物整理も約4時間程かけて、ようやく引越し完了と共に、自分の部屋が完成した。

特に、大きなインテリアは無かつたし、捨てるものは捨ててしまったから、あるのは自分と妹の私物と電化製品、そして母の遺影代わりの写真くらいだ…。

「ごめんね…母さん。うち、追い出されちゃって…。」

一息ついた後、小さなテーブルの上に、仏壇のように飾った母の写真にそつと話しかけた。

「これからなにがあるか…わかんないけど…とりあえず、やってみるよ。ダメだったら…その時かな…」

苦笑いでそう言うが、声が帰ってくるはずはない。

けれど、きつと母なら『テツヤならなんとかなるから、頑張つてこい』って言つて、背中をボンと叩いてくれるはずだ。

そんな妄想をしながら僕は立ち上がり、パンが入っていた袋を今ま

での自分と一緒にゴミ箱に捨て、いつものマゼンタの上着を羽織った。

「よし…行つてきます」

母にそう言つてから鞆を背負い、僕はその新しい寢床から外に出た。

この建物はコンクリートで出来ているが、そこまで新しいというわけではない。

正直、学生マンションがリフォームされた物と言つた方が早いのかもしれない。(事務員さん談)

最近の建物は、もつと生物が無駄な動きをしなくても良いように、オートメーション化が進んでいるのだろうが、ここは元々古い建物の改装というだけだから、W i f i 以外の I o T 的なシステムはほとんど内蔵されていないし、そもそも、特異点の人達が強いから、管理人もいららないらしい。

まあ、もしも特異点が暴走したら…なんて考えもあるのかもしれないから、管理人をつけない方が逆に良いのだろうな…。

「あ…そういやお隣さんどんな人だろ…」

ふと興味本意で僕は両隣の部屋を見てみた。

立て札には『瀬田』と『仙石』と書いてあるが…一体、どんな人で、どんな特異点を持つているのだろうか…。

大学生や社会人に成り立ての頃のように、新生活に少しワクワクしている僕は、少し浮き足で寮の階段をかけ降りる。

皆、仕事に行つていいるからか、一階まで降りても、寂しい程に人の気配は全く無かったが、玄関を開ければ朝日が燦々と街を照らしている光景が広がった。

「良い天気…」

朝の心地よい日光と空気を浴び、僕はグツと伸びをした。

これだけのんびりしていても、寮の出口からスプリミナル本部の入り口までは隣接していて、徒歩で約十数秒くらいしか掛からない距離だから、ギリギリまで作業をしても普通に間に合う。

まさに好立地で理想の場所な上、夢のようなホワイト企業と言つた

ところだろう。

まあ、業務内容を聞かなければ、だけど…。

そんなことを考えつつ、僕はスプリミナル本部へと入り、近くのスイッチを押すと、金色の檻のようなアンティークの扉が開き、すかさずエレベーターに乗り込んだ。

上階へ行くため、この個室を巻き取る機械音が、ゴウンゴウンとこの空間に響く…。

ここがもう、いつも利用することになる場所になるんだ。

目的の階に着いたら、もう自分はスプリミナルの一員なんだ。

自分が馴染めるかという緊張感と、新たな職場への高揚感に、胸の鼓動が波打つ…。

「いじめられたりしないと良いけどな…」

なんて苦笑を浮かべていると、エレベーターから到着のベルがなり、扉が開いた。

一昨日の案内を思い出しながら、日の射し込む廊下を歩きつづけると、扉の横に『特異探偵課』とかかれた小さい看板が張り付けてある場所に着く。

ここを開ければ、もう社員。

身なりを整えて、大きく深呼吸をして、意気込む。

「初出勤…：頑張らないと…っ！」

しっかりと心の準備が整ったところで、目の前に扉のドアノブに、そっと手を掛けた。

ガチャン！

「おっと！」

しかし、ドアノブを回そうとした瞬間、扉がいきなり開き、そのまま転びそうになりながら部屋の中に入る形になってしまった。

なんとも締まらない初出社だこと…。

「おお…おはようユウキくん」

現在とまどっている僕の代わりに扉を開いたのは、水原くんだった。

「水原くん。仕事？」

僕が聞くと、彼は一つため息をつく。

「ああ…めんどくさいけど、依頼が来てねえ…。他に任せたいけど、今日はあおいも店番、他のメンバーも非番や出勤中で社長もそれに該当…。あー、めんど…。」

事情説明と共に愚痴を溢す水原くん。

部屋のなかで何か揉め事でもあったのか、少し苛立っているのが目に見えた。

「まあ…がんばって…」

何があつたのか少し聞いてみたかったが、彼の不機嫌を逆撫でしないように、僕は苦笑いで言葉を返すだけにしておいた。

多分、彼を怒らせたらめんどくさそうな気がするし…。

「そつちもねえ〜…」

彼は仕事への怠惰な感情を持ちながらも、僕に手をヒラリと振って、そのまま行ってしまった。

「相変わらず大変そうだな…。この仕事…」

なにが不満だったのかはわからないけれど、とりあえず彼の無事を祈りつつ、僕は職場の中へと入った。

内部を見渡すと、部屋の奥に郷仲さん用の大きなデスクが置かれており、壁には英数字の時計とカレンダーやホワイトボードが飾られ、川の字に置かれたそれぞれ使い古されている9個のデスクと椅子、机の上にはパソコンや書類等の仕事道具が備わっている。

そして、出入口から一番近い、机が並んでいる場所の一番端には、おそらく自分が今後座ることになるであろう新品のデスクがビニールに包まれたまま置かれている…。

警察特殊認可特異行使結社…とは言ってたが、そこに特別そうなものはなく、ただありふれた仕事空間で、特になにか武器とかぶつとんだ装飾みたいなものはなさそうだった。

仕事内容以外だと、案外普通の企業って感じがするな…。

「あつ、来たわね新人くん！」

ふと、開いていた扉の奥から声をかけられた。

少しビクンと肩を揺らしながら振り向くと、そこにはスーツ姿の叶

さんがいた。

「あ、カナエさん！あ、えっと…」

驚きと普通に話しかけようとする気持ちを抑えるため、僕は姿勢を正す。

「今日からお世話になります。ユウキ テツヤです。これから、よろしく願います」

出会うのは初めてではないと言っても、彼女はこれから仕事仲間であり先輩になるわけだから、頭を下げてしっかりと挨拶をしなければならぬ。

「よろしくね。改めて、私は事務課長のサトナカ カナエ。事務的なことを中心にして、新入社員の教育もしてるの。そういや、寮の方はどうだった？良い感じ？」

しかし、彼女は堅苦しいことは好きではなさそうで、結構フレンドリーに話しかけてくれた。

「はいーまあ…生まれたときからいる場所から引越すのはあれでしたけど…」

それでも一応敬語を貫きつつそう言うと、彼女は明らかに地雷を踏んだとでも言いたいように、眉をしかめてしまった。

「そっか…確か追い出されちゃったんだよね…ごめんねこんなこと聞いて…。できれば、うちが気に入ってくれと嬉しいけど…」

この人、やっぱり普通にいい人だ…。

そこまで気にはしていないけど、ここまで言ってくれる人なんて、今まで出会ったことがなかったし、色んなことがあつてちよつと人間不振気味だったから、言葉をかけてくれただけでも、僕は嬉しかった。「それじゃあ、ちよつと気分を返るっていう意味も込めて、スプリミナル本部を見て回りますよう。デスクの場所とか、事務室や開発室の事とかも知っておきましょうね」

「はいー」

久しぶりに新社会人の時のような元気な返事をした。

優しい叶さんなら、なんとか着いていけそうな気がする…。

「それで、その後にスプリミナルの事や特異点のことを解説するわ。



それに、あなたのエンブレムの新調とか…とにかく今日は大変ね」

「新調…ですか？」

そのワードに僕は首をかしげる。

普通にこれでも使用できるけれど…キーホルダーを新調とはどう言うことだろうか？

「うん、エンブレムは使用者のライフスタイルや好みに合わせて変えることが出来るの。カドヤ君みたいなアクセサリーとかが一般的かもしれないけど、トウ君のように、筆とかの思い入れのある物や、アオイちゃんみたいな衣服でも全然ありなの」

彼女の話聞き、僕はポケットからキーホルダーを取り出して眺める。

「へえ…そんなに種類が…」

確かに、キーホルダーでも持ちやすいけど、それよりも自分に馴染みのある物の方が、持ち忘れとかも無くなるだろうから、そっちの方がいいのかもしれない…。

「まあでも、今はそれを仮の形にしておいて、形状の変更は覚醒の後にしてもいいかもね」

「覚醒…？」

なにか、中二的な少年心をくすぐる言葉に僕はまた首をかしげてしまふ。

「まあ、それらは後で解説するにして、まずはあなたが働く場所を見ていきましよう」

それ以上の説明はせず、彼女は扉を開いて、部屋の外に足を出した。「あ、はい」

もう少し覚醒について知りたかったが、とりあえず僕は言われるままに、彼女について行くことにした。

特異点の事について色々聞けるのは、きっとこれからだろう…。

T o b e c o n t i n u e …

## 4—2 『Y講習中、K工作中』

ちよつとだけ熱い…。

4月の後半に差し掛かろうとしているのに、もう初夏に近づいているのか？と思うほど、太陽が眩しい。

今年の夏は猛暑になりそうだと思いつつ、僕は封筒のなかに入っていた書類の通り、指定のコーヒーチェーン店の中へと入った。

「いらつしやいませ〜」

全国展開されている有名なチェーン店だからか、店員各々の挨拶もしつかりしているし、若々しい大人の人達も沢山いる。

うちのような近所の人くらいしか来ない喫茶店とは比べ物にならないな。

なんて思いつつ、僕は書類に入っていた依頼者の写真を片手に、店内を見渡した。

香り高いコーヒーの匂いが舞うなか、店内にいるのは、登校日であろうに机に座って読書をしている高校生であったり、コーヒーを片手に仕事をしているビジネスマン、たつた今カフェオレを受け取った子連れの女性は、一口それを飲みつつ出口へと向かっていった。

「あの人かな…?」

様々な人間が行き来するカフェの中、僕は窓側に座っている一人の中年男性を見つけ、そこに歩み寄った。

「カネモリ シンジくん…?」

机に手を置きながら聞くと、僕が何者か知らない彼は首をかしげた。

スプリミナルは秘密結社だから、この反応は仕方がない。

自己証明のため、僕はパーカーについたエンブレムを揺らしながら、タロットカードのケースをポケットから取り出し、そこから名刺を一枚引き抜いて、彼の目の前に置いた。

「…っ！はい！スプリミナルの方ですよね!？」

僕がスプリミナルだと気づいた依頼者は、即座に立ち上がり、僕の右手を彼が両手で掴んだ。

「あ…うん…」

少し引き気味になりながらも、彼の問いに答える。

中年といつても、近くで肌を見る限りはまだ若そうで綺麗な純人類だ。

髪は綺麗に7：3整えられているが、スーツは少し古めの形。

なりのには平社員にも見えるが、彼のような人間が社長となつたつて、別に不自然じゃないのが今の時代だ。

「どうか…どうか！娘を助けてくださいっ！私には…あなた方しかないんですっ!!」

突然、血眼になりながら穆に悲願する姿と大声に、驚いた多くの人間は一斉に僕らに目を向けた。

こういうケースも良くあるが、個人的に注目されるのが嫌いだから、僕は彼の近くに「シート！」と人差し指を立てる。

それにハツとした依頼者は、周りを少し見回すと、明らかに浮いていることに顔を赤らめる。

失礼にならないよう、僕らは他の客に向けて軽く頭を下げ、近くの席に座った。

「それで…娘って？」

気を取り直して、腕を組みながら机に置き、今回の依頼についてを聞くと、依頼人は周りに気遣いながら、小さな声でそれを話し始めた。

「はい…実は……」

精密機械部品業界の中企業、金城コーポレーション社長、カネモリ シンジ 兼森 宍道。

彼が今回の依頼者だ。

依頼を簡単に言うた『娘を探してほしい』とのこと。

数年前、妻に先立たれてしまつてからシングルファーザーとして、小学生の娘、カネモリ ユウコ 兼森 柚子を、彼は男手一人で育てていた。

父親と中企業社長、二足のわらじを履いて、愛する娘のために死ぬ気で頑張っていたらしいのだが、その娘はつい最近、反抗期に入つて

しまつたらしく、最近では父を無視したり、いきなり話を遮断したりと反抗的な態度をとられていたとのこと…。

そのために、あまりコミュニケーションもとれていなかったし、そもそも社長業が沢山立て込んでいたから、一緒に話すこともあまり多くなかったとのこと。

その影響でか、最近では彼の意志も、育児から仕事に向いてしまい、娘を放っておいて夜まで仕事をしてしまうこともしばしば…。

ここまで聞けば、仕事優先のダメ親に聞こえてしまうが、だからと言つて、彼女を愛していないわけではなかったらしい。

粗方の彼女の世話は、ちゃんと家事代行サービスの人間に頼んでいたらしいし、”今日は娘がなにをしていたのか”等も、しっかりと報告してもらおうようにし、たまには土産を買つて帰ることだつてあつたとのこと。

家事代行サービスの来ない時間、所謂二人きりで朝食をとる時間の間でも、なんとか彼は反抗期の娘と寄り添おうとしていたのだが、彼女はそれに反発してか、ひたすら無視を繰り返していたとのこと…。

しかし、その反発の気持ちだが、この悲劇を生んでしまった…。

確認できた時間は昨日の18時45分くらいのこと。

依頼人が仕事の最中、突然変異家事代行サービスの従業員である亀梨<sup>カメナシ</sup> 叶緒<sup>カナシ</sup>から「柚子ちゃんが帰つてこない」との電話報告があり、彼は仕事を放り投げて飛び出し、一晩中彼女の姿を探した。

しかし、いくら搜索をしても彼女の姿どころか、手がかりも全く見つからず…。

それでも娘の安否が心配で、警察に駆け込んだのだが、警察側は『手がかりや証拠がなければ、下手には動けない』という理由だった。

そのため、彼は警察経由でスプリミナルに書類を提出、依頼したようだ。

一応、警察と連携してるからこそ、このスプリミナルに面倒が回ってくるってことは良くあることだから慣れているが…税金泥棒扱いされるのが分かるほど、少し職務怠慢気味なのではないか?とも感じた。

「それで……ここが娘さんの登下校ルートってこと……？」

彼の一連の話を聞いてから、僕はコーヒーチェーン店から出て、依頼人の案内で通学路となっている、町工場の近くの道まで来た。

ガンガンと機械音が少しうるさいが、もしも誘拐するとなると、被害者の叫び声を隠せる場所としては、最適かもしれない……。

「一年生どころか、保育園の頃から今まで、一切通学路が変わったことはないんです」

「ふうん……」

彼の言葉を一応取り入れつつ、僕は周りを見回す。

町工場の通りの近くには、スーパーや民家もちらほらと見えるな……。

それなら、いくら機械音が大きいと言っても、町工場の人間がいるなら、兼森 柚子が『助けて!』と叫ばなくても、目撃した人が一人位はいる気がする……。

また近隣住民には聞き込みもするけれど、もしも一人も聞いてないのであれば、誘拐の線が弱くなるな……。

「まあ……行方不明って言っても、それが誘拐なのか家出なのか迷子なのかって言うのを、一概に判断することはできないよね……」

「な……なぜ……？」

僕自身の考えに、依頼者は首をかしげた。

「だって、君は娘さんとのコミュニケーションが少なかった。娘さんが寂しさを紛らわすために、どこかへ行ってしまった可能性もあるし、君に気をかけてほしかったから、あえて家出をして探して欲しいという可能性もなくはない」

あくまでも自分が考察した事を答えていくと、依頼者は自分自身の至らなさを否定したいかのように言葉を取り繕う。

「で……ですが、家出でそこまでしますかね!? 私、隣街まで探したんですよ!」

「さらに隣の街までバスや電車で移動するという可能性もなくはない」

「でも……それなら、他の人が不思議に思っ警察に通報することだっ

て…」

「夕方頃なんだから、登下校が電車だと勘違いする可能性だってあるでしょ？それに、ここは大都会バラーディア。他人に無関心な人間も多いし、なにより小学生の高学年が一人で電車に乗るなんて、不思議じゃないよ…あと….:あつ」

僕が反論をしていくうちに、依頼者が少しずつ彼の顔から色がなくなっていくのに気づき、さすがにまずいと感じて口を紡いだ。

「そ…:そうですか….:」

流れ込んできた僕の言葉に落ち込む彼の姿を見て、自分はつくづく自分を嫌いになる。

依頼者を不愉快にさせる気はしなかったのに、まるで論破しつづけるような受け答えをしてしまい、落ち込ませてしまったがため、少々悪いことをしてしまったような気がした…:

まあ、人間嫌いの自分だから、きっとこんな感情もすぐに忘れるのだろうが、きっと自分の中で微かに息をしている性善説の問題だろう。

「ごめん、ちよつと鬱な気分にかけて。とにかく…:迷子だろうが誘拐だろうが、スプリミナルは善良であるならば、人間もリージェンも守らないといけないから、ちゃんと君の娘さん探すよ」

僕がそう言うと、彼はパツと顔をあげた。

「ほ…:本当ですか!？」

少々面倒ではあるが、こんなな悲願の顔を見せられてしまったては、探さないわけがない。

「勿論。スプリミナルの社則にもあるんだ。受けた依頼は絶対に全うしろってね…:」

少し悲観的になっていた依頼人に、僕はニヒルに微笑んで安心させようとする。

「よろしくお願いします…:っ!」

「はいはい…:。承りましたよ」と

深く頭を下げる彼に手を振りつつ、僕はここらの調査を始めようと歩きだした。

「ん？」

その瞬間、自分が違和感を感じたのはその瞬間だった。

靴の下から、普段よりも大きくジャリ…つという音が聞こえたことに疑問を感じた僕は、その場でしゃがみ、アスファルトの地面をよく見てみる。

「……砂…？」

それを指につけてみると、石と言うには明らかに細かすぎるし、粉と呼ぶには固すぎる物が、まばらだがこの地面に多く落ちていた…。

「何故ここにこんなものが……」

手についた砂を眺めながら考えてみる。

こちら辺は登下校する児童が多いし、グラウンドや砂場の砂が靴や服について、それがここに落ちた…と考えられないこともない。

だが、それにしてもあまりにも量が多い気がするし、色も少し変だ。

まるで、地面と同化させようとしているような……。

「そうか……」

非幾何学的に頭に浮かんでいる想定が、少しずつ道を狭めていくように、自分の中でその結論が出来上がった…。

「カネモリくん。前言を撤回する」

「へ…？」

たった一つの手がかりから成る無数の想定から、導きだされたその結果は一つ。

「今回の事件、誘拐の可能性が高い……」

決定的な断言は正直できないが、自分が掴んだこの予測を信じ、僕は彼に向けて宣言した。

消えた反抗期真っ盛りの社長令嬢。

手がかりは登校ルートと砂。

少なくとも多い手がかりの中、兼森柚子行方不明事件は、そこから幕を開けた…。



叶さんの案内で、僕はスプリミナル内の様々な部屋を見て回った。自分が働く職場はもちろん、喫茶店のCafeフェイバリットや休憩室、事務課や会計課、情報捜査課、開発室等の様々な部屋を見て回った。

仕切っていた者の多くが人間だったのが目立っていたが、リージェンやそのハーフであるリージェレンスの人たちも、少なからず仕事をしていた、パワハラだとかセクハラだとか、そう言ったブラックな感じの類いも、一目では見られなかった。

多くの種族が分け隔てなく働く。

統制を図る組織として、まさに相応しいスタイルなのかもしれないな…。

「……そして最後に、ここが会議室」

と、最後に叶さんに連れてきてもらったそこは、まさにフィクションで良くみるようなサイバー調の会議室…。

中心には床に備え付けられた大きな机があり、扉から向かって左、おそらく大勢が注目するであろう場所には大きな液晶スクリーンが備えられ、その横にはホワイトボードも置かれている。

部屋は全体的に少し暗めだが、壁や床、机に通っている非幾何学的なラインが照明になっていて、行動するのには支障はなさそうだ。

「ちよつと近未来的ですね…。なんかこう言うの、重苦しいのと同じに少しワクワクします…」

想定していたものとは全然違って、会議室がまるでSF映画のようだったから、また自分自身の少年心をくすぐってしまうのだ。

「ちなみにちよつと豆知識なんだけど、元々スプリミナル本部は特に決まっていなくて、特異点が数名集まった後、やつとここに移転したっていうのはさつき話したわよね？」

「あつ、はい」

確か、開発室へ行くときのエレベーターの中で話してくれたな…。

「その時、メンバーの皆が案を出しあった末に、こんなSFチックな物になったのよね…。当時は男ばかりだったからかなあ…あおいちゃんもこういうの好きみたいだからノリノリだったし…」



「へ…へえ…」

なるほど…やっぱり僕と同じような少年心に突き動かされた人がいたから、こんなことになったのか…。

それを聞く前は、郷仲さんは中二病なのだろうか？と失礼なことを思っていた。

この会議室に向けて、やれやれとため息をつく叶さんには、こう言うSFアドベンチャー映画のようなかつこよさはわからないんだろうな…。

しかし、そんな遊び心もこの秘密結社のなかにあるのかと考えると、すこし意外だな…。

「それじゃ…これから色々お話しするから、そこに座ってもらえる？」

「わかりました」

彼女が指定した通り、僕はスクリーンの前の席に座ると、足元の照明が少し弱まり、液晶に白色の映像が写された。

「それでは、ユウキテツヤくん。これから新人研修を始めます」

彼女がそういった瞬間、スクリーンにはパワーポイントでつくられたような『スプリミナル新人研修』と言う文字とシンプルな背景が写し出された。

「あ、よろしくお願いします…」

僕は椅子から立ち上がり、深くお辞儀をした。

「はい、よろしくお願いします。座って良いよ」

彼女の返答に合わせ、また腰を掛ける。

自分はこういう企業の就職は全くしたことが無いのだが『それっぽい』という新鮮な感覚が、僕の身体をめぐっていた。

「それじゃあまず、特異点についてね」

開始の言葉と共に、スクリーンの画像がリージエンと人間の身体図に変わり、叶さんは、自分のスーツのポケットからポインターペンを取り出すと、それから赤い光が照射スクリーンに照射される。

「この世界は、リージエンと人間が共存する世界。でも、力や頭脳はやっぱりリージエンの方が少し上って言うのは知ってた？」

「い…いえ、普通に同等かと…」

叶えさんの問いに僕は首を横に振る。

テレビからでも学校からでも『人間とリージエンは対等だ』と言っていたから、そう言うことは全く知らなかった。

「実は、近年の学業グラフや企業の表を見てみると、リージエンと人間を比べて、リージエンの方がほんの少し高いの」

スクリーンに次に写されたグラフには、確かに微妙の差があることが記されている。

確かに侵略後の世界の中で、雑誌やテレビで見る成功者や著名人、思い浮かべてみると、リージエンの方がほんの少し多く見る気がする。

ただ、そう言う著名人を集めて、リージエンと人間を分けるとしても、割合はどちらかが過半数になることはない位だろうから、本当に”リージエンがほんの少し多い”くらい…と考えた方がいいだろう。

「その上、<sup>ヘトロモーガン</sup>異形生命体の括りとして考えると、無知能生命体<sup>ノイ</sup>だって脅威の一つ。自分が生きるためだけに動いているだけで、本質は動物と全く同じで同じと言われても、それが私たちに牙を剥かないわけがないわよね」

彼女の言葉の投げ掛けに、僕は頷く。

「確かに…メディアでよくノーインの事故を見かけますよね…。ペットにするっていう人もいるらしいですけど、それはどうだか…って感じしちゃいます…」

害獣として判断されているが、本来ノーイン自体は、サバンナで生きているライオン等と同じただの動物だ…。

それと、ついこの前キメラ型のノーインに襲われた…と彼女に言うとうとしたが、あまり心配掛けさせたくないという気持ちで先行して、口を紡いだ。

「ヘトロモーガン族が増え続ける世界の中、このままでは人間が淘汰されて衰退してしまうのではないか？そんな懸念が立っていた時、人間の本能が進化という道を”自然に”切り開いた。それが『特殊異形能力』なの。そして、その一部が『特異点』というわけ」

彼女がそう言った瞬間、スクリーンに特殊異形能力の文字がバン！

と大きく写し出される。

「ちなみに、一応解説をしておく、リージエンにも『特性能力』というのがある、その形のリージエンに沿った能力を大なり小なり使えるリージエンがいます」

「それは昔から知ってます。犬なら超嗅覚とか、ハチならシバリングとか：そういうやつですよ？」

この国家になってから、僕は小学一年生の頃から”リージエンの特性を虐めてはいけない”と、厳格な教育を受けることになっていて、特性能力についても授業で習っていた。

勿論、それでいじめがなくなったわけではないけれど、きっと無いよりはましだったと思うし、リージエンの特性についての関心を得て、医者になったという同級生もいたから、プラスの効果にはなっているとと思う。

「そう。ただ、従来の人間がシバリングをするには無理があるし、口から火を拭くとかも、普通なら出来ない。そんな事が”可能になった”という現象が『特殊異形能力』なのよ」  
なるほど…。

と言うことは、特異点とかそう言うのは、普通の人間ではできないことが出来るようになると言うことになるのか…。

「でも、ミズハラくんは特異点のことを病だつて言っていましたけど…？」

僕がそう言うと、彼女は小さく頷く。

「確かに、そんな考えもあるわよね。現在見つかっている特殊異形能力は二つ。その内の一つである特異点は、簡単に言えば『強力すぎる能力を与える』という物で、発症してしまえば、その影響によって身体が拒否反応を起こして、特異が結晶化した物が身体から生えだして、そのまま放っておくと、終いには全身を包んで、発症者を殺してしまうの」

彼女の説明の最中、また静止画が変わった。

今度は『特殊異形能力』の文字から『特異点』と『異能力』が分岐されたような表示だ。

強力すぎると言われると、確かに漫画やアニメを見ていても『全部の攻撃の無効化』なんて、なかなか聞いたことがなかったな…。

というより、そんな能力がこの世に存在していたということ自体、少しビツクリだけど。

「それで、その結晶化を止めるための物質が『ルストロニウム』って言うことですよ？」

僕が聞くと、叶さんは笑みを浮かべながら、僕に向けて光を付けずにペン先を指す。

「ご名答。ちなみに、ルストロニウムは2041年頃に、ヘトロモーガン族が持ち込んだ原子のことで、水と科学合成させることで粉末にして繊維と混ぜ混んだり、粉末を燃やして結晶にしたりすることが出きるのよ」

彼女が説明すると、見覚えのあるルストロニウムの参考写真とそれの生成方法についてが飽きに写し出される。

「一応、昔ちよつとだけ学校で習ったことがあります。でも…特異点に有効とは知りませんでした…」

中学の科学の義務教育として、ルストロニウムやハイドロニウムについては必須科目にカテゴライズされているのだが、特異点との関係性については一切習った覚えはなかった。

「私たちは、”ルストロニウムが特異の出力を調整することで、自由自在に能力を操れることが出来るようになる”…って説明はしてるけど、まだ科学的証明が出来ていないらしいから、原理はわからないのよね」

「へえ…」

そうか…だから当時は特異点の明記が全くなかったわけか…。

学校で習ったときは、ルストロニウムは『万能素材』と言われることが多く、エンブレムのような結晶として売られることはおろか、繊維状に加工して編み込めば、衣服として売ることができると、体内にいれても問題は無いことから、金粉のように削って、料理に使われることもある。

だから、ルストロニウムが特異点に有効なのが不思議ではあるけ

ど、納得だけはいく。

「ちなみに…ハイドニウムについては…？」

ハイドニウムはルストロニウムを生成する際に出る産業廃棄物のため、これも同時に習うことになる。

有害ではないが、どす黒くなんのメリットも無いため、廃棄されるだけの存在だ。

「それも、ルストロニウムと同じで原理はわかっていないの。ただ、昨日のお芝居の時に解説したけど、ハイドニウムには”特異点の力を消してしまう能力”があるの。まあ、体を掠めるくらいなら、そこまで強く発動することはないんだけどね」

「それは…いやというほど知りました…」

「あ、そっか…」

一昨日のお芝居で見たあの光景は僕の頭のなかにまだ残っている。肩を擦っただけなのに、しばらくの間あおいちゃんを全く動けなくさせてしまったハイドニウム…。

自分も特異点になったのだから、自分もこれから気を付けていかなくってはならないな。

「でも…ちよつとわからないんですけど…ルストロニウムもハイドニウムも、結晶化を防いでくれる存在なんですよね…？二つは結局どう違うのかな？…って…」

素朴な疑問ではあるのだが、僕はそこがずっと気になっていた。

特異を抑制してくれるのなら、どちらも「特異を消す」という点に置いては、同じものなのではないか？と…。

「そうねえ…。違いを分かりやすく解説するなら…ルストロニウムは”特異を調整”してくれる物質で、ハイドニウムは”特異自体を削除”する物質…と捉えると良いかもね。水道管のバルブに考えてみると、ルストロニウムはバルブを閉める。ハイドニウムはバルブの管ごとぶっこ抜くか、水道局ごと爆発させる…。っていうのが良い例えになるかなあ…？」

「なる…ほど…っ？」

例えに関しては少しわかりづらけれど、とりあえずルストロニウ

ムは『特異を出すか出さないか調整してくれるもの』であり、ハイドニウムは『特異そのものを消してしまうもの』というのはわかった…。となると、自分の特異である『どんな攻撃も受けない』って言うのは、ハイドニウムによる攻撃にも有効なのだろうな…。

「まあ、ちよつとついでのお話が長引いちやつたから次に行くわね」  
自分の身体に対して考えている所で、叶さんが話を変え、画面も『スプリミナルの仕事の概要』という文字が描かれたものになつてしまつた。

「まず、スプリミナルと武装警察が行うのは、リーゼンと純人類との統制を守るための犯罪阻止や肅清活動。そして、その特異点や異能力の管理や発症者の保護等を目的として動いている。言わば『特殊異形系の専門家』って感じかもしれないわね」

彼女が解説をするが、統制を守るといふのは、昨日、郷仲さんの話を聞いて理解はしている。

「なるほど…でも、それなら武装警察だけでも足りるんじゃない？」  
それでも、このスプリミナルがわざわざ設立される理由については、昨日の時点ではよくわかつていなかった。

そもそも、探偵はここ以外にも全国各地にあるわけだから、わざわざ武力を持った探偵まで作らなくても…と言う見解も自分の中では払拭できない。

「それが駄目なのよ。スプリミナルが作られた様々な理由の中には、”警察が介入しづらい事件を解決させるため”という意味もあって、民事事件を含む詐欺や、マフィア、暴力団体等の事件が私たちの管轄になつているの。現に、スプリミナルが作られてから、一時期を20%を越えていた犯罪係数も大幅に減つている上に、幾つものミラーマフィアを壊滅させてるのよ？」

スクリーンに写るスプリミナルの存在価値についての画像と、叶さんの力説を聞いて、なんとなく納得が行つた。

「そっか…公務員ではなくて、探偵だから…」

特異点と言う強すぎる力を持った探偵達だからこそ、”警察では踏み込めないデーパーな場所”へ行つて、悪を討伐することができる訳

だ。

一時、25%とえげつないほどに犯罪率が延びた時も、今では20年代よりもちよつと多い位に抑えられているのは、この探偵組織が生まれたお陰と言うことになるのかもしれない…。

「そう、正式には警察特殊認可特異行使結社つて名前だけど、簡単に言ってしまうば、特異点の探偵組織つてだけだからね」

叶さんはスプリミナルに誇りを持っているかのように、ニツと微笑む。

この前助けてもらったことを思いだし、こんなことにも気がつかなかった自分は、なんとなくこの職場への申し訳ない気持ちが沸いた…。

この気持ちを糧に、これから自分も、役に立っていかなければ…。「そして、お仕事の内容についてなんだけど、さつき建物内を見て回ってもらった通り、スプリミナルには様々な部署があります。私が課長をしている事務課、会計課、情報捜査課、開発課、そして、今後あなたがお世話になる特異探偵課。警察や特殊部隊と比べて小さい場所でも、部署が様々なの。定員は…今日非番の人も合わせて…まあ、少なくとも150以上は居るのかなあ…?」

叶さんが首をかしげている中、背後のスクリーンには、彼女が言った通りの社内概要が写し出されている。

「特異探偵課…待ち合わせた部屋のところですよね」

「そうよ。ちなみにスプリミナルにいる、特異探偵課のメンバーは現在あなたを合わせて11人。その全員が、探偵業務とそれに伴った書類作成作業、そして接客業務を行うことになってるの」

「へえ…そんなにいるんですか…」

自分以外の約10人…。

恐らく、あおいちゃんや水原くんもいるのだろうけど、他にはどんな人間が、どんな特異点があるのか、自分は少しだけワクワクしている…。

探偵業務は自分でも役に立てるだろうか、書類作業は自分でもちゃんと纏められるだろうか?そして接客はちゃんと…。





自身の消せない罪が、頭にベツトリとこびりついている。

元詐欺師の僕が問う姿を見た彼女の、その曇った顔がより一層暗く  
なつていくように感じた…。

「そうね…残念だけど、それも罪に該当するわね…。それに、警察の間  
では、スプリミナルは『一生をかけて罪を償うための駒』とも言われ  
ている…。社員の皆が、世間から何かしらの偏見や侮辱を受け付けな  
いように、機関の囲い以外には極秘にしてあるんだけどね…」

「そう…なんですね…」

償いのために一生を掛ける捨て駒…。

言葉通りに考えると、なんとなく僕がここにおいても良い理由が分  
かった気がして、虚しさや罪への悪感が、傷口からじわりと滲み出し  
てきた。

それでもやらないと行けないから、今はそれを心の奥に封じ込めて  
おくが…。

「ちなみに…スプリミナルに加入した場合には刑法とかつて…どうな  
るんですか…？」

ふと、スプリミナル加入を決めてから、郷仲さんがあつさりネタバ  
ラシをした時の言葉を思い出し、それを妻の叶さんに訊ねてみた。

「そうね…正直、そこら辺は曖昧にされてるんだけど…。多分、犯罪に  
関する依頼の完了が、警察の協力として換算されて、それが幾つか達  
成されたことで謝礼として罪が軽くなったりする場合もあるのかも  
しれないわね…。でも、ほとんどの子は自分の罪を受け入れようとし  
ているから…」

罪を受け入れようとする。

その言葉を聴いて、自分自身がまた嫌いになっていく…。

「そうですよね…。罪はどうやって消せないですからね…」

警察からの説明が曖昧だから、罪が消えると言うのは確定という訳  
ではない。

けれど、どれだけ刑が狭まれても、罪を犯したというレッテルは、特  
撮ヒーローみたいに世界を救うくらい大きなことをしなければ、絶  
対に剥がれることはないし、だからと言ってこのまま罪から逃げるな

なんてこともしてはいけない。

その事を、自分以外の社員も背負っているのだから、僕がこれ以上  
気負いすることははないのだ。

なんて思えば、少しは自分自身の荷が軽くなりそうな気がして、ま  
た自分が嫌になっってしまうな…。

「…まあ、暗いことは置いておいて、次は武装警察との関係について  
解説するわね！」

気分を変えるためか、叶さんはパンと手を叩いて笑顔を見せると、  
またスクリーンの画像が違う題名の物へと変わった。

#### 4—3 『Y講習中、K仕事中』

「そう……占いついでにごめんね。今日はクモに気をつけて」

晴天の下、占いの客である20代くらいの男女にそう言うと、彼らは僕に向けて一礼して、無言で代金を置きながら、そそくさと立ち去ってしまった。

彼らがこんなに素っ気ないのは、彼らに、今日は少しだけ運が悪いかもしれないと言ったからだろう。

仕方がないけど、それが占いだからしょうがないんだけどな…。

ちなみに、この光景を見られると、僕が占いで遊んでいると思われるてしまいそうだが、任務をサボっているわけではない。

兼森宍道からの依頼を受け、僕は占い師を装い、こちら周辺のことを徹底的に調べていたのだ。

先程のように、昨日いなくなった娘の目撃情報については勿論、娘の通っていた学校への問い合わせや、家事代行サービス事務所への疑惑についても、占い師をしつつ多数の手がかりとなる場所へ聞き込みをしていた。

勿論、先程の客のように情報無しと言う場合もあるが、これまでに集めた物を全て纏めると、有力な物は沢山あった。

じゃあ、この貯まった情報をかき集めて整理し、いなくなった娘さんの行動について整理してみようか。

7時45分、兼森柚子は登校を始め、特に何事もなく学校へ行く。凡庸な住宅街から、資材置場のある少し大きな町工場、24時間営業のファミレス、コンビニエンスストア、スーパー等の商業施設を通り、学校区に到着するというルートだ。

家からはそこまで長い距離はないため、小学生くらいの子供が群れて歩く速度であっても、約15〜20分までには必ず到着できる。

彼女の行動を第三者視点から見ても、登校時になにか変わったことはないし、聞き込みからは、学校区にいたら、普通に友達と歩いて

いたという情報もあった。

学校側も、登校してきた兼森柚子には特に変わったところはなく、友人と楽しくいつも通りの一日を過ごしていたらしく、校内でなにかトラブルがあったようにも見えなかった、と言っていた。

学校側の主張が真実となると、誘拐された時刻は下校時ということになる。

6時間目が終わるのは大体15時で、帰りの会を終えて帰る時間は15時10分。

その時間、教員やクラスメイトからは、彼女はいつも通り普通に下校をしていたと言う情報を得ている。

兼森親子が住んでいる場所に同級生は居らず、学校区から出れば、一人で帰ることがほとんどとのこと。

そのため、彼女がいなくなったことに、同じ地域に住んでいる人間の多くが、彼女が帰ってこないことに疑問を抱いていたのだという…。

となると、彼女は「住宅地に付く前にもう居なくなっていた」ということになる。

その上、平日で多くの人間は仕事に忙しかったため、ファミレスの店員や町工場の人間達も、彼女の姿をみることはなかったと思われる…。

「居なくなった場所は、学校区から居住区の間…かもな…。」

となると、考えられるのは車等の乗り物か、異能力による誘拐。

家事代行サービスの亀梨は、毎日車で家に来ていたし、兼森柚子からは信用を得ていたため、誰の疑問も抱くことなく犯行に写すことは可能だろう。

それに、地域の人間からの情報によって、亀梨は15時から車で買い物に出ていたとの証言もあった。

しかし、ここでネックな手がかりとして成り立つのは『砂』だ。

亀梨の住んでいる家を調べてみると、彼女はバラードイアでは珍しい、農業地帯に年老いた両親と住んでおり、家の近くには砂栽培を行っているビニールハウスがあるとのこと。

その砂が車や靴につき、兼森柚子を誘拐する際、車や身体についた物が、道に落ちたとも考えられる…。

僕はその情報を、家事代行サービスに行つて突きつけてみたが、そちら側は否定の一点張り。

その上、亀梨は“自分の責任力の怠り”を責められたが故、本日は業務に来ていなかった上、家に行つても家族ぐるみでそこには居なかつた。

これはもう犯人で確定だ…とも思っていたのだが、捜査をしている最中に、その節は一瞬で崩れ去つた

路上に落ちていた砂の成分と、農業で使う砂の成分が、目で見てわかる程、全く一致していなかつたためだ。

それに、彼女のことを同僚の人にも色々聞いてみたが『本当に仕事熱心な人だった』や『要らない感情を仕事に持ち込まず、しつかりと仕事をこなす人だから、今回の失敗を重くみたのかもしれない』という声が沢山上がっていた。

家事代行サービス全体で嘘をついているのではないか？とも考えたが、全国展開の大きなサービスであつたから、一人の女性を庇うだけの嘘をつくには大きすぎる責任がのし掛かるし、そもそも起業ぐるみでたつた一人の女の子を拐うにはリスクが高すぎるのだ…。

渋々、砂は科捜研の方に成分調査を依頼し、僕はまた聞き込みへと回らざるを得なくなつた。

依頼受諾から、占い兼聞き込みをして数時間。

有力と感じた物は、間接的な手がかりとして一件だけだ。

それも、今回のトリックや犯人を解くには、少々難解なもの。

時刻はもう昼を過ぎてる。

この兼森柚子誘拐事件は、もう少し混沌を極めそうだ…。

「はあああああつー…こんなの一人でやれとか…ほんつと面倒……」

僕は大きいため息をつき、机に足を乗せながら、背もたれに体重を乗せて仰け反つた。

満点の青空が僕を嗤っているようで腹立たしい。

別に苦しくはないが、昼飯もとっていないから腹は減っている。

今日はバケモノがしゃしゃり出てこないだけ良いが、未だ解決の糸口が見えない事件のせいで、僕の中の面倒くさがさが誇っている。

今の頭のなかにあるのは、想定できる幾人もの犯人やその動機の数々。

だが、その想定で動きすぎてしまったては、本当の悪い大人つてやつに自身が騙されてしまうから、もつと現場に踏み込んだ上で確信が取れる証拠を掴まないといけない……。

「となると……もうあれに頼るしかないか……」

スプリミナルの立場として、あまりグイグイと警察に頼りに行くのは進まないのだが、依頼を全うするためだから仕方がない……。

僕はズボンのポケットからスマートフォンを取り出し、その番号からスプリミナルの隠れた協力者であるその場所に発信をした。

「もしもし？スプリミナルのミスハラですけど、中央警察署の監視課に繋いでもらえますか？」

僕がそういうと、案内員はスプリミナルという存在に少し戸惑いながらも、この外線を監事課に回した。

「……もしもし？ミヤサワくん？ちよつとそっち行くから、昨日の15時10分〜15時30分までのブルーディアTB市部15区兪川M―AS辺りの監視カメラ映像集めといってくれる？……うん0066の朝道小学校からのところ。よろしくね」

僕が話し終えると、電話の奥から了解の声が聞こえ、同時に電話が切られた。

あつちに頼るのはあまり好きじゃないが、”警察と道具は使いよう”ではあるから、立場的に形見が狭かろうが、仕事を終わらせるためには、なんでもすれればいい。

そう、郷仲から教わっていた。

「あとは……」

しかし、自分の考えを確立させるためには、まだ調べなければならぬことがある。

また電話帳アプリを開き、そこから情報操作課の番号を出し、そこから電話をかけた。

「もしもし？特異探偵課のミズハラだけど。捜査課のユウカくんは、特定種のリージェンについて調べて欲しいって伝えといてくれる？詳細は……」

まだ確定した情報ではないから、ここでは伏せておこうか。

「……ありがとう。よろしく」

情報捜査課に捜査を委託し、それを相手が了承したことを確認したところで、僕は電話を切った。

この事件にとって、これが少しでも好機になってくれると良いのだが、世の中そんなにうまく行かないことはわかっている。

「よっし…行くか……」

それでも、とりあえずは歩いていくしかない。

太陽が照る空の下、未だ半人前の僕は、中央警察の方へと急ぐ。

ふと目に入った電光掲示板の時計は、そろそろ二時を過ぎようとしていた。



「それじゃあ次に、スプリミナルと武装警察についてを解説していくわね」

「よろしくお願いします」

僕が軽くお辞儀をすると共に、スクリーンに『スプリミナルと武装警察』の画面が写され、叶さんが説明を始めた。

「武装警察は、あくまでも軽視庁内の部隊のひとつ。リージェンがこの世界で暮らすようになってから、警視庁は『普通警察』と『武装警察』で部隊を二つに分けて、民間人の皆を守るようにしているのは、知ってるわよね？」

画面には、警視庁からは『普通』と『武装』が分岐された画像が写されている。

「それも聞いたことがあります。普通警察は基本的に対同族関係を受けとることが多く、武装警察は対違族関係が多いって……」

警視庁に関することは小学生の教科書には書いてあるのだが、武装

警察だけは、設立をされたのが20年ほど前で、正式な巨大警察機関として確立されたのは10年前、その時に明記されたのは小学生の教科書のみと言われているため、自分はギリギリ武装警察の事に関しては本格的な授業を受けていなかったのだ。

自分が本格的に武装警察の存在を知ることになったのは、テレビでやっていたニュース番組等だけだった。

「その通り。その上、武装警察は汎用型のアーツやトランススーツを装備することが可能になってるのと、ハイカワ イノスケさんっていう人が、対人対異行用の戦法を全員に教えてるため、ある程度のリージェンや異能力犯罪は食い止めることができるの。だから、普通と武装で管轄が違うのよ」

彼女の解説と共に、画像が男女の武装警察が装備しているアーツやスーツの解説を描いたものへと変わっていた。

正直今まで、武装警察と呼ばれている理由が分からなかったのだが、この解説でなんとなく納得できた。

スプリミナルと同じような装備をしているから”武装”警察と言うネーミングになったわけか…。

まあ、まだトランススーツがどんな物なのかは分からないけど。「なるほど…じゃあ、スプリミナルは…?」

「スプリミナルは、武装警察が設立されてからずっと後にできたんだけど…実はスプリミナルは、元々設立される予定はなかったのよね…」

その言葉に僕が少し驚いている最中、また彼女の顔が少し曇っていき…。

「…なにか…あつたんですか?」

恐る恐る聞いてみると、彼女はおもむろに口を開く。

「スプリミナルが設立される前、当時、武装警察に協力をしていた一人の人間が、武装警察から離反して人間至上主義<sup>サイレ</sup>団体<sup>ガレンツ</sup>という組織を作ったの。その組織の設立者は、トウくんの親友だった。この事案を重く見たトウくんは、ミラーマフィアもヴィーガレンツも含めた、あらゆる驚異に対抗するためにトウくんが頑張つて人間をかき集めて設立



したのが、スプリミナルだったの。人間とリーゼン、お互いが認め合い、いがみ合わないようにするためにね…」

スプリミナル設立の真実を知り、僕は先程以上に驚いた。

スプリミナルが出来たのは、郷仲さんの思いただ一つだったことと、それが友人の離反であったこと…。

郷仲さんの思想だけが、この大きな組織を作ったのだと思うと、彼の背中がさらに大きく見え、それと同時にになにか大きな悲しみのようなものも見えてきたような気がした…。

「それが設立した理由なんですね…。 つてことは、サトナカさんって警察関係者…だったんですか？」

僕が質問をした途端、彼女の曇り顔はスツと消える。

「一応そうだったわ。ただ、彼の本業は画家だから、立場的には警察への協力者というだけ。と言うのも、武装警察のハイカワと言う人は、ヴィーガレンツ創始者とトウくんの三人で親友だったのよ」

彼女の鬱めいた顔が消えたのは、恐らく三人のことを思つての事なのかもしれない。

郷仲さんの妻であるからというだけではなく、きつと創始者の人も、ハイカワさんと言う人も、叶さんにとっては大切な人だから…という風に自分は捉えられた。

というか、ふと考えると、郷仲さんの交遊関係つてすごいな…。

武装警察の偉い人と、敵組織の総帥…。

「…あ、だから警察との連携ができてるんですか!？」

冷静に考えてみると、そっちの方が自然だと思った。

「まあ、平たく言つたらそう言うことかもね。トウくんとイノさんの関係があるからこそ、スプリミナルは存在できると言つても過言ではないし、多分、いま任務に出ている社員も、警察組織の人たちと連携して、依頼解決にむけて行動をしてるんじゃないかしら？」

叶さんの答えたことが、自分の想定したものと大体同じだった…。

通りで罪人だらけの組織でも、警察から認可されるわけだ…。

ここが罪人だらけなのも、僕なんかここに居て良いのも、少し視点を変えれば、郷仲さんの思想の延長線だから…つてことになるのか

もしれないな…。

やっぱり不思議な組織だ、スプリミナルは…。

「じゃあ、僕もまた警察の人達と連携することになったりするんですかね…?」

自分は詐欺師だったから、あまり歓迎はされない気がする…。

「可能性は十分にあるわね。まあでも、イノさんがフレンドリーな性格だから、あんまり気を張らなくても良いわよ。ちなみに、民間人からの協力もたまにあるから、また確認しといて」

恐る恐る質問したが、叶さんの返答は特に恐れも怖じけもないものだった。

「は…はい」

その樂觀的な返答が正直不安だ…。

いくらフレンドリーだって言われても、警察と元詐欺師が共に手を取り合うのは少しだけ無理がありそうで怖い。

こんなたればまみれでヘタレな僕でも、ハイカワという人は受け入れてくれるのだろうか…。

「あと、スプリミナルは基本的に武装警察への許可がないと逮捕や駆除などに動けない、ということも言っておくわね」

彼女がそう言った途端、スクリーンにスプリミナルと武装警察の協力条件と命名された項目が写し出された。

【スプリミナルと武装警察の協力条件】

1. 警視庁からの指示に必ず従うこと
2. 原則、武装警察からの許可なく逮捕しないこと
3. 処刑許可の降りていない犯罪者を処刑しないこと
4. 駆除許可の降りていないノーインを駆除しないこと
5. 犯罪行為は禁止。破った場合は罰則追加

推定されている5つの項目に、僕は疑問を感じた。

「認可組織なのに条件…ですか?」

認められているはずなのに、少し厳しいのではないか?

これでは確保のために自由に動けないのではないのだろうか？

様々な疑問やおかしいと思う部分がある中でグルグル回り、その蟠わだかまりを解かそうとするように、叶さんが返答する。

「スプリミナルは認可ではあるけど、それは『存在の認可』と言うだけなの。ここに書いてある通り、逮捕をする際には、警察から許可が降りている場合か、相手の攻撃への正当防衛等の特別な場合だけ。それに、ここは罪を持つてる人が多いし、それに対する世間の目も気にしてるみたいだから…しかたがないと言えはしかたがないのよね…」  
やるせない気持ちを言葉に乗せながら、叶さんがペンを回すと、赤いレーザーの光が、条件の項目を丸で囲うようにぐるぐると動く。

彼女の言うとおり、ここは罪を持つてる人の集団だ。

規則が厳しくても、罪人だらけのこの組織に、世間もあまり良い目をしないだろうから、しかたないのかもしれない…。

色々思うところがあるが、やはり地位や権力はあちら側が上だから、こんなことで反発しても良いことはないだろうな…。

「ちなみに、その許可が必要な逮捕の時、悪い人を捕まえる場合には、このプリズンシールを使います」

そう言うと、叶さんはポケットの中から赤黒く透き通るアクセサリを取り出した。

「プリズンシール…？」

彼女の持つそれは、鳥かごのような造形の上に、十字架が備え付けられ、その下には大きな注射針のような物が生えている。

そう言えばこの前、発砲犯を捕まえるときに郷仲さんがこれを使っていたな…。

「これはなんと、相手をこの中に吸い込んじゃう簡易的な監獄なの！小さくて連行も楽だし、その上これに吸い込まれた人は、どれだけ深い傷でもつるつるの新品肌<sup>①</sup>に治してしまうほど、すごい治療薬が入ってるんです！」

なんと…そんな素晴らしい機能がこの小さなガラス細工のような、少しおぞましくも綺麗なアクセサリに隠されていたのか…。

じゃあ、一昨日のあれはあくまでも籠の中に収容したってことなの

か…。

「まあ、あくまでも外傷だけだけどね。ちなみに、医療現場でもたまに使われるのよ」

「へえ……活気て……きつー！」

プリズンシールの機能性や汎用性に驚く最中、突然ぼくの腹部に、その太めの針がグサリと突き刺された。

「じゃあ、新人研修として、これに吸い込まれてみましょう！」  
さすが郷仲さんの妻だ。

につこりと微笑みながらさらりとそんな怖いことを言うとは…。  
というか、これが攻撃じゃないからか、お腹がめちやくちや痛いし

！

「ちよーちよつとまつてちよつとまつてー！こんなのきいてな…」  
パンツ！



昼下がり、日の光が大きな建物の銀のような窓に反射する…。

スマートフォンから時計を見ると、もう間もなく三時になる位の時間で、腹がグルルと鳴る程に減っている。

特異を使えばもつと早く移動できるのだが、午前中に結構使ってしまったから、もしものためにクールダウンさせておかなければならなかったため、仕方がないから公共交通機関でここまでできた。

早く一段落終えて昼食にしたいと思いつつ、僕はバラードイア中央警察署に足を踏み入れる。

自動ドアが開くと、そこには『万引き防止キャンペーン』だとか『やめよう、種族差別』、『リージェンと人間に優しい国を』なんて言った、如何にも正義気取りな張り紙が、待ち合いの机や壁に沢山張つてあった。

相変わらず陰気臭いな、と感じながら、トランス済みの僕は顔を隠しているフードの位置を直しながら、受付に行く。

「こんにちは。本日はどうされました？」

受付の犬型女性リージェンが、笑顔を浮かべて話しかけてくる  
と、僕はパーカーについたエンブレムを外し、彼女に見せる。

「スプリミナルのミズハラ カドヤだけど、ミヤサワ セイヤくんの  
所にアポとつてるから良い？」

スプリミナルの単語を聞いた途端、彼女の表情は歓迎から、軽蔑を  
含む物に変わった。

「確認します…」

睨んでいるような細目のまま、彼女は内線を繋ぎ、来客の確認を取  
る。

その途端、エレベーターからタイミング悪く交通安全課の警察官が  
数名出てくると、僕の姿を見るなり、小声で陰口を言い始めているの  
が遠くからでもわかった。

「罪人がなんの用だよ…」

「自首じゃねえの?」

「いや、ブタ箱が家なんじゃねえの?w」

悪口は種類問わずに聞こえてくる。

こんな小言、自分はずっと昔から聴いてきたから慣れてはいるけど、  
あんまり気持ちの良いものじゃないのが当然だ。

「うるさいんだけど?」

振り向いて僕がそう言うと、彼らは一つ舌打ちをしてどこかへ行っ  
た。

活躍もできないくせに悪口しか言わない奴は、たった一言叱責すれ  
ば黙ることしかできなくなる。

こちらら、幾つもの事件を解決してきたんだから、たかだか声をあ  
げることしかできない手足をもがれた百舌鳥みたいな奴らに、必要以  
上に構うことはないんだ。

なんて鼻で嗤っている、受付のリージェンが受話器を置いた。

「確認とれました。どうぞ」

「どうも」

未だ軽蔑の目を見せる受付の案内に、僕は一礼をして離れ、陰口の  
警察官が下りてからずっと止まっていたエレベーターに乗り込み、最

上階のボタンを押した。

スプリミナルと言うものは、異常な組織だ。

郷仲の趣味かなにかは知らないけれど、全員が罪を持っていて、僕のような人間でも、郷仲が認めさえすれば入れる物なのだ。

それは一発で法で裁ける程の重い物もあれば、法的にみれば罪にはならずとも、その人間が精神的に罪だと思いきんでいるような場合の罪もある。

ちなみに自分はその前者だ。

だからこそ、僕らは何をするにも身を潜めておかないといけなくて、その象徴であるのが、今深く被っているフードだ。

わざわざ依頼人意外には顔を隠さないと行けないというのは面倒なことだが：それも致し方ないことで…。

「まあ…こんな事慣れてるから、別に良いけど…」

スプリミナルに入るよりも前から、何百、何千と陰口を言われたかなんてもう覚えてないし、元からそんな低俗なことは気にしていない。

同じ穴にすら入ったこともないバカに時間を費やすなんて事自体、馬鹿馬鹿しいんだから…。

—でも、願えるならやめてほしい…って思ってるんでしょ？

「またお前か…」

少しずつ上っていくエレベーターの中、僕は一人、僕と言う残像と対峙する。

—やめられないよね？全部僕のせいなんだから…

萎びた体毛を揺らしながら、ニヤリと笑うその姿は、今も昔も変わっていない。

相変わらずなにもかもわかってるような態度が腹が立つ…。

「わかってるよ…めんどくさいな…」

怒りを交えつつ、僕はそう言うと、バケモノはムカつく笑顔のまま、蜃気楼のようにそつと姿を消した。

内容が内容だから、自分の罪を滅ぼそうなんて気はさらさらない。だからなのだろう、こいつがいつまでも僕に取りついてるのは

…。

嘘まみれの自分を好んで寄生するその害獣は、いつまでも僕を睨んで  
いるんだ…。

ピンポーン！

なんてことを考えていると、エレベーターから到着のアナウンスが  
聞こえ、目当ての階で扉が開いた。

エレベーターから降りると、その場所はまるで、スラム街で神から  
の人類滅亡でも起こされたかのように、しんとしている…。

通りすぎる部屋の殆んどは資料室や備品の保管庫で、日光すらも  
入っているのかどうかわからない薄暗い廊下に、毎度混乱する。

こんな闇に包まれたような空間の中、たった一室だけは明かりが  
灯っている。

そこがリージェン国家になって出来た、新たな警察課の一つであ  
り、僕らの強い協力者だ…。

「ミヤサワくん、来たよー」

勢い良く扉を開けて声をかけると、机の上で無数に広がるモニター  
の画面をみていた一人の男が、僕に気がついて振り向いた。

「ああ、ミズハラくん。言われたもの、用意しといたよ」

ブルーライトカット用の眼鏡を外しながら、裏表の境界が少なそう  
な表情で、彼は爽やかに微笑んだ。

普通警察バラーディア本部、監視課所属、ミヤサワ宮澤 セイヤ聖夜。

丸っこいショートカットに、如何にも何でも出来そうなお兄さんつ  
て感じの顔だが、体力を使うのはあまり好きではなく、趣味はイン  
ターネット経由のハッキングと言う、世間的には陰キヤと言われる者  
にカテゴライズされるような人間だ。

「ありがと。さすが警察期待の星」

「それはどうも…」

宮澤くんは苦笑いで僕のお世辞を返す。

液晶画面で埋められたこの監視課は、宮澤聖夜一人で全て動かされ  
ている。

監視課が建てられたのは、リージェンがこの世に参入し、犯罪件数

が大きく増え、武装警察が建てられた後のこと。

犯罪率25%を越したことにより、ついに政府や警察の数名が『全国の監視カメラ映像の保存と、視聴をするための部署を建てた方がいいのではないか?』という意見を出してきたのが事の始まりだった。

確かに、各所に監視カメラを置き、監視映像を保存することで、多くの犯罪を発見できるメリットがあるのだが、世間の人間は某国の歴史を思いだした事で『決して監視社会になってしまっってはいけない』という意見が、賛成意見を上回る程多く出ていたため、監視課の設立は難航どころか、案の廃止すらも考えられていた。

そんな中、武装警察の隊長である陪川威之助という人間が『現在、リーゼン至上主義団体の過激派増加が強く懸念されている。だからこそ、あくまでも保存をするだけの監視課は必用なのではないか?』と訴えた。

監視をするのはたった一人。

現在設置されている監視カメラの追加設置を、国からは決して要請しない。

国民のプライバシーを最大限に守る。

という、陪川の監視課の条件も合わせて提案したことにより、自体は大きく動き、世間の人間の中にも、監視課設立の声が多く上がり始めた。

その結果『選定は警視総監に一任する』であったり『監視によって、指定犯罪以外では自発的に逮捕することは禁ずる』等、様々な条件が多数寄せられた事で、監視課の設立は決定した。

そんなゴチャゴチャと弁論を繰り返していた裏で、警察のデータベースを興味本意だけでハッキングして除き見ていた人間、宮澤聖夜が、監視課の唯一の隊員謙課長として選ばれた。

そんなことか?と思われるかもしれないが、実は警察のデータベースのログインは、犯罪係数の低下のため、2020年よりもさらにさらに強固なものになっており、海外の天才ハッカー集団でも、ログインには数カ月以上は必要だと言われている程。

それを宮澤聖夜が行った、たった一時間のハッキングをしただけで



ログインして覗き見れた、という事実を、警視総監が高く高く評価したらしい。

そして、監視課に抜擢された宮澤くんは、彼の許した人間でないと入室できない程、厳重な管理がなされた部屋の中で、ほぼ休みなしどころか、仮眠用の居住スペースまで備えられているその場所で、毎日監視カメラの映像を整理、保管している。

「お、今日はドーナツか…アメリカの警察みたいだね」

その上、宮澤くんの場合は、食糧も基本的に『言えば買ってこられる』というシステムらしく、そんななにもしなくて良いことに、少しだけ羨ましさを感じている。

「昼食まだだから、ひとつ貰うよ」

僕はストロベリーチョコレートののかかったスタンダードな生地のドーナツを手にとった。

「相変わらず、おやつを見つけてるのは早いね…ついでにコーヒーでもいる?」

「甘いのでね」

「ハイハイ…」

彼はそう言っ、席から離れて居住スペースに置いてあるサイフォンを手に取った。

ハッキング以外の趣味がドリンク作りのため、彼はよくコーヒーを作ってくれるのだが、それがなかなか旨いのだ。(まあ、あおいのコーヒーには叶わないけど)

そんな彼を横目に、僕は無数の監視モニターの机に置いてあるタブレット端末を手にとった。

「よつと…それじゃあ見ていくかね…」

近くの椅子に座り、ドーナツを口に加えながら、画面をフリックすると、彼に頼んでおいた監視映像が大量に出現し、一斉に動画が再生された。

それは、誘拐された被害者である兼森柚子の登校ゾーンにつけられた監視カメラ映像の全てだ。

時間を指定して映像を再生し、兼森柚子の行動を追うように見る。

「コンビ二前は…なにもないか…」

動画を粗方確認してから横にフリックすると、映像がまた違う視点からの物へと変わる。

「町工場…も無し…一番怪しかったんだけどなあ…」

例え視点が変わっても、映像に写る彼女に特に違和感を感じる様子はなく、普通に登下校をしている様しか見受けられなかった。

しかし、次に見た住宅街の映像からは違い、時間が経過しても姿が見えなかったことから、彼女の姿は消えていたと判断した。

「つてことは…住宅街近くで消えた…つてことか…」

口に含んでいたドーナツを飲み込みながら、改めてザツと全ての動画を見直してみる。

「二応、スーパーのところに家政婦の車はないし、家にも帰ってない…」

だが、動画を見る限り、家政婦が連れ去ったと言う形跡もない。

それだけで家政婦の線を消すことは勿論できるが、この世界には異能力と言う物があるから、可能性を紙屑のようにポイと捨ててしまうことは出来ないのだ。

「お待たせ」

画像探しの最中、宮澤くんが出来立ての珈琲を持って、僕に渡した。

「ありがと…」

少し高そうなコーヒーカップを手にとって、再製されている動画を注視しながら、淹れてもらった珈琲を一口飲んだ。

「ん…豆変えた？」

「変えてないよ。僕のブレンドは当たり外れが激しいっていったでしょ？」

「そーいや始めてここに来た時にもそう言ってたな。」

「あおいのコーヒー位ずつと飲むわけじゃないから、忘れてた。」

「んじゃ当たりか」

「おめでと」

普通のコーヒーと違い、苦味よりも甘味が強いから、個人的には大当たりだった。

と、そんなコーヒーの感想を述べている場合ではない…。

「僕、作業してるから、なにかわかったら呼んで」

「了解」

宮澤くんは僕の近くにあった椅子に腰掛け、多くのモニターを見つつ、パソコンを動かし始める。

監視課として、動画のデータベースの整理は大切な仕事だからな。

「自分も…もっとしつかり見ないと…」

探偵として、仕事を全うすべく、僕はまたタブレット端末に目を向ける。

人間が一度に認識できる映像数は少ない。

だからこそ、繰り返し視聴をしないと気づけないことが多いから、僕は何度も何度もそれを見返して、手がかりを見つけないければならぬ。

それだけならまだ楽なのだが、尻尾をつかむなら、同時にカメラの死角や盲点も考えなければならない。

監視課はそこら中に監視カメラを置く組織ではなく『民間人が設置したカメラの映像にハッキングをして監視映像を入手する課』のため、死角や盲点が生まれるのは必然だ。

勿論、そこら中の監視カメラをハッキングするため、ほぼ全体の動向は見れるのだが、それでも本の少しの隙間は拭いきれないし、政府や警察による監視カメラ増設の命令等は禁止されている。

だから、注目すべきは彼女の姿だけでなく、壁、地面、その場の人間の反応等、注意して見なければ分からない程細かなことを、もっともっと広く見なければわからない。

今の監視カメラは画質が映画撮影用ばりに高いから、地面の先までなら少し拡大するだけでもよく見える…。

「……………ん？」

だから、その違和感に僕はようやく気づけた。

地面が一瞬にして変わり、それ以降に”少女がいなくなっている”ことを…。

その間、長いことに一時間はかかってしまった…。

「ねえ、この時間帯、ここに女の子通ってない？この子なんだけど…」  
「ん…う？どれどれ？」

僕は映像に指を指しながら、宮澤くんに聞くと、彼は僕の肩に顎をのせて、再生した映像を一緒に見た。

その映像は丁度、町工場にある資材置場を通りすぎ、住宅街へ差し掛かろうとしていた所だった。

資材を盗まれないようにと付けたのであろう、工場視点からの監視カメラ映像と、民家や電柱に取り付けられたカメラの映像には、間違いなく兼森柚子が通りすぎるところが写っていた。

しかし、その次にある監視カメラには、女の子の姿が全くと言って良いほど写っておらず、限りある視点を改めて見てみても、彼女が消えたと言うシーンが全く写っていないかった。

「女の子が、消えた？ちよっと待ってて」

彼は僕の手からタブレットを取り上げ、デスクに置いてあるパソコンから検索し、再生した映像と照らし合わせながら、捜査を始めた。

こういう事件の時だけは、監視課のデータベース検索や照会等を使うことが許されている。

ちなみに先程、監視用モニターに立ち小便をしている子供が写ったが、そういう場合の自発的な逮捕は禁止である。

「なるほど…これ見て」

数分後、宮澤くんがエンターキーを押すと、PCモニターに先程まで見ていた動画を写した。

「これとは別の日や時間を検索してみたら、昨日の映像以外で、この子は何気なく普通に登下校をしていたみたいだ。そのため、たまたま死角から寄り道や近道をしたとは考えられない。ということは、確かにこの日、この場所で、女の子は消えていることになる」

彼は説明に合わせながら、映像を何度も止めては動かしを繰り返す。

「その上、昨日の映像を巻き戻しやスロー再生、拡大等、色々してみたから”女の子が歩いていた形跡”までもが切れてるんだよね…。足跡のようなものは勿論、微妙の小石やチリすらも途切れてる。それに、

壁にもなにかが擦れたり触れたりしたような形跡も初めからない……」  
彼に言われ、僕は机に置いてあったタブレットを再び手にし、再度映像に注目してみると、確かに地面の極僅かな色の違いであったり、砂の微妙な大きさの違いと言った物が目立っていた。

こんな物が証拠になるのか？と思う者がいるかもしれないが、この世界では、もはやそれぐらいに細かな部分を見ていかなければ、能力系犯罪を見つけ出すことはできないのだ。

「まじか……となると……監事カメラの盲点を狙って犯行に及んだ上に、形跡を消すことができる能力者……ということになるか……」

「でも……もしも異能力者を考えたとしたら、そこだけの空間を抜き取る能力とか、カメラ内の映像を操る能力、時間を止める能力とか……そこらも考えた方が良いのかもね……」

「確かにね……」

特殊異形能力系の事件を疑ったとき、なにより面倒なのはこういうところだ。

リージェンの特性能力と人間の特異点と異能力。

この世界中に生息する野生物のように、沢山の能力が発見されていても、未だ確認されていない能力も多数存在しているがため、一概に”これが犯人の能力”と決めつけることはなかなかできない。

「ただ一応、物的証拠みたいなものは上がってるんだけどね……」

「なに？」

僕がふと呟くと、宮澤くんが食いつくように顔を向ける。

彼の興味に答えるように、僕はポケットの中から、科捜研から受け取ったそれを取り出した。

「これだよ」

自分の着けているパーカーのアクセサリ（エンブレム）よりも小さなフリーザーバッグに沢山入ったその物的証拠は、依頼者の兼森くんと出会ったときに見つけたものだ。

「砂……？」

その灰色の粒子を見た宮澤くんは首をかしげる。

「これって……さっきの映像にもあったんじゃない……」

「そう。でも、これはただの砂でも、ましてや砂鉄でもない。これは”アスファルト化合物からできた砂”なんだよ」

科捜研からの成分分析はもう終わっていたため、もう砂の正体はわかっていた。

「アスファルトの砂……確かに、それっぽいのはあるけど……そこで工事があつたような形跡はなかつたよね……？」

彼の言うとおり、今日だけでなく、兼森さんと会話していた日の前日やそれより前の日にも、道路工事があつた形跡は一切なかつた。

「うん。かといって、アスファルト自体が削れたと考えたとしても、それではあまりにも量が多いし、表面のアスファルトと比べて色も少し薄かつた……」

アスファルトが劣化していくにしても、フリーザーバッグがいつぱいになるほどの砂が一度にこんなに入ることと言われると、それは多分不可能だと思う。

「となると……アスファルトが層になっている内の『基層』や『上層路盤』の辺りになるのかな……？でも、そんなものが表層に落ちているってのは……」

「……!？」

何気なく話した宮澤くんのその一言が、まるでスイッチがパチンと作動したように、僕らの脳に電撃を走らせる。

「……もしも犯人が、地上からではない場所で能力を使つたら……？」

「もしも……能力に長く長く馴染んでいる者だつたら……？」

僕ら双方、考えている視点は違うものの、結果的にその一つの結論へと合致していた。

「そうか……!？」

その簡単だが気付きにくいトリックが解けた衝動で、僕らは顔を合わせて互いに指をさしあつた。

プルルルル!

少しの感動を噛み締めている瞬間、携帯から着信音が鳴り響き、僕はそれを手に取って、通話アイコンをタップする。

「もしも……!？」

へミズハラさん。頼まれていたこと調べてみました。実は……」

電話の相手は情報捜査課の人間からで、その口からは自分の調査を頼んだいた結果であり、衝撃的な事実が告げられた。

「…マジか……。了解」

調査結果を聞き終えた僕は、眉間にシワを寄せながら電話を切る。

「どうしたの…？」

見かねた宮澤くんが、僕に声をかける。

「なんとなくだけど…犯人の居場所がわかったかも」

「本当かい…？」

共に捜査をしてくれていた彼も、少し驚いた表情を浮かべていた。

「一応初めから予想は立てていたんだ。もしも該当する能力を持つているリージエンか異能力者がいるとして、その犯罪者がどこに避難するのか…って…」

依頼が始まってから、僕はずっとそれを考えていて、それに纏わる情報を、捜査課に集めてもらっていた。

けれど、それがいざ本当だと聞かされると、自分に真実を知った驚愕と推理完了の爽快感は避けられない。

「ミヤサワくん、カネモリ シンジって人が、武装警察に頼ってきたっていうデータある？」

最後の確認のため、僕は彼に聞く。

「えーっと…そっちは、公安のコウくんの方が正しいかもしれないけど、一応警察のデータベースから引きだせば、見ること位ならできるよ」

宮澤くんはそう言って、カタカタとキーボードを打ち込むと、ものの数秒で、意図も簡単に公安のデータベースに潜り込んだ。

ちなみに、勿論のことなのだが、監視課の人間は警察のデータベースへのパスワード等は一切教えて貰っていない。

「…やっぱりか…」

出てきた来署データベースには、自分が求めている証拠が確実にあった。

バラバラだったピースが全て埋まり、これで事件解決への筋は粗方

見えた。

後は、これを実行に移すのみだ…。

「邪魔したね、ミヤサワくん。後は、僕に任せて…」

ニヒルに微笑みつつ、僕は持っていたコーヒークップを机に置き、出口へと急いだ。

「健闘を祈るよ！」

彼からの激励を胸に、僕は推理を頭の中に持ちながら、依頼者の元へ走り出す。

仕事の引き受けから約6時間。

ようやく、事件は解決へと動き出した…。



#### 4—4 『Y講習中、K仕事中』

あのちっこい籠の中に押し込められ、なんとか僕が戻ってこられたのは、約十数分後の事だった。

「ああ……死ぬかと思った……」

「そおくんはバカなあ。プリズンシールは麻酔も入ってるんだよ？それに、お肌もプルプルになってえ〜」

彼女はプリズンシールと、プリズンシールに投獄された生物を取り出すための機器を持ちながら笑う。

「怖かったって意味ですっ！」

正直、押し寿司を作る型枠の中に詰め込まれてぎゅうぎゅうに押しされているような気持ちだった。

だが、叶さんのいうとおり、確かに、この前からおでこにできてたニキビも綺麗さっぱり消えて、肌もより一層綺麗になったような気がする……。

どうせ死にかけだから、このぎゅうぎゅうに詰められて気持ちが悪いという気持ちよりも、助けてほしいという気持ちが勝つだろうから、これで良いのかと、プリズンシールの中に詰められてから納得はした。

「ごめんごめん……。とりあえず、次の項目で最後。あなたが戦うときについてを覚えておくわね」

彼女がそう言うと、スクリーンに『対人、対獣時について』という題名が大きく書かれた。

「まず、対人を行う際には、特異の調整を含めて、このエンブレムと呼ばれるアイテムを使います！じゃあ、改めてあなたの戦闘時の姿を見たいから、トランススしてみてくれる？」

「あ、はい」

彼女からの指示を受け、僕はポケットの中に入れていた水晶キーホルダーを手に取ると、それは柔らかくぼんやりと、白い光りを醸し出す……。

「トランス  
肉体換装」

意思をもってその言葉を口にだすと、光の白はマゼンタへと変わり、僕の全身を包み込む。

その次の瞬間に光が溶けると共に、マゼンタの上着とジーンズが、まるで魔法のように、ラインの入ったパーカーとズボンに姿を変えた。

三度目の装着だからもう慣れた…と言いたいところだったが、今回の服はこの前とは違う。

「あれ…？黒くなってる…？」

服に描かれているラインや、丸のなかに描かれたバツマーク等の装飾は変わらないが、前まで白だった筈のパーカーとズボンの下地の色が、黒へと変わっていたのだ。

「講習前にあなたが社員登録してくれたからよ。さつき開発室に行つて、それを預かったときに、トランススーツの布地を黒に設定させて貰ったわ。色が黒であると言うことは、ちゃんとスプリミナルの人間であり”まだ攻撃等の活動が出きる状態だ”と他者にも分かるように、服の色は区別されてるのよ」

そうか、だから僕の服だけ白かったのか…。

そう言えば、スプリミナルのシンボルマークの下地が黒だったのも、これに関係しているのだろうか…。

「カドヤくんが持っていたような緊急時用のエンブレムはまた時期が来たら渡すわね。ちなみに、トランスをした後について、なにかわかったことはある？」

彼女の問いに、僕は今までトランスした時の記憶と、今トランスしている身体の状態を合算して考えてみる。

「そうですね…。これ使うの三回目なんですけど…なんか、使ったら体が軽くなる気がするんですよね…。その上、銃を撃つたときも、反動とかがあんまり来なかった気がするし、それにいつもより早く動いていた気がしたんです…。」

これが僕の記憶から導かれた答え。

その解答を聞いた彼女の顔が、パツと明るくなった。

「そう！あなた達がトランスをした時、実は肉体は”特異が適しやすい体”に変わっているの。その影響で、体が軽くなったり、普通なら耐えられない衝撃が耐えられるようになったりと、まるで自分のものじゃないように思えるでしょう？」

彼女の熱烈な解説に、少し引き気味になるが、この服の特性を知れることに関しては興味は沸いた。

なるほど、だから水原くんはあんなにダイナミックに水を噴出できていたし、自分もいつもより機敏に動いていたわけか…。

「そうだったんですね…確かにすごく動きやすいんです！」

「ね！それが”トランス肉体換装をする”と言うことになるの！特異に適した身体になるわけだから、使い続ければ自分の発動する特異がさらに使いやすくなったり、特異使用の幅が広がったりと、トランスをして戦いを積んでいけば、思わぬ力がわき出てくることもあるのよ！」

彼女が力説する最中、スクリーンに写されているのは、トランスをした人間による、特異効果の循環を表す図だ。

水原くんがあそこまで自分の特異を使えているのは、トランスと言う補助と、今まで特異を使い込んできた日数が関係するわけか…。

「えっと…ちなみに…この服自体の意味って、なにかあるんですか…？」

力説を割るように僕が質問すると、叶さんは「ええ」と首を縦に振り、画面が僕が身に付けている服の解説に変わる。

「改めて説明すると、そのパーカーやズボンは『トランススーツ』とって、身体全体の機動力を上げてくれているの。武装警察の解説の時に言った通り、これを武装警察が身に付けて、異種族や能力者への対応もしているの」

彼女は僕のパーカーを摘みながら説明する。

身体が軽い理由のなかには、この服の効果もあったのか…。

「なるほど…じゃあ、トランスとの関係性は…？」

失礼になりそうだから口には出さないけど、わざわざトランススーツは必要なのか？と少し思ってしまったのだ。

「スーツをつける理由ね。言ってしまうえば、確かにスーツはわざわざ

要らないかもしれない。でも、このスーツをつけていることによって『特異を使う機会を増やす』ことができるの。機動力をあげることによって、早く特異を使うことができるし、早く使うことが出来ると言うことは、”その分時間がコンマ数秒浮いて、機転を利かせることができる”ということなのよ」

彼女の解説と共に頭に浮かんだのは、水原くんやおおいちちゃんの戦い方だった。

確かに、弾丸が着弾仕掛けていたときに、おおいちちゃんは即座に避けていたし、水原くんの剣技も、素人目であつても鮮やかかつ素早いと思える物だった…。

それもこのスーツのお陰か…。

「ちなみに、トランススーツを着けた人によつては”素っ裸になつたみたい”なんて言つて現場で無茶をする人もいるらしいわ」

この時の叶さんはちよつと呆れ顔だった。

「素っ裸…まあ、分からなくてもないですけどね…。」

まあ、確かにあの時、逃げ回つたり、銃を撃つたり、爆弾抱えようとしたりした時、身軽すぎてなにも着てないんじゃないか？とも陰ながら思つてはいた。

「ちなみに、中のシャツはTシャツ型で大丈夫？要望によつては、袖無しやYシャツにもできるけど…。それに、ズボンもショートパンツとかに形状を変えることができるし、ご要望なら、ネクタイやスカーフ、アクセサリーとかも追加出来るわよ。ただ、スプリミナルの規約でフードを取るような変更はダメだけど」

この服、そんなに種類を変えられることが出来るのか…。

そういや、おおいちちゃんのスーツはショートパンツだったな…。

「大丈夫です。自分、普段着もこれに似てるから、これが一番良い気がするんです」

彼女から話を聞いたときには少しワクワクしたが、言葉の通りの理由で、形状を変える必要はないと思つた。

フード付きはあまり着ないから心配だけど、少しでも着なれた形状の方が、動きやすい気がするし。

「そっか、んじや服装は大丈夫ね。それじゃあ、あとはアーツについてね。出して貰っても良い？」

「あ、はい。えつと…アーツアンフォルド特具武装…だったっけ？」

彼女の指示通りに、その言葉を口にだすと、握っていたエンブレムが強く光り、クリスタルのような素材で出来た拳銃に形状を変えた。相変わらず、その冷たい武器は、光に照らされて綺麗に映える一方、ズシンと命を獲るような重みが強い…。

「アーツは、特異点だけが使える強力な武器。であると共に”特異を制御する”ための、とつても大切な物なの」

彼女がそう言った瞬間、またスクリーンの画像が変わる。

今度は、僕が今持っているものと同じ、拳銃のアーツの三面図だ。

「特異の制御…ですか…？」

「うん。例えば、ミズハラくんの場合なんだけど、水の力を使って相手を切り裂くっていう武器的利点と共に、水の使いすぎを防いだり、使用者の形を保ってくれるという、制御的な意味での利点があるの」

「形…って？」

首をかしげる僕に、頷きつつ彼女は解説を続ける。

「実は、ミズハラくんのような変質系は、特異を使いすぎてしまうと、自分の元々あった身体の組織が崩壊して、形を失ってしまう可能性が提言されているの。それを防ぐために開発されたのがアーツで、それこそが一番の存在意義なの。勿論、身体を変化させる以外の特異にも似たようなデメリットはあるから、それを補う能力も勿論あるわ」

彼女の説明に合わせるように変わっていたスクリーンには、特異点が能力の酷使によって、人間の形が崩壊すると言う図が写る。

残酷なものにならないようにフリー素材のイラストにしてあるのだが、それでも水原くんが自分の特異によって死と背中合わせだった事を知り、僕の心の中で一抹の不安と彼への慈悲が過った…。

正直、トランススーツ同様に、異能力があるのに武器がいるのか？とは思っていたのだが、これを聞いて、アーツの存在がどれ程に重要なのかというのが、よく分かった気がする…。

「じゃあ、僕の場合も変質系…ってやつなんですかね？」

アーツの存在意義に従い、僕が系列について聞いてみると、彼女は眉間にシワを寄せ、首をかしげた。

「うーん…ユウキくんの”攻撃を無効化する”って場合は…多分、特殊系だと思うわ。身体を透過させるわけでもないし、相手の攻撃をなかったことにするような感じでもない。それに武装とも環境とも言えないから…少しわからないわね…」

「そ…そうなんですわね…」

特異点のスペシャリストにもわからない能力を持つ自分とは一体…。

「ちなみに、リージェンを除く異形能力には”変質系”、”武装系”、”環境系”、”精神系”、”特殊系”と一応、スプリミナルでは、勝手に5つに分けているわ。まあ非公式だから、別に気にしなくて良いけどねえ〜」

「は…はあ…」

特異点中心の組織なのにえらくテキトーだな…。

しかし、能力が分類されていることで、なんとなく相手の次の行動であったり、攻撃のパターンの多さ等が、戦闘時にわかりやすくなるのだろうか…。

アーケードゲームとか、たしかそういう感じで攻略してる人がいた筈だし…。

能力の分類が知れたといっても、まだまだ勉強しないといけないことは多そうだな…。

「そして…アーツの極めつけは、なによりもその形状よ！」

彼女がそう言った瞬間、スクリーンには、大盾やフルアーマー、双剣、スナイパーライフル等、無数の武器が広がった画像が写し出された。

「形状…ですか…？」

手に持っているその重たい拳銃を、僕はチラリと横目に見る。

「そう。今ユウキくんが持っているアーツは、拳銃型よね？それはあくまでも初期型。スプリミナルの使うアーツは”学習型”って呼ばれていて、その人の特異を学習していつて、最終的にその人の特異に

合った武器になってくれるの。それを『覚醒』と呼んでいるわ」

たった漢字二文字のその単語に、男心を擦られない人間はいないだろう…。

「覚醒…なんかカッコいい…」

中二病とか思われそうだけど、こういう物には心の奥にある少年時代を掘り起こされる物なのだ…。

「ちなみに、武装警察の使う”汎用型”で、警察の人たちは特異を持っていないから形状が変わることはない。武器がそれぞれの物に変わるようになるのは、基本スプリミナルの物だけなの。他のメンバー全員はもう覚醒が済んでるから、後々あなたも覚醒すると思う。さて、どんなアーツになるかは、これからの楽しみね！」

僕に向けて親指を立てる叶さん。

「自分の武器か…」

彼女の解説を聞いて、僕は内心ワクワクしている。

水原くんの使う禍々しい双剣や、あおいちゃんが使ってたブーツ…。

それらが頭に浮かぶ物だから、自分がもしも覚醒したときに、どんなアーツになるのかというのが、より一層楽しみになってきていた…。

と、そんなことを考えていると、スクリーンの映像が突然消えた。

「さて…ここまでアーツのことや特異のこと、スプリミナルに関して色々話したけど、最後にこれだけは知っておいて欲しいの」

足元の照明が少しずつ明かりを強め、暗かった部屋が光を取り戻そうとする中、彼女はおもむろにその口を開いた。

「スプリミナルは完璧ではない」

重厚な力を持って放たれたその言葉に、僕は首をかしげた。

「完璧ではない…というのは？」

大体、こう言う命を守る機関は、完璧でなければならぬのでは？  
と、思っている。

しかし、完璧ではないとは一体…？

「テレビや新聞、インターネットではあまり報じられないかもしれないけれどな

いけど、警察にしても、自衛隊にしても、その場にいる人間を必ず全員救えるという保証は絶対に無い。犠牲の元に到達された目標もあれば、現状被害が報告されてなくても野放しになっている悪だつてある…。それはどんなに強いヒーローでも、完璧な防衛主義者でも『この世界全てを救いきるのは難しい』ということだけは、覚えておいて欲しい」

彼女の羅列したその言葉は、お伽話に出てくるような禁断の扉を開ける鍵のごとく、僕の中の記憶を次々に甦らせた。

「…いわば…どうしても、手が届かない場合があるってことですね……」

思い出したのはあの事件の日の事。

鏡から放たれた光による大災害が起きたあの日、多くの人間やリージェンが死に、生存者の確認や街の清掃に駆り出されていた自衛隊や地元警察が、休憩も無しに汗水垂らして働いていたにも関わらず、惨劇から逃れてしまったバカに「警察なら早くしろ」と、死体を蹴って詰め寄られていたのを多く見た。

あのバカの言動全てが腹立たしかったことを忘れていた時点で、自分にとって、あの事件はそれ程の物だったのか？

妹があんな状態になったのを守れなかったくせに、なにが完璧を求めろだ。

そんな言葉が、僕の頭の中でぐるぐると回った…。

「実はね…。特殊な職に就いた人は完璧を求めすぎてはいけない、という見解もあるの。スプリミナルだけじゃなくて、武装警察に入った人のなかにも、”あと一步届かなかった自分の手を恨んだ人”がたくさんいて、中には辞めていった人もいる。幸い、うちには辞めた人はいなかったけど、罪悪感で吐いたり塞ぎ混んだりした子は沢山いた」  
今、僕の中で起きている葛藤を知らない叶さんは、そのまま話を続けていた。

あと一步届かなかったという思い。

スプリミナルに入る前から、それは自分の中でもあったわけだし、あの日の警察官や自衛官の人々も、きつとその無念を心の中にずつと



深くとどめていたはずだ。

もしもあの日、僕が警察官の人たちと同じだったら、きっと耐えられなくて逃げ出していただろう。

自分自身の思想を見つめ直したことで、僕は心の底から、警察や自衛隊等への申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

「とにかく……できるだけ重く見すぎると言うことですね……」

「一応そうですね。ただ……これだけ言葉を掛けても塞ぎ混んでしまう人はいる。あなたがそうなる可能性も否定できない。だから、この事は片隅においておくだけで良いわ」

「わかりました……」

彼女は優しくそう言ってくれたが、正直僕は少し怖くなった。

自分の手が届かないという状況への対峙が。

自分自身が、そうなってしまいかもしれないという可能性が。

だからこそ『完璧だと思ふな』という言葉は、スプリミナルの人間全員にかけているのだろう……。

完璧でなくてもいい。

できることをやっていこう……。

「……よし、これで粗方の研修は終わり。あなたが本格的に現場に出るのは明日からね」

彼女は手に持っていたペンを机に置きながら、少しうつつ気味になっっていた僕の目を覚ますようにそう言った。

「……そういや、探偵業務の現場って……詳しくはどういうことをするんでしょうか……?」

僕が聞くと、彼女は指を折って詳細な業務説明をする。

「そうね……依頼が出るまで報告書の作成等の事務仕事。それか、ノインの出現の際に迅速な対処をするためのパトロール。まあ、基本的には依頼が来たら、その依頼を全うするのがお仕事ね。そして依頼や武装警察からの指令によっては、バラーディア以外の場所にも出張で行って貰うことがあるから、よろしくね」

「地区を跨ぐこともあるんですか。なかなか大変ですね……」

パトロールや依頼業務に重ねて、いろんな場所にも飛ばなければな

らないとなると、やはりなかなかの激務なんだな、スプリミナルの仕事は…。

「まあ、新人の内は出張はないから大丈夫。あなたはとにかく依頼を全うする事と、人を守ること。それを念頭にがんばってくれたら良いから！」

新人へ期待を乗せるように、叶さんは僕にそう言った。人を守ること。

警察認可組織としては、当たり前前かもしれないけれど、その一言に、僕は少し背中を押された気がした。

「はー！」

色々大変だけれど、頑張っていこう。

完璧じゃなくても良い。

今は覚醒していなくても良い。

とにかく、誰かの役に立てるように…。

「じゃあ早速、お仕事体験よ！あなたがこれから受け持つ場所へと行きましょう！」

早速の仕事への命令に、胸の鼓動を鳴らしながら、僕は立ち上がる。

「了解っ！」

パトロールでも、事務仕事でも、必ずこなしてみせるという意味を込めて、僕は彼女に元気よく返事をした。



地下の駐車場と言うものは、いつも車の排ガスと人間の香りが籠る。

トランススーツを身に纏い、フードを被って影に隠れてスマートフォンでSNSを眺めている中、疲れきった顔の生物達が、やれやれと肩の荷を下ろし、車を発車させる。

この会社は17時に定時な上にやけにホワイトなようで、先ほどから車が出ていくばかりだ。

リージェンが来てからもブラックとホワイトの労働概念は存在してしまいが、2020年代辺りと比べれば、給与やら待遇やらは結構マシにはなったらしい。

まあ、完全歩合制で超肉体労働組織の僕からしたら、正直そう言うの関係ないけど。

「遅いな…」

スマートフォン ホーム画面を見てみると、時刻はもう約束から30分を過ぎてている。

社長というのはやはり大変なようで、来たときには満車だった駐車場の車も、もう数えるくらいしかなくなっていた。

僕は携帯をポケットにしまい、腕を組んで目を閉じ、そつと壁に背をつけて寄りかかった。

少々時間は掛かったが、一連の騒動の全てのトリックは解けた。

何故、娘はいなくなったのか。

なんの理由があつて娘の姿が消えたのか。

誘拐なのか、行方不明なのか。

結局、この事件の犯人は誰だったのか…。

「ミズハラさん！」

その全ての鍵が、たった今業務を終えて、ここに来た彼に握られている。

少し駆け足できたのか、彼の額には汗をかいていた。

「どうですか…？進展ありましたか…？」

駐車場の片隅、悲願の目を向ける彼に、僕は調査結果を単刀直入に告げる。

「娘さんの居場所…わかりましたよ…」

枝分かれした分岐点の中、全ての捜査と推理の末に導き出されたのは、”娘は生きている”という物だった。

「本当ですか!?それは…どこですか!？」

結果を聞いた彼は、瞳孔をかつ開きながら、僕にしがみつく。

「どこか…ねえ……」

全ての真実を知っている僕は、眉間にシワを寄せながら、彼を睨み

付ける。

「カネモリさん。あんた…この会社で隠してることあるでしょ…？」

僕が問うと、汗腺が一気に開いたかのように、彼の額からブワツと汗が流れ出し、僕の袖から手を離す。

「な…なにを言い出すんですか…？そんなの娘と関係が…」

「あつてしまったんですよ…。今回の誘拐事件と…」

動揺している彼の話を遮り、僕はこれまでの経緯を説明し始める。

「まず、あなたは先に”警察に依頼していた”と言っていました。それは嘘。武装警察にデータ管理をしている部署があるけど、そこにあなたの来署履歴はなかった。それは…嘘じゃないですよ？」

僕が問い詰めると、彼は汗の流れ続ける顔をゆっくりと縦に振った。

「ですが…スプリミナルは武装警察の認可組織…警察からの紹介がないといけないと聞いたので、電話から…」

「はい、また嘘。来署履歴と一緒にそう言うこともわかってんだから、今さらそんなこと言わなくてもいいよ。ちゃんと全部言うから」

言葉を遮られ、真実を向けられたことに戸惑う彼に向け、僕はふんと鼻から息を鳴らしながら、話を続ける。

「スプリミナル自体、秘密組織であつても本社があるし、わざわざワンクッション置いて書類を通さなくてもこちらに来ればすぐに手続きは出来た。ならば何故、君が「一度警察に来署した」と嘘をついてこちらに来たのか、僕はその理由を探していた…」

話を他所に、この駐車場に止まっていた最後の車が、僕らの横を走っていく…。

「スプリミナルの情報捜査課に金城コーポレーションの歴史を調べて貰った所、今から約四年前に、金城コーポレーション会長の金城 孔明が、鏡面発光事件の影響ではぐれていた愛犬を探すためにスプリミナルに依頼をしていたようだ。それも…スプリミナル最初のお客様としてね…」

兼森くんの汗の出方と、微妙な息づかい、そして心臓が波打つ回数と速度の変化で、如何に彼が動揺しているのかがわかる。

彼の隠している物に近づこうとしている僕は、カードゲームの切り札の如く、二枚の書類を取り出した。

書類はどちらもデザインが違っており、その内の片方は少し黄ばんでいる上に、情報が記載済みだ。

「それを知った僕は、改めて君から貰った依頼書を見てみた。そして、提出された書類がスプリミナルが出来た初期に僕らが作っていた、少し纏まりのない部類の物。文庫本に例えると、初版の物だったことが分かったんだ。きっと、会長が僕らに依頼をした時、余分に貰っていた書類が残っていたんだろう。それを君が使った…ということだろう?」

全ての車が去って静かになった駐車場の中、彼に提示した書類を見た彼は、また首を縦に振る。

やはり、彼が警察に行っていないのは本当だったわけだ…。

「それとついでに…その会長、数日前に死んでますよね?それって、なんでか知ってますか?」

排ガス薫るこの空間、真実に煙たがる彼の尻尾はついに露出される。

「それは…変死…では…?」

もう真実までもう少しして所なのに、まだはぐらかすか…。

「違う。会長は殺されていた」

その真実を告げて、普通なら血の気を引かせる筈だが、彼から見えるのは『バレた』とでも言いたげな、苦虫を潰した顔だった。

「警察のデータベースから事件の真相を見つけたのは勿論。監視カメラを365日24時間ハッキングして、データを集めている部署もあるから、殺害時の証拠もちゃんと見つかった。まあ、犯人は全身を隠していたらしいから、それが誰だったのかはわからないけど…」

金城コーポレーションの事件が起きた当時は、とある大手ゲーム会社の倒産騒動やら、芸能人の不倫やらが話題だったから、報道されても、残念ながらあまり目につかれることがなかった。

そのため、この推理すらもはぐらかされる気がして心配していたのだが、彼から流れた一筋の汗がコンクリートの地面に落ちるのを見れ

ば、もう隠す気はないということが明らかだ。

「警察にも頼れないし、会長が殺されている…。その状況下から考えられる課程が僕の中で一つ…」

僕が人差し指を立てた瞬間、ついに彼の口が開いた。

「もしかして…私が犯人だなんて…良いませんよね…?」

その問いに対して答えることはできるが、僕はあえて黙ってみることにした。

「私は…私は！実の娘の行方不明をでっち上げるなんてことしません…っ！それに！会長の訃報は、本当に知らなかったんです！」

僕の無言の反応を見て、彼は社長の訃報の真実を突きつけられたとき以上の動揺を見せている。

彼は少々浅はかな人間だ。

目の前の情報にだけすがってしまい、何もかもが見えなくなっている。

「全ての答えは…こういうことだ…」

僕は手を天井に向けると、体から水分の球体が滲み出し、それが集まって、巨大な水球へと変化させる…。

「原水圧縮…」

気泡が水球からプツプツと消え始め、少しずつその液体は強固な物へと変わりだす…。

原水圧縮は、水分を圧縮させて硬化させることができる、自分の特異能力の一つだ。

「そ…そんな…冤罪だ！私は…私は！そんなこと絶対にしないっ！そんなことをする理由自体がないんだ！」

僕の上空にある水球を見て、地面に尻餅をつきながら後ずさりする兼森。

ここまで怯えられるのは心苦しいが、真実を伝え、統制を守るのが自分の仕事だから、仕方がない。

「槌シヤオム」

僕が腕を振り下ろすと、その水球が連動し、そこへ向けて落ちていく。

「…っ！わああああああっ！」

彼の悲鳴が空回りする頃、それはついに目的の場所へと着弾する  
…。

ドゴオオオンツ！！

4—5 『Y講習中、K仕事中』

それが破壊されたと共に、破裂した水が地面に滴る…。

「…っ!?」

槌シヤオムが破壊したのは、兼森くんの身体ではなく、その足元のコンクリートの床だった。

そこが破壊されたことにより、僕らは、地面の下へと落ちていく。水の体の自分に、着地の衝撃はないから、彼よりも早く地面に足をつけ、次に落ちてきた兼森くんを、水を膨張させて大きくした両腕で受け止めた。

「よつと……。大丈夫?」

「あ……。あれ…?」

僕に受け止められた兼森くんは、なにがなんだか分からず、目を回しながらキョロキョロと顔を右往左往に動かしていた。

「しっかりしなよ社長」

僕は彼を地面に下ろし、元に戻した腕でバシンと背中を叩くと、咳き込みながらハツと意識をとり戻した。

「な……。なんですか…(っ)…(っ)…」

フードを外し、なんとか着地したそこを見回せば、誰だつて酔いを覚まして絶句することは間違いないだろう…。

「やっぱり…(っ)ここにあつたわけか…(っ)…」

臭った烏賊のような薫りが微量に漂うそこは、明らかに人工的に作られた地下室。

壁には盗撮や雑誌の切り抜き問わず、一面に女兒の顔がぎっしりと乱雑に貼られており、床にはこどもサイズからSサイズまでの女兒服が大量に投げ捨てられていた。

少し歩けば、グチョツと音を立てて、僕の靴に白濁とした液体がへばりついていた。



「気持ち悪い…」

靴についた液体を、地面に擦り落とす。

言ってしまったえば、ここは恐らく強姦魔のアジトだろう。

何らかの方法で女兒を拐って、ここで……ということだな……。

「わ…私じゃないですよ!?!私が愛するのは娘と死んだ妻だけで…」

「しつこい。君が犯人じゃないことくらい、初めからわかってるよ」

あそこまで慌てていたけれど、彼は絶対に犯人ではない。

そのための明確な証拠が今は無いが、まあ『娘を助けるための依頼』を頼んできた時点で、彼が犯人ではないと言うことを信じるには値していた。

「改めて、僕は少し君に聞きたいことがある」

この事件を解く鍵は、この次の言葉に込められている。

排ガスの匂いが掠れていく中、僕は口を開く。

「カネモリくん…この会社、ミラーマフィアに乗っ取られてるよね?」

ついにそれを突きつけると、彼の顔はサーツと青ざめる。

この事件の全ての鍵はリーゼン至上主義団体が関係していた。

それも、一番厄介な能力持ちのリーゼン単体が…。

「ミラーマフィアは、金城コーポレーション会長を変死に見せかけて殺し、あなたを脅してここをミラーマフィアの第二拠点として乗っ取った…。その拠点として予定していた部屋が、ミラーマフィアが建設しようとしていた…この部屋だよね…?」

青ざめた顔のまま、彼はゆっくりと相づちを打つ。

「そう言おうとしたのに、先走っちゃうから…タイミング変になっちゃったじゃん」

僕はそう言って口を尖らせる。

正直、犯人にでっち上げようとかそう言う気はさらさら無かったんだが、誤解させてしまったようだな。

なんて思っている傍ら、彼自分が隠していた真実について話し始めた。

「た…たしかにそうです。一ヶ月前に突然、虫の形をしたリーゼンの一人が押し寄せてきて…『俺はミラーマフィア或マスの代表とし

て来た。ここの地下を第二十七の隠れ家として使わせろ』と言われま  
した……。勿論、私は断ったんです。しかし…彼が交渉として次に見  
せてきたのは…会長の首でした…。怯えた自分は、渋々条件を承諾  
し、その上で『社員と家族には決して手を出すな』と言う条件で、互  
いに同意し、この部屋の建設を許可しました…」

やはり、彼がずっと動揺していたのは、自分の会社がミラーマフィ  
アと関わりがあるためだった。

会社の長を受け持っている以上、裏社会と関わりがあるとすると、  
マスコミやら世間やらが黙っていないし、それによつて社員が偏見や  
ら哀れみの目やらを向けられて、離職者だけでなく自殺者も増えてし  
まうかもしれない…。

「ですが…それと娘にはどういう関係があるんですか!?娘がいなく  
なったのと、ミラーマフィアに関係は!？」

マフィアとの関係性を突きつけられた反動か、兼森くんは荒ぶる、  
僕に詰めよつた。

まあ、なにも分からない人間はまずそう聞くわな。

「冷静に」

僕は彼の身体をトンと叩くと、我に返つた彼は申し分けなさげに身  
を引く。

この事件が関わっているのは、ミラーマフィアと金城コーポレー  
ション殺害事件だけではなく、もうひとつ重要な事件がその鍵を握つ  
ている。

「カネモリくんさ…一週間前のニュース覚えてる？川の中で女兒の指  
が見つかったって話…」

言葉で聞く限り残酷そうな事件について、彼は直ぐ様返答をした。

「知ってます…。その時、ユウコに『怖いね。気を付けないとね』と話  
した覚えがあります…。相づちしか帰ってきませんでした…。」

自分にとつては、そう言うの茶飯事だけでも、彼がその日に話して  
いた情景が思い出すことができるほど、一般人にとっては、驚愕的な  
事件だったようだ。

「君の娘さんの事件が誘拐だったと仮定していた僕は、ここ一ヶ月の

事件について調べて貰ったんだ。そしたら、小学生の女兒数名が消えたという報告が一週間に一度、規則的にあつたらしい。ここから犯人やら目撃情報やらを色々調べていくうちに、たまたま一件、最初に女の子がいなくなった時の事を語ってくれた人がいた。今日の昼頃、たまたま僕の占いを頼ってくれた、その一人の女性だけは『一瞬にして少女が拐われていったのを見た』という目撃情報をね」

あの時、たまたま聞かせてくれた目撃情報は本当に奇跡同等だった。

この一件だけでは無理だが、これを機転に調べていく内に、このトリックが解けた。

正に、事件解決への扉になってくれたわけだ。

「それで…その…女兒誘拐の犯人つてのが…」

ゾワアツ!!

「…っ!」

この事件の元凶を言おうとしたその瞬間、突如、足場が一瞬にして逆円錐上に窪み、思わず僕はバランスを崩す。

「ミズハラさんっ!」

兼森くんが突然のことに驚く傍ら、砂状になった地面の中心へと吸い込まれる女兒服の波の中、僕は直ぐ様、特異を発動させた。

「原水放出っ! 蒼流!」  
シユトローム

自分の足の裏から大量の水を勢い良く噴出し、フライボードのスピンのようにクルクルと体を回転させながら、その地獄から抜け出す。

「ぎゃあっ!」

僕が床に着地した頃、突然情けない声が聞こえ、砂状の地面が高質化し、そこからなにかが飛び出てきた。

「ツチ……てめえ……きたねえ事しやがって…」

砂から出てきたそいつは、黒尽くめのスーツを身に纏い、桑形のような大きな顎を避けながら、顔についた液体を、毛の生えた虫型リージェン独特の細い腕で拭う。

「やっぱり…アリジゴク型のリージェン……ミラーマファイアの一人だったか…」

一発くしやみをするリーゼンを前に、僕はポツリと呟く。

アリジゴクは、そもそもウスバカゲロウの幼体であるのだが、もともと異世界的な場所からこちらに来たリーゼンにとって、そういうのは関係無いようだ。

それはさておき、事件を追い始めてから、自分がずっと考えていた推理は、どうやら当たっていたようだ。

まず、小学校高学年の女の子を、誰にもみられずに空間そのものを消すトリックについて。

その条件を達成させるのに最適な特殊異形能力は”人をまるごとワープさせる能力”や”手に触れることなく、人の記憶と監視カメラのデータを書き換える能力”であったり”犯行そのものを無かったことにする能力”等、未知数だからこそいろんな事を考えられるかもしれない。

しかし、それでは先ほどの指が発見された事件と結び付かないし、その空間から”一斉の形跡すらも消してしまわなければならない”となると、上記のような能力は今回の誘拐事件に向かない。

では、なるべく誰にも見られずに形跡を消す方法はなにか？と考えた時、”土中にもぐれる能力”を持つ者なら、誰にもその姿を見せること無く、ターゲットを監視できるのではないかと考えた。

そこから、様々な推定を元に、トリックを考えながら聞き込みをしていると、とある占い客が「一ヶ月前に、女の子が消えてしまうのを見たことがある」と言う話を持ってきたのが、起点となった。

その客は、たまたま買い物帰り、橋の上から景色を眺めていると、河川敷で一人で遊んでいた女の子が、まるで落とし穴かマンホールの中にでもはまってしまったかのようにスンと消えてしまったらしい。

その子を助けようと追いかけたが、地面にはどこにも穴が空いてなければ、空洞のような音が聞こえたわけでもなかったため、自分の幻覚と思っていたらしい。

その証言から僕は”地面ごと変えてしまう”と言う能力の可能性に目を向けて調査と考察をおこなった。

すると、アリジゴクのリーゼンが使える特性の一つとして『砂の

形状を変える』と言う能力を持つ者がいるという情報を得た。

僕はそれに目を光らせ、その能力に焦点を絞って調査した結果が、目の前にいるそのリージエンだ。

「アリジゴク型リージエン『安藤レオ』だな…？多くの女子児童を強姦、そして解体して臓器等を海外へ違法売却している凶悪犯…」

それを突きつけると、彼はギリギリと歯を食い縛る。

安藤は、スプリミナルが出来た初期辺りに武装警察によって逮捕されていたらしいのだが、当時は自分の持っている能力を隠し持っていたらしく、そのまま脱獄。

その後の事はよくわからないけど、金城コーポレーションの乗っ取りと、この黒尽くめの格好を見る限り、ミラーマフィアの或マスに逃げ込んでいたようだ。

或マスは虫のリージエンが集まりやすいし、そこが妥当だったのだろう。

それと、スーツがまだ型崩れし始めている方だから、きつと入ったのは一、二ヶ月前だと思われる。

きつと或マスに入ったのも、身を案じてのことだけだろうな。

「だったら…どうしたあつ！」

と、つい彼の考察をしている最中、安藤は懐から出した銃から弾丸を僕に向けて放つ。

「うおっとー！」

それに気づいた僕は、身体を即座に水化させ、弾丸を身体にすり抜けさせて避ける。

弾丸が壁に着弾すると、その硬い物質は崩壊し、サラサラと砂状になって床に落ちていった。

なるほど、自由自在に砂を操るといえるのはそう言うことか。

リージエンは人間と違って、外見に見合った能力しか出せないから、推測がしやすい。

「消えろっ！」

すると、彼はコンクリートの床に手をつけると、それは砂状になり、アッパーカットで砂を僕に投げつけると、一瞬で硬質化して刃へと変

化して、僕に襲いかかる。

「特具武装！原水放出」マールシユトローム 螺旋”！」

即座に胸にぶら下がったエンブレムから二本の乱れ剣を取りだすと共に、背面から水を吹き出させて身体を捻りながら、砂から生成された刃を砕き裂いた。

その間、片手で数えられる程の秒数。

砕かれた刃は砂となって床に落ち、ミスト状になった液体が部屋にふわりと舞った。

「なに…っ!？」

混乱する彼は、また地面を掴むと、砂に分解と再構築をして、コンクリート製のクナイのような刃を生成し、僕に向けて投げる。

「ふっ！」

飛びかかってくる刃に向けて、僕は攻撃のための特異は使わず、ただ剣を振るう。

コンクリートとルストロニウムを比べると、硬いのは後者だ。

飛びかかる無数の刃に向けて連撃を食らわせれば、コンクリートなど簡単に粉々にして防ぐことができる。

やはり、能力を持ったただの犯罪者は爪が甘い。

「お前みたいな強姦魔なんか、よくミラーマファイアに入れたな…」

「うるせえんだよおっ!!」

少し安藤の心を煽ってみると、それに激情する彼は、先程よりも大量の砂を投げつける。

それが宙で球状となり、強固なコンクリートの弾丸となり、それが僕に襲いかかる。

さすがに、これを剣で斬るとなると時間を要するな…。

あまり無駄遣いはしたくないが、特異を使用して破壊するしかないだろう…。

「原水放出！」

原水放出は、身体の水分を放出する…。

コップフシユトローム  
「響 蒼 流…っ！」

僕は後頭部から水を噴出し、迫ってくるコンクリートの砲丸に額を

ぶつけて三つに割った。

「なっ……!」

「あ……頭で!」

この打開方には、さすがに安藤と兼城くんも驚いたようだ。

自分で言うのも嫌だけど、石デコでよかったところ言う時にだけは思える…。

「はああっ!」

その後、僕はそのまま水の排出場所を後頭部から背へと変更して勢いを増幅させ、安藤に接近、そして彼の身体に掴みかかる。

「フッ!」

そのまま、安藤の右腕を持ちながら、身体を彼の背に向けてぐるりと回し、そのまま体重を掛けて彼を取り押さえた。

「ッグー!」

情けない声を出しながら、安藤は僕の身体に押し潰される。

苦し紛れか、彼のスーツを破り、身体からもう二本、鉤爪のような足を生やすが、それに気づいていないわけがなく、水の身体でその攻撃を通し、避けた。

リーゼンは基本『人間の形をした獣』だけど、身体の構造だけは人間とは違うのが厄介だが、今は問題ない…。

「お前が誘拐に使ったトリックはわかっている…。さつき僕をひきずりおとそうとしたように、女の子を落とし、その後に地面を戻した…とということだろうか?」

僕の推理を聞いた安藤は舌打ちをし、この推理の正解を表す。

彼が行った特性能力のトリックを、少し詳しく説明するのでしょうか。

犯人の手口は『ターゲットを地面の中に引きずり込む』と言うもの。アスファルトの地面を砂状にして治す、というパターンを繰り返す使用ことで、彼は地面の中を移動することができ、微量な穴を開けつつ、女の子の後を付け狙っていた。

それを何度も何度も繰り返すことで登校や行動のパターンを地図と照らし合わせながら観察することができるようになる。

そして、決行日までには、粗方の地図の情報等を頭にいれているため、一目のつかない場所を選ぶことができ、犯行の際には、女の子の周りだけを砂化、蟻地獄化させて一瞬で引きずり込み、そのまま誘拐。一般の人間は、地面から子供の声が聞こえるだなんて思わず、安藤はこの地下室へと連れ込めることができる。

ここまで誘拐できた暁には、子供達に暴力を振るえることができる……と言うのが、彼にとっての完全犯罪だろう。

確かに、女の子の周りをまるごと飲み込むことにより、手がかりをまるごと地面に埋めることができる上に、砂から元の形状にも戻せるため、証拠隠滅もできる。

しかし、彼の1つの見落としによって、そのトリックは僕によって破られてしまった。

その鍵となるのが、依頼開始時に僕が押収した『アスファルト化合物の砂』だ

アスファルトの地面は、上から表層、基層、上層路盤、下層路盤、構築路床、原地盤……というように層が重なって地面ができている。

犯人は砂にする能力を使ったことで、僅ながらその層を崩してしまった。

それにより、地面から表層とは違うアスファルト化合物(基層)が、まるで肌が粉を吹くように地上にせり出してしまう、僕の手へ渡ってしまったということだ。

そこから推理をするのはなかなか大変だったが、逆にこれを残してくれていなかったら、ここまでたどり着けることはなかった。

間抜けな安藤くんには、心の中だけでお礼位は言っておいてやろうか。

「逮捕される前に、まずは質問に答えろ。この人の娘はどこだ?」

僕はポケットからプリズンシールを取り出しつつ安藤に聞くが、彼は何かの余裕を持っているかのようにニヤリと笑う。

「娘え……ああ……この黄色いスカートのやつか……」

安藤は近くにあったプリーツスカートに手を取ると、遠くで様子を見ていた兼城くんが、愕然と腰を落とす。



「食っちゃまったよ…。高学年にしちや、うまかったぜ…?」

行為の事を思いだして、口からヨダレを流す彼を見て、僕は心の中からジワリと嫌悪が溢れだす。

アリジゴクは肉食虫。

そして、この世界での食人は殺人よりも重大な罪だ…。

「そ…そんな…ユウコオツ!!」

食われた娘を思う父親は、両目から大粒の涙を流しながら、地面に手をつけて蹲うずくまった。

「…言葉だけじゃなくて、ちゃんと愛してたんだね…娘のこと…」

自分はスプリミナル設立当初から就いているが、子供の事をこころで愛している父親には、あまり会ったことがない。

自分が出会ったことのある独り身の父親の多くは、ネグレクトだとか、家族への暴力、猥褻、殺害…。

自信の過去も含めて、まともな親なんてきつといないと思っていた。

だが、そんな人間が多く目立ってしまった中でも、兼森 宍道は強く愛を感じる者だ…。

娘の危機に、これほど泣ける人間の存在がいて、愛しているに似た言葉を吐き出せる分、彼は立派な父親で、そんな人間が居てこそ『親』なのだと言う事が、なんとなくわかった気がする…。

「こんな…親父の気持ちを知らないやつが…あの人の前で食ったなんて言いやがって…」

我が校を愛している心。

それを踏みにじろうとする行為が許せないのは、僕のなかにいるバケモノとも利害が一致していた。

「反吐が出る…」

僕は彼を怒りを込めて睨み付け、プリズンシールの針ではなく、淡青に輝く剣を彼の身体に突き立てた。

「知らねえよ…全部俺の欲望のためなんだよお!!」

だが、抑えられていた安藤が逆上、激昂すると、彼の半径2メートル周辺に円錐の空間が開き、彼の専売特許の形とも言える罨、蟻地獄

が一瞬で完成する。

「マズイッ！」

足を取られそうになった僕は、奇しくも彼から手を離し、踵から水を噴出させて蟻地獄の中からなんとか脱出した。

「だらあああああつー！」

その瞬間、逆円錐の頂点、言わばこの穴の奥に立つ彼は、また砂を掴んで刃に変え、こちらに投げつける。

「ツチ…またこれか…っ！」

なんとか体勢を立て直し、僕は飛びかかってくる刃を剣でことごとく尽く砕くが、蟻地獄の布陣を作り終えている安藤は、ようやく余裕ができた事によって口角を上げ、まるで勝機を悟ったような顔を表す。

蟻地獄を潰せば良いだけの話だが、頭に浮かんでいる計画を実行するには大量の水が必要な上、罠にかければ僕自信の身が危ない…。

奴の笑みは、ただの気取った勘違いって訳ではなさそうだな。

「ハハハ…俺は普通のリーゼンよりも能力が強い個体らしくてなあ…：？砂をある程度は自在に変化させたり操ったりできんだよ…こんな風にな！」

意気がった安藤が蟻地獄の壁を触ると、そこから伝達するように、僕の周辺に巨大な爪のような物を出現させる。

砂の爪の切っ先は、安藤が手首を曲げた瞬間、僕に向けて曲がり始め、そのまま鋭く伸び始めた。

このまま、その鋭き爪で僕の身体を突き刺そうというのか…。

アンフアング・フルス  
「強化水剣！」

そうはさせまいと、僕は腕から水を噴出させてアーツに纏わせると、巨大な二本の剣が完成する。

「せえ…のっ！」

合図と共に剣を振るい、襲いかかってくる砂の爪を根本から切っ先まで、バラバラに切り裂いた。

「…っ！」

しかしその瞬間、切り刻まれた破片が一気に砂に戻り、それが無数の小さなクナイへと再生製され、僕に向けて飛びかかっていく。

あの爪で閉じ込めてからアイアンメイデンのように串刺しにしようとしていた…と言うことか。

「そうは…させないっ！」

アーツを強化させたまま、次々に飛びかかってくるクナイをうち壊していくが、あまりの数の多さだから、襲いかかってくる武器全てを打ち払えるわけではない。

幾多もの中から、数本僕の身体を貫くが、自分は水を操り、さらには身体自体を水に変えることができる特異点。

特異発動のタイミングさえ合えば、悠樹くんの能力のように、その攻撃をすり抜けさせることができる。

だから、こんな攻撃も効くはずがない。

「…痛っ！」

と、思っていたが、その流れ弾の中にある一つのクナイが、何故か僕の頬の皮膚を斬った。

「くっ…。さすがに…マフィアってのは伊達じゃないか…。」

攻撃が止み、僕はパーカーの裾で頬を拭うと、そこには血が付着していた。

クナイ全てが僕の身体を貫かなかったことから、あの砂の爪のなかに、ハイドニウムを隠し入れていたと仮定できる。

ハイドニウムは特異自体を遮断させるから、防ぐために使った特異自体も、無効化されてしまう。

ハイドニウムはスプリミナルにとって最大の厄介者だ。

それに、攻撃の少し先を見据えるのが甘かったため、体内の水分もあまり無く、もうあまり激しい動きはできない。

僕の特異は、あくまでも身体に蓄えた水分を媒体として、体外のみで増幅させたり圧縮させたりをすることで、このような技をバンバン出せる。

しかし、それは特異を使えば使うほど水分がなくなっていくから、自分として、命を危険にさらすのと同じ。

ここまで大きな戦闘になるとは思わなかったから、水分補給用のボトルも持ってきていないし、勿論の事だが、周辺には水が充填できそ

うな場所もないし、それどころか、砂が粗方の水を吸収してしまう…。ならば、ここから先はできるだけ水分を節約させ、短期戦に持ち込むしかない。

しかし、彼も能力持ちとして、結構強いから、あまり単調なことはできない…。

「…：…なら、こつちも…：…！」

この逆境の中、少々リスキーな作戦が思い浮かぶ。

失敗すれば、恐らく奴を取り逃がす上に、僕自信もヤバイことになる…。

「原水放出！」

しかし、今頼れるのは、この頭に浮かんだ一つの策だけ。

あまりこう言う作戦は好きじゃないが、少しでも可能性があるのなら、賭けてみることにした。

「蒼碧流！」  
アレックス・シュトローム

僕は踵から水を噴出して翔び、奴の頭上に来たところで、身体のうちこちから水を噴出させ、円錐のなかにいる安藤に向けて水を発射させる。

「そんなもんで倒せるかあつ！」

すると、彼は巨大な砂の壁を作り出し、僕の水攻め攻撃から身を守る。

「く…：…っ！」

できる限り、大量の水を安藤に向けて噴出させるが、彼の出す砂の壁が、ぐんぐんと水を吸収してしまう。

それどころか、自分の身体の中にある水分量も少なくなっていく、そろそろ腕の皮膚がひび割れてきそうな程だ。

やはり、この作戦はなかなか厳しいか…。

「ツハツハツハ！これがスプリミナルか…？どう見ても自分の能力の安売りじゃねえか！」

優位に立っているつもりの安藤は高らかに笑い、必死になっている僕を煽る。

確かに、このまま水を噴出し続けても、スポンジのごとく砂が水を

吸っていくだけで、攻撃の無駄遣いと捉えられても仕方がないだろう…。

「それはこっちの台詞だし……」

だが、それで良い。

今、この水の無駄遣いこそが僕にとって最有力の戦略だから。

「く……」

しかし、カツコつけるのも束の間。

自分が勝機を悟っていた刹那、ついに自分の中の水分が上限に達し、肌がひび割れて出血する。

所謂、身体危険状態へと陥った途端に力が尽き、湿った蟻地獄の壁に落ちた。

残念ながら、リミットのようだ……。

「ミズハラさんっ!!」

涙声で僕を呼ぶ依頼者の声が聞こえる。

このまま、倒れてしまうのは……面目ない……。

「どうした?これでおわりかあ……?スプリミナルってのは、対したことねえなあ?」

勝ったと思つてニヤニヤと微笑む安藤の姿が、いちいち癩に触り、自らの皮膚から滲み出た血が砂の上に落ち、地面に赤黒い液体が吸われずに留まった。

自分の勝機は間違つていない。

「へへ……これでいいんだよ……」

血の滲む口、乾いた声で僕はそう言うと、ポケットから一枚のタロットカードを取り出して掴む。

タロットを持っていないもう片方の腕は人差し指を立てて、蟻地獄の出口の先、つまり天井へと指をさす。

「占つてやるよ……今日の運勢は塔の正位置。」頭上に注意だ……」

「ああ……っ?」

僕がそう言った途端、一粒の小さな滴が、安藤の頬に落ちる。

「ん……?」

彼が顔に付いた液体を拭うと、またその滴は蟻地獄の壁へ、安藤へ、

そして僕の身体へ、ポタポタと落ちていく…。

「なんだ…これ…？」

違和感を感じ、安藤がふと頭上を見た。

首が乾ききって顔をあげられないが、彼はその光景に絶句している事だろう。

歪で巨大な水の塊が、ぐにぐにと動きながら、この天井いっぱいに留まっていることを…。

「原水放出…」

僕がその言葉を口にし、手を握った瞬間、その滴の降水速度は勢いを増し、豪雨のごとく一気に降り注ぐ。

「ぐ…なんだ…っ！だああああっ！」

その雨は、水を吸い付くし、まさに土の壁となった蟻地獄に溜まり始めるだけでなく、水の滴の一つ一つが安藤の皮膚を切り裂いていく。

それはまるで、無数の針が敵兵を殺すために落ちてくるかのよう…。

地獄のような光景だが、自分にとってのそれは、地獄とは真反対の意味を為している。

「つぶは…あああ…生き返った…」

常人以上に水が含まれている身体の自分にとって、針だろうが槍だろうが、水の攻撃ならオアシス同然。

乾いた肌が水を吸収することで、自分の体力も回復するのは、ある種の充電に近い能力だ。

相手への傷害にも、自分への回復にもなるその攻撃は、まるで二つの表情を持つ雨の如く。

この攻撃を名付けるのなら…。

「天射砲<sup>レイン</sup>…。僕が今、考えたトラップさ…」

言葉を聞くことも忘れて、攻撃に悶える安藤に、僕は僅かな笑みを浮かべる。

「が…や…やめろ！やめつ、ガボツ！」

しかし、その頃にはもう大量の泥水が蟻地獄の中に溜まり、安藤の

口が沈まんとしていた所だった。

恐らく、彼の特性能力はあくまでも『乾燥した砂状の物を操る』に限っているようで、水を含んでいる影響でどれだけ手に触れても、ここから抜け出せることはできないようだ。

ようやく粗方体が動かせる程に身体が潤った僕は、かかと踵から水を噴出して、蟻地獄から脱出する。

上空から見ると、その地獄の大きさと、底に貯まった泥水の多さで、天射砲レールガンの威力の強さが見受けられる…。

「やつぱり…やばいときに逃げられるような抜け道をしっかり作ってなかったな…？おかげで、折角できた蟻地獄のトラップも水没か…」

僕は地面に着地し、哀れな強姦魔を嘲笑する。

地中に潜って逃げられる道さえ確保しておけば、この水もさらに吸収されたはずだし、こんな血と泥が滲むような水溜の中で苦しむことはなかっただろうにな…。

「ガ…た…たふつ…ガブツ！たすけ…ガボ…」

「あー？なに？聞こえないんだけどお？」

もがき苦しむ安藤に、耳を立ててからかい煽る。

「が…ガボツ…グブ…」

だが、天射砲レールガンの威力は強いだけではなく、予想以上に降水速度も速かったようで、もう安藤の姿は見えなくなっていた。

いくらリーゼンが頑丈だからといっても、さすがに頃合いか。

「…つたく、処刑指示が出てないから、このクズを殺すこともできないわけか…」

やれやれと息を吐きつつ、僕は改めてプリズンシールを取り出すと共に、十字架のの部分に紐を括って、息絶え絶えになっている安藤に向けてそれを投げて突き刺した。

パンッ！

逮捕完了の破裂音が聞こえると共に、僕は紐を手繰り寄せ、犯罪者の入った拘束具を回収した。

とりあえず、強姦魔を逮捕できたのは良かったが、また派手にやつ

てしまった物だから、後片付けやら報告書やらが面倒だ…。

とりあえず、屑の確保が完了できたことを誇りに、現実逃避しよう…。

それに、まずは涙を流しきって茫然としている依頼者のケアが一番だしな…。

「ごめんね、カネモリくん。僕らの立場的に、殺すことができなくて…。」

兼森くんに近寄って軽く謝意を述べると、彼は首を小さく横に振った…。

「…大丈夫です…でも、娘の思いを…どうか晴らすような採決をお願いします…」

「そう…」

兼森くんは地面に落ちていた淡い黄色のプリーツスカートを拾い上げた後、それを両手でぎゅっと握り締めて地面に膝を付いた。

「ごめんな…ごめんな…お前を…こんな形で…送るしか出来なくて…。」

渴ききつてると思っていた涙が、またポタポタと流れだす…。

彼は僕とは違い、まだ家族を思って流せる涙が残っていたようだ。愛することができる人間が流せる涙。

それが僕にとつて、今まで見てきた事件のなによりも悲しく、そして美しく思えた…。

ただ、彼の言葉は娘がもしも死んでいたときにのみ適用される…。

「…あのさあ？君、セツ〇スしたことないの？」

僕の突然の卑猥な問いに、彼は驚いてこちらを振り向いた。

「なっ！なにを急にっ！」

「あのさ…あの時点での”食う”ってのは隠語だよ。確かに、蟻地獄は肉食だけど…違法人身売買をしていた奴だから、きつと人肉までは食えないだろう…」

あくまでも憶測ではあるが、それを聞いた兼森くんの顔が少し晴れた。

「…じゃあ…娘は!？」



彼の期待の目を受け止め、僕は微笑みながら、この部屋を歩きだす。  
「さあ…どうかな…どう？」

そつと耳を澄ませながら、わざと足音を大きく響かせながら歩き、壁をコツコツと叩く。

「な…なにを…う？」

「静かに…」

いま歩いているものとは違う音を聞き分けるには、なるべくの整脈が必要だから、僕は彼を黙らせた。

いまのところ、依頼者の笑顔を取り戻すには、空洞音だけが頼りだ。だが、歩けば歩くほど、ぎつしりと素材がつまっているような音しか聞こえない…。

やはり殺されてしまったのか？

だが『もしもまだ暴行しがいのある女の子を、隠すとしたら…』という問いを元、ひたすら信じて歩くしかない。

コンツコンツ…

すると、父親の願いが通じたのか、探索開始から約一分経つか経たないかの内に、明らかに音程が違う足音が聞こえ、僕は目を見開いた。

「……………ここか！…シヤオム槌！」

僕は即座に水の球体を作り出して圧縮させ、その床に向けて思い切り振り下ろした。

ボゴンツ!!

すると破壊した床が、みるみる内に砂状となって崩壊し、そこから大きな空間が露呈した。

「……………つ！…空洞が…！」

驚く依頼者を横に、僕は四つん這いになって穴の中をみる。

そこは蟻地獄から約数十cm離れた場所であり、あと少しで壁から水が浸水しそうだった程の危険な空間。

真つ暗で気持ちの悪い臭いのするその部屋の中には、体液にまみれた裸体の女兒が、気を失って壁にもたれ掛かっていた。

「カネモリくんっ！」

僕はそこから女兒を引きずり出すと、傷だらけの皮膚が割け初め、

少しずつ血液が漏れだしてきていた。

「っ！ユウコッ！」

兼森くんが彼女に駆け寄った頃には、身体は空洞から全て抜け出していた。

彼女の身体が見つかったのは幸いだったが、女兒の純情が奪われた証拠となる液体が、身体の口から漏れだしているのが分かってしまった事だけは、この事件で一番の不幸だった…。

「ユウコ……!?ユウコオ!!」

女兒を抱き抱える兼森くんは、ひたすらに彼女が生きていることを願って声をかけ続けるが、彼女からは屍のごとく返事がない…。

「返事が……返事がない！どうしよう…ユウコ！ユウコッ!!」

声が返ってこない事へのショックに恐慌状態の兼森くんは、彼女の身体を揺さぶり始めた。

「落ち着いて…。それ以上揺さぶったら死ぬかも」

少々大袈裟だが、患者のために、僕は兼森くんの肩を掴んで脅し、揺さぶりを止めさせる。

「カネモリ ユウコさーん？聞こえますかー？」

女の子の耳元で声をかけるが、ハア…ハア…と小さく絶え絶えな呼吸だけで、残念ながらそれ以外に返ってきた言葉はない。

「衰弱してるな……。結構危険かも…」

僕の判断に兼森くんは目を見開き、彼女を抱き抱えたまま立ち上がった。

「すぐに病院に…っ！」

駆け出そうとする彼を止めるように、僕は誰のものか分からないパーカーやTシャツを数枚拾い上げて、娘さんの身体にかける。

「いや、スプリミナルの本拠地に運ぶ。ここからだど病院よりも少し近いし、うちにはすごいヤブ医者がいるから、100%の確率でその子の外傷を治せると思うよ」

まだこの時間帯なら間に合うだろうし、きっと彼女が帰ってきているだろうから、希望はあるはずだ。

「なんでも良いです…っ！お願いします！ユウコをどうか！どうかっ

！

「わーかったから、早く行くよー！」

娘を抱えながら頭を下げる兼森くんをあしらいながら、僕らは早急にスプリミナルの本拠地に急いだ。

4—6 『Y講習中、K仕事中』

「娘さん。助かるよ絶対」

夕焼けに身を照らされながら、僕らは医務室の前のベンチに腰掛け、治療の完了を待ち望んでいた。

エタノールの香りが不安心を煽る中、兼森くんは頭の後ろで腕を組む僕に、青い顔を向ける。

「……どうして…わかるんですか？」

未だ震える声で、彼の不安を掻き立てている。

あそこまで傷だらけの娘を見たら、誰だって助からないと思うだろう。

しかし、スプリミナルにはそれを必ず治せると言いきれぬ自信がある。

「うちの医師は免許を持ってないけど、傷ついた人間を完璧に治すことができる。そういう能力を持つてる人なんだよ」

医務室内で絶賛治療中の彼女は、この組織の中でも重宝されなければならぬ程の特異を持っている。

正直、特異だけみれば世界自体から重宝されそうなのだが、性格や罪があれだからな…。

ただ、彼に自信を持って『大丈夫』と言えるのは、その様な理由があるわけだ。

「そう…ですか……」

「信じてない？」

彼が俯く様を見る限り、やはりこんな言葉だけでは信じられていないように思えた。

しかし、僕の考えとは反して、彼は首を横に振る。

「いえ…仮にも、私やユウコの命を救ってくださいましたから…嘘だとは思ってません。でも……」

スプリミナルへの不信を否定した刹那、彼は両手の指を絡めて俯く。

「自分は……本当にダメな父親だと思うんです。娘の事をもう幼くないと過信してしまい、一人のままにすることが多くなつて……。できる限り、彼女の望むものは全部与えた筈だったんですが……それが裏目に出て、反抗に繋がってしまった……」

ため息混じり、彼の今にも泣きそうな声が、この夕焼けを悲しみの色に染めている……。

娘を気に掛けなかったから避けられて、そのせいでこんな事件に巻き込まれた。

その事実が、彼にとって強い傷になってしまっているのだろう……。優しい人間は自分を責めやすい……ということか。

「……カネモリくんはさ……娘さんのこと、どう思ってるの……?」

単純に気になったことをふと聞くと、彼は少しだけ微笑んだ。

「……大切な存在です。この世のなによりも……。だから、娘自信を守るためにも仕事を選びました。でも……その選択のせいで、娘の処女や……命まで……」

娘のことを思うがあまり、兼森くんの両目には、また涙がたまつてきている。

「私は……きつと芯からダメな人間なんです。娘の事が一番だと思いなから、結局仕事ばかりして……自分の事しか考えられていない……」

哀愁漂う夕景の中、一人の父親は強姦魔を憎まず、自分自身を憎んでいた。

床に落ちた一筋の涙がどこか自壊的で、ここなら必ず治るという確証も、彼の中では逆転層に覆われた街並みのように、心の中が霞んでしまっている。

これからまた、一人の子供を育てあげなければならない人間が、これでは困る。

下手すりゃ、親子心中なんてことになる可能性もなくはないし、そういう奴もよく見てきた……。

「一つ、とある人の話をしてあげるよ」

しかたがないから、僕はそう銘打って、落胆する彼のためにノンフィクションの軽い物語を話し始めた。

「今やこの世界、リージェンの介入や、海外の大学からの見解によって、児童ポルノ法案の改正だとか、性教育の本格化を訴える論文だとかで、表現の自由が他国と比べて大きく守られてるよね。そんな中でも、少しの卑猥な表現ですら排除したいエゴイストが今でも存在してるの、君は知ってる？」

兼森くんは「ええ」と相づちを打つ。

最早、表現の樂園だとすらも言われているこの国で、如何にもな主義者の名前を謳って差別を繰り返している人間は、昔から変わっていない。

正直、忌々しい物だ。

「そいつの母親はまさにその類いだった。彼女は一人息子を思うがあまりに、小さな頃から厳格で狂気的な教育をしていた。睡眠時間と起床時間を秒毎に決めつけ、学校以外はほとんど勉強。息抜きとしても良い番組は教育番組とニュース番組のみ。漫画やゲームなどの娯楽も無しの上に、自発的な性処理も禁止。その上、自分の部屋には母親専用の監視カメラを設置していたとか。決まりを破れば、家の中で裸吊りと暴力。友好関係も絶対に築かせない。そして母親は必ず彼に言うんだ『これもあなたのためなのよ』とね」

自分で話していても胸くその悪い話だ。

やりたいことが何一つできない上に、道を初めから決めつけられているなんて、地獄そのものなのだからな。

「そいつは、その刑務所的な教育下に22年間も耐え抜き、そのお陰で日本で有名な一流の大学にも行けた。でも…学業よりも」怒られずに生きること”に必死だった彼には、もはや常識など持つておらず、誰にも触れられず、誰とも関わらず、更には自分から湧き出る性欲の処理方法も知らず…。自分自身のなかにいる母親と戦う中、最終的には…同じ大学の女性や、純粋な児童に手を出してしまった…」

手を出した、という単語に反応するように、兼森くんは僕に振り向く。

今、語っているこの話の主人公が誰なのか、彼はようやく分かったようだ…。

「その後、そいつは手を出したことがバレるのを恐れて、親元から逃げたが逮捕。その後、自分自身の性欲に耐えきれずに脱獄、数年の逃亡生活の後に、立派なミラーファイアの仲間入りを果たす。ファイアと言う圧倒的な力を得たことによる快楽から、二ヶ月前に自分の母親を銃で撃ち殺した。その後、そいつは一人の社長の娘に手を掛けて、現在はこの中に捕まってしまいましたとき」

僕は兼森くんに向けてプリズンシールを揺らしながら、少しの考察を含むその物語を終わらせた。

流れるには、めでたしめでたしとでも言いたいけれど、こんな物をめてたいとして終わらせる程、僕は傀儡くわいではない。

ついでに、話を聞き終えた兼森くんが、まるで鳩が豆鉄砲を食らったところか、投げナイフで打ち落とされたような顔をしていたもので、それが少々滑稽にも見えた。

「えげつすぎて声もでない？」

驚愕な表情のまま、兼森くんは頷く。

「僕も同じ」

それに僕はニヒルに微笑みを返した。

犯罪者の中には、親の教育があまりにもえげつかった人間もいれば、自由すぎて何も教えてくれなかったからという人間もいる。

前者の事案をよく知っている僕だからこそ、今この手の中にいる犯罪者の狂った理由には、少し情けが持てる。

ただ、だからと言って、こいつの犯した罪を軽くするような愚行は決してしたくないが。

それどころか、いつそ地獄にでも落ちて、無に返るまで鬼に延々と掘られりや良いとすら思ってる。

まあ、そんなこと思っても、被害を受けた人間と傷は元通りにならないのが悲しいな。

「水原さん…私は…」

皆まで言わなくても、彼がなにを言おうとしているのかは分かっている…。

「君の教育は、まだ間違いには値しない」

慰めも込めて僕がそう告げた瞬間、兼森くんの表情がハッと変わる。

「家事代行サービスの人にも聞いてたけどさ、君が会社を休みにしてたときに、君は必ず娘さんと話し合ってたみたいじゃん？まあ、一部は君が依頼してたときから聞いていたけど…」

「それが…なにか…？」

「娘は、そう言うところに感謝していたんだよ。父の日やクリスマス、君が帰れなくても、必ず帰ってきてくれる君に、手作りのプレゼントを渡そうとしてたつて、代行サービスの人が話してくれたよ…？」

僕が彼に安藤の生い立ちを話していたのは、全てはこの調査報告を伝えるための布石だ。

彼が娘の事を知れなかったのを後悔するなら、せめて娘が父親の事を愛していた証明をしてやるのが、僕にとつての最適解だと思う。

「時間ができなくても、君はあの子になにも押し付けず、大切に思っていた。そして、それはあの子にも通じていて、その愛を返すように、あの子も君の事を誰よりも大切に思っていた。その証拠に…」

この親子のことを話す刹那、僕は、パークのポケットの中から、少し濡れた形跡のある小さな小包を取り出し、自責に潰されている彼にそつと手渡した。

「これは…？」

「あの空洞の中に、娘さんと一緒に入ってた。空けてみたら？」

兼森くんは首をかしげながらピンクの紙を丁寧に開くと、そこから白い箱が出て来て、それを開けると、中にはシルバーの可愛いネコのネクタイピンが、箱の中でよそよそしく光ながら、そこに鎮座していた。

「……………」

そして、その箱の裏側には『Happy Birthday Father』の文字が、金で印字されている…。

「ユウコ…おまえ…反抗してたんじゃない…」

娘のプレゼントに、涙する父。

それに気をとられ、包装紙と箱の間から一枚の手紙が落ちたこと



に、彼は気づいていなかった。

しょうがないなど、僕はそれを拾い上げ、嗚咽を漏らす彼の代わりにその手紙を読み上げた。

「お父さんへ。最近お話できなくてごめんなさい。いつもお仕事お疲れさま。私を育ててくれてありがとう。そして、誕生日おめでとう：だつてさ」

丸っこく子供らしい綺麗な文字で書かれたその感謝の手紙は、父親が流している暖かい涙の量を、より一層多くさせた。

どんな形の文字でも、どれだけ文字数が少なくても、どんな形の便箋でも、心のこもった手紙は必ずその人間に届く。

と、確か、昔に叶くんが言っていた気がする…。

「きつと、反抗期なんじゃなくて、自分の感情を出すのが恥ずかしかったんじゃない？ちよつとしたツンデレみたいなさ…」

僕は気を遣って励ますけれど、彼はそれでも首を横に振る。

「でも…私は…：…振り向いてあげられなくて…：…」

今だ自己の失望感を感じ続け、涙で顔を濡らす兼森くんだが、僕は彼の今の自虐的意見への同意は一切ない。

だから、自分は彼に向けて首を横に振って応えられる。

「子供全ても、大人の”可哀想”という思想で動いてなんかいない。君の娘さんは、きつと寂しいからこそ”どうすればお父さんと触れあえるのか”を考えられる、賢い脳みそを持ってたんだよ、きつと」

自分に失望している彼にそう言ってやると、僕の言葉に励まされたのか、泣きながら頭を一回ゆつくり縦に振った。

ようやく兼森宍道は理解したようだ。

兼森親子の絆と言うのは、父が思っているほど、脆いものではなかったということ…。

そして、互いに愛しているからこそ、その思いが帰ってくると言うことも…。

「極めてベタな話だ…。でも、物語の序盤のお話としては、こういうのいいんじゃないの？ねえ？」

僕がそう言いながら立ち上がると、兼森くんは顔を上げる。

すると、医務室の扉がいつの間にか開いており、そこには、施術の終わった高学年程の患者と、ロングヘアを靡なびかせる女医が並んで立っていた。

「お父さん……」

どうやら、さつきから父の涙を見ていた兼森柚子も、目には涙をためていた。

先ほどまで精液にまみれ、傷だらけで死にそうだった彼女は、うちの女医の特異のお陰で、あの痛々しかった傷は消え、女医が買ってきたであろう新品の洋服を身を纏って、すっかり子供らしい綺麗な装いになっていた。

「ユ……ユウコオッ！」

娘の無事に喜ぶ兼森くんは、プレゼントのネクタイピンを片手に、最愛の娘を力一杯に抱き締めた。

「ごめんなさい……私……私……」

「なにも言うなっ！お前はがんばった！生きてくれるだけで……本当によかったんだ！」

不幸だった親子の感情が互いの肩を濡らす。

こう言う感動シーンは、小説やら漫画やらでいろいろ見たことはあるが、こう言うのを目の当たりにすれば、僕の心でさえも、なんだか少しだけジンとくる物が涌き出てくるな……。

「傷は粗方塞がったし、受け答えもすっかりとしてるわ」

スプリミナルを支える若き敷医者、深山ミヤマ 歌穂カホが、二人の間を割るように検診結果を伝え始める。

「傷をつけられた箇所は、まだそこまで日がたっていなかったから、跡も残らずに済んだ。でも、私の処置は絶対に傷を癒すけれど、完全ではない。虫型からの強姦の影響で、残念ながら生殖器周辺には、少し異常が出てしまっている。今のところ、妊娠とかそういうのは問題ないみたいだけれど、今後、なにか異常が出て来たら、産婦人科のある病院に行ってちょうだい。連絡くれれば紹介状も書くし、スプリミナルの顔を聞かせて、資金の問題も無しにしてあげるわ」

「ありがとうございます……」

彼女の治療と対応を聞く兼森くんは、娘と抱きしめ合いつつ、涙ながらに感謝の意を深山女医に表した。

「ミヤマくん…結構奮発するねえ？」

そつと彼女の近くに寄つて押揄おしつかうと、深山くんはフンと鼻から息を吐いて、僕を肘で小突いた。

「うっさい。これは医務員として当然の事、離し立てるな」

少々照れを隠しているような苦笑いを浮かべながら、彼女は僕をあしらった。

しかし、その後の彼女の表情はガラリと変わる。

「でも、純粋な女の子にこんな傷をつけるようなクズは…死んでも許されない…」

「おー怖……」

今の彼女の表情は、まるで衆合地獄で罪人の陰部を焼く鬼のようだ。

男嫌いの彼女だからこそ、今回の事件は、相当腹立たしいものだったと考えられる。

今回の事件の担当が僕じゃなくて深山くんだったら、きっと犯人を僕よりもヤバイ方法で殺していただろうな…。

「とりあえず、この後の話をしようか…」

感動の再会に水を刺すのは申し訳ないが、今後についてをちゃんと話しておかないと、またこんな事件に巻き込まれる可能性が出てしまうからな。

「組員が逮捕された以上、君の会社はマフィアに狙われる可能性が高い。或マスは下級の中でも一番でかい組織だからね…。対策のため、社員の強制解雇と、武装警察の強いチームがいる旧近畿地方プロミニアに住居を移した方がいい。それに、マフィアとの関わりがあったことに、マスコミや警察側も黙ってないだろうから、君たちの暮らしのために、できるだけ穏便に事を進めるように武装警察関係者の人に言っておく。ついでに社員の次の職場や亀梨さんのことも…まあ、話を合わせとくから、こつちに任せといってもらえれば良いよ」

ここまで厚待遇にするのも、被害をこれ以上大きくしないようにす

るためっていうのが半分と、武装警察総隊長の優しさが半分だろう。一度危険に晒された命を「はい、お疲れさまでした」と、また危険に晒すのは、さすがにおかしいと思うしな…。

「何から何まで…本当にありがとうございます…」

最後まで僕の話聞いていた兼森くんは涙を拭い、娘の手を繋ぎながら立ち上がり、僕らに何度も頭を下げる。

「ごっから、また大変だろうけど、君ら二人なら大丈夫だと思うよ」

僕は微笑みつつ、律儀な彼の身体を拳でポンと優しく叩いた。

まあ、仕事としては当たり前前の事をしたただけだから、感謝される覚えもないが、言葉にされると少し嬉しいものだな。

「お姉さんも、ありがとうございます」

娘の柚子も父親同様、深山くんに律儀に礼を言うと、彼女はしゃがんで娘の視線に合わせて、頭をそつと撫でた。

「どういたしまして。お父さんと仲良くね」

僕らには殆んど見せない優しい笑顔（もしくは営業スマイル）を柚子くんに向けると、撫でられている彼女も、につこりと笑顔を浮かべていた。

深山くんの事情を知ってるから、笑顔が胡散臭く見えるけれど、兼森柚子からしたら、父親以外の心の拠り所の一つになっているのかもしれないな…。

「すみません。お車の準備ができました」

スプリミナルの事務員が駆け寄ってきて、兼森くん達に伝えた。

そろそろ、依頼完了の時間のようだ。

事務員に「有難うございます」と頷いた兼森くんは、改めて僕らの方を向いた。

「ミズハラさん、女医さん。この度は本当に、本当に、ありがとうございます！」

別れの直前、ほぼ直角に腰を折って頭を下げながら、彼は心からの感謝を表す。

「そういうの良から早く行きな。幸せにね」

少々照れっ恥ずかしい思いと共に、スプリミナル探偵課の僕らは手

を振り、絶望の中から帰還した二人が横から射す夕焼けに飲まれながら帰っていくのを、静かに見守った。

彼らが進んでいくためのあまねく選択路に、強く暖かな光があることを願う…。

「……こういうの、あんたは嫌いだと思ってた」

親子二人が建物から出た後、ふと深山くんが目線を合わさずに僕に話しかける。

「自分の事と、あの人たちの事は別だよ。むしろ、君の方がこういうの嫌いだと思ってたよ」

対抗するように目線を合わせず、僕は答え、問いを返す。

「まあね…。でも、ちゃんと愛してるなら良いのよ」

溜め息混じりに、彼女は答えを返す。

こんな少し無愛想な彼女にも、僕と同じく払拭したい過去がある。前に少し話してもらったことがあるから、それについては知っているが、わざわざまたそこに突っ込むほど野暮でない。

ただ、自分自身、彼女のことと郷中のように、内心気に入らないと思ったりもするのだが…。

「はあ…疲れた…明日からまた出張だし…今度はプロミアの武装警察にヘルプですって。ハイカワの奴、暑苦しくて嫌なのよねえ…」

女性らしからず、まるでおっさんのごとく、深山くんはグリグリと肩を回す。

ちなみに、こういうのと似たようなことをあおいもするから、別にこれが原因で嫌いだという訳ではない。

「そう、頑張って」

「なによ…素っ気ないわね…」

呆気な返事をした僕に向けて、彼女はまたフンとそっぽを向いた。

こう言う少し高飛車なところもあまり好きじゃないんだがな。

「別にいい？」

生意気に少々ねっとりとした言い方で返してやると、彼女はまた僕を小突く。

「あ…そっういや今日、話題の新人来てるけど、どうする？見に来る？」

僕が聞くと、彼女は少し考えた後に、首を横に振った。

「あー…いや、今日はめんどくさいから良いわ。食事の予約もしてるし、今日の朝、顎にニキビできてたのよね…嫌だ嫌だ……」

そう言っつて、ぼやくが彼女の顎にニキビはない。

恐らく、潰してから特異を自分に使い、綺麗に治癒させたのだろうな。

「食事ねえ。まあ、男吹っ掛けてお金でもせびるの？」

にやにやと揶揄つてやると、如何にも「しつこい」と言いたげな冷ややかな目で、彼女は僕を睨んだ。

「もうしないわよ、んなこと。これ以上目えつけられんのめんどくさいから」

否定はするが、彼女の前職は悠樹くんと同じ（の上に超やり手）だからちよいと胡散臭い。

これが多分、自分が彼女に嫌悪を抱く大きな原因の一つだと思ってる。

偏見とかではないけど、彼女をみると、少々記憶のなかでちらつくものがあった、それが僕にとっては、グシャグシャにしてゴミ箱に棄ててやりたい程忌々しかったりするのだ…。

「治療薬の換えはいつものところにおいてくから、欲しかったら勝手に取っといつて。そう新人にも言っときなさいね」

そう言っつて、彼女は白衣の中から、特注の特殊形状の使用済みの注射器をゴミ箱に投げ棄て、新しい治療薬を冷凍庫に入れた。

「りょーかい…。とは言っつても、彼が使うかはわかんないけど」と言うのも、悠樹くんの特異が特殊すぎるが故だ。

無効化の特異点にこの特異も聞くのかは微妙だから、少々疑問である…。

しかし、それを知らない深山くんは、何故か僕に厳しい目線を向ける。

「んなこと言っつたら、そいつ自惚れるわよ。どんな特異かは知らないけど、私らはハイドニウムを使われたら終わりなんだから、そう言う事もちやんと言っときなさいよ」

藪だけでも、医療現場に立っている彼女の的確な指示に、僕は「はいはい」とテキストに返事をする。

彼女も僕と同じく、多くの現場を体験してきた人間であり、失敗も成功も沢山してきている。

例え気に入らなくとも、彼女の隊員としての意欲や行動には、まだ尊敬の意くらいは持てるし、自分なんかの判断で折角の新人を殺すのは忍びない…。

「まあ…それ以前にその新人が、今後足手まといにならなきゃいいわねえ…」

そう言つて、会ったこともない新人に皮肉を飛ばす彼女の表情は、まるで絵に描いたような悪女のようなだった。

「…そうだね」

一応同意はしといてやるが、まだ彼の力を知らないから言えることだ。

彼女の場合、きっと彼の能力を見れば、心底驚くタイプだろうと妄想しながら、僕は少し笑った。

このいけ好かない女医が、彼の力を知ったらどう掌を返すのか、またはどう貶すのか、個人的に少々気になるところだからな。

なんて思う自分も、悪い人間の部類か…。



夕日の朱が、夜の紺に侵食されていこうとしている。

物寂しげな夕景が街や人を照らし、それぞれの鬱屈が帰路を歩んでいた…。

事件が終わってから、僕は医務室から出て、郷仲に依頼完了報告(嫌味付き)をして、やっと今日の業務が終了したところだ。

まあ、また報告書も書かなきゃいけないし、緊急のノーイン退治で無理やり起こされることもあるから、終了と言って良いのかわからな  
いけれど…。

「はあく…疲れた……」

とりあえず、仕事終わりに一息付こうと、僕は会社の内部、店の裏側のドアからフェイバリットの中へ入り、適当な場所に腰を掛けた。

「アオイ、いつものカフェオレ」

「はいはい」

二の腕を掴んで伸びをしながら注文すると、厨房からあおいの声だけが帰ってきた。

そろそろ閉店の時間だから、後片付けで忙しいんだろう。

「ふう…」

体幹を適度に伸ばした後、疲れたの息を吐きながら腕を下ろす。

カフェオレを待つまでの時間、窓側の席に座っていた僕は、頬杖を付きながら、外の景色を眺め始めた。

通りすぎる人間達は、僕らのようなアウトローな存在に気も付かず、それぞれの寢床へと帰っていく。

兼森くん達も、これから新たな寢床へと帰っていくのだろう。

ただ、マフィアに目をつけられて、望んでいた日常の終点に着けた者は数少ない。

事件に絡んだ多くの者は、マフィアの飼っているノーインの餌食になるか、銃を持った奴らが来て蜂の巣にされたり、旧東京湾に沈められたりしてしまうか…。

政界本部や普通警察の本部を中心に建てられているバラードイア。

それは逆に言うとデモ活動や抗議行動がやりやすいという事であり、数少ない武装警察の目が行き届きにくくなるということ。

その影響もあつてか、ここは多くのミラーマフィアが活動しやすい、命も勿論狙われやすい。

だからこそ、武装警察の本部があり、マフィアが活動しにくい旧近畿地方に移したけれど、やはり正直心配だ。

マフィアは案外しつこい物だし、その上、今回の事件で父親は仕事を失って、娘の方は無惨にも純情を奪われてしまった…。

それによって、二人とも心には深い傷がついてしまったと思われ、それをまた元の形に治すには、まだ長い月日が必要となるだろう…。



「これからどうなるかだね…」

そう呟きつつ、二人の姿を想像していると、窓の外から商店街の中にあるスーパーの袋をもった親子が「ゆうやけこやけ」と歌いながら、家へと帰っていくのが見えた。

こんな風に、二人が笑える日が来て欲しい。

僕ができるのは、そうやって二人の行く道に光があることを願うだけだった…。

「はいどうぞ」

カチヤンと食器同士が擦れる音が聞こえ、机に頼んでいたものが置かれたことを悟った。

「ああ…ありがた…」

窓から目を離すと、目の前に飛び込んできたのは、愛用しているマグカップに入ったカフェオレと、頼んだ覚えのないスイーツが置かれている光景だった。

「なにこれ？」

「クレープ。さつき余った生地で作って遊んでたんだ」

「クレープ…って、うお!」

僕が一番驚いたのは、持って来られたクレープではなく、これを持ってきたのが先ほど女医と噂していた新人だったからだ。

「なにしてんの!」

「いやあ…カナエさんから、スプリミナルの初仕事だ! って言って連れてこられちゃって…。なかなか大変だけど、やってみたら楽しかったんだよね。喫茶店業務」

銀色のステンレストレイを腋に抱え、エプロンを着て微笑む悠樹くんの姿に僕は戸惑う。

そういうや大体サボるけど、スプリミナルは喫茶店業務も組み込まれているんだつたな。

「そうそうー！ テツヤくん、お料理が超うまいんだよ！ それに接客態度もなかなか良いし、対応も皆よりも早くてね！ お陰でスツゴく助かったちゃったあ…」

「いやあ…それほども…」

あおいがカウンターから身を乗り出しながら、後頭部を撫でて照れる悠樹くんを高く評価した。

「へえ……」

確かに、フエイバリットの制服である深緑色エプロンが、なんとなく似合っている気もする…。

確か、詐欺師であると同時に様々な掛け持ちバイトをしていたんだっただな…。

「まあ……それでもコンビニとかで働いてる人よりは全然遅いんだけどね…」

自信なさげに謙遜する姿は、相変わらずな感じか。

なんて思いつつ、僕はクレープを手に持ち、何気なくかぶりついた。

「あ、旨」

柔らかい甘さの生地と生クリームの優しい味が口のなかに広がると共に、チョコチップのポリポリとした軽い食感が楽しい。

あおいのつくるお菓子の味に、悠樹くんのアイデアが上乘せされている感じの味だな。

「でしゅうっ？」

彼はそう言うと、カウンターにいるあおいに振り返り、大成功と言わんばかりに、二人だけでピースサインを出しあった。

「君…一応、特異探偵課（とくいたんていこ）の所属だよね…？カフェ要員とかじゃないよね？」

「た……多分？」

カフェオレを啜りながら僕が聞くと、悠樹くんは首をかしげた。

なんで疑問文なんだと突っ込みたいが…突っ込んでも良いものなのかわからないからそのままスルーしておいた。

「あつ、そろそろ店じまいしないと…テツヤくん！片付け手伝ってー！」

「はいー！」

あおいの号令と共に、悠樹くんは僕に「ごゆっくり」とだけ言い残し、そそくさと厨房の片付けへと向かった。

「足手まといねえ……」

遠目からせこせこ働く彼の姿を眺めながら、僕はもくもくとク

レープを食べ続ける。

彼と出会って、せいぜいまだ数日程だ。

これから彼がどんな活躍が起きるのか、彼の特異以外の利点はどこなのか、彼が本当に役に立てるのか。

まだ不安が沢山あるけれど、とりあえずはこの社員として、少しは仲良くやっていけるだろう。

「ほんと…ユウキくんがこれからどうなるかねえ……」

なんて呟きつつ、僕は残り少ないクレープを口の中に放り込むと、夜空も共にオレンジの夕景を飲み込み終えた。

To be continue…

## 5—1 『一番のSと越権裁判』

未だ春日和の続く早朝。

まだ眠い目を擦りながら寮を出ると、朝日が一気に僕を照らす。それを全身に受け止めながら、鞆を片手にグツと延びをした。

日本を大きく見て、ここ旧関東地方バラーディア地方TK市部は都会のはずなのに、この街の朝は、まるで旧東北地方アーカール地方AM市部の田舎のように清々しい…。

正直、AM市部とか言いにくいから、そろそろ昔の呼び方に戻してくれないかとは思うが…まあ、良いや。

「今日からついに…勤務が本格的に始まるのか…」

高揚やら緊張やらで、ドキドキと胸が音を立てている。

鼓動を落ち着けるために、一つ大きく深呼吸。

どんな仕事が回ってくるのか、それをしつかりこなせるか、不安な部分は沢山あるけれど、それでもやらなきゃ行けないと意気込むために。

「前の場所よりも気張らないとな…：僕はきつと、皆と比べて弱いし…」

弱音を一つ吐きながら、開店前の喫茶店の裏側へと回り込んでエレベーターのスイツチを押した。

到着までの待ち時間、ふと自分自信についてを少し考えてみる。

探偵業として考えてみると、自分には閃きだとか瞬発力だとか、ましてや観察力とかもないと思う…。

成績は中間より少し上くらいだし、体力もバスケットに例えると、パスをもらったら少し動いて味方にパスを送れる程度。

趣味は写真撮影で特技は料理と…本当に普通の人間だ。

大丈夫と言われても、まだまだついていけないかが不安でしかない…。

勿論、罪ありの社会不適合者に与えられたせつかくのチャンスなん

だから、頑張らないといけないのはわかっている。

だけど、そのためにどうすれば良いのかが解らないし、自分が役に立てるのかも不安の要因だ…。

もしも、自分が全能だったら、こんなに不安にならなくて良かったのにな…。

「それでも…振り落とされないように頑張らないと…」

弱気にならないように、僕は自分の胸の頭の中で、ずっと感情論を繰り返していた…。

「まあ、頑張る姿勢は良いけれど、あまり卑下と無理はしすぎないようにね」

「そうだな…プラスにプラスに…って、うおっ！サトナカさん!」

勇を鼓している中、急に後ろから話しかけてきたのは、郷仲さんだった。

「おはよう、ユウキくん。しっかりと遅刻せずに来て偉いね」

いつも通りにニヒルで爽やかに挨拶をする彼は、本当に神出鬼没で何を考えているのか…。

「は…はい。サトナカさんも今出勤ですか？」

「いやあ…もう少し早くは来てただけど、寮を出たときに良い被写体を見つけてしまったから、そのスケッチでも…と思ったたら、いつの間にか外に出てしまっていてねえ」

そう応える郷仲さんの目の奥はキラキラと輝いているように見えた。

よく見ると、彼の脇腹には鉛筆やクレパス、スケッチブック等のアナログ的な画材が抱えられていた。

「そうか…サトナカさんって、画家さんですもんね」

到着して開いたエレベーターに乗り込みながら、僕はそう言った。

ここに来てから、あまり意識はしていなかったけど、郷仲さんは社長でありながら、S・Tourriの名がついた有名な画家だ。

ただでさえ特殊な組織の社長なのに、それをしながら画家もするって言うのも大変だろうな…。

なんて思いつつ、僕は4階へのスイッチを押した。

「ああ。君も、好きなことは大切にするようにね…」

扉が閉まり、僕らを乗せて上昇していく部屋の中、ふと呟いた彼の言葉が、少し心に刺さった

「……はい」

自分の中の好きなものを大切に。

カメラも料理も、自分のなかでは好きなものだし、何より今眠っている妹や、死んだ母さん、子供の頃に別れた親友とか、そんな数少ない僕が出会った人達も、僕の中では大切であり大好きな人間だ。

すっかり忘れてたけど、仕事をするって、そう言うことなのかもしれない。

郷仲さんのように、好きなことを形にする人もいるし、自分のように家族のために闇の仕事をしたこともある…。

そんな”好き”のためなら、どんな仕事でも出来るようになるのかもしれないな…。

まあ、過労とかパワハラとかそう言う問題は別だけど。

チーン！

なんてちよつとウザめな持論を考えていたら、目的の階に到着して、扉が開いた。

「行くうか」

「はい」

僕らはエレベーターから出て、凡庸なオフィスの中を少し歩くと、特異探偵課の扉の前へと到着する。

「よし……」

昨日は少し締まらない初入社だったけど、初現場入りの今日くらいは、ちゃんとした出社がしたい…。

今日は郷仲さんもいるし、恐らくまだ水原くんも来てないだろうから、きつと大丈夫…。

そう信じて、ドアノブを回し、その扉を開く…。

「おはようございま…」

「くたばれサトナカアアアアアアアアアアアッ!!!」

「ギヤアアアアアッ!」

ガギインツ!!

怒涛の展開だ。

部屋に入ろうとした途端、突然、一人の青年が咆哮して拳を握りながら僕に襲いかかり、僕の顔面に攻撃が当たろうとする寸前に、郷仲さんの特異で青年の全身が凍らされた…。

「あ……ああ……」

氷塊は地面に着地し、衝撃を畳み掛けられた自分は、ワナワナとその氷像を見つめている。

怒涛の展開すぎて、何がどうなったのかわからない。

それ故、しばらく開いた口が塞がらなかった…。

しかし、それを何事もなかったかのように、郷仲さんは氷を優しく叩く。

「おはよう、スミウラくん。今日も元気だね」

あまりに突然の事に尻餅を付いていたことにすら気づいていなかった自分は、郷仲さんの挨拶で、ハッと正気に戻った。

「あ……あ、あの……この人、大丈夫なんですか!？」

身体を震わせ、氷像に指をさしながら僕は聞くんが、特に慌てる様子も無く、郷仲さんは陽気に社長の椅子に座った。

「大丈夫大丈夫。近くにヒーターとかドライヤーがあるだろうか？それで溶けるくらいの温度にはしといたから」

画材を机に置き、椅子をくるりと回す郷仲さん。

彼の指さした方向を見てみると、確かに入り口の近くにドライヤーやファンヒーターが置かれていた。

こんな物があったとは…昨日の講習では全く気がつかなかったな。

「は……はあ……」

郷仲さんには軽い口調でダイジョウブと言われてしまったけれど、この人、本当に無事なのだろうか…？

「おはよ、ユウキくん」

ドライヤー片手に、凍っている彼の無事を考えていると、少し遅れて入社した水原くんが僕に声をかけた。

「あ、おはよう。ミスハラくん…」

僕が挨拶を返すと、水原くんは目の前に鎮座する氷塊に目を向ける。

「あー……スミウラの奴、まーた嘔みついたか……これで何百回目だよ……」

少々間拔けな顔で固まっているスミウラという人に向け、水原くんは哀れみを含んだ溜め息を付く。

彼はやれやれと首を降りながら、近くに置いてあったファンヒーターを氷塊の近くに移動させる。

「ねえ……この人、大丈夫なの……?」

凍っている人を心配する僕を横目に、水原くんはヒーターとドライヤーを同時に起動させて、氷に温風を当て始める。

「大丈夫大丈夫。こいつ頑丈なのが長所だから」

めんどくさげにそう言っ、彼は慣れた手付きで氷全体に温風を当て続ける。

「そ……そうなんだ……?」

一応、特異探偵課にいるから、凍っている彼も特異点なのだろうというのはわかってはいるけれど……なんか不安だ……。

とりあえず、まずは彼を溶かすのが先決かと思ひ、僕はアイロンを手にとつて、氷を溶かし始めた。

数十分後……。

「ああークソツッ!また勝てなかったか!」

氷塊から抜け出せた青年は、まだ湿ったままの頭を搔きむしり、郷仲さんに凍らされていた事を悔やむ。

「私に勝つなんて、100年早いよ」

少し子供っぽい彼をからかいつつ、郷仲さんは封筒を開いて書類を眺めていた。

普段から危険と隣り合わせの組織の社長からしたら、こう言うのは正直眼中にない……って感じなのだろうか。

「ったく……いつかぜってえそのスカした顔ひっぱたいてやるからな!」

バンと机を叩きながら立ち上がり、青年は郷仲さんに向けて指を指



してそう宣言する。

「どうやら、彼と郷仲さんには、なにかしらの因縁があるのかもしれない。」

「ただ…彼がどんな特異を持っているのか知らない限りは、彼の事を命知らずとしか思えないな…。」

「あの…」

「あ？誰だお前は…」

新人として自己紹介をしようと呼び掛けると、彼はズボンのポケットに手を入れ、僕を睨むように振り向く。

「昨日からここでお世話になっております。ユウキ テツヤです。よろしくお願ひします！」

これからの仕事の意気込みと、先輩への謙遜を込めて頭を下げると、彼は僕の身体や顔をジロジロと睨む。

「あー…前に言ってた新人ね。俺、スミウラ シユウ。足引っ張んなよ」

「は…はい…。」

僕が頭を上げると、彼はヘンと鼻で笑いながら、ゲーム機やコントローラーが多く置いてあるデスクに腰を掛けた。

改めて彼の姿を見てみると、少々子供らしい見た目だ…。

年は見た目では20代前半って感じで、身長はそこまで高くなく、正直、自分よりも小さい…。

上下に黒のスーツを着ているのだが、その中にはYシャツではなく大きな赤い文字の英語が描かれた灰色のパーカーを着ている。

顔はツンと釣った強気な目だが、肌も若々しい丸顔にセンターで分けられたスパイキーヘア調の髪型。

総評するとなんとというか…ちよつと猿っぽい童顔の青年といった感じだろうか。

これから長く付き合っていくんだ。

少しは温厚な関係であることを願う…。

「別に、気にしなくて良いよ。こいつの性格なかなかクソだから…」

僕がデスクに座った瞬間、隣の席に座っている水原くんが、僕に話

しかけた。

「くそ…？」

「うん。例えるなら…：…一番になるために何でもする金にがめつい鋼鉄クソ野郎って感じかな？」

ほくそ笑みながら説明をする水原くん。

当人が近くにいるってのに結構ボロクソに言ったな…。

「なんか言ったか？」

「イエッ！ナニモッ！」

住浦さんの一言と、冷たい視線が向けられているような気がして、僕は思わず立ち上がって返事をした。

ほぼ間近で悪口を言っていた事へ罪悪感を感じる反面、隣の彼は風の如くなにも動じない…。

「別にこんな奴に怯えなくて良いのに…」

「誰がこんな奴だ！」

ニヒルな水原くんの余裕な態度に強い口調で怒る住浦さん。

一連の流れを見て、住浦さんは意外とからかわれる人なんだと感じた…。

というより、郷仲さんも水原くんも、まるで彼の扱いに慣れてきているって感じかな…。

「早速、君らの仲が良くて何よりなんだが、依頼が来ているから頼めるかい？」

僕らの会話に割り込むように、郷仲さんが封筒とタブレット端末を片手に、社長席から話しかけてきた。

「おつ、やっと本格的な探偵<sup>クエスト</sup>作業か。前々からノーイン退治に飽きてきたところだったんでな…」

「そんなゲーム感覚で…」

「うっせえ。ゲームっぽく捉えてなきや、人生やってけねえんだよ」  
そんな訳はないと思うが…まあ、感覚は人それぞれか…。

新たな遊びに向かおうと、住浦さんはポキポキと指を鳴らして意気込む。

その傍ら、横に座っている水原くんは、目を細めて露骨に嫌そうな

顔をしていた。

彼はそんなに仕事が嫌なのだろうか…。

「ま、依頼に意欲を持ってくれてなによりだね。じゃあ、まずはこれを…」

郷仲さんがタブレット端末の画面をスワイプすると、僕ら三人のパソコンが突然起動し、一本の動画が再生された。

『ハロー・マイネーム イズ カテキンツ！本日の動画は…本場、プロミアKY地区の高級玉露と、コンビニの100円のお茶と飲み比べをしたいと思いまーすっ！』

それは、インターネットに上がっている、自分よりも少し年の大きい若人が投稿したレビュー動画のようだ…。

「……なにこれ」

「最近、巷で人気の動画投稿者さ。名前は『カテキン』と言うらしい」  
「いや、それは知ってるんですけども…」

一応、動画投稿サイトに上がっている動画自体は、仕事（詐欺）の息抜き程度に見たことがあるから、彼のことは知っている。

しかし、なぜ急にこれを郷仲さんが出してきたのか、自分にはわからなかったのだ…。

「あ、ヒ○キンのパクリか」

「スミウラさん、それ言っちゃダメ…」

一応、未来の設定なんだから…。

「そんで、依頼者はこいつってことでもいいのか？」

直球に先輩が聞くと社長はタブレット片手に頷いた。

やはり先輩である彼は、僕よりも格段に物分かりが良いらしい…。

「ああ。だが、そのカテキン氏は今、ちよつと拘置所においてね…。少々訳アリなんだよ」

郷仲さんがタブレットをタップすると、画面に写っていた動画が消え、代わりにSNSの画面が出てきた。

そこには、『大人気動画投稿者が暴行！』と言うニュースアカウントの投稿。

そしてその下には、なにかの間違いじゃないのか？とか、”人に暴

力振るうカテキン死ぬ!”や、”女の方も悪いんじゃないのか?”、消えろ、もう出てくるなど、目も当てられない程に大量の憶測やら暴言等が、大量に書き殴られていた。

「匿名だからって言いたい放題言うなあ…」

SNS画面はまさに水原くんの言うとおりだ。

匿名だからこそ好きに書きまくれるのは昔から変わらないが、今回は目も当てられないほどの大火災のようだ…。

最近では、SNSでの暴言等も一応相手側からの告訴が認められれば、罰金刑などにもかける事ができるらしいが、本人が捕まっている時点で、そんなもの権限すらないだろうな…。

「まあ、拘置所に行く位なんだから、そりゃあこう言われてもしゃーねえだろ」

住浦さんは欠伸<sup>あくび</sup>をしながら、呆れ果てるように呟いた。

確かに、他人を殴ってしまった上に拘置所に連行されてしまったとなると、この炎上は仕方のないことだ。

「だが…それがしようがなくなると案件かもしれないのだよ」

すると、郷仲さんについて封筒から書類を取りだし、書画カメラを使ってパソコン越しに僕らに見せる。

「武装警察経由でこっちに依頼書を貰ってね。簡単に言えば、自分の冤罪の理由を探って欲しいとのことだ…」

郷仲さんの言葉通り、映されたのは、カテキンの本名や経歴、依頼内容が書かれている依頼書。

社長が彼の動画を見せたのは、きっと捜査の時に役立つからだろう…。

しかし、依頼を聞いた住浦さんはあまり乗り気ではないようだ。

「冤罪い? 暴力振るう時点で、くそつたれな奴の言葉を信じろってかあ?」

頭の後ろで腕を組み、机に足を上げながらふんぞり返っている先輩。

「信じる信じないは人の勝手だ。しかし、依頼を受けたからには、まずは中立的な立場で行くのがサプリメントだろう? スミウラくん、頼ん

だよ」

柄の悪そうな態度に、郷仲さんは怯む様子など全く見せず、住浦さんに書類を差し出した。

彼はそれに反論しようとはせず、舌打ちをして体制を崩した。

「一応言つとくが、俺は俺のやり方でやるからな…？それだけは理解してんだろうな？」

「わかっている。だから君を選んだんだ」

住浦さんは少々横暴そうな言葉を並べるが、それでも社長は毅然としている。

社長としての態度と、社員への信頼。

上司の含み笑みから、その真意を汲み取ったのか、住浦さんはニヤリと微笑み、差し出された書類を受け取った。

「ヘツ…ようやくわかってきたじゃねえか…」

得意気に笑いながら、彼は椅子から立ち上がって、仕事の受理を表した。

「ああ、ついでにユウキさんとミズハラくんもついていくといい。現場での新人研修代わりにさ」

住浦さんがこの部屋から出て行くこうとする頃、郷仲さんは僕らにそう指示した。

「わかりました」

これが初めての仕事…ってことになるのか…。

昨日から緊張してばっかりの自分だが、今の緊張感だけはなにか格別だ…。

「めんどくせ…。まあ、着いて来んなら、足引つ張るんじゃねえぞ」

彼は、僕らに後ろ手を振ると、ついてこいと言いたげに、この部屋を出た。

頑張らないと、なんて何度も繰り返ししているが、自信家で高飛車そうなの人に着いていけるか、少し不安だな…。

「…ってか、なんで僕も…？」

意気込んでいる自分の横では、水原くんがやはりめんどくさげにしている。

「ユウキくんのためさ。頼むよ」

郷仲さんが宥めるけれど、昨日も依頼を遂行していた水原くんにとっては苦痛なようで、不機嫌を態度だけではなく顔にも浮かべている。

「はあ？またかよ…。そろそろ君も依頼引き受けるくらいしたらあ？」

いつも通り、言葉に皮肉を混ぜながら郷仲さんに嫌みを言うけれど、無論効くわけがない。

「それが、今回は絵の仕事ではなく、警察関連の方から仕事をもちかけられてね。今からテレワークに入らないと行けないのさ。ごめんね」  
その上、今回は画家ではなくて重要なお仕事のようだ…。

「うさんくせ…。しゃーない…んじゃあ行こうかユウキくん…スミウラの付き添いとか嫌だけど…」

彼の言葉を疑いながらも、水原くんはやれやれと立ち上がると、机の上においてあるカードケースをポケットにしまって、僕を待たずに先々に行ってしまった。

「あ…うん…」

彼はすぐくめんどくさがりだけど、依頼となればこうやって迅速に行動しようとするあたり、本当はしっかりした子なんだろうな…。

なんて思いながら、僕は置いてかれないうよう、小走りで彼に着いていった。



拠点から出てから、一時間も経たない頃。

僕らスプリミナルはトランスをしてフードを深く被りながら、バラードエリアTK地区裁判所下にある、拘置所の面会室に来ていた。

拘置所の空気を吸うのは始めてで、まるで全人類から圧をかけられているかの様に息苦しい…。

勿論だが、僕がここに放り込まれると言うわけではなく、スプリミナルとして、依頼人と話すためにここに来ただけだ。

しかし、ここは罪人が裁判のために捕まえられるための場所。  
自分も一歩間違えればこうなっていたのかと想像すると、すこぶ頗る恐  
ろしい…。

「依頼人以外の目に止まるところではフード脱がないようにね。スプリミナルは基本本体バレちゃダメだから」

新人の僕に確認するように、水原くんがそつと囁いてくれた。

それに応えるために僕はサムズアップをし、先輩二人の後を追うように面会室の中へと入っていく。

「面会時間は30分で願います」

機械のように冷たく監視官がそう言うと、出入口の近くの壁に彼は姿勢を正して直立する。

面会室の中は、ドラマ等で見るものよりも、もう少し小綺麗な感じで、こまめに掃除と消毒をされているであろう大きなアクリル板が輝き、それを境界線として、部屋の奥にその男は項垂れていた。

「スプリミナルだ。カネイ キノミ…で良いか？」

気取った住浦さんは、腰に手を当てながら被告に声をかける。

俯いていた男性は反抗してこちらを向くと、水を得た魚のように目が輝いた。

「はい…そうです！僕です！よかった…都市伝説じゃなかったんだ…」

彼は思わず涙ぐみ、すがるように僕らの到着を喜んでいた。

スプリミナルは秘密結社であるからこそ、基本的に誰もこの団体があると言うことを知らない。

それどころか、スプリミナルは都市伝説や幻影だと思っている人の方が多い上に、郷仲さんの意向から、スプリミナルに関する報道自体も大きく規制されている。

現に、入社前の僕ですらも知らなかったから、その情報隠蔽力は凄まじいものなのだろう。

それぞれの活躍に日の目を浴びれないのは寂しく感じるが、郷仲さん曰く、結果的には影に隠れた組織という物の方がやりやすいのだとか…。

「30分しかねえ、とりあえず先ずは、この新人でもわかるように、できるだけ分かりやすく依頼内容話せ。いいな」

ふんと鼻息を立てながら、住浦さんはドカツと音を立てて面会の椅子に座り、腕と足を組む。

「なんでそんなに偉そうなんですか…」

僕が聞くけれど、当人は全くの無視だ。

「彼、大企業の元社長だからね…」

「ええ！僕よりも若いのに…」

彼の後ろで水原くんとコソコソと話す傍ら、被告人は住浦さんの偉そうな態度に驚きつつも、今回の事件の経緯を話し出した。

「実は…その……」

今回の依頼は兼井 カネイ 利巳 キノミ さんに関して。

彼は、登録者800万人越えの大人気動画投稿者『カテキン』として活動しており、インターネット社会の発達した現代では、とても有名な存在だ。（ちなみに、日本で現在登録者数が多い人間は2000万人ほどなのだから…）

そんな有名な彼には、彼がここまで売れていない時代に開いたオフ会に参加していた女の子、日之出 ヒノデ 公佳 キミカ さんとずっと付き合っていた。

世間には、その事をずっと隠している上、彼の所属している事務所にカメラマンとして就職していた為、なにか報道やスキャンダルが出るようなことはほぼ無かったと言う。

しかし、今回の事件によって、彼らが付き合っていたという事は、半強制的にばれてしまったが…。

事件当時、彼は彼女である日之出さんと、少し高級な居酒屋で食事デートをしていた。

有名な動画投稿者として、カテキンの収入はなかなか多く、二人は時間の許す限り、つまみやご飯物、勿論お酒も、沢山飲み食いしていたのだとか…。

しかし、酩酊状態の二人が長い時間話し合っている内に、男女の価値観で言い争いになってしまい、何かの拍子でカツとなった彼は、彼



女を押し倒してしまった。

それをたまたま見てしまった店員が、殴り合いの喧嘩に発展する前に通報、普通警察によって連行されてしまったのだと言う。

「どう考えてもおまえが悪いんじゃないか」

「違うんです！続きを聞いてくださいっ！」

住浦さんの茶々を押しきり、兼井さんは話を続ける。

彼がここまでしてくれた説明は、あくまでも検察側の見解が世間で説明された話というだけ。

兼井さんの主張は「彼女を」押し倒した」と言うわけではない」と言うこと。

彼は元々、お酒には強くない人間で、頼んでいた酒の多くは彼女が飲んでいたらしく、事件当時の意識はハッキリとしていたのだと言う。

その上、日之出さんは、酩酊状態に陥ると、笑い上戸で遊び好きな人間になり、急に二人でなにもなくてもできる遊びを提案することがあるのだとか…。

事件当時、案の定、酩酊状態であった彼女は、突然「手押し相撲をしよう」と誘い、優しい兼井さんは喜んでそれに応じてあげた。

彼らのいた居酒屋は全部屋完全個室だったため、二人は人の目を全く気にすることはなく、酒が入って気分の良いまま、手押し相撲を楽しんでいた。

しかし、人間もリーゼンも、アルコールが回っていると、身体の機能も一時的に低下する場合がある。

酩酊の彼女は、アルコールによつて身体全体の力が思うように入らず、兼井さんがハイタッチをする位の力で押すと、簡単に尻餅をついてしまう程だったようだ。

「それで…喧嘩と勘違いした店員さんが通報しちやっただけ…？」

「そうなんです！嘘だっと思われるかもしれませんが…僕ははつきりと覚えてるんです！」

水原くんの質問に答え、兼井さんは引き続き冤罪を訴える。

簡単にまとめてみると、兼井さんと彼女さんが手押し相撲をして、彼女を押し倒してしまつたら、たまたま店員が来て暴行と間違えられたと言うことだ。

普通なら弁明をすれば釈放して貰えるのだろうが、なにせ酩酊状態だったわけだから、事実と違うことを言っているということがあるから、警察側も簡単に釈放するわけにはいかないようだ。

なにせ、そう遠くない過去には『酩酊及び精神的障害無罪法案』なんていうちよつとおかしな法案が出たくらいだから、酒の席での事件は、2020年代よりも厳しくなっているからな…。

ちなみに、これは自分の偏見だが「酒の席で手押し相撲をしていた」なんて言われても、あんまり信用はできないよな…。

「だったら…彼女に頼んで証言してもらえばいいんじゃないんですか…？」

酩酊の状態であつても、兼井さんを長く付き合っているのであれば、彼がそんなことをしないとわかるはずだ。

被害者である彼女が彼を庇い許す証言さえすれば、釈放される…。そう思つて、僕は兼井さんに聞いてみるが、彼は残念そうに首を横に振つた。

「それはそうなんですけど…。」

兼井さんは少し口をまごつかせるが、住浦さんが「いいから話せ」と一声かけると、ピクンと肩を揺らしながら、彼はそつと口を開いた。

「実は…彼女は何故か証言だけでなく、僕との和解すらも拒否してるんです！ 検察の人達に彼女と会わせてくれと言つても、面会すらも出てくれないみたいで！」

兼井さんは興奮して話す言葉に、僕と水原くんは少し動揺する。

そんなに長い付き合いだった彼女が和解拒否？

一概には信じられない言葉だったが、彼の必死な顔を見る限り、真実と捉えるには十分な気がする…。

「あんなに…僕を愛してくれたあの子が証言を拒否をするなんておかしいです…。その上…明日には裁判も始まります…どうか…どう

か僕を！」

「んなもん、簡単に信じれるかよ…」

僕が兼井さんに慈悲を向けようとしていた時、突然、住浦さんが彼の話をかえぎり、バン！と机を叩きながら立ち上がった。

「彼女が酒をがぶ飲みして酔った？手押し相撲？あまりにも話がフィクションに近すぎる。正直、嘘にしても馬鹿馬鹿しい」

アクリル板に手を乗せながら、住浦さんは兼井さんをギロリと睨む。

彼の向ける眼光は、被告人の額から汗が流れる位、彼の恐怖心を煽っていた…。

確かに、もしも、彼が罪から免れたいだけなのだとしたら、住浦さんの言うとおり、主張が嘘であると言う可能性も拭いきれない…。

「う…嘘じゃないですっ！絶対に…絶対に！」

けれど、怯えつつも彼の鋭い疑惑の目に負けることは無く、兼井さんは念を押すように僕らに無実を訴え続ける。

彼の目の光は、住浦さんの鋭い目を弾くように、強い…。

「そこまで言われると……」

第三者に立つ者としては、あまり加害の方の言葉を信じすぎるのはいけないことかもしれないけれど、ここまで強い信念を持って言われると、信じざるを得なくなる…。

「一応……白の視点も信じてやっていいんじゃないの…？中立的立場にいたことが、スプリミナルのすべき事だからさ…」

一緒に聞いていた水原くんも兼井さんを一応信じるようだ。

指摘された住浦さんは、少し不機嫌そうにふんと鼻で息を付く。

しかし、少し考えた後、彼はニヤリと口角を上げ、アクリル板越しの依頼者に顔を近づけた。

「…んじゃ、いくら払える？」

「へ…？」

突然のその言葉に、僕と兼井さんはポカンと口を開ける。

「金だよ金。もしも自分がその言葉を本当として証明するのであれば、それなりの対価を払うのも、別に抵抗はないはずだろう…？」

指で輪っかをつくって金を表す住浦さんの姿に、僕の中の赤い感情が逆撫でられる。

「お…お金とるんですか!? スプリミナルなのに!」

「新人は黙ってる。これは俺のやり方だ」

このスタイルに疑問をもった僕は声を上げるが、資本主義な彼は聞く耳を持たない…。

「そんな…」

「利益をとるのは一応間違っていないよ。スプリミナルも場合によつては依頼料をとる場合があるからね」

住浦さんへの荷担かどうかはわからないけれど、水原くんも個人間で利益を取る行為に関してはそこまで気にしていないようだ…。

「でも…納得できませんよ! サトナカさんの指示じゃないのにそんな…」

「一億……」

住浦さんの利益優先思考へ不服を訴える僕を遮るように、突然兼井さんがその莫大な金額を呟いた。

「一億払っていいです…。それで…自分の言葉が嘘ではないと思われるのであれば! 彼女に真相を聞けるのであれば!!」

眼の奥からでも感じる、彼の真剣さと、一億円という資本的強さの言葉…。

確かに、近年の動画共有サイトはテレビ以上に熱が入っており、成功すれば、収益も軽く別荘を持てるくらいとは聞いたことがある。

それに、時代と共にどれだけ機材が進化して良くなったとしても、撮影と編集にかかる時間と労力は、僕ら一般人からしたら計り知れない位だ…。

カテキンが何年も月日を重ねて苦勞し、ようやく手に入れたであろうその金額に驚く僕。

その目の前で、住浦さんはほくそ笑み、アクリル板にへばりつきそうなた体に近づける。

「……おまえの依頼『自分の冤罪を晴らして欲しい』で良かったな?」

「は…はい…」

さすが力強く返事をした兼井さんに、住浦さんは嬉しそうにへへつと小さく笑い声を溢す。

すると、先輩がアクリル板から手を離すと、懐から一枚の封筒を取り出した。

「おい、そいつに渡しとけ。別に怪しいことは書いてないから、先に検査してもらっても構わねえ」

そう言つて、住浦さんは近くにいた監視官に、兼井さん宛の封筒を預けて立ち上がる。

「おまえが自分に対するその思い、俺が買つてやる。依頼完了がしたら、ちゃんとその分の利益は貰うぜ？」

「……はいっ！よろしくお願いいたしますー！」

法外で滅茶苦茶な交渉を持ちかけていた住浦さんだが、兼井さんはそれにすぎるしかなく、深々と彼に頭を下げる…。

「時間です」

こんな交渉で本当にいいのかと疑う最中、監視官が扉を開けて僕らに退出を命じた。

住浦さんは、監視官に「ちゃんと渡しとけよ？」と確認を取つてから、面会室から意気揚々に飛び出していった。

「なんなの…？あの人…」

彼を追いかけるように退出しながら水原くんに聞く。

「スミウラくんは金に結構シビアというか、強欲というか…：まあ、そういう金銭に鋭いタイプなんだよね。君が彼にドン引いてる気持ちは、スプリミナルのメンバー全員が味わったし、それが自然だと思っよ」

そう言つて、彼は呆れを表すように、住浦さんの資本的性格の説明をした。

「へ…へえ…」

まあ…あんな億を要求するような交渉法を見せつけられれば、きっと多くの人がちよつと不快な思いを心に泳がせてまうような気はする…。

そりゃあ、冷静に見れば利益を取れるような仕事ではあるけれど、

結果的に自分の懐に入れてしまうのは…なんだかなあ……。  
なんて思いながら、僕らはそそくさと歩いていってしまおう住浦さん  
を駆け足で追った。

## 5—2 『一番のSと越権裁判』

兼井さんから依頼を正式に受理して拘置所から出た後、水原くんは武装警察の方へと出向き、僕と住浦さんは一度、スプリミナル本社の特異探偵課の部屋へと戻ってきた。

時刻は午前10時半を過ぎていて、郷仲さんは社長室に籠って仕事をしているようだ。

画家も大変なのだろうけど、社長としての仕事もきつと大変なんだろうな…。

なんて思っていると、住浦さんがファイルやら資料やらを大量に持ってきた。

「よつと…これが今回の事件についての書類だ…」

先輩は社長の机にそれをドサツと置くと、ふうと息を疲れと一緒に吐いた。

「え？先に聞き込みとかに行くんじゃないんですか…？」

探偵と言うのだから、僕はてつきり、初めから聞き込みや捜査をするものだと思っていた。

「そうやって捜査を続けるやつもいるけど、無闇に聞き込みに行くのは効率が悪いから、先に情報を纏めて行く方が良いんだよ。正直めんどくせえけどな…」

住浦さんはそう言いながら、ポキポキと指を鳴らした。

なるほど…言わば、聞き込みに行くためのルートや、捜査の方法、纏まった推理を突きつけるための言葉を厳選するために、必要って言うことなのかな…。

フィクションで出るような探偵の仕事のイメージとは違い、少し地味な作業ではあるけれど、これも大切な仕事だ…。

しかし、パソコンがあるのだから、資料もデジタルデータにすればいいのでは？

ネットワーク社会の進んだ現代の人間からしたら、そう思うのも無理はないのかもしれない。

しかし、スプリミナルの人間曰く、ネットワーク社会が蔓延った現代だからこそ起こりうる問題、例えば、外部からのハッキングこうげきによる情報漏洩等、そんなトラブルをなるべく防ぐために、探偵課の調査だけは、基本的に書類による捜査の方が多いのだとか。

「にしても…機密書類つてだけで…こんなに集まる物なんですわね…」

「スプリミナルはアウトローな集団だからな…いろんな所から依頼者の依頼遂行のために、ありとあらゆる所から情報をひっぺがしてくるんだよ。そのために情報捜査課があるわけだしな。まあ、それでも手が届かない場所つてのもあるから、そこは協力者に任せるけどな…」

住浦さんは疲れを息にして吐きながら説明した。

こんな情報が集まっても、こんなにしつかりした秘密組織であっても、手が届かない場所つてのはあるんだな……。

「正直、情報捜査課つて、ネットや公安からの情報とかを集めた後に、全部纏めてファイリングとかしてくる部署とかかと思ってました…」

ふと呟いた言葉に、住浦さんは冷たい視線を向ける。

「お前…情報集めることでさえ負担がでけえのに、オペレーターみたいなことしてくれてる部署と思ってたのか？」

「ま…まあ…」

僕が正直に頷いた瞬間、彼はわざとらしくデカイため息をついた。

「あのなあ？情報捜査課つてのは捜査に基づく情報集めだけじゃなくて、武装警察からの情報捜査依頼の処理や、日本全国のノーイン出現情報の処理、依頼書の選定、スプリミナルが不利になるようなフェイク報道の管理、その上フェイバリットの接客業務までしなくちゃなんねえんだよ。しかも情報は普通勤務だけじゃなくて、パトロールや出張依頼に出掛ける奴らにも、情報を通達しなきゃいけないえ。只でさえこんなに大変な勤務の上に、ファイリングや選定なんてオーバーワーク、任せられるわけねえだろ。それなら俺ら探偵がカバーしてやらねえと、情報捜査課の奴らが過労死しかねえだろ？それくらい分かるようになれよ」

「は…はい…すみません……」



情報捜査課の説明と同時に、軽く馬鹿にされた気はするけれど…。でも、情報捜査課も特異探偵課と同じで結構な重労働な事が良くわかった。

もしも、逆に特異探偵課の仕事を軽く言われたらどう思う？と考えるいとな…。

まだ右も左もわからない新人だからと言って、これは軽率な言動だったと思うし、他の事務課や会計課等の部署へのイメージも改めよう…。

とは思っても…、この大量の情報書類を、自分の目で調べろって言うのも、なかなか大変だな…。

まあ、パソコンよりも書類の方が目が疲れる早さが遅い気がするし、見落としも少なそうだから、良いのかな…？

ガチャ

「よいしょ…」

なんて思っていると、武装警察に行っていた水原くんが、これまた大量のプリントやファイルを片手に帰ってきた。

「二応、武装警察の人からも協力してもらって、いくつか提供してもらってきたよ」

そう言って、水原くんも社長室の机にドサツと資料を置く。

また目を通さないといけない書類が増えてしまった…。

というか…いくら一人一人のデスクが広くないからと言って、社長の机をこうやって使ってもいいものなのだろうか…。

「おう。役に立つじゃねえか」

「君が誉めるなんて珍しいじゃん」

「誉めてねえよ、さっさと探るぞ…」

彼ら二人の言い合いを狼煙として、今回の暴行事件の書類調査が始まった。

多く積まれた書類を幾つか手に取り、それを目の前で開く。

ザツと通して見てみると、書類は、兼井さんと彼の関係する人間のリストであったり、簡易的に纏められた兼井さんの印象を表す物や、卒業した学校や現在の所属事務所、近年の病院への受診履歴の有無ま

である。

驚くのはそれだけではなく、明日の公判にて兼井さんを担当する弁護士や検事、裁判長等の経歴や、彼の所属する事務所の社長の事について……。

徹底的に連携しているわけではないから、警察から取ってきたものと被ってしまったている情報も中にはあるが、短期間でこんなに情報が集まるなんて……。

ということは、僕の事件の時もこの速さで集まっていたのでは……。  
情報捜査課恐るべし……。

「ふうん……こいつ……アーカルの出か……それで、彼女もアーカルと……」

「カネイさんの彼女、ヒノデ キミカさんの証言が……一応、第一発見者とはほぼ同じ発言みたいですね……」

「クリエイター事務所側からは、SNS等での質疑応答は控える……つて書いてあるみたい」

捜査の途中、各々気づいたことを呟きながら、それをメモしたり、頭に刷り込んだりしていく。

なにか相手側からの口撃があった時に、対応できるように……。

「ハア……てか、こういうの俺らじゃなくて弁護士とかの仕事じゃねえの？一番になるべく俺が情報捜査なんざ……クツソめんどくせえんだよ……」

僕らが一生懸命書類に向かっていている間、ついにしびれを切らした住浦さんが、数十枚の書類を片手に、乱暴に椅子の背もたれに体重を掛けた。

「しようがないだろ。弁護士よりもこっちの方が広く動けるわけだし、そもそもリージェレンスが第一発見者なんだし、それもあってだろう」

「あつそ……」

水原くんからの論破的な返答への不満からか、住浦さんは不貞腐れた顔でまた情報収集へと戻った。

ここはめんどくさがり屋が多いな……。

僕はそう思いつつ、山の資料に眼を遠して、こまめにメモを続ける。どれだけ小さな情報であっても、事件においてそれは手がかりと言うことには変わりなく、どこかで必ず役に立つ。

と言う、フィクションの請け負いを信じながら、僕は繰り返し情報を集め続けた…。

しかし、これまでにカネイさんについて気になった点をあげるとしても、せいぜい『今までに暴力事件どころか、軽犯罪を引き起こしたこともほぼ無い』と言う情報だけだ…。

勿論、あくまでも自分が調べた中でだけれど…この情報を受けた上で、犯行当時の兼井さんのことを考えてみると、やはり不自然ではある。

幾ら、酒が人の本性を現すなんて言う位に精神を狂わせると言っても、女の子に殴りかかろうとするのだろうか…。

「まあ、集めることは粗方集めた…って感じか…。」

収集開始から一時間、思い付く限りの有力情報をメモに記し終えた僕は、手にしていた資料を改めてファイリングし始める。

「んじゃ、こっからの捜査は聞き込みって感じだね」

水原くんはそう言いながら、ファイリングとは別に使わない資料を、社長の机の近くに置いてある資料用の大きな金庫に入れた。

無論、プライバシーや情報の悪用防止の為に後で破棄されるのだが、大切な資料だからこそ、依頼遂行まではできる限り、厳重に保管されなければならないらしい…。

それに、廃棄した情報をまた捜査課に引き出してもらうなんて面倒なことさせてはいけないのだろうか…。

「うっし…。そんじゃ、こっからは一度二手に別れるか。一番になるべき人間は、人数が多いことにも気を配らないといけねえからな…」

欠伸を一つしてから、住浦さんは体を伸ばしつつ、意気揚々と提案する。

「そうですね…」

適当に生返事を返した後、僕は水原くんと後ろを向く。

「ねえ…スミウラさんが言ってる一番って…あれ何なの？」

彼に気づかれぬよう、僕はこそつと聞く。

「スミウラくんの口癖みたいなものだよ…。あらゆることでトップに立ちたいっていう個人的願望が口に出てるんだと思うよ…」

住浦さんを呆れているような冷たい口調で、水原くんは教えてくれた。

一番と言ったら、確かに小学生よりも前の頃から、憧れの数字の一つだし、なにかを志すなら1を意識した方がいいかもしれないが…。

そういえば、今朝、スプリミナルのボスに手を掛けようとして、一瞬で氷付けにされてたなあの人…。

「ミズハラア、お前は第一発見者のリサトってやつの周辺探れ。できるなら現場検証とかもしとけ。それで、俺と新人はカネイの女に話聞いてくらあ」

僕らがこそつと話していることに遺憾に思ったのか、住浦さんはこちらを見下すようにギロリと睨みながら、僕らに命令した。

と言うか、聞こえてたのか…。

「はいはい……」

歳上にも動じない水原くんの肝の座り様はさておいて、自分はその後の言葉に驚いていた。

「ぼ…僕とスミウラさんが一緒にですか!？」

正直、水原くんと一緒に行動したい。

なんか変な意味とかじゃなく、住浦さんがちよつと高圧的だから、怖いのだ…。

「新人研修だつってんだろ。ほら、早く来い」

その思いは知らず、彼は僕の服の襟を乱暴に持って、引つ張りながら歩きます。

「は…はいいっ！」

水原くん助けると言いたかったが、彼も御愁傷様と言いたげな目をしているし、言ったら言ったで住浦さんになにをされるか分からなかったもので、渋々、彼に引つ張られながら着いていった…。

なにか、パワハラ紛いのことをされなければ良いんだけども…。



お昼前。

生命の頭の上で顔を出している太陽は、ウザったいほどに白く街を照らす。

引越しの手伝いを含めたら、もう5連勤以上している自分からすれば、もうそろそろブラック企業の申請をしても良いんじゃないかと思ってくるほどウザったい。

まあ、(勝手に)適度に休めているから、疲れて死にそうって訳ではないけれど…。

昔から、対策が立てられては捨てられ続けた政策で、今日までにパワハラや過労死やらの数だけは減っている。

そんな世界で、僕らを含めて多くの人間は、汗水垂らして今日も働いているのだらうか…。

そんなことを考えながら、僕はバラードエリアでも有数の金持ち区の中の街、昔は銀座と呼ばれたその場所の、とある居酒屋に来ていた。

少し強引に、和風の自動ドアをこじ開けて入った居酒屋の中は、床がオニキスのように黒く光り、黒く塗られた木彫の壁が店内を覆う。

レジの後ろには、色もラベルも様々な種類の酒瓶がズラリと並んでいて、その近くにあるショーケースには、如何にも高級という肩書きを下品に主張している肉や魚が、見せしめに飾られていた。

ほんと…ここは、庶民が想像しているような高級感がこぼれだしそうな場所だな…。

まるで磔の高級食品を見ていると腹がなりそうだ。

そう言えば、この前に引き続き、また昼飯を食い忘れていたな…。

なんてことを思い出していると、結構年の行った中年男性の店員が、僕に駆け寄ってきた。

「いらっしやいませ。すみません、まだ開店前でして…。それと、子供だけの入店はちょっと…」

まあ、14歳の上に背も結構低い僕を見れば、当然そんな対応をするだろうな。

しかし、もうトランス済みの自分は、胸についているエンブレムさえ見せれば、入店拒否を突破できる。

「警察特殊認可特異行使結社、スプリミナルです。リサト ジュリさん…いますか？」

顔を隠しながら、僕が店員に僕の立場を説明をすると、彼の顔が一気に緊張した物に変わった。

「しよ…少々お待ちください…」

店員は、まるで逃げるように立ち去って、スタッフルームへそいつを呼びに行った。

スプリミナルは秘密結社だからしつかりとは知られていないのだが、警察の特殊認可組織と先につけておけば、一応は信じてもらえる。

都市伝説的な秘密組織だけど、警察がバックについているとやはり色々と便利だな。

それに、スプリミナルだと言ったら、一気に態度が変わる様は見ていて少し気持ちが良い。

まあ、この優越感を悪用するような屑にだけはなりたくないが。

なんて考えていた刹那、部屋の奥から出てきたのは、皮膚の数ヶ所が鱗で覆われた人形の生命体だった。

このタイプは恐らく、人間とリージェンのハーフ、半異形生命体だろう。

「君が利郷 リサト 樹里さん…でいいかい？」

「なんすか…？」

ようやく登場した第一発見者の彼は、ポケットに手をつ込みながら、死んでいるような目で、僕を睨んでいる。

高圧的なその態度から察するに、早く済ませろ、とでも言いたいのだろうな……。

「カテキン暴行事件の第一発見者として、ちよつと聞かせて欲しいことがあるんだ。カネイさんの件について、あの人が一体なにをしたのか…」

少々苛立ちつつ、僕が彼に聞くと、彼の琥珀のようなオレンジ色の目が、スツと僕と視線をはずした。

「ああ……個室にいた人つすか……。誰か知らないですけど、入店してからしばらくした後、なんか男女の差別？みたいなことで言い争いになって、男の方が女の方を突き飛ばしてたところで俺が見つけた……って感じっす」

利郷は金の髪をかき分け、ポリポリと軽く頭を掻きながら、やる気なさげに応えた。

淡々と短く答えているのが少し気になる……。

「なるほど……ちなみに、証拠に出来るものはある？」

「すみません……。うち、監視カメラとか少ないし、長い間マイクも壊れてて音声もとれてないんで、多分、俺の証言しかないかも……」

利郷はめんどくさげにため息を一つ吐く。

先ほどから、一切の気力が無さげな彼の態度が癪に触る。

面倒くさがりの自分が言えたことじゃないが、応答くらいは真剣にやって欲しいものだな。

「裁判は？君は出るの？」

僕が聞くと、彼は大袈裟にため息を交えながら、引き続き質問の返答する。

「ああ……昨日、わざわざ検事さんがきて、重要参考人として来るように言われましたね……」

眉間にシワを寄せている利郷。

やっぱり検察側も、第一発見者は必ず証人として確保しておきたいところだよな……。

「なるほどね……んじや、現場検証してもらえることつてできる？とりあえず、彼らがいたような場所と同じ空き部屋でも良いから」

僕が足を踏み入れようとした瞬間、彼は僕の目の前に手を出して動きを止める。

「あつ……さーせん。さつき警察が来て、検証とかもうやり終わった後だから、もう開店準備始めて……」

今の彼の言葉は、なにか急いで身を繕っているような感じで、なんともぼつが悪そうな態度だ……。

「ちよつとだけ見せてもらえることも無理？一分だけでもいいから。」

それと、来店情報もほしいんだよね…」

本当はもつと強行的に押し入りたかったが、怪しまれるのを懸念し、できる限りの譲歩をして踏み込んでみる。

しかし、利郷は適当に頭を下げて、スプリミナルの要求を拒否する。「さーせん……。これ以上めんどくせえの嫌だつて、店長言つてたし…お客のプライバシーに関わるからやめろとも言われたんで…」

利郷の態度に疑いを感じるが、そこに嘘はないと思われる。

確かに現場検証をしたら、準備中の今の時間しかないし、只でさえ現場検証は時間がかかるから、疲労も仕方がないだろう。

それに、僕が店内に入るとき、扉をすぐに開けられたのだから、警察が来たと言う納得はいく。

「……そつか…。捜査協力感謝します…」

これ以上踏み込んでも、彼はきつとなにも言わないだろう。

彼に礼を言つて背中を向けて少し歩きだそうとする。

しかし、僕はふと足を止めた。

「ちなみにさ、君カテキンつて知ってる？」

彼とこの事件についての関係性について、少し思うことがあったから、僕はそれを聞いてみた。

「さあ…？CMで出てるだけしかよく知らないっす」

しかし、当人の返答はどこか冷たい。

僕の目に見えていない、彼のその姿や表情は、一体どんなものなのかと考えるが、どうせ自分にとってあまり気分の良いものではないだろう。

「ふうん…ありがと。それだけ」

僕はそう言つて手を振りながら、電源のついていない自動ドアを手で開く。

恐らく、愛想の無さすぎる利郷の対応が気に入らなかつたのか、扉が予想以上に大きく空いてしまった。

「あざっした…」

客が帰る時ですらテキトーな利郷の返事を聞いたところで、この鄙陋ひろうな高級居酒屋を後にした。



事情聴取からあまり時間は経っていないが、街の飲食店からは、ドアの隙間や開いた扉から漏れだした美味しそうな香りが、街を昼の装いに彩るように漂い始めている。

「にしても……やっぱり、なんか怪しかったな……」

ランチタイムの街を歩きながら、僕は考える。

利郷から聞いた証言は、いくらかキナ臭い要素の言葉や態度が沢山あった。

まるで、自分自身の生気のなさを盾にして、なにか疚やましいものでも隠しているような……。

しかし、これを理由にして犯人と決めつけるのはよくないというのは、昨日の家事代行での聞き込みでもわかっただろう。

しかし、だからと言って利郷を手放すわけにはいかないような気がする。

「帰ってから情報課に頼んで、もう一回あいつの事をまとめてもらうか……」

いろんな見解が頭のなかにぐるぐる回っているのなら、それを止めるために調べると言うのが先決だな……。

プルルルル!

ランチタイムの街を出て、間もなく駅に着こうとしていたところで突然、着信音が鳴った。

ポケットからスマートフォンを取り出すと、画面には『監視課』の文字が表示されている。

事情聴取に行く前、あの居酒屋の監視映像を提供して貰えるように電話していたのだ。

「もしもし?…ミヤサワくん?…」

事件解決へ少しの期待をのせて、僕はすぐさま電話に応答する。

「へミズハラくん?…さつき電話で言ってもらったことなんだけどさ。ごめん、今回は力を貸せないみたい……」

しかし、彼からの報告は残念ながら、僕の求めているようなものはなかった……。

その理由はすぐに考えられる……。

「もしかして、ピンポイントにカメラがないの…?」  
「へそう…。厳密に言えば無いとは言いきれないんだけどね。このお店、監視カメラが少なく、何部屋かはどうしても死角ができちゃうんだよ。それが、今回の依頼主、カネイさんの部屋も対象となっているんだ…」

電話越しに、宮澤くんの申し訳なきげな声が聞こえる。  
確かに、事情聴取の際に利郷はら監視カメラが少ないと言っていたな…。

と言うことは、アイツが言っていたのは本当のこと…と言うことになるか…。

店側が業務功績や労働基準違反を隠すため、現代でも嘘をつく企業があるから、正直半信半疑だったのだが…。

「そつか…じゃあ、来店した人の情報だけでも送ってもらって良いかい?店側は提供できないって言われちゃったからさ…」

へわかった。でも、活用した後にはちゃんと情報は破棄してね  
監視課もスプリミナルも、第三者以降のプライバシー保護は絶対だからな…。

「わかってるよ、忙しいのにごめんね。ありがと」  
僕は宮澤くんに礼を言つて電話を切った。

今回は監視課は無理か…。

カメラがないと言うのは、監視課にとって最大のデメリットだし、それを自発的に補うことはできないから不便だな…。

「まあ、地道にやるしかないか…」

面倒な思いをため息にして吐きながら、僕はスマホを改札にかざして通る。

そう言えば、住浦くんが新人研修として連れていかれた悠樹くんは大丈夫だろうか…。

「早く終わったし、様子見に行つてやる」

ちよつと悪戯心いたずら心を含んで呟きつつ、僕は鼻歌を口ずさみながら、プラットホームへと進んでいった…。

林檎とシナモンの甘い香りがする…。

白色を基調とした女性らしい部屋のなか、僕らは上品な絨毯の上に座り、重要人を待っていた。

「良いのかなあ…：こんな押し込むみたいにな…」

片足を立てて座る住浦さんの横で、僕は正座をして辺りを見回しつつ、申し訳なさに呟いた。

と言うのも、この家の家主は、この事件の重要人物であり、最初に彼女は、スプリミナルである僕らを拒否しようとしていたのだが、住浦さんが『お前には応える義務がある』等と、理には叶っているが強引なことを言つて、無理やりこの家に入り込んでしまったのだ。

こういう人が、平気でこんなことするから、スプリミナルは秘密組織のままなんだろうな…。

「お待たせしました…」

小心者の自分が罪悪感に飲まれそうになっているところで、家主である女性が、ティーカップを乗せたトレイを持って来た。

「おう。悪いな」

一瞬の悪気も感じない素振りの住浦さん。

やはりその態度にイラついているのか、家主は彼を無視して、紅茶の入ったカップを僕らの前においた。

家主の名は日之出公佳さん。

カテキンが所属している事務所でカメラマンをしており、殴られたと詳述している兼井さんの彼女だ。

「それで…：私になにか用ですか…？」

日之出さんは眉をしかめ、睨むように聞く。

恐らく、兼井さんのことについて聞かれたくないというのが、顔に出ているのだろう…。

「単刀直入だが、今回の事件の加害者、カネイ キノミについて聞きたいことがある」

だが、そんなこと知ったこつちやないと、住浦さんはいきなり兼井

さんについてを彼女に聞き始める。

「なんであいつを告訴した？」

住浦さんが聞くと、彼女はふうとため息を一つ吐く。

このため息はきつと、このデリカシーの欠片もない先輩への呆れなんだろうな…。

「……自分はずっと別れたかったんです」

ティーカップを両手で掴みながら、彼女は話し始める…。

「良い気味ですよ。あんな、女に手を出すやつ…。ようやく別れられるからせいせいします…」

嫌味混じりに応えると、彼女は気を落ち着かせる為に、少しピンクがかったその紅茶を一口含む…。

「ふうん…やけに冷てえんだな…」

自分で聞いておいて興味なさげに返事をする住浦さん。

我が家のように足を崩している彼は、格好をつけるかのように、ティーカップの取っ手ではなく飲み口の部分を掴んで紅茶を飲み始めている…。

「そんなに…嫌だったんですか…？」

そんな失礼な彼は置いておいて、僕の頭の中では、拘置所で落ち込む兼井さんの姿が浮かんでいて、僕は恐る恐る彼女に聞いてみることにした。

しかし、それが引き金になってしまったかのように、彼女はさらに目くじらを立て、募っていた不満を吐き出し始める。

「だって彼、清純派に見えて裏では全然なんですよ？掃除はしないし、洗濯もしない、買ったものはほったらかしな上に、新しい物好きだし、おならはするしと、全然良いところないんですよ？」

「いや、屁くらい良いだろ別に…」

紅茶を飲み干した住浦さんがツッコむが、彼女は彼への嫌悪を曲げることとはなく、まだ中身が入っているティーカップを、少し乱暴に机に置く。

「それだけじゃないんです！最近は何に必死すぎて、私に全く構ってくれなくて、しばらく倦怠期ぎみだったんです！だから…だから

もう、私は彼に關してはなにも思つてません。告訴を取り下げようとは思いませんし、通報してくれた人には感謝してますから」

怒りを乗せながら言葉を吐いた彼女の顔は、僕ら二人の目を見ているわけではなく、ただまっすぐの方向を向いていた…。

言葉だけを聞けば、今の彼女が兼井さんを嫌つていると云うのがわかるだろう。

しかし、彼女の態度には、なにか言葉にできない違和感のようなものを、僕は感じていた。

言葉にできないそれこそ言葉にするべきではあるのだが、それができる程のボキャブラリーは僕にはない。

だからこそ、彼女の心情への疑いが、汲み取れたのだ…。

「でも…少しは情けとかは…？」

偽物の真実を知るために、僕は少しだけ、彼女の心の中にある兼井さんへの情に語りかけてみた。

「あるわけないでしょう？ずっとうんざりしてたんですよ？私と動画、どっちが大事かっていったら、きつと絶対に動画をとるような人間ですよ？もう嫌ですよ…」

やはり突き放されるけれど、ここで諦めたらいけない…。

「そんな…彼も仕事だったんだし…それに、家族を守るために仕事はするものでしょう…？」

「そんなの綺麗事でしょう？仕事が終わった後にでも、私にいくらでも話したりとか、飲んだりとか、そう言うことも出来たと思うんですけど？」

「でも…きつと、それは忙しいからこそ、行動に出来てなかっただけで、彼なら愛しているのは間違いないと思うんです」

「失礼ですねあなた…。勝手に彼の気持ちを捏造するみたい…。こっちの気持ちにもなつてくださいよ…」

「こっちの気持ち…と言われても…」

どれだけ想像上の兼井さんの心情を想像して突きつけても、どれだけ自分が問いかけてみても、どれだけ反論しても、彼女の返答は、嫌いの一点張りだ…。

「そもそも、付き合ってるんだから、もつともつと時間くらい作っても良いと思うんです！なのに、いつつも編集撮影や編集やらで…酷いときは買い物私に任せて、1ヶ月も外出してなかったんですよ!?!どっからどう考えても仕事人間じゃないですか！」

嫌いの裏を突くどころか、彼女の口からは芋づる式の如く、どんどん依頼者への揶揄や罵倒が湧き出てきて、僕が口を挟むこともできない…。

「それに、カテキンの動画見たことあります？前はおぼつきながらも頑張ってた動画を作ってたのに、最近は、いくつかの動画を外部に任せるようになって、今のカテキンは低迷してるんじゃないか？って、SNSとかで言われている始末なんですよ？このままあいつはドンドン落ちていくと思います…。見きりをつけるのには、今回の事件が最適だったんですよ…」

彼女の身体の中から、ずっと抱えていた大量の文句が放たれた後、僕の隣で聞いてた住浦さんが先程の彼女よりも大きな溜め息をついた

「はあ…んじや、お前の言うとおり、典型的な倦怠期だったわけだ…。こうなっちゃあおしまいだな」

呆れる住浦さんに向けて僕が反応するよりも先に、彼女は通夜のように静かなこの部屋の中で、ぽつりと言葉を吐く。

「もう良いんです…終わりたい…」

その哀愁の言葉が意味するものは、きっと彼女自信の恋の話。

予想していなかった、一人の男のたった一つの行動が、女の中にある硝子細工的な何かを崩してしまった、どこにでも上映されそうな小さな喜歌劇だ。

この世界のどこを探しても、類似したものに溢れている凡庸すぎる物語…。

「でも…それでも…大好きだった人に…変わりはなかったんですよ…?」

しかし、僕はそれは違うと思う。

彼女の言葉に隠れている思いを予測してみると、どこか観念

のような感情が自分の中で取れた気がしたのだ。

これはどこにでもある怨みの物語等ではなく、何か事情のあるトラジテイ的な物なんじゃないか？

しかし、僕の言葉を聞いた、日之出さんはしかめっ面で此方をギロリと睨む…。

「何が言いたいんですか…？今さらそんなこといって示談にしてもらおうなんて思っても…」

「今のところ、まだその気はないです。でも、あなたの話はさつきから、暴力その物の件の話が出てなかったんです。本当に嫌いだったら…見ず知らずの僕らに、そこまで詳しく日常のことは言えないんじゃないか？と思ひまして…」

また話を切られそうになったが、負けじと僕は、僕自信の思いを彼女に問いかけてみた。

少々賭けのような手法な気はするが、うまくいけば、きつと情に流されて本当の気持ちを吐き出すか、何かしらのボロが出るかも知れない。

「それに…あなたのことも、少しだけ調べました。デビューした時から、ずっと好きだったんですね？カテキンとしてがんばっている兼井さんのこと…。8年前の昨日、はじめてのオフ会の時から今まで、欠席しなかったことはなかったって言う…あくまで噂の範疇ですが、そう言う情報も知ってます。勿論、ファンとして叱責するのも大事なこともかもしれないですけど、ずっとずっと昔から応援してるんだっから…その分、ちゃんと信じてあげるのも、ファンじゃないんですかね…？」

情報調査の際に小まめに取っていたメモを片手に、僕は彼女にその事突きつけた。

これはあくまでも、ファンとしての歴史が、情に訴えるために大事な事だろうと思っただから、話したまで。

これで、もう少し情報が引き出せたらいいと思ひ、僕はまっすぐに彼女の目を見る。

しかし、僕の話した事が地雷だったのか、彼女はジワジワと顔を赤

くしながら机を強く叩き、こちらを強く睨んだ。

「うるさい……っ！あなたに何がわかるのですか！」

突然の怒号に、僕はビクリと肩を震わす。

「あの人は私を殴った！そこにファンとしての情なんてないのですよ！ふざけるのも大概にしてくださいませんか！」

しまった……絶対に逆効果だった……

目の前で涙目になりながら怒る日之出さんに、僕はもう目を合わせられない……

フィクションの真似事のようなことをするには、僕の計画自体が浅はかすぎたのだ。

情に訴えようとして怒らせてしまうなんて、探偵として最低だ……

「……ごめんな……」

ゴンツッ！

「いっっ！」

彼女へ謝辞を述べようとした瞬間、突然、自分の脳天を目掛けて先輩からの拳骨げんこつが落ちてきた。

「すまねえな。こいつ、新人だからさあく、まだちゃんと第三者視点に立って物事言うことできねえんだよ」

住浦さんが営業スマイルを彼女に向ける中、僕は未だにグリグリと拳を押し付けられている。

暴力的な教育に少々不服な感じはするが、感情的になってしまった僕を助けてくれたつもりなのだろうか……

なんて思っていた途端、彼は僕の頭から手を離すと共に、とある提案を日之出さんに吹っ掛けた。

「んじゃ、俺と二人で話をしないか？それの方が、こいつに調子狂わされなくて済むだろ？」

突然のマンツーマン聞き込みへの誘いに、僕は驚いた。

「そんなこといっても、なにも変えませんよ……？」

……  
こんなに拒絶しているのに、一対一でなんとかできるのだろうか……

「いやいや、お前が嫌いな彼氏をちゃんと裁いてやるためだよ。証言



は沢山ある方が良いだろう？どうだ？」

未だ僕らに不信感を抱く彼女に、住浦さんはあくまでも裁判をする側としての提案を元に、彼女に案を提じている。

ここまで自信ありげに話すということは、なにか今回の依頼遂行のための鍵があるということなのだろうか…。

「話すことは変わりませんよ？」

「わかっているさ。俺だけに、お前が言いたいことを言えばいいだけだよ」

このやり取りを機として、しばらく彼女はジロジロと住浦さんを睨んでいる…。

睨まれている当人は、ただ微笑みを浮かべているだけだ…。

「……わかりました。日常的なことからは何か話します…」

少しにらみ合いのような攻防が続いた後、彼女は住浦さんとの対話を了承してくれた。

「ありがとうご…ザッ!!」

「あんがと。協力に感謝するよ」

僕が礼を言うよりも前に、住浦さんが微笑みながら僕の頭を掴み、乱暴に後ろに押し倒した。

「ちよ…なにするんですか!」

「うつせえ! ヒノデさんが二人がいいって言ってくれてんだ! 新人はとっとと出てけ!」

どさくさ紛れに背後の壁に打ち付けてしまった僕に、住浦さんはシッシツと手で虫を払うかのように冷たくあしらう。

新人だからって、なんとという対応だ…。

「わ…わかりましたよ……」

ぶつけた頭をさすりつつ、僕はやれやれと立ち上がり、ドアノブを握った。

「聞き耳とか立てんなよ?」

「それも……了解です……」

用心に釘を刺されたところで、僕は口を尖らせながら、不信感に濁るこの部屋から出た。

5—3 『一番のSと越権裁判』

「はあ……」

色々な感情に揉まれたから、大きな溜め息が出てしまった。

まだまだ至らない自分の探偵としての能力や、重要人物像を怒らせてしまったこと、そして、住浦さんから僕への態度……。

自責や呆気、反省、そんな様々な感情が、部屋から追い出されたことによる疎外感を引き金に、思わず口から息として漏れ出てしまったようだ。

自分はまだまだ新人だ。

だからと言って甘えるのはダメなことだっただけのは解ってる……。

それでも、なにかにすがって甘えてしまいたいと思ってしまうのは、詐欺師としてのクズさを、まだ僕が抱えているからだ。

そう背後霊が呟いているような気がする……。

「大変だね」

「ほんと……って、うわっ！」

突然聞こえた慰めの声に頷いてから、僕は彼がそこにいることに気づいた。

今日は一段と驚いてばかりだな……。

「水原くん……いつのまに？」

僕が聞くと、水原くんは僕に向けてマイペースに手を振った。

彼も郷仲さんと似て、神出鬼没に現れる時があるんだよ……。

「聞き込みが予想以上に早く終わったんだよ。居酒屋からここまで結構近かったし……」

水原くんはスマホ片手に微笑む。

「そ……そう……。それで……店員側の証言は……？」

「まあ……簡単に言えば『皿を下げに行こうとしたら、言い争ってる声が聞こえて、扉を開けたら、男の人が女の人を押し倒してたから通報した』って感じだった……。それ以外はなに変わらない。怪しいと言え

ば怪しいけど、まだ確証をつけないから、なんとも言えないんだよね  
…ほら」

そう言って彼が僕の目の前に出してきたのは、スマホのボイスレ  
コーダー画面。

小さな音声で流れてきたのは、第一発見者と思われる男の声だっ  
た。

「そっか…」

言葉を聞く限り、特に変わった所は無しのように思えた…。

個人的な感情を持ち込むのであれば、正直、第一発見者である店員  
も怪しい人間の一人ではあるのだが、先ほど住浦さんに『中立的立場  
でいれない』と指摘された所だ。

あくまでも、第三者としてしつかりと状況をみなければ、きっと水  
原くんの足も引つ張ってしまう。

だから、例え少し怪しいと思っても、その怪しさ自体を用心せねば  
ならないな…。

「でも…調査してたら、ちょっと面白い物見つけたり…」

「なに…?」

「まあ、事件にはそこまで関係ないだろうから、またこの事件が解決し  
たときにでも話すよ…」

「そ…そう…」

いったいなにを見つけたというのか…。

水原くんは大人びた少年だけど、こういうところは子供っぽいな  
…。

ふと、一台のバイクが通りすぎる音が聞こえる。

その癖、軽く聞き耳を立ててみても、部屋の中の話は聞こえない。

そんなもどかしさが、壁に飾られた二人の愛し合っている沢山の写  
真が、今の情景と悪い意味でマッチしていた。

兼井さん自身は、こんな筈じゃなかったって思っているのかな…?  
それとも、ただ罪を軽くしたいだけで、僕らをいいように使ってい  
るのかな?

正直、自分は前者を願っていたいな…。

なんて、依頼者寄りの考えをしているから、自分はまだまだなんだろう…。

「そういや、スミウラくんは…?」

ふと、水原くんが首をかしげる。

「二人で話し合ってる。彼は…もうカネイさんを逮捕する気でいるみたいで…」

「まあ…捜査してる時は、そんな考えを持っていてる人もいるさ…。今は仕方がない…」

彼はそう言うと、フウと息を吐きながら、水原くんは後頭部に腕を組んで壁に寄りかかった。

確かに、考えと言うのは元から様々で、真実がそれぞれの考えと合っているかはその時になってみないとわからないものだ。

住浦さんが進めている物が合っている場合もあるし、自分が間違っていない場合もある。

それをよく解っている上で、水原くんはそう言ったんだろう…。

なんか…彼は住浦さんよりも中立的な感じするな…。

「スプリミナルの仕事って…こんなことばかりなの…?」

なんとなく、気になったことをふと聞いてみる。

「…まあ、捜査依頼の場合はこんな感じかな…。自分も何度かこういうのしたことあるし…直に慣れるよ…」

「そう…」

水原くんは嫌気を出すこと無く、普通に答えてくれた。

これを聞きたかった理由<sup>わけ</sup>は、自分が出会った先輩達の態度を思い浮かべていたからだ。

少し、自分の中の彼らの印象を整理してみる。

水原くんはどちらが悪いとも言わない、言わば”どちらにも余計な感情を持たない”という考えが強い。

逆に住浦さんは自分の考えを曲げず”あくまでも結果論”という考え。

郷仲さんは…まあ、よくはわからないけど、自由人って感じが強いかな…。

他にも、あと何人かいる先輩達や、きつと叶さん達にも、事件で対峙したときの考えの方向性は其々だと思う。

事件の解決のための考えというのは誰にでもあって、それが自分の思い通りにはならない。

結末や結果が解らない限りは、彼らのような中立でいなければならぬのだと思う。

ただ、それでも自分はどうか考えても、彼女が彼氏の事を完全に見限ったとは考えられない…。

彼らもそれを解っているのか、それとも解らないのか…。

それすらも解らないから、探偵というのは難しい…。

ガチャ

「おい、終わったぞ」

なんて考えていた途端、話の終わった住浦さんが部屋から出てきた。

「お疲れさまです…。次は、どこに行きますか？」

気持ちを切り替え、僕が声をかけると、彼はさつと扉を閉めながら僕に次の指示をする。

「ああ……お前は帰って良い」

「はい……え？」

彼の指示に僕は思わず二度聞きしてしまった。

だって、新人講習ならばこれからまた着いていかないと行けないだろうに、まさかの帰社指示がくるなんて思わないじゃないか…。

「お前がいると気が散るんだよ。こつからは水原と行動しろ。んじゃ」

「えっ、あー！ちよつとお！」

微かな罵倒をした後に、住浦さんはそそくさとこの家から出ていつてしまった…。

「行っちゃった…」

なんともいい加減に匙を投げられたような気がする。

まるで、まだ味のなくなっていないガムを、道端に吐き捨てられたような気分だ。

「ま…：僕らは僕らで別で行動しよう。周りの人に聞き込むのも、仕事さ」

あんぐりと口を開ける僕を見かねて、水原くんが次の仕事を提示する。

扉の向こうにいる彼女が少し気がかりだったが、あんまり好かれていない自分が行っても、なにも教えてくれないんだろうな…。

「わかったよ…」

渋々、僕らは互いに情報交換や聞き込みをしながら、またスプリミナルへと戻ることにした。

とうか…：住浦さんよりも水原くんの方がよっぽど先輩をしている気がするな…。



夕方、空に橙が浮かびだし、日が少しずつ西へ落ち始める頃…。

「ハア…：疲れたあ…」

客がほぼいなくなつたカフェテリアの中、ここまで集めてファイリングした有力情報資料を前に、僕は机に突っ伏した。

「お疲れさま…」

隣に座る水原くんが僕の肩をそつと叩く。

その変哲もないワンアクションが、元詐欺師の僕にとっては大きな励ましになるから嬉しい物だ…。

正直、詐欺師の時よりは心にはこないけど、身体的には疲労が蓄積するな…。

「二人とも、コーヒーかなにかいる？」

見かねたあおいちゃんが、食器を片付けながら、僕らに聞いた。

「あ、んじやお願ひ…」

「僕はいつものね」

「は〜い♪」

僕らの返答を聞き、彼女は鼻唄を歌いながら、意気揚々とサイフォンを手を取った。

そういえば、彼女も特異探偵課だった筈だけど、どっちかと言うとカフエの仕事しかまだ見ていない気が…。

まあ、今はそれどころではないか…。

「結局、事件についてはあまり進んでない件について…」

帰ってきてから、色々と捜査をして、兼井さんの事件までの行動や、日之出さんのいつもの態度であったりと、色々とわかったことはあった。

けれど、結局は事件と直接的な関係が見られなかったため、依頼解決の糸口にはならなそうだ…。

「今のところ…完全にカネイクくんが悪い感じだなあ…。」

「そう…だよね…。」

勿論の事だが、なにも進まないと言うことは、結局『兼井さんが有罪のまま』と言うことだ。

依頼を遂行するためには、このままではいけない…。

集められた資料を観察しながら、もつと確信につくようなことを考えなければ…。

「ユウキくんはどう思うの…？カネイクくんのこと」

ふと、水原くんが頬杖をつきながら僕に聞いた。

「…僕はまだ信じてる…。だって、あの人が暴力振るうようには見えないし…それに、ヒノデさんもなんか、告訴とかじゃない何かには必死な感じがして…。」

僕の答えに迷いという物は一応ない。

中立的な立場にならないといけないから、冤罪ということ自体を疑うのも大切だろうが、僕としては、依頼者をまずは信じるということが、第三視点に立てることに繋がるんじゃないのか、とも思っている。

ただ、冤罪という言葉を疑うとなると、兼井さんが嘘をついている可能性も無くはないだろうから、裏切られるのが怖いけれど…。

「とりあえずは、カネイクくん無罪派…ってわけね」

彼はそう言って、あくび欠伸を一つ。

水原くん自身は、どっちを信じているのか聞いてみたかったが、そ

れを聞くこと自体、野暮な気がしたため、そつと口をつぐんでおいた。

ガチャン！カランコロン…

そんな時、閉店間際の店の扉が開く。

「よお。進んだか？」

単独行動をしていた住浦さんが帰って来たようだ。

「いや…全然ですね…。とりあえず現状報告を…」

僕はそう言つてファイルを開くと、住浦さんはめんどくさげに「んだよ…」とぼやきながら、僕目の前の椅子に腰をかけた。

改めて、これまでに調査した情報を簡単に整理しよう。

大人気の動画投稿者『カテキン』として、仕事に一生懸命な兼井さんと、彼が構つてくれなかつたことで倦怠期になつていたカメラマンの日之出さん。

事件当日の20時頃、二人は久々に外食デートをするために、近所の少し高級な居酒屋へ行つた。

兼井さんの証言では、その後は久々に楽しく会話をしたり、小さなゲームをしたりと、これを機に今まであまりできなかったことを沢山していたらしい。

その中で、酩酊状態のまま手押し相撲をして遊んでいたのだが、そこで彼女が押し倒されてしまい、尻餅をついたところで、店員がそれを暴力と見間違えてしまったとのこと。

しかし、店員である利郷さんの証言によると、入店してから暫くは楽しい会話が聞こえていたのだが、いつの間にか言い争いに発展していった。

その時、たまたま利郷さんが皿を下げに行こうと部屋に入ったところ、兼井さんが木元さんを押し倒していた、とのことだ…。

利郷さん以外の店員さんも『言い争いのような声を聞いた』との証言を多数していたのだが、高級店と言つても居酒屋だから、それが兼井さんと日之出さんの声だったとは断定できない。

それに、水原くんが監視課と呼ばれる場所で貰つた来店情報を鍵に、事件当時に来ていたお客さんに色々と聞いて回つていたのだが、



言い争いをしてしまったり、他の部屋から騒音が聞こえたと証言している人もいれば、酔いすぎて記憶がないと言う人もおり、カテキン暴行事件の解決の鍵には、残念ながら届かなかった。

結局、多くの情報を集め終わったとしても、残念ながらここまでしか整理は出来なかった…。

「そういう感じねえ…」

僕の説明を聞き終わると、住浦さんは広げていた資料を閉じて、背もたれに体重を掛けながら仰け反った。

「以降は…これと言った情報は見つかりませんでした…」

こんなに手がかりが見つからないと言うのを体験するのは、勿論始めてで、これが”事件を捜査する”ということなのか。

なんて思うと、僕自身、この仕事自体に、煩わしさすら感じ始めていた…。

「まあ…もう伝えるつきやねえだろお…。信憑性が高いのは店員の証言でした。こっちはもう手伝えません…ってなあ…」

しかし、完全に諦めきつているような彼の発言が癪に障る…。

「でも…：やっぱり僕はなんか…諦めたくないというか…：まだ、カネイさんが嘘をついてるとは思えなくて…」

仕事に煩わしいと思っていようが、自分の依頼者への思いは捨てられない。

少しだけそんな反論をした途端、自分とは対照的な意見を持っているであろう住浦さんの眼光が、急に鋭くなる。

「しつげえなあ…：お前は何がそんなにひつかかんだよ…」

その口ぶりは、まるで”手前のことが面倒臭い”とでも言いたげだった。

「だって！彼はスプリミナルに頼ってくる程なんですよ!?!まだ裁判までもう少しだけ時間はありますし…：それに！彼女の証言には、まだなにかムラがある気が…」

「裁判では証言と証拠が全てだ。感情論で動くな新人…」

興奮状態の僕の言葉を、住浦さんの言葉がぴしゃりと遮る。

「それに…：さつき色々回って、カネイの事を色々調べてみた。あいつ

は地域で偏差値下位のバカ高を卒業している上に、修学中は大人しいだけの性格だったって言うじゃねえか…。それを踏まえた上で動画見てみる。そんなのとは段違いに性格が違うんだぜ…?」

そう言つて、住浦さんが出してきたのは、束ねられた書類ファイルだった。

それを手に取つて見てみると、書かれていたのは、確かに兼井さん一人だけに関する情報の数々だった。

学校の偏差値や、事務所への悪評、カテキンとしての顔の悪評、それに加えて、今まで出てきたフェイクニュースすれすれのネットニュースの画像まで書かれている…。

彼としては、あくまでも参考までにと言うわけだろうが、きっと彼の主張したいことは『兼井さんの本性は別にある』と言うことなのかもしれない…。

「それに…俺とタイマンで話してたときのヒノデの証言では、カネイは相当なダメ男だったみたいだぜ…? 相談なしでカメラは買うし、なかなか売れなかった時はヒモに近かつたらしいしな…」

総ての言葉を束ねてみると、確かに彼の推理は納得がいくものだ。

しかし…彼の態度はまるで、諦めて早く仕事を終わらせろ、とでも言いたげな物だった。

「それこそ…感情論じゃないんですか…?」

その態度に堪忍袋の緒が切れる…とまではいかないけれど、住浦さんが今吐き出した言葉のせいで、完全に僕の怒りの感情に火がつけられていた。

「んだと…?」

眼光がさらに鋭く熱くなるが、僕は怯まない。

「被害者の主張と兼井さんへのマイナスの印象だけで動くのは、納得できないんです…。それに、今あなたが言ってるのは、ヒノデさんの感情だけじゃないですか!」

僕がそう声をあげた瞬間、住浦さんが立ち上がり、乱暴に僕の胸ぐらを掴んだ。

「新人が…調子に乗るなよ…」

強気に釣った目が僕の心を突き刺そうとする。

思わず弱気になりそうだったが、それでも僕は彼を睨み返す。

どちらかと言うと、僕は臆病な性格だけれど、この時の住浦さんは怖くなかった。

間違っているのはこの人だ。

どれだけ頭が良くても、どれだけ上の先輩であっても、根本的な尊厳として、間違っていることを僕は指示できない。

ここではないはいと頷くことをしては、僕はヘタレから愚か者に成り下がってしまう。

ダンッ!

「ブルーアイ二つと、カドヤスペシャル一つ!」

にらみ合いが続いて少し経った後、突然、机の上にドリンクの乗ったトレイが音を立てて置かれ、あおいちゃんが大きく声をあげた。

「ここで喧嘩しないの! テツヤくんも、シュウくんは何言っても無駄なんだから! 一旦冷静になるの!」

間をわって喧嘩寸前の状態を止めたあおいちゃんに、僕と住浦さんは呆気にとられる。

彼女の怒りの一声によって、ヒートアップしていた僕らは、まるで大量の水をかけられたように冷静になった。

こんな憩いの場所で、口論をしまして申し訳ない…。

「つたく……」

落ち着きを取り戻した住浦さんは、僕から手を離して再び椅子に座り、僕らの目の前に置かれたコーヒーを手に取った。

「…僕は諦めてないですから……」

負け犬の遠吠えのように捨て文句を言ってしまったが、これは紛れもない本心だ。

まだ救うための兆しは見えないけれど、僕は兼井さんを救わなければならぬのだから…。

「……間に挟まれててめんどくさい所あれなんだけど……」

こちらが勝手にヒートアップしてしまい、すっかり忘れられていた水原くんがふと声をあげる。

「その事件の第一発見者である店員の情報も、一応見てもらって良い？」

そう言つて、水原くんも資料を取り出して机に広げ、第一発見者の説明を始めた。

ホウセキカナヘビ型の半異形生命体、利郷 樹里。

彼自身は、バラーディアでも有数な高校を出ている上に成績も優秀な方だったらしいのだが、現在は22歳のフリーターとのこと。

両親は裁判所と大企業で、父母共に重役として働いているから裕福だったらしく、小さな頃からピアノや合気道と言った色んな教育を受けてきたようだ。

しかし、大学受験に失敗して生き場所がなく、今はずっと両親の伝で紹介して貰った居酒屋にて、毎日バイトをしているらしい…。

同じバイトの方からの印象として、利郷さんはいつも生気が抜けているような態度で、仕事はしっかりしているのが、愛想が悪いとらしい。

何を指摘しているのかわからないし、バイト以外は何をしているのかもわからないから、近寄りがたいとも言われているのだとか…。

尚、彼は第一発見者として、明日の公判に証人として出るようだ。

「まあ…特に気になる点はなさそうだけでもね…」

水原くんの言うとおり、確かにこの事件に関連して、なにか怪しいところがあるのか？と言われると、そうではないのかもしれない。

単純にたまたま見つけて勘違いした…と言う考えの方が強そうだ。

まあ、一応、参考人として覚えておいた方がいいのだろう…。

カランカラン！

すると、間もなく閉店だと言うのに、突然お店の扉が開いた。

「いらつしやいま…：あつ！ユイちゃん！フミカちゃん！」

客を見るなり、先程まで怒っていたあおいちゃんの顔がパツと明るくなった。

気になって振り返ってみると、そこには、下校中だったであろう高校生が二人、来店していた。

「やつほ！アオちゃんおひさしぶり〜！」

一人の少女は、学生服の下に黄色いパーカーを着込み、スラツとした脚に、シヨートカットの後ろ髪がぴよんと跳ねた、如何にも活発そうな子。

「お邪魔…します…」

その後ろには、一冊の本を片手に持ち、少しボサツとしたロングヘアと、縁のない眼鏡が特徴的な女の子が、少し恥ずかしげにあおいちゃんに挨拶をする。

「久しぶり〜！最近来なかったから心配したよお〜？」

あおいちゃんは嬉しそうに彼女らに駆け寄った。

「ごめんねえ〜。最近ダンスチームの練習で忙しかったりして…今日はお休みだったから来ちゃった」

「私は…ちよつと色々と勉強が立て込んでしまった。今日はユイちゃんに誘われた…から…」

二人は申し訳なきげにあおいちゃんに弁明すると、彼女は、そつかと頷きながら納得する。

「色々大変だったんだねえ…。そうだ、折角来たんだし、なにか飲む？」

「あつ！それじゃ、いつものゆずレモンスカッシュユ！」

「私…アイスコーヒーで…」

二人のお客さんの注文を、あおいちゃんはにつこりと笑って了解し、足取り軽やかに厨房へ行き、ドリンクの準備を始めた。

彼女の期限の盛り上がり様を見るなり、どうやら、あおいちゃんはこの女子高生二人とは友達のようなだ…。

「彼女達は…？」

正直、見る限りはあおいちゃんの友人と言う以外、何の変哲もない普通の女子高生たちだが…。

「ああ、うちの常連の高校生。たまにちよつとやかましく感じちゃうかもだけど、二人とも良い子だよ」

毒舌混じりに水原くんが彼女らを紹介する…。

彼が何か物を言うときは、いつも毒が混じっている気がするな…。

「おつ？なにになに？今日も事件？」

「大変…です…ね…」

すると、突然二人の女の子が僕と水原くんの間からニユツと顔を出し、机に置かれた資料に目をやった。

「あーこ、これは見せられなくてー」

慌ててファイルを隠そうとしたが、水原くんが僕の手の上に手を置いて止める。

「大丈夫だよ。二人とも、僕らのこと知ってるから」

「そ…そうなの…?」

僕が聞き返すと、水原くんの説明に納得するように住浦さんが頷いた。

「こいつらは郷仲が認めた協力者兼、情報屋の人間だ。意外と口も固えし、そんなに気を張る必要はねえよ」

彼はそう言うと、持っていたコーヒーカップを置いて、僕らの近くにあった資料を全て手にとって、改めて自分の膝の上に広げて眺める。

情報屋…。

ここには情報捜査課があるから必要ない気がするし…こんな普通の高校生の彼女らがそうとは思えないが…?」

「あーアオちゃん、もしかしてこの人、新人さん?」

すると、跳ね髪の女の子が僕の顔を見ながら、あおいちゃんに聞く。

「そう! ついに後輩できたんだよ! ユウキ テツヤくん!」

すると当人は、まさに歓喜の言葉を体現したかのような、眩しく可愛い笑顔を情報屋の二人に向ける。

確かに…僕が入ることになったって聞いたら、跳び跳ねて喜んでたって引越しの時に聞いたな。

ただ、カフェの勤務が忙しく、引越しの手伝いには来れなかったらしいが…。

「そうなんだ! よかったじゃーんっ!」

「ずっと…欲しがってたもんね…」

嬉しさが伝染したかのように二人もにっこりと笑顔を浮かべて、あおいちゃんを慶<sup>けい</sup>すると、二人は僕に改めて顔を向けた。

「はじめましてユウキさん。私、サキハナ ユイって言います！開発課に友達がいるから、ここの事はちよつと知ってるんだ！それでこつちが…」

「ヨサノ フミカ…です。いろいろあつて、一応スプリミナルの協力者になって…ユイちゃんとは、同じクラスの同級生で…友達です」

跳ね髪の女の子、咲花<sup>サキハナ</sup> 優衣<sup>ユイ</sup>は元気よく、そしてボサ髪の女の子、与謝野<sup>ヨサノ</sup> 文華<sup>フミカ</sup>は少し恥ずかしげに、各々のスタイルで僕に自己紹介をしてくれた。

「あ、よろしく願います…」

久々にこういう年がほんの少し下の女子と話したから、ちよつと緊張してよそよそしく挨拶をしてしまった。

まあ…ここにいる人間では僕が最年長ではあるけども…。

「まあ、友達つて言うより彼氏だけどねえ〜」

「ちよ…ちよつとアオちゃん！恥ずかしいんだから！」

「意外とピュアだよね」

「フミカちゃんまでえ〜」

先ほどまで興味津々だったはずの僕を他所に、三人が戯れ<sup>じゃ</sup>合い始める。

なんか、こつ”誰かが友達と過ごす”つて言うシーンというもの、なんか久々に見る気がする。

学生時代は、特に誰かとぎけ合ったりすることはなかったし、どこかのグループに入るといふことも特に無かったな…。

そう言えば、中学に上がつてから別れてしまった親友の女の子は元気にやっているのだろうか？

こんな風に、また誰かと笑いあっていると良いんだけどな…。

「なあ…。お前ら、これなんかわかんねえか？」

ふと、住浦さんが資料ファイイルを情報屋二人に見せる。

優衣ちゃんがファイイルをそつと手に取つて広げ、それを文華ちゃんと一緒に眺める。

「ふーん…今回カテキンが依頼人なんだあ…。あつ、カテキン今ヤバイよ？SNSで『聖人の皮被つた鬼畜野郎だった』つてめちやく

ちや叩かれてるし、学校でも、チョー話題なの！しかも住所や学歴まで晒されてるし、変な人はSNSに刑務所まで行ってみたって動画あげて逮捕されてるし！」

見せてあげようか？と優衣ちゃんは資料を文華ちゃんに渡し、（頼んではいけないのに）スマートフォンを立ち上げ、即座に色んなSNSの画面を僕らに見せてくれた。

百数十文字のみの言葉を吐き出せるSNSには、彼女の言ったような『聖人の皮を被った鬼畜野郎』だとか『一生くたばってろ』だとか『死ぬ』だとか、そんな罵倒な言葉が、インターネットの中で埃のように積もり積もっている。

写真を投稿するSNSでは、全く関係のない画像と共に『カテキンサイテー』と言った、軽い売名のような罵倒を、メッセージでのやり取りを基本としたSNSでは、タイムラインの欄に『カテキンくたばれ』と思う人はグッドか共有を』とチェーンメール紛いの投稿。

そんな、汚れた色とりどりの罵倒が、SNSで繰り広げられていたのを、僕は殆んどしらなかつた…。

「と、こういう風に、俺らがつい見逃してしまうような場所の情報を、こいつらが手に入れてくれてるわけだ」  
「な…なるほど…」

住浦さんの備考に、僕は納得した。

確かに、自分達は先ほどから、ずっとSNSとか他愛ない会話とかに眼もくれず、ただ手元に集められた資料を元として事件を調べていただけだった。

というか、手元に集められた資料だけでも精一杯だったのが本音かもしれない。

そんな手の届かない範囲を、彼女らが自然に提供してくれている。どんな理由で優衣ちゃん達が採用されたのかは知らないけど、この子達が僕らに介入する価値は確かに存在するな…。

「カテキンさん…そんなことしないって…思ってたのに…」

ふと書類を閉じて、文華ちゃんが物悲しげに呟いた。

確かに、聖人で有名な人が暴力事件を起こしたと言われたら、失望



に似た思いを持ってしまおうよな…。

「でも、スプリミナルに頼むくらいなんだから、きつと違うつて私は信じたいかなあ…」

対して優衣ちゃんは結構徹底して信じようとしている感じだ。

「そういえば、日之出さんにもさつき、”信じてあげるのもファンだ”みたいなことを言ったからな…。

勿論、僕自信も彼のことを信じている。

「一応、僕もユイちゃんやユウキくんとは同じ思いだけど、今のところ有罪になるかも…つて、スミウラくんは主張してるんだよね」

「えー……。まあ、まとめサイトとかでも、あることないことバンバン書かれてるもんねえ…。そう思ってもしょうがないかなあ…?」

そう言つて、二人は横目に住浦さんを見ながら話し合う。

人数的には、やっぱり兼井さんを信じたいという人が多いようだ。

きつと、兼井さんがカテキンとして善き行いをしてきたからこそ、誰かの信じたいという思いが、こんな小さなところで、まだ小さく残っているのかもしれないな…。

友達もあんまり作らず、詐欺を働いてきた僕とは大違いだ…。

「というか…水原くんも一応信じてくれてはいたのか…。」

「……あ」

ふと、文華ちゃんがなにかに気づいた。

「どうした? メガネ」

住浦さんが腕と足を同時に組みながら彼女に聞くと、文華ちゃんは第一発見者である利郷さんの写真に指を指す。

「この人の着てるTシャツ…知ってる……」

「え……?」

文華ちゃんの言う通りに見てみると、彼の着ている黒いTシャツに、独特なフォントで『LiSSa』と描かれた小さなワンポイントが、さりげなくデザインされているのに気づいた。

すると、目を細めて写真を見ていた優衣ちゃんが、突然「あっ!」と大きな声を上げる。

「これ、リツサと同じやつじゃない!? ほら! カテキンと同じ動画投稿

者の！」

彼女が口に出したその名前に、僕ら探偵は、各々首をかしげる。

「リツサ…？」

動画投稿者にまで詳しくない僕らを見かね、優衣ちゃんはスマートフォンを即座に取り出して調べ、その画面を僕らに見せた。

「これこれ！」

彼女の携帯に写されたのは、動画投稿サイトの個人チャンネル画面。

その動画のサムネイルには、自分の顔面を狐のお面で隠している人が写っている…。

「去年の6月にチャンネル開設をして、現在までのチャンネル登録者数は50256人、総再生回数約298万回の炎上系動画投稿者。デマや誹謗中傷に関する動画とかをあげてる上に、今回のカテキン騒動でも『やっぱりカテキン屑だった』って言う動画で、100万再生も稼いでる」

僕らが画面の隅々を見るよりも前に、文華ちゃんが全てを解説してくれた。

「く…詳しいね……」

「私…一度見たことは…基本忘れないですから……」

そう言つて、どこか得意気に眼鏡をクイツと上げる文華ちゃん。なるほど、瞬間記憶能力がこの子にはあるのか…。

普通の人間でも瞬間記憶ができる人が希にいるとは聞いたことがあるから、彼女が異能力者なのかどうかはわからない。

けれど、確かに情報屋にするにはうつつけの人間だし、ここに事務員や情報捜査課として働いていても不思議じゃないだろうな…。

「それにこの金髪もそうだよ。天然な金色って感じのは、リツサ位しか考えられないもん！」

少し興奮気味な優衣ちゃんの言うとおり、画面に写っている人の髪は稀にも見ないほどの美しい金色で、資料に貼り付けられた写真に映る利郷さんも、確かに綺麗な金髪だ…。

「もしかして…」

ふと、リツサの事についてあまり反応を示さなかった水原くんが、なにかに気づく。

「カドヤ、なんか閃いた？」

「推測なんだけどね……こいつもしかして……二人を嵌めたんじゃないか……？つて……」

アオイちゃんへの水原くんの返答が鍵となり、僕もその真意に気付かされた。

「……っ！そっか！キモトさんが告訴を取り下げなかったのは、カネイさんが嫌いなんじゃないやなくて、”キモトさん自身が脅されていた”つてことに……！」

同じ動画投稿者なら、自分よりも上の人間を妬まないわけがない。勘違いしたのをきっかけとして、自分の動画投稿スタイルを利用すれば、嘘を流すことも容易な上に、第一発見者であることを利用すれば、それよりも悪い印象をインターネットに流すことだってできる……！

パチパチパチ……

ようやく全ての謎が繋がったところで、突然、住浦さんがニヤリと笑いながらテンポの遅い拍手をする。

「ツハハハ……ようやくわかったかあ〜」

急に発されたその言葉に、僕の脳内はハテナでいっぱいになった。「お前らがうちの部下だったら、給料アップさせてやってるところだな」

「え、ど……どう言うこと……ですか？」

僕だけが混乱している中、周りの人々は「ああ〜」と納得のような声を次々に挙げる。

「やっぱり、スミウラくんは気づいてたわけね……」

「まあな」

水原くんが彼にそう言ったところで、未熟で白痴な自分が、住浦さんに騙されていた事にようやく気が付いた。

「あつ……じゃ、じゃあ！あなたは僕を試してた……つてことですか!?!」  
彼はあくまでも僕の新人研修として、自分が分かっていたことを、

あえて言わなかったのかもしれない。

全てはスプリミナルの探偵として、僕を成長させるために…。

「いや、単純にからかってただけ」

なんて思っていたのだが、住浦さんは即座に僕のその言葉を否定する。

「ええ…」

この人…本当に人を見下すようなことが好きなんだな…。

「日之出<sup>あ</sup>の公佳<sup>女</sup>の言動には少し気にかかるもんがあった。悠樹<sup>こいつ</sup>の言う通り、嫌いだったにしては言葉にどこか無念を感じるものがあった。だからこそ…」

「そこをつけ狙って脅迫していたんじゃないか…ってことですか…？」

僕は推理に続くつもりで言ったのだが、住浦さんから、少しだけ負の感情を持った目を向けられた。

「お前、続き言おうとしたときによく割り込んでくんな…」

「す…すみません…」

でしゃばってしまった新人をジッと睨む住浦さんに、僕は平謝りする。

にしても、まさか彼が、ずっと兼井さんだけではなく、日之出さんのことまでも、怪しんでいたなんて…。

自分をからかうためだけに嘘をついていたが、彼にも彼なりの中立的な立場という価値観があるのだろうか…。

しかし、何故そこまで日之出さんが脅されているという推理を僕達から隠していたのかは少し不思議ではあるな…。

「サイッターだよそれ！サイッター！」

なんて思ってた途端、優衣ちゃんが怒りの声をあげ始める。

「ざーっと思ってたけど、こいつ本当に屑だよ！私の好きな有名なダンサーさんもこいつのネタにされて、変なアンチがたつくさん付いたし、もーっ！」

興奮気味の優衣ちゃんは顔を真っ赤にして怒る。

「ユイちゃん…抑えて抑えて…」

その彼女を文華ちゃんがなだめると、優衣ちゃんはブスツと口を尖らせながら、近くの椅子に座った。

あんまり、動画投稿者のことは知らないけれど、そりゃあ、好きな人を貶されたりしたら、誰だって怒りたくなるよな…。

それは僕だって…。

…おっと、つい自分のちよつとした黒歴史を思い出しそうになつてしまった。

いけないいけない…。

「ミズハラ、裁判はいつだった？」

住浦さんが聞くと、水原くんは資料ファイルに貼ってあった付箋を見る。

「明日の10時から公判だつて」

「よし、俺はその時に動く。お前らは傍聴席にでも座つて、その屑の味方が来ないかを見張つとけ。俺はもうちよつと調べるもんがあるから、離脱する」

住浦さんは僕らに指示をしてから、意気込むように立ち上がり、机に置いてあるものと、水原くんや文華ちゃんが持っていた資料ファイルを全て取り上げた。

「ファイル借りてくぞ」

彼はそう言うのと、出口に向けて駆け出す。

「な…なにか他にわかつてることがあるんですか!？」

彼に聞くけれど、質問に全く応じることなく、住浦さんはC a f eを出ていってしまった…。

「なにも言わず行っちゃった…」

なんとも自己中心的と言うか、我がままに生きていると言うか…。

「スミウラくんはそういう人だよ…。ちよつと変だし、大切なことはあんまり言つてくんない。自分の手柄や利益のためにね」

水原くんがそう言うのと、その場にいる女の子達が同調して頷く。

「確かに、スミウラさんって結構やばいもんねえ…」

「変だし…ちよつと難アリな人ですよね…結構…」

「ついでに罪も相まって、激ヤバって感じだよね」

ドリンクを作っているあおいちゃんまで参加して…。

「そ…そんなに…?」

「二「うん。しかも結構クズ」」

「ええ……」

まさか、四人が声を揃える程にヤバイ人だとは…。

まあ、僕をからかうだけで真実を隠すような人だから、確かに変人ではあるが、クズという面はよくわからないな…。

「どれだけクズなのかってのはね、真実はよくわかってないけど…」

自分が疑問に感じていたことを解説してくれるためか、優衣ちゃんが口を開こうとする…。

「実はスミウラさんって…」

「はい、ゆずレスカとアイスコーヒーね」

しかし、ついに到着したフェイバリット特製ドリンクが、優衣ちゃんという言葉を遮った。

「あつー！ありがとっ！」

「いただきます…」

女の子二人はウキウキと微笑みながら、あおいちゃんから飲み物を受け取った。

「え、ちょよ！スミウラさんの事は!?!」

「ごめん！実は結構長いから…また誰かに教えてもらって！」

僕の疑問よりもドリンク優先なのか…。

まあ、まだ彼女らは高校生だし、ここのメニューはどれも美味しいから仕方ないか…。

なんて思いつつ、僕らの今日の勤務は終わったのだ。

住浦さんに振り回されたような初勤務で、正直疲れた。

今日なんとか掴めた真実が、明日の公判で兼井さん達を救ってくれることを、僕は沈み行く太陽を見ながらそつと願った…。



裁判所つてのは、面倒くささの固まりだ。

誰が悪いのか、誰が罪人じゃないのか、それを決めるためだけに、時に何十年もかけて話し合いばかりしやがる。

その結果、冤罪のままブタ箱にぶちこまれた奴は、そこから出てもひたすらに汚名を着させられつづけ、人を殺したのにぶちこまれなかつた屑は、罪の意識など忘れてのうのうと生きている。

リージエン国家になってから、法整備が進められたが、裁判制度はあまり変わっていない。

冤罪が起きるのは変わんねえし、俺らがいるお陰で、少しは簡潔に裁かれるようになったが、裁判による闇が全て払拭されることは未だにない。

ただ、ヤクザ並みの徴収方法してた放送団体やら、何人ものガキを轢き殺しておきながら、他人のせいにしてたような上級国民だけは、今の国家のお陰で、解体やら懲役やらに、少しは早く処分が決まるようになったらしいがな…。

「ツチ…めんどくせ…。」

この面倒の権化たる場所で、そんなことを呟いていたのは、俺だけではなかった。

「めんどくさがりなんだなあ…真犯人って奴は…」

少し離れた場所でめんどくさがっているそのリージエレンスに、俺は声をかける。

「あ…？」

奴はトカゲ類だけあって、眼光もなかなか鋭い。

「リサト ジュリだよな？カネイ キノミを騙し、ヒノデ キミ力を恐喝していた犯人は…」

俺は近づきながら聞くと、奴は顔色を変えずに応える。

「……本当だっついたら？」

ガアンツ！

ふざけた答えをした利郷の胸ぐらを掴み、俺はそいつの体を壁に打ち付ける。

質問を質問で返すような物は正直好きじゃねえ。

こちらが主導権を握っているのにもかかわらず、無様に奪おうとし

やがる弱者を見ている感覚に駆られるからだ。

まあ、今そう言うのは関係ねえか。

「なんだてめえ……俺は本当だとは言ってねえぞ？」

少々苛立っているのか、利郷の眼が黒みがかかり、ギョロリとこちらを見つめている。

恐らく、母親リージエンの特性が遺伝しているからこのようになっていたのだろう。

「シート……」

バリバリにやる気つぽそうな利郷だが、そういう気は更々ない俺は人差し指を立てて、奴に静粛を求める。

「お前さあ……捕まりたくねえんだよなあ……？」

俺が聞くと、利郷は首をかしげる。

奴がなにがなんだかわからないような顔を浮かべる傍ら、俺はポケットの中から、今時古い有線カナルイヤホン付きのMP3プレイヤーを取り出した。

「ちよつとこれ聞いてみてくれや……」

そう言つて、俺は奴の耳にイヤホンを入れ、プレイヤーのスイッチを押した。

イヤホンから流れてきた音声を聞いた利郷は瞳孔をかつ開いて驚いている。

ちなみに、いまMP3にはこんな音声が流れている。

「私は……あいつを絶対許しません……。私を殴ったあいつを……カネイ

キノミを……！」

あくまでも一部分だが、勿論、声の主は日之出 公佳、本人だ……。

「これ……」

レコーダーから流れた音声に利郷が食いついたところで、俺はプレイヤーの電源を切る。

「お前が脅迫した女……元々カネイへ嫌悪があったみたいでなあ……」

俺がそう言うと、驚きのまま利郷はそつとイヤホンを外して手渡す。

「陥れようがなんだろうが、あの女は別れたい。それで、お前はカネイ



を地獄に叩き落としたい…」

奴から生唾を飲んだ音が聞こえる。

ようやくここから本題だ。

「どうだ？こちらの法廷がひっくり返るような代物、50万で取引してやるけど…？」

俺が奴に話しかけたのはそういう理由だ。

個人的利益のため、俺は利郷に取引を持ちかけた。

いろいろと理由はあるが、これが俺のやり方だから…。

「正気か…？」

さすがに利郷も怪しむか…。

だが、案ずることはない。

「こつちの方が…お前の立場上困らねえだろ…？」

単純、このボイスレコーダーを法廷で使った方が、こいつにとつてのメリットになり変わるのだ。

「う…」

やはり、安い買い物じゃないから迷っているな…。

「支払いはどんな形式でも良いぜ？小切手だろうと、なんだろうと、俺は利益さえ出りや良い。お前が望んでいるように書きやいいのさ…」

トドメに俺がそう言うと、利郷はようやく眼の色を、良い方向に変えた。

「……わかった」

利郷はポケットの中から白紙の有価証券（小切手）を取り出し、そこに口座や支払い人の名前等を書き、俺に渡した。

これで全ては計画通りに進んだ…。

「まいどあり…」

俺はボイスレコーダーを渡すと、利郷は笑いもせず、適当に頭だけを下げて、法廷の中へと足を進めた…。

計画が完了したことで、俺の手元に比較的デカイ利益が入ることが確定した。

これで、後は裁判が上手いこといきや、スプリミナルとしての仕事も完了だ…。

「…傍聴席に行つとけつて、覚えてなかつたか…?」

だが、悠樹、哲哉だけは、いつも予定を狂わせるような行動をしやがる…。

「なんでここに…?」

俺が聞くと、奴は目障りな程に混乱している。

「どういうことですか…:あれ、なんなんですか!?!」

ガヤガヤとうるさい…。

正直、郷仲にはちゃんと『俺のやり方でやる』と言つたのだから、新人ごときが口を出しても仕方がないだろう…?

「なんか渡してましたよね…:もしかして…カネイさんが不利になることを…!?!」

怒っている新人が近づいてくる。

この五月蠅い勘違い馬鹿を無視し、俺はこいつの横を通りすがつてこの場を去ろうとするが、こいつは遂に俺の肩を掴みやがる…。

「なんか言つてくださいよ…:スプリミナルはこういう場所なんですか!?!こんなの本当のこと知つてるカネイさんが可愛そうじゃないですか!」

バキツ!

ほら見ろ。

あまりにも畳み掛けるもんだから、つい俺の怒りが弾けてしまつた。

「素人が黙つてろ…」

俺は、俺が殴つた新人の胸ぐらを掴んで、顔を近づける。

「俺は綺麗事してんじやねえんだよ…。俺は全て自分の利益のために動いている…。この世は金、名声、世間、全てを篩ふるいに掛けて如何に自分にとってメリットになるのか、それを考えなければ生き残れない…」

新人に伝えている俺の言葉こそが、この世界の摂理だ。

今も頭の中にこびりついている、義務教育と言う社畜製造機関の呪いに翻弄され続ける俺たちは、どれだけ普通に生きていても、いつかは溢れ落ちて墮落していく…。

だが、墮落せずにしがみつけれられる人間は、授業で聞いた「他者への思いやり」やら「年功序列」なんかよりも、結婚やら友愛すらにも含まれる「自分自身の利益」が大切であることに気づくことで、なんとか生きているわけだ。

それもわからず、ただ目の前の人間を救いたいなんぞと言う、こいつの発言には、心底、反吐が出る…。

「スプリミナルに来て、たかだか数日のペーパーが調子のもつてんじやねえよ…」

奴の胸ぐらから手を離し、俺はため息をひとつ付く。

「ああ…一気に面倒になったわ…俺、ちよつとこつから出らあ…。なにかしてえなら、先に勝手にやつとけ…」

唾を道に吐き捨てるように言葉をこいつに放り、俺は歩き出す。

心底こいつには呆れる。

考えが浅はかすぎるから、ここからスプリミナルに残るのは無理だろうな…。

「…それでも…」

声が聞こえて振り向くと、新人は殴られた頬を拭いながら立ち上がっていた…。

「それでも…あんたは探偵なのか！」

一丁前に、強がつて遠吠えすること位はできるんだな。

「たぐんてくいでえくす…」

その声に応えてやるように、俺はニヤリと笑いながら、その場から歩きだした。

負け台詞を吐けるなら、まだ強くなれる筋道はあるわけだな…。

あとは、こいつに噛みついたまま剥がれないような『個人的利益』がありや、少しはやつてけるんじやねえかな…。

…にしても、殴ったときの感触が、いつもよりも違っていたのは気のせいだったのだろうか…。

## 5—4 『一番のSと越権裁判』

殴られた頬が痛む…。

無効化の特異点の筈なのに、何故痛みを感じているのかは不明だが…。

久々にジンジンと痛む頬を撫でながら、僕は法廷の中へと入る。

傍聴席は、カテキンが公判に出るといふ興味からか、何故か若者の方が多く、今通りすがった人の会話からは『本当にカテキン殴ったのかな?』と言う疑問の言葉でさえも飛び交っていた。

膨張室で裁判を見るのは、そんなに難しいことではないと聞いたことはあるが、カテキン目当てだけの人間がいても良い物なのだろうか…。

「おかえり、ちよつと長かったね。便秘ぎみ?」

席に戻ると水原くんが少しからかい、僕は違うよと苦笑いで返しながら座る。

「ハア…」

刹那、思わず口から漏れてしまったため息を、水原くんは聞き逃さなかった…。

「…どうかした? ほっぺた赤いし…」

彼は少し観察力が鋭いから、こんなのもすぐ気づくんだな…。

隠しているも仕方がないだろうから、僕は正直に住浦さんがなにをしていたのかを話すことにした。

「スミウラさんが…ちよつと…」

「…ああ。差し詰め、利益のある方に行つた…とかかな?」

水原くんが言葉を紡いだことに、僕は驚いた。

まるで、言おうとしていたことを、予測していたかのようなだった…。

「知ってたの…!?!」

「うん。あのスタイルを貫いてるのがアイツだからさ…。そうするだろうなーとは思ってた」

何も知らないから驚く僕に対して、水原くんは呆れるように、一つ欠伸をする。

彼の態度に少し凹むが、粗方知っているのならば、話は速い…。「……止めないといけないよね…アイツのこと…」

住浦さんの暗躍を止めるために、僕は立ち上がろうとしたが、彼は僕の腕を掴んで止める。

「そろそろ裁判始まるよ。座らないと…」

「でも、これじゃカネイさんが…!」

公判が始まる前にここから出て、住浦さんを止めないといけないだろうに……。

「うーん……心配する気持ちはわかるけど、恐らく大丈夫だと思うよ…。スミウラだし…」

水原くんの持つ謎の余裕に、僕の中にある疑問や不安が湧き出る。

「そ…そんなこと…」

カン！カン！

水原くんに反論をしようとした所で、ついに小槌が鳴ってしまった…。

「静粛に」

たった二回の打音が響いただけで、鶴が大声で鳴いたかのように、傍聴席のざわつきが一瞬で静まった…。

裁場をよく見てみると、純人類である裁判長を中心に、証人も被告人達、全員がそれぞれ準備を終えて、そこに揃っていた…。

公判が始まってしまつては、もう動けない。

水原くんの言う通り、行く末を見守るしかないか…。

「これより、ヒノデ キミカさん暴行事件を巡るカネイ キノミさんの裁判を始めたいと思います」

如何にもと言いたげな程、尺の高い席に座る裁判長がそう言うのと、僕らを含めて大勢の人が立ち上がる。

よろしく願います。

その言葉が響くと共に、ついに兼井利己かねいぎのみ暴行事件の裁判が始まる。緊迫のなか、裁判長の指示で兼井さんが被告席から立ち上がると、

まずは様々な確認と共に、検察側が状況説明と本人確認をはじめます。その内容は、きのう被害者側から確認したものと同じ、兼井さんが日之出さん押し倒したところで店員の利郷さんが見つけたというもの。

弁護側の状況説明も、加害者側の確認と同じく、遊んでいたら日之出さんが転んでしまい、それを勘違いさってしまったと言うもの。遊んでいた理由として、日之出さんの酩酊状態が笑い上戸の遊び好きという説明がしつかりと成されていた。

ここまででは僕らだけはもう知っていることだ…。

「では、証人を」

裁判長がそう告げると、第一発見者である利郷さんが証言台に立ち、証言を始める。

「自分は暴力だと判断し、通報させてもらいました。それが事実ではないという証拠がないなら…それで良いと思ってます」

たった数十文字で証言を終えた利郷さんだが、裁判長はなにも気にせず、裁判の進行を進める。

「弁護側、なにか反対尋問は？」

弁護士の方が立ち上がり、利郷さんに向けて尋問を始める。

「利郷さん。さすがに尻餅をついただけで暴力と断言するのは、少々無理矢理なのではないでしょうか？」

弁護士が聞くと、証人はなにも動じることは無く、返答する。

「それは…最近、色んな形のハラスメントがあるんで…」

「確かに、この世界にはまだ沢山のハラスメントがあります。恐らく、本当だったときのための予防策にと思ったのではないのでしょうか？」

利郷さんの言葉を補足するように、検事側が弁明をする。

「しかし…それだけではあまりにもその場の感情によりすぎなのでは…？」

弁護側は少しムツとしたのか、僅かに踏み込んだ事を言うと、裁判長が目の色を変える。

「弁護側、そちらも場によりすぎとも捉えられます。ここではそのよ

うなことは慎んでください。他にはありますか…?」

質疑を切るような発言によつて、この質問は終了し、弁護側は渋々違う質問をして尋問を続けた。

その後も同じような感じで、まるで弁護側をひっくるめて誘導しているかのような尋問が続く…。

なにか検事側が結託しているような気はしてしまいが、反対側としての意識過剰的な思考が働いているのだろう。

それに、法廷において、僕ら傍聴人は過度に裁判に踏み込むわけにはいかない…。

「利郷さん、ありがとうございます。それでは、もう一人証人を…」  
自分がどうすれば良いのかを考えている頃には、もう一人目の尋問が終わり、日之出さんが証言台に立っていた。

「私は…：検察側、弁護側、方法の説明を指示し、最終的に出た結果に、全てを託します」

彼女の証言はそれだけだった。

利郷さんよりも遥かに少ない言葉だが、それでも尋問は続いている。

「ヒノデさんは…証人とは恋仲関係と聞いたのですが…」

「これ以上は申し訳ないですが答えられません…。私は、説明を指示することしかできません…」

その後、弁護側は似たような質問を幾つかしたが、日之出さんはその一点張りで、その状況説明が、合っているとも間違っているとも、彼女は言わない。

「黙秘権…ですか…」

僕が思っていたことを偶然、検事がポツリと呟く。

「自由の尊厳のため、黙秘は許可しています」

黙秘権の乱用に傍聴席が少しザワつきはじめた中、裁判長がそう言った途端、法廷内はスンと静まる…。

「失礼…一応、続きを…」

裁判長の指示で、検察と弁護士は、また尋問を始める…。

しかし…今も尚、彼女の事を信じている僕にとって、この光景はど

こか複雑な気持ちだ…。

利郷は住浦さんから買った”冤罪をでっち上げられるであろう証拠物品”を手中に納めている上に、検事と裁判を仕切る物達の腕が立っている物だから、もう兼井さんが一番悪いという雰囲気になりつつある…。

「こんなの…間違ってるよ…。」

もしも、この世に法廷侮辱罪がなければ、今すぐにもここから飛び出して、検事達に兼井さんは悪くないと訴えたい。

傍聴席がカテキンの裁判に湧いている中、そんな僕の思いを汲み取ったのか、隣で膨張していた水原くんが、咄嗟に僕の腕を掴んだ。「ここで声を荒げちゃだめだ。明確な証拠がない以上、声を上げれば一発で退室処置になるし、今後、スプリミナルの立場も狭くなる…。」

「でも…」

それでは、兼井さんが冤罪のまま終わってしまうのではないか。

水原くん自信も、兼井さんが冤罪であると言っていたではないか。

「君がしゃしゃれば、全てが水の泡だぞ」

そんな反論をしようとする前に、水原くんが言葉で僕を遮った。

「裁判は…この世で唯一、法という大きな存在の下で裁かれる場所なんだよ…。僕らのような、法を無視して生かされているような人間が、証拠も無しに声をあげれば、罪無く普通に生きていた筈の人間を、殺すかもしれないんだよ…。」

目を合わせて中立的で冷静な返しをする彼に、言葉でさえも貧弱な自分は、なにも反論をすることはできなかった…。

この状況のなか、自分が動いてしまえば、まだ冤罪から復帰できる可能性のある兼井さんが、さらに不利になる。

最悪の場合、懲役刑にもなりかねず、動画投稿サイト事務所も多くの負債をかかえる可能性だってななくはない…。

そんな想定をした途端、自分は立ち上がろうとはできなくなってしまう…。

「それでは、第一審の判決に入ります。被告人…なにか証言は…？」

自分が自分の心と葛藤している中、いつの間にか裁判が終わりかけ



ていた…。

「……特にありません…」

そう言って頷く兼井さんの目の色は、遮光性の黒ペンキを一面に撒かれたかのように、光が失われていた。

自分達が不甲斐ないばかりに、第一審が有罪で終わると思うと、申し訳ない気持ちしかない…。

あんなのに騙されなければ…きつと裁判なんか立つこと無く、なんとかなっていたはずなのに…。

もしも自分が天才だったら…こんなに未熟で終わるはずはなかったのに…。

「……それでは、第一審の判決を…」

裁判の終わりを告げるように裁判長はついに小槌を手取る…。

もう、僕らにできることは無いのか…。



バアンツ!

「異い議ありいいいっ!」

裁決が出されることによる緊迫を切り裂くように、扉が勢いよく開く音と空回りする程の大きな声が、法廷のなかに鳴り響く…。

「証人は嘘をついている!」

扉の中から現れたのは、フードを被って目元を隠した、慎重の低い一人の男性…。

見覚えのある銀色のラインが入ったパーカーとパンツを着込み、その中には黒いYシャツと、ラインと同じ色のネクタイ…。

「スミウラさん…!?!」

「やっと来たか…」

急な登場に驚く僕と、反対に待ち焦がれていたかのようにため息をつく水原くん。

そして、思わぬ人間の登場で法廷内は一気にざわつきが広がる…。「なんて、言ってみたかったんだよなあ〜一度…」

彼はニヤニヤと笑いながら、傍聴席からの驚きの声を掻き分けて、証人台へと歩いていく…。

警察特殊認可特異行使結社の正装と、その人を嘲るような声は、まごうことなく彼だ…。

「誰ですか貴方は…!?!」

勿論、驚いていたのは傍聴席だけでなく、裁判官の人々も目を見開いていた。

「裁判長。彼は武装警察公認の秘密結社の社員です。弁護側として、証人の申請はしてははずですが…?」

弁護士が冷静に裁判長に報告をしている。

弁護側の証人がなかったのは、そう言うことだったのか…。

「ご存じありませんでしたかあ? 裁判長…。ああ、失礼。元々俺たちが公に正体を明かしてないからですかねえ」

法廷だと言うのに、彼は相変わらず、お高く止まって人を馬鹿にしているような口調だ…。

「証人の方。お名前は?」

対する検事が、住浦さんに質問をする。

「悪いな。存在が公に出ていない限り、スプリミナルは基本的に名前出すのダメなんだわ」

何気なく、住浦さんがスプリミナルという名を出した瞬間、傍聴席のざわつきがさらに大きくなる。

スプリミナルは都市伝説ではなかったのか、本当にそんな組織があったのか、神聖な司法の場でなんの冗談だ、等といった様々な憶測や驚愕の声が広まっていく。

カン!カン!カン!カン!カン!

このざわつきを止めるために、裁判長がやかましいほどに小槌を何度も叩いた事で、ようやく傍聴席は静かになった…。

「わかりました。それでは弁護側の証人の方、よろしくお願いいたします」

司法の場の下、検事はスプリミナルのような秘密組織にも、冷静かつ寛容に接してくれるようだ。

「んじや、早速証言を始めさせてもらおう。まず、さつき言った通り、証人のヒノデとリサト。彼らは嘘をついてる」

笑みを含めつつ、住浦さんが証言を始めると、証人の二人は瞳孔を開いて彼を見つめる。

「カネイから依頼を受けた俺達は、双方の様々な情報や証言等を集め、改めて情報を整理した。今回の事件は、様々な偶然が重なったがため、証拠が少なくて苦戦した。しかし、その少ないヒントを便りに推理した結果、今回の犯行の動機や方法がよくわかった…。証拠として、俺達がかき集めた書類や証言などの手がかりが集められたファイルを出しておこう」

彼はそう言つて、弁護士に僕らが集めていたファイルを渡した。

あの人がファイルを持つていったのは証拠として提出するためだったか…。

「傍聴席や裁判官のために、ファイルに入っている証拠を掻い摘まんで紹介しようか。まずは、事件当時になにか皿や瓶酒よりも重いものが床に落ちた音が聞こえたという客からの証言。次に彼女が酒に酔った時に”笑い上戸の遊び好き”になるという友人からの証言。さらに、事件後にヒノデが動画投稿サイトの事務所に掛け合つて、カネイの処遇を軽くしようとしていたつていう事実。それで、数日前に会社の物影でヒノデ自信が『助けたかった』と呟いていたという事務所職員からの証言…」

束ねられたファイルに入っている証拠の紹介に紛れ、僕らが知らない事実も彼の口から明らかになつていく…。

「そういった、証言やらなんやらが、この中には詰まっている。このファイルには、叩けば叩くほど、ヒノデ キミカが”なにかに怯えている”と言う推理が出来る様々な文書が、詰まっているわけだ…」

彼の言葉を聞いて驚いた兼井さんが、申し訳なさに俯いている日之出さんに振り向く。

「それだけじゃない。ファイルの中には、証人のリサト ジュリが炎上系の動画投稿者『リツサ』であることの証拠だつてある。インターネットから集めたリツサの素顔写真があるんだが…それがどれも”

証人と一致していた”んだよなあ…?”」

住浦さんは証言をしながら利郷さんを睨むと、彼はバツが悪そうに目線を反らしていた。

「それらを全て集めた上で、今回俺が推理したのはこうだ」  
笑みを浮かべる彼は、ついにこの事件の推理を彼らに突き付け始める。

「証人である彼女は、確かにカネイに押し倒されてしまった。しかし弁護士側の説明であったように、証人のヒノデは笑い上戸のため、理由は”遊んでいたから”ということになる。カネイにも彼女にも悪意はなかったため、勿論このような裁判をするつもりはなかった。しかし、彼女は当時店員をしていたリッサ側から脅迫を受けてしまい、今回のような裁判へと至ってしまった…」

住浦さんの推理を、多くの人間がセメントで固められたかのように硬直して聞き入っている…。

「脅迫の理由は、自分のチャンネルを売り出し、カテキンと言うデカイ山を崩すためだ。人気のコンテンツが最低な理由でオワコンになりや、そつちに流れ込んでくるかも知れねえからな。こうして、この事件は被告人の暴行ではなく、店員の計画的な脅迫による物だった…ということだ」

固唾を飲んで聞いていたその推理は、この法廷内の騒然を再燃させる。

法廷が始まる前から知っていた僕らは驚きはしないが、カテキンとリッサという二人の投稿者へのイメージを知っている人々の頭の中では、パーツがカチンと填まっていたようだった。

「と、推理できるんだが…どうだ？」

傍聴席が沸き出す中、住浦さんがリッサを睨み付けると、彼は目線を反らし、退路を失った彼の顔から、一筋の汗が流れる…。

「証人！証言と違うようですが!」

思わぬ新事実を聞いて一驚する裁判長が、冷静さを欠いて日之出さんに聞く。

「…本当なんて言っていない…。私は、”指示をする”とだけ言った

だけです……」

応える日之出さんの目から、少しずつ涙が滲み出してくる……。

「彼の言うことは一言一句本当です……。私は、あの人に脅迫を受けて……それで……キノミくん……酷いことを……」

少しずつ嗚咽が漏れだしながら、ついに彼女の目からは大量の涙が流れ出てきた……。

彼の推理が真実であるという証明は、必死に涙を拭いている彼女の姿が物語っている……。

「てめえが泣くな。泣きてえのは、演技でもお前に裏切られたカネイの方だろうが」

その姿に苛立った、住浦さんは日之出さんにきつく当たる。

少々キツイような気もするが、冷静に考えてみれば、確かに日之出さんの行動によって、兼井さんも傷つき、切羽詰まっていたわけだから、妥当な気はしなくもない……。

「待ってください。ヒノデさんの発言の証拠はあるのでしょうか？ 双方の発言が真実であると言う事実は何？」

ふと、検事が住浦さんに質問する。

「彼女の本当の声を聞いたのは俺だけだ。だが……その彼女が『本当だ』って言うってんだ。それは事実になるだろうか？」

「いや、しかし……それでは、証拠不十分になるのではないのでしょうか……？」

確かに、住浦さんの言うことは本当ではあるが、法廷の上では証言だけではなく、確定的な証拠がないと、簡単には結果が揺るがないのがルールだ……。

「……裁判長……。証拠を提出します」

すると突然、利郷さんが手を上げる。

「嘘をついているって言う……証拠を……」

彼はそう言うのと、ポケットの中から細長い銀色の電子機器を取り出す。

「あれ……もしやボイスレコーダー……!？」

取り出されて初めてそれが何だったのか気づいたが、彼の持ってい

るものは紛れもなく住浦さんが取引をしていた物。

それに、もしもこちら側の不利になることが入っているとしたら……！

「ああ…そういうや、そうだったなあ……」

取引を持ちかけた当人は呑気に笑っている。

法廷に漂っている緊張と不安が降り混ざっていく中、利郷の手によって、そのボイスレコーダーは再生されてしまった……。

「いやいや、お前が嫌いな彼氏を、ちゃんと裁いてやるためだよ。証言は沢山ある方が良いだろう？ どうだ？」

「……わかりました。日常的なことからは何かから話します……」

録音され始めてたのは、僕らが日之出さんの家に来て、住浦さんが二人で話し合うことの提案をした時からだった。

「ほら！ ヒノデさんがそう言っただけ！ 新人はとつとと出てけ！」

「わ…わかりましたよ……」

「聞き耳とか立てんなよ？」

「それも……了解です……」

自分の声が法廷に流れているのってなんか恥ずかしい……。

チラリと横を見ると、水原くんが僕を<sup>からか</sup>揶揄うような目でこちらを見ていた。

「これの……どこが証拠でしょう？」

「黙って続きを聞いとけ」

住浦さんは裁判長の質問にすらも、バツサリと切るように冷たく返す。

「それで……本音は？」

「さっきも言った通りです……私は別れたかったから……。だって、彼は一時期ヒモみたいな感じだったこともあったし……そ、それに、勝手に高いカメラ買ったことだって！」

「そんで？ お前は何がしたいんだ……？」

住浦さんが愚痴の流れを切るように聞く。

「私は……あいつを絶対許しません……。私を殴ったあいつを……カネイキノミを……！ なんと少しでも、あいつを！」

ここまで聞けば、彼女が本当に兼井さんを恨んでいるように聞こえる…。

〈わかったわかった…。それで？〉

しかし、日之出さんを疑い続けている住浦さんは姿勢を崩していない。

〈全部嘘なんだろう？俺らは内情知らないんだから、嘘について騙すなんて容易い。それに、別りたい位なら〉お前が俺たちに助けを求めないわけがない”んだから…〉

その言葉に、僕と当時の日之出さんは驚愕していた。

日之出さんが助けを求め…？

求めてきたのは、兼井さんじゃなかったのか…？

〈カネイに面会に行ったら、アイツは一言目に『依頼を受けてくれてありがとう』じゃなくて『都市伝説じゃなかったのか』と言っていた。なんとなく不自然だと思っていた俺は、カテキンが所属している事務所に行つて適当な書類をもらった。それを依頼書と筆跡鑑定をしてみると、筆跡がアイツの物とは一致せず、事務所のカメラマンとして働いていたお前の物と一致したんだ〉

レコーダーから流れる住浦さんの言葉に、やっと気づかされた。

都市伝説じゃなかったのか、なんて台詞は、依頼書を書くよりも前に言う台詞だろうし、その後には依頼を受理してくれたことの感謝を言う方が自然だ。

しかし、あの時の兼井さんは、その台詞を述べた後には感謝を述べず、ただ驚いていただけだった。

スプミナルの存在が公になっていないが故、気づかなかった…。

〈こういう書類から足がつかめるってのはよくあつてな。恐らく、お前は表面上でカネイを騙して、裏ではそいつを救うために俺たちを呼んだ…と言うことだろ…？〉

録音の中の彼が言葉を突き付けると、十数秒ほど沈黙が続いた。

〈はい…〉

静かな空間の中、沈黙を破ったのは、日之出さん自信だった。

〈…お前がカネイの無罪を主張しないのはなぜだ？言ってみろ…〉

〈だって…仕方なかったの…。あの人が今でも大好きだから…私…〉

〈返答がハッキリしていない。俺が知りたいのは、何故主張をしないかだ…〉

ストレートに物を言う住浦さんに対し、少しずつ涙声になっていく日之出さん。

〈脅迫…されています…。リツサって言う投稿者を…。伸ばすために…〉

リツサの名が出た途端、カテキン目当てで来た傍聴人の驚きが木霊する。

〈脅迫内容は？〉

〈カネイの有罪を主張しないと…彼を自殺に見立てて殺すって…〉

殺害予告じみた脅迫内容を聞いた瞬間、傍聴席だけではなく、法廷全体がどよめき始めた。

〈それで…お前はとうしたい？〉

〈救いたい…キノミくんを…助けたいんです…〉

日之出さんの声の後、コーヒークップのような物が落ちて割れる音がレコーダーから響く。

〈お願いです！お金でもなんでも出します！だから、キノくんを助けて！あの人は悪くないんです！私ができなかったことを！どうか！どうか…っ！〉

彼女の悲痛な叫びが響くと、法廷内のざわめきが一瞬にして静まる…。

〈引き受けた…〉

日之出さんの懇願に住浦さんが答えると、レコーダーの音声はその仕事を終えた。

このレコーダーは、法廷がひっくり返るような白物と言っていた。その言葉は”兼井さんの主張が有利になる”という点においては、まさに本物となったようだ…。

「このように！彼女が証言しているボイスレコーダーもある！この事件の犯人が誰か…おわかりですか…？」



ボイスレコーダーの再生が終わった後、法廷内を沸かせるようする住浦さんは、汗滲ませる利郷さんを睨んだ。

「今回の事件の真犯人は……リサト ジュリ……」

冷たく突き付けられたその眼光に、利郷さんは焦りを口から漏らし始める。

「ち……違う……違う！俺じゃ……俺じゃないっ!!」

首を横に振り、大きな声で喝れの主張を否定しようとするが、その途端、傍聴席から大量のブーイングが巻き上がる……。

「真犯人は決まりましたね……。脅迫の罪で即刻逮捕を……」

冤罪裁判にならなくてすんだからか、裁判長は薄ら笑いを浮かべつつ命令をすると、法廷内で待機していたガードマンの二人が利郷さんの腕を掴んだ。

捕まってしまった彼は、一気に自分の目から光を失うと「なんでこうなるんだ」と小さな声で呟き、ガードマンに引きずられていく……。

「終わったか……」

水原くんがポツリと呟くと共に、傍聴席の人々からも、真犯人についてや兼井さんの冤罪についての話題がポツポツとでてくる……。

これで、全てが収まったのだと思うと、僕自信も少しホツとする。

お陰で、兼井さんも日之出さんも助かったわけなのだから。

住浦さんに騙された利郷さんが少々かわいそうにも思えるが、これで依頼は完遂か……。

## 5—5 『一番のSと越権裁判』

「…おい。なに勘違いしてんだよお前ら…」

住浦さんから唐突に発せられた一言に、ざわついていた傍聴席やが静まり、ガードマンが足を止める。

「俺はまだ、犯人の名前を言い終えてねえぞ？」

「なに…!？」

住浦さんの言葉に、三度目の騒然が、また法廷内を駆け回る。

今回は今までの物よりも大きく、そしてハテナの多いざわめきだ…。

「ど…どういうこと…!？」

「まさか…二重にトリックが…!？」

てつきり利郷さんが全ての犯人だと思っていた僕と水原くんも、その発現には驚きを隠せなかった。

「ボイスレコーダーの声をしつかり聞かなかったか？ヒノデは”リツサ自信が脅迫をした”だなんて一言も言ってなかったんだよ…」

住浦さんの言うとおり、ボイスレコーダーのやり取りを少し思い出してみると、確かに彼女は『リツサという投稿者を伸ばすために脅迫を受けた』とだけしか言っていなかった…。

今回の事件はそんな言葉による思い込みや見落としが多いな…。

「つまり、その犯人はリツサの大ファンか、リツサの身内の可能性が高い…：：：だろう？」

住浦さんが傍聴席に向けて言うと、なるほど…と閃きの声が多く上がる。

そうか、カテキンさんに日之出さんというカメラマンであり彼女であるバックがいたように、リツサにもなにかしらのバックの人間がいたということか…。

「つまり…：：：」

住浦さんの推理に多くの人間が固唾を飲んで見守る中、彼はついに、その真犯人である男を指さした。

その指の行き先に居るのは、僕らが想像していなかった人物だった…。

「真犯人はリサト ジュリじゃないよ。お前だよ。裁判長」

導き出された答えに、指された本人も含めて、その場にいる人間は驚きのあまりに声を失っていた。

「はあ…？な…：なにをバカなことを…っ！これは立派な法廷侮辱だ！」

「侮辱してんのはどっちだ？さつきから薄っぺらい誘導尋問しやがって…。」

目に見てもわかる裁判長の焦り様に、住浦さんは苛立ち混じりに彼に反論する。

「な…なに…？」

「調べはついてんだぜ…？裁判長。あんたの姓は、今宇宙人みたいに捕まれてるリサト ジュリと同じ『利郷』だってこと…。そんで、てめえが何度も裏で脅迫をして、裁判の早期解決を仕立て上げたって噂もな…？」

そう言えば、昨日も水原くんが第一発見者について調べていた時、利郷樹里の父親は裁判所で働いていると言っていた。

それに、裁判長を見ると、とかげのように少し釣っている目元が樹里さんとよく似ているし、リージェレンスは人間とリージェンのハーフだから、親子だと言われても自然だ…。

「なにを根拠の無いことを…」

「ああ、脅迫したことは根拠はねえなあ？でも…リサトだってことは事実だろう？」

言葉で口を紡がれてしまった裁判長。

それを横目に住浦さんは、今度は日之出さんに目を向けた。

「ヒノデさん。脅迫してきたのはどっちだった？ジュリの方か？それとも、あの老害予備軍か？」

笑顔を作りながら、住浦さんは日之出さんに聞くと、まだ涙を両の眼に貯めていた彼女は、住浦さんと同じく、裁判長に指をさす。

「法廷が始まってから…ずっと…そうだと思ってきました…。脅迫の

電話を受けた声が…全く同じだったので……」

涙声の日之出さんから聞こえる言葉は、住浦さんの的確な推理が終えた今、真実と信じるには容易すぎる程だ。

「……っ！裁判長！真実はどうなのですか!？」

彼女の行動は、弁護士的心も動かし、彼は裁判長を攻め立てると。

「そんな物……でたためだ!」

それでも尚、自分の罪を否定する裁判長に、傍聴席からフツフツとブーイングが湧き出てくる…。

住浦さんも、彼の態度にはさらに苛立ちを見せている。

「でたためじゃねえよ……これを証拠として提出する!」

怒りと共に彼は、裁判長の目の前に、たった一枚の薄く小さな紙を突き付けた。

「それは……?」

最早、置物となりつつあった検事が彼に聞く。

「これは、リサト ジュリが購入したこのボイスレコーダーの代金だ。50万円。これの小切手の口座名義は……リサト キュウドウ。お前の名前だ……」

彼の眼光が鋭く突き刺さると、裁判長は苦虫を潰したような顔を見せる…。

「改めて詳しく解説してやる。ここに来る一日前、つまり兼井から依頼を受けた後のことだ。様々な聞き込みを経て、リサト ジュリのことが怪しくなった俺達は、様々な場所に掛け合ったり、データを集めたりして、リサト自信の身元を調べていた。すると、ジュリの父親は、裁判長としての仕事をしており、そこで数多くの裁判を見守ってきたとある……。その親父の名前は『利郷 灸堂』だったわけだ」

住浦さんは得意気に言うけど、正直データを集めたのは僕と水原くんなんだがな…。

「あー…利郷の父親の名前か…確かに調べてた…」

「ミズハラくん…忘れてた…?」

「いや、完っ全に…ノーマークだった…」

まさか、調べてくれていた張本人ですら、利郷さんの父親には目を

つけていなかったとは…。

それ程、父親と言う立場は忘れやすく、尚且つカモフラージュがしやすい立場だったのだろうか。

「ちなみに、小切手の取引については、俺はなにも誘導も脅迫もしていない。ジュリのやつがこれを購入するとき、勇気を出してこの名前を書いたんだ」

弁護士が住浦さんから小切手を受けとると、それを書画カメラで写した。

小切手の口座名欄には、確かに『利郷 灸堂』という名前が記されている…。

「二応、口座についても少々調べさせてもらったんだが…。リツサの口座には500万円以上の預金があり、必ず払えと言っても過言ではない状況だ。しかし…何故、アイツはお前さんの名前を書いたのかなあ…?」

そう言つて睨む住浦さんの眼が、完全に犯罪者を睨む冷たい物に変わる。

眼光で咎められている裁判長、利郷灸堂は、傍聴席からでも目に見えてわかるほどの焦り様で、顔から大量に汗が吹き出し、瞳孔も全開だ…。

「バカな…。そんなもの偽造だ！それに彼はリージェレンスだぞ！私には人間だ！息子なんていない！」

それでも認めようとしないう裁判長に、傍聴席からブーイングが上がりはじめめる。

それでも否認しつづける彼の姿は、愚か極まりなさすぎて見るに耐えない…。

「だいたい…何がスプリミナルだ！公にもなっていない存在が、神聖な法廷の場を荒らしてはならないだろう！それに…血の繋がりに…」

「いい加減にしろよ糞親父っ！」

拙い取り繕いをし続ける父親の姿に、ついに息子の怒りが爆発し、法廷内が一気に静まり返った…。



未だ、罪を認めようとしないう彼の険しい表情が、僕の中で苛立ちを燻らせている…。

「俺は…俺はあんたにずっと抑えられ続けてきた…」

一切の非を認めない裁判長の態度に、利郷さんは怒りで拳を震わせている…。

「本当は…俺は、ゲーム実況だとか、歌ってみただとか、そう言う、誰かを楽しませる動画を投稿して…いろんな人に俺を見てもらいたかった…。なのに『お前なんかこっちの路線が売れるわけない』なんてバカにした後に、アカウントを管理して、広告収入まで奪って…終いには俺に人を叩き続けるなんて言いやがって…」

彼は、少しずつ涙が溜まっていく言葉を、ナイフのように父親に突き立てる…。

「そんなことない…それはお前が選んだ道だろっ!! 愚かな道を選びおって…! 私はお前のような嘘を並べるような奴は知らん!! それに、そのボイスレコーダーだって、言わされているに決まっている!」

ついには開き直り、利郷さんを揶揄するような言葉を発した裁判長の態度を見て、ついに僕の中の何かがキレた…。

「水原くん…ごめん…」

苛立ちが先走る前に、僕は彼に断りだけをいれた。

「さつきは、喋るな」みたいなこと言っちゃったけど…。この状況なら、声をあげてあげた方が依頼者の助けになる…」

彼の態度が耐え難くなった僕を見ても、水原くんは止めようとしな  
い。

「いつてきな…。ぶちかましてこい…」

むしろ、彼は僕にゴーサインを出した。

ここまで腹を立てたのは久しぶりだ。

僕は自分の素性を知られぬよう、静かにトランスをしてフードを被り、傍聴席の上に立ち上がる。

「ヒノデさんは…嘘なんかついてない!」

僕が声を上げた瞬間、大勢の人間の視線がこちらに向く。

その無数の目が、まるで銃口のように、急にドツと緊張感が身体か

ら涌き出てきた。

「誰だ貴様は……！」

しかし、息子を辱しめ続けてきたそいつに、僕は一矢報わせてやらなければならない……。

「ボイスレコーダーの新人は僕だ……。レコーダーの音声が真実だと決める物的証拠はないけれど……彼女は本当にカネイさんのことを愛してることは知っている！僕がその証人だ！」

怒りを乗せてその言葉を吐いた途端、今まで僕に向けて全く笑みを見せなかった住浦さんが、ニツと微笑んだ。

「やるじゃん……お前……」

彼の笑顔から、そんな言葉が聞こえたような気がした。

すると、住浦さんは僕を親指で指しながら、再度、裁判長を睨む。

「で……彼が本当にスプリミナルの新人であるってことも……ここで証明してやった方がいいか……？」

彼がそう言うのと、裁判長は罰が悪そうに口を慎み、机に手をついて項垂れた。

証拠の証拠が出た時点で、裁判長の中で、でっち上げ反論をするための材料がなくなったのだ……。

「なあ……リサト ジュリ。お前……親のことをどう思ってる？俺がお前なら……アイツのこと大嫌いだけど……？」

最早これ以上、真犯人の裁判長を叩いてもなにもでない判断した住浦さんは、利郷さんに親への思いを聞いた。

すると、彼は今までずっと固く固く閉ざされ続けていた口を開き始めた……。

「その通りだよ……ちっちゃい頃から、兄貴や姉貴にはなんでも買ってたのに、俺にはなにも買ってくれない……。小学生の頃には、わざわざ好きな子に恥をかかせるようなことをして……。中学には、好きなアニメを見てただけで中二病扱い……。高校の時には、お前の言葉でストーカーに仕立て上げられて、社会人になっても、このリッサの仮面のせいで……。どこにも行き場がない……。なんとか見つけた居酒屋で働いてても……またこれだよ……。」



今にも泣きそうな利郷さんに対し、裁判長はエゴ丸出しの怒りで、血管を浮き上がらせる…。

「黙れ……黙れ黙れ黙れっ!!先ほどから裁判長に侮辱ばかりしておつて!お前は私の言うことだけを聞けばあつ!」

「裁判長!・静粛になさってください!今は、証人の尋問中です!」

裁判長の荒ぶりを見ていた検事は、ついに彼に言葉をぶつけた。

「私たち検事は、真実を求めるためにこの法廷に立っている!それを侮辱しているのはどちらですか!?裁判長!」

その言葉が引き金となり、多くの人間のブーイングや、裁判長に向けての沢山の罵声が、再度飛び交い始める。

それはまるで、この法廷を鮫詰めにする程だ。

「あなたには幻滅しましたね…」

「これ以上、この事件を書記することは無いですね」

ついには、裁判官の人々ですらも、裁判長への軽蔑を始める。

最早、誰も裁判を取り仕切るための長であるはずの人間を毛ほども信じていないようだ…。

「なあ、リサト ジュリ!」

住浦さんが彼の名前を呼んだ瞬間、裁判長への怒号が一旦、スンと静まった。

「あのクズ野郎の為に…なんて、屈辱だろうけど…なんか言うこと、あるんじゃないの?」

彼が聞くと、利郷さんは下唇を噛んで俯いた。

よく見ると、利郷さんの足は震えていて、顔からは冷や汗がだらりと出てきている。

彼はきつと、謝るのが嫌なわけではなく、謝ることに恐怖を覚えているのだろう。

今までやらされて来た事への積み重ねや、許してくれなかったときの恐怖だとか、この大勢の怒りが自分に向くんじゃないかとか、そういう精神的な恐れしがらみの柵が、足を引っ張っているのだと思う。

似たような境遇に立ったことがあるから、なんとなくわかるんだ…。

「怖いかな？なら一言いっついてやる」

そう言うと、彼は利郷さんの肩にそつと手を置き、耳元で囁く。

「てめえは親父にとつての家畜じゃねえ…」

彼が放ったその一言が、利郷さんの震えを止めた。

出会ってたった数時間だけの人間の言葉一つで、彼の自信の恐怖が緩和されているようだ。

言葉の力は弱くない。

物的証拠で動くこの場所の、誰の耳にも届いていないそこで、彼はそれを証明しているのだ。

今まで受けてきたことによる蟠りが外れた利郷さんは、大きく深呼吸をして、被害者の二人に振り返った。

「カネイさん…ヒノデさん…」

波打つ心臓の音のせいで、未だに呼吸が揺れている。

しかし、それでも彼の決心が固まり、利郷さんは彼らに深々と頭を下げる。

微かに残る恐れを荒ぐ息に乗せて吐き出しながら、彼は頭を垂れたまま謝辞を陳べ始める。

「この度は本当に…申し訳ございませんでした…。あいつのせいだと言つても…俺は…多くの人間に迷惑かけました…。貴殿方にも…視聴者の方にも…この裁判を取り付けてくださった、関係者の皆様にも…。どんな形であれ…俺は…どうしようもないクソヤロウで……それで…それで…」

「もう良いんですよ、リサトさん」

謝罪を続けようとする揺れる声を、被告人は遮った。

手錠がついたまま、兼井さんはそつと利郷さんに近づいてしゃがみ、頭を下げている彼と目を合わせた。

「他の人が…どう思うかとか…そう言うのも、色々あるかもしれないですが……あなたがこうやって、頭を下げてまで謝ってくれたから…僕はそれで良いです。僕は、あなたが見せてくれた謝りを、全て受け入れます」

腕が使えない兼井さんは、その優しい言葉で震える彼を包む…。

「これから…本当にやりたかったこと、本当に目指したかったこと、本当に言いたかったこと…全部ひっくり返るめて、一緒にがんばっていきましようよ！僕はカテキンとして…あなたはリツサとして…。なによ…僕ら、動画投稿者として」

そう言つて、兼井さんは柔らかな笑みを浮かべる。

誰が聞いても分かる、その聖人君子のような彼の優しい一言が、利郷さんの中に押し込まれ続けていた感情の鍵を開けた。

その瞬間、今まで生気すら見られなかった利郷さんから、満ちたりすぎる程の強い心が、大量の涙と共に流れ出してきた…。

「ごめんなさい…ごめんなさいっ！俺…俺はっ!!!」

怒っていた時よりも大きく響くその声は、ここにいる多くの人間の心を揺らがせる…。

傍聴席には、もう利郷 樹里とリツサへのブーイングをする者はおらず、中には啜り泣いている声までも聞こえてきた。

「大丈夫…大丈夫…」

リツサのために強迫をされていた日之出さんも、安堵のための言葉を乗せて、彼の背中を優しく撫でる。

悪の仮面を被らされ続けてきた青年のアポロジューは、仮面すらも被らない善と、それを愛する者達に、きつと強く届いている。

その証拠ではあるまいが、彼ら三人の行動に、多くの人間が盛大な拍手を送っていた…。

「んじゃ、邪魔者は去るとするか。後は勝手にやってくれ、バアイ♪」  
気楽に手をヒラリと振りながら、彼は法廷の出口へと歩きだした。

「スミウラさ…」

僕は、住浦さんが前を通りすがろうとする時に声をかけようとしていたが、その前に彼が僕の背中をバシンと叩いた。

「いくぞ、新人。ミスハラ」



ようやく彼に話しかけられるようになったのは、法廷から出た後の

事だった。

「待つてくださいい！一体どこからわかってたんですか!？」

僕の声に気づくと、彼はフードを脱ぎながら、こちらに振り替えた。

「あ？昨日からだよ。さつきもいつたけど、ミズハラが持ってきた書類のなかに、裁判長の名前が書いてあって、それが加害者の名字と一致してたから、それを調べてたんだよ」

そうか、昨日の単独行動は、その真実に気づいたからだったのか…。  
「でも、なんで僕らを騙してまで…」

正直、初めに教えてくれた方が早かった気もするんだが…。  
なんて思っていると、彼は何故か僕を鼻で嗤った。

「あのな…俺はわざわざ自分が気づいたことを誰かに教えるような質じゃねえんだよ。それに俺はな…」

「待てえっ！」

突然、彼の話の遮ったのは、血相を変えて法廷から出てきた裁判長だった。

「貴様…どういうことだ…私を辱しめおって…」

未だに自分の罪を棚にあげ続ける裁判長は、住浦さんの胸ぐらを掴み、我を忘れて彼を睨んだ。

「それはてめえのせいだろう？なに人のせいにしてんだ…」

住浦さんは正論で返すと、裁判長は歯をギリリと食い縛り、彼に顔を近づける。

「ふざけるなあっ！私にどれだけの価値があると思ってる…どれ程の地位があると思ってる！あのバカ息子を誰が育てたと思ってる！」

なにも悪ない住浦さんに向けて、勝手に燃やしている怒りを暴言と唾に乗せて吐き出す。

八つ当たりも甚だしい彼は、ついに拳を握り始めた…。

「やめろ…っ！」

住浦さんを殴る気だと察した僕は、彼を止めるために強く腕を掴むが、怒りで我を忘れている彼に、荒々しく押し倒されてしまった。

「私は……バラーディア中央裁判所の裁判長だぞおっ！」

ついに全てを吹っ切った彼は、固く握ったその拳で住浦さんを殴ろうと振りかぶる。

ガギンツツ!

しかし、そのまま勢い良く着弾したその拳は、人間の肉に着かず、何故か鈍く固い音が響き、共にその手が赤く腫れ上がった。

「痛っ……!がああっ!」

何故か、血塗れた右腕を掴んで踞る裁判長。

「な……なにが……」

僕は対する住浦さんを見ると、彼の頬は全く腫れておらず、何故か銀色に輝く冷たい鋼へと変化していた…。

もしや……これが彼の特異か……!?

「裁判長……?片腹痛えわ……」

住浦さんは、痛がる裁判長の髪を乱暴に掴んで彼を起こすと、精進とは全く違う、まさに強者とも言えるような構えをして、拳を作った。

「俺はこの世界の全てで一位になる男……住浦 秀だぜ……?」

ガアンツ!!

言葉と共に振るわれたその拳は、先ほど同様に強固な鋼のような素材に、いつの間にか代わっていて、殴られた裁判長は顔を歪にされて約1メートルほど吹っ飛んでいった。

「ふう……スツキリした……」

住浦さんに殴られた本人は、声も叫び声も出せるわけがなく、白目をひん向いて気を失っていた…。

「ひえ……顎が……」

顎が砕かれ、口からダラダラと流れ出す血に、僕は恐れ驚いた。

「スプリミナルの超金属武術使い、スミウラ シユウ。身体をあらゆる金属の素材に変えて、身体能力を補強する特異点さ。金にがめついクズだけど、その力はサトナカくんや僕とは比毛を取らないよ」

水原くんが、僕にそう伝える。

超金属使い……だから、氷でガツチガチに凍らされても平気だったのか…。

僕が納得している傍ら、住浦さんはトランススーツのポケットから

小切手帳を取りだして記入して、殴った人間の近くに投げ措いた。

「てめえの息子から貰ったのと、俺の口座から、合わせて150万円だ。足らなかつたらいつでも電話しろ。いくらでも出してやるよ」

そう言つて、真犯人に小切手を投げていた住浦さんの笑顔は、思わず身震いするほどにダークで、どこか格好いいとも思える産物だった…。

殴られて伸びている真犯人を置いて裁判所から出ると、巻積雲いわしぐも浮かぶ晴れ空が、お疲れさまとでも言いたげに、仕事を終えた僕らを見下ろしていた。

「さ、帰つて報告書作るか。新人、ちゃんと俺がすごかつたつて書いてけよ？」

先頭を歩き、片方ずつ腕を伸ばしながら、住浦さんはトランスを解除した。

「スミウラさん…あの…」

「ごめんなさいとかすみませんとかは要らねえからな。そう言うの俺は嫌いなんだよ」

こちらに振り替える住浦さんは、謝ろうとしていた僕に指を指しながらそう言った。

「それに、俺はサトナカが言うような中立的立場で立ったから、てめえをからかつてやっただけだ。そんなもんで俺にわざわざ頭こづくを垂れる義理はねえ」

彼が得意気にふんと鼻でほくそ笑む姿を、暖かな太陽がi v c 照らした。

「…はいっ！」

僕は先輩に威勢良く返事を返す。

少々難はあるが、スプリミナルとしての強さや逞たくましきは、確かにその小さな身体の中にあるらしい…。

詐欺師である罪を引きずって歩く自分も、水原くんやこの人のように、スプリミナルとしての逞しきを持てるようになりたいと思った。

「でも…なんか珍しいね。スミウラくんが低利益の方をとるなんて…」

ふと水原くんが聞くと、住浦さんはフィクション作品のようにキョトンとしていた。

「低利益？んなわけねえだろ」  
「」

彼はそう言うと、自らの小切手帳の中から一枚の小切手を取り出して、水原くんに渡した。

「なにこれ」

「500万円の依頼料だ」

「ぶ…：五百万つ!?!」

住浦さんの口から出てきた、今までにリアルで聞いたことがない料金に、首をかしげていた僕らは

自然と声を合わせるほど驚いた。

小切手の料金欄を見ると、確かに5の次に0が6つ、しつかりと記載されている…。

「い、い、い、依頼料ってどういうことですか!?!」

驚きで震えている声のまま、彼に聞く。

確か、兼井さんは拘留所にいたから依頼料は渡せないし、そもそも面会するときには1億円とか言っていたはず…。

「ああ、ヒノデの家系はブラーディアでも有数の富豪だったんだ。試しに500万程要求してみたら『そんなので良いんですか?』って言うって、あっさり渡してくれたもんでな」

口座の名義を見ると、彼の言うとおり、日之出 公佳さんの名前が入っていた。

そうか、日之出さんは富豪だからこそ、武装警察経由にも伝を聞かせることができて、そのまま依頼書入手する事ができたわけか…。

「で…でも、一億円の話は!?!」

「ああ…あれは半分嘘だ。書類には『依頼遂行完了の場合、口頭にて述べた金額ではなく、甲の気持ち分の金を住浦 秀の口座へ』って書いてあるだけだ。一億なんて法外すぎんだろ? まあ正直、いくら振り込まれるのか、楽しみだけどなく♪」

住浦さんは依頼達成以上に喜んでるようだ…。

「それと、あんな糞みたいな裁判長の地位なんぞ、1円の価値もないんでね」

彼は今までよりも悪そうにニヤリと笑うと、僕らから背を向けて、足取り軽く前を歩いていく…。

正直言おうと自分のなかで、住浦さんという人間への違和感がずっとあった。

なぜ水原くん達が彼をクズと言うのか、なぜ彼が中立的な存在を保てるのか、何故、彼が利益にこだわり続けるのか…。

それは、住浦秀という人間が、利己的な完璧主義者だからだろう。自分の利益のためならどれだけ嘘をついたって構わない、どれだけ裏切ったって構わない。

そんな、どこか銭ゲバに似た性格の罪人だから、クズという烙印を押されてしまうのだろう。

そんな利己的完璧主義者は、いったいどんな罪を背負って、スプリミナルにいるのだろうか…。

「スミウラさんって、なんというか…いい人なのか悪い人なのか…。」

僕らは彼の後ろを歩きつつ、ひそひそ声で水原くんに話す。

「ま、彼は個人的利益の目的でしか動かないからね」

水原くんは気にせず普通の声で話すが、住浦さんは自分の手の中にある五百万円に気を取られていて、こちらの会話を全く聞いていないようだ…。

「付き合っていく内にわかるよ。彼が何故1番に拘って、そして何故1番になれないのか…ね…?」

首をかしげる僕を見ながら、水原くんはいつも通りにニヒルに微笑んでいた。

「そう…。」

未だ、謎の多い答えを聞いた僕は、前に歩く彼を見る。

スプリミナルは罪人が集まる組織。

なら、住浦さんにはどんな思いや罪を背負って、この組織で戦い続



けているのか…。

なんて考えている僕の目の前で、当人は近くの銀行へと足を進めていた…。

T o b e c o n t i n u e …

## 6—1 『武装警察隊長H』

兼井さんの事件が終わって、約三日後。

警察特殊認可特異行使結社の住浦 秀に殴られた後、事件の真犯人である裁判長は、裁判中と同様に、わざとらしく容疑を否認していた。

しかし、法廷にいた多くの人の証言によって、利郷リサト 灸堂キウドウ裁判長はマスメディアに大々的に取り上げられた挙げ句、裁判所を辞任に追い込まれた。

日之出さんの家元である『日之出コンツェルン』は、今後、利郷元裁判長に訴訟を起こす計画も立てているらしく、彼が地の果てまで落ちていくのは、時間の問題だろう。

一方、リツサこと利郷リサト 樹里ジュリさんはこれまでのことを釈明する動画を投稿し、今までの反省の意味を込めて活動休止を発表した。

被害者であるカテキンさん自体も、まだ様々な対応や準備に追われているらしく、改めて動画投稿を再開するのはまだのようだ。

越権に潰されてしまった、二人の動画投稿者の夜明けは、まだまだ先だ。

それでも、二人が夜道の中で前を向こうとしているのは、あの裁判の時に、かけてほしかった言葉を掛けてくれた、大切な存在があるからだったと、私は信じたい。

ちなみに、容疑を否認していた時の利郷元裁判長は、顎が砕けていたがために、通訳を介さなければ、否認内容がほぼ聞き取れなかったと言う。

「ふう…」

報告書の作成はこんな感じで良いのだろうか？

こう言うお堅い書類を書いた経験は全くないから、正解がわからないな…。

小休憩も含めて、ふとパソコンから目を話して、近くの窓から外を見てみた。

この街の空は、今日も晴れている。

休日だった昨日はどしゃ降りの雨で、どこにも行けなかった物だったが、今日は本栖湖もとすこの水面のように、透き通るような晴れの日で、少しだけワクワクしている。

ただ、兼井さんの事件が終わってから、ずっと依頼が無かった物だから、今日はまだまだ多くの報告書やら書類作成に追われているのが、少し面倒だけれど…。

カタカタカタカタ…

「ん…揺れてる…？」

突然、机や小物が小刻みに揺れた気がして、首をかしげる。

「ああ…ヘリポートだろうねきつと」

隣で仕事をせずにタロットカードを揃えていた水原くんが答えてくれた。

「え、ここヘリポートもあるの？」

「うん。武装警察との連携のためにね」

「そうなんだ…」

こんなアンティークな街に、まさかヘリポートまであるとは、少し驚きだ。

新人研修の時、この建物を全て見て回ったけれど、屋上にまでは案内されていなかった。

なんか、屋上に行くことを禁じられている学校みたいな気持ちだ…。

でも、確かに、警察認可組織であるここにヘリポートを置くのは必然なのかもしれない。

警察と連携を取らなければならないという事は、緊急時に警察自体が連携のため、ここにすぐに来れるようにするために、必要だろうか。らな。

ただ、ちよつとヘリコプターという存在にはちよつとだけワクワクする。

そもそもヘリコプターなんて、普通に生活していた僕からすれば、そんなのなかなかお目にかかれない、結構レアな存在だから、なんか

ちよつとワクワクする。

お前は子供か、なんて言われてしまいそうだけどね…。

「それにしても…」

ふと、僕は後ろを振り向く。

「Z z z ……」

僕から見て、ちょうど右斜め後ろ当たりの席。

四つのデスクが長方形状に引っ付けられているその一角のデスクには、大量のコントローラーや携帯型コンソールやら、大量のゲーム用品が置かれている。

そんなグチャグチャな席で、住浦さんが顔に新聞を乗っけながら、背もたれに仰け反りながら寝ている。

「むう………」

三日前の事件の時から、彼の事が未だにわからなくて、考えている。こんなに利己的な人が、なんでこんなところにいるのだろうかと言うことだ…。

「どしたの…？報告書の書き方わかんなくなつた？」

ふと、水原くんの問いに、ハツとして、小難しく考えていた僕は顔を緩めた。

「ご、ごめんごめん。報告書は昨日のうちに殆ど書き終えたから別に…。てか、水原くんは大丈夫なの？」

「報告書じゃないなら、なんか悩みとかあるの？なんか恋の悩みとか？それとも、新しいエンブレムの形について？」

あ、報告書の件は鮮やかに無視した…。

「いや、そう言うのじゃなくて……。単純に、スミウラさんのことについてだよ」

何に気を取られていたのかを伝えると、水原くんは唾<sup>え</sup>みを溢した。

「ああ、なんであんなのがスプリミナルやれてるかってやつ？」

「なんでわかんのか!？」

簡潔かつしっかりと的を得た返答に、僕は驚いた。

思わず大声を出してしまったが、全く寝息が止まっていないから、住浦さんは恐らくぐっすり眠っている…。

「彼の性格からして、そう思うのは無理ないさ。あいつなかなかゲスだし。このスプリミナルで彼を恨んでる人間も、少なく見積もっても3人は確実にいるよ」

「そ…そんなに…!？」

人間関係において、厳しいことをツツコむ人や、お金にがめつい人って、確かになんか近寄りたくない印象あるけれど…。

彼のことをそんなに恨んでいる人がいたとは知らなかった。

「じゃあ、なんでここに…？」

「単純に力があるからだよ。あいつの能力は『身体を金属に変える』ってやつなんだけど、彼はそれを生かすための武術を会得してるし、頭脳もスプリミナルで二、三番目位の賢さは持つてる」

初見でこの返答を聞いたら疑ってしまいそうだが、三日前の出来事を体験していたから、すぐに納得できた。

先に相手に高利益的な条件を出しておいて、後にその全てを自己利益としてかつさらっていく。

頭腦的にも身体的にも、強そうな印象はあつたし…正直、かつこいと思っちゃってたからなあ…。

「ほんつと…銭ゲバみたいな感じじゃなければねえ…」

「ねえ……」

僕らが住浦さんのネックなどところを共感しあっているのにも気づかず、当人はまだ眠っている…。

ちよつと呑気な一面もあるんだな…。

「ただ、彼がここにいれるのには、なにより一人の男の存在があるお陰なんだよね」

「人…？」

こんな誰も好かないし、好かれなさそうな人に、後押ししてくれるほどの大切な人がいたのか…。

「話せばちよつと長くなるかもしれないけど…その人ってのが…」

バタアンツッ!

「スウウウミウラアアアアアツッ!」

突然、水原くんの話をぶったぎるように扉が開くと同時に、寝てい

た彼の名前を呼ぶ大きな声が、この部屋全体を響かせた。

「だあああつー！な…なんだ？なんだ？」

揺れるほどデカい声に、住浦さんは驚いて飛び起きる。

声のした方向に目をやると、そこにはベージュのロングジャケットとスーツを着こみ、顔を分断するような、斜めの大きな傷がついたガタイのいい男性が入り口に立ち、微笑みながら仁王立ちしていた。

「あ…あなたは…？」

「ゲエエツ！ハ…ハイカwa…」

刹那、住浦さんが言い終わるよりもよりも先に、男性の身体は入り口から消え、その逞しい腕たくまが、先輩の首を捉えていた。

「ぐあああつー！」

瞬間的に移動していた男性は、住浦さんの首に手を巻き付けながら、彼の頭をワシワシと乱暴に撫でていた。

「ガアーツハツハツハア！元氣しとったかあ？スミウラア！相変わらずふてくされとんなあ！」

流暢な関西弁で、笑い声をあげる。

「うるせえつー！相変わらず暑苦し…ぐつ！」

住浦さんは片耳を人差し指で塞ぎつつ、彼をうざったらしくあしらおうとするも、しつかりと身体を捕まれていると動けない。

「おーそうかそうかあ！とにかく、今日も生意気に元氣そうで何よりや！」

角刈りの男性がにっこりと笑顔を浮かべている反面、住浦さんは面倒くさげに眉をしかめている…。

「ミ…ミズハラくん…あの人は…？」

存在を尋ねるために振り替えると、水原くんも眉間にシワを寄せつつ、めんどくさげにため息をついていた。

「さつき言ってた、住浦の存在を後押ししてる陪川ハイカワくんだよ…。僕らの間では、密かに破壊さんとも言われてて、めちゃくちゃ偉い人…」

「え…偉い人…？」

「そんでもって、スミウラに体術を教えた師匠」

「シショウ…」

陪川と言う人の地位への驚きで、僕は鸚鵡おっむのように言葉を繰り返した。

スプリミナルの新人として、武装警察とはいつか出会って、しっかりと自己紹介や今後のための挨拶をしなければならぬ日が来るだろうと思っていたが…。

こんなにも早く、しかも相手側から直接乗り込んで来るとは思わなかったな。

「おおっ！今日はカドヤくんもおるやないかあ！」

陪川さんが僕の隣に気づくと、住浦さんをつつ離し、とびつくように水原くんを抱きついた。

「うわっ！」

逃げ遅れた彼は、住浦さん同様に首に手を巻き付けられて、またワシヤワシヤと頭を撫でる。

「調子はどうやあ？まーたアオイちゃんの尻引かれてんねやろお？お前も元気そうで、なによりやわあ！」

「ああ…破壊くんも相変わらずあつつくるしいようで…旧式の石油ストーブにでも抱きつかれてるみたいだよ…」

「なあーまいきやなあー！ツハハハハッ！」

水原くんのいつもの鋭い皮肉も、笑ってあしらうなんて…。

ここまでフレンドリーな熱さだと、確かに住浦さんと水原くんが苦手になるタイプだろうな。

ただ、陪川さん自体からは、悪い人のようなオーラが全くしてこない。

親戚の叔父さんに類似した、ちよつとだけウザくても、誰かを貶すようなことはせず、たまにお小遣いをくれるような人…という感じの雰囲気だ…。

でも…陪川さん気づいて、水原くんがハグを嫌いすぎて、西洋の悪魔のような顔になっているよ…。

「おおっ？君はなんや？依頼者さんか？」

先輩達を可愛がっていた陪川さんが、ようやく僕の存在に気づいた。

「あ…えつと…ははじめまして。ついこの前に特異点になって、なんやかんやで、スプリミナルに加入させていただきました。ユウキ テツヤです…今後ともよろ…」

「おぉー！君が噂の新人さんかぁ！」

「うわあつぷ！」

自己紹介をぶったぎるように、陪川さんは先輩達にしたこと同様に、僕に力いっぱい抱きしめてきた。

「はじめまして！俺は陪川ハイカワイノスケ威之助。武装警察ってとこのトップリーダーで、まあ総大将みたいなもんやつとるんや！よろしゅうな！」

陪川さんは僕の肩を両手でバシバシと叩きながら、まさに太陽そのもののように明るく笑った。

少々ウザったい気持ちが分からなくもないのだが…それよりも…。

「総大将って…ぶっ！武装警察のリーダー!!??」

驚きすぎて、威勢よくバシバシと叩かれている肩の痛さすらも感じなかった。

そう言われて見れば、講習で叶さんが彼の名前を言っていたはずだ。

それに、さつき水原くんが彼のことをお偉いさんとは言っていたけど、まさかここよりも大きな組織の長だったなんて…。

「まあ、そんなとこやなあ！よろしく頼むでえ!!」

「わっ…ちよ…」

大きな声で陪川さんは僕の入隊を歓迎すると、また水原くん達と同じように首に手を巻き付け、頭をワシワシと撫でてきた。

彼なりのスキンシップという事なのだろうが、さつきも言った通り、まさに『ちよつとウザい親戚の叔父さん』と言う感じがしなくもないんだよな…。

でも、僕はこんな触れあいも悪くはないと思うかな…。

ガチャリ

「やあ、来たかイノスケ」

社長室の扉が開き、郷仲さんがオフィスに顔を出す。



今日の郷仲さんは、目に写るハイライトが強く、表情がいつもより明るいように見えた。

「トウリ！うーわ、えらい久しぶりやなあー！この前見たときよりもでかかったなあ！」

陪川さんもさらに上機嫌になった途端、僕から手をはなして、すぐに郷仲さんの元へ行くなり、彼の腕を両腕で強く握った。

「お前は親戚の叔父さんか。この前あったばかりだろ」

「そんなもん、俺に言わせたら一日でも久しく感じるもんやでえ？そんなくらい寂しかったつちゆうことや！」

「どういうことだよ。でも、死んでなくて何よりだ……」

「おいおい、当たり前やんけ！俺がこんなところでお前を置いて死ぬわけあるかいなあ！」

ガハハと豪快に笑う陪川さんと、いつもよりも感情を露にして笑う郷仲さん。

そう言えば、講習の時に叶さんが、二人とヴィーガレンツのボスをあわせた三人で、親友だったと言っていたな。

確かに、二人とも顔からして嬉しそうだ……

「……と、武装警察の長であり、サトナカくんの幼馴染みでもある破壊くんは、まさに年中正月かって感じの人なんだよ……。どれだけ初対面であろうと、ああ言うノリで接するから、皆、ある意味彼を尊敬してるらしいよ……」

乱れた髪を直しつつ、水原くんがこれまでの情報をまとめて僕に話してくれた。

「ありがたいけど……なんか、置いてかれた視聴者のために解説するアニメキャラクターみたいだな……」

「まあ……俺にとつちや、迷惑なオツサンだけだな……」

疲れと呆れでハアとため息をつく住浦さん。

しかし、地獄耳のごとく、彼のぼやきを聞いていた陪川さんは、また彼に飛び付いて首に腕を巻く。

「なあんやあ？師匠に向かってえ。構ってほしいんかあ？この欲しがりめ！」

今度は住浦さんの右のこめかみ辺りに拳をグリグリと押し付けている。

「うるせえ！免許皆伝はしてるし、ここでは対等だろ！」

「なーに言うтонねえん！階級が同じでも、お前はまだまだひよっこやあー！」

子供のようにウザがる住浦さんと、じやれるように可愛がる陪川さん。

免許皆伝とか、師匠とか聞くなり、彼らにもなにかしら関係があるようだ。

ただ、住浦さんはこめかみ部分を鉄化させて、グリグリの痛みを感じさせなくしているようだが、それも陪川さんの拳でへこみつっあって、なんか怖い…。

「それでイノスケ。今日はなんの用事だったんだ…？」

師弟(?)ムードの中、陪川さんのペースに動じない郷仲さんが話を切り出し、ようやく今回の本題に入る。

「ああ、すまんすまん。実はな…近々、結構ヤバイ事が起きるかも知れんくてな…」

陪川さんが住浦さんから手を離すと、彼はスーツの懐から一枚の写真を見せた。

「これは？」

「指名手配ってわけやないけど、重要監視対象の人物や…。プロミアで目えつけられとった異能力者が、今バラードに潜伏してらしいんや…。しかも、こいつは異能力の申請もしてない上に、ちよいと重めなリージョン支持者らしいてな…」

陪川さんの言う異能力申請とは、リージョン社会で異能力者が増えたことよって、国に報告をしなければならぬ制度だ。

そもそも、異能力によつてはどうしても人を傷つけることになってしまう能力もあるため、安全の保証と国から能力コントロールの支援を受けられるようにするために、この制度が立てられたらしい。

申請をしていなくても、人を傷つけることがなかったら、まだ問題はないらしいのだが、申請をしておかないと、誤つて人を傷つけてし

まった場合に、刑罰が重くなったりするらしい…。

ちなみに、特異点の申請制度はまだ出来ていないのだとか…。

「ほうほう…それで…そいつにどんな問題が？」

郷仲さんが頷き、話が続けられる。

「こいつは最近まで、無差別の人間に嫌がらせやらモラハラやら、そう言う、俺らが手え出せれへんことをしとったんやけど、数年前、その度を越した軽犯罪で普通警察の方に捕まっつた」

「まあ、よくある話だね」

「初犯つてこともあつたらしくてすぐに釈放されたらしいんやけど…。あまりにも、嫌がらせ行為が目立つとつたから、武装警察は目を付けることにしとつた」

「さしずめ…最近までは大人しかつたのに…という感じか…？」

「せや。真面目に働いとつたから、普通警察も監視が許んどつたらしく、つい最近バラディアに逃げてもうたんや…。こいつは現在もバラディアに身を潜めとつて、今は種族を問わん若者を多く集めとるらしいんや…」

陪川さんと郷仲さんの会話を聞きつつ、僕は、その姑息な犯人の顔が気になって、合間から写真をチラリと見てみた。

チカチカしそうな程綺麗で眩しい白い髪を携えた一人の若者が写っていた。

これが、発症すれば自在に能力を使える人間… 異能力者… なのか…。

「それで…その異能力者とシンパ達が、近いうちにリージェン至上のための小さな組織を作つて、何かしら大きな犯罪をしでかすかもしれない…と？」

社長の理解力の速さに、陪川さんは目を丸くする。

「よお、わかつたなあ…」

「何年こういう事件に巻き込まれてると思つてるんだい？」

「せやな」

そう言つて交わした二人の笑みが、昭和の兵隊のようで少しかっこいい。

なんて思っているのはおそらく自分だけだろうな…。

「しかし…組織を作るつちゆうのはあくまでも”推測の範囲”やから、武装警察全体としては手が出せれへんねん。勝手に動くとしても、数人が限界や…。でも、そいつらが政府機関やリージエンが集合する場所にテロ行為なんかしたら、たまったもんやないしな…」

難しげに腕を組む陪川さん。

彼の言った『手が出せない』という理由は、なんとなく理解できる。

警察という組織は、僕らのような秘密組織と違い、多くの世間の目に監視されているわけなのだから、むやみやたらに動くことが出来ないのだろう。

それに、前にどこかで聞いたことがあるのだが、2020年から比べて、誤認逮捕による罰則も厳しくなったらしいし、慎重にならざるを得ないんだろうな…。

「なるほど…。それで、私たちを利用する…というわけか…」

陪川さんは全てを察した郷仲さんに向けて、パチンと指を鳴らす。

「言い方は悪いけど、つまりはそう言うことや。やっぱり、こう言う中途半端なところに手え出すのは、お前らの十八番やろ?」

「まあそうだね」

ニシシと笑う陪川さんに、郷仲さんがニヒルに笑みを返す。

少し良いように使われてる感じは否めないけれど、確かにここは”警察の手の届かない場所の事件を捜査する”という組織でもあるから、利には叶っているか…。

「ふむ…：わかった、依頼を引き受けよう。なら、君の弟子を連れていくと良い。ついでに、新人研修でユウキくんも連れて行ってやってくれ」

「ハアっ!?!」

郷仲さんから直々に指名された僕らは、驚きのあまりに頓狂声がピタリと揃った。

「ちよっと待て!なんで俺が!」

「なっ!なんで僕もなんですか!?!」

郷仲さんに詰め寄りながら問う僕ら。

住浦さんは、師匠の扱いに慣れているのだろうからわかるけども、まさか僕まで駆り出されるとは思わなかった。

それに、てつきり新人研修は昨日で終わっているんだと思っていたし…。

「いったあー！」

すると、陪川さんが住浦さんの頭をスパアンと勢いよく叩く。

「やかましわあつ！久々に師弟コンビ復活や！二人＋１で、仲良おやっついていこうやあ！」

不満など問答無用な彼は自分の弟子の肩に腕を回してベタベタとくつつく。

「だから、やめろつて！熱いし厚かましいっ！」

住浦さんも、頬を掴んで引き剥がそうと抵抗するが、やはり陪川さんの方が力は上のようで、頑として動かない…。

「ユウキくん！君もよろしくな！」

「は…はあ……」

なにか面倒なことになると行けないから、一応首を縦に振っておいた。た。

まあ、これも経験だし、武装警察の仕事の仕方も知っておいた方が良いでしょうし…。

それに、先日の裁判の時のように、自分が誤った選択に進みかけるのを正せるかもしれないから。

「ユウキくん。占いに関係なく一つだけ注意しとくよ…」

ふと、僕の肩をつかみながら、水原くんが忠告する。

「今日ではできるだけハイカワくんから離れるな…。わかったね…？」

言葉を伝える彼の顔は、まるで緊迫した籠城現場に居合わせているかのように真剣だった…。

「え…？それはどういう…？」

「よおっしやあ！二人とも行くでえー！」

水原くんの返答を聞くより先に、陪川さんが僕と住浦さんの襟を掴んで引つ張りだした。

「ちよ、ちよつと！それどういう事なのって!?!ねえ！」

「待てハイカワ！ちよっ！せめてもう一人誰か来て！新人だけじゃ頼り無さすぎるううううっ！」

心許ない空気を預けられたまま引きずられていく僕と、珍しく誰かに助けを乞う先輩。

見たこともない住浦さんの焦り様が、僕の不安を煽っている。

どうかこれから始まる仕事は、危険なものじゃないことを祈る…。

まあ、無効化人間だから、僕は怪我とかしないだろうけども…。

「ま、がんばってねえ〜」

「呑気に言うなあああああっ!!」



人生で警察署に来たのは一度きりだ。

小学校の時、社会見学として普通警察の署に行ったつきりで、確かその時は、警察署の人達が特別に、僕らを停車している白バイに乗せてくれたな。

ただ、今回は白バイを気軽に乗せてくれるような普通警察とは訳が違う。

地位的にはその逆の位置にある、武装警察に來ている。

署内は、普通警察とほぼ同じで、白い壁にタイルの床の空間の中、少し重たい空気が漂っている。

ただ、普通警察の場合には、もっと交通安全ポスターや振り込め詐欺等の、普通に生きてれば起こりうる事故や犯罪等への対策を訴える物が色々あったけれど、ここは通りかかるポスターが、全て『一部過激派に要注意!』とか『ノーインを見かけたらずくに逃げろ!』や『誰でも愛せる多様性を』等という、少々殺伐とした事件の物ばかりだった…。

武装警察は、そう言った非日常的な組織へ対抗するための司法組織だからだろうな。

「ユウキくんは初めてやるお?武装警察の中を歩くんは…」

前を歩いている陪川さんが、微笑みながら振り替える。

「は…はい…」

「そっか」

返答を笑みで返しながら、彼は通りすぎる部下の人々に、よう元気か？等と声をかけていた。

正直、元詐欺師にとつては、こんなところ歩きたくもない気はする…。

通りすぎるポスターの中にちよくちよく『そのお金、マフィアに使われてます』という詐欺の警告の物まであるものだから、胃がキリキリと痛むし…。

これは、なにかの罰の類いなのか…それとも拷問か…。

「お前…水原も言ってたけど…絶対にハイカワから離れんなよ…？」

そんな転嫁的な妄想をしている僕の後ろから、のそのそと着いてきていた住浦さんが、顔を近づけて囁いた。

「だから…何でなんですかって…」

「色々やべえんだよ。いいか？こいつはな…」

ガチャ！

その続きを聞くよりも先に、陪川さんが部屋の扉を開け、話が後回しになってしまった…。

「おいーっす！」

昔のコメデイ番組の掛け声の如く響いた声に、部屋にいた二人の警察官が反応する。

「お疲れさまです！ハイカワ隊長！」

「ツス！」

二人の警官は、即座に陪川さんの前で起立し、敬礼。

この光景…まさにフィクションでもよく見る”刑事”という感じがするな…。

「ああ…よかった、この二人がいて…」

僕の後ろで住浦さんが小さく安堵している事も知らず、大隊長たる陪川さんは、二人の肩を同時にポンと叩く。

「お疲れさん。いつも通り、ヒカワとシドウは真面目にやっとなあ」

「ハイ。悪しきを罰し、この街を守るのが、私の仕事ですので」

「ヒカワさんと同意見ツス！俺たちは、市民を守るために切磋琢磨する組織だと思ってるんで！」

中年の警官に、僕と同じくらい歳の警官が続く。

「ハツハツハ！真面目なんはええことや！期待しとるでえ！」

部屋に響き渡るくらい笑い声に、腕を崩した二人の警官の真剣な顔からも、密かに笑みが溢れているように見える。

それほど、この大隊長の不思議な影響力があるわけだろうな…。

「ハイカワさん…この人たちは…？」

「おつと…ユウキくんは知らんかったな。紹介しとくわ、こつちはブラーディアTK市部長のヒカワ、そんでその部下のシドウくんや」

陪川さんの紹介と共に、その二人は僕に目を合わせ、再度敬礼をした。

「ご紹介に預かりました。ブラーディア武装警察のTK支部長ヒカワ、ユウセイ、  
斐川 康生です。よろしくお願いします」

斐川さんはメガネを掛けた中年で、背丈は普通くらいの、ちよつとお父さん感のある感じで、なんとなくイメージ通りの警察官というよ  
うな雰囲気がある。

「そんで俺がその一番弟子の始堂シドウ 藤次トウジツス！よろしくー！」

始堂さんは、坊主から無理やり伸ばしたようなちよつとクセのある  
ベリーショートで、陪川さん達と比べたら少し背は小さく、どこか『後  
輩』という言葉を体現したかのような雰囲気だ。

僕に、真剣で少し冷たい目をしながら敬礼をする斐川さんと、それ  
に対してニツコリと微笑む始堂さん…。

「ど…どうも…ユウキです…」

彼らに真似て、不格好な敬礼をする。

目に見ても分かる良い関係の先輩と後輩に少し妬けてしまうな…。

なにせ、自分の知ってる先輩二人は少々難ありな性格だから。

それにどつちも年下というのが、なんか屈辱というか腑に落ちない  
というか…。

「まあ…役に立つかはわかんねえが、こいつらが居てくれるだけでも、  
今日は安心だな…」



住浦先輩のこう言う見下してる感が尚さらだ…。

「よし皆、会議始めるで」

陪川さんが少し上の空になっていた僕らを呼び出す。

つつい、脳内で愚痴をこぼしていた僕は、住浦さん達と共に、机に向かう。

部屋の真ん中にくっ付けられた机の上には、それを繋ぐように大きな地図が広げられていた。

見覚えのある駅とショッピングモールの名前、そしてなにより『Cafeフェイバリット』の名前を見る限り、おそらく地図はTK市部の27区を中心になっている物かと思われる。

「ヒカワ、状況説明頼めるか？」

大隊長の指示に、はいと返事をしながら、斐川さんは机に置いていた資料を手に持ち、そこから取り出した写真をホワイトボードに張り付けた。

貼り付けられたその写真は、郷仲さんに見せたものと同じだ。

眩しいほど白いその髪は、一度見れば忘れない程だ。

「異能力悪用の罪にかけられている『雪待<sup>ユキマチ</sup> 弘治<sup>コウジ</sup>』。彼は、旧近畿地方<sup>フクロミ</sup>にて一時逮捕、観察対応となっていました。先日、地域の方から、特徴のある白髪の人物が、多くの若い人間やリージェンの中に紛れて笑いあっていたのを見かけた、との報告を受けました」

斐川さんはホワイトボードに乗っていたペンを指示棒の代わりにしながら解説する。

「勿論、それだけだと逮捕や捜査の理由とは絶対なりません。私たちが不審に思ったのは、この27区で増えている『違法物売買』なのです」

違法売買と聞いて、密かにゾツとしていたのは、恐らくここでは僕だけだろう。

斐川さんの言う違法物売買は、新世界歴2056年の今になっても極めて厄介な犯罪の一つで、リージェン社会になってから増加傾向にある。

勿論、僕が生まれるよりも前から、違法物の売買という罪は存在し

ていた。

しかし、リーゼン社会において、産業廃棄物であるハイドニウムが、僕ら特異点への対抗術として武器生成に使用できることが、判明していた。

そこから、マフィアはハイドニウムを集めるために、小遣い稼ぎと称して、多くの人々を売人や運び人にさせて、指定暴力団対へ大量に流れたという事案が発生した。

勿論、政府はすぐさまハイドニウムの売買を禁止して、少しは事件が収まったけれど、マフィアのようなアウトロー組織がそれを応じるわけがなく、今でもハイドニウムの違法売買は、麻薬や武器本体と並んで、裏社会で大きな市場を得ているとのこと。

ちなみに、ハイドニウムは自然と土に返すことができるため、廃棄する際には必ず埋め立てることを義務付けられている。

と、ついこの前に叶さんから教わっただけなのだが…。

確かに、なにかしら組織を作り出すとしたら、そっちの方が手っ取り早い気はしなくないな。

「ただ、目撃情報を全部集めてみたんすけど、ユキマチ自体がハイドニウムとかの売買をしているようには見えず、逆に『どこにでもいる普通のやんちゃそうな若者で、怪しそうには見えなかった』と言う印象の方が多かつたんす」

「ほう…なら、ユキマチが更正した…？ちゅうんか？」

眉をしかめる陪川さんに、始堂さんは首を横に振る。

「ユキマチだけだったら、そう思うかもしれないツス。でも、目撃情報の中に『ユキマチと一緒にいた人間が、なにか怪しいものを手渡していた』と言うのもあったツス…」

なるほど、それが先程言っていた、27区の違法物売買の増加と繋がるわけか…。

雪待容疑者自体はプラスでもマイナスでもない雰囲気を装い、その囲いの人間に手を汚させる。

詐欺の世界でもよくある方法だな…。

「ただ、目撃情報が多々あるがために、その中に虚偽があつたらどうす

るのか？という見解から、私たち警察側は、下手に動けなかったんです」

「それに、その麻薬売ってたやつを発見して、俺はなんとか捕まえようとはするんすけど、必ず逃げられるんツスよ！」

僕らに報告する二人は、興奮している。

斐川さんと始堂さんが熱弁する気持ちはわかるかもしれない。

勿論、刑事として犯罪者を逮捕しなければならぬのだが、そうではなく”正しいから手を出せるはずなのに、多大な責任感のせいで、出すことができない”というのは、僕が子供のころに暴走して軽く失敗した時と少しだけ似ていたから…。

「確かに……目撃情報が多すぎるのに捕まっとらんっちゃうのは……ほんまに気持ち悪いことやな……」

勿論、責任感のやるせなさ加減は、陪川さん自信もわかっていることだろう。

大隊長という大きく高い立場だからこそ、慎重にしなければならぬのは”疑いの目”なのだろうから…。

「それで、俺とヒカワさんはあくまでも独自に探ってみたんすけど、このように、発見情報が少しまばらで……」

始堂さんの指差す通りに、地図につけられている青丸の印を見ると、確かに規則性が全くないようには思える。

付けられているのは27区だけかと思ったら、その隣の26区と28区の先の方にも印がいくつかあったり、町中にポツンと一つ印がつけられているのも複数あったりと…。

そこに規則性を求めるには、ちよつと難儀なものかもしれない。

なんとなく目撃場所に駅が多いような気はするが、ブラーディアなんて都会からすれば、電車を使用するのなんて自然だ…。

「ふむ……でも、目撃情報はブラーディアの27区の方が多いな……。あくまでも、警察側を攪乱させるために、まばらな行動をしうる可能性もあるか……。とりあえず、あいつらの情報がまだ少ない限りは、27区から順次に聞き込みしていった方がええか……」

顎を人差し指と親指で掴みながら、陪川さんはそう言った。

瞬時に状況把握と搜索案を考えられる姿は、まさに大隊長と言いたくなる程の尊敬ものだ。

先程まで僕と住浦さんをハグしていた関西弁のおじさんとは思うまい……。

「TK市部で協力してくれると言ってくれた人達は、極めて少ないですが総勢で五人はいます。ここから、カモフラージュのために普通警察の方にも協力をしていただいて、ユキマチ達の聞き込みを強化した方がいいのかもしれないね。ただ、状況が状況だから、普通側が応じてくれるかはわかりませんが……」

「ユキマチの事よりも違法売買を強調しとけば、少しは協力してくれる子が居るやろな。他にも、鑑識から数名に声だけでもかけとこか……」

武装警察重役の二人の結論としては、周辺区域の無差別聞き込みの方が有効的と思っっているらしい。

確かに情報が少ない限りは、データを集めたり、聞き込みをして調べると言うのが、探偵にとつても警察にとつても重要な捜査方法に値するようだ。

「バカかお前ら……」

しかし、それをよく思わない者が沈黙を破る。

「いくらTK市部だつて言つても、27区周辺がそこまでちつこいところだと思つか？ただでさえTK市部自体は人口が多いんだ。んなことチマチマやってたら日が暮れるだろうし、相手がシンパを集めるのなら、一人でいると襲撃される可能性だつてあるだろう？」

對抗馬、住浦秀の口から出るのは、現実を突きつけるような彼なりの未来予測だ。

「露骨に無差別な聞き込みを行うよりも、電車の路線や情報提供の件数から行動パターンを読んで探す方が早いだろ。地図こまから読み取るに、僅かだが花菜村付近の目撃情報が多くなつていつている。なら、奴らの活動拠点はここにある……つてことにならないのか？」

住浦さんがここに来てからずっと静かだったのは、資料を読んでいだからだった。

住浦さんは否定するだけではなく、代替案と自分なりの意見も提案する。

あえて慎重に行こうとする姿が、僕の中の彼の印象と違っていただけ、ちよつと意外だった。

単純に、自分への利益が少ないからだろうか…？

「それくらいはわかってるツス。ちゃんと、情報が多いところを中心にですね…」

「それと、机に提供情報が纏められたファイルがあつたんで、少々拝見させてもらった。これをみる限り、中には『27区行きの路線の駅を利用していた』とかそもそも『花菜村の駅で見た』ってのも多かつた。これだけでも拠点は花菜村周辺つてのが読み取れるだろ。それ以外に核心をつくような疑問点がなにかあんのか？」

「そ…それは…」

釈明しようとしていた始堂さんが、怒涛の反論に押されている…。

少々言い方はキツイが、確かに住浦さんの言う通り、しらみつぶしに聞き込みをするよりも、しつかりと情報を絞って、ここだと言うところに飛び込むのも良案だとは思う。

しかし、考えればその案にもデメリットはあると思うのだが、僕は口に出せるほどの立場じゃない…。

「あります」

そんな中、押されて凹みそうになっていた始堂さんを、助けるように斐川さんが割り込んだ。

「疑問点としては、その情報の根本そのものです。いくら27区路線を使っていたとしても、それはあくまでカモフラージュだったら？ 異能力で姿を偽造していたら？ あえてそこにだけ姿を多く見せて、本当の拠点を隠そうとしていたら？ そういう考えがないとも言えませんがね」

「確かに…だが、そういう情報があるからこそ、まずは聞き込み場所を一点に絞るべきだ。その一点が違ったりしても、どこかですぐに綻びほころが出る」

「その綻びが出ている間にも、悪事が進んだらどうするんですか？そ

の間にユキマチを筆頭としたテロが起こったら？大体、スプリミナルはそう言うところでは消極的すぎると思います」

斐川さんの言葉は、まさに自分が言いたかったことだった。

一点に絞り続けるのは良案だけれど、もしも絞った捜査が外れだった場合、聞き込みをしているうちに、犯罪者もどんどん動いてしまうのではなからうか？とは思っていた。

しかし、斐川さんの釈明が住浦さんにとっては面白くないようで、彼は眉をしかめていた。

「なんだ？さつきから何故、被せるように応答する？まるで数十年前の野党みたいだな…」

ほら、こんな罵倒を含めた反論が来る…。

「なにを仰っているのか意味がわかりません。私のような物の意見も取り入れるのも、探偵の仕事だと思うのですが？」

しかし、それでも強気に対応する斐川さんに、住浦さんの態度はどんどん悪くなっていく。

「なら、てめえの検挙率は何パーだ？それほど物を言えるのなら、俺よりも高いわけか？」

「検挙率で優劣を決めるおつもりですか？」

「全ての物事、数は重要な物だ。それもわからないのか？」

「私は数の事を話していません。優劣の付け方についてを話していません。それに、先程からあなたは何様のおつもりですか…？」

二人の口論がどんどんヒートアップしていく…。

なんとか止めようと思っても、僕ら若い二人は間に入ることもできない…。

「探偵のつもりだが？」

「それなら、それで毅然とした態度をとるべきです。優劣をつけようとすることは、やってはなりません…それに…」

斐川さんがその続きを言おうとした瞬間、陪川さんの大きな掌が、彼の言葉をそっと封じた。

「お前らやめえや。みつともないなあ…」

初対面の時とは違って、彼は湖のように冷静に、彼らの口争いを止め

る。

陪川さんにとめられた住浦さんは、舌打ちをして斐川さんを睨む。それに対して、彼は馬鹿馬鹿しいとでも言いたげに、その眼光から目を反らして大きいため息をついている。

なんとなくだが、ここまで斐川さんが住浦さんに対抗するのは、彼自信が町を守るといふ志がつよいからなのかもしれない。

陪川さんが止めた、彼の言葉のその先はきつと『犯罪者の癖に…』だったと思う。

初対面の時、彼が僕に向けていた目の冷たさは、きつと罪人としての軽蔑なのだろうな…。

「お前らなあ…ちよつとは仲良くする努力せえや…一時でも仲間なんやから…。スミウラは否定しすぎ、ヒカワもムキになりすぎや」

互いに見下し続ける二人を軽く叱る隊長を、住浦さんと斐川さんはバツが悪そうに彼を見つめる。

どれだけ偉い人が寄り添おうとしても、二人は互いを認めたくはないようだ…。

「そもそもなあ…：…こうやったら早いことやろが！」

すると突然、机の上にあったペンを鷲掴み、目の前の地図にグルグルと大きな円を描いた。

「あ、ちよ！なにやってんだよ！」

住浦さんが声をかけた時には、陪川さんはフンと鼻で息をつき、ペんにキャップを着けた。

「待とうが待たなかるうが、今日の範囲はここまでや！こんくらいなら今日一日で終わるやろ！わかったら喧嘩なんてみつともない事しとんな！ええか!？」

大隊長の叱責に、辺りは鶴の一声がかかったかのように、静かになった。

なんと、大雑把な喧嘩の止め方だろうか…。

しかし、陪川さんが丸をつけた場所をよく見てみると、目撃情報が多い箇所だけが上手いことまとめて囲まれている。

ちやんと彼らが言い合っていた中で、一人で考えていたのか、それと

もただのまぐれなのか…。

「スミウラ！路線情報は!？」

陪川さんは怒った形相のまま、彼に聞く。

「ま…まあ、この範囲で行くとするなら、行動できる線は一つに限られるけど…」

「それでええ！…このはじっこから、五人で電車乗っているんな町聞き込みしながら花菜村向かえばええねん！どうせ、ユウキくんもスミウラもスプリミナルには帰らなアカンのやから、一石二鳥やる？はい、それで決定！」

提案に対する意見は一切聞かず、大隊長は今回の捜査作戦を決定する。

「相変わらずめちゃくちゃだな…ハイカワ…」

負け台詞紛いの言葉を吐き捨てる住浦さんだが、今ここに陪川さんの決定案に対する案を出そうとするものはいない。

大隊長として、横暴っぽくも見えるかもしれないが、部下をまとめられる威厳を持って捜査を進めようとする姿は、郷仲さんとは違った長としての余裕があるな…。

それにしても…まさか、乱暴に描いた丸が、ここまでの確に調査場所を囲めるとは…。

駅に集められているような青い印は勿論だけれど、他にも町中にポツポツと見受けられる場所の多さも…。

「……ん？」

ちよつと待て。

この町中のシールの場所に書かれている場所、確実にみたことがある…。

もしや…。

「すみません…一個良いですかね…？」

僕は忍びなく手を上げ、大隊長の決定にやれやれと動き出そうとする先輩達を引き止める。

「どないしたん…？」

「役に立つかどうかはわかりませんが…少し思ったことがあって。こ



の町中の情報提供場所、少し見覚えがあるんです」

四人もの格上の人間に見られつつ、底辺の僕は近くの机にあったペンを手に取った。

「僕、スプリミナルに入る前は、27区から一つ離れた区に住んでたんです。それで…よく妹とシヨツピングモールまで行くのにバスを使つてて、それが通る場所を繋いでいったら…」

口頭では分かりにくいかもしれないから、ペンで地図に描かれたバスの路線を繋いでいく。

少しずつ作られていく黒色の線が青色の印の上を通る時、そこには必ずその記号が描かれている…。

「そうか…停留所か！」

いち早く気づいたのは住浦さんだった。

彼は、僕が全て書き終えるよりも先にペンを奪い、残りのバス停と駅の間を線で繋ぎ始める。

「新人、モールまでのバスの路線つてこうだったよな？」

「は、はい！そうです！」

「それで、そのバスの進路は確か…：…：…こうか！」

彼がペンで繋いでいく線が、どんどん警察の目撃情報の印を通っていく…。

縮尺的には100mにも満たない地点、つまり印の近くには必ず、丸と垂直線で描かれたバス停の地図記号が描かれているのだ…。

「なるほどな…：…」

その行動図が完成するよりも前に、そこにいる人間全員が理解した。

完成した行動図の中、ペンが繋いだのは『公共交通機関の路線図と、目撃情報の場所の繋がり』だった。

27区全体のバス停と駅を『花菜村へ向かう』と仮定して繋げば繋ぐほど、目撃情報のあつた印を通る。

その全てを結び終えた頃には、ほとんどの印が線で結ばれていて、中には陪川さんが描いていた円からはみ出ている物だって、その線によって繋がれているのだ。

そこから、雪待とそのシンパが何故、目撃情報がまばらかつ27区を中心として見つかったのか、ここにいる全員がなんとなく推理ができた。

彼らは、敢えて身を潜めずに公共交通機関を使っていたのだ。

普通、目立たないようにこそそこそと行動すれば良い話かもしれないが、この世界にはそれすらも怪しむような注意深い人がたくさんいる。

そう言った人間からの自発的通報から、TK市部にいる警察官に目をつけられてしまうだろう。

けれど、雪待達はあえて『やんちゃをしていそうな若者達』を演じていたのだ。

共に屯たむろしたまま、不確定な場所でバスを乗り降りして目撃情報を多くすれば、”集まって行動していることに怪しい意図はない”と刷り込ませられる。

その目的は勿論、27区の住民と警察の目を欺くために…。

「さらには、駅や停留所は人が多いから、それで情報提供も増えてカモフラージュが出来たということですか…」

「交通機関を利用していたつてのは、そう言うことなんツスね!」

斐川さんと始堂さんも、その真意を掴んでいたようだ。

「ちゅーことは…：まず聞き込みを優先すべきは結局、花菜村になるわけやな…：。まあ、スムウラも思いどおりになってよかったやないか」

陪川さんが住浦さんの頭を鷲掴むように腕を乗せると、彼は「ガキ扱いすんな」と眉をしかめて振り払った。

「ただ…：それでも、何故彼らが捕まらないって言う理由がわかりませんよね…：。目撃情報が多いのなら、一つくらいはその違法売買の情報とかもあつて良いとおも…：う痛っ!」

弱気になっていた僕の頭を、急に住浦さんがバシンと叩いた。

「それを今から聞き込みして見つけるんだらうが」

企むようにニヤリと笑うその姿に、僕は作り笑いを浮かべる。こう言うところだけを見れば、彼は頼れる先輩なんだがな…。

「おっしや！まずは五人で花菜村行くで！もつと深いところまで聞き込みしたりして、奴らを追い詰めるんや！」

「了解っ！」

結局は大隊長に纏められてしまったが、僕の言葉によって僕らは事件解決のために動き出した。

今回は少し地道な作戦になるだろうけれど、それでも困っている人のためには仕方がない。

この前の事件よりも役に立たなければな…。

## 6—2 『破壊と幸運の隊長H』

現在の空模様も晴天。

真つ白い雲が羽毛のようにちらほらと出始めているが、この美しい青色が損なわれる程ではないようだ。

「すみません。見てないんで」

「そ…そうですか…ありがとうございます…」

アーケード街の入り口。

聞き込みを無愛想に切られた僕は、礼を一つだけ言って通りすがりの男性と別れる。

ちよつとだけ疲れた。

事情聴取といい、聞き込みといい、警察や探偵と言った仕事はこんなにも精神を削られるものだったのか…。

この前の日之出さんの時は誤って怒らせてしまったし、いまは—現在へいま現 在  
で、さつきから無視されたり、冷たくあしらわれたり、酷いときには酔っぱらったりリージエンのおっさんに蹴られたし…。

それでもめげずに続ける始堂さんや斐川さんは凄いな…。

届かぬ実力への妬みを溜め息にして換算しながら、僕は商店街の中へと入っていった。

ここ、赤茶のタイルが敷き詰められたレトロ感溢れるアーケード商店街は、スプリミナル本拠地のある花菜村の名物らしい。

通りすぎる風景は、活気溢れる八百屋の呼び込みや、冷蔵機能搭載の昔ながらのショーケースに入った肉や洋菓、名前もしらない床屋の赤と青のグルグル看板やら、如何にも昭和後期から平成の時代を守ってきた様だ。

店から香る惣菜とパンの香りや活気づいた声が、感じたことのない懐かしさを感じさせるが、通りすぎるリージエンや道行く人の持つスマートフォンを見る度、今はリージエン社会なんだと思いきや出させられる。

格差が大きな世の中であっても、まるで実家に帰ってきたかのように暖かな場所が、こんな近くにもあったんだな…。

「あつ、ユウキさんじゃん!」

すると、たまたま目の前から黄色いパーカーを着た跳ね髪の女の子が近づいてくる。

「あ、君は…ユイちゃんだっけ?」

今日の彼女は学生服ではなく、黄色いパーカーとショートパンツにスニーカーで、如何にも動きやすそうな格好だ。

「そつ! さつき、ハイカワのおじさんにも会ったけど…今日もお仕事?」

いつも元気な優衣ちゃんは、僕の前に立ってニカツと微笑む。

やはり協力者だから、彼のことも知っていたのか…。

「うん、ちよつと色々だね…」

いくら協力者だからと言って、犯罪者を追つてると知ったら驚かれるだろうか…。

「そつか…大変だね。今日も頑張つてね! 私も、ダンス頑張つてきますつ! じゃね!」

しかし、彼女は特になにも聞かず、軽く僕を応援してから手を振り、駆け出した。

あんまり詳しく聞かないのは、僕らの邪魔をしたくないからなのか…?

「いつも元気だなあ……」

韋駄天の如く軽やかに走る姿に、僕も元気をもらえた気がする。

高校生も、親子も、酔っぱらいも、どんな人でも元気そうに生活をする商店街は、この町の力の源なのかもな…。

しかし…こんなところに、本当に異能力犯罪者がいたのだろうか?

地図を見たときには、確かに花菜村の駅にも多くの目撃情報があったし、商店街の近くのバス停にもあった。

でも、こんなに陽気でほのぼのとしている場所に潜伏していると、あまり考えられないような、考えたくないような…。

「ユウキさん！お疲れさまですっ！」

すると、別の場所で聞き込みをしていた始堂さんが、僕を見つけて駆け寄ってきた。

このアーケード街は結構長いから、それぞれ分担して聞き込みを行っているのだ。

「あ…どうも…」

僕はよそよそしく頭を下げて応じた。

大人になってからというか、この職業についてから、少々人見知りになってしまったから、すぐには人を信用できなくなっている。

だから、こう言う人であっても、実は難アリでは…？なんてことを考えてしまうのだ…。

「大丈夫ツスか？疲れてないツスか？ユウキさんは始めてっスよね？  
こう言うの」

「あ、いや…一応、この前事情聴取に行ったりはしたので…」

「そうなんすね！じゃあ、勝手は分かってるんスね！スゴいツス！」

「いや…僕はそんな…」

「いやいや！俺…まだケツの青いガキで、こういうの全然慣れないん  
ス…。つい、舌打ちしたくなっちゃうんスけど…ユウキさんは文句言  
わずに頑張ってる、そういうところ、すごく素敵だと思うんツス！リ  
スペクトってやつでスツ!!」

前言撤回。

この子は確実に良い子だ。

僕なんかにも、こんなに腰を低くして接してくれるし、なにより今まで誉められたことなんて母さんから位しかないもんだから、彼が誉めてくれたことが、心のそこから嬉しいと思える……。

「あ…ありがとうございます。えっと…確か…」

「シドウ トウジっス！改めてよろしくツス！」

彼は初対面の時のように、僕に向けて背筋を正して敬礼をする。

「改めて、よろしくお願いします」

「敬語とか良いっすよ！俺はまだ21なんで、気軽に話してください  
！」

僕に謙遜する始堂さん。

ファーストインプレッションから、なんとなく後輩感があったけれど、やはり年は下だったんだな…。

それでも、経験は彼の方が多めだろうに、こんなにフレンドリーに接してくれるのは、少し心地良さを感じる…。

「あ…じゃあ、シドウくんが良いかな？」

「シドウくん…：良いツスね、こう言うのっ!!年の近い先輩ができた感じして、嬉しいツス！」

につこりと微笑む始堂くんの目はまさに十字星を描いているかのようにキラキラとしていた。

この子は本当に純粋で、可愛げがある後輩だ。

自分が学生の頃、後輩とは殆んど接点がなかったのだけれど、こんな後輩がいたらきつと楽しかっただろうし、今も職場には先輩しかないから、こう言う年下の後輩と、ずっと仲良くなりたかったんだらうな…。

「あ、そういや…他の皆さんは…？」

そう言えば、分担作業を開始してから、まだ始堂くんしか出会ってなかったな…。

「はい！ヒカワさんはあそこのオバさ…いや、ご婦人に聞き込みをしてるツス！それでハイカワさんは…」

始堂くんが目を向ける方向に、僕も視線を向けてみる。

そこは、くたびれて光る黄色い看板が目立つ、オープンタイプの総菜屋。

大きく広い三段机の上に、沢山のバットや鍋が置かれており、そこに裸の揚げ物やマヨネーズで和えられたサラダ等の総菜が鎮座し、その横には丸型パイプ椅子と長いパイプ机が乱雑に置かれた飲食スペースが儲けられ、壁には女性の裸体や昔売っていたお菓子の宣伝等の年代物のポスターが貼られている。

「ハッハッハッハッ！まだまだ若いなあ、キヨさん！」

そして、極めつけに飲食スペースの椅子に座って、机を叩きながら大声で笑っている陪川さん…。

「まだあたしや死にやあしないよ！食べ食べ！」

その向かいには、ニホンヤモリのリーゼンのお婆さんが、悪びれるような顔で威勢よく笑い、彼の皿に揚げ物に乗せた。

「イノスケさーん！今日も余り物持っていくかい？」

「おおっ！オバちゃんありがとう！工作中やから、また寄っていくわ！」

店の奥から顔を出した人間のオバさんに、陪川さんがニツコリと笑って応じる。

「……あれ、聞き込みなんですか……？」

酒を飲んでいないだけマシだけど……ただ単に食っちゃべってるだけにしか見えない。

というか、まさに昭和の風景って感じ……。

「そうツスよ！ハイカワさんは言わば地域密着型ツスからね！」

「密着型？」

なんか、土曜のお昼にやってそうな地方テレビ番組みたいだな……。

「ハイ！実際、こう言うのってよくあるんすけど、日常のなかに潜んでいる噂とか、そういう小さな世間話にも、僕らが気づかないような視点にヒントが隠されてるんすよね！それに特化した聞き込みが、ハイカワさんのやり方なんっす!!」

「なるほど……」

確かに、ほんの些細な情報であつても手がかりにして行かなければならないのは、聞き込みの基本ではある。

スプリミナルでは、その代わりが、優衣ちゃんと文華ちゃんということになるわけだ……。

噂調査の心得は、武装警察からも由来していたんだな。

「いろんな視点を大切にしないといけないわけか……」

「そゆことツスね！」

始堂くんは独り言にも相槌を入れてくれる。

彼の経歴は全く知らないけれど、もしかしたら根っから真面目な子なのかもな……。

「ところどころ……」



ふと、僕は総菜屋の反対側に目を向ける。

そこは、明確な入り口のない店と違い、しっかりと壁と扉が儲けられた酒屋なのだが、店の前には酔っぱらいが使うためのビールの空きコンテナがいくつか並べられていて…

「ZZZZ……」

そこに新聞で顔を隠して仰向けで寝ているスプリミナルの先輩…。

「あの人はなんで寝てんの…?」

正直、呆れて物が言えない…。

「スミウラさんはこう言うの向いてないって言つて、聞き込みは基本参加しないんスよねえ……」

あの人の態度ばかりは、さすがの始堂さんでも、溜め息がでるほどの困り物らしいな。

「この前…事情聴取はしてたくせに…」

住浦さんは確かに一番になれそうな素質を持っているから、こういう聞き込みであつても深いところまで聞けるはずだ。

それでもやらないと言うことは、たぶん彼が仕事をサボりたいというだけなんだろうな…。

「でも、それを言ったらなんか怒られるんで、めんどくさいんスよねえ……」

「あ、やっぱりシドウくんも思う…?」

「住浦さん自体はすごい人だと思うんですけどねえ…:なんかあ…あれですよねえ…?」

「だよねえ…:なんか、お金にがめついし…:」

「小さいことを正論攻めしてきますし」

「サボるときはいつつも寝るかゲームしてるかだし」

「その癖、そのゲームも下手ですし」

「聞き込みとかも、性格が関係してるから下手なんじゃない?」

「聞いた人を全員怒らせてそうツスね」

「「やあ〜ねえ〜」」

「聞こえてるからなっ!!」

「「すみませえん!!」」

怒号に驚いて背筋が硬直した。

愚痴話に花を咲かせて、怒られてしまった…。

彼は怒鳴った後、フンと息を着きながら、体制を変えてコンテナに座る。

ほんと、実力に見合わないもつたいたい性格をしているよな…。

てか、住浦さんはいつから起きてたんだろうか…。

「シドウ、終わったか？」

先ほどまで聞き込みをしていた斐川さんが戻ってきた。

「ヒカワさん！なにか、つかめましたか？」

僕と話しているとき以上に目を輝かせている始堂くんだが、帰ってきた返事は、残念ながら僕らの期待とは違うものだった。

「否、まだこれと言うものは掴めない…。ここらを歩いていた気がする、という情報がちらほら…。という感じだな」

「そうっすか…実はこつちもまだまだ決め手になるものがなくて…すみません、力になれなくて…」

申し訳なさに首を横に振る斐川さんと自責を思っで落ち込む始堂くん。

僕も殆ど断られたから、気持ちはわかる…。

「大丈夫だ…それに…」

「聞き込みなんてそんなもんだろ…掴むまでは何度も何度も聞かなきゃなんねえんだからな…」

斐川さんが励まそうとする所に割り込んできたのは、さつきからずっとサボっていた、うちの先輩だった。

「スミウラさん…」

「まっ…俺は俺で果報を待ってるわけだがな…」

彼は腰に手を当てて偉そうにしているが、なにもかつこよくない…。

「スミウラさんはなんにもやってないじゃないですか……」

「こう言うの向いてねえんだよ…。なんでかは知らねえが、大概、怒って帰りやがるからな…」

口を尖らせてぼやく住浦さん。

彼が聞き込みをやりたがらなかったのは、本当に想像どおりの理由だったわけか…。

「言った通りツスね…」

「うん……」

自分が言えたことではないけど…：なんか理由が悲しいな…。

「おーいスミウラアツ！お前もこつち来て食え！ヒカワ達もええでえ！」

僕らが屯たむろしていることに気づいた陪川さんが、大きな声で僕らを呼んだ。

この人、本当に聞き込みしてるのだろうか……。

「つたく……：とりあえず俺だけでもいかねえとうるせえから行つてくる…。めんどくせえからお前らは来なくてもいい」

住浦さんはいつもよりも面倒くさげに大きくため息をついて、陪川さんの元へ歩きだした。

彼ら乗り気では無さそうだが、あの威勢ハイカワの塊カマさんの扱いには、弟子（？）の住浦さんが一番適している気がするな…。

「じゃあ、俺は次の聞き込み行つてくるツス！」

そう言つて、始堂くんは敬礼をして、今度こそはとスーツのよれを直して意気込み、聞き込みへと駆け出した。

休日の南中、ライブフェスの開演時間のように賑わう商店街の真ん中、元詐欺師の若者とベテランの警官が二人…。

僕の隣にいる彼は、ふうと息を着いて、改めて聞き込みで得た情報をまとめたであろうメモ帳を開いている…。

彼は、どこか彼の後輩とは違う真面目な雰囲気雰囲気が漂っているから、なんかちよつと気まずい…。

正直、始堂くんとは年齢も近いし、なかなか馬もあつたから時間がつぶれたけど、斐川さんは年齢が全然違うし、なにより作戦会議の時に口走りそうになっていたあの言葉もある……。

少し言い出し辛いだが、ここはもうこちら側から「僕もちよつと聞き込み行つてきますね」と切り出すしかないか…。

「えつと…」

「全く……あんなのがスプリミナルとはな……」

しかし、口を紡がなければならなくなるような冷たい言葉が、また斐川さんの口から耐えられずに溢れでていた…。

その言葉は、換気扇の起動音よりも小さくて、普通なら誰にも聞かえないと思う。

けれどそれは、軽度の疑心暗鬼な僕によって、たまたま拾われてしまった。

「ヒカワさん……スプリミナル、嫌いですか？」

その上、やめておけばいいのに彼の言葉の理由を聞いてしまう…。

「…何故、そう思ったんですか？」

斐川さんは、住浦さんと同じ罪人である僕に対して、笑みを忘れずに毅然としている…。

「だってさつき…… あんなのがスプリミナルとは」 って言っていましたし……会議の時も「これだから特異点は……」 って言おうとしてましたよね？」

僕の問いかけを聞くと、彼の笑みが苦いものに変わる。

「アハハ……わかってしまいましたか……」

すると彼は、ため息を鼻から吐きながら、手帳を胸ポケットにしまい、自らの胸に手を当てる。

「始めに言わせていただくと、私は人間もリーゼンも好きです。どちらにも正義があって、どちらも思いやりの気持ちが溢れている。だからといって、どちらの至上主義と言うわけでもありませんし、少なくともこの街だけでも、互いの種族によって誰も傷つけられず、皆が平和に笑って暮らせる場所になったら良いのにな、って思います。ただ……自分は犯罪者と能力者が好きじゃないだけです……」

僕の顔をうかがって、まだもう少しの笑みを保っているのに、悲壮感を感じた。

「どうして……？」

「実は、スプリミナルができる前から、私は警察としてハイカワさんと行動を共にしてきました……。大勢の犯罪者を捕まえましたし、その中には同種の至上主義者もいました。しかし……その中でも、犯罪者の中の

人間は、あまりにも能力持ちが多すぎる……」

この言葉を聞いた後、彼の顔からは伺いの笑みですらも、忍に消えていた。

「手刀から風の刃を出して、無関係の人間を斬首した者、水の能力で溺死させた者、土の能力で生き埋めにした者……今浮かぶ中でも、これだけの異能犯罪が存在していたんです……」

残酷すぎて考えたくもないけれど、それが現実か……

「今日だってそうですよ。概要はわかっていますませんが、ユキマチは犯罪を起こす思想と異能力を持っています。それなのに……能力者と言うものは……っ！」

スプリミナルらを含む能力者の行動を思い出し、斐川さんは下唇を噛んでいる……

「力は正しいことに使えば、きっと世界へ素敵な効果を及ぼす存在の筈なんです。なのに……私が出会った能力者の中には善き者は一人もいない……」

彼の口からそんな言葉が出るのも、きっと能力者への偏見と怒り、そして彼自身が武装警察への誇りを持っているが故だろう。

言葉通りに自分自身を見つめ直すと、なんだか内蔵を鷲掴みにされたような気分になる……

罪を犯し終えた後に発症していても、僕だって同じ類いの犯罪能力者だと思う。

ミラーマフィアや雪待のように、誰か人を殺していなくたって、どこかの誰かを泣かした僕は、斐川さんの嫌う人間だ……

「僕は……」

だからこそ、自然と口から溢れた言葉。

「僕は……できれば、この能力を良い事に使いたいです……」

その言葉に嘘はない。

もうできるだけ、付きたくないから。

「そう……そうですか……」

溢れた言葉を受け止めてくれた斐川さんは、柔らかく笑みを浮かべた。

「すみませんユウキさん。急に不平不満を沢山喋ってしまつて…。大変申し訳ないことを…」

我に返つた斐川さんが、先程まで語っていた愚痴について、申し訳なさげに平謝りする。

「い…いえ！僕こそすみません…そんな嫌なことを思い出させてしまつて…」

斐川さんもそんなに気難しい人つてわけではないのか…。

「いやいや…私の方は別にそんな…。それに…それはハイカワさんが一番わかっていることかもしれないですしね…。私が貴方まで巻き込んで、こんなに能力者を否定するのは間違つていますし…」

僕を氣遣つて、言葉を取り繕つて謝ってくれる斐川さん、

だが、僕はそれよりも彼の口から溢れた『ハイカワさんが一番わかっている』という言葉に、気を引かれていた…。

「もしかしてそれ…ヴィーガレンツの総大将…のことですか？」

聞いた途端、彼は少し驚いていた。

「知つていたんですか…？」

「はい。スプリミナルに入ったときに、武装警察との連携について聞かされて、その時に…」

講習で聞いたのはほんの少しだったが、郷仲さんと陪川さん、そしてもう一人の人間が武装警察として活動していたことが、なんとなく引つ掛かつてはいたのだ。

「そうですか……」

すると、彼の表情がまた少し重苦しい物に変わる。

「実は、私は武装警察に来て結構長いので、その人の事も知っています…。彼はハイカワさんの事も、スプリミナルの社長の事も、親友として仲間として、大切に思つていた筈だったんですがね……」

過去形なのがまた悲しげに聞こえる。

信じるに足りていた人が、まさか信教的テロリストになるだなんて、きつと誰も思わなかつただろうな…。

「それと、スプリミナルの人間は誰もが罪を持っている、と言うのも私は知っています。だからこそ…私は一概に組織を信用することはで

きないんですよ…。勿論、スミウラも…」

今の斐川さんは、当人である僕に気を遣えるようなことをしない程、マイナスの感情が頓挫しているようだ。

彼の言うとおり、スプリミナルが罪人だらけなんてことを聞いたら、きつと誰も信用なんてしてはくれない。

だから証拠として、スプリミナルはその情報を隠すように都市伝説や噂の産物という存在になっているのだ。

自分自身だって同じだ。

僕が元詐欺師とわかれば、多く人間が離れていくんだろうな…。

なんて想像していたら、自分自信が虚しく見えてきた。

「大丈夫…ですか？」

斐川さんが僕の顔色に気づく。

「あ、一応…」

「すみません…いくら罪人だと言っても、今は仲間なのでですから、こんなことを言っただけじゃありませんよね。申し訳ない…」

そういつて、軽く頭を下げて平謝りをする斐川さん。

彼は厳格っぽくて少し怖いけど、しっかり礼儀がなっている人なんだな…。

「いえ…罪人を嫌うのは当然なので、大丈夫ですよ…」

彼の顔を伺ってそうは言うけれど、結局心が痛むのに代わりはない…。

この痛みも罪人が故。

我慢するしかないのだ…。

ガアンツ！

そんな感傷に浸っていたその時、総菜屋の方に金髪といくつものピアスを上げた、如何にも柄の悪い男が押し入り、陪川さんの胸ぐらを掴んでいた。

「ようやく見つけたぜ…てめえ…」

押し入って来たこと自体恐ろしいことだが、タバコと酒で焼けた掠れ声が、さらに恐怖心を煽っている…。

「あ？誰や？」

こんなに恐ろしい印象を前に出してるのに、陪川さんは彼に覚えがないらしい…。

「ふざけんじゃねえ…っ！数カ月前に俺を侮辱したこと！忘れたとは言わせねえぞジジイッ!!」

ガラの悪い男は、ポケットの中から大きな黒い物体を取り出すと、そこについているスイッチを押し、バチバチとスパーク音が鳴らした。

「あれ…スタンガンじゃ!」

助けに入ろうとしたが、斐川さんが片手を広げて僕を止めた。

「大丈夫ですよ。見ていてください」

「え…?」

武装警察の隊長であつても、スタンガンなんて相当警戒しなければならぬ武器なのに、なぜ止められるまでの自信が…。

「侮辱で…。ただ、未成年の煙草はアカンでっつて言うただけやんけ。あ、あのとき一緒に居おった子、もしかしてガールフレンドかなんかやった?」

一方、叔父さん特有の悪気もデリカシーもない発言に、男の怒りが逆撫でされる。

「いちいちうるせえんだよ!!てめえに復讐するために来たんだ…死ねやあつ!」

顔を赤茄子のように真っ赤にしながら、男はスタンガンを振りかぶり、僕は恐れで思わず目を閉じた。

「やめろっ!」

バァンッ!

住浦さんの声が聞こえた次の巡見、破裂音が商店街に鳴り響く。

「ええっ!?!」

さすがの隊長も倒れてしまったかと思つたその直後、間抜けな酒やけ声が聞こえ、恐る恐る目を開けた。

陪川さんは全くの無傷で、男の右腕にはなぜかバラバラになったスタンガンが握られている。

なにが起きた…?」



「あー…ごめん、また壊れてもうたなあ…」

何故か手を合わせて謝る陪川さんを、男はバツが悪そうに睨みつける。

「てめえ…異能力者か…くそがつ!!」

武器が故障し、状況が不味くなった男は、踵を返してその場から立ち去ろうとする。

「肉体<sup>トランス</sup>換装」

ガキインツ!!

「ぐぶうつー!」

しかし、住浦さんは腕を鉄化させ、逃げようとする男の首を巻き取るようにラリアットをかました。

「さつきからギヤーギヤーうるせえんだよガキが…。やめとけつつつたのに突っ走りやがって…。」

攻撃を受けて倒れた男を煽りつつ、彼は男の腕を背中に回し、体重をかけて動きを止める。

「ハイカワ、こいつどうする?」

住浦さんの問いを聞くと、陪川さんは爪楊枝を加えながらしゃがみ、男の顔をじっくりと見つめた。

「恐らく、こう言うことは始めてやる、今はユキマチの事件のが大事やから逮捕まではせん。これは俺の事情ってだけやし、第一お前が助けてくれるのは解つとつたしな」

陪川さんがニツと微笑むと、住浦さんは鼻で息を吐く。

「ふん…。だってよ、運が良いなあ?」

そう言つて得意がる住浦さんだが、その顔はなんだかまんざらでもないようにも見えた。

「まあ…俺だったら…てめえの腸<sup>はらわた</sup>がミンチになるぐらい、完膚なきままでボコボコにしてたけどなあ…?」

「ひ…ひいっ!」

先ほどまで死ねと粹がついていた男は、住浦さんの鉄化した拳と脅しに怯える。

誉められた時よりも脅迫する方が良い顔をしている先輩は、やはり罪人に間違いないのだろうなと、改めて分からせられ、それと同時に、陪川さんの目の前で起こった謎への疑問が浮かんだ。

「ね？大丈夫でしょう？」

陪川さん達の元へと歩き始めながら斐川さんが微笑む。

「ハイカワさんって、もしかして能力持ちですか!？」

足並みを揃えながら彼に問う。

あんな新品つぽそうなスタンガンを、僕が目を閉じている一瞬の間で、バラバラに壊してしまうなんて、さすがに異能力を疑った。

「違います…。彼は、そう言う体質なんです」

首を横に振った回答に、僕は首をかしげざるを得ない。

「パウリ効果のラツキー体質。人間が元々持つてる体質が、少し肥大してるだけなんですよ。なので、彼は意識をして壊すことはできず、異能力とも分類されていません」

「な…なるほど？」

わからない…。

彼が破壊さんと呼ばれている理由は分かったし、パウリ効果が簡単に言えば『人より物を壊しやすい』って言うのも理解した。

それにラツキー体質ってのも文字通り。

ただ、それら全てが同じ身体に同席していると言うミラクルに理解が追い付いていないのだ…。

リーゼンに適用するために人間に異能力者や特異点等の種類があるけれど、人間の本質もそんなに肥大しているなんて思いもしなかった。

「おつ、ヒカワとユウキくん、おつかれさん。ごめんなちよつと取りこんどって……」

「いえ、お気になさらず」

総菜屋に入ってきた僕らに気づいた陪川さんに向け、斐川さんは癖の如く敬礼する。

人が良い上にスタンガンを動作もせず壊せる彼が、まさか無能力者だったとは…。

世界つてのは、本当に見えなくてわからないものだな…。

「おつと…悪い、ちよつと一つだけ聞きたいことがあるんやけど…」

スーツの内ポケットから、彼は一枚の写真を男に見せる。

「こう言うやつ…知らんか？」

男の目の前に出されたのは、雪待の顔写真。

そこに映る顔を見るなり、男の顔からスーッと血が引けるのが見える…。

「し…知ってる…！知ってるから！もう暴力はやめてくれ！」

「どこや？」

ダラダラと汗を流しながら、男は話始める。

「よくゲーセンの裏で屯してんだよ…。ウイルハウスってところ！そこでヤクみたいなもん売ってるの見た…。けど、俺はそんなもん使ってねえ！だから放してくれ！」

汗まみれで助けを乞う男、先ほどまでの威勢は一体どこへ行ったのか…。

「うーん…。でも、お店のひとに迷惑かかってもうたからなあ…？せめてなんか誠意見せてもらわんと…」

陪川さんが迷っている最中、キヨさんと呼ばれていたヤモリのリージエンが、ふうと煙草を吹かした。

「いいよ、イノちゃん。離してやりな。誠意なんか食えたもんじゃないし、こんなのがいたら店の士気が下がっちゃうからね」

煙草片手に嘲笑する年配、上った煙が天井にぶつかって崩れる…。

そんな情景にちよつとしたハードボイルドみを感じつつ、この人の寛大さを知った。

「やって、もう悪いことすんなよ？誓えるか？」

「は…はいっ！」

「うん。良え返事や」

陪川さんと誓いを交わすと、住浦さんは鉄化を解いて彼から退く。

先ほどまで堂々と悪びれて復讐心を抱いていた青年も、今では小便でも漏らしそうな程のへっぴり腰だ…。

「とつとと行けカスが…」

「今度やったら、俺が直々にげんこつ食らわしたるからなあっ！」  
住浦さんの冷嘲と陪川さんの威圧に、青年は恐れのみならず即座に背を向ける。

「ぐ……ごめんなさいいいいいっ！」

そして、泣き出しそうな声を出しつつ、コメディ漫画のように爆走してどこかへ消え失せた…。

「二人とも…強い……」

この前も思ったけれど、”こう言うところだけ”はさすが先輩と言えるし、陪川さんも大隊長としてすごく偉大な威厳を見せてくれた…。

隣にいる斐川さんも、これには口角が緩んでいるようだ。

「よーっしやー！これでユキマチが居るところが分かった！キヨさん！オバちゃん！いつつもありがとうな！お総菜はまた取りに来るさかい、置いていて！」

口に加えていた爪楊枝を、遠くのゴミ箱にノールックで投げ捨てながら、総菜屋のおばちゃんに別れを告げる。

「はーい！」

「次来るまでにはくたばるんじゃないよ！」

「わかつとるわっ！」

彼はニヒヒとちよつと悪びれて笑った。

こんなふざけた喧嘩腰の会話も、陪川さんが地域とふれあい続けたからこそなんだろうな…。

こういう友達を一人も作ったことがない人間にとっては、少しだけ羨ましさや妬ましさを感じてしまったりする。

そう思うのも、自分が見た目よりも器の小さい人間だからなんだろうけど。

「つたく……ハイカワといるとめんどくせえことばかり起きる…」

一方、陪川さんに振り回されていた住浦さんは、ジト目で彼を睨む。「やけどラッキーや！相手のスタンガンが勝手に壊れてくれたし、なによりお前が居ったしな！」

「へいへい…」

やれやれと、疲れを溜め息に換算させる住浦さん。

色々と気になることはあるが、とりあえず、彼と陪川さんはなんとなく良いコンビなのは間違いないだろう…。

彼自信は陪川さんを嫌うが、彼が陪川さんを守ろうとしていた姿には尊敬する。

「あ、そういやさつき携帯拾ったのに、おばちゃんに見覚えないか聞くん忘れとった…」

「知らねえよ、金になるだろうから貰つとけ」

「なんでやねん」

まあ、金に関しては本当にクズなんだけど…。

「ヒカワさん！」

そんな中、聞き込みに行っていた始堂くんが帰って来た

「シドウ。なにかあったのか？」

「はい！奴らのいるところわかりました！近くにあるクラッシュユッていうバーの路地裏だそうです！」

始堂くんはようやく掴んだチャンスに喜び、笑顔で報告するが、その報告のせいで僕らの頭のなかに大きな疑問が発生した。

「ん…？ウイルハウスっていうゲーセンじゃねえのか？」

「え…？どういうことツスか!？」

「もしかして…あの不良は嘘を…？」

「でも…あの態度でデマカセを言ったようには…」

一時の疑心暗鬼が僕らの周りを舞う。

「ンンッ！」

しかし、重たい陪川さんの咳払いでそれは煙草の煙のようにスツと消えた。

「いや、どっちもあつとるよ」

彼はズボンの尻ポケットから古びた手帳を取り出して開く。

「総菜屋で話しとった時、実はユイちゃんとも出会ったんやけど、あの子は”ユキマチ達が喫茶店の路地裏で煙草吸ってるのを見た”って言うのとったし、キヨさんから聞いた情報やと、あいつらはいっつも、どっかの路地裏に入っては姿を消しとるらしい…。その上シンパも

多いっちゆうことは、ユキマチの囲いのなかに、異能力者がもう一人居るんやろう。任意の空間に移動させるっちゆう能力とかな…」

僅か数十秒の報告に込められた情報の量に、僕だけが驚いていた。「さっきのお婆さん達とただ喋ってただけじゃなくて、ちゃんと事件のことも聞いてたんですか!?!」

「まあなあ〜♪ほれ、オバちゃんらや女子高生は噂話が好きやろお? 半信半疑で信じとったけど、シドウやスミウラ達のお陰で、それがちゃんと確信できるものになったっちゆうわけや!」

発光ダイオードのように眩しくニカツと笑う陪川さんを見て、彼を疑っていた自分を殴りたくなる。

その上、彼は口先の推理だけではなく手帳の中には、一日では厳選しきれない誘うな量の情報が埋め尽くされていた。

半信半疑ではあったが、そのイメージに反し、彼は確かに地域と密着しながら、様々な情報を掴んでいたんだ。

この事実こそが、きつと今の陪川武装警察隊長という地位を作っているのだろう…。

「ちよつと待てよ!てことは、異能力の懐に入らなきや、確保もできねえじゃねえか!ミラーファイアみたいな単調な奴等とは話が違えんだぞ?!」

住浦さんの一言に、僕らは気づかされてしまった。

そうだ、例えポータル効果的な能力を持つてる者がいたとしても、それを探る方法は少ない。

ハイドニウムが効くのも特異点だけだから、それを使うのも無理だ。

ようやく身柄を押さえられると思ったのに、これでは…。

「大丈夫!」

そんな時、陪川さんが啖呵を切ったと思えば、不意に僕の肩に手を置いて身体を寄せる。

「その為に新人くん連れてきたんやがな!」

「へ…?」

「頼んだでえ…?スーパーレア特異点!」

「え……ええっ!?」

## 6—3 『破壊と幸運の隊長H』

それから聞き込みが終了してから、約40分くらい後の事…。

「どや？見つかつた？」

室外機と汚水の匂いが混じる路地裏の中、狭苦しい道を僕は一列で進んでいく。

先頭は僕だ…。

というのも、あのあと僕らはテレポートの異能力者と雪待を見つけるため、僕の所有する”無効化の特異”を利用してくと、陪川さん直々に命じられた。

僕の無効化の特異なら、テレポートをするための依代よりしろのような物を無効化し、彼らの潜伏場所をあぶり出すことが出来るのではないか？という作戦らしいのだが…。

「あの…見つかつたとかどうとかじゃなくて…僕『攻撃の無効化』なんです、そんなにすぐに入れるかわかりませんか？」

それに、僕はまだこの能力を住浦さんみたいに自在に操れている実感がないし…。

「大丈夫だ。特異の根本の性質が働けば、きつと奴らをこっちに引きずり出せるか、お前があっちに行けるかのどっちかだ」

ご丁寧ご丁寧に（しかも最後列にいる）住浦さんが解説をしてくれるが、正直ちんぷんかんぷんだ。

「ど…どういうことですか…？」

「だから。お前の『降りかかる攻撃が効かない』っていうのと『テレポートをさせる』ってのが互いに反発しあって、異常効果が発現するんじゃないか？ってことだよ。言わば、絶対に弾くスプレーがかかった物体と大量の水ってことだ」

「な…なるほど？」

とは言ったが、正直全くわからない。

全くの”ま”と”た”の間に入る”っ”の数が何個あるのか数え



られない位わからない。

そもそも例えすらも解りづらすぎるし…。

「あ、簡単に言えばレポート用のマスターキーって事なんじゃないツスカね…？」

始堂くんの例えでもっとわかりづらくなった気が…。

とりあえず、自分が歩いていけば、ホシが見つかるかも…ってことで良いのかな。

「とにかく歩いてりやいいんだよ。怪我はしねえだろうから安心して。多分」

「その多分が恐いんですって…やってみますけど…」

偉そうな住浦さんをあしらいつつ、僕は目一杯に手を伸ばして、レポートのためのポータルを探す…。

役に立たない自分が役に立つためだと考えれば、少しは気分が良くなるけど…なんか、単純に探知機としてしか使われていないような気もしなくはないんだよな…。

「…にしても、こんなやつがまさか無効化とはな…」

ふと住浦さんが呟き、少し胸にドキツとなにかが刺さる。

「ホンマ、トウリは良え子連れてきたなあ！これで事件解決の幅がまた広がるかもしれないなあ？」

その前を歩く陪川さんの言葉にまたドキリ。

「というか、無効化の特異点なんて初めて聞きました。まさかユウキさんの能力がそうだなって…。」

さらにその前を歩く斐川さんにドキリ。

「めっちゃスゴいつすよ!!俺もほしくなっちゃいます!!」

そして、僕の真後ろを歩いている始堂くんの言葉に、グサリとトドメを刺された。

この人達は…他人事だと思って…っ！

「ちよっと！プレッシャーヤバイです…」

ズゴオツ！

「っでえっ！」

僕がツツコもうとしたその瞬間、突然伸ばしていた手をデカイ掃除

機で吸われているかのようになり、目の前に現れた真つ白い渦のような物が僕の身体を引き込み出した。

咄嗟に見えた渦の先には、微かに白髪の子の姿も…。

「来たっ！シドウ！」

「ウツス!!」

斐川さんの声に従い、始堂くんが空かさず僕の足を掴んだ。

しかし、能力と能力のぶつかり合いによる力はすさまじく、今にも頬が千切られそうな程の大きな力が、僕を異空間に引きずり込もうとしている。

「す…すっげえ力ツス…っ！」

「耐えろユウキ！シドウもなんとか引きずり出せ！」

偉ぶる住浦さんの命令で、始堂くんが僕を引っ張る力が強くなつていく。

「いたたたたたたたたたたたっ！」

互いの力が強すぎて、今にも間接が外れそうだ。

僕の間接の中の気泡がピキポキと音をあげて潰れていくのがわかる…。

「いや…ちやう！お前らシドウを掴んで力抜け！」

そんな中、陪川さんは弟子とは逆の指示をする。

「ど、どういうことですかあ!?!」

吸い込まれている真つ最中の僕が聞くが、それよりも早く住浦さんが指示の意味に気がついたようだ。

「なるほど…てめえと一緒にそっちに行つて袋叩きにするってことか！」

「は…はいいっ!?!」

ちよつと待つて！

それだと引っ張るよりも重い力が僕の身体にかかるんじゃない?!

「なるほどーんじゃ、ユウキさんすんません！」

始堂くんのその言葉と共に、一気に四人の成人男性の体重が、この左足にズンとのし掛かり、まるでカートゥーンアニメに出てくる金床が足にのし掛かったような感覚が走る。

「痛い痛い痛い痛い痛いあああああつ！」

「うるせえええつ！とつとと入れえつ!!」

パキン！

うちの先輩の身勝手な怒号の瞬間、骨が外れると共に僕らは異能の渦へと引き込まれていった…。



「うわああつ！」

渦に巻き込まれた直後、突然地面に身体を思い切り叩きつけられる。

「うわっ！」

「おおつとお！」

「わわっ！」

それと同時に、武装警察の皆も着地した。

「よつと」

「ぐええつ！」

のだが、一人だけ<sup>スミウラ</sup>は、地面じゃなくて僕の背中に着地しやがった…。

「あ？なにやってんの？」

「あんたのせいでしょ！ちよ…：いったあ…：ちよつとまって…：足の骨外れてる絶対…！」

弱あ、とほざきながら、住浦さんが僕の背中から退く。

背中に乗られたのがトドメとなったのか、本格的に全身が痛くなってきた…。

たつた今、こういう”不可抗力の時には特異が発動されない”と分かかってしまったのも辛い。

痛みにもがいていると、ふと清んだ青色が見えた。

三途の川を渡りかけているわけではなく、この建物の天井が崩れているから。

どうやら、ここは廃棄途中で壊されている途中のビルの中のような…。

「な…なんだてめえらあつ！」

そこに響いた突然の大声にビックリし、地面に這いつくばったまま前を向くと、そこには多くの敵つい男達が僕らを睨んでいた。

辺りを見回せば、パンクファツションや剃り混み、マスク、釘バツド、メリケンサック等の武器を着けた、如何にも旧世代の不良つて感じの男達ばかりだ…。

「いきなり現れてなにもんだゴラア…」

「なんでここに来てんだあ!!」

「なに睨んでんだゴラア！」

威勢が良すぎる単調な脅し文句に、気弱な僕は脅えていた。

「ひ…いや、僕は…その…」

もしも、この足が脱臼せずに動かせるなら、仕事をすつぽかして光速で逃げていただろう…。

「動くな…！警察特殊認可特異行使結社と…」

「武装警察のおっちゃんやつ！ユキマチイ！おるんやろお!？」

しかし、僕の後ろにいる人々は、決して臆さない…。

武装警察の二人は拳銃型の汎用アーツを握りしめて銃口を彼らに向け、師弟は拳を握りしめながら、不良共を睨み付けていた。

威風堂々、先輩と大隊長は互いのエンブレムと警察手帳を掲げ、周りの不良達の顔は威圧から警戒へと変わる。

しかし、この場所の奥、ドラム缶の上に鎮座していた男は、他の不良とは全く違う。

白いYシャツとベージュのスキニー、そして眩しいほどの白髪…。

「…さすが…武装警察ですね…」

ドラム缶から飛び降りてニヤリと微笑む姿に、周りの不良達も注目して期待を向ける。

彼こそ僕らの探していた犯罪異能力者、ユキマチ雪待 コウジ弘治』だ…。

「ようやく姿を現したか…」

斐川さんは雪待に真っ直ぐ銃口を向けると、長への危険を察知して、新たに数名の不良達が現れた。

その腕には、違法取引で手に入れたであろう銃が握られている…。

「でも……私は貴殿方には従わない……殺れ……」

自発的に笑みを無くし、彼が右手をあげると、銃を握っている不良達が引き金を引いた。

ダダダダダダッ！

「肉体<sup>トランス</sup>換装っ！」

弾丸が陪川さん達に向いていると察知した住浦さんは、即座にトランスした後、身体の内を金属化させて、瞬発的に全ての弾丸を弾いた。

その間、コンマ数秒……。

「ツチ……きもちわりいな……」

守り終えた後の捨て台詞は、まさに歴戦の人間そのものだ……。

「鉄化の能力か……。ハイドニウムを用意しておけ！」

雪待の指示で、遠くにいた人間達が数名、アタツシユケースを取り出す。

どうやら、相手は本格的に戦闘に入る気のようにだ……。

「どうする？ハイカワ……？」

「戦闘に入るっスか……？」

斐川さんと始堂くんも拳銃を握る力が強くなり、住浦さんはゲームコントローラー型のエンブレムを取り出す。

ただ、その前に僕の足も治してください……。

「まずは待て……やることやらないアカンから……」

陪川さんは待機を命じると、僕らよりも数歩前に出た。

「ユキマチ。お前の目的はなんや？違法薬物売って、なにがしたいんや……」

陪川さんは情けをかけようと問うと、雪待は鼻で笑いつつ一歩前に出る。

「知っていますか……？この世界には迫害されている者が沢山いる……」

彼の言葉に陪川さんは眉をしかめ、雪待は大きく手を広げる。

「異種族だからと言って軽蔑され……異種族だからと言って殴られ……異種族だからと言ってなにもしてもらえない者がいる……。海外には……その異種族が大量虐殺された所もあるそうじゃないですか……」

彼の演説を聞き、不良達は悲しげに全員彼から視線を反らした。よく見ると、その中の数名は目に涙を貯めている者もいる。

「そんなの間違っている…私は…人間を代表して、人間を潰す……っ！リージエンに栄光を与える！そのためにハイドニウムを売った！そのために金を集めた！そして、人間を恨んでいる共謀者達を集めたあ！」

震える悲声から、少しずつ大声の早口になっていく様と、掻き乱れる美しい白髪。

その刹那、急に動きが止まったかと思えば、見えた顔は不気味な笑みを浮かべていた。

「そして…：…我らが新たなリー<sup>ミ</sup>ジー<sup>ラー</sup>エン至上主義<sup>マ</sup>となる！初めての人間の首領としてなあ!!」

彼が強き信念を声と共に吐き出すと、仲間の不良達も武器を天に掲げ、まるで森で屯している狼が同調して咆哮するように吠え出した。

その雄叫びは、この崩れたビルのなかで空回って響く…。彼らは狂っている…。

人間がリージエンを好きになるのは自由だが、崇めるように至上するのは間違っている。

そんなことをすれば、この世界にどれだけ大きな悪影響が滅ぼされるか…。

そう思つて眉間にシワを寄せているのは、僕だけではない。

「それが、お前の望みか…」

「ああ…。そして…私もいつか死ぬのだよ…：…大好きなリージエンに囲まれて…。」

ニタリと微笑みながら、頬に手を当てる姿は、異常なまでの幸せを表現していた…。

サイコパスとまでは言えないが、彼のリージエンに対する気の違った愛情は、僕のような凡人には理解に苦しむ。

「ありふれた理由だな…：…人間独特の同情つてやつか…。」

僕よりも長い時間、犯罪者と言う存在に触れている住浦さんは冷静に彼の思想を分析する…。

同情しているわけでは無いだろうが、犯罪理由くらいはわかってやろうとはしてるようだ。

というか、その前に僕の今の怪我也わかっててください、めっちゃ痛い…。

「武装警察。そして…スプリミナルと言ったか？ 貴様らも汚い人間共と同等だ…：即刻殺すつ！そして、リージエンに栄光をつ!!」

彼らの歪なコール & amp; レスポンスはまだ鳴り止まない。

まさにデモ行進の如くかき鳴らされる彼らのアンチテーゼは、圧倒されそうな程の音量と熱気だ…。

「ガツハツハツハ！ 威勢が良いのは、俺は好きやでえ？」

しかし、そんな熱気を冷めさせたのは、陪川さんの笑いだった…。

「でも…：それはあかんねん…。片方の至上思想で誰かを殺そうとするなんてのは、身の程も知らん愚か者のやることや…。人間には人間の、リージエンにはリージエンの良さがある…。それを認めずに消そうとしてどないするんや…？」

バアンツ！

突然、雪待の持つ銃から放たれた弾丸が、陪川さんの頬を掠める。

「黙れ。貴様らのような国家の犬の綺麗事は…一切聞きたくない…つ！」

余程、考えたくないことを言われたのか、銃を向ける彼は、また白髪を掻き乱しながら鬼の形相を浮かべている…。

「わざと外しとるくせに…なにをイキがってんねん…」

「だまれ…だまれこの人間風情があ！」

バアンツ！

その現象が起こったのは一瞬だった…。

陪川さんの態度に激怒した雪待は、彼の心臓に向けて弾丸を放った。

弾丸の速度など目で追える筈がない程で、そこから避けるのもほぼ不可能だ…。

バキュンツ！

しかし、陪川さんの心臓に弾丸が当たることはなかった。

たったコンマ数秒、風か鳥か、原因はわからないが、突然、上空から落ちてきた小さな瓦礫が、弾丸を打ち落としたのだ。

「あつぶなあー……もうちよつとで当たるところやったわあ……」

地面に落ちた弾丸とコンクリート片を広いながら、陪川さんがニヤリと笑う。

「どう言うことだ……!? 撃て! 撃て!」

雪待の指示に従い、多くの人間がまた銃を撃つが、今度は上空から人間をすっぽりと包めるような大きな瓦礫が降り、彼を守った。

「だから……撃つたらあかんで……」

瞬間、陪川さんが銃を構えていた一人の不良の懐に入る。

「言うてるやろおっ!!」

叱責と共に、鮮やかなアッパーカットが決まり、不良の身体が宙を舞う。

「ぐあっ!!」

さらには、その不良の身体がまた別の不良の上に着地し、二人の不良は目を回して気絶。

「くそっ!!」

最中、陪川さんの一番近くにいた不良が、その隙を見逃さず、彼の脇腹に銃口を近づける。

バアン!

「熱っ!!」

しかし、引き金を引いた途端に銃が暴発して、熱を帯ながらバラバラに壊れてしまった……。

「な……そんな!」

「ふんっ!」

好機を逃さず、突然の暴発に混乱している不良の腹を、陪川さんが殴って気絶させる。

なんとという幸運だ……。

確率を数字に直せば、幾分の何になるのだろうか……。

「この……国家の犬があ!!」

雪待のグループの一人が放った言葉で、彼を含む多くの雪待シンパ



達が、強い憎しみに似た視線と武器を僕らに向け始めた。

「全員！戦闘準備！」

それに煽りを受けた陪川さんも、その言葉で僕らを目覚めさせた。

「ハッ！」

「了解ッス！」

「はいよ……」

武装警察とスプリミナルの戦士達の目が一気に鋭いものに代わり、危険人物達に対抗するように武器を構えた。

「いや、できるわけがないんですけど……」

先程からずっと怪我をスルーされて、構えることすらままならない僕……。

それに”ようやく”気がついた住浦さんが僕をジト目で見つめながらため息をついた。

「んだよ……めんどくせえなあお前……」

「あんたがやったんでしようが！」

「わーったわーった……ちよつとジツとしとけよ」

住浦さんは僕の中からだの前でしゃがむと、パーカーの内ポケットから、赤黒い液体が入った注射器を取り出す。

「なんですかそ……痛っ！」

突然、有無を言わずそれを僕の尻に突き刺した。

なにを注入されたのか分からないまま、刺された後の痛みがじわりと薄れていく……。

「あ……あれ……う？」

その痛みの収束は針の痛みだけではなく、外れた骨の痛みすらも収束していき、たった数秒経過した頃には、しっかりと足が動かせるようになった……。

「スプリミナルお手製の治療薬だ。女医に感謝しとけよ？行くぞ！」

「あ……は……ハイ……」

本当に人間扱いが雑な人だ……。

やれやれと立ち上がりながら、僕も肉<sup>トランス</sup>体換装し、改めて戦闘態勢に入った。

「お前らやれえっ!!こいつらを完膚なきまでに叩き殺せ!!」

乱れた声で雪待が命令した途端、不良達は武器を片手に奇声をあげながら僕らに飛びかかってきた。

「アイツァンフオールド特異武装」

僕と住浦さんが声をあわせると、僕の右腕にはマゼンタの結晶の拳銃が握られ、住浦さんの両腕には銀色の結晶でできた巨大なナックルダスターが装備された。

あれが、先輩のアイツなのか…。

「おらああっ!」

「うおおっと!」

なんて気を取られていると、前から釘バットが飛んできた。

「だあらあっ!」

僕が特異を使って避けた途端、住浦さんは、アイツから鉄化させて、敵を殴り飛ばした。

「ほんつと…便利な特異だな…」

「あ…ども……」

「皮肉だよっ!」

そう言いながら、住浦さんは自身の後ろから迫っていた男を裏拳で殴って気絶させる。

不良は鼻をへし折られて傷つき、僕も僕で皮肉になんたなく心に傷を負いながらも、無策に襲いかかってくる攻撃を特異で避け続けた。

「死ねっ!!」

最中、ナイフを振るってくる不良が現れた。

なんとなく彼らの行動パターンは単調だつてことはわかった。

まあ分かったところで、どうやっても僕に攻撃は当たらないから、無意味ではあるんだろうけど…。

「…っ!」

しかし、僕の顔にナイフが振り下ろされようとした瞬間、後ろに住浦さんの背中があることに気づいた。

自分の特異は、攻撃を無効化すると同時に”攻撃を貫通させる”と  
言う内約もある。

このままでは彼に突き刺さる…！

「スミウラさ…！」

ガアンツ！

彼に気づかせるために声をかけようとしたその直後、僕の身体を通り抜けて、住浦さんのナツクルダスターが、不良の顔面にめり込んだ。

「邪あ魔あつー！」

そのまま拳を押し出すと、不良は鼻血を吹き出しながら倒れてしまった。

「新人。俺が背後から来る敵が解らねえ訳がねえだろ？俺はスプリミナルで一番になる男なんだぜ…？」

ニヤリとほくそ笑みながら、彼はまた迫ってくる別の不良を思い切り殴り飛ばす。

「だから…：てめえはてめえで、生き残ることだけを考えとけ!!」

勝利への一笑と共に、彼は僕の背中を押しして、自分の戦いへと向かった。

「は…：はいっー！」

さすが先輩だ…：たくましい…。

生きる云々よりも、恐らく棒立ちしてても生き残れる自信はあるけども…。

「くらえっー！」

でも、前に住浦さんから殴られたときのようにな、何かの拍子に自分にダメージがいく可能性もある。

背後から殴ろうとして、すり抜けて転んだこの目の前の不良のように、安易に勝てると思っではいけない。

出来るだけ注意を払うんだ…。

皆が傷つかないように…。

「シドウー！」

戦いの最中、斐川さんは後輩に声をかける。

「はいっー！」

以心伝心、斐川さんの考えていることを察したようで、始堂くんは銃を持ちながら、軽い身のこなしで群れの合間をすり抜けて、斐川さ

んから対角線上に離れた場所へと移動する。

武装警察は戦闘服代わりとして、スプリミナルが戦闘時に使っているトランススーツとほぼ同じ素材の衣服を身に付けているため、バツトくらの衝撃なら少々耐えられるし、機動力にも猛っているらしい。

「用意っ！」

斐川さんの一声で始堂さんが振り返り、二人は不良達に銃口を向ける。

「ファイヤ！」

バアンツ！バアンツ！バアンツ！バアンツ！

多くの不良を簡易的に挟み込んだ二人は、掛け声と共に敵の手に向けて弾丸を連射する。

「痛っ！」

腕を打たれた者達は、思わず武器を落とし、真っ赤に晴れ上がった患部を抑えた。

彼らの使う武器も汎用型アーツなのだが、日本の警察は未だに重火器の使用に白い目を向けられているため、銃の中に入っている弾丸は、BB弾やゴム弾に近い素材のものようだ。

「ふうっ！」

不良達が怯んだ隙を見逃さず、始堂くんはポケットから、特殊素材の縄を取り出すと、高速で不良達の身体に巻き付けた。

「確保ッ！」

日に照らされて輝く縄をぐいと引っ張りながら、彼は縛られた不良の身体に脚を乗せ、斐川さんにサムズアップを向ける。

声をかけて僅か三十数秒、慣れた手付きで捕らえた二人。

彼らにおいても、凡人の僕からすれば『すごい』とか『さすが』とかの語彙力崩壊程度のリスペクトに値する。

どれだけ戦おうとしても、弱い僕は逃げることしかできないからな…。

「ガキども…お前らはめっちゃアホやなあ！」

その一方で、不良達に囲まれながら、陪川さんは仁王立ちでガハハと笑う。

「うるせえクソジジイがあ!!!」

必要以上に怒る不良が、似合わない金髪を靡かせながら金属バットを振るう。

「ぐ…!?!」

だが、彼は安易に殴られるような男ではない。

「やけど…その度胸はおもろいわ…」

片手でつかんだバットを握りしめて凹ませながら、彼は笑顔のまま不良を睨み付ける。

「この因業ジジイがつ!」

反り込みをいれた不良が、背後からメリケンサックをつけた拳を向ける。

「ふううんっ!」

「うおっ!うわああああっ!」

すると、彼は手に持つバットを金髪の不良ごと、反り込みの不良にぶん投げて、二人を豪快に撃退した。

「お前らええ態度やなあ…?まあ、陪川流元師範として…:…その度胸くらいは…」

最中、立て続けに五人ほどの色とりどりの髪をした不良が、一斉に金属バットを彼に向けて振り上げる。

「買ったるわあ!!」

振り下ろされた瞬間、陪川さんは大きく深呼吸をしながら拳を振り上げる。

すると、その拳は丁度バッドが重なった点を射抜き、それを持っていく五人の不良の頭に一斉に帰る。

「ぶっ!」

ゴン!と鈍い音を響かせながら、男五人は目を回し、額から血を流して倒れた。

転がる身体を避けながら、また戦いに出向く背中を、僕は見ていた。

「ハイカワ流…?」

首を傾げつつ、不良からの攻撃を避ける。

「うっ!陪川さんは武術の名門の末裔なんですっ!」

背中を殴られながら斐川さんが僕の疑問に答えると、陪川さんが割り込むように、彼を殴った不良の顔を殴って失神させた。

「色々あって、道場はもう閉めてもうたけどなっ！」

彼はそう言い残すと、今度は始堂さんを助けに向かう。

武術の名門の家元だったと言われれば、確かにここまで強いのは納得だ…。

「そんで…俺がその弟子だった…って訳だよ…っ！」

そう言っつて、襲いかかってきた不良達を三人ほどまとめて殴り飛ばす住浦さん。

そうか、同じ道場の下で強さを高めあってたから、今までの関係があつたわけか…。

「おうスミウラ！久々に見たつたらどうやあ？新人もおるんやしなあ！」

住浦さんと背中を合わせて敵を蹴飛ばす陪川さん。

彼の提案を聞いた住浦さんは、フンと悪く微笑んだ。

「こんなチンピラどもに使いたかねえが…まあ、りよーかい…」

すると、彼はガンとナツクル同士をぶつけると、若干、左手を前に出しながら両の拳を引き、独特な型に構える…。

「陪川改流…：鉄ノ武…」

音を出さず、大きく深呼吸をすると、金属化させていたアーツのオーラがうって変わり、重々しい銀色に変わる…。

「アイアンクラスタツ！」

水原くんの時のように、技名を口に出した途端、その不意を突こうと武器を構えていた不良達に向けて、連続でパンチを繰り出し、腹に数発の無機質な拳を食らわせた。

いつも高飛車に笑う彼だが、この鉄の拳を食らわすときだけは、極めて真剣な顔をしている…。

「ツチ…もつと早くしねえと…」

攻撃が終わり、不良達が白目をひんむいて倒れていく。

その最中、彼は腕につけているスマートウォッチを見ながら舌打ちをし、また戦いへと向かっていった。

正直、スプリミナルの先輩達が繰り出す必殺技のような物には、いつも感激させられる。

カッコいいと言う少年の感情を揺さぶられているという方が、似合ってるか…。

「皆…ホントすごいな…。」

なにもない自分はただ避ける位しかまともにできないし、陪川さん達のようにもできない。

こんな自分のまま、ここに居たくないとは思うのだが…。

「おらあああつー！」

突然、また背後から釘バットを振るってくる不良に出くわす。

「うおつとつー！」

まあ、先ほどからルーティーンの如く繰り返しているが、今回もそれは同じくして、バッドが自分の身体をすり抜けるわけだ。

「…っ!?ハッ!?何なん!?!」

なにも見ていなかったのか、不良は僕の特異に驚き、咄嗟にしゃがんだ僕の顔面を、何度も何度もバッドで殴り飛ばそうとするが、全く当たらない…。

「えつと…。」

殴られ続けて、なんか気持ち悪さが募る…。

これ以上付き合っても無意味だと悟った僕はやれやれと立ち上がった。

「うわっー！」

すると、不良は攻撃的されると思ったのか、驚いてバットを投げて地面に尻餅をつく。

すると、宙を舞ったバッドが、グルグルと地面に落ちると共に、タイミングよくバッドの先が不良の股間に当たった。

「いいっー!つだあ…!」

やはり、どれだけ鍛えてもソコだけは強くなれないようで、彼は涙目で踞ってしまった。

悪いのはそっちだけど、なんだか罪悪感が…。

「はい、お縄！」

それに見かねた始堂くんが、縄を持って彼をさつと縛った。

「自分で言うのもなんだけど……便利だなあこれ……」

「でも、すごいっすよ！ちゃんと対処はできてるんすから！」

始堂くんにも能力を称賛されるが、なんとなく自分が能力に使われているような気もしなくはない…。

「このやろおおっ！」

今度は、束で僕を囲うようにかかってきても、全く攻撃は聞かないどころか、身体が透けてしまったものだから、それぞれが味方の頭を殴ってしまった。

「てめえ、なにしてんだこの野郎！」

「ああ!? こっちは血が出てんだよ！」

「かたわにしてまるどおめえ！」

「てめえはなに言ってるかわかんねえんだよ!!」

お互いを殴ってしまった不良達は、そのまま普通に殴り合いの喧嘩になってしまった…。

やはり、寄せ集めの集団だから、彼らの結束力はあまりないようだ……。

「始堂くん……どうしょこれ……」

「後で斐川さんとまとめて取っ捕まえときます。まあ、もうほとんど片付きましたけど……」

始堂くんの言葉を聞き、改めて周りを見してみる。

確かに、僕らに楯突いていたほとんどの不良が、縄に縛られているか、気絶して延びているか、地面に這いつくばっているかの状態だ……。体感時間はわからないけど、もうこんなに倒したのかと考えると、なんとなく強くなった気はする。

まあ、ほとんど倒したのは陪川さんと住浦さんなんだろうけど…。

「さあっ…次は…お前やユキマチイっ！」

気絶している不良達の中、白髪を掻き乱していた男が一人、立ちすくんでいた…。

「ユキマチさあんっ！」

縛られている不良の一人が、情けなく彼の名を呼ぶと、彼はその不



良を睨む…。

「役立たず共が…」

舌打ちを混じえつつ、小声でシンパ達の悪口を呟きながら、僕らを怨めしく睨む雪待。

屍のように延びている不良達の力は借りれない。

彼がお縄につくことになるのは、もう秒読みだろう…。

少し疲れが足に來たのか、僕は一瞬の安堵と共にストーンと腰を下ろした。

「ん…？」

そんな中、突如、白くて柔そうな物が、ハラハラとここら一带に降り始めた…。

肌に着地すると、冷たさがやんわりと伝わる…。

「雪か…？」

しかし…雪が降るには、さすがに早すぎる…。

「…っ！」

気づいたときには遅かった。

途端に、雪が身体についた人間が、身体が地面にズシンと落ち、身体を動かそうとするも、なにか痺れているようで指ひとつも動かなくなってしまう…。

「ツフフフ…。 どうですか…？ 私の異能力『雪童子』は…」

異能力を疲労し、得意気に笑う雪待。

「雪に当たったら…体が重くなる…重力操作異能やな…」

「ツチ…だっせえ名前つけやがって…」

腹這いになった住浦さんと陪川さんが、異能の分析や誹謗を、苛立ちと共に溢す。

そう言えば、これに似たのを僕は見た覚えがある…。

スプリミナルに入るよりも前、言わば入隊試験の時、意気揚々とあおいちゃんが披露していた。

重力操作をクリアするには、相当な力や工夫が必要だから、きつと能力の保有者は優越感に浸れるんだろう…。

「ハッハッハ…それでは失礼しますよ…。」私「は忙しいので…」

優雅に笑いながら、仲間を置いていこうとする彼に、重力操作を受けている不良達は驚愕する。

「ユ…ユキマチさん！俺たちは…!？」

焦る一人の不良を雪待はゴミを見るような目で、開いた彼は掌を彼に向ける。

バンツ！

すると突然、彼に声をかけた不良の全身が、重力の影響で地面にベツタリと張り付いた。

「…っ！な…なにを…!？」

「…人間一人殺せないチンピラに用はありませんよ…!？」

蔑んだ目を向けられる彼は、少しずつ少しずつ、その身体を地面にめり込ませられる…。

「ぐ…ぐあ…や…やべ…で…!？」

ベギンツ！

全身の骨が一齐に折れたような音が辺り一帯に響く。

昔見た小説では、死体はアルミ缶のようにくしゃりと潰れるなんて書いてあった気がしたが、この世界ではそんな訳がなかった。

衝撃的なデカイ音と共に、グジュリと内蔵や脳が潰れるような音が、微かに存在している…。

「う…っ!？」

僕は吐いた。

あまりにもエグく、唐突すぎる死を目の当たりにして、平気なわけがない…。

「異能で潰しやがった…。仲間を…」

この愚行には、さすがの住浦さんでさえも引いている…。

仲間達の目の前で、仲間だった人間を重力で押し潰すなんて、本来あつてはならない、酷く愚かな行いだ…。

「お前…何やったかわかつとんのかあ!!！」

鬼の形相を向ける陪川さんだが、この重犯罪者が彼に向ける視線は、旧北海道クトルストに吹く豪雪よりも冷ややかだ。

「役に立たないゴミは捨てるだけ…それだけですよ…!？」

「この…人でなしがあっ！」

非道な雪待への怒りを糧とし、彼はなんとか重力を打ち破ろうとするが、身体は震えるだけで一ミリも持ち上がらない。

「煩わしい…」

「うぐっ！」

その上、彼は陪川さんにのし掛かっている力を強め、馬鹿力で技を解かれないようにと釘を刺した。

敵の体を地面に張り付けたのだから、誰もかれを追ってはいけない。

完全なる勝利だ。

きつとこの大犯罪者はそう思っているだろう。

唯我独尊、雪待はふんと得意気に鼻息を吐いて、僕らから背を向ける…。

「それでは…皆さん。これでさようなら…」

6—4 『破壊と幸運の隊長H』

バキユンツ！

「……っ！」

しかし、その動きを止めるように、一個の弾丸が彼の髪を掠めた……。

「な……なぜだ……私の異能力は……全員に適用されるはず！」

人間達がへばり付いた地面の真ん中、逃げられなかった男は、今まで見たことのない光景に戸惑っている……。

「何故あなたは効かないっ!!」

それもその筈だ……。

ずっと優越感に浸っていた男の最大の武器が、一瞬にして無効化されたからだ。

彼の異能力は紛れもない攻撃の一手。

だからこそ、僕の特異は発揮されたのだろう……。

「この……っ！」

どれだけ彼が手を前に出して異能に力をいれようが、僕にそれが聞かれない。

「許されませんよ……ユキマチさん……」

焦りで汗まみれになっている犯罪者を、僕はキツと睨む。

僕は彼の所業を受け入れられない。

社会として許されないことをしていただけならまだしも、彼はついに人間としての禁忌を犯したのだから……。

「仲間を殺すのは……絶対に……！」

僕は彼を軽蔑する。

自分の中にいる背後霊達が『お前も許されない』と口を揃えて、僕の心臓を押し潰そうとしても、今だけなら僕は僕を蔑ろに出来る気がした。

彼は不可抗力でもなんでもなく、まるで消しゴムのカスでも捨てるかのごとく、仲間を殺したのだから……。

「ユウキさんっ!」

未だ異能に侵されている斐川さんが名を呼ぶ。

「代わりに確保してください…っ!彼は絶対逮捕対象です!」

懇願する斐川さんの目が、僕の使命感を揺すぶる。

「……はい!」

苦しみながら願う彼のため、僕は改めて武器を握りしめ、雪待を睨みながら歩きだした…。

「や…やめろ…っ!来るな!」

得意技の術を失った犯罪者は、矜持きやうじを崩壊し始めている…。

「うっ…うわあああああっ!」

バン!バン!バン!バン!

自分の異能力を誇っていた彼は、ハイドニウムの弾丸を乱射するが、焦りで手元が狂っているのか、僕の身体には掠りもしない…。

「ぐうっ!あっ…!」

どうやら、自分の能力を過信しすぎていたがためか、弾の補充を十分にしていなかったようだ…。

彼が自尊を高め続けていたことに後悔した頃、僕はついに彼の間近に辿り着く。

「ま…まっ…私…私はまだここで終わっては…!」

僕の顔を見るなり、彼は恐れで尻餅を付いて、命乞いに似た言葉を溢し始めた。

惨めとは、こう言う事を言うのだろう…。

「撃て…!新人っ!」

こちら側の勝利を悟った住浦さんが僕に指示を飛ばす。

「異能力者は…機能を停止させとかねえと何をしでかすかわかんねえ!撃てえ!」

重力に耐えながら必死に訴える彼に頷き、僕は拳銃型アーツを雪待の前に向けた。

「ひいひいっ!」

彼の目の前に、カチャリと銃口が向いた途端、情けない涙声を出しながら、頭を守るように地面うずくまに踞った…。

彼の身体を撃てば、この事件も終わる。

きつとこれで、陪川さん達も元に戻るはずだ…。

カタカタ…。

引き金を撃てばそれで終わる。

たった数秒の動作だ。

カタカタカタカタ…。

こいつは大罪人だ。

テロ等準備罪にも値する。

射撃許可は出ているから、撃たれて当然の人間なんだ！

カタカタカタカタカタカタ…。

なのに…なんで僕は、トリガーに指を掛けることすら出来ない！

これで全部が終わるはずなんだ。

撃てば郷仲さんや皆に誉められて、罪人の僕も少しは世間のために

活躍も出来るはずなんだ！

「う…ううっ…」

撃て…撃てよ…。

お前が撃たなかったせいであつて言われたいのか？

とつとと撃つて、この面倒な事件からおさらばしよう。

「ぐあっ…ぐ…ぐ…ぐう…」

自分を肯定し、鼓舞し続けた。

仲間達からの期待も自分自身に突きつけた。

不良の身体を殴れたはずの自分のくせに、それでも何故かトリガー

を引くこと出来ない…。

しまいには、「お前が引き金を引く権利などない」と自分の中の背後

霊が、僕の声よりも大きく訴えかけて来ている。

撃たれたら、痛い、血が出る、恨まれる…。

背後霊の上に、そんな他者の痛みと自責の念が邪魔をしている…。

「やめろ…。」

考えるな…引き金を引け…。

お前でもできる簡単な作業だろ？

いつまで弱い気にいるんだ…っ！

「く……くそ……」

もしも僕が強い人間だったら、きつと目の前の敵なんか、今頃ズタにするくらい弾丸を放っているはずだった。

けれど、中途半端な恐れ of 思いが勝つてしまい、未だに弱い僕は拳銃を下ろさざるをえなかった……。

「ば……バカにしゃがってえええつ！」

すると、馬鹿にされたと誤解し自棄になった雪待が、拳銃を捨て、僕につかみかからんと突進してきた。

「う……うわっ！」

突然の寄行に驚き、思わず僕は手を前に出して突進を防ごうとする。

なんとか押し倒そうとはするのだが、雪待の目は、もう人間としての輝きを失っていた。

ありもしない死の恐怖で苦しませることこそが、非道なのかもしれない。

もうこれ以上苦しませず、楽にさせてやろう……。

「ぐ……ぐあ……！」

そう考えた僕は、ポケットの中に入っていたプリズンシールを咄嗟に取り出し、我を失っていた彼の身体に突き刺した。

パンツ！

破裂音と共に、雪待の身体が赤黒の鳥加護状のクリスタルの中へと吸い込まれる……。

彼を楽にしてやるために、咄嗟に思い付いた方法はこれだけだった。

プリズンシールは、傷が付いていない人間にも有効で、暫くの間は、すし詰めのように狭い場所に拘束されるから、異能力も使えないし、ましてや傷つくこともないはず。

叶さんの講習の時、身をもって、その事を実感したことをふと思いつけたから、彼を傷つけずに拘束できたのだ。

ただ、講習の時に聞いたよりも、破裂音が軽いような気がしたのは気のせいだろうか……。

「…つおう！ああ…重かった…」

雪待がプリズンシールに収容されたことよって、陪川さん達に掛かっていた異能力も解けたようだ。

武装警察の皆も、ようやく一息付ける。

残された不良達は拘束されたまま、殺された仲間を悼んだり、雪待に着いていったことを後悔したり…。

それぞれの後悔や悲しみが、こんな奴らにとっても、絆に似たものがあつたことを証明していた。

とりあえず、長くもハラハラしたこの事件も、これでようやく終わりか…。

「ようやくたな！ユウキく…」

ガッ！

陪川さんが僕に賛辞を掛けてくれようとした刹那、同じく異能力から解放されていた住浦さんが、突然僕の胸ぐらを掴んだ。

「な…なんですか…!？」

彼が僕を睨む眼光は冷たい…。

「…お前が弱いのはわかっていた。だが…それでも、なんで殴るなり撃つなりしなかった？」

静かに怒っている顔を近づけ、僕に追求する…。

「スミウラ。捕まえれば終わりやったんやから…怒ることやあらへんよ…」

「あんたは黙つてろ！」

怒鳴つて師匠を一脚する彼に、僕は思わず肩を震わせた…。

「答える新人…。なにを躊躇ためらつてたんだ。人を殺したこの屑は、殴られても当然だったはずだろう？」

「…ぼ…僕は…まだ…その…」

眉間にシワを寄せて追求する姿に、僕は怖じ気づいた…。

まるでサイのような猛獣が僕に鋭く硬い武器を向けているようだ…。

「殴られて…当然であつても…これ以上傷つけるより…拘束した方が最良だと思いました…」



九死の気迫から逃げ出すように、ツギハギだらけの言葉を繕うと、住浦さんは僕を背中から地面に叩きつけた。

「くそが…」

なんとか僕は、状態を起こして立とうとすると、彼は肩にそつと足を置く。

「プリズンシールは医療機器も兼ねている。だが、事故の防止が故に、回復量が一定になると自動的にこれは割れて、中から人間が出て来る仕組みだ。だから、ダメージ量によっては、プリズンシールが効かなくて脱走する奴だっているんだよ…」

彼は顔を近づけながら、僕の手から落ちたプリズンシールを拾い上げて見せる。

「役立たずになりたくなきや、しつかりと道具の使い方を学べ。スプリミナルに来たなら、犯罪者に慈悲を向けるような考えは捨てろ。撃つ撃たない、殴る殴らないの選択じゃなくて、いつでも”殺せる”準備をしておけ…」

怒りの眼光が僕の胸を焼く。

なにかを傷つけるのが嫌いな自分にとって、罪人を殺せるための準備など、極めて酷なもの…。

言葉の衝撃で返事もできない僕を見て、住浦さんは呆れと共に大きくため息を吐いた。

「ああーあ……このあまちゃん見てると気分が悪くなってきた…」

彼は僕から足をどかして背を向ける。

「とつとと雪待こいっをブタ箱こいっにぶちこまなきやなんねえな…。俺は先に帰るぜ、ハイカワ」

そう言うと、住浦さんは師匠達に背を向けて手を振り、歩いて行ってしまった。

「スミウラー」

陪川さんが怒り声で呼ぶが、彼が立ち止まることはなかった…。

先輩が出ていき、えらくしんとしてしまった空間の中、僕の胸には申し訳なきが残る…。

「…………めんなさい…」

無言に耐えられず、僕は地面に尻をつけたまま、沈黙を破る。

雪待を殴れずに皆さんの手を患わせてしまった事と、住浦さんの機嫌を損ねてしまった事。

せめてもの思いで、武装警察の皆に謝る位しか、罪滅ぼしはできないと思つた…。

「ユウキさん…あなたのせいじゃ…。」

斐川さんと始堂くんが宥めてくれるが、僕は首を横に振つた。

最低なことをした罪人であっても、人を撃つことを躊躇つた自分は間違つてゐるのだろうか…。

確かに、後から治療されることが前提であつても、彼は僕と同じで、死相応の報いを受けなければならぬ存在だ。

でも、自分の中にいる背後霊達が『お前に裁く権利はない』と、まだこちらを睨んでいるような気がした…。

結局、この前の兼井さんの事件の時と同じだ…。

正しいと思つていた選択が、結果的に誰かに迷惑をかけていたのだから…。

「…ユウキくん」

自責の念に潰されそうになっていた時、陪川さんが僕の隣に座ると同時に、優しく僕の背中を叩いた。

「心配すんな。シミウラは昔から完璧主義者やから、こう言う慈悲をかける手段が気に入らんつてだけやろう…。」

そうは言つてくれるが、結局、彼が僕にぶつけた言葉が揺るぎなく正しいと思つてる自分がいて…。

「シヨボくれた顔すな！そもそも君は捕まえたんやから、それだけでもマル儲けや！」

彼はガハハと笑いながら、僕の背中を強く叩く。

「それに、シミウラはああ見えて、お前のこと心配してんのかも知れんな…あいつ、一度自分の全部を無くしとるから…。もしかしたら、自分が至らんかつた部分を重ねてもうたんかもしれんしな…。」

「そう…なんですかね…？…。」

「あくまでも可能性や。あいつは俺でもようわからん人間やからな

…。まあ、俺は君のやり方、好きやったけどな」

彼は僕にニツコリと笑顔を近づけた。

大ベテランであろう彼でも、住浦さんのような人の事は見えないと  
きがあるんだな……。

「ただまあ…ユウキくん。殺せる準備なんて、俺もできてへんよ」

「え…？」

彼は僕から顔を背け、片手で自分の顔に手を当てる

「あいつは極端やねん…。前まで騙せても殺せる勇気の無いヤツに殺  
せなんて、マフィアやテロリストそのものや」

陪川さんは小さくため息をつくと同時に、顔面についた大きく荒々  
しい傷をそつと撫でた…。

「それに…いつでも殺せる準備なんかできとつたら…俺らみたいな正  
義の組織なんかよりも、ヴィーガレンツの方があつとるからな…」

そう吐露する陪川さんの横顔は、今日ずっと浮かべていた逞しい笑  
顔とは対照的だった…。

犯罪者ではなくヴィーガレンツの名を出したのは、きつと旧友の事  
を思っているからだろう…。

殺せる準備ができるのならば、正義にも悪にもなれる…。

今、ここに郷仲さんが居たなら、そう言うだろうか…。

まだ殺せないから、自分はまだ悪にはなれない。

そう思うと、ほんの少しだけ自分の選択も悪くないのかなとは思え  
た…。

「辛気臭いのはやめやな！こつから、君がどうするか考えてやってけ  
ばええんや！」

気分を変えるためか、彼は立ち上がって腕を組み、まっすぐにそう  
言った。

「どうするのですか…」

「ああ。まあでも…まずは悪人を殴れるほど強おならなあかんの  
は事実やな」

少し胸が熱くなっていた中、氷を付けられたような感覚が走る…。  
「正すために殴ることは悪いことやない。誰かの悪行を止めるため、

アカンと思つたことを止めるため、弱いもんを助けてやるため。俺はそうやって犯罪者をなぐつて、ここまで来たな。」

「でも…僕は……」

殴れると言う言葉にたじろぐ僕だが、そんな弱気な背中を、陪川さんがまたバシンと強く叩いた。

「そんな急がんでええねん！ 一人前に成長するまでに、多くの人が君を助けてくれるやろうし、俺もできることしたる。ゆっくりでええから、やっつていこうや」

またニツコリと微笑む陪川さんと、彼自信が寄り添つてくれた言葉に、僕の心が暖まる。

きつと大人になってから今まで、結果を急がれ過ぎていたからか、それとも自分が一人じゃないと思えたからか…。

この胸が熱くなった理由は、沢山ありすぎて特定する気にもなれなかった。

「……はい」

自分も彼に向けて微笑んで返事が返せたのは、少なくとも陪川さんのお陰であると同時に、成長であると思つておきたい。

少し無理やりな思想かもしれないけれど、ここまで背中を押してくれる人に出会つたことはあまりなかった。

住浦さんからすれば、彼の存在は面倒だとおもつてるだろうが、僕にとつての彼は、自分の親族と同じくらい惹かれるものがある。

きつと、背後霊の中でそつと息を潜めている、あの人の影響かもしれないな…。

そう思いながら、僕は立ち上がった。

「がんばります、僕。スプリミナルという仕事を貰つたのだから、精一杯、殴れるように頑張りたいです」

自分の決意を聞いてくれた陪川さんはまたニツと歯を出して微笑み、今度はそつと僕の肩に手を置いた。

「その粹や。がんばり」

優しく囁くようなエールに応えるように、僕はそつと頷く。

人をしっかりと殴るようになるのがいつになるのかはわからない

いけれど…。

それでも、自分なんかを拾ってくれた組織の皆に、ちゃんと顔向けができるように。

自分の選択が間違っていないように。

そして、自分が自分の思ったことに後悔しないように…。

「うっしー！そんなじゃ、ここは後から来る隊員達に任せて帰るか！今日は奢りや！商店街に飯でも喰いにいこかあ！」

「まじっすかあ！ありがとうございますっ！！」

意気揚々と陪川さんが両手を上げると、始堂くんも喜んで彼のポーズを真似する。

本当に…彼は心の底から信用されているんだな…。

「ユウキさん」

二人が盛り上がっている中、斐川さんが真剣な顔で僕に話しかけてきた。

「なんですか…？」

「…私、少しだけあなたを見直しました。罪人であるのに殴ろうとしない優しい心を見て、私はあなたを他のスプリミナルの人間とは違うと思うてきているのかもしれない…」

すると、斐川さんの固い表情が、柔らかく崩れていく。

「ハイカワさんの言うとおり、ゆっくりで良いと思います。私も沢山の月日を重ねたからこそ、ここまでこれました。失敗しても良いですから、強くなっていきましょう」

僕なんかにもそう言ってくれる斐川さんの顔は笑っていて、まるで優しく諭してくれる父親のようだった。

「…はい。がんばりますー！」

優しさに心がまた少し癒される。

正直、スプリミナルに来てからは面倒事ばかりだし、まだまだ誰かに信用される人間じゃない。

けれど、優しい言葉をかけてくれる人間がいることで、僕は一人じゃないと勝手に思える。

そんな世界だからこそ、この場所にはまだ、期待できるのかもしれない

ないな…。

「二人ともー！いくでー！」

「はいっ！」

僕ら二人は、陪川さんに駆け寄った。

ゆっくり歩いていこう。

バカにされ続けることはなれっこだ。

強く生きよう。

もしも、僕がまた選択に迷いを感じたら、今日の事を思い出せるくらいに…。

バアンツ！

「…っ！」

突然、どこからともなく発射された弾丸が僕の体を通り抜け、陪川さんの横腹に直撃した…。

「ハ…ハイカワさあんっ!!」

横腹を抑えて膝を落とす陪川さんに始堂くんが寄り添う。

慌てて辺りを見回すと、僕から斜め後ろで縛られていた筈の不良が、ニヤリと笑って隠し持っていた銃を持っていた…。

よく見ると、彼の真横に縛っていた筈の縄が傷一つ着かずに捨ててある。

忘れていた…。

このグループには雪待だけではなく、瞬間移動使いの異能力者もいたことを…！

「ハハハハ…手こずらせやがって…そのまま死んじまええ！ツハツハツハツハツハ!!」

下劣に笑う犯罪者に、僕らはふっふつと怒りを向ける。

今こそ、挽回する時。

そつとアーツに手をかけて、再捕獲のために足を進めようとする…。

「あつぶなあ…。」

しかしそんな時、後ろから今の状況に似合わない頓狂な声が聞こえ

た。

「「へ…う…」」

僕らが振り向くと、撃たれた筈の陪川さんが一切の血を流さず、立ち上がっている。

「いやあ…さつき拾った落とし物のスマホが、丁度防いでくれたわあ…」

彼はピンポイントに守ってくれた携帯電話を見ながら「あ、でも弁償せな…」と本気で心配する。

「な…なんじゃそりや…」

呆気にとられているのは犯罪者だけでなく僕らも同じだ…。

ガラガラガラ…

「ぐあつー！」

その上、廃ビルの天井から崩れた瓦礫が、ちょうど能力者の脳天にぶつかり、彼は頭から血を流しながら、きゆうと気絶してしまった…。

ボゴオンツ!!

崩壊の原因であろう、巨大なオニキス色のドラゴンが空を駆ける。

「おー…久々に竜のノーインが通りすぎるん見たなあ…」

「いたたたたつー!なんすかこれ!?!」

呑気に竜のノーインを眺める陪川さんと、彼を避けるように落ちてきた小さな瓦礫が、雨のように不良達の体に当たる。

「ちよ…なんなのこれ…何が起きて…」

ドガアアアアンツ!

その上、この状況に混乱していた不良の体が、現状況無視で突然突っ込んできた警察車両によつて吹っ飛んでいった。

「わーっ!すみませんっ!!急にハンドルが言うこときかなくなっちゃってえ!!!」

「ええ、ええ!そんなもん後でなんとかしとくわい!怪我しとるやつ手当てしとけよお!」

突然の事故に混乱する運転手を、なれた手付きで宥める…。

「ヒカワさん…」

怒涛の展開に度肝抜かれている僕…。

「なんですか……？」

同じく斐川さん……。

「パウリ効果とラツキー体質って……第三者にも影響するんですか……？」

「さあ……。ですが、ハイカワさんは……そう言う人なんですよね……」

斐川さんが答えてくれる中、陪川さんはグツと両腕を伸ばして大きく笑う。

「ハツハツハツハツハ！今日も俺は、ほんまにラツキーやったなあつ！！」

水原くん……この人と居たくない気持ち、なんとなくわかった気がするよ……。



アグルファー  
旧中部地方のとある支部の郊外にて……。

「ふう……」

深夜の野道、パーカーに彩られた紺と赤の線が、ぼんやりと光を放っている……。

「先輩。そつちで何体だ？」

紺線のパーカーを着た男は、蜚<sup>ヒ</sup>型のノーマンを踏みながら、聞く。  
「150体目……ようやく終わったね……」

赤線のパーカーの男は、光るナイフを腰に帯刀しながら、息をついた。

仕事を終えた二人の足の下には、彼の言うとおりの150体もの巨大な蜚<sup>ヒ</sup>の亡骸が、緑色の体液を流しながら転がっている……。

余程の物好きでなければ、この光景を見れば、あまりにもグロテスクで吐いてしまおうだろう……。

「産卵期……ってやつだったんだろうなきつと。めんどくせえ……」

紺線の男は持っていた武器をグローブに変え、ポケットに手を入れながら、ノーマンの亡骸から地面に降りる。



その際、グシャグシャと音を立てながら、幾つかの蜚匣の死体が積み重なったゴミのように崩れる。

「さて…本部に帰ろうか。それで、ユウカにご飯つくってあげないかね……」

赤線の男がそう言うと、蜚匣の死体全てが一気に燃え上がり、暗い夜道を照らした。

「ああ…。噂の新人の顔も見やらないとな…」

「そーいやそーうだったね。調査報告と共に…挨拶でもしようか」

肉体換装トランスを解除しながら、仲良さげに話す二人。

「まあ、足手まといいにならないと良いがな…」

「良い子だといいいけどね」

クールに毒づく男と、朗らかに微笑む男。

二人もまた、各々に辛きものを背負っている。

延びる影を追いかけるように夜道を歩く彼らが、悠樹哲哉にとっての大きな衝撃になることを、まだ知らない。

To be continue…

## 7-1 『影のKと忍び寄る者達』

あれから、二日程が経過した。

住浦によって連行された雪待は、異能力による殺人並びに違法物の売買や、数々の軽犯罪の経歴に置いて、彼は異能力行使法にのっとり、一審で懲役20年以上の刑が課せられたらしい。

裁判で雪待は、何度も罪を否定したらしいのだが、あんなことをしておいて、彼の言葉が上に通じるわけがない。

その態度もあって、彼の死刑を求める声も幾つかあり、最終的な判決はもう少し先になりそうだ…。

ピ。ピ。ピ…

曇りであっても、雀は今日も鳴き、野に晒されて生きている。

その餓えで、真つ白い雲が太陽を隠しているが、雨が降りそうな気配は一つもない。

なんとも中途半端な天気だ。

自分と似ていて、中途半端…。

「ふう…」

変な感傷をため息にして吐き、窓から朝空を眺めていると、電気ポットの釘がカチンと上がった。

呆けた表情のまま、インスタントのカフェオレを淹れ、それを片手にまた窓を眺めた。

「強く…か…」

陪川さんに言われたことを、未だに僕は考えている。

人を殴れるくらい強くなれ。

何て言われても、僕なんかが本当に人を殴れるようになれるのか…と考えるも自信がない。

僕は変に優しさを持ち合わせてしまった偽善者だ。

きっと、殴ろうとすれば『この人が痛がる』という思い遣りに似たものがブレーキをかけやがるから、なかなか上手くはいかないだろう

…。

それでも、やらねばならないのはわかってるが…。

それと、自分の能力について改めて考えた所、ほんの少しわかったことがある。

まず、自分の能力は攻撃と認識したものを無効化することができること。

それが金属バットであっても、拳銃であっても、恐らく爆弾であったとしても、ハイドニウムでない限りは、なんでも防ぐことができるのだろう。

しかし、それはあくまで”認識できたら”と言うもの。

裁判所の時に住浦さんから突然殴られた時は、認識のための時間が足りてなかったから、顔にダメージがいったのだろう。

だからきつと、なんの情報も無く、弾丸やナイフで心臓を貫かれたら、確実に僕は死ぬ。

もしも僕が殴れたとしても、不意を突かれてナイフで腹を突かれたら、敵のグルであるスナイパーが僕の脳天を撃ち抜いたら…。

なんて臆病なたらればをする時点で、僕はダメなんだろう。

未だ、自分の能力にどれだけの詳細が眠っているのかすらわからないし、人すらも殴れ無い…。

まだまだ、僕は弱い…。

「だからこそ、頑張らないといけないんだ…」

母の遺影飾る部屋の中、一人呟き、のし掛かっていくプレッシャーを抱き締めた。

どれだけ障害があっても、僕は前へ行かなければならない。

この仕事のために、今も眠っているアヤのために、そして誰にも迷惑をかけないように…。

「…あつーヤバツ！ゆつくり考えすぎた！」

ふと時計を見ると、もうあと数分で始業の時間になっていた。

僕は慌てつつ、急いで支度を始めた。

ポットの湯を捨てる暇もなく、いつもの服装にさつと着替え、財布などの貴重品を持って「はやくはやく」と自分を急かしながら、部屋

を出た。

ドン

「わっ…お、おはようございます…」

部屋を出た瞬間、多くの荷物を持った大柄のベリーショート髪の男性と、ぶつかってしまった。

「すみません！おはようございます！」

しっかりとした例と挨拶もできず、すぐに扉に鍵をかけて会社に急いだ。

スマホを見ると、始業まではあと7分…。

段飛ばしで階段を駆け降りれば2分でなんとか行けるし、そこからエレベーターで3分…。

これなら、きつと間に合う！

チーン！

ぜえぜえと息を整えていると、ようやくエレベーターの扉が開いた。

最後の一段で思い切り顔から転んだが、特異のおかげで怪我もなく無事にエレベーターに乗ることができ、今はようやく4階のフロアを早歩きしているところだ。

時計を見ると、現在の時刻は8時58分。

なんとか間に合ったな…。

遅刻回避に安堵しながら、僕は少し深呼吸をして息を整え、探偵課オフィスの扉を開いた。

「ギリギリセー…フツ!?!」

部屋に入った途端、突然誰かに顔を鷲掴みにされた。

「遅い。始業約1分38秒前だ。社員ならせめて五分、新人なら十分前には出社し、仕事と学習のための準備を整え、軽く珈琲を飲めるくらいの余裕は持っておけ」

僕の頭をつかむ主の冷たい声と、ギリギリと力が入りつつある指が怖い…。

「は…はい…すみません……」

確実な怒りを感じた僕は平謝りをするが、いつそう頭を掴む力が強まる…。

特異のお陰でそこまで痛くはないけど、何故かガツチリと捕まれていて抜け出せないし、なにより無効化特異独特の気持ち悪さが…。

「ちよつとちよつと、キヤマくんいきなり厳しすぎだよ…?」

また聞き覚えの無い声が聞こえると、ふんと息を吐く音と共に、捕まっていた掌がようやく剥がれた。

自分の頭をパンパンと軽く叩いて、気持ちが悪い感触を払う。

改めて前を向いてみると、そこには初めて出会う二人の男性がいた。

「ごめんね、新人くん。わざとじゃないんだよ」

赤色のカーデイガンを着て、ぴよんと頭の頂点が跳ねた髪型をしている男性が僕に謝る。

「あ…いえ…」

顔を見る限りは、優しいお兄さんのような感じだろうか…。

しかし、先程聞いたのとは明らかに声が違うから、掴んできたのはおそらく隣の人…。

「武装警察隊や自衛隊ならこんなもの普通だ。殴られたりしないだけありがたいと思え」

その頭を鷲掴みにした当人は、ふんと鼻をならしてそっぽを向いた。

黒の上から白いペンキを上から掛けたような独特な柄のYシャツと紺色のロングコートを着込み、ツンと釣った目をしている。

如何にも厳しそうな印象だが、髪は雲のようにふわふわの天然パーマで、なんかちよつとだけ気が抜けた。

「いやいや…こゝ、そういう場所じゃないし…」

それを聞いた紺コートの男性は、赤カーデイガンの男性を睨む。

「大体、先輩が甘すぎるんだ。スプリミナルは命の駆け引きをする。それくらい余裕を持っていなければ、すぐに狩られるぞ」

こちらをギロリと睨む彼。

なんだか、ギリギリで出勤するだけでも、この業界では命取りなよ

うな気がしてきた…。

「言いたいことはわかるけど、そんなに厳しくしちやったら、新人くん折れちゃうからさ」

そんな心を締め付けようとする厳しい言葉から、赤カーデイガンの男性が優しく僕を庇ってくれた。

紺コートの男性はジト目で彼を見ると、大きくため息をつく。

「ハア…わかった。まあ俺も言いすぎた、悪い」

彼は呆れつつも、赤カーデイガンの彼の言葉を理解してくれたようだ。

とりあえず、日常生活まで気張りしすぎなくても良いのならよかった。

「というか…：彼らは誰なのだろうか…？」

「おはよ」

なんて考えていた時、恐らく気張りなんてしてなそうな少年が出勤してきた。

「あ、おはようミズハラくん」

「おはよう。今日もギリギリアウトな時間だな」

「おはよ、ミズハラくん」

僕につづけて二人も挨拶をする。

「おつ？キヤマくとアカギくんじゃん」

2人の存在に気づいた水原くんが彼らに駆け寄った。

「帰ってきてたんだ。旧中部地方アグルフアーで大量発生した蜚型フエノーインの討伐指令どうだった？」

水原くんがきくと、二人の顔がウツと顔を青くなった。

「なんとか完全討伐で終わったよ…：めっちゃ気持ち悪かったよお…」

赤カーデイガンの彼は冷や汗を流して自分を抱きながら、身震いし、コートの彼に至っては「さすがにもう見たくすらない」と、今にも吐きそうな表情を浮かべている。

「か…考えるだけで気持ち悪いですね…」

大量の蜚型フエノーインを討伐しないといけないなんて考えたくもな

いし、それが大量発生だなんて聞くだけで吐きそうだ…。

正直、インターネット検索すらしたくないな。

「まあ、先輩がパニックって黒炎を出さなかったただけまだマシだったかな…」

「いや、さすがにそんな軽々しく使わないから…」

「そうかあ…?」

謎の単語を口にしつつ、紺コートの彼が苦い顔で赤カーディガンを見つめる。

しかし…大量の（しかも気持ち悪い）ノーインをたつた二人で討伐できるなんて…彼らはよほど強い力を持っているようだ…。

「おっと、二人とも、ユウキくんに自己紹介は?」

「あつ、そうだそうだ…」

水原くんに促され、二人は改めて僕に顔を合わせる。

「ユウキというのか…。俺は基山キヤマ彰アキラ。特異は『影』だ。よろしく頼む」

腕を組みながらクールに佇む基山さん。

「それで、僕が赤城アカギリユウゼン隆泉。困ったことがあったら、なんでも聞いてね。よろしく」

ヒラリと手を振って柔らかく微笑む赤城さん。

紺コートでふわふわ髪の方が基山さん、頂点ピョン立ち髪の赤カーディガンの赤城さんか…。

結構、二人とも外見からしてキャラが立ってるから、分かりやすい。

「改めまして、ユウキ テツヤって言います。これから、よろしくお願います」

自分もお辞儀をしながら自己紹介をすると、基山さんがふんと鼻をならして僕に近づく。

「まあ、場数が少ないのは分かっているが、決して足手まといにだけはなるなよ」

やはり、基山さんはちよつと高圧的な気がするな…。

彼はあまり友好的な性格ではないのだろうか？

「は…はい。キヤマさん…」

「別に敬語や”さん”付けじゃなくて良い。そう言うのは好かん」

「あ…わかりま…：…わかった」

「それと、連絡網やそれぞれのショートメールのIDについては聞いてるか？部隊は連携が必須だからな…：…」

「う、うん。一応、叶さんから聞いてるから大丈夫…」

「そうか。今の時代、SNSの通話で事足りるかもしれないが、一応、キャリアの電話番号も控えておけよ。後、エンブレムはちゃんともってるか？」

「うん、これも叶さんや皆から言われたからちゃんと、肌身放さず…」  
「それなら良い。ちなみにシフトについてだが…：…」

あれ…？なんか、思ったよりもキツくない…：…？

基山さ…：元い、基山くんはちよつと眼光は鋭くて怖いし、声質も重いけれど、話の内容としては僕の事を心配してくれているような気がする。

「キヤマくんって…：やっぱりなんだかんだで面倒見良いよね…」

「キヤマくん、結構サバサバしてるけど、本当は優しいからね」

そんな中、水原くんがコソコソと赤城くんとの話し声が聞こえた。

「この前なんて、商店街で迷子になってた子供助けてたよね？」

「その上、商店街の迷子猫まで拾って飼い主に届けてたし？」

「重い荷物背負ったおばあちゃんも助けてたよ」

「めんどくさいとか言いながら、人のために汗かく人だよな」

「あれぞ面倒見の鬼ってやつ？」

「いや、一周回ってお父さんって感じじゃない？」

「かくわいい」

「聞こえてるからな!?お前らあ!」

顔を赤らめながら基山くんは、クスクスとにやける二人に怒った。

なんか、昨日もみた気がするぞこの光景…。

「そもそも、俺は面倒見がどうかとかそう言う訳じゃない。人を助けるのは当然の事だし、部隊として、こいつに足を引っ張られたくないだけだ…」

弁解しようとするが、まだ頬が赤い。



やっぱり、この人は優しい人なんだな…。

「まあ…とは言うけど、キヤマくんは、人一倍しつかりしてて優しい人だから、あまり畏かしこまらなくてもいいからね」

「あ…はい…」

赤城さんの言葉に、より一層、基山くんの顔が赤が濃くなっている。自分で思っていないことを人に言われるのが少し恥かずかしいのか…それともちよつとしたツンデレと言うやつなのか…。

とりあえず、基山くんは面倒見がよくて、赤城さんも優しいそう。

この二人は住浦さんよりかはすぐに仲良くなれそうだ…。

ガチャ

「おや、今日は依頼待ちの人数が多いね」

始業時間から数分経って、ついに奥の部屋から郷仲社長が現れる。

「社長、おはようございますー!」

「おはよー」

社員一同、最低限の礼儀と誠意を持って（一人を除く？）朝の挨拶をした。

「はい、おはよう。早速で悪いんだけど…ちよつと依頼を頼めるかい？」

挨拶を返すと、彼は即座に茶封筒を取り出した。

普通の会社と違って、長々と話をしたりしないのが郷仲社長の良いところだ…。

「すぐ近くのビルで、不振な遺体が発見されたそうだ。ミラーマフィアの疑いがあるため、すぐに調査をして欲しいと、先ほど武装警察経由で緊急の依頼があった。場所は29区。今回は基山くんと水原くんに頼むよ」

郷仲さんは依頼書の入った封筒を二人に提出した。

「了解」

「りよーかい…」

二人が不揃いな返事をする、基山くんはその封筒を受け取り、水原くんはめんどくさげに欠伸あくびを一つ。

「あれ…水原くん今日は素直…？」

いつもなら、めんどくさいと文句の一つは言うのに…。

「そりゃあ自分もサボりたいけどさ…基山くんがめんどくさいからあ…」

ジト目で応える水原くんの顔には、デカデカと『行きたくない』と書いてある…。

本当に仕事が嫌なようだな…。

昨日は一日待機だったくせに。

「いつも普通の事を言ってるだけだがな。目上にはちゃんと謙れと<sup>へりくだ</sup>」

「へいへい…」

基山くんの言葉は社会に置いて当然の物なのだが、水原くんにとってはそれが嫌らしく、いい加減な返事をしてあしらっていた。

こんな二人で、大丈夫なのだろうか…？

「そして、アカギさんとユウキくんは依頼が来るまでは待機だ。今日はフェイバリットの方に行ってくれ」

僕らはとりあえず、いつもの仕事か…。

「今日は接客ですね。了解です」

「僕も同じく了解です」

使命感のまま返事をする僕と赤城さん。

まだここに来て一週間になるかならないか位だが、喫茶のお仕事にはとりあえず慣れた。

任務に行つて自己鍛練ができないのは少し勿体無さがあるかもしれないが、これも仕事。

しっかりとこなして、役に立たねば。

まあ本音をいうなら、危険なお仕事をしなくて済む…と安堵する気持ちは少なからずあるけど…。

「そんじゃ、それぞれ後は頼んだよ。私も仕事してくるよ」

いつも通り、彼は逃げ文句のような言葉を吐いて、また社長室へと帰っていった。

「…今日のサトナカくんは絵を描くと思う人」

全員挙手。

「だよーねー……」

これもいつもの流れに、ミズハラくんは呆れていた。

大体、社長の仕事ってどんなものか見せてもらってない時点で、なんかそう言う疑惑はある。

郷仲さんがめちやくちや強いのは初対面したその日に知ってるし、それなりの大変さはあるのだと信じたいが……。

まあ：マフィアに入りたいが故に僕を殺そうとした前の会社の社長よりかはましだと思つとこう……。

「まっ、今日もほどほどにがんばってくるよ」

「店番よろしくな」

任務を命令された二人は、手を振りながら部屋を出ていった。

「行つてらっしゃーい！」

「気を付けてね！」

取り残された僕らも、探偵に負けない程、大変な仕事が待っている。

赤城さんがどんな人かは、まだつかみきれてないが、とりあえず今日も一日がんばろう。



まだ少し眠い。

昨日は読書に集中してしまつて、あまり眠れなかったから少し頭の回転が遅い。

正直、今日の仕事には行きたくなかったのはそういう理由だ。

だが、こういう仕事には確固たる誠実な基山くんが今日の相方<sup>パティ</sup>だから元々抜けられないだろうし、スプリミナルの社則『一度受けた仕事はやりきる（僕の解釈あり）』つてのもあるから、まあ仕方がない。

今日もボチボチ頑張るとしよう……。

「……か……」

僕らは依頼書通りの場所にたどり着くと、そこはまさに廃ビルの路地裏だった。

こそこそと怪しいことするやつって、よく路地裏を使うよな…。  
廃ビルを少々観察してみると、せいぜい物が少し散乱しているだけで、それ以外にはあまり建物がくたびれた様子はない。

使われなくなったのは最近だろうか？

埃の匂いも少ないし、以前にビルを使っていた人間の忘れ物か、芳香剤のような香りも僅かにしている気がする…。

ただ、どうしても路地裏独特の辛気臭さは残るが…。

「おい、水原」

ふと手招きをする基山くんは、返事をしながら僕は彼に駆け寄る。

「うえ…」

そこには懸案の死体が地面に転がっていた。

その亡骸は亡骸と呼ぶには、あまりにもグロテスクすぎる状態で、少々胃酸と消化物が零れ出しそうになった。

僕はその死体に手を近づけてみると、まだ温もりが消えて間もないことを感じる。

地面には数量の血液が付着しているが、それ以外の場所に傷などがついている様子もない。

いくら場数を踏んでいると言っても、死体を見るのはなかなか慣れないものだ…。

「こいつあ酷いな…。これが依頼で言っていたいだろうな…」

「そうだろうね…」

見れば見るほど吐きそうになる。

こんな惨<sup>むじ</sup>たらしいものが、今回の事件の鍵になるわけか…。

「スプリミナルのお方でしょうか？」

ふと聞こえた声に振り返ると、スーツを着た少し体型の大きな男性が話しかけてきていた。

話の流れ的に依頼者だと察した僕らは、そつと各々のエンブレムを取り出し、スプリミナルであることを表明した。

「ヨネヤマさん…ですか？」

基山くんが聞くと、彼は嬉しさを頬を朱に染めながら、大きく頷いた。

「よくぞ来ていただきました…。わざわざこんなところに申し訳ございません…」

米山くんは謙虚に僕らに頭を下げ、依頼の受理への礼を言う。

「大丈夫です。これが仕事ですので」

それをクールに返す基山くん。

「気合入ってんねえ…」

というか、気取ってるね…。

とも言いたかったが、後々めんどくさくなりそうだからやめた。

「それで、遺体とはこちらの事なのですが…。」

米山くんの指差す死体を、僕らは再度確認する。

今、僕らの目の前にあるのは、メクラアブ型の男性リージエンの死体だ。

遺体に服などは着せられておらず、産まれたままの姿。

羽を広げてうつ伏せの状態になっており、その少し歪な全身には、無数の弾痕や穴がつけられている。

黄土色の血液が滲む遺体をよく観察してみると、顎の部分が砕かれている…。

死体にはあまりにも現実離れた殺され方をしている。

確かに、これを見て不振に感じて、スプリミナルこっに助けを求めたくなるのも、わからなくはないか。

「一応…ここは私共の物件なので、こんな物が無作為に置かれてしまうと困るのですよ…。」

「だから俺たちに頼ることにしたんでしょう？わかってます。」

眉をしかめて困窮する米山くんは、基山くんは淡々と言葉を返す。

確かに、死体なんか物件に置いてあったら、買い手なんてつかないわな。

凡庸なサスペンスミステリー小説だったら、テナントが決まったとしても、深夜にこのリージエンの幽霊が化けて出てきて、事故物件だー…とか言われたりして…。

って、なんか悠樹くんみたいなたらればを言っちゃったな。

「この傷の付き方…やはり酷い物だな…。」

死体をまじまじと眺めつつ呟いた基山くん。

「蜂の巣……つてこういうことを言うんだらうね……」

言葉を返しながら、僕は手袋をして、リージエンの亡骸をしっかりと触れてみる。

先ほど手を近づけた時と同様、長期間放置された形跡がないのはわかる。

血液を含めて体全体の温もりはもうないが、肉質が落ちているようにはまだ見えないからだ。

今回の事件は、少々、奇怪だな……。

「……やっぱりリージエン至上主義のせいなのでしょうか……」

「なんでそう思うの？」

ふと、米山さんの呟きが気になり、僕はその真意を聞いてみた。

「だって……こんなに蜂の巣にされてる遺体なんて……マフィアくらいしか作れない気がするんです……。それに、一般人の考えとしては……仲違いだとか、組織の秘密を知ったとか……。もしかして、この人は同じマフィアとかなんじゃないですか？」

オロオロしながら米山さんは応える。

確かに、極道漫画とか読んでたらそう思うかもしれないが……やはり一般人は本当の殺し方を知らないか……。

「マフィアの殺り方は様々だけど、こんな殺し方はしないよ。スタンダードな物だと、全身を縛ってから礎や石段を無理矢理噛ませて、そのまま後頭部を蹴り、拳銃で適当な部分を三ヶ所それぞれゆっくりと撃ち、悶絶する姿を楽しむ。勿論、あくまでもこれは殺し方のひとつで、他にもコンクリの生き埋めだとか、椅子に縛り付けてそのまま海に捨てる……だとか、色んなものがある」

またチラリと死体を見てみる。

相変わらず、杜撰で惨たらしい。

「でも、マフィアはこんなに辺りに見つかるような効率の悪い銃の使い方はしない。弾丸も無駄だし、下手すりや警察に足が捕まるようなこんな殺し方をする方がバカだよ」

あくまでもスプリミナルと警察が調べた結果だから、他にも殺し方

はある可能性も無きにしもあらずだけでも…。

でも、ここまで目立つような場所に遺体を捨てるか？と考えてみれば、マフィアが牙を剥いたとは考えられないのだ。

「では…誰が…？」

「現時点ではわかりません。今からそれを解決するのが俺たちです。必ず事件を解決させます」

誇りを持ったような言い方で基山くんが宣言する。

「おっ、たくましい〜」

少々囃し立てると、少々照れ臭げにふんと息を吐いた。

「うーん……」

基山くんがここまで胸を張っているのに、米山さんにはしっくり来ていないようだ…。

「ですが、結構若い方がお二人と言うのが、なかなか心配なのですが…」

確かに、14才と24歳で、米山さんよりも若いから不安なのはわからなくはないが…。

「なに？子供だからってバカにしてる？」

なんか、言い方にカチンと来たから、じつと睨んでやった。

僕の眼光にドキツとした米山さんが首を素早く横に振る。

「いえ…そういうわけでは……」

キーン…

彼が弁明しようとした瞬間、僕らの頭に超高音が鳴り響く…。

「…っ！来るー！」

基山くんの声と共に、僕らはエンブレムを握りながら、厳戒体制にはいる。

「え…う…な…なにが……」

空気の変化に依頼者が狼狽えていた途端、その声の主がその路地裏の角か姿を表す。

ギジャアアアアアツ！

僕が四人いても足りないぐらい大きな蜘蛛のノーンだ…。

「ひ…ひえええええええっ！」

目の前に登場した化け物に怯えて、腰を抜かした米山さん。  
ギチギチと音を立てながら牙を剥くノーインに、基山くんは即座に  
手袋型のエンブレムを取り出し、右手に着ける。

「手伝おうか？」

「いい。これくらいなら一人でやれる…っ！」

僕を加勢を断った途端、黒い手袋がぼんやりと光りだす…。

「肉体換装！& a m p；アーツアンフールド特具武装！」

詠唱の如く叫んだ途端、基山くんの姿を、黒地紺ラインでロング  
パーカータイプのトランススーツに変えると共に、エンブレムが柄えの  
短いランス型のアーツに姿を変えた。

「ふっ！」

すると、基山くんは紺ライン光るカーゴパンツを揺らしながら壁を  
伝って飛び上がり、暴れる蜘蛛の背中に乗る。

「動くな、化物が…っ！」

罵倒の呟きと共に、彼は蜘蛛の身体に槍を突き刺した。

ギシヒヤアアアアアアアッ！

痛みで暴れ狂うノーインに、振り落とされそうになっている基山く  
んだが、特異のことを考えれば、今の彼の状況はほぼ無敵の状態…。

「#000A02…」  
トリプルゼロ

謎の番号を口にした途端、突然ノーインの周囲に存在する影が、突  
然沸騰した湯のようにボコボコと小さく盛り上がりはじめる…。

「千墨針！」  
せんぼくしん

その途端、沸き立っていた影から幾つもの針が伸びて出現し、暴れ  
ていた蜘蛛ノーインを四方八方から串刺しにした。

攻撃を受けたノーインはギシギシと軋むような音をたてると共に、  
針を伝って緑色の体液を漏らしながら絶命した。

これこそが、基山彰の特異。

彼は存在する影を自由自在に操ることができ、今のような幾つもの  
針を出現させたり、影の中に身を潜めたり、影自体を龍や蛇のような  
魔獣の形に変えたり等を行うことができる。

先程、蜘蛛が串刺しにされたときに、彼もまとめて影の針が突き刺



さっていたが、彼自信は影とどうかすることもできるため、一切のダメージを受けていないというお得な仕様。

言わば、基山 彰と言う人間は影さえあれば最強に近い戦士なのだ。

「あつ……ああ……」

突然の事に頭が追い付いていない米山さん。

「ふん……この前の騒動より楽だったな……」

一方の基山くんは、ふうと一息つきながらノーインの身体から降り、トランスを解除すると、蜘蛛に突き刺さっている針が消え、亡骸が地面に落ちた。

その亡骸は蓮の葉のように穴が空きまくっていて、まるでそこにある遺体と同じようになってしまっている。

集合体恐怖症が奇声をあげて失神しそうな屍になったな……。

「まーた、後片付け大変そうだなあ……。でも、さすがは影使いだね……」

「こんなことで自慢など出来んがな」

少々おだててやると、基山くんはふんとそっぽを向いた。

僕から見れば彼は一応後輩に値するのだが、僕に負けず劣らずの巧みな戦闘術と、強力な特異の使い手だから、決して侮ってはいけな……。

味方として、本当にたくましい存在だ。

ただ、結構ドライだからお世辞も通用しないのがちよつとつまんないけど。

「ヨネヤマさん。これでも……信用はできませんか……?」

手袋を脱ぎながら依頼主に聞く基山くん。

「い……いえーそんなことはございせんっ！むしろ、心の底から頼れるといますか……何故ずつとここに頼らなかつたのかと……」

彼の實力に驚いていた米山くんは、大きく首を横に振った。

どうやら、スプリミナルの圧倒的な力が、ようやく彼にとっての証明になったようだ。

「じゃ、大丈夫だね」

「精一杯お仕事させていただけます。よろしくお願いします」  
腰に手を当てる僕と頭を下げる基山くん。

「ほら、お前も」

「へーい…」

頭を抑えつけられて、僕も渋々お辞儀をさせられた。

「こ…こちらこそ、よろしくお願い致します…」

米山さんの返答により、依頼の受理は完了された。

さて…この事件はどういう方向に行くのか…今回も少々楽しみだ。

## 7-2 『影のKと忍び寄る者達』

遺解剖や解析のために武装警察に遺体の回収を頼み、僕らは米山さんから詳しい事情を聞くため、『トゥルーブラック』という喫茶店に来ていた。

フエイバリットよりも圧倒的に新しめのお洒落な内装で、その上、お客も店員も含めて、10〜20代程の若々しい人々が沢山いる。

ライバル喫茶店の従業員としては、ちよつと嫉妬しそうだ。

「お待たせしました。ブラック2つとカフェオレです」

白髪で顔立ちの綺麗な女性が僕らの分のドリンクを持ってくると、僕らは礼を言つて一口飲んだ。

「キヤマくん、ここ好きだよね」

コーヒーカーップをソーサーに置き、基山くんはクールに微笑む。

「Favoriteも好きなんだが、少々苦味が足らん気がしてな…」

申し訳なさげに言うが、人それぞれの好みの問題だから、誰も怒りはしない。

彼の言うとおり、フエイバリットのコーヒー、ブルーアイはブラックでもほんの少しだけ甘味が強い。

基山くんは苦味の強いものが好きだから、フエイバリットよりもこつちの方が好きみたいだ。

ちなみに、僕は彼とはほぼ逆の味覚だから、こつちはあまり好きではない。

正直、フエイバリットの方が美味しいと思うし…。

「あの…」

「おっと、失礼しました。それではヨネヤマさん。初めからもう一度、依頼の内容と発見当時の子についてをお話してもらえますか？」

僕の嫉妬を他所に、基山くんが米山さんに提供を指示する。

「あ、はい…」

彼はそつとコーヒーを机に置いて、事件の流れを説明し始めた。

「まず先に依頼は『不振な遺体について調べてほしい』という事です。…」

改めて、事件の全体の流れを解説しよう。

今回の依頼者は、米山堂真ヨネヤマドウマさん、不動産業を営んでいる中年の男性。ここらではなかなか名が通っている不動産業者で、この隣の店の不動産もこの人のものらしい。

数年前、彼が貸していたビルディングで経営をしていたとある中小企業が、合併のために計画的倒産をし、その物件を手放してしまったのが始まりだった。

今日に至るまで、米山さんには数多くの顧客が来ていたのだが、何故か不思議なことに、約一年半前に手放されたそのビルディング、つまり死体が捨てられていた場所にだけは誰一人として入居希望企業が来なかった。

多くのお金をかけた上に、頑丈で良物件なのに、誰も人が来ずにならずに廃れていくビル。

それを奇妙に思いつつも、彼はその物件をもっと入居がしやすいようにリフォームすることを決意する。

そのため、米山さんは建物リフォーム前のビルを見に来ると、懸案の死体を発見してしまった。

それが、僕らが来る数時間前の事。

初めは特殊清掃業者に頼もうとしていたらしいが、無数の弾痕や碎かれた顎から、この死体はミラーファイアによる物なのではないかと彼は考えてしまった。

もしも遺体を普通の業者に回収を求めれば、我が身と業者の人の命が危ないのでは…？そう考えた米山さんは、その場から逃走。

そのまま武装警察に連絡し、その警察からこつちに仕事を回された…と言うことだ。

「なるほどねえ…」

頬杖を付きながら考える。

確かに、見慣れた場所に突然穴だらけの死体がドンと置いてあったら、まずは自殺よりも事件を疑う。

死体から足がついてアジトをみつけられる…なんて事もあったから、発見した人が口減らしのために殺されてもおかしくはない。

彼の判断は懸命だった。

「こんな物…誰にも頼れる訳がないですし…もしも、ミラーマフィアに目をつけられて…そのまま殺されたらなんて思うと…」

珈琲に写る自分の顔をみながら、米村さんは肩を震わせて脅えている。

彼の気持ちがわからないわけがない。

僕らのような特殊な人間でない者にとって、こんな深夜の人称サスペンス劇場みたいな出来事に出会って、恐怖以外の何物でもないだろう。

むしろ、よく勇気を出してここまで来れたものだ…。

「ヨネヤマさん」

見かねた基山くんが、彼の名前を呼ぶ。

「俺達に任せてください。この謎を必ず解いて、あなたを安心させてみせます…」

依頼者の恐怖が払拭するように、余裕の笑みを浮かべながら宣言する。

すりと、その依頼者である米山さんは、微かに口角を緩ませた。

「改めて…宜しくお願いします…っ！」

喜びにつつまれた彼は、座ったまま頭を下げた。

怖い思いしてまで通報したのだから、これくらいしてやるのは当然だな。

ピコン！

米山さんの携帯が鳴った。

ポケットから、今時珍しいガラパゴス携帯を取り出し、彼は着信したメールを見ると、あっ！と口を開けた。

「すみません…ちよつと仕事に戻らないと行けなくて…」

どうやら、職場からのメールだったようだな。

「行ってきたら良いよ。こっちで何とかしとくから」

僕の言葉を聞くなり、彼は立ち上がり、律儀にまた頭を下げた。

「ほんとにすみません…お代はここに置いときます。すみません…よろしく願います…すみません…」

お金を置くなり、米山さんはこちらに何度も何度も頭を下げながら退店し、本来の仕事へと戻っていった…。

別にこれくらい（基山くんが）奢るのに…礼儀正しいことだな。

「謝罪が多い人だねえ…。ま、そう言う人なら嫌いじゃないけどね」

ニヒルに独り言を呟きつつ、僕はカフェオレをまた口に含んだ。

やっぱり、いつもより苦い。

「水原」

ふと、基山くんが話しかけてきた。

「ん？」

「お前…もう解ってるんだろう？」

「なにがあ？」

少々おちやらけて返すと、基山くんは、馬鹿馬鹿しいと言うかのごとく、ふんと息を吐いた。

「わざとらしく聞くな。遺体遺棄の犯人のことだよ…」

「…ああ」

真剣な眼が僕に突き刺さると、いつも通りのニヒルな笑みを返した。

やはり、基山くんは気づいていたようだ。

「初めからおかしかったんだよ。なんで米山さんがなんで露骨にミラーファイアのせいにしようとしているのか…がね…」

カフェオレをソーサーに置き、僕は思ったことを淡々と話し始める。

「普通…こういうときにはミラーファイアだけではなく、ヴィーガレツツやその他の反政府ゲリラ組織にも視野を入れるはずだからね…」

僕の言い分に頷く基山くん。

「なにより…俺たちは初めから」ミラーファイアの仕業ではない”つて言ってたわけだしな」

「どうしてもミラーファイアのせいにしたいわけは…。身分を騙しているからなのか、ミラーファイアに因縁があるか、はたまた僕らを嵌

めようとしているか…だね…」

「団体か個人かも…まだわからんからな…」

やはり、こういう推理に慣れている人間の方が、右も左も分からない新人よりも話が早くて助かる。

「それで、もうひとつ疑問があるとしたら、あの遺体だよね…」

「ああ…あんなに穴だらけの遺体の癖に、ほとんど腐ってないのは、さすがに奇妙だ」

もちろんの事だが、今回の事件に置いて、飛び抜けて異端なのが放棄されていた、穴だらけの遺体だ。

ただ気になったのは置いてあるという状況だけではなく、遺体の状態。

普通、死体を野晒しで放置していたら、肉が朽ちてたり、地面に血がベツトリついていたりするはずだ。

しかし、死体を初めて見つけた時を思い出してみると、遺体はほとんど腐っても朽ちてもいない状態だった。

「それに、あの地面には”血が数量しかついていなかった”ってのも気になるんだよね…」

あれだけ、穴だらけの遺体なのに、血が少ないのは明らかに異端だ。拭き取られたり洗われたような後はなかったし…どう考えても遺

体から少ししか流れていなかったようにしか思えない…。

「なら、犯人はどうやって遺体をあのビルの路地裏に持っていくのか…ってのが問題だ」

コーヒーカップを揺らしながら一考する基山くん…。

「考えられるとしたら…やっぱり、ミラーマフィアが鏡越しに運んだ…っていつもの手口になるのか、それとも大勢で棺桶とかに入れて遺体を運んだか…」

「それか、なにかしらの異能力を使って運んだか…」

「確かに、そうとも考えられるよね…」

考えれば考えるほど、迷い道が出る。

それが、推理の煩わしいところだな。

「遺体を運んだかどうかを捜査するには、やっぱり監視映像が一番だ

ろうが……あんなところに監視カメラがあるとは思えない……。ミヤサワに一応周辺映像を漁って貰うが……期待はできないな」

「そうだねえ……仕方がないけど……」

結局、いつもの面白味のない聞き込みが始まるのか。

正直、占い込みの聞き込みが僕は一番楽なんだけども……基山くんことだろうから、許してくれないんだらうな……。

「まあ、気楽に行こうか気楽に」

そう言つて、僕は残っていたカフェオレを飲み干した。

やっぱりちよつと苦い。

「気楽つてなあ……」

基山くんもコーヒーを飲み干し、僕に向けて憐れみのため息を吐いた。

「まったく、事態は一刻を争うつてのに……大体、お前はな……」

「はいはい。いつも通り頭がお堅いようで。フワフワヘアの癖に」

「フワっ……うるさい！」

小言がはじまりそうだから、彼のコンプレックスを放り込んで強引に締めてやった。

仕事なんて、とりあえず顧客を満足させて終わらせりゃこっちの勝ちなんだから、そこまで固くなりすぎなくても良いのに。

まあ、それを言つたところでまた怒られるだらうから、とりあえずボチボチ仕事に向かうか……。

「……うおつと！」

仕事に向かうために立ち上がった衝撃で、空のコーヒーカップが落下する。

フワツ……

急いで、それを拾い上げようとした瞬間、落とした筈のコーヒーカップが宙に浮かんだ……。

「大丈夫ですか？」

僕ら含め周りにいる人々も驚く中、たまたま通りかかった白肌の店員さんが、平静に宙に浮かんだコーヒーカップを手袋をした手で拾い上げ、そつと机に置いた。



「すみません…お騒がせしてしまつて…。」

僕が言う前に基山くんが頭を下げる。

「いえ、気を付けてくださいね」

何事もなかったかのように、にこりと微笑む女性店員。

こういう現象はなにも珍しいことではないため、周りの人々は何事もなかったかのように戻つていった。

「お姉さんすごいね…もしかして異能力者？」

失礼を承知で聴いてみると、彼女は嫌な顔ひとつせず首を横に振る。

「いえ。実は私、蜘蛛のリージエレンスなんです。外見は人間多めですが、軽い特性持ちなので、手から出る糸でこう言うことが出きるんですよね」

すると、彼女は机に置いたカップを見えない糸で手繰り寄せ、また宙に浮いているかのように見せた。

「そうなんだ…すごいね…」

確かに、リージエレンスであつても希に特性が使える場合はあるが、カップを持ち上げられる位、強くて極細の糸を使う特性は初めて見たな…。

「あつ、ごめんねお仕事中に」

「いえいえ、おきになさらず。ごゆっくりどうぞ…」

彼女は笑顔のままお辞儀をして、また自分の仕事へと戻つていった。

その拍子に、前髪に隠れていた6つの小さな複眼がチラリと見え

た。手袋をしていたのは、恐らく掌に目に見えない小さな鉤爪がついているからだろう。

なんか、海外映画のスーパーヒーローに似てるが、凡人が蜘蛛と人間の半獣人を描くとしたら、大体こんなもんだよ。

それが、半異形人類リージエレンスつものだしな…。

「最近は何んな能力があるんだねえ…。一瞬、重力系の能力かと思つちやつたよ…」

やれやれと机に凭もたれながら呟く僕。

すると突然、基山くんがハツとなにかを悟ったように立ち上がった。

「ミズハラ、それだ！」

「え……？」

「重力操作だ！覚えていないか！あいつを！」

必死に訴える彼の言葉で、ようやくそのことを思い出した……。

「そうか……あいつか！」

自分が思い浮かぶ重力操作能力者は二人。

あおいと……もう一人、僕らにとつての驚異となっている人物だ……。

「だとしたら……調べてみる価値はある！いくぞ！」

「うん！」

思い立ったが吉日。

僕らは机にコーヒー代金を置いて店を出た。

ついにこの事件の歯車が動き出す……。



入り口付近であつても、お役所仕事の場所というのはなんか陰気臭い……。

スプリミナルとして、しつかりとした捜査を行うにはまだまだ警視庁等との連携が必要だ。

ましてや、リーゼンが多く蔓延っている世界であつても、公安と  
言う警察の部署は存在している。

マフィアやらの異種族事件のほとんどは武装警察に仕事を取られがちではあるが、テロ対策や戸籍情報等の管理やらは、彼らなしでは動けないとさえも（主に上層部が勝手に）言われている。

「おつ、やあサンジヨウくん」

そんな中、僕らが訪ねたのは公安の情報管理課の重要人、三条紘。重要人と言っても、彼は17歳とまだ高校生くらいの人間。

しかし、彼は情報操作や管理に猛っており、宮澤くんと同じくスカウ

トされた人間だ。

100均でも売ってそうな不織布のマスクをつけながら、長い髪で片眼を隠し、ノートを常備しているのが特徴。

現代は警視庁であろうがなんだろうが、実力主義の考えが優位のため、こういう子供でも重要な仕事を任せられるらしい。

「電話で話していた通りだ。バラーディア市部に住んでいる能力者の能力リストを見せてくれ」

基山くんが要望した瞬間、三条くんは露骨に僕らを睨み付けると同時に、投げ捨てるようにして資料を渡す。

「お…おい…」

基山くんの言葉を遮るように、三条くんはノートを広げた。

開かれたページには、『それを見たらとつとと帰れ』と書かれている。

三条くんは効率重視な人間で、基本的に自分から言葉を話す事はなく、テンプレートのように予め書かれた言葉だけで会話をする。

「まだ能力者は嫌いかい？さすがにいつもこれじゃ傷つくよ？」

おどけてみせる僕に向けて、彼は違うページを開く。

『能力者だけじゃない。人間もリージョンも、大半は信じるに値しない。俺が信じてるのはせいぜい警視総監くらいだ』

ページを見せて数秒、彼は唾を吐き捨てるようにノートを閉じて、その場から立ち去った。

なんか感じが悪いが、対人嫌悪の彼の事だから、スプリミナル一同、仕方がなく受け入れてる。

「やれやれ…やっぱりとスプリミナルでは、なかなか釣り合わないぞうだね」

呆れながら、スタスタと我が道かのように歩いていく三條くんの背を眺める。

この世界にはあらゆる思想を持つ人間がいて、そのなかにはあらゆる人間が敵に見える者だっているだろう。

自分だって似たようなもんだし、各々の至上主義者や、武装警察に  
いる斐川って奴も、能力者嫌いだ。

結局、全ての生命を愛している者なんてほとんどいない…。

よほどの聖人であっても、何かしら嫌うものはあるんだからな。

「アイツが言いたいことはわからなくもない…。俺たちにできるのは、それを尊重して接するくらいだ。あいつがこれくらいの距離が良いなら、それに合わせてやるだけだ」

人間嫌いの三条くんを推し量ってやろうとする基山くん。

彼も人間愛者というわけではないが、気難しい奴を分かってやろうとする姿勢が強い。

恐らく、スプリミナルに入る前の職場が陪川くんと同じ場所だったからだろうな…。

「さっ…次は監視課だろう？いくぞ」

そう言って、彼は資料を片手に歩き始める。

いつも厳しげだけど、個人の思いはできるだけ新調してやろうとしてくれるのが、彼の愛される点なのだろうな。

なんて思いつつ、僕も駆け足で彼を追っかけた。

「キヤマくん、結構性格きついのに優しいよね」

「そこまでキツくない。スミウラやミヤマと比べればな」

フンと息を吐きつつ、彼は僕と足並み揃えて歩く。

やはりお世辞は通用しない面白味のない人間だが、結構頼りにはなる存在なのだ…。



昼過ぎ、暗雲立ち込めようとする中、僕らは米山さんを死体があった場所に呼び出した。

特殊清掃員の手によって、死体を形どる白線以外は、綺麗に掃除されていて、匂いも消えていた。

僕らは全ての調査を終えた。

僕らが求めていた証拠や情報は全て存在し、こうはあってほしくなかった結果となってしまった。

はじめからわかっていたが、結果的にそうなるのであれば、僕らは

警戒を強めなければならぬ…。

「すみません。お仕事で遅れてしまいました…」

僕らの沈黙を裂くように、米山さんが仕事から抜け出して来た。

「いえ…大丈夫です」

彼に気を遣いつつ、基山くんは資料を開く。

「それでは早速ですが、今回の事件について、色々と解ったことをご説明しましょう」

その言葉と共に、スプリミナルによる調査結果報告がついに始まった。

「今回の事件は、反政府ゲリラ組織の犯行で間違いないです。というのも、米山さんから依頼を貰った時から、俺たちはこの死体をどうやってここまで運ぶのか…？と言う点に目を付けました」

「運ぶ…？ここで殺して、そのまま置きっぱなしと言うわけではなくですか…？」

米山さんが首をかしげる。

普通なら自然な行動だな。

「はい。気づきませんでしたか？地面に血液があまり付いていなかったのを…」

淡々と話す基山くんは、米山さんがピクンと小さく眉を動かした事に、僕は見逃さなかった。

「普通、あそこまでバンバン撃ったら、そこら中に血がへばりつくからね…。でも、その形跡はなかった…」

「恐らく、別の場所で殺した上で、自分達のアジトがバレないように移動させたのでしょう。それがたまたま、貴方の土地に置かれてしまった…と言うのが、殺すまでの道のりの推理です」

僕らのここまでの推理と解説を聞き、米山さんは成程と頷く。

「では…その殺害現場は…どこに…？」

「そこまでは僕らもわからない。ただ、考えられるのは…：鏡の中で殺害するとか、鏡の中に遺体を保管するとかね？」

ノーインは鏡の中だけで生息するのはもうお分かりだろう。

しかし、それ以外でも特殊な条件を満たしているのであれば、鏡の

中にいける場合がある。

「鏡の中……ミラーマフィアが鏡を利用するのは、移動手段だけでは……？」

ついにボロが出たな……。

「……なんで、君がそれを知ってるの？」

聞き逃さなかった僕が聞くと、米山さんの瞳孔が開き、額から汗が流れだした。

普通、一般人ならミラーマフィアがそう呼ばれている正確な理由しない。

少々、カマをかけさせて貰った……。

「混乱を防ぐために」ミラーマフィアは鏡を媒体として活動するため「そう呼ばれた」としか、国民には知らされていない気がするんだが……？」

基山くんもこれには彼に鋭い視線をつけざるをえなかった。

「そ……それは……あ、あくまで噂ですよ！よくインターネットニュースを目にするので……それで……」

米山さんは急にあたふたとし始めた。

どうやら、目に見えるほどに嘘が苦手なようだ……。

「リージェンの強みは、鍛えさえすれば鏡を媒体として移動ができると言うこと。勿論、迷惑防止条例でキツく禁止はされているんだがな。しかし……特殊な条件をもっている人間なら、鏡を媒体として移動することができる場合がある」

僕は鏡に手を触れると、まるで水面のように揺れて、肘を飲み込む。

「それは、僕らとかね？」

トランススーツを着用した特異点、もしくはリージェンの血を体内に含んだ人間は、このようにミラーマフィア同様に鏡を媒体として別の場所に移動することができる。

ただし、後者は成功率が50%にも満たないらしいが。

「その技術を知っている人間はスプリミナルだけ……。しかし、それ以外にももう一人だけ、それを知っている人間がいる……」

僕らの頭に浮かぶのは、スプリミナルの最高の味方であるはずで

あつた、最悪の敵…。

「ヴィーガレンツ総大将…???:…」

その名を告げた瞬間、その場の空気が一瞬で冷えた…。

この名を第四の壁にいる君に告げるには、まだ早すぎる。

「元々はぼくら側だった彼なら、鏡の中に入るための条件を知っているだろうから、それを部下に広める事もできるはずだよね…?」

睨み付ける僕ら、顔を青くしていく米山。

その問いは遠回しに『ミラーマフィアの疑いは濡れ衣だ』と言うことを突きつけ、並びに彼の真の立場を問うている…。

「なあ…ヨネヤマさん。ちよつと聞くんだが、あんた…なにを理由に俺たちをここに連れてきた…?」

眼光鋭い基山くんに怯える米山さん。

彼はそつと深呼吸をして、気を落ち着かせ、再度口を開いた。

「わ…私は…死体がここに運ばれた理由をです…ね…」

「違う。君は僕らを混乱させたかっただけだ。死体をわざとここに置いてね」

折角、気を落ち着かせた彼だが、僕がこの事件の結論を提示したせいで、またドキンと鼓動を大きく鳴らしていた。

「お前が俺たちをここに連れてきた理由…。それは、お前らの計画のカモフラージュだったんだらう?」

そう言つて基山くんが出したのは、一台のタブレット端末。

そこには、あのアブのリージェンが殺される前、理髪店でエプロンを着て客を見送っているシーン。

ここで殺されたリージェンは、ミラーマフィアなどではなく、下町の理髪店で働いている一般人だったのだ。

「監視庁には監視課があるの…知らなかった? 君が杜撰な犯行計画を立ててくれたおかげで、彼がマフィアのメンバーじゃないこと位、すぐわかったよ…」

恐らく、殺されたリージェンは、身元を分からなくさせるためにあえて裸にさせられたのだらう…。

そのお陰で、監視課での搜索作業に結構骨を折ったが、なんとか見

つけられてよかった。

「ミラーマフィアじゃないってことはさ…？このアブのリージェン、赤穂 恵羅あこう めくらさんは、ただ単純に”何らかの殺人事件に巻き込まれただけ”ということになるよね？」

「ミラーマフィアは無駄殺しはしない。それに、殺したら殺したでそのままだったり、刻んで鯉のエサにしたりするのが一般的だ…」

佳境を向かえる推理と、瞳孔ガン開きの顔のままうつむきだした米山。

「しかし…お前はこれとは別の計画を隠すために、”敢えて自分から捜査を志願”したんだろう…？」

すると、基山くんは容疑者の肩をそつと叩き、重苦しい声で囁く。

「なあ？ヴィーガレンツの新人…ヨネヤマ ドウマ…」

離れていても身震いしそうな程、凍えそうな声とグルーミーな言葉だ…。

「し…しかし…それではおかしいじゃないですか…？私が能力者と関係を持つているという証拠はあるのですか？こんな、重い身体を運べる能力者と！」

基山くんの態度に恐怖を覚えながらも、米山は反論する。

「いるよ。いや…視点を一般的に変えると『いない』になるかな…？これを見れば…」

ポケットの中から、僕は公安の三条くんから貰った資料を取り出した。

そこには、TK市部一体の異能力者の名前と、その能力が記載されている。

異能力保持者は、自分の能力がわかった場合には、必ず市役所に届け出を出さなければならぬ。

そのため、異能力者情報が必要となった場合には、公安がこの町で生きている生存者を調べあげて、即座にファイリングすることができ

る。「死体を少し調べさせて貰ったんだけど…。これには指紋や触った後が見当たらないんだよね…。その変わりに、何故か肉が割れて壊れた



り、触れたら壊れそうな場所ですら綺麗に残っていた…。ということ  
は、これを運んだのは“重力操作異能力保有者”だと考えられるんだ  
けど……」

そのリストに書かれている異能力者の中には『重力操作をする異  
能』は一人も記載されていない。

あくまでも一般人のみを集められているため、スプリミナルと反社  
会組織は弾かれている。

「今、この町で重力の操作ができる能力保持者は二人しかいないはず  
だ…。スプリミナルの中の一人、そして…」 ヴィーガレンツの主要幹  
部、エル”だつてね…？」

その名を口にする、米山はピクンと肩を揺らした。

「ヴィーガレンツにいるはずだろう？ 仮面を被つて顔を見せず、ずつ  
と俺たちを敵対している爺おぢいが…」

基山くんの声は、憎しみを隠らせたようにさらに重くなっていた。

ヴィーガレンツは少々自由に宗教的なため、主力メンバーの名前を  
捜すとなれば簡単なこと。

しかし、このエルと言う人物だけは、どんな状況であっても自分の  
姿を一切明かさなない代わりに、重力異能で多くのリージェンの殺害を  
こなし、戦闘時にはとことん邪魔をしてくる厄介な人間だ。

武装警察も、頑張つてエルの搜索や特定をしているのだが、未だに  
その正体はわかっていない…。

それを知っているような素振りを見せるということは、米山は確実  
に黒だ。

「どうなんですか…？ 米山さん…」

基山くんがついに彼に釘を刺した。

その途端、米山は諦めたかのように息を吐いた。

「……やはり…あなた方はすごい人達だ…」

ついに肩の荷を下ろし、本性を現す米山…。

「あなた方の言うとおりです…。私は人間至上主義者…ヴィーガレン  
ツ。アブ野郎を殺したのは私、そしてこの土地は私の所有物ではない  
…」

彼が無気味でニヒルに微笑む反面、基山くんは米山に哀れの目を向けていた。

「……捜査ついでに、お前についても少々調べさせて貰った……。会社、リージェンの大地主に乗っ取られたんだよな……。お前が……ヴィーガレンツに入りたくなる理由もわかる……。でも、それで関係ないリージェンを巻き込むのは……お門違いにも甚だしいんじゃない？」

「違う!!」  
知ったような口ぶりに苛立ったのか、米山は怒りを大声に換算する。

「大地主に取られただけなら……私だって人間至上主義にはならなかった……。だがあいつらは……リージェンと言う種族は!!私と、私の大切な社員を!情弱な土地乞食の土民だと罵倒した!!この地球には人間しかいなかったはずだ!なのに!!!」

憎しみに顔を歪めながら、彼は懐から拳銃を取り出した。

「私は……人間として当たり前のことをした……。私はああつ!」  
ガキイン!

彼が引き金を引こうとしたその時、基山くんの特異が銃を弾き飛ばす。

「諦める……。お前じゃ俺には敵わない!」

ナイフのような鋭く冷たい眼光を向けると共に、僕らは彼を完全に敵と見なした。

殺人罪、銃刀法違反、業務妨害等……

彼を犯罪者認定するには、十分すぎる量の違反行為だ。

……つて、元々罪人の僕らがなに思ってたんだか。

「……ふ……ふ……ふ……」

袋の鼠同然の状況のなか、米山から笑みがこぼれだす。

「そうですね……まだまだしたっぱの私には敵わないでしょうね……。ですが……っ!」

途端、物陰から白いフード付きのローブを着た人間がゾロゾロと出てきた。

白いローブには、スプリミナルと似たような金色の線と、背面には

『リーゼンに向ける白い目』を表した、彼らのエンブレムのようなものが描かれている。

彼らこそ、人間至上の為に動くテロリスト…ヴィーガレンツだ…。「やはり…同胞が待機してたか…」

首謀者が危険の中で笑ったあとに、強気な台詞が出たら大体こうなる。

こんな国内漫画でもよく見るベタな展開であっても、これから攻撃を受ける側からすれば、少々厄介なんだよな…。

「あなた方の推理はとても素晴らしかったです…。しかし…一つだけ間違っていた…」

「なに…?」

「エル様のような上級幹部が…私たちなんぞに振り向いてくれると思いましたが…?」

にやりと微笑む米山は、仲間を背に得意気に僕らに伝う。

「どういうことだ…?」

「私たちは…自分達であの不審な死体を作り出したのです…。あのアブを殺した後…私たちは、如何に遺体を傷つけずに、どうやってここに運ぶかを悩んでいました…。そんな中、このヴィーガレンツの下っぱ連中にも、異能力者が存在していた…」

米山がそう言うのと、背後にいた彼よりも若い男がフードを捲って自分の童顔を僕らに見せた。

「それが彼…『中のあるものを一切傷つけずに物を運べる能力』です…」

その能力概要に僕らはハツとした。

「そうか…『下級異能力問題』の類いか…」

下級異能力とは、生活に支障が殆んどないと判断された異能力の類い。

例えば、地面から数ミリだけ浮ける能力や、暗闇でも辺りが見渡せる能力、舌を服の襟の当たりまで伸ばせる能力等、僕たちのような、並外れているとは呼べない物、それが下級異能力。

簡単に言えば”ショボい異能力”ということだ。

普通なら届け出を出さなければならぬ所、弱すぎるからと言って

免除されているのが特徴で、僕らはそれに引っ掛かってしまったのだ。

ちなみに、下級異能力問題というのは、その下級の異能力者が、いつか何らかの事件を引き起こすのではないか？という議論が延々と続いていること。

一方はどんな能力であっても届け出を出すべきだと言い、もう一方は何もしなくて良いと言う。

議論が続いている理由の一番の問題が、ヴィーガレンツだ。

例え小さな小さな能力であっても、使い様によつては罪を犯せる。

その悪意が向いた先が、誰であっても…。

「さて……そろそろ……良いですかね？」

米山さんの言葉と共に、ヴィーガレンツの人間は全員、ローブの中から拳銃を取り出した。

色や形は様々だが、込められている弾丸はハイドニウム。

僕らの最大の敵だ…。

「俺たちを撃つ前に先に聞かせてくれ…」

この場から逃げ出すことに失望している基山くんは、心静かに彼に問う。

「お前が…隠したがっていた犯行はなんだ…？」

「それは……」

彼の問いに米山は口を開こうとはしていたが、ふうと息を吐いて、辞める。

「死んでから知ってください」

氷のように冷たい言葉と共に、ヴィーガレンツの人間は、僕らに向けて、引き金を引いた。

ダダダダダダダダダダッ!!

### 7-3 『影のKと忍び寄る者達』

ヴィーガレンツとは、人間が人間のために作り、リージェンの全滅を目指している宗教的なテロリスト集団。

郷仲の友達だった男が離反して創設し、今では通称『人間至上主義団体』とまでも呼ばれている反政府組織の一つだ。

「…っ！」

大量のハイドニウム弾丸が発射された後、首謀の米山は無数の穴が空いて浮遊する水…つまり”スレスレで特異を使用し、全ての弾丸を避けた僕”に驚いていた。

「すまんな…：ハイドニウム弾丸の対処法は、もうスプリミナル内では練られていてな…」

僕の影の中から姿を表す基山くん。

「君らのような至上主義と対立するのが…僕らなんでね…」

僕も水の身体からいつもの姿に戻る。

僕らのような変質系の特異は、このように着弾する前に体を隠したり、分裂させたりすることによって、ハイドニウムをある程度避けることができるのだ。

まあ、回避するまでに認識する必要があるのだが…。

「くそっ…！」

勉強不足だった米山達は、悔しがりつつも、武器を手から離すことはない。

それどころか、何人かはハイドニウム性ナイフまでも持ち始めているようだ…。

「平和的解決は…無理か…」

できれば争いたくはなかったのだが、仕方がない。

「かかれっ！かかれっ!!」

米山の合図と共に、僕らは戦闘態勢へ入る。

「アーツアンフールド特異武装！」

声帯認証と共に、僕らの手には水色の二刀の禍剣を、基山の手には紺色の槍が握られる。

「はああっ！」

襲いかかってくるハイドニウムの弾丸を弾き避けながら、僕らは彼らの持つ武器を切り裂いていく。

いつそ、身体をぶつたぎれば良いのかもしれないが、許可がない限りは、できるだけ戦闘不能にするのが最善策なのだ。

「面倒だ…一気に行くぞー！」

基山くんの指示と共に、パークーに描かれた丸から、各々の特異を表すエフェクトが吹き出す。

「#000B00…」

彼はカラーコードを呟くと、足元の影が実像として伸び、数名覆えそうなほどの黒く巨大な翼へと形を変えた。…。

「濡翼！」

すると、羽が一つずつピキピキと開くと共に、ヴィーガレンツ達に向けて放たれた。

「ぐあああっ！」

針のような羽が、大勢の人間の腕に突き刺さり、武器が次々に地面に落ちた。

「このやろう…っ！」

それでも無鉄砲に敵に素手で挑む馬鹿もいる。

「原水圧縮、機関銃！」

それを見逃さないのが僕だ。

身体から放出された多くの水の弾丸が、基山くんに攻撃しようとする奴らの頭に当たり、間拔けな声を出しながら次々に気絶していった。

「は…はやい…っ！」

「気にしないで！なんか彼らの身体を傷つければ勝ちなんです！」

米山が慌てて指示をするが、立ち向かえば僕らが倒すだけ。

ミラーマフィアよりも厄介な存在のヴィーガレンツであっても、僕らの力には叶わないようだな…。

「あと何人？」

迫りくる敵に警戒しつつ、基山くんから聞き出す。

「意外としよぼい……こっちはせいぜい10だ」

「こっちは9……。もう大雑把に行こうか……！」

「了解した……」

上記、3つの括弧の中で僕らは即座に作戦を構築し、決行する。

「はあーあ……。ねえ？さつきからザコイ攻撃ばかりで疲れてきたんだけど……？」

一歩前に出てニタニタと嗤いながら煽ると、僕の態度に彼らは唇を震わせて怒りを表しているように見えた……。

「一気に来なよ……。そっちの方が……。めんどくさくないし……」

「なにをつー！」

僕の挑発を見事に買った首謀者は、ナイフを持って僕に襲いかかろうと走ろうとする。

「ヨ……ヨネヤマさんっ！」

しかし、その途中、ヴィーガレンツメンバーの一人の男が、弱々しい声で彼を呼んだ。

その声に不安を覚えたのか、米山は冷や汗を逃がして振り替える。

「う……。動けません！」

米山以外のヴィーガレンツメンバーの影に、黒色の針のようなものが刺さり、彼等は動けないことに混乱している。

「#666464鈍枷<sup>ニビカセ</sup>……。捕獲用の技だ……」

影に隠れていた基山くんが呟く。

ここまで僕が彼らを挑発して気を引いたのは、その隙に基山くんが敵の影に”影でできた針”を刺し、一定時間彼らの行動を止めるためだった。

タイミングと力さえあれば誰だって出来るn番煎じの簡単な技だ。

「そんで……これっつー！」

各々、固まって動けないヴィーガレンツの信者達を収容監獄<sup>グリユンツイマー</sup>、つまり僕が水で作った檻で捕らえた。

しかし、グリユンツイマーは結構な量の水を使う癖に、前9人と後

ろ10人で最低でも二つ作らなければならなかった為、檻自体が小さくなつてしまったのは難点だ…。

まあすぐに捕まえるから良しとするか。

「く……っ！」

一人が、隠し持っていた小型銃を、苦し紛れに取り出そうとするが、僕が弾丸で撃ち落とす。

「はい。それやめてね」

こんなバレバレな方法で勝とうとするのが大間違いなんだよな。

しかしたった一人、グリユンツィマーの手から逃れていた米山は…。

「そ…そんな…」

彼は疲労か失望か、地面に膝をつき、四つん這いの状態になつてしまつていた。

恐らく彼には、これから反抗しようとする力が残されていないのだから…。

「もう終わりだ…ヨネヤマさん…」

基山くんは槍の先端を米山に向けるが、彼はもう動じることもしない。

恐らく、術がないから抵抗するような気すらも起きていないようだ…。

「確保する前に教えてくれ…あんたはなにがしたかったんだ…？」

基山くんがプリズンシールをそつと握りながら聞く。

「……は…ハハハ…」

すると、なぜか米山からは泣き声ではなく、笑い声がこぼれだす…。「なにがしたかった…？…いやだなあ…私の仕事はもう完了しているんですよ…」

米山が顔をあげると、不気味なほどにニツコリとしていた。

「御宅…今日の非番には炎使いがいますよねえ…？」

「…っ！」

その言葉に込められた意味。

それは、本部にいる仲間の危機。



米山の狙いは、スプリミナルにいる赤城くん達と僕らを分散させることだったんだ…。

ということとは…恐らく、赤城くん達にも何かしらの罠や攻撃を仕掛けているはずだ！

「ミズハラ！ 救援だ！ 先輩が危ない！！」

「了解！！」

基山くんの声にハツとし、僕は即座に踵を返した。

赤城くんと悠樹くんが危ない。

救援に向かうために、僕は駆け出そうと足を出す。

バアン！バアン！バアン！

しかし、どこからともなく銃声が聞こえた途端、僕らの身体が硬直し、鈍枷ニカガとグリユンツイマーが解除される。

それはまるで、テレビのリモコンの一時停止ボタンが押されたように…。

「な…こ…これは…」

そこにいた人々は、影から現れた二人の男女の姿を見て、一気に冷や汗を流し始めた。

悠樹くんに出会う前、僕はこの攻撃を受けたことがある…。

それは、虫酸が走るほど不快で厄介で、なにより…一番合いたくなかった人間達…。

「Anti these Regenis…」

「Rebel yell Humanism…」

詠唱されるは、ヴィーガレンツのポリシー。

赤ラインの入った二つの白いローブがなびき、どこからともなく現れた二人…。

「あ…あなた方は…っ！」

米山の声が震えだすと、二人はフードに隠していたその面を明らかにした。

「はじめまして…ではないですよね…？ スプリミナルの皆さん…」

ヴィーガレンツのローブに、レースの白いワンピース、ワンレンシヨートカットの美形顔の女…。

「はあ……めんど……死にてえ……」

死んだ魚のような右目を隠すほど前髪の長い、死にたがりの男……

「ヴィーガレンツ幹部……間克<sup>マカク</sup> 玖美と……」

「月村<sup>ツキムラ</sup> 桔梗<sup>キキョウ</sup>……だね……」

二人の姿に、思わず僕ははたじろいだ。

ヴィーガレンツの幹部は、異能力者のスペシャリストと言っても過言ではない、並外れた力を持つ人間だ。

特異点は異能力の上位互換だが、能力は使うものの腕次第で大幅に化ける。

だから、大体は能力に左右されまくっているような、僕ら特異点にとって、こいつらの登場は最悪に部が悪いのだ……

「す……すみませんーすみませんお二方!!私……こんなにも信者を連れてきたのに……こんな……こんな失態を……」

一気に顔が青ざめた米山は、二人に向けて、その面を地につける。

彼は命令を遂行できなかった事に責任を負っているようだが、救援に来た二人の幹部は、それに怒る様子はなく、間克はそつと米山の顔を持って、面を上げさせた。

「大丈夫……。あなたは謝らなくていいのよ……。よく頑張りました……」

彼女は天使のように微笑み、彼の頬を優しく撫でる。

「お前達を責める気はない……。とつとと帰れ……」

月村はめんどくさげに大きくため息をつくが、そこに彼への悪意はない。

上司二人の予想していたものとは違う対応に、米山は突然両目から静かに涙を流し始めた……

「あ……ありがたい……なんという……幸せ……」

彼等のその慰めと賛辞に、また彼は面を下げた。

宗教的だと思われるのはこう言うところだ……

仲間や人間には何をしようが、どんなミスをしようが、特に怒ることはない。

これが人間ではなくリーゼンになると……想像したくもないな……

「ちよつと待ってね……」

すると、間克はスマホを取り出して、音楽配信サイトを立ち上げた。  
♪

スピーカーからクラシックが流れると、米山だけでなくそこにいた  
ヴィーガレンツ全員の傷が音に合わせて塞がっていく…。

「パツヘルベルのカノンはいっ聞いても素敵よね…」

目を細めて微笑み、戦場でクラシックを嗜む彼女。

これは『鳴らした音によって特殊効果を与える』という、間克 玖  
美特有の異能力だ。

米山達の傷が癒えたのもこいつのせいだ。

どの音がなればどの能力が出るか…等の詳細はまだ解析されきれ  
ていないが、音の溢れるこの世界においては、結構厄介な異能力だ…。

「さあ、これで走れる。はやくお逃げなさい」

粗方、全員の疲労度や怪我が完治したところで、彼女は音楽を止め  
た。

「はいっ！行こう！」

米山が立ち上がり、動けない同士の肩を持ちながら、仲間へ声をか  
ける。

「待て…っ！」

ガキインツ!!

基山くんが米山達を追いかけようとした刹那、月村がハイドニウム  
ナイフを振るい、彼はそれを槍で受け止めた。

「待てっ言っつて待つやつがいんのかよ…。」

「貴様…っ！」

鏢迫り合いの状態のまま、二人は互いに睨み合う…。

月村もなかなか厄介な能力を持っている上に、奴と能力との相性  
は恐らく最悪。

その上、基山くんは月村とは初めて戦うときた。

彼には少々悪いが、その隙に僕は米山を…

ザッ…。

「ごめんなさいねお坊ちゃん…。通すわけにはいかないわ…」

「なんて…うまいことにはならないか…」

先に武器を構えて回り込まれては、しかたがない…。間克の裏で、米山達が走って逃げていくのが見える。

奴らを追いかけるのは一旦諦めムードに入つといて、ここは戦って状況を打開するしかない。

僕は改めて自らの双剣を握り、臨戦態勢へと入った。

「スプリミナルは良いよなあ……。そんなにでけえ武器持つてて」

ナイフでアーツを弾きつつ、基山くんの首を狙う月村。

「くっ！」

それをなんとか紙一重で避けた基山くんは、月村のナイフが届かない範囲まで後ろに下がった。

「こんなナマクラナイフじゃ…。首をかつ切つても一発で死ねねえじゃねえかよ…。お前も…俺も…」

ギロリと無機質な目を向けられる基山くんだが、決して引目になることはない。

「勝手に死んどけ…」

彼に苛立っているような言動で、基山くんは槍を構えて彼に立ち向かっていく。

その一方、間克は彼等の戦いをみながら、フウと一つため息を吐く。「私はできれば平和に行きたいですね…。ボウヤはいかが？」

如何にも上品な言い方にムカつく僕は、身体から小さな水球を作り出す。

「生憎…僕は、あんたみたいに育ちが良い訳じゃないんでね…」

皮肉混じりに返答しながら、僕はこの貴族紛いの女に向けて、大量の水球（機関銃<sup>ハルトヴァアツサー</sup>）を発射する。

「♪」

弾丸を即座に認識した彼女はクラシック調の旋律を歌いながら、そつと手を広げて前に出すと、鉄をも貫ける筈の水の弾丸を、間克は掌だけで防ぐ。

「ふっ…」

しかし、それを囷にしていた僕は隙を逃さず、彼女に向けて剣を振るう。

しかし、ガキンと音が響くと共に、この女の腕が僕の剣を防いでいた。

「クソ…防御力上昇か…？？」

「どうでしょうかね…」

このまま攻撃系の音を出されると面倒だ。

僕も距離を取り得なかった。

この戦闘が一回目ではないが、僕らはまだ彼女の音の性質が掴みきれていない。

どんな音を出せばどんな効果が出るのか、解析しようとはしているが、彼女は音を流す度に旋律やら曲やらを変えてくるから、どうも解説と判断が遅れてしてしまうのだ。

なにかの法則があるのはわかっているのだが…。

「はああつー」

一方、互いに武器をぶつけ合い、火花を散らし合う基山と月村。

未だ、互いの一本の髪すら犠牲にすることなく、五分五分の戦いを繰り広げているようだ…。

「なあ…キヤマ…？だったっけ？」

ナイフ一本でデカイ槍を受け止めている月村が、ふと口を開いた。

「なんだ…」

槍の柄を握り締めながら、話に応じる基山くん。

「お前…なんでそんなにマジになって戦ってんの…？」

「決まっている…俺は世界の近郊を守る…それだけのためだ…っ！」

基山彰は、恐らくスプリミナルで一番正義感が強い人間だ。

元武装警察志望だからでもあるが、彼には生まれつき潜在意識として、悪を許せないと言う思想が強く根本にあるのも原因と思われる。

「ふうん…。いつちよ前だなあ…？俺なんかとは違って…」

僕らとは反対の立場にいる月村は、ナイフの刃を滑らせてランスを退かしながら攻撃を避ける。

「お前とはわかりあえそうだと思ってたが…ぜんぜん違うんだなあ

…」

「そもそも僕らとは立場が逆なのになぜそんなことを…？」

「ああ…でも、そんなこと言ったら…可愛そうか…」

その一言の後、奴の空気が変わったことを即座に察した。

「キヤマくん！聞くなっ！」

忘れていた…彼の異能力のこと…っ！

「お前が見殺した女のことか…！」

無慈悲に放たれた月村の一言は、完全に基山くんの地雷を踏んでいた…。

「なに…？」

言葉を聞いた彼の表情が、クールなものから、熱く沸々と滾る物へガラリと変わる…。

「可哀想だなあ…？どちらもがどちらもの思いを忖度してやったのに…まさか死んじゃうなんてねえ…。はあ…悲しい…。俺も…似たようなことがあったから…わかるぜ…？」

月村の一言一言に連動するように、基山くんの血管が浮き出始める…。

「貴様に…貴様なんかにわかって貰うほど俺は落ちぶれていない…」

「ふうん…俺と同じで、自分のせいで愛する人を亡くしたの？」

いつもは冷静な彼から、グラグラと怒りが煮え立っているのが分かる…。

「違う…！俺とアイツの思いと、貴様の勝手な固定概念とは全く違うと言っことだ…」

「ああ……そっかあ……。だってキヤマの場合は、単純に男女どちらもが憐れすぎたからなあ…」

「だまれ……それ以上…サキのことを話すな…っ！」

ため息混じりの揶揄に、基山くんの怒りは限界に達している…。

これはマズイ…！

「やめろ…耳を貸すな…」

「邪魔しないでくださいっ！」

僕はなんとか耳を塞ぐように促そうとするが、仲間の間克が邪魔を

する…。

奴の異能力は、特異点でなくても避けたい位の厄介な能力…。

「分かりたくないならもっかい言つてやるよ…。」

月村はわざとらしくため息をつく…。

「お前とハナエ サキつて奴は…極めて「r t・愚蒙ぐもろ」」だつたつてな…。」

「…っ！」

その言葉に、ついに彼は堪忍袋の緒が切れた…。

「貴様あああああああつ!!!」

基山くんはその身を怒りに任せて、槍を地面に突き刺すと、無数の槍状に変化した影が、コンクリートを突き破つて飛び出し、月村に攻撃し始めた。

「おおお…：威勢がいいこと…。」

しかし、月村はその攻撃パターンを始めに予習したかのように、紙一重で避ける。

いや、したかのようにではなく”予習していた”の方が正しい。

月村の異能力は『人の過去を読み取れる』と言うもの。

その人間に何かしらのアクション、つまり触れたり話しかけたりするだけで、一定の期間の過去を見ることが出来る。

月村はそこから得た情報で人の地雷をほじくりかえして精神口撃をしたり、過去から攻撃のパターンを予習して、対応ができるようにすることもできる。

基山くん到他界済みの恋人がいることだつて、彼にとっては筒抜け同然…。

正直、性格が悪い奴にとつては最悪且つ、うってつけの異能力だ…。

「キヤマくん、落ち着い…：ぐっ！」

彼を止めようと水球を出そうとした瞬間、一発の弾丸が螺旋を描きながら脇腹を掠めた。

「どこを見てるんです?」

ハイドニウムを撃ち込まれたことと、不気味にニコリと微笑む間克が腹立たしい。

脇腹をみると、トランススーツが弾丸よりも大きく裂け、露出した皮膚に黒い粉と血液が付着していた。

特異を使うための力がでない。

異能力で弾丸の威力を上げられている上に、少しの間、特異の使用を禁じられたようだ。

面倒だが、アーツで対応するしかないか…。

「だってそうだろう…？おしはかってやったのに死ぬなんて残念でしかない。それに…あまりにも無価値な死に方だ…。大した夢も持つてなかつたくせにな…」

無情な言葉を投げつけ続ける月村に、基山くんの怒りは収まらない。

「黙れ…っ！貴様なんか…サキをバカにするなあ!!!」

死んだ彼女のことを思いつつ、基山くんは影に槍を突き刺したまま、自らの特異を再度発動させる。

「#373C38っ！」

カラーコードを叫ぶと、ビルの壁にかかっている影が具現化して伸び、綿雲のような形に変化する。

「哀<sup>あいずみのあめ</sup>済雨っ!!!」

すると、具現化した影から真っ黒い液体が雨のように降りだした。

「ぐ…っ！」

その雨に腕を掠めた間克。

その瞬間、その腕の肉と覆っていた衣類が切り裂かれ、血液を噴出させた。

この攻撃は、針状の雨を降らせて、敵の身体を切り裂く物。

その威力は、間克と月村の着ているローブを皮膚ごと裂くことだって可能だ。

「でも…そう言うの、もう俺はわかってんだよなあ…」

月村はポケットにいれていたハイドニウムの粉を取りだし、それを上空に向けて撒く。

すると、雨がハイドニウムを拒むと共に、基山くんの技が雲ごと消滅した。



やはり、過去を読む能力は厄介きわまりない…。

「すみません！ツキムラさん！」

裂けて血の出た箇所を抑えながら、間克が遠目に謝る。

「別にいい…って、あれ？」

月村が返答をしていた数秒の間、彼はいつのまにか基山くんの姿が消えている事に気づく。

「…っ！」

その途端、月村の背後に基山くんが影から出現した。

あいずみのあめ  
哀済雨は囷だ。

雨に気を取られている数秒のうちに影を経由して敵の背後に移動する事くらい、彼にとってはお手の物だ。

基山くんは喰らえと呟きながら、月村の背に槍を穿とうとする。

「ああ…悪い…」

しかし、彼はそれすらにも動じない…。

キーンツ！

「それもわかってたんだわあ…！」

突きつけた矛先は、即座にその小さなナイフで防がれてしまった…。

「くっ…。。。そこまで見きるか…っ！」

バキーンツ！

諦めずに次の一手を出そうとした瞬間、基山くんの顔に向けて弾丸が飛来する。

「ちっ…！」

それを見きっていた彼は、なんとか銃撃を紙一重で避けた。

「あら…かわ躲された…！」

弾丸を放ったのは、先ほどから耳障りな旋律を奏で続ける、生け簀かない女だ…。

「お前の相手は僕だろ！」

ギーンツ！

振るった双剣は、逆手持ちされたりボルバーのスライドで受け止められた。

「なかなか出きるのねボウヤ…。剣道でも習っていたのかしら？」  
その余裕な表情がさらに鼻につく…。

「生憎…我流だよー！」

返答と共に、乱れ刃の間に彼女の持つ銃を差し込み、そのまま剣を振り下ろす。

剣についていた水飛沫が舞うと共に、敵の腕から武器が落ちた。

「くっ…！」

銃が着地すると同時に、彼女はスピアの拳銃を懐から取り出そうとする。

「ふっ…！」

だが、その隙を逃さない僕は、間克の腹を思い切り蹴ってやった。

「くっ…！」

痛みと衝撃に顔を歪めながら、彼女は牽制する。

踵からいつもの液体の感触が戻っているようだ…。

もう水が出せる…。

恐らく、付着したハイドニウムが微量だったからだろう。

「よし…っっ！」

そうと決まれば、僕は踵から水を出して浮かぶと共に、肩から水を放出して水球を二つ作り出す。

「原水圧縮！<sup>グロースシヤオム</sup>大砲っ！！」

肩から作り出された巨大な砲弾が、間克に向けて打ち出される。

「くっ…！」

攻撃を間近に、彼女は足元にあつた石を咄嗟に広い、近くにあつたトタンに投げつけた。

「カァン！バシヤァンツ！」

トタンと石、人体と水の防弾。

各々の衝突音が共鳴するように鳴り響く…。

「ゲホッ！クッ…！」

異能力で身を守っていた間克だが、どうやらそこまで強固な防御力を発動できなかったようだ…。

「お得意の異能力はどうしたの？えらくお疲れのようだけど…」

「さすがに……この音量じゃ無理だったのよ……」

軽い煽りに対応できると言うことは、まだこちらの攻撃に対応できると言うことか……。

ようやく奴の異能力ちからについて少しつかめたような気がする……。

この異能は、出した音の大きさによって力の増幅が変わる。

大きければ大きいほど強くなり、逆に小さければ弱くなる。

これだけでもデカイ収穫だが、歌声と衝突音でなにが変わるのかがまだわからないから、まだ観察が必要だ……。

バァン！

「おっとー！」

しかし、未だ彼女が鼻唄で旋律を奏つづける限り、この厄介な戦いはつづく。

このまま戦っていても罅が空かない。

ポケットからタロットを数枚取り出してみても、結果的には負けの確率が高いと出ているし、例え勝ったとしても、彼らの事だから、何かしらの方法で逃亡を図る可能性が高い……。

そもそも、首領があいつな訳だから……。

「千墨針！」  
せんぼくしん

一方、影から多くの針を突出させて攻撃をする基山くんと、それを避ける月村……。

「こうやって串刺しにされたのか……？ シンプルに首吊り？ それとも……ビルかどっかから突き落とされたか……？」

「黙って死ね……っ！」

次々に地雷を踏まれ続け、精神を安全に彼の手のひらで踊らされている基山くん。

「ふん……」

すると、彼は長いコートの中に隠し持っていたコンパクトマシンガンを取り出す。

ダダダダダダダダ！

大量の弾丸が土煙を舞わせながら、発射された。

例えエイムが下手くそであっても、何十以上もの弾丸を放たれ

ば、即死もおかしくはない。

「…!?!」

しかし、そこに基山くんの姿はない…。

「影に逃げたか…。」

スプリミナルは対抗して攻撃をするよりも、避けたり防いだりする手を先ずは考えるため、コンマ数秒以内に影に潜る事も基本なのだ。

「そうくると…。」

月村は怯まず、弾丸のなくなった銃を地面に捨て、次の衝撃に備えてナイフを構えた。

過去の記憶を遡り、次のパターンを即座に計算している…。

「…っー!」

しかし突然、彼の背後から巨大なカッター形状の刃が突出し、月村の足を傷つけた。

「ツチ…翼じゃないのか…!」

攻撃を受けた月村は即座に後退し、ポケットから包帯を取り出して、素早く患部に巻いた。

「ワンパターンで動くほど、機械的じゃないんでなっ!」

そう言いつつ、基山くんは影から幾つもの形状の剣を出現させて、敵に向けて飛ばして攻撃し始めた。

もう、基山くんと共に逃走する策は無理だろう。

精神口撃を喰らいすぎて、彼は感情に流され過ぎている。

自分の愛するものをバカにされて、ああなる気持ちはわからなくないが、少しは落ち着かないと命の危険に関わるはずだ…。

「あなたも…：…なにか過去を見てもらっつてはいかが…?」

こちらの戦闘中、ふと間克が口を開いた。

「自然と出てくるわよ…：…いかに…：リージェンが下等で下劣で下衆な存在なのか…!」

胸くそ悪い笑みを浮かべる彼女の言葉から、思い出されるのは自身自身の最悪の過去。

暗闇のなか、捨て犬のようにへたばっていたあの日のこと…。

「ああ…：。確かに、リージェンはたまにゴミクズのような奴もいる…!」

彼女の言う通り、自分が出会ってきたリージエンに、全てが善人なんてものではなく、寧ろ悪の方が多いい節もある。

何度、殴られた？

何度、蹴られた？

何度、罵倒された？

何度、顔に唾を吐き捨てられた？

自分自身のバケモノと共に、それを思い出していた。

この世は屑ばかりだ。

それも全部分かつてる…。

「でも…そんなくそつたれなものは…人間だって同じだ…っ！」

自分が受けてきた暴力も罵倒も、全てリージエンがやってきた訳じゃない。

どんな種族だろうが、誰かを蔑み、罵倒し、卑下しながら、自分自身を鼓舞しようと生きている。

話せる知能のある生物なんて、大バカ野郎しかいないんだよ…。

でも…それでも光って見えるんだ。

知能があっても、バカなことをしない生物の笑顔が…！

「リージエンの善を見ようとしな…わかったような口を聞くなっ！」

ヴィーガレンツの馬鹿野郎どもに怒りを叫ぶ僕は、腹部から大量の水を放出した。

「キャッー！」

間克の目をくらますと、僕は水球をいくつか作り、後退する。

一旦落ち着け、怒りに任せて捕まえようとするな。

今すべきなのは…奴等の計画を潰すこと…。

悠樹くんや赤城くんの元へ行くことが一番の目的なんだ…。

「フウんッ!!」

「…っ！」

基山くんの方は、彼が大きく振るったランスが、ついに月村の頬を傷つける。

互いに息を整えている数秒、彼は僕とは対照的のことを考えている

はずだ…。

如何に目の前の敵を殺すか、この戦いにどうやって勝利するの…。

いつも盲目になるなって言ってるような奴が、こうなっちゃ終いな…。

「なら…やることは一つ…。」

僕が彼の忘れていることをカバーするだけだ…。

成功するかどうかは分からないが…ヴィーガレントツ相手に、案じてはいけない！

息を整えろ…。

とにかくやれ…っ！

今は打開さえできればそれでいいんだ！

「これで…決めるっ！」

## 7-4 『影のKと忍び寄る者達』

「これで…決めるっ！」

偶然にもスプリミナルふたの声が重なりつつ、僕らは大きな勝負に出た。

「原水放出!!」

僕は身体の中にある水を出来る限りの最高出力で放出。

「#2A2A2A!」

基山くんは具現化させた影の剣を帯状に変化させて、それを槍に巻きつける。

こちらを睨み付けてくる二人の害悪人類を出し抜くため、僕らは今できる最大の力を放出するのだ…。

「収容監獄!」

「黒螺旋・突!」

その途端、間克の身体ギリギリの大きさの水の檻が召喚され、基山くんのアーツに武装された影が、渦を巻いて回りはじめる。

「無駄なことを…」

対抗する間克は旋律を奏でながら水の檻をハイドニウムのナイフで切り裂くが、檻が形状を変えることはない。

「…?なぜ…」

グリユンツイマーは、切れば切るほど、水の勢いを増している…。ふと上を見てみると、天井に値する水塊が厚くのし掛かっていた。

「なるほど…天井に大量に水を使いましたか…」

彼女の言うとおり、僕が放出した最大出力は、上から落ちてくる水を、ハイドニウムで斬られてもその形状を保つためだ。

お陰で、身体全体の肌がカツサカサだけど…。

「これで暫く、君は動けないよね…」

「マセガキが…」

悔しげに、笑みを崩して睨む間克を嗤いながら、僕は残っていた少しの水を、踵から噴出させて飛ぶ。

ビルよりも高く飛んだ僕は、目の前に広がる町並みに目を凝らす。この隙を狙って、今、危険な状況に陥っているであろう赤城くん達を探るんだ…。

「ふうふうんっ!!」

一方、基山くんは影で武装されたアーツの矛先を月村に向けて走り出していた。

「邪魔だ…っ!」

対して月村は、影で武装されたアーツを、ハイドニウムの弾丸で排除しようとする。

しかし、螺旋を描いている影は何重にも重なっていて、例え剥がれたとしても、威力が下がることはない。

これこそ、基山の編み出した黒螺旋の真髄である…。

「はあっ!!」

基山くんは、先にアーツで彼の銃を弾き飛ばし、そのまま彼の身体に矛先を向ける。

月村はナイフを取り出すも、螺旋から伸びる影によつて柄を砕かれ、アーツの切っ先で刃を割られた。

しかし、ハイドニウムで固められたナイフの破片によつて、アーツに巻き付けられていた影は、ほとんど砕かれた。

一瞬、ほくそ笑んでいた月村だが、その笑みはすぐに止んだ。

「…なるほど、そっちが囷か…」

死にたがりの異能力者はようやく気づいた。

基山くんの左腕には、プリズンシールが握られていたことに…。

「ツチ…これは撤た…ツ!?!」

月村は確保から逃がれるために足を大きく広げようとするが、身体が全く動かない。

それもその筈。

彼のナイフによつて、黒螺旋から分離された基山くんの影は、地面に落ちる前に針に形状を変えると共に月村の影に突き刺さり、鈍枷にびかせに変わっていたからだ。

「なるほど…上手くやったなあ…」



「そういうことだ…」

手にもつ武器が震えそうな程の低声で呟くと、基山くんは月村の横腹にその槍を突き刺す

苦しみで顔を歪める月村に、基山はもう片方の手に持ったプリズンシールの針を向ける。

確保できれば先ずは勝ちだ…。

「これで終わりだ…っ！」

槍に力を入れ、彼はそのままプリズンシールを突き出した。

「……そうか…」

ザシユツ！

「…っ！」

しかし、プリズンシールが月村の身体に突き刺さろうとした刹那、基山くんの首筋から大量の鮮血が噴き出す。

「うぐっ…！」

首を斬られた彼は地面に倒れ、流れる液体がアスファルトの灰色を朱殷に染めた。

その様を見て嗤うのは、過去を見ることのできる異能者だ…。

「悪いな…：俺は飛び道具は嫌いだから銃を一丁しか持っていないが…」

月村がヴィーガレンツのロープを開くと、そこには無数のハイドニウムナイフが納刀されていた。

「ナイフなら何本でも装備してるんでな…：…」

「基山くんっ！」

しまった、騙された…っ！

過去を見れるんだから…：彼が戦ってきた時間全てを遡って逆算し、そのまま彼がどんな攻撃をするか予測していたんだ…。

あえて突き刺されたように見せるだなんて容易い事に決まってる…っ！

「くそっ…！」

赤城くん達は未だに見つかっていない。

これは…敗北を認めざるを得ないか…。

「しかたない…!」

撤退のため、僕は少ない水の量で即座に降下した。

間克はまだグリウンツイマーからは出られないはずだから、まだ基  
山くんの身体を回収して逃げる位は…。

ダアンツ!

「っ!」

なんて思っていた矢先、飛来したハイドニウム弾丸が僕の腹を貫い  
た…。

身体から全身の力が抜ける中、地面の下では間克が、煙巻く銃口を  
僕に向けて嗤っていた…。

「ぐ…な……なんで……」

地面に身体が叩きつけられた瞬間、間克の身体をよく見ると、服や  
髪は濡れで、一部には血も付着している…。

「強引に抜け出したのか…」

「そして…即座に治したのよ…」

間克の持つ携帯からは、クラシック音楽が流れている。

グリウンツイマーは結構な威力なのに、こんな異能力の併用だけで  
強行突破するとは…。

彼女の性格を見誤りすぎた。

「ドヴォルザークの新世界って…とても良い音色よね…」

おしとやかっぽそうなのに、こんなに強引な作戦を思い付くこいつ  
が、腹立たしい。

なにより…それを見抜けなかった僕もだ…。

「さて…どうしますか…? ツキムラさん…」

濡れた髪をしぼりながら、聞く間克。

「殺す以外ねえだろ…。影使いもまだ息があるんだし…。」

月村がそう言うと、二人は共に僕らを憐れむように睨んだ。

「く…。」

完敗だ…。

完膚なきまでの完敗…。

自分達の実力と奴らの野心との誤算が故、もう手も足も出せない位やられてしまった…。

がんばって逃げようとしても、ハイドニウムの効力と疲れが体を縛り、指ひとつも動かせない…。

「悪いな…。俺は死にたがりだが…刑務所のなかでおつ死ぬちような趣味はねえんだ…。」

僕の顔の前に立ち、見下す月村。

「お前は良いよな…今から死ねて…。」

お前と違つてこつちは死にたくないんだよ。

なんて、応えてやれるほどの体力も残つてないが…。

「まあ、せいぜい…天国で幸せになれよ…」

もどかしさに苦しむ僕に、ナイフの刃を向けられる…。

「?????  
…?  
っ!」

「!!」

声にならない叫び声<sup>えが</sup>が空をつんざいた。

自分にとつて、それは言つてはならないもの。

人間よりも、リージェンよりも、ヴィーガレンツよりも、この世の何よりも、嫌いな言葉を口に出した彼らは、殺してやりたいほどの<sup>えが</sup>啞顔おだった。

この憎しみを噛み締める事もできない僕に、ついにナイフが振り下ろされた…。



キインツ!

「…っ!?」

しかし…そのナイフが僕に突き刺さることはなかった。

「な…」

それは、突如現れた一人の特異点が、レイピアの型のアーツを使つて、ナイフを弾き飛ばしたからだ。

「やれやれ……なんかでつかい水の弾が見えたと思ったら……今度は死にかけが二人かしら……」

ふわりと靡く黒のフード付きロングコートが目に入うた。

見上げると、長く美しい黒髪が揺れ、その女が僕らに哀れみの目を向けている…。

その黒地の装いには、パールのように白く光った、スプリミナルを表すラインが描かれていた。

彼女の名は深山歌穂。

十数日ほど前に、リーゼンによる強姦に会った少女を助けた、スプリミナル探偵課の社員であり、女医だ…。

「あら……あなた方とは初めましてかしら……」

こちらを睨むヴィーガレンツに、その強気に釣った目を向ける。

「貴様……スプリミナルの女医か……」

「ああ……違うのね。私……嫌いな男はすぐ忘れちゃいたいタイプだからかしら……。ごめんなさいね？」

男嫌いの深山くんが月村を鼻で嗤うと、罵倒された当人は、苛立ちでさらに強く眉間にシワを寄せていた。

「ミヤマくん……キヤマくんが……」

消えかけの声で必死に伝えると、彼女は大きくため息をついた。

「わかってるわよ……」

やれやれと敵から踵を返す深山くん。

彼女は手にもつレイピアを左で逆手に持ちながら、基山くんの前に立った。

「仕方がないわね……あんたはホントに……」

ドスツ!!

「ぐ……があ……」

すると、深山くんは手に持つレイピア型のアーツを、突然、基山くんの身体を突き刺した。

その瞬間、微かに残っていた意識が声から漏れだしていた。

「仲間を見捨てる気……?」

彼女の所業に、間克は目を見開いて驚いているが、彼女のことを

知っている月村は首を横に振る。

「違う、マカツさん…。あれがアイツの特異だ…」

彼の言うとおりだ。

この刺撃には、殺意ではない意味がある。

「あ…ああ……………」

その証拠に、割けていた基山の首の肉が、少しずつ塞がっていき、流れる血液の量も少しずつ収まっていった…。

彼女の特異は『血液を媒体としてどんな外傷も治す』と言うもの。

彼女の血液の中には、外傷の完璧な修復作用を持った細胞が生息しており、それを対象の生物に輸血することによって、細胞が傷口の修復と、細菌の滅殺等を助けてくれる。

血液の摂取量によって回復量は違うが、数ml血液を入れるだけで、0.00001%の生存率から命だけでも救うことも可能だ。

ちなみに、彼女のレイピア型アーツは注射器と同じく中に小さな管が通っているため、そこから血液を注入することができるのだ。

基山くんの首の皮が繋がると共に、彼女はレイピアを抜いた。

「結構な量を刺しといた…。あと数秒遅ければ絶対に死んでたわね…。それで、水原はこっちで対応しなさい」

彼女はそう言うと、僕には血液の入った注射器を投げ渡された。

これがスプリミナルにとつての回復薬なのだ…。

「あいかわらず…無愛想な…」

僕はなんとか目の前に転がった注射器を掴み、そのまま自分の指に針を突き刺した。

深山くんの血液は、どんなところに刺しても効果は変わらない。

「さて…。それで、あんた達はなにがご所望…？私身体かしら？」

少し卑猥な冗談を呟きつつ、大人っぽく麗らかに立つ彼女は、レイピアの先端の血を振り落とした。

「♪」

その瞬間、間克が声で旋律を奏で、強化された月村が深山くんに向けてナイフを振るう。

「ふっー」

彼女はアーツでその攻撃を防ぐと、キーン！と硬物が擦れるような音が響く。

「なんだ…そういう訳じゃないのね…っ！」

彼女はレイピアをクルリと旋回させてバランスを崩させると、月村の身体を思いきり蹴飛ばした。

男だろうが女だろうが、深山くんは敵に容赦などしない。

「グウツ…！」

攻撃を受けた月村は、腹を抱えながら、後退する。

「なかなか重い一撃ね…そこあなたのお蔭かしら…？」

深山くんはレイピアをそつと撫でながら、ヴィーガレンツの二人に冷たく笑みを向けた。

「クズの命を助ける愚者が…！」

間克がスマホから音楽を流して治療する中、彼女を睨む月村が口を開く。

「お前も…人の幸福を吸いとっては捨てる売女ばいたか…。そんなくそつたれな過去を持つている癖に…今さら人を助けるなんざ反吐が出る…」

どうやら、彼は彼女の過去を見ていたようだ。

近づいて攻撃していたのは、その特異を早く発揮させるためだろう…。

「お前に命を重んじる権利などない。さんざん性交渉して、さんざん精液を飲んできた結果がそれだからな…」

また地雷を狙った口撃だ。

深山歌穂の過去に、売女と言う物は濃く関係している…。

それに、夜の仕事をしていることに恥がある女性なら、発狂して動けなくなるか、ぶちギレて勤続バットでも投げそうな可能性があるだろうか…。

「だから？」

深山くんは平然と首をかしげた。

「なに…!？」

過去を攻めた口撃が効かないことに、月村は驚いていた。それもそのはず。

深山歌穂は初めから”自分の罪を受け止めきっている”からだ。自分が自信が引きずっている枷のために身体を売り、男を騙し続けた深山歌穂は、尻軽や淫乱、男狂い、ましてや売女などと罵倒されようが、一つも動じることはない。

彼女は自分の足枷を引きずり続けてきたのだから、それに慣れたが故、今や冷えきった人間になったわけだ…。

「キヤッー！」

混乱のなか、次の口撃の材料を探そうとしている月村の隙を付き、深山は間克の背後に回り込み、彼女の身体にしがみついた。

ただし、その掌は間克の胸を思いきり鷲掴んでいる。

「あら、綺麗な形のおっぱいしてるわね」

「離っ…！」

ドスツ！

「うっ…！」

恥部を触られていることに気をとられていた間克は、彼女が背中にあるアーツを突き刺そうとしていたことに気づいていなかったようだ。

「貴様…っ！」

「動くな！」

深山くんは声を上げて、背中に剣を刺されている仲間を助けようとする月村の動きを止める。

「あなたなら、私の特異の本質…知ってるわよね…？」

彼女の不気味な笑みに、月村は悔しげに歯を食い縛った。

何事であっても、効果と言う概念から説明できる事柄は一つだけはない。

彼女の攻撃であっても、レイピアを刺す、相手は血が出る、血液を注入できるといった、様々な事柄が生じる。

特異と言うものもそれで、彼女の回復の特異にはもう一つ特徴があるのだが、少し先に彼女のメイン回があるから、それはここではまだ記さないでおこうか。

「……なにが目的だ…！」

睨む敵に、嗤う深山。

「こつちには手負いが二人もいる…。一人はまだ動くことも出来ない。だから、ちよつとは平和に行きましょう…」

そう言うと、彼女は間克の胸に回していた片手を、頭に置いた。「あなた達、なにか計画を立てていたんでしよう？今からあなた達が撤退すれば、この子の命を助けてあげるし、私たちもあなた達を追いかけないと誓う。N oと言ったら…：まあ、それがわからないほどバカじゃないわよね…：？」

彼女の提示したその条件は、僕らの身体を思いやった訳ではなく、あくまでも現状の最適解を考えてのことだろう…。

僕らが大敗したように、ヴィーガレンツはたった二人の異能力者であっても、特異点を殺せるほどの強すぎる応用力や戦略が整っている。

万全の体制の深山くんが来てくれたとしても、彼女が殺されないと約束できるものは決して存在しない。

だから、あくまでも彼女は『平和的解決』を選んだのだろう…。「ツキムラさん！応じてはいけません！今回の指令を考えれば、こつちに負債があります！」

選択に迷う月村に向けて、間克は必死に交渉決裂を投げ掛けた。彼女としては、自分自身の命よりも、任務に集中したいようだ。

「…：ツチ…：悪い…：マカツ…：」  
そうは言った月村は持っていたナイフから手を離した。

「仲間を売女に殺されるなんてまっぴら御免だ…。マカツを放せ…：」  
どうやら彼自信としては、仲間を切り捨てたくは無かったようだ…。

「Okie— Dokie♪」  
深山くんは、突き刺していたレイピアを抜き、彼女を突き飛ばしながら、身柄を解放した。

「この…：っ—」  
「やめろー！マカツー！」

深山の態度に怒りを覚えていた間克は拳銃とナイフを取り出すが、月村がそれを止めた。



「どうして了承したんですか……今、この人を殺せば……私たちは！」

興奮状態の彼女の言葉を、月村は人差し指を立てて止めた。

「ボスが言ってるだろ……。焦りすぎて仲間の命を失わせるなど……」

彼女が冷静を欠いた行動に向けてか、そう言っていた彼は悲観を顔に浮かべていた。

「……くっ！」

眉をしかめる間克に、深山くんは少し得意気に見えた。

ヴィーガレンツツとしては同胞を見捨てることは禁忌のように見える。

まあ、指揮者が郷仲の友人なのだから、当然か……。

「お前らに……っだけ言っておく……」

月村はナイフを拾い上げ、僕らに刃を向ける。

「我々は必ずお前達を潰す……。それが……人間にとっての最適例なのだから……」

威風堂々、啖呵を切るように宣言する月村だが、それに動じることはない。

「やってみなさい……潰してあげるから……」

ニヒルに笑いながら、彼女も対抗する気満々で言葉を返した。

その態度に月村は、ぐらぐらと怒りを沸かしているように見えたが、彼は一つため息をつくと死んだ魚のような目に戻った。

「マカツ……頼む」

彼は間克の手を握ると、彼女は深山くんを睨みながら笛をとりだした。

ピイイイイイッ！

勢いよくその笛をならすと、彼女は月村の腕を強く握り、人並外れたジャンプ力で飛んで逃げていった。

なにかトラップを残したような形跡はなさそう。

どうやら、僕らは助かったようだ……。

「ったく……なにしてるのよあんた達は……」

ため息混じりに、深山くんが僕らを軽視する。

「……ごめん」

「ごめん、済ませようとするくらいなら戦わないで。私の先輩に当たるからって、あんたはまだ子供なんだから。軽々しく粋がつてんじゃないわよ」

相変わらず医療用メスでもなげつけてくるかのように鋭い言葉だが、こればかりはぐうの音も出ない…。

「それに…キヤマもキヤマよ。怒りで我を失うなんて愚か極まりないわ…。ホント大馬鹿ね、男って。落ち着きと逃げの選択つてもものを持ちあわせてない。だからこうなんのよ」

言いすぎじゃないのか…とか言いたかったが、恐らく言ったところでまたしつこく言われるのだから黙つといた。

それに、彼女の言うとおりの部分も勿論多い…。

もつと、僕が基山くんを止められていれば、こんだけ言われることはなかっただろうし、立てないくらい辛い思いもしなくてよかつた…。

自分自身が情けない…。

「う…：…うっ…」

そんな中、同じく深山くんから軽く罵倒されていた彼が、ゆつくりと目を覚ました。

「あら、起きた？強がり坊や」

「誰がだ…：…。つて…：言えねえか…：…」

申し訳なきげに、基山くんはため息をつきながら顔を左腕で隠した。

あの中で、一番冷静さを欠いて、殺人に一心不乱だった彼にとって、今回は悔やむべき結果になっただろう…。

「そうだっ！アカギは！？先輩達がヴィーガレンツに狙われてる可能性が！」

ドオオオオオオオオオンツ！！

基山くんの心配に応えるように、どこかから巨大な爆発音が鳴り響いた。

「ああ…：…なんとなくわかつたわ」

この爆発の宿主が誰なのか、なんとなく全員わかつていた…。

「とにかく、あんたらは帰りなさい！病み上がりは足手まといになるんだから…。いいわねっ！」

深山くんはそれだけ言うと、トランススーツのお陰で強化された身体でビルを飛び登りながら、赤城くん達の救援へと向かった…。

「つたく…。本当…惨めだな…俺は…」

両腕で顔を塞ぎながら、基山くんは改めて自分のいたらなさを悔やんだ…。

「足手まといで惨め…か…。」

僕はと言うと、未だに身体がハイドニウムで痺れる中、彼女の言葉が引つかかっていた。

未だ、自分は強くなれていないのだと改めて思い知らされてしまったことに落胆…。

「ツキムラキキョウ…マカツクミ…。」

それと同時に浮かぶのは、ヴィーガレンツの二人が僕に向けて”あいつ”の名前を出しながら、嗤う姿だ…。

「絶対に…殺してやる…。」

殺意をぎゅっと握りしめながら、僕は僕に誓う。

もつと強くなるから…。

To be continue…

8—1 『Aの炎、殺戮の信教』

パチパチと火花を撒き散らしながら、コンクリートの上で炎が揺れる…。

化学的な立証不可能な現象に巻かれている中、僕の隣で涙にまみれた顔をしている女の子は、共にその惨劇に度肝を抜かす…。

「そ…そんな…」

煙の中から出てきたその女は、片手にナイフをもちながら、傷だらけの僕らに向けて微笑んでいた。

僕らがこの事件に巻き込まれてしまったのは、水原くん達と別れてからのことだ…。



時間を、彼らと別れた後に遡る。

郷仲さんから、フェイバリットでの仕事を命じられた僕は、同じくカフェ業務を命じられた赤城さんと、行動を共にしていた。

「ユウキくんは、喫茶店の仕事どう？」

エレベーターから降りるちよつと前、赤城さんがふと聞いてきた。

「二応、講習が終わった後にすぐにやって、それからも何度かカフェで働かせてもらってたんですけど…：やっぱり自分はまだまだです…でも、大変だけど今までの仕事よりも楽しいです」

今までやってきたというよりも、前職の詐欺よりは破格にホワイトだから、強くそう感じるのだろう。

ちなみに、探偵業よりも楽しいのは内緒だ。

「そっか、ならよかった。楽しんでくれてるなら、あおいちゃんも喜んでると思うよ」

そう言ってくれる赤城さんは、曇りの無い笑顔を浮かべていた。

今まで出会った特異点の中でも、彼はなんとなく取っつきやすい性

格をしていて、僕は好きだ。

もしも僕が次男だったら、こんなお兄ちゃんが欲しかったな…。  
なんて、変な幻想を浮かべていたところで、赤城さんがフエイバ  
リット裏口の扉を開けた。

「あおいちゃん？今日のヘルプに来たけど？」

彼が声をかけると、厨房からいつも通りの三点癬つ毛を跳ねさせな  
がら、あおいちゃんが顔を出した。

「はい…あつ！リュウセンくん！帰ってきてたの!？」

「うん。ちよつとキモくて大変だったけど…なんとか帰還しました」

苦笑いを浮かべる彼に向けて、あおいちゃんは笑顔で敬礼をする。

「お勤め〴〵苦労様ですっ！」

その可愛らしい仕草と激励に、彼は思わず笑みを溢した。

「アハハ。んじゃ、今日も頑張ろうか」

笑みを浮かべたまま赤城さんはエプロンに着替えるために自身の  
赤いカーデイガンを脱いだ。

「今日はなにすればいい？」

僕もマゼンタの上着を脱ぎながら、彼女に役割を聞く。

「んじゃ、リュウセンくん今日はウェイターさんね！ユウキくんはこ  
の前と同じで厨房おねがい！」

はいと軽く返事をしてから、僕らは深緑色のエプロンに手を取っ  
た。

自分は料理だけは得意だから、今日も厨房勤務はありがたい物だ  
…。

「へえ…ユウキくん、お料理できるんだ」

エプロンの紐を結びながら、赤城さんは僕に聞く。

「はい。家庭で色々あって、幼い頃から料理してたんで」

「そうなんだ…。実は僕も結構できるんだよ」

また一緒にになにか作ろうね、なんてことを言っつて、赤城さんはト  
レーとメニューを持って、持ち場へと行った。

こんなにあ想像のいい人でさえも特異点、そしてスプリミナルの人間  
だなんて想像できないな。

彼にとっても罪があるとは考えられないが……。  
いけない。

ボーツとしてないで、僕も厨房の準備をしないと……。

それから、開店時間から1時間のこと……。

「いらっしやいませー！」

入ってくるお客様に、あおいちゃんと赤城くんが活気よく挨拶をする。

本日のフェイバリットは焼き菓子10円引きキャンペーン中。

二人が接客をしている最中、僕は裏で作り終えたワッフルやら焼きドーナツやらを、見映えよく盛り付けてカウンターに置いていた。

客の入りを見てみると、今日は人が結構多いようだ。

幸い、まだお昼時じゃないからそこまで大変な料理はないけれど、この多さはなかなか骨が折れそう……。

まあ、がんばるしかないんだけどね。

「ブルーアイと、チョコレートワッフル……かしこまりました！」

ウェイター業務中の赤城さんが、先程も見せていた笑顔で注文を取っている。

彼の曇りなき笑顔に、お客のおじいさんも紳士的な笑みを浮かべていた。

「すみませーん！」

「はい……しばらくお待ちくださいー！」

突然の呼び出しが来ても、赤城さんは即座に注文を厨房に通し、嫌気一つなく小走りでテーブルに向かう。

カランコロン……

その最中、男女二人の子どもの連れだ犬型の女性リージエンが入店した。

「いらっしやいませー！あつ、来てくれたんだね〜！」

彼らに気づいた赤城さんは、しゃがんで子供たちに挨拶をする。

女の子は、元気に手を上げて挨拶をし、男の子は、母親の足に身体を隠しつつ、少しシャイ気味にこくりと頷いた。

カフェで働いていると、こういう可愛らしい光景で癒されるからの良い。

「後でおしぼり持ってきてますね！空いてるお席にどうぞ！」

親子に案内をして、彼は先ほど呼んでいた客の方に駆けつけていった。

常連やお客のふれあいを大事に。

かといって先客をあまり長くは待たせず、そして注文も間違えのなく取る…。

「ね？アカギくん接客スキルすごくない？」

僕が心の中で同じ事を思うよりも先に、あおいちゃんが割って入ってきた。

「すごく早いね…。なんであんなにテキパキできるの？」

鳴り響いたタイマーを止めてワツフルの盛り付けをしながら、彼女と会話をする。

「バイト歴長いんだって。一応、彼も元々はサトナカさんと同じく画家さんなんだけど、ユウカちゃんを大学まで行かせるために、中学の頃から、いろんな所に頭を下げて、なんとか働かせてもらってたって、前に言ってたよ」

「そ…そんなに昔から…。僕なんかとはぜんぜん違うなあ…。」

自分がバイトを始めたのは高校の夏休み位からだだったから、なにかレベルの違う物を見せつけられているような気がする。

それに自分は、今に至るまでずっと失敗ばかりで、何度怒られたことか…。

「でも、それは私も言ったことだよお…。ほぼ生まれた時からここに住んでるけど、リュウセンくんの仕事の腕はすごいんだよね。ほんつと天の才能！」

あおいちゃんの興奮ぶりに苦笑いを浮かべつつ、作っていたワツフルの上にミントを飾り付けて完成させた。

「仕事の適応力が高いって事なのかもね。なんか憧れちゃうなあ…。あつ、これ8番テーブルさんにダブルベリーワツフルね」

「はいー！」

カウンターに出来上がった商品に乗せると、あおいちゃんも笑顔でその商品を手を取った。

「……てか、私よりも美味しくフードメニュー作れるユウキくんもスゴいけどね……」

「なんか言った？」

「今日の店番二人は役に立つなって言っただけ♪」

彼女は鼻歌混じりでコーヒーと一緒に丸トレイの上に乗せた。

「役に立つ……か」

何気なくいったものであって、その言葉は僕の中ではなによりの賞与だ。

誉められることなんて、社会人になってから殆ど無かったし、あの事件から誰に見向きもされなかったから、なんか嬉しかった。

「注文お願いしまーす！ブルーアイ5とチョコワッフル2でー！」

「はーい！」

互いに楽観している僕らは、お客の注文を受けて、また意気揚々と仕事に向かった。



店が落ち着いたのは、それから数時間後の13時辺りのこと。

「「ありがとうございます！」」

最後に出ていった年配のお客さんに全員でお礼を言って、午前の業務は終わった。

「ふう……とりあえず一段落だね……」

トレイを抱きつつ、赤城さんは近くの椅子に腰を掛けて息をついた。

今日はちよつと多めだったから、さすがに僕も疲れたな……。

「一旦お疲れさま。二人とも、コーヒー淹れてくるね」

「ありがとう」

太刀川店長のご厚意に甘え、僕も近くの椅子に腰を掛けて休憩に入った。



ふと、窓を眺めてみると人の姿は無く、さんさんと照る日光を浴びている花菜村の景色だけが姿を見せていた。

ここら一帯の昼下がりには、皆リラックスしたり、仕事に励んだりするから、少し人が少なめになるのだろうか……。

この生活もちよつとは慣れてきたと思う。

探偵業としてはまだまだ新人どころか、まだ1にも慣れていないし、覚醒って言うのもまだ来てない。

けれど、こうやって本当にしつかりとしたお仕事ができて、ちゃんとした対価を貰えて、上司からは『お疲れさま』とか『役に立つな』とか言ってくれるだけで凄く満足感が高い。

今まで、ブラック企業思考だったのが漂白されて行くようだ。

これに、いまだに目覚めない妹が居てくれれば、100点満点なんだがな……。

「ユウキくん、なかなか仕事の腕が立ってるね」

ふと、目の前の席に座っている赤城さんが声をかけてきた。

「あ、ありがとうございます。アカギさんも、ウェイター上手いですね」

僕がそう言うのと、彼は気恥ずかしげに後頭部に手を回して視線をそらせた。

「そう？まあ…僕も結構バイト歴長いからなあ…。ユウキくんも料理上手かったし…もしかして君も？」

「まあ、そうですね。それに、妹もいましたし…」

ふと、彼は妹と言う単語に反応し、顔をピクツと揺らし、僕に顔を寄せる。

「妹さんがいるんだく僕と同じだね」

なにかシンパシーを感じたたからか、彼は笑顔を浮かべている。

「アカギさん、妹さんいるんですね」

「まあね。色々あって二人暮らしなんだけどね…」

「そうなんですか…それも同じですね…」

笑顔と言葉の裏に忍んでいる曇天に、此方もなんとなく彼とシンパシーを感じた…。

「もしかして、君も親無し？」

赤城さんの問いに首を縦に振る。

「はい。一応…昔はいたんですが…過労で死んでしまつて…」

あまり思い出したくはないけれど、母が死んだと聞いた瞬間と、雨降る夜の暗い病室で亡骸と対面した時のショックは、油性塗料で壁に描かれた拙い落書きのようにこびりついている。

はやく落として楽になりたいと思う反面、これだけは残しておきたいと言う思いが今もせめぎあっているから辛いものだ。

「そうなんだ…。僕は、理由は分からないけど、捨てられちゃつたんだよね…まあ、両親はもう事故で亡くなつちやつたらしいけど…」

彼の過去に密かに驚いていた。

こんなに笑顔を振り撒ける人なのに、さらに壮絶そうな過去を持っているなんて…。

「なんか…僕らちよつと似てますね…悲しい理由で…」

「アハハ…でも、同じような人がいて…なんか僕も落ち着くかも」

「僕もです。なんか一人じゃない気がするんで」

他者から見たら不謹慎っぽそうな物で笑い合う僕ら。

同士がいることでこんなに気楽になれるのかと思うと、なんか気が軽くなれた。

前の職場でも、自分だけが罪を犯してるわけじゃないって思つて気軽になつてたけど、絶対にそれとは別だと信じていたい。

そもそも、彼と背後霊達とは、背負っているもののベクトルが違うのだから…。

「あのさ…二人とも結構空気重いよ…」

「「あ、ごめん…」」

あおいちゃんは苦い顔をしながら、僕らの目の前に、持つてきてくれた珈琲を置いてくれた。

そうだよな…不謹慎以前に、両親がいないことで盛り上がるなんて、結構重いよな…。

「でも、なんか二人とも本当に似てるよね！料理が得意なところとかそつくりだし！」

何気ない彼女の言葉に、僕らは目を丸くしながらお互いを見つめる。

「いやいや…でも、いろんなもの作れる悠樹くんの方が…」

「いえいえ…接客態度はアカギさんの方が上ですし…」

「いやいやいや…僕なんて他に比べたら鯨と鰯位の差だし…」

「いえいえいえ…それを言っちゃったら僕なんて月とすっぽんのスツポンの方ですよ…」

謙遜し合う僕ら。

「ほら、やっぱり」

それをニヤニヤと見ているあおいちゃん。

彼女になにかを見透かされたような気が恥ずかしさを産み、僕らは顔を赤らめた。

そもそも僕は誉められ慣れてないのだ。

「そんなに気が合うなら、二人とも仲良くなれるよ！きつと！」

僕らに向けて、あおいちゃんは満面の笑みを浮かべていた。

仲良くなれる…か…。

あんまり仲が良かった人っていないから、なんか恥ずかしい。

けれど、目の前にいる彼は、そんなことはないようだ。

「じゃあ改めて…。スプリミナルによるこそ。これからもよろしくね、ユウキくん」

彼は僕なんかに手を差し伸べてくれた。

それがなんだか嬉しくて、僕は両手でその手を包むように握った。

「はいっ！アカギさん！」

僕らは名刺替わりの笑みを交換した。

「さ…お昼からもがんばろうか。ここら辺は、午前中に比べて人が少ないかもだから、気楽にやろっか」

グツと延びをしながら赤城さんはいつの間にか飲み終えていた  
コーヒーカーップを洗い場に運ぶ。

久々に心の底から仲良くなりたいたいと思った人に出会ったような気がする。

今まで、あまり人に関わりを持ってこなかったし、前職でも誰もが

目の前のことでいっぱいだったから、仲良くなりたいたいと想える人も、仲良くしてくれと願ってくれる人もいなかった。

幼馴染みの親友はいるけど、それも昔の話だ…。

それでも、この変人揃いの殺伐とした職場の中で、ようやくまともそうな先輩ができたのが嬉しかった。

こうやって、初めから手を握り会えるような人に出会えるのが、自分にとっては何よりもありがたいことだな…。

カランコロン！

なんて思っていると、蛾のリージェレンスの女性客が来た。

「いらっしやいませー！」

お客は軽く会釈をして窓から一番遠い席に座った。

こんな時間に珍しいな。

なんて思いながら、僕はまだ飲み終わっていないコーヒーを一旦カウンター裏に置き、仕事の準備に取りかかる。

「あ、どうせなら悠樹くん、ウェイターもやってみる？ 今後も必要だろうし、今一人しかいないからさ」

確かに今後、赤城さんもあおいちゃんも居なかったら、大変だしな…。

「やってみます」

赤城さんからペンのついた伝票ホルダーと飲み水、おしぼりを受けとり、僕は毅然としてお客さんの下へいく。

ウェイターが初めてってわけではないけれど、やっぱりなんか緊張するな…。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

少し引きつった笑顔を浮かべながら、僕は机に水とおしぼり置き、リージェレンスの女性に注文を聞いた。

「あの…。」

すると、蛾のリージェレンスは、何故か血の気のない顔を浮かべながら口を開く。

「青い瞳の珈琲…お願いします…」

突然の注文に、僕は首をかしげる。

彼女の頼んだ商品名は、この店のメニューにはない…。

「もしかして、僕のように『青い瞳の珈琲の店』と噂を聞き付けて、来たのだろうか？」

「もしかして、ブルーアイコーヒーのこと…」

「ごめん、ユウキくん。やっぱり変わって」

その途端、赤城さんが僕を押し退けて、再度、役職を交代させられた。

はてなが僕の頭に浮かんでいる最中、彼の顔を見ると、そこに笑顔は無かった…。

「失礼しました。青い瞳ですね。種類はいかがなさいませうか？」

何事もなかったかのような毅然とした態度で赤城さんに、彼女は鼓動を押さえるように胸を押さえながら応える。

「ホット…ブラック…」

彼女の注文を聞き入れると、赤城さんは上手に作り笑いを浮かべた。

「ご注文、承りました…すぐに持っていきます」

彼は丁寧に会釈をすると、そそくさとカウンターの方へと戻っていく。

「アカギさん…今のは？」

僕も彼に着いていきながら、小声で先程の『青い瞳の珈琲』について聞く。

「スプリミナルの隠語だよ。ブルーアイじゃなくて『青い瞳の珈琲』を頼む人は、SOSを求めている。さらにホットブラックは”今すぐ助けてくれ”という意味もある」

赤城さんは真剣モードのまま、快く答えてくれた。  
なるほど…。

そう言えば水原くんも、初めてであった時に、フェイバリットとは言わずに『青い瞳のコーヒー』と僕に伝えていた。

ミラーファイアやヴィーガレンツに見つからないように、あえて隠語にしているのだろうか…。

なんにしろ、彼女が僕らに助けを求めている事に、変わりはない。

「できてるよ。青い瞳」

赤城さんが注文を通す前に、あおいちゃんが商品をこちらに出してきた。

よく見ると、ソーサーとカップの間に紙が挟まっている…。

この中に彼女がすべきことへの指示が書かれているのだろう。

「ユウキくん、持って行って」

「あ、はい」

赤城さんに言われ、コーヒーを受け取った。

温度はあえてあまり熱くないように冷ましてある。

即座に対応できるように、飲みやすくしてあるのだろう。

「お待たせしました」

お客様の目の前に珈琲を置くと、彼女は入店の時と同じく小さくお辞儀だけしてくれた。

ごゆっくり、とだけ言葉を掛けて、僕はカウンターへと戻る。

一応、あくまでも緊急事態であることを偽るためにいつも通りの言葉を掛けたが、これで大丈夫なのか心配だ…。

「お渡ししてきました」

僕がそう言うと、赤城さんは外に目を向けながら、お疲れと返答してくれた。

「お客さんがコーヒーを飲んでる間、現在の情報を僕らが観察して把握する。誰かが追ってきているのか、命を狙っているやつがいるのか…等をね…」

「なるほど……」

彼の言うとおりに、僕は窓の外を見てみたが、それっぽそうな人はいない。

午後の閑静な時間、人や物がいたとしてもすぐにわかる。

しかし、目の前に命を狙われている人がいると言う緊張感と、その人を守りきらねばならないと言う使命感が、弱気な身体を軋ませた。

とにかく、できる限り赤城さんの邪魔にならないよう、僕なりに注意を払っておかねば…。

その後、リージェレンスの女性に追手がいないことを確認し、僕らは裏口を使って彼女を護衛、応接室に連れて来た。

特殊組織の応接室といっても、外見同様に凡庸な空間だから、彼女もそこまで畏まりはしていなかった。

「それでは、なにがあったか、お聞かせ願えますか…?」

彼女と机を挟んで目の前の席に座る赤城さんが聞く。

「はい…」

恐怖かトラウマか、彼女はうつむき加減のまま話し始めた。

今回の依頼者は、ツバメガのリージェレンス、サエバ冴羽ハツキさん。

一般的な中小企業でOLの仕事をしていて、どちらの至上主義というわけでもなく、まさに普通に暮らしている一般人とのこと。

事件の発端は一昨日。

会社の同僚との飲み会に誘われた冴羽さんだったが、その帰り道、たまたまミラーファイアが物陰で麻薬の取引をしていたのを見たまつたらしい。

彼女は驚いて駆け出し、なんとか自宅へと帰ってこられたのだが、窓から外を見ると、ずっと彼女のことを観察しているようなリージェンがいたとのこと。

そうではないと信じたいが、ファイアの構成員に命を狙われていると思うと仕事に出るのも恐ろしく、どこにもいけないと嘆いてた。

そんな時、たまたま風の噂で知っていたスプリミナルの存在を思いだし、逃げるようにしてここに来たのだという…。

「それで…そのファイアを倒して欲しい…と言うことですか…?」

赤城さんが聞くが、彼女は頷かない。

「できれば…そうして欲しいです…。でも…」

「それよりも第一に安全な場所に行きたい…ということかい?」

彼女の言葉の続きを紡いだのは、僕ら組織の長だ。

「サトナカさん」

いつも通り、感が鋭い人だな…。

「そうなんです…っ！実は…私の会社には防災防犯対策として、地下にシェルターがあるんです！電話で許可はとったので、なんとかしてそのシェルターにたどり着いて、事が終わるまでそこに入ってやり過ぎたいんです！」

焦りか安心か、彼女は少し早口になりながらだが、依頼の本質を僕らに伝える。

社長の言葉に安心したのか、恐れのようなものに押さえつけられていた彼女はようやく感情をさらけ出せたようだ。

「シェルターか…確かに、普通の民家よりはマシだね…」

郷仲さんの言うシェルターは、ここでは事故や災害等の防止のための強固な部屋のことだ。

かつて、他国よりも天災の多かったこの国は、リーゼン社会に置いても防災技術の研究はまだまだ進められている。

近年ではノーズインによる事故やマフィアの被害も多発するため、企業の中にはもしもの時のための避難場所のために、シェルターを設置している所があるらしい…。

「なるほど…でも、なんでそこまでして会社のシェルターなんですか…？他にも、避難所として使われているところもあれば、武装警察からの助けも借りれるのに…」

確かに、赤城さんの言う通り、護衛だけなら僕らじゃなくても、武装警察にも依頼が出来るようになってる筈だ…。

「それもそうなんです…。やっぱり…武装警察には…あまり信用がなくて…」

彼女が提案を拒否した途端、僕の脳裏には、始堂くんと斐川さん、陪川さんの姿が浮かんでいて、彼女に少しムツとしてしまった。

「なんでですか？武装警察はそんなに悪いところじゃ…」

「そう思われても、仕方ないんだよ、ユウキくん」

言葉を言いきる前に、郷仲さんが僕の肩に手を置いて、感情のまま動く口を止めさせた。

「武装警察は普通警察よりも信頼感がない。と言うのも、武装警察は普通警察よりも後に設立され、基本的に異種族系の事件や普通警察に



はできない危険な事をしなければならぬ。その影響で『武装警察は力を振りかざしているだけ』だとか『所属している人は基本的に横暴』や『分署したのは警察が暴力を降るって粛正したいから』なんて根も葉もない噂が、溢れているからね…」

そう伝う郷仲さんの表情は随分と冷たく、少しやるせい感情が言葉の中にも漂っていた。

彼も僕と同じで、脳裏に親友である陪川さん達の顔が浮かんでいるのだろうか…。

「この世界では、何かを成そうとすると、必ず対抗して反対する者が出てくる。人間もリージェンも、動物も虫も、ましてや植物や細菌さえもね」

真剣な顔で物哀しい言葉が告げられる。

確かに、彼の言葉は間違っていない。

遙か昔に起きた世界大戦では、互いの反感感情で仕方なく起きてしまったたり、国が暴走したことから拡大してしまった事案もある。

現代でもリージェンへの偏見と人間への偏見がせめぎあって、互いの至上主義が生まれてしまった。

何の気ない芸術品でさえも、基本的には自由であるはずなのに、性的差別や嘘の歴史冒涇やらで、こじつけてわめき散らす奴等がいるくらいだからな…。

自分は、そういうやるせない偏見は大嫌いだ。

なにかをこじつけて、自分の思いどおりにしたいだけのワガママを言っているようにしか聞こえないからだ。

それに、子供の頃のあの日を思い出すっていうのも理由の一つだが…。

まあ、思い出しすぎない方が吉か…。

「はあ…やつぱり、サトナカさんの言葉って良いなあ…」

その傍ら、あおいちゃんがうっとりとした目で社長を眺めている。

彼女は本当に郷仲さんが好きなようで…。

水原くんが居たら、上下関係問わずに助走付けてに殴りにかかりそうだな…。

「オツケイ。それじゃ簡単におさらいします」

やるせない是可否について考えていた所で、赤城さんが今回の依頼をささう。

「命を狙われている可能性があるため、冴羽さんは勤める会社のシエルトーまで帰りたい。そのために、僕らがそこまでの護衛をする。そしてその後、安心して暮らせるように捜査、そして安全を確認して欲しい…と言うことで良いですね？」

確認の後、彼女は小さく頷く。

「はい。お願いできますか…？」

「任せてください。マフィアが関わったとなれば、これは僕らのお仕事ですから！ですよ？先生」

笑顔で胸を張って宣言する赤城さんに、郷仲さんも同意している。

「…ああ、問題はないよ。こう言った仕事も、しつかりこなせるようにしないとね」

さつきまで冷たい表情だったのに、今ではいつも通りにニヒルに笑っている郷仲さん。

うちの社長は表情と共に全体の雰囲気をもっと変えられるから、どこが根元の性格なのか捕めないな…。

「というわけで、依頼を受理させていただきます。ここからは僕が会社までお伴させていただきますね」

赤城さんがそう言うと、冴羽さんは立ち上がり、大きく頭を下げた。  
「よろしくお願いしますー」

感情こもった大きな声で、礼を言う彼女。

その態度に、赤城さんだけではなく、ここにいる誰もが思わず口角をゆるめていた。

この礼儀正しい彼女が、先輩の手でこの恐れから解放されて、安心できるようになるのを、僕は祈っている…。

「そうだ、ユウキくんも行くといい。様々な依頼のケースを覚えて、臨機応変に対応していくことが大切だよ」

……って、やっぱり自分も行くことになるか…。

「そうですね。一緒に行こうか」

まあでも、赤城さんとならまだマシか…。

「はい。よろしくお願いします」

僕は赤城さんに素直に返事をし、依頼者の冴羽さんにも頭を下げた。

なんか、今から生死が関わる仕事だったのに、いつもよりも気楽な気がして申し訳ない…。

人選って大事。

「ああ、あとアカギくん。君の妹も連れていくと良い。きっと役に立つ」

「え?」

突然、郷仲さんはそう提案すると、赤城さんの動きが固まる。

妹さんを連れていく?

それでは、もしも抗争やら人知にやらに巻き込まれたら、大変なことになるんじゃないだろうか…。

「りよ…了解です…あまり賛同したくないですけど…」

一首を縦に振る赤城さんだが、あくまでも渋々の了承だ…。

郷仲社長の事だから、なにか考えているのかもしれないと思うが…なんだかより一層心配になるな…。

「と言うわけで…もう一人連れててくるので、もう少しだけ待ってもらえますか?」

「あ、はい」

一応、赤城さんは依頼者にここで待機するように伝え、妹さんを迎えに行くようだ。

僕も赤城さんの妹さんに挨拶をしないといけないから、彼に着いていくことにしようか…。

「ユウキくん」

次に行動しようとした途端、郷仲さんが僕に話しかけてきた。

「…君にはもう一つだけ助言をしておこう」

彼は青色のジャケットから一枚の写真を取り出した。

「ヴィーガレンツには気を付けたまえ…。その中でも…この人間は危険だ」

差し出されたそれに写っていたのは、一人の女性。

片方だけ刈り上げられた髪に、ワイルドな釣り目の顔立ち、右側に泣き皺ほくろ。

服装は白地と赤ラインの大きなローブを着ていることだけしかわからない。

「この人は…？」

「ヴィーガレンツで一二を争う程の強者だ…。名をコウサカと言う…」

名を告げる瞬間の彼の表情は、さっきの冷たさとは種類が違う。

悲しみや恐れのような、怒りのような…そう言う、もつとわかりやすいネガティブな感情だ。

コウサカ…。

写真だけで実感は沸かないが、彼女も犯罪者なのだから、身を引き締めておかないといけないか…。

「君も、もうそろそろ彼らと出会っても不自然ではない。もしも対峙することとなれば…」

「逃げた方が良い…ですか？」

戦術的撤退を指示されると思ったが、郷仲さんは半分否定する。

「いや…それも勿論、実行して欲しいことなのだが…君に言えるのはひとつ」

すると、彼は僕の肩に力強く肩手を置いた…。

「必ず仲間を守りきれ…」

重くのし掛かる言葉と、肩にのし掛かる腕の重さに、心が潰されそうになる…。

「わかり…ました…」

緊張を声に出して昇華させて、僕は妹を呼びに行った赤城さんの後を追った。

先ほどの郷仲さんの腕と言葉、両方の重みの衝撃が未だに肩に残り、心臓がドクドクと波打っている。

この時はまだ、ヴィーガレンツが恐ろしいなど、他人事くらいにしか思っていないかったのかもしれない。

しかし今日、その恐怖が他人事ではなくなると共に、郷仲さんのこの言葉に本当に感謝する事になるとは思っていなかった…。

## 8—2 『Aの炎、殺戮の信教』

スプリミナルオフィスビル2階。

ここには、事務、会計、情報捜査課と言った、主にデスクワークを中心とした部署が詰め込まれている。

「妹さんって、スプリミナルにいたんですね」

もう少しプレッシャーが抜けないまま、僕は赤城さんに聞く。

「まあね。情報捜査課で働いてるんだけど……彼女はちよつと特別でね」

彼は愛想笑いを浮かべつつ、僕らは2Fフロアを歩いていく……。

特別……とはどういうことなのだろうか。

彼女もなにかしらの特異点なのか、それともなにか重大な事件の力を握っているとか……？

探偵課の家族だから特別待遇……って訳ではさすがになさそうだし……。

「……だよ」

なんて色々考えていると、突然、赤城さんは情報捜査課ではない部屋の入り口の前で立ち止まった。

目の前に聳えるその入り口は、パールオレンジ色の塗料で塗られている。

小窓すらもない上に、素材は鉄製でなんだか重苦しい。

そもそも情報捜査課からかけはなれているのも気になるし……。

「……って……倉庫じゃ……？」

思ったままに言うと、赤城さんは首を横に振った。

「倉庫に見えるけど、実は個室なんだよ。ユウカだけの特別な部屋」  
すると、彼は銀のドアハンドルを持ち、力を入れて引く。

ゴゴウと重い音を立てながら、ゆっくりとその扉が開かれると、目の前に広がったのは、ほぼ暗闇の世界だった。

目を凝らしてみると、ぼんやりとだけ青白い光がついているのがわ

かる。

「ユウカ〜？起きてる〜？」

赤城さんは声をかけながら、背後の明かりと奥の光を頼りに、暗い部屋の中を進んでいった。

迷わぬように、僕もそれに着いていく。

部屋の中はビジネスホテル位の大きさに、風呂とトイレがつけられてるだけ。

その部屋を狭くしているのは、両壁に備え付けられた二つの大きなガラスケースと、床に散乱したぐちゃぐちゃに丸められたわら半紙やコピー用紙だ…。

二つのガラスケースの中には無数のアニメグッズが飾られ、ケースの間の隙間には、ゴミ袋と段ボールが器用に一ヶ所に積み重ねられている。

几帳面なのかズボラなのかよく分からないな…。

そして、部屋のどんずまりでは、この部屋の主であろう女性が、パソコンの明かりだけを頼りにデジタルイラストを描いていたのを見つけた。

部屋の明かりはパソコンのブルーライトだけだから、彼女の描いているエッチなイラストがわかってしまうのがなんか申しわけないな…。

「フッフ…：…そうそう…：もうちょっとお尻をこう…：丸く描けば…」

架空の女子中学生の裸体を描いている彼女は、僕らが部屋に侵入していることに全く気付いていない。

「ユウカ？」

「ニヤアアッ！」

赤城さんが彼女の肩に手を置くと、その女性は驚いて声をあげた。

まるで鼓膜をシャーペン先端でつつかれるかのように大きな声で…。

「びつくりしたあ…：そんなに声あげなくても…」

「あ、ごめんお兄ちゃん…：と…：…」

未だキインと頭に響く中、彼女の顔を見た。

灰色のスウェットに、桃色の下縁メガネとボサボサロング髪…。

頭に過るは、はじめてここに来た日の事。

「…あつー君、あのときの」

あの時、叶さんが捕まえていた女の子だと気づくと同時に、彼女もアツ！と口を開いた。

「入社試験の時の新人さんだ！ごめんなさいこんなところ見せちゃつて…」

少女は動揺しつつも、パソコンに写っているイラストをそつと消し、シワの多い服を正した。

こんな部屋だけでも、一応女の子らしいところはあるんだな…。

「えつと…改めまして。赤城<sup>アカギ</sup> 佑香<sup>ユウカ</sup>って言います。色々あつて、スプリミナルで情報捜査課のお手伝いをしながら、フリーの漫画家してます…」

緊張して髪をいじりつつ、自己紹介する彼女。

「ユウキ テツヤです。よろしく…」

僕も挨拶を返すと、佑香ちゃんは緊張のまま「よろしくお願いします」とお辞儀をした。

ちよつと変な子ではあるけども、赤城さん同様に、礼儀がよくて優しそうな子だな…。

それに、結構綺麗で可愛い顔してるし…何て言ったら、怒られるだろうか。

「それで…今日はなに？なんか用？」

「先生から指令。依頼者の護衛に着いていつて欲しいんだって」

赤城さんがそう言うと、彼女はめんどくささを露骨に表情に現す。

「ええ…今日のノルマまだなんだけどお…。撮り貯めたアニメや、まだ読んでない漫画もあるし…」

この職場は本当にめんどくさがるの人が多いな…。

すると、赤城さんはポケットからスマートフォンを取り出すと、そこからあるページを開いて、佑香ちゃんに見せた。

「そういうと思って…これ、先生の奥さんが」



彼女は目の前に出されたそれを見ると、パツと目を見開いた。

「…あつ…」こととのクリアファイルのキャンペーン！しまった！今日からだっただ！」

スマホを奪い、それを大事そうに眺めている佑香ちゃんには、赤城さんもやれやれとため息を突く程だ。

町の一大事よりも、そこらのコンビニでやってる人気ミステリーアニメのキャンペーンアイテムに惹かれるとは…。

こちらでさえもため息が伝染しそうだな。

「着いてきたら買ってあげるよ…？」

赤城さんは腕を組みつつ手のひらでお金を現すと、佑香ちゃんは一瞬にして目を輝かせた。

「ホント!? 行きますっ！いや、行かせてくださいっ!!」

赤城さんの甘い言葉に興奮している彼女に、彼は「交渉成立」と呟いて、自らの妹の手を引っ張って連れていく。

ミラーマフィアが関係してるかもしれない結構危険な仕事なのに、随分と安く動くんだな…。

まあ、どこでも妹はそんなものか。



それから数分後、依頼者を含めた僕ら四人は、冴羽さんの護衛任務を遂行していた。

彼女の会社は花菜村から二つ程離れた場所にあるらしいのだが、赤城さん曰く「冴羽さんを殺すために公共交通機関を爆破させたり、突然銃を乱射してきたりするケースも考えられなくはない」という恐れから、他人を巻き添えにするのを防ぐため、今回は徒歩での護衛ということになった。

現在の天候は曇り。

少々、雲が厚くなってきているようで、太陽は朧気に光るも少しずつ明るみを失っているので、通りすぎる人々の中には折り畳み傘を手を持ち始める人もいた。

今日の天気予報は一応、晴れだったはずだったが…久々に外れたようだな…。

「ここらも、にぎやかになってきましたよね」

ふと冴羽さんが、隣を歩く赤城さんに声をかける。

「そうですね。物騒なことは多いですが、ここらはまだ平和な方ですからね…」

笑顔を返す赤城さんだが、冴羽さんの顔は現在の天候の様。

「それでもミラーマフィアが影を潜めてると思うと…怖いですね…」

「僕もそれは思います。誰かが傷つくのも自分が傷つくのも嫌です。だからこそ、自分の体だけではなく、心も大事にして生きないと…」

「…そう…です…ね…」

少々ネガティブな冴羽さんと、笑みを忘れず鼓舞しようとする赤城さん。

こう言う、何気ないコミュニケーションも、依頼人のケアとして必要なかもしれない。

自分も今後、一人で探偵をしないといけない可能性もあるから、覚えておかないと…。

「ムッフフウ…やっぱりタケカナはよきだねえ…」

なんて思ってる傍ら、僕の隣を歩く佑香ちゃんは、お菓子との入ったレジ袋片手、特典のクリアファイルにご満悦だ。

お荷物と言うわけではないけれど、郷仲さんはなんで、彼女を連れていけと言ったのだろうか…。

「それにしても…ミラー…」

「サエバさん」

ふと、赤城さんが彼女の話を止める。

彼は後ろを見るように促し、それに従って僕らは顔を向けると、物陰になにか白いコートのようなものを着た怪しげな人がいたのが見えた…。

「ミ…ミラー仮面…っていうヒーローが…昔いたらしいですよね、妹さん!？」

その人達がミラーマフィアだと察した冴羽さんは、少々苦しいが、なんとか話題を変えた。

「うえっ!?なんで私!?ま、まあ、居たけど…。確か…今はリメイクされて、ミラー騎士…みたいな感じになってるんじゃないかな…」  
「そうなんですねぇ〜!い、今は特撮ドラマもいろんな進化を遂げるんですね〜!」

その瞬間、佑香ちゃんの中でなにかのスイッチが入った。

「そうなのです!昔は人間しかいなかったから、怪人のスーツは0から100までしつかりと作らないといけなかったんですけど、リージェンがいてくれるから、特性や外見をお借りして、予算を抑えることができているから、昔よりも沢山のスーツも作れてて!それが超カッコいいし綺麗なんですよ!!それにそれにヒーローの外見だって…」

アツと自分の饒舌さに恥ずかしさを感じた頃、例の怪しい人物はすっかり姿を消していた…。

「あつ…すみません…喋りすぎちゃった」

「いえ、こちらこそすみません…口裏合わせてもらって…」

耳を赤くして平謝りをする佑香ちゃんに、冴羽さんも頭を下げた。

「こういう時、とにかく自然にしておかないと、背後から撃たれる可能性もありますからね。お気を付けて…」

赤城さんの言うとおり、怪しまれないように話題を変えるのも一つのカモフラージュの方法なのだろう。

これも今後のために覚えておかなければ…。

また町を歩く

歩きつつ、ふと考えてみる。

思えば、赤城さんからすぐく学べている気がしている。

今後に必要なようになってくる話術だとか、周りに気を配る認識力だとか…。

そう言う”探偵としてのいろは”に気付かされているのだ。

この会社は大体、”感覚か身体で覚える”って感じだけでも、なんか赤城さんの方が、学んだことが体にスツと入ってくるような気がし

ていた。

もしかしたら、彼は自然と”教える”と言うスキルに猛っていたりするのかもしれない。

何度言ったかはわからないが、彼とは馬が合うからか、結構二人で仕事するのが結構気が楽だし…。

イヤ、ほんつとに楽、マジで。

「ねえ、ユウキさん…」

ふと、佑香ちゃんがクイツと僕の服の裾を引っ張った。

「なに…?」

振り替えると、彼女は不安げに眉をひそめている。

「なんか…どんどん町から遠ざかっていく気しない…?」

「え?」

首をかしげながら周りを見てみると、確かにさっきまで多くあるいていた人々が極端に少なくなっている気がするし…なにかやけにガランとしている…。

シャツター商店街、蹴飛ばされた空き缶、また厚くなってる曇天。

空気に湿っぽさも出てきて、今にも雨が降り出しそう。

街に潜んでいるコンビニエンスストアや小さな飲み屋の明かりがぼんやりと光り、陰鬱とした空気を漂わせていた…。

「えと…きつと気のせいだよ…。ここらだけがこういう雰囲気なだけ…」

自分に言い聞かせるように、返答する。

声がまごついたのは、この雰囲気がちよつと不安を覚えているからなのかもしれない。

ここらなら…人を殺してもなかなか見つからないだろうし…。

「そういえばサエバさん。事件の時間がどういう状況だとか…犯人がどんな感じだったかとか…改めて教えていただけませんか?歩きながらで良いので、参考に教えてもらえますか…?無理にとは言わないので…」

暗い雰囲気の中、赤城さんがそつと依頼人に聞く。

「…あまり、思い出したくはないのですが…。わかりました…」

恐怖で少し億劫になりつつも、冴羽さんは当時のことを話し始めた。

「粗方は事務所の方でお話しした事と同じです。飲み会の後で家に帰る途中、リージエンの男が数名、互いにアタツシユケースを交換していました…」

「アタツシユケースですか…」

「あ…先ほど話したときには麻薬と言いましたが…実は、本当に麻薬だったのかどうかは、うろ覚えの決めつけでして…」

「そうですね…。まあ、そう言う思い込みというのも確かにあります。しかし、それが麻薬でなくても拳銃や違法指定物品の可能性もありますからね。ちなみに、そこでどうやってそれを見つけたとかはお教え願えませんか…？」

「はい、場所は路地裏でしたかね…。大体、住宅街と繁華街の間辺りだった気がします…。帰り道で、路地裏の入り口の前を通るので、たまたまチラツと見かけてしまった…という感じですよ…」

素人がここまで聞く限りは、別に不自然な点があるとは思えない。マフィアは路地裏や下水道等、一般人に見つかりにくい場所で取引をするって言うのはアニメとかコミックでも常識だし、それを無関係な人が見てしまうというのもよくある話だ。

そもそも、自分も誤って路地裏で取引を見てしまって、ここにいるのだし…。

「リージエンのタイプとかは覚えてます…？強制ではないので、答えられなくても大丈夫ですよ」

「それなら少しは…。確か…：スーツを着ていたのは…龍でしたかね？後は…あまり覚えてないですが、取引していたのは鳩型のリージエンで、学生っぽい方だったと思います…」

「なるほど…。お金稼ぎを探していた学生が、道を踏み外して、路地裏で危険物の取引をするっていうのはたまにありますからね…。情報ありがとうございます。不快に思われましたらすみません」

「いえ…大丈夫ですよ…」

これで冴羽さんの状況説明は終わった。

赤城さんはそれ以上、聞くことはなく、彼は後ろを歩く僕に顔を向け「こういうのも必要だから覚えとこうね」とだけ言って、また冴羽さんの方に顔を戻したただけだった。

このたった数分の時間で、彼は大なり小なり様々な情報を彼女から引き出した…。

あらゆる情報にはなにかしらの手がかりがあるということとは、前の事件で実感済みだ。

しかし彼は、恐らく僕のために、聞き込みとしての手本を実践してくれていたのかもしれない。

踏み込みすぎず、尚且つ情報を手に入れる。

そして、あくまでも”任意”ということを忘れずにと…。

深読みしすぎな気もするが、それでも大切なことにはかわりない…。

「お兄さん…やっぱりすごいよね。すごく配慮ができる人と言うか…」

小声で佑香ちゃんに彼への尊敬の弁を述べると、彼女は僕に向けて目を輝かせた。

「でしょ？お料理も上手いし、優しいし、それにい…」

すると、彼女は前を歩く赤城さんに、勢いをつけて抱きつく。

「うおっ！」

「なにより、超強いんだからね！」

抱きつかれた赤城さんは耳を赤くしながら、彼女の頭を撫でる。

「ちよつとく恥ずかしいからやめなよ〜」

なんて事を言うけども、彼は引き剥がそうとはしない。

そのちよつと心酔しているような仲良しな光景に、しばらく僕と冴羽さんを口が閉じられなかった…。

「な…仲良しなんですね…」

「ですね…」

なんか仲良くしすぎな感じはするが…これが彼ら家族の愛の形なんだろう。

うらやましい…。

なんて、彼ら兄妹にちよつと嫉妬しちやつた自分が情けない。  
自分も早く、妹と普通に会話が出来るようになりたい…。

なんて願いに囚われ続けている。

それからまたしばらく歩き、彼女がようやく足を止めたのきは、町からもう結構離れた場所だった…。

ここらを通る人は殆どおらず、老朽化の進んだビルが、点々と野暮つたい光を灯していた…。

「こんなところに会社なんてあるんですか…?」

「ありますよ。ここです」

きよろきよろと周りを見ていた僕に向け、彼女は一つの煤けたビルに向けてゆびを指した。

「え…古っ!」

驚いて、思わず声が出てしまった…。

ここら一体、古い建物が多いが、それにしても、ここはアスベストでも使っていた時代に作られたのかと疑うほどの古さで、外壁塗装もボロボロに剥がれている。

もう取り壊しが決まっている廃屋なんじゃないかと疑ったが、窓を見てみると一応、ちゃんと蛍光灯はついているみたいだし、本当の会社のような…。

「うちは長く続いている会社ですので…ですが、内装はそこまで悪くはないですよ」

彼女は冷静にそう言うと、全体的に埃っぽいビルのなかに足を踏み入れる。

それに続き、僕らもビルの中へ入った。

これで、彼女をシエルターまで送れば終わりか…。

後は彼女を襲おうとしている輩の捜査を頑張らないといけないわけだな…。

「…サエバさん」

すると、ふと赤城さんが彼女に声をかけた。

振り返ってみると、彼はこのビルの中に爪先すらも入れていないことがわかった。

「なんですか？」

振り返らずに応じる彼女。

口を開こうとする赤城さんの目は、全く笑っていないかった…。

「……そろそろ、本当の目的教えてもらえませんかね…？」

「え…？」

彼のたった一言に、僕の頭のなかに大量のはてなが暴れ出る…。

「なんのことでしょうか？」

「だって…嘘ですよ？取引を見たっていうの」

笑みすらも浮かべない赤城さんに、郷仲さんに似た謎の恐怖を感じた。

「どういうことだ…？」

だって、彼女は被害者で、あんなにも明確に当時の状況を説明してくれていた。

なのに…それすらも嘘だったというのか…？

「本当ですよ。だって、さっきも言ったじゃないですか。路地裏で見つけたって…」

振り返って反論する冴羽さんだが、赤城さんは納得していない。

「ええ、取引は路地裏等の影になる場所で行われる場合が多いです。ですが…一般人に見られるような”路地裏の入り口”でするはずがないんですよ」

「あ…」

思い返してみれば確かにそうだ。

僕が初めてマフィアと出くわした時、彼らが取引していたのは路地裏の入り口近くではなく、路地裏の”奥”だった。

マフィアが入り口で取引をするだなんて、警察を出し抜くための罠や挑発、それかどうぞ捕まえてくださいとでも言ってるようにしか思えないじゃないか…。

「それに、ミラーマフィアだったら家で様子を伺うなんてことはしません。ミラーマフィアの名前に鏡が入っている理由は『鏡を媒体として移動する』からです。彼らはノーインの血液を自らの体内に注入して移動できるようにする、そんなブツ飛んだ組織なんですよ…」



なんと…ミラーマフィアの語源にはそんな理由があったなんて…。  
そこまで知らされてなかったっていう物がまだまだ多くて困る…。  
真実を突きつけられた冴羽さんの顔を見ると、彼女は如何にも  
バツが悪そうな顔をしている…。

この光景に似たものを見た覚えがある。

法廷の中で、高飛車銭ゲバ先輩が、大嘘つきの裁判長に真実を突き  
つけていた時と全く同じだ…。

「で…でもちやんと言いましたよね…？龍のリーゼンが取引して  
たつて…」

「そこが一番の嘘ですよ、サエバさん」

それでもアリバイをなんとか作り出そうとする彼女に、赤城さんは  
嘘への突きつけを重ねる。

「ミラーマフィアの社会には、大きな格差がある。下級<sup>テッラ</sup>、中級<sup>ヴェント</sup>、上級<sup>ステッラ</sup>、  
王級<sup>コンツェット</sup>。その中でも唯一無二のコンツェットマフィア『零ヴァ呈』  
は、絶対にこんな見つけ方やりやすい場所に出ることはない。その上  
……」

また知らない情報が沢山出ているなか、赤城さんは人差し指をぴん  
と立てる。

「龍のリーゼンの構成員は、コンツェット以外には絶対にいない」

その瞬間、辺りの空気が凶星や緊張で固まった…。

決定的な彼の一言を聞いて、僕はとあることを思い出した。

スプリミナルに入るよりも前、たまたま出会った年配のリーゼン  
に聞いた話なのだが、龍属のリーゼンはこの地球に移住する前は  
リーゼンのなかでも王位につくほどの実力や力の持ち主だったら  
しい。

その影響からか、僕は今までに龍のリーゼンが事件を起こした等  
の報道を一つもみることがないし、なにより龍のリーゼンにすらも  
なかなか出会ったことがない…。

その理由の一つとして、多くの龍のリーゼンが、その最上級のマ  
フィアに加入していたのだと言うのなら納得だ。

あっさりとはけの皮が剥がされてしまった冴羽さんだが、なにか動

揺しているような素振りはなく、ただ顔を下げているだけだった…。「なんで嘘をついたんですか…？なにか事情があるんですか…？」

赤城さんが鋭い眼光を向けながら言及すると、彼女は肩の荷を卸すように大きいため息をついた。

「そうですね…。私…どうかしてました…。全てお話しします。自分がなぜこのような事をしたのかについて…」

顔を上げた彼女は笑みを浮かべており、それは喜びと言うにはあまりにも掛け離れている笑いだっただった。

「まあ、聞ければですけどね…」

彼女はそう言うのと、大きく羽を広げて拳銃を取り出した。

「…っ！」

僕らが臨戦態勢に入ろうとする中、不敵な笑みを浮かべている冴羽の銃の矛先は、赤城さんではなく、佑香ちゃんに向いていた事に、僕だけが気づいていた。

「あぶないっ！」

危険を察知した僕は、彼女が引き金を引く数秒前、佑香ちゃんに抱きつくように押し倒した。

ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！

大量の弾丸が、僕らに向かって飛んでくる。

幸運にも、弾丸はハイドニウム製ではなかったようで、特異の影響で僕の身体が透き通り、殆どは被弾を避けられた。

「うぐ…っ！」

しかし、たったコンマ数秒、0.1ミリの誤算が、悲劇を生んだ。たった一発の弾丸が佑香ちゃんの背中を掠り、横一文字に大きな傷をつけてしまったのだ…。

「ユウカツ!!」

弾丸が止んだ頃、赤城さんが血相を変えて僕らに駆け寄った。

銃撃のショックで気絶している彼女の身体から退くと、佑香ちゃんの背中から、じんわりと大量の血液が流れ出してきていた。

あのたった数ミリの誤差で、こんなにも大きな傷が付くだなんて…。

もしも僕があと数秒早かったら、こんなことには……。

「ごめんなさい…僕…」

悔しさや罪悪感で拳を握る僕に、赤城さんは僕の肩に力強く手を置いた。

「謝るな、君は間違つてない。でも止血をしないと……そうだ！回復薬！」

思い付いた彼は、ポケットの中から、消しゴム大の小さな注射器のようなものを取り出した。

その中には、鮮やかとは言えない黒ずんだ赤色をした治療薬が入っている…。

「あまりない…昨日のやつで使いすぎたか……。ユウキくん、これをユウカの身体に刺して！その後にはスプリミナルの医務室に…」

カチャ…

指示を伝え終わる前に、赤城さんの後頭部にその拳銃が突きつけられた。

「私は人間至上主義者です。リージェレンスである私を救ってくれたのは人間だった…。リージェンを守るあなたは、私たちにとって必要な存在……」

ハイライトの消えた目で彼を睨むと、物陰からぞろぞろと白いローブを着こんだ人間達が数名出てきた。

そうか、さつき物影に隠れていたのは、彼らだったのか…。

「今日をもって消えてください」

黒く染まった目の彼女同様に、白ローブの人間達が僕らに拳銃を向けた…。

このとき、僕は郷仲さんに見せて貰った写真を思い出した。

白色のローブとライン。

間違いない…彼らは人間至上主義者だ…。

「ふう…」

落ち着け…落ち着け…。

自分が今できることは、警戒を強めて逃げ出すこと…。顔を隠した男に冴羽さんを合わせて、総勢6人。

その他に隠れている可能性も無くは無い。

でも、あくまでもハツタリであると仮定すれば、脱出が出来なくもない…。

銃弾を受けることの無い僕が盾になれば…逃げれるかもしれない。佑香ちゃんの身体に、先程貰った注射器を突き刺して立ち上がり、エンブレムを取り出した。

「肉体換装&amp;mp;特具武装！」  
トランス  
アーリアンフールド

トランスと共に武装し、彼女らに銃口を向けながら、守るように二人の前に立つ。

とりあえず銃で牽制しながら、二人を守りつつ逃げる。

自分出来るのはそれくらいだ…。

「赤城さん…なんとかかして逃げましょう…。6vs2は分が悪い…」

僕が改めて退避の提案した途端、赤城さんは立ち上がり僕の肩に手を置いた。

「ユウキくん…退いてくれないか…」

「でも！」

「退けと言っている!!」

聞いたことのない大声に驚き、僕は目を丸くして後ずさった。

今の赤城さんの表情は赤。

強く強く烈火のごとく燃えるような怒りが、周囲の空気をあからさまに変えていた…。

「お前…僕の家族に何をした…?」

鋭くにらむ赤城さんだが、冴羽は一切動じない。

「答える義理はない」

「答えろっ！お前が義理等と口に出す権利はない！」

赤城さんの怒号に、彼女はふんと鼻から息を吐く。

「やれやれ…あなたの家族が傷ついたのは、そのピンクのせいですよね…?助けるのが遅れたのかどうかわかんないですけど…途端に掛ける計画が浅はかすぎるんですよ」

傷つけたことへの転嫁的意見な気もするが、確かに彼女の言うとおりではある…。

助けるのが遅かったせいで、彼女は傷ついた。

彼女の背中から血が出ているのは全て僕のせいだ。

全て、自分が浅はかだったから…。

「違う…っ！」

自責を積み重ねようとしていたところ、彼の言葉一つでそれは一気に崩された。

「ユウキくんは妹を守ろうとしてくれた…。だが、お前は…僕の家族を殺そうとした…。彼女の背中からは、汚ならしい赤黒い色が流れている…。それは朱殷よりも醜く…画家がもう二度と塗りたくないと言いたくなる程酷い色…。」

怒りの頂点に達した彼は、キツとヴィーガレンツ達を睨み付ける。

「命を大切にしないお前ごときが…簡単に彩って良い色なんかじゃないんだよっ!!」

激怒の赤城さんは、血管が浮き出ている右腕に、デッサン用に芯が長く削られた鉛筆を一本握る…。

「肉トランス体換装っ！」

叫んだ瞬間、彼の体が赤ラインの入ったトランススーツに変わる。

半閉じのパーカーとジャージ、Tシャツ…。

背中の丸いデザインの中、ぽうつと光る赤色が、燃えているようにゆらゆらと揺れていた…。

「ユウキくん…ユウカをたのむ…」

妹を僕に任せて背を向ける彼に、もう慈悲の心はない。

「こいつを殺す…っ！」

顔を見なくてもわかる…。

赤城さんは鬼の形相を彼女らに向けている。

家族を傷つけられたのだから…その怒りは彼らを殺すこと以外ではきつと発散できないだろう…。

「行きましょう…。私たち人間のためにつ！」

それに臆さぬヴィーガレンツ達は、弾丸をリロードし直し、それを赤城さんに向けて撃つ。

先程よりも多く、激しい銃撃音が鳴り響く…。

横殴りの弾丸の雨の中を歩く赤城さん。

彼に向けて放たれたその弾丸は、まるで僕の特異のように、彼の身体をすり抜けていた…。

「バカな…ハイドニウムの弾丸のはず…」

想定外のこと動揺しつつも、彼女らは弾丸を打ち続けるが、その弾丸は、一つだって彼の身体を傷つけることはできない。

アーツアンフォールド  
「特異武装」

彼の特異がなんなのかを考え出していた所で、彼はエンブレムをナイフ型のアーツに変化させ、それを逆手に持った。

「こんなものか…」

ほつりと呟いた赤城さんの威圧的な佇まいに、敵は恐怖で思わずトリガーから手を離す。

「怯むな！撃ちなさい！」

それでも、銃撃をやめさせようとしないうつと、また引き金に手を掛けようとしたヴィーガレンツ達に、赤城さんは哀れみの目を向ける。

「ふう…」

ため息と共に彼は、右腕をそっと彼らに向けて伸ばす…。

すると、パークアの右腕のラインから突然ゆらゆらとオレンジや黄色の光がちらついたりと思いきや、突然その右掌から火花が散り始める…。

ゴオオオオオオオオオオオウツ!!

その刹那、彼の腕から炎が燃え上がり、敵の一人に向けて炎柱が発射される。

「ぐあああつ！」

攻撃をもろに受けてしまった彼は全身が炎に包まれ、断末魔をあげながら地面に倒れた。

「ハシヤダさん！」

彼の隣にいた者は恐怖で腰がくだけ、その隣にいた者が彼を助けようとロープを脱ごうとする。

「…っ！」

その刹那、いつの間にか彼の裏に移動していた赤城さんが、ナイフで彼の首の丁度真ん中を貫く。

ぼうっと肉が焼け、血液が蒸発し、人体がコンクリートに打ち付けられた。

「うう…うわああああつ！」

腰を抜かしていた敵は、やけくそになって、銃を逆手に持って彼に向っていく。

「#F29CC9F…」

赤城さんが小声で謎の番号を唱えた途端、身体から小さく薄い赤い色の火の粉が散る。

「ヒトエウメ・トツ  
二重梅・突…」

その言葉と共に、数量飛び散っていた火の粉の一つが、突如針のような形状となって彼の胸を貫いた。

心臓が焼け焦げる匂いと共に、倒れ行く敵の身体。

それを見守る赤城さん。

三体の死に行く肉叢の間に立つ彼の身体の所々から、ゆらゆらとその焰が燃えていた…。

赤城隆泉の特異は炎…。

単純に、水原くんの特異の火バージョンと考えた方が早い。

自分の体内から炎を出したり、自信の身体を炎と同化したりする。

そんな全身炎人間が、彼なのだろう。

ハイドニウムの弾丸が効かなかったのは、おそらく”着弾するギリギリで身体を炎化して穴を空け、弾を避けた”からと考えられる…。

即座に回避術と暗殺術を考え、それを実行に移せる。

やはり、彼はすごい人だ。

いやそれとも、まだ自分が未熟すぎるだけか…。

「同胞を守って！アイツ…本気で殺す気ですよ…」

卑屈なことを思っている傍ら、冴羽が残った仲間二人に注意を呼び掛ける。

「安心してください…。殺しはしない…」

燃える身体で冷ややかな目を向ける彼は、倒れている敵にプリズン

シールを突き刺すと、まだギリギリ生きていたのであろう身体がその小さな結晶の中に収納された。

「死にたいほどに痛め付けて捕まえる…それだけだ…」

恫喝、全身の焰がゆらゆらと燃えるその姿は、まさに郷仲さんと瓜二つ…。

美しく、そして冷ややかに怒りを表しているその姿に、僕は手も足も出せない。

と言うよりも、加勢を禁止されているような気がする。

大切な人を傷つけられると怒るのは僕も同じだが、ここまで彼の怒りが燃えているのを見ると、何故か恐怖すらも感じてしまった…。

「う…うう…」

そんな中、ずっと気を失っていた佑香ちゃんが目を覚ました。

「ユウカちゃん！動かないで…」

彼女に安静を呼び掛ける。

身体をよく見てると、あんなに血が出ていた傷はもう塞がっているようだが、疲労感やダメージはまだ残っているようで、あまり身体を動かせていない。

「お兄ちゃんは…?…」

「…戦ってる…。ごめん…僕が不甲斐ないばかりに……」

僕が彼女に謝ることしかできない傍ら、赤城さんとヴィーガレンツの戦いは激化していく…。

「確実に消しましょう！ハイドニウムナイフも準備を！」

彼女が指示をすると、彼らは黒瑪瑙オニキスのように真っ黒なサイバルナイフを取り出した。

「無駄だ…」

しかし、それに臆することの無い赤城さんは、自分の赤く光るナイフ型アーツを地面に突き刺した。

「#f f d b e d…」

また新たなコードを口にすると、彼の全身から薄いピンクの炎が溢れだした。

それに対抗しようと、彼らは拳銃とナイフを守りの体制にて構え



る。

「八重桜！」  
ヤエザクラ

その途端、彼のナイフから、炎が根のように枝分かれしながら地中を伝う。

そして、敵の真下にその炎が到達すると共に、それが巨大な桜のような形に変化して、地面から噴出する。

桜の枝状の炎に身体を貫かれながら、冴羽の裏にいた二人のヴィーガレンツ組員が、声も出せずに燃えた…。

桜の中で炎に包まれる味方を見て、彼女は震える。

「そ…そんな…」

炎の桜が散ると、彼らの持っていたナイフだけが、無傷で地面に落ちた。

その光景を見て、冴羽はついに肩を落とす…。

「これで五人だ…」

落胆する彼女を睨む赤城さんの手には、もう二つのプリズンシールが握られていて、その中には先程燃えた2人の組員が就航されていた。

「くっ…」

絶望的な状況の中、彼女は迫ってくる赤城さんから顔を反らす…。

「落ち着かせようとしてるんだね…気持ち…」

哀れみの目で冴羽を見る赤城さんだが、彼女は未だ諦めようとはしていないかった。

「違う…私の特性能力を發揮しているだけだ…」

ザシユ!

勢いづけて冴羽が広げた翼を、彼は無惨にもナイフで焼ききった。

「ひっ…うああああああつ!!!」

早すぎる祟り目に彼女は泣き叫び、赤城さんは頬に浴びた黄土色の血をパーカーの袖で拭った。

「翼をはためかせて、炎を消化させようとしたんでしょ?それくらい分かるよ…。でも、ごめんね…。仕方ないよね…?」

すると、彼は右手に炎の玉を作り出す。

「ユウカを傷つけたなら…それなりの報いは受けなきや…」

彼女にとつては、もう非の打ち所のない程の絶望的な状況だ…。

しかし、それでも冴羽は齒を食い縛る。

「私は…諦めない…!!」

顔をあげ、赤城さんをまっすぐな目で睨む冴羽。

「我々、人間至上主義ヴァイガレンツが！いつかお前達のような悪魔を！完膚なきままに殺してやるっ!!」

根太く、強く、そしてしつこいまでの信念に、彼はついに哀れみを向けるようになった。

「そう…」

まるで炎が溜め息をついたかのように、彼の右手の火球が爆炎へと変わった。

「#……」

ドスツ！

その驚異は突然現れた…。

「……っ!?!」

赤城さんがコードを口にしようとした矢先、彼の背中を黒色のナイフが貫いたのだ…。

「なん……で……」

背中に穴を空けられた赤城さんは、混乱のまま、地面にバタリと仰向けで倒れてしまった。

「お兄ちゃんっ!」

「アカギさん!」

僕らがその光景に焦る中、突然聞こえてきたのは、コツコツとヒールがコンクリートをならす音…。

「Anti these Regenisism……」

それを彩るは、おぞましい英語の羅列…。

「Rebel yell Humanisism……」

そして倒れた赤城さんの前に現れたのは、一人の女…。

「どうも…スプリミナルの皆さん……」

片方だけ刈り上げられた髪に、ワイルドな顔立ちと釣り目、右側に  
泣き鱈<sup>ほくろ</sup>。

そして、ブランドもののTシャツと革ジャンの上に羽織られている  
のは、白と赤の大きなローブ……。

「私は高坂<sup>コウサカ</sup> 沙羅<sup>サラ</sup>。リージエンを排除する救世部隊……ヴィーガレンツ  
が一人……」

8—3 『Aの炎、殺戮の信教』

「コウサカ…サラ…」

彼女の姿を間近で見た瞬間、頭の前から爪先まで悪寒が巡った。郷仲さんから聞いていた、ヴィーガレンツ組員の一人。

もしも出会ったら逃げろと言われた程の実力者だ…。

「コウサカ様…っ！」

冴羽が彼女の前に駆け寄り、跪いた。

「もうしわけございません…。私が不甲斐ないばかりに…。ですが！貴女様やマカツ様達の言うとおりに、扇動には成功いたしました！どうか！どうかお許しを！」

頭を垂れて蹲い、ひたすらに謝罪するそのリージェレンスに、高坂は笑いも怒りもせずただ口を開いた。

「そう…よくやったわね…」

彼女のその言葉を聞くなり、冴羽の顔がパツと明るくなる。

「はい！私はあなた様のことを…」

ザシユっ！

しかし次の瞬間、高坂に心酔していたはずの彼女の頭は、血液を吹き出しながら地面に落ちた…。

「汚い…」

赤くない血のついた黒いナイフを片手に、彼女は顔についた返り血を手で拭いながら、冴羽の体を蹴飛ばした。

その光景に、悪寒を感じていた僕と佑香ちゃんの全身に、さらに大量の羽虫が這うような恐怖と疎ましさが走る…。

「そもそも、あんたみたいなリージェンもどき…私たちが相手してると思つたの…？自惚れんなゴミクス…」

彼女は死んだ冴羽を罵倒し、地面に転がっている頭を、思い切り踏みつけた。

熟れ尽くした果実が睨れるかのような音と共に、頭の中からは何らかの鍵が転がり落ちた…。

「うぶっ……」

佑香ちゃんは口で手を塞ぎながら消化物を吐き出し、僕は彼女の肩を持った。

一般人がこれを見るには、あまりにも酷すぎる光景。

そんな中、グシヤグシヤになった骸頭を踏みにじる高坂は、思い切り笑顔を浮かべていた…。

「馬鹿馬鹿しいと思わない…？異種族を廃絶しようとする人間のために異種族が身を削るなんて…。おこがましいにも程がある」

彼女は足を止めると、赤城さんに目を向けた。

「コウサカ…ぐっ！」

高坂は彼女を睨む赤城さんの背中を踏みつけ、彼の持っていたブリズンシールを拾い上げた。

「返してもらおうわよ…。橋谷田、亀田、桐崎、木藤、秋迫…」

「この…っ！」

確保した犯罪者達を取り戻すために、赤城さんは全身から炎を出そうとすると、彼女は即座にポケットから鍵を取り出し、赤城さんの身体にその鍵を突き刺した。

「LOCK」

その瞬間、ガチャンと音がすると共に、急に赤城さんの身体が地面に締め付けられるように、全身の力と炎が消えた。

「あ…っああ…」

彼は地面から全く動けず、声すらも出ない。

いや、そうではなく…声すらも”出なくなった”と言うのが正しいのかもしれない…。

「もしか…彼女は異能力者なのか…!？」

「あなたの身体の機能、いくつかを封印させてもらった…でも、心配しないですぐに楽にさせてやるから…」

彼女はニヒルに微笑みながら、そつと赤城さんの身体に膝を乗せる。

「地獄だね…」

ハイドニウムナイフの矛先を彼に向けた瞬間、僕らは焦りで満たさ

れた。

「お兄ちゃん！」

「やめろっ！」

赤城さんを守るためと言い聞かせながら、僕は彼女に向け、がむしやらに弾丸を一発放つ。

バアン！

「LOCK」

その刹那、彼女が一度鍵ひとたびを振ると、飛行している弾丸がピタリと停止した。

「っ！銃弾が止まった…!?!」

高坂は顔スレスレで停止している弾丸を軽くつまみ、僕に見せつけるようにしてそれを捨てた。

「私の異能は…鍵越しにあらゆる能力を一定時間封印する。所謂…無効化って奴？知らされてなかった？」

彼女の異能力を聞き、明らかに血の気が引いた感覚が心臓を駆けた。

自分と同じ能力の人間が、こんな最悪な場所で見つかるだなんて思っても見なかった。

郷仲さんが逃げると示唆したのは”攻撃を全て封印させられる可能性があるから”だったんだ…。

「あんた…よく見たら初めての顔ね…」

ハイライトの少ない彼女の眼球に僕は思わず尻込む…。

「トランススーツの丸の形が違う…。覚醒すらしてないってことは…新人か…」

高坂の言葉に動揺し、思わず僕は肩のライン形状に目を向けた。

スプリミナルのアイテム事情まで知っているのは、きっと彼女のボスに關係があるからだろう…。

「き…君の目的はなんだ…」

自分の身の程が割れて混乱してる中、恐る恐る彼女に聞く。

「簡単。あんたらを消すこと…」

間髪いれずに返された答えに、情けなど一つもない。

「私たちは健全な人間社会を望んでいる。そのためには…リージェン達を庇おうとするあんたらが邪魔なのよ。”極めて”ね…」

ナイフ片手に、赤城さんの体を踏みつけながら、高坂はニヒルに微笑む。

「しつてる…？A国やL国がT国と日本のように50：50にしようとして頑張ってるなか、C国やK国ではリージェンを追放、虐殺してる場所があるの…」

ナイフで僕を指しながら伝う彼女の言葉に、返せるだけの言葉がでなかった。

世界のリージェン生息確率にはバラつきがある…と言うのだけは、義務教育の段階で知ってはいた。

そのリージェン確率0. n%の国を例として高々にあげる彼女に、呆気を取られて言葉がでなかったのだ…。

「私たちがそうでないとならない。得体もしれない人外移民どもに…私たちの世界を乗っ取られてたまるか…」

片手に持ったアサルトナイフと、ハンティングアクションゲームに出てくる太剣のような狂氣的言語…。

耳を疑うような妄言だが、彼女は至って真剣で、それがさらに恐怖を掻き立てている…。

「だからって…殺すなんて間違ってる…」

しかし、身体に潜んでいた微かな正義感のせいで、不意に口から漏れだした言葉に僕は焦った。

彼女がそれを聞いていない筈がなく、顔を見ると眉間にシワを寄せていた…。

「ウザ…とつとと消すか…」

彼女はナイフをしまって銃を取りだし、僕らに向ける。

どうしよう…。

自分が新人であることがバレている事も含めて、結構不利な状況だ…。

体力もそこまでないし、特異も無効化するだけ、持つてる武器だって、赤城さんみたいな覚醒した物じゃない。

もしも僕が郷仲さんや水原くんのように強かったり、特異が応用できるんだったら、彼女に対抗できるかもしれないけれど…僕の特異は、きつとハイドニウムさえ撃たれれば全てが終わる…。

ここは…赤城さんを一度諦めて、彼女を連れて逃げるか…？

「ユウキさん…。」

ふと涙声が聞こえ、振り返る。

背後にいる佑香ちゃんの顔を見てみると、胃液を頬につけながらも、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

家族を助けてくれと言わんばかりに…。

バカか、僕は…。

いくら赤城さんより僕が弱いからって、赤城さんの方が現場に耐えているからって、きつと彼なら抜け出せると思ってしまうからって、彼を放って逃げるような事をするな！

守りきれてって言われただろ！

自分に憑いている背後霊に噛われない人間になれって、決めたじゃないか！

「足をどけてください…。」

立ち上がれ…守りきれ！

「アカギさんを…返せ…っ！」

後ろにいる女の子を、泣かしちやダメだ！

「メント…。」

嫌悪を顔にする彼女に苛立ちを浮かべながら、僕はアーツ片手に走り出した。

彼女はまた鍵を僕に向ける。

「LOCK…。」

心臓から身体の隅まで、カチンと錠が閉まった感触がする。

「…っ!？」

だが、走り出した身体が止まることはない。

「ふっ！」

「LOCK！」



また感覚が走る。

しかし、止まらない僕は拳銃をトンファアのように逆手に持ち、焦る彼女に振るった。

「ツクー！」

高坂は攻撃を片腕で受け流す。

「バカな…なぜ封印しない…！」

彼女は僕に無効化が効かないことに混乱していた。

そうか、郷仲さんが逃げろではなく守れと言った理由<sup>ワケ</sup>は、僕の特異が彼女の特異を通さないからだったのか…。

これなら…目的の達成位まではいけるはず！

「ふ…っ！」

もう一度、僕はまたアーツでなぐりかかるが、彼女は持っていた銃を、僕と同じく逆手持ちにして防ぐ。

「そうか…：スプリミナルは、ついに手に入れたのか…：私と同じ能力を…！」

彼女の驚きと苛立ちを噛み合わせたような眼が、僕の癩に触った。

「お前と…：一緒にするな！」

バキユンツ！

その瞬間、彼女がトンファアのように持っていた拳銃から弾丸が放たれ、僕の肩が射抜かれた。

「くっ…！」

しまった、銃口の位置まで認識していなかった…。

「ハイドニウムは効くのね…：特異点という事に代わりはないか…！」

血が流れ出すまま後退し、彼女の様子を見る…。

銃弾で肉を撃ち抜かれたときの尋常じゃない痛みにはまだ慣れないし、高坂は高坂で余裕の表情のまま、また赤城さんの身体に汚い足を乗せていた…。

どうする…：ハイドニウムが弱点であることも割れたし、このまま戦っても負けは確定している…。

「それでも…！」

このまま下がるわけにはいかない。

やらなきやいけないんだろ…？

僕が…！

「とにかく、足をどかさないと…」

僕は拳銃を持ち直して、銃口を彼女に向けた。

そこで、ふと思い出す。

アーツと言う武器は、特異を制御するためにあるもの。

しかし、この輝かしい武器の能力はそれだけではなく、他にもハイドニウムの特性を弾いたり、”特異を上乗せする”という特徴も持っている。

確か、水原くんや住浦さんも特異をアーツに武装して戦っていた。だったら、弾丸に”無効化”を乗せられることも可能はずだ…。

バアン！バアン！バアン！

素人の腕での精度で、僕は三発の弾丸を放つ。

「っ！」

彼女は身体を捻り、二発の弾丸を避ける。

しかし、一発だけは避けきれず、その冷たい晶ルストロニウム弾が彼女の肩を掠めた。

やっぱり、アーツの特徴も知ってるから、避けるタイミングも早い…。

でも、肩に一発当てられただけでもまだ良い！

「くっ！」

僕と同じように肩から血を流す高坂。

しかし、彼女は鍵で患部に触れると、血が固まり、傷口が即座に塞がった。

あの異能力はそんなことも出来るのか…。

「ツチ…ウザいっ！」

こちらにギリリと目を向け、苛立った顔を浮かべながら、彼女は鍵を投げると、それがトラバーチン模様の天井に突き刺さる。

「OPEN！」

その言葉と共に、天井がガチャンと解錠音を立てながら、少しずつバラバラと崩れ始めた。

「もしや、彼女の封印するということとは、その性質事態を封印する」ということでもあるのか…!?

「まずい…っ！」

少しずつ落ちてくる天井を避けつつ、僕は佑香ちゃんの身体を抱き抱え、彼女の異能が及んでいない玄関に移動させた。

「ジツとして…」

彼女にそれだけ告げて、僕はまた戦場に戻る。

だが、がらがらと落ちてくる天井のせいで、動きが制限される…。

「っ！」

モタモタしていたら、上階の埃が落ちて煙のように舞い、彼女の姿すらも見えづらくなってしまった。

落ち着け…とにかく彼女に集中し…。

ガンッ！

頭に硬い物が衝突した感覚と、明確な痛みが身体に伝わる。

「ぐっ！」

しまった…！埃のせいで瓦礫の認識ができなかった！

特異のお陰か、なんとか軽い脳震盪で済んではいるが、それでもぐわぐわと目が回って気持ちが悪い…。

埃の中の不意打ちは僕としては致命的だ。

上空に気を付けないと…。

「ふんっ！」

「くっ！」

朦朧とする中、煙に姿を隠していた高坂の攻撃を、なんとか紙一重で避ける。

今度は瓦礫の落下や飛散に気をとられすぎだ…。

「さっきの声…：衝撃は通じるのかしら…?」

ナイフを片手に考える高坂の言葉に、ドキンと心臓が大きく波打った。

「まずい…気づかれたか…?」

「まあいい…。なに考えてるのか分かんないし…：さっきからウザすぎ…。とつとと片付ける！」

一応、気づかれているわけではないようだが、逆に考えることをやめた彼女は、次の手に移る。

「OPEN！」

高坂は鍵を地面に刺して回す。

「うおっ！」

すると、突然にして地面が砂のような形状に変わり、一瞬で身体が引きずり込まれ、足を囚われた。

コンクリートの硬い特性が無効化されたようだ。

「くっ！」

四つん這いになり、なんとか地面を掴んで這い上がろうとするが、コンクリートだった地面が、蟻地獄のように少しずつ少しずつ円錐に陥没していくため、なかなか這い上がることができない…。

このままじゃダメだ…。

さっきから、自分が見てきた先駆者達のように動けない。

水原くんのように機転は聞かないし、住浦さんのように頭の回転も早くない、赤城さんや郷仲さんのように強大な特異でもないし、陪川さん達のような体力もない…。

だからこそ、考えるんだろ！

この際、なんでもいい！

僕なりに、僕の能力的に、僕の身体的に！

どうすれば、打開できるか考えろ！

「ふう…ふう…」

つけられた傷を塞ぎながら、一つ息を吐く。

落ち着け…考えるならせめて冷静になれ…。

まず整理しろ。

自分の特異は無効化。

しかし、無効化の能力持ちであつても、ハイドニウムは防げない。高坂のような異能力者はそういう外部からのジャマー効果が無いのが妬ましい…。

…：…：そういえば、相手は異能力に害するプライマイ効果が殆んど無いことを良いことに、攻撃に様々な工夫を凝らしている気がする。

”封印して無効化する”という概念をこれでもかと強引に使用して、こちらを翻弄するのが彼女のやり方かもしれない。

余談だが、この前、同じ状況に陥った水原くんも「特異で強引に抜け出してやった」なんて言っていた…。

「そうか……」

特殊異形能力は”普通では出来ないことを発揮する”ための能力。それぞれに与えられた能力を如何に使うか、如何に伸ばすか、如何に向き合っていかっては、おそらく僕らの手にかかっているのかもしれない。

陪川さんの場合は、あくまでも一つの武装手段として使っていた。彼女の場合は”なんらかの概念を封印する”という伸ばし方をしている。

水原くんや赤城さんの場合は、特異自体を自分の身体の一部として向き合っている。

ということは、同じ無効化の特異を持つ自分も出来るはずだ。

”無効化”という概念をこれでもかと乱用することを…っ！

「くああああっ！」

なら…この足場をも無効化できる！

この纏わりついてくる砂の一粒一粒を、間接的な攻撃と認識してみるんだ…っ！

自分自身の特異をイメージして、まずは這い上がるために右足に力をいれて前に出せ。

少しでもこの足場が”砂であるということが無効化”し、踏ん張って立てた感触を認識したら、次は左。

右、左、右、左…。

慣れてきたなら…駆け上がれ！

「うああああああっ！」

咆哮。

無我夢中のまま、足を動かし続ける。

「ああああああああっ!!」

ズンと床に足を踏ん張れた感覚と共に、目をかつ開いた。

すると、そこには蟻地獄はない…。

「這い上がってきた…う・バカな…」

ここまではほぼ無双の状態だった彼女も、さすがに混乱しているようだ。

自分の無効化が、ようやく目立つような進化が出来たんだ…。

この一瞬の間なら、赤城さんを救える…っ！

疲れが大きく蓄積されているが、それでも動け…っ！

「ふうっ！」

僕は足を出すと、爪先にコツンとなにかがぶつかつた感触がした。

見てみると、それはおそらく赤城さんが片付けたヴィーガレンツの連中がもっていたナイフ…。

その数、3本程度…。

「いける…っっ！」

途端、無謀な作戦を思い付き、他の考えは無しにそのまま実行に移す。

床に落ちていたその刃物を拾い上げ、即座に彼女に向けて投げた。

「ツチー！」

苛つきを押しえられない彼女は、ローブから鍵を取り出して僕と同じようにそれを投げ、異能力を発動させる。

「OPEN！」

すると、ナイフが”個体であること”を封印され、その形を崩壊させられる。

しかし、まだナイフは残っている。

走りながら、僕は残りナイフを、それぞれ軌道を変えながら二本とも投げる。

一本は真正面から。

そしてもう一本は、上から…。

「この…っっ！」

彼女は負けじとローブから鍵を2本取り出した。

一本は、先ほど同様にナイフに向けて投げて、攻撃を崩壊させる。

そしてもう一本は、自分に降りかかってこようとするその刃物に向けて、その場で異能力を発動させて、身を防いだ。

「危ないわね…。…。っ!?!」

彼女が上から落ちてきたナイフを掴んだ頃、僕は彼女の背後を取っていた。

ナイフはあくまでも目眩まし。

彼女の死界から攻撃するためだ!

「ふんっ!」

ガンツ!

「痛っ…!」

殴れた…!

拳銃のハンマーから、確実に頭を殴った感触が伝わった…。

「うざい…っ!」

ドスツ!!

しかし、後頭部を殴られてもまだ動きを緩めなかった高坂は、僕の腹をハイドニウムナイフで突き刺した…。

「うっ…ぐうっ…」

言葉にならないほどの尋常じゃない痛みが、腹を巡る…。

思わず膝を着きたくなるが、それでも負けじと、僕は彼女の手とナイフの刃を掴んでやった。

「…っ! 掴みやがった…!」

驚く高坂に、僕は軽蔑と渴望の目を向ける。

「負け…られない…このままじゃ…また誰かを…見殺しにする…」

血が滲み出る腕のまま、刺さっているナイフを少しずつ抜く。

「強く…なるんだ……できることを…するんだ……しなくちゃいけないんだっ!!」

今、僕の力を見ている背後霊よ。

僕はこのままじゃ、終わらない。

「ぐううううううっ!!」

ナイフに力をいれて抜く最中、僕はポケットに忍ばせておいたプリ

ズンシールを取り出した。

「しまっ……」

計画の真意にようやく気づいた彼女だが、もう遅い。

プリズンシールを刻々と瀕死になりつつあった赤城さんに投げ刺すと、その身体がそのなかに収納された。

「今だ……っ！」

そのまま僕は、その力強く握られているナイフを後退して抜き取り、地面に転がったプリズンシールを拾い上げた。

「返してもらおうよ……アカギさんを……」

全てはこの時のためだったんだ。

同じ無効化の能力を持っている僕という存在を大きく主張し、その際にプリズンシールで赤城さんを回収する。

その為だけに、僕は戦っていたようなものだ。

腹を刺されるのは覚悟できていなかったが、高坂がこちらに力を集中してくれたお陰で、こちらにも影で回収に集中することができた……。

「貴様……最初からそのつもりで……！」

「ははっ……僕は……詐欺師なんでね……」

狼狽える彼女に向けて、ニヤリと微笑んだ。

ここまで、清々しく悪く笑えたのは初めてだ……。

勝利。

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、身体に疲れがドツと放出された……。

「もう……やばい……か……」

持っていた全ての力が、全身から抜け落ち、僕は膝から崩れ落ちてしまった。

「ユウキさあんっ!!」

粗方回復した佑香ちゃんが、倒れた僕に駆け寄ってくれた。

「ユウカちゃん……これ……」

血に濡れた手で、僕は彼女の兄が入ったプリズンシールを渡した。

「ごめんなさい……なにもできなくて……ありがとう……」

泣きながら礼を言う佑香ちゃん。



僕とは言えば、血液が腹からジワジワ流れ出し、四肢の先っぽから感覚が薄れ始めてきている。

もう少し気張れば、身体も動かせるかもしれないが… favorite に着く頃には、命がヤバいかも…。

「むかつく…っ！」

高坂は、出し抜かれた悔しさをギリギリと噛みしめ、ナイフを再度握りしめながら僕を睨む。

「お前だけは…！私がここで殺すっ！！」

彼女の怒りがメラメラと滾る。

しかし、こちらの目的はもう達成しているから、あとは逃げるだけだが…どうするか…。

「やめて…」

そんな中、赤城さんのプリズンシールを抱き締めるように握っている彼女が、ふと言葉を漏らす…。

「佑香ちゃん…？？」

「もう嫌だ…もうやめてっ！」

彼女は腕を捲り、迫ろうとする高坂の前に掌を広げる…。

「これ以上…私の大切な人を…傷つけないでえっ！」

彼女の右手がぱちぱちと火花を散らしながら発光し始める…。

確か…彼女は異能力者。

もしも赤城くんの特異と類似した物だったとしたら…！

「まずいつ…」

ドガアアアアアアアンツ！！



貫通して割れた天井の合間から、灰空が見える…。

壁も床も真っ黒に焼け焦げて、舞っていた埃も火花となって焦滅した。

耳をつんざくような轟音と共に、ビルの殆どが吹き飛んだのだ…。

粉塵爆発。

その言葉が頭をよぎる。

高坂が崩した天井から落ちた埃と、砂になったコンクリートの砂が、佑香ちゃんの異能の影響で大爆発を引き起こしてしまったようだ…。

「ゲホッ！ゲホッ!!」

特異のお陰でなんとか生きていた僕は思わず咳き込み、先ほど起きた自体をようやく理解できた。

「ユウキさん…」

傷一つない佑香ちゃんが、プリズンシールを片手に僕に駆け寄った。

彼女の異能がなんとなくわかった。

おそらく、彼女は右腕から爆発のエネルギーを放出することが出来るのだろう。

それによつて被る自分へのダメージだけは無効、それ以外は確実に敵を燃やす…なかなか恐ろしい異能力だ。

彼女が重たい扉を携えた倉庫のような場所で作業しなければならぬのも納得だな…。

粉塵のせいとは言え、こんな爆発的なエネルギーを受けたのなら、高坂も堪ったものじゃない筈…。

「ハア…ハア…痛…っ！」

息を吐いた瞬間、傷口からチクンとカッターの刃のように大きな物が突き刺してくるような痛みが走った。

粉塵のせいで喉が傷ついたのかも知れない。

「動かないで…薬は…？」

「くす…り？」

「あ、そっか…まだ知らされてなかったよね…」

僕の無知に嫌な顔一つせず、佑香ちゃんは立ち上がった。

「待ってて…今すぐ先生を…」

彼女が助けを呼びに行こうとしたその時、がらがらと瓦礫が崩れる音がすると共に、その下から奴が現れる…。

「ハア……すっごい危険だったわね……」

「そ……そんな……」

信じたくなかった……。

あんなに大きな爆発だったのに、僕でさえも不意打ちと衝撃によるダメージが加算されたと言うのに……。

高坂沙羅には……傷が一つもない……。

「でも……こんなに楽しいの初めてかもね……。今度、うちのライブでやろうかしら……」

余裕の表情を浮かべるところか、相手の攻撃を私情にまで結びつけようとするその姿勢に度肝を抜かれた。

きつと彼女の無効化が、迅速かつ正常に作動したのだ。

鍵が対象物に触れなければならぬというハンディがありながらも、あんなに早く対応ができるだなんて……。

脱帽。

弱々しくその二文字の熟語が頭を過った。

こんな奴に……僕なんか勝てるわけがなかったんだ……。

今も……きつと、これからも……。

「さて……。一番片付けないと行けないのはあんだだったのね……。こんなデカイ異能力……危険きわまりない」

そういつて、生還した彼女が目付けたのは、僕へのトドメではなく、赤城佑香の抹消。

「いや……そんな……」

悪く微笑む高坂に恐れ、佑香ちゃんは腰を抜かしてしまった……。

ダメだ……未だプリズンシールの中で眠っている赤城さんのため……今、彼女を失ってはならない……っ！

「やめ……ろっ！」

彼女のために手を伸ばし、最後の力を振り絞って、立ち上がろうと踏ん張った……。

スタツ！

しかし、その瞬間、一人の人影が僕の目の前に現れた。

新たな敵襲かと思ったが、黒地に白色の見慣れたラインのロングコートの裾がヒラリと舞った事で、敵ではないことを悟る…。

「あらあら…こんなに豪快に崩れちゃって…」

まるで天使のように現れた黒いロングヘアーの女性は、得意気にそう言った。

誰だ…？

救援に来てくれたのはわかるが…彼女は何者なんだ…？？

「お前…」

邪魔された高坂は、憎らしく救援に来てくれた彼女を睨む。

「あら？貧乳のコウサカちゃんじゃない…。元気してた？」

「黙れ……。私を罵倒するな…」

挑発を真に受けて青筋を浮かべる高坂に向けて、彼女はため息を付く。

「言葉を返すようだけど、あんたもうちの仲間をバカにしないでくれる？」

彼女の返答に、高坂は今にもブチブチと堪忍袋の緒が切れるような音が響きそうだった。

「このクソビッチが…っ！」

一触即発、高坂がコートのなかからまた鍵を取り出し、目の前の彼女もエンブレムを掴もうとする。

ドドオオオオントツ！

しかし次の瞬間、二人の間に入るように、今度は大きな着地音を立て、地面に窪みを空けながら、一人の男が落下してきた。

「コウサカのお！助けに来たぞお！」

ガタイの大きな男が、大きな声でそう告げる。

高坂と同じコートのフードを深く被り、鬼のような異形な形をした仮面を付けているため、その男がどんな人間なのかは判断できなかった…。

「ツチ…くそ爺…！」

「ハハ！そんなに怖い顔をするな！かつこいい顔立ちが崩れる！」

ウザがる高坂と、腰に手を当て、胸を張る男。

少々、陪川さんに似ているような気もしなくない。

「なんの用…？あんたがここに来るなんて珍しい…」

「ボスからの言伝てだ。『全面戦争回避のため、すぐに帰還しろ』とな。さあっ！時は金なりだ！早く戻ろうぞ！」

その伝言を聞くなり、彼女は怒りで目を見開いた。

「なんで…!?今ならあの新人を殺せる！私の実力なら、確実に全員殺せるのに！そんなの全然ロックじゃない！」

焦る高坂。

しかし、男が首を縦に振ることはなかった。

「言いたいことはわかる。だがコウサカ…」

彼は高坂の肩をポンと叩くと、そつと耳打ちをする。

「ボスに逆らえばどうなるか…わかってるだろう？」

元の声が大ききから、ホンの少しだが僕にも、その重くなにかに怯えるような言葉が聞こえた…。

ボス…つまり、郷仲さんの旧友がどれ程恐ろしいのか、それは僕だけではなく、高坂も危惧していたようだ…。

「ツチ…。ウツザイ…」

「上等！飛ぶゾツ!!」

舌打ちをして諦める高坂を、男はまるで孫を抱きかかえるかのよう  
に、身体を掴んだ。

「ふうふううんっ!!」

すると、異能力らしき力で空高く飛び、彼女らは退却する…。

焦げた埃が地面から浮かび上がると共に、彼らが飛んでいったその  
空は、灰色を割いて青空を露出させていた。

難は免れた…のだろうか？

とりあえずよかった…佑香ちゃんに危険が及ばなくて…。

そう思うと、全身の力が一気に抜け、半強制的に目蓋が目を覆った。

「先生…」

「アカギは無事？」

目を閉じている中、佑香ちゃんの弱々しい声と、増援の彼女の少し  
強気な声が聞こえた…。

「あそこのプリズンシールに…」

「……バカね。妹つれていくなら、ちゃんと自分の身も守りなさいよ……」

「でも…お兄ちゃんは！」

「わかっている。あなたを守れたんだから、アカギはよくやった方よ。帰ってきたら、あなたがうんと誉めてあげなさい」

「……はい」

「それとこれ新人に」

「はい…」

チクンツ！

「痛っ！」

太股に針が刺された感触のおかげで、ようやく目が覚めた。

「大丈夫…この量なら、すぐによくなるから…」

佑香ちゃんが注射器を抜くと、彼女の言葉通りの効能が、すぐに実感できた。

まるで温泉にでも浸かっているような暖かさと共に、じわじわと身体から力が戻り始め、つけられていた全ての傷が一瞬で塞がっていた。

あんなに動かなかった指も、開いて閉じてを繰り返せる位に回復している。

なんてすごい薬だ…こんなこと一度も体感したことがない。

これがあれば、アヤも元に戻ってくれるのだろうか…。

「新人」

ふと、増援の彼女が赤城さんの入ったプリズンシールを片手に背を見せながら、僕に話しかける。

「プリズンシールに入れて保護するのは懸命だったと思うわ。でも…そこまで傷つくまで戦う選択をする時点で、あんたは甘い。ちゃんと特異点だって自覚は持っているの？」

彼女の説教に気落ちする僕は、よろめきながら立ち上がる…。

「すみません…」

「ハア…あんたね…」

肩を落としながら返事をする、目の前の彼女のオーラが憐れみと怒りに変わるのがわかった。

叱責されるのは当然だ。

潔く言葉を受け入れよう…。

「謝るくらいならもうしないで。人が一人死ぬかもしれないから、もっと早く安全策を考えなさい。そもそも新人、あんたはね…。」

彼女が鬼の形相で振りかえった瞬間、僕らの中で時が止まったような感覚が走った。

「…っ！」

「……！」

僕らは互いの顔を見た途端、大きく目を見開かざるを得なかった…。

「うそ……そんな……だって…。」

「先生…？」

なにがなんだかわからない状態の佑香ちゃんを置き、僕らは互いの姿に感動していた…。

敵の開けた晴天の穴から薄れ行く曇天、ボロボロのビル、圧倒的な力の前に大敗した後、僕は今日という日に、感謝することとなる…。

「テツチャン……？」

「カホ…ちゃん？」

何故なら僕らは、互いにかけてがえのない親友だったのだから…。

To be continue

## 9—1 『女医M、友との約束』

花菜村よりも遙か遠く離れ、どこにあるのかすらもわかっていない農村がある。

そこに先住民はおらず、田畑は荒れ果て、今では珍しいどころか、存在すらも幻と言われている日本古来の家々は、蔓や茨によつて、その形だけを残して朽ちていた。

ここに住み着いているのは、知能のない生命と春の匂いくらい。知能があつたものは、このくそつたれな社会になつてから、改革やらなんやらで引越したか、土地の奪い合いや価値観の違いで殺されたか：。

かといって、この村が美しくなつたわけではない。

この村の外に作られた高層ビルや、育ちに育つた大樹の壁が日の光を阻害している。

ここは欲に溺れた醜いリージェン共のせいで、壊れされた悲しい村なのだ。

この場所酷く薄ぼけている。

夢見て上京してきた私と同じ位に。

そんな誰からも忘れられた農村の片隅にあるのが、この廃れた教会。

藁に覆われたコンクリート作りの建物で、中も放置されつつづけていて床も壁も天井も爛れている。

それを取り繕うこともなく、かといって、これを芸術として消化しようなんて事も、ここは思っていない。

こんな場所、全然ロクじゃない。

ただ、いつも薄ぼけているこの村の中で、この建物の中央にそびえる礼拝室にだけは一筋だけ日光が射す。

コンクリートで作られた長い石段と、ヴィンテージと言うには古ぼけすぎているグランドピアノ、壁にデカデカと造形されている男女の



営みのような表現が成されている、神の銅像。

そして、その天井に貼り付けられている、美しい強化ステンドグラスから、日の光は射す。

そこに彩られているのは羽の生えた全裸の赤子。

まさに、人間を崇拜するにはもってこいの場所だ。

♪

日の光に照らされながら、間克さんが自分の世界に入り込んで演奏をしていた。

ここに置かれているグランドピアノは、ボスでさえも一音も鳴らすことができない曲者だが、何故か間克さんだけはその音を鳴らすことができるのだ。

今日の演目は『The Wind Blows Where It Will』。

相変わらず、間克さん独特のアレンジが美しい物だ。

「マカツさん」

ふと、声をかけると彼女は演奏の手を止め、ワンレンシヨートを靡かせながら、こちらを向く。

「良い？」

そう聞くと、彼女はにこりと微笑んで頷く。

音楽に良識がある人がいると助かる。

私は担いできたアコースティックギターを取り出すと、ピアノの前に立って、スポットライトのように照らされた日光を浴びる。

整脈に包まれたこの場所で、試しにAm7をかき鳴らした。

ジャーントゥ!

音が美しく反響する。

ここで音楽をすると、なんかスツキリするんだ…。

誰に聞かれるってわけでもない、そんな歌を歌える場所だ。

「なにか、歌いますか？」

ふと、私のAm7を聞いてくれていた間克さんが、声をかけてくれた。

「季節。良いかな？」

自分の好きな歌の略称を言うと、彼女は「大丈夫ですよ」とだけ良い、指を伸ばして演奏体制に入った。

演奏に入る前のしんとした空間…。

緊張と高揚が体を巡り、ひしめく。

その感覚が私達にとつて堪らない一瞬だ…。

一通りこの感情を味わった後、間克さんのブレスがこの静寂を切り裂くように響いた…。

「おいコウサカ」

しかし、礼拝室に来た月村が、今から始まろうとしていたセッションを止めた。

「なに…？」

今から始めようとする曲をとめられるのが一番嫌いだ。

過去を見れる異能のせいで、ナチュラルにこう言うこととしてくるのが腹立つ。

「ほら」

月村は石段を降りながら、私に缶コーヒーを投げ渡してきた。

「昨日のこと…ボスが誉めてた。邪魔者排除した上に、スプリミナルの新情報まで出たからな」

舞台上が上がってきた彼は、間克さん用にもうひとつコーヒーをピアノの上に置いた。

そもそも、昨日の任務は赤城隆泉や基山彰と言った危険人物の抹殺が主だったんだ。

結果的には殺せなかったのだから、誉められるような自覚はないが、まあ悪い思いはしないから良いか。

「そりやどうも…。今日はあのジジイは？」

「今日も会社だ…。ハア…。俺にばかり雑用回してきやがる…。いつそ死にてえ…」

またいつもの死にたがりか…。

「その口癖、そろそろ耳障りなんだけど。死にたきやとつとと死ね」

「それができりや苦労しねえ…。こっちは誰にも迷惑かけることなく楽に死にたいんだよ…。」

目を反らしながらワガママな死に方を願う月村。

コンッ!

「痛たっ」

その態度がなんか腹たつから、コーヒーの缶の角で軽く頭を殴ってやった。

「そんな方法があるなら、この世で安楽死拒む老害がいなくなるわよ」  
傲慢な死にたがりに皮肉を言ってやると、月村の露骨な舌打ちが響いた。

「分かってるから願ってんだろが…」

こいつのこう言うところ嫌いだ。

私たちの過去を見て知ったような口振りで死にたがる、そんな自分勝手さがムカつくんだ。

あの子の事まではわかんなくせに……。

「フフ…。仲良しですね…お二人」

「どこが」

互いに目を反らしたのにハモるのがさらに腹立つ。

間克さんに悪意はないから別に良いけど、こんな死にばかりと一緒にはされたくないな…。

「しかし…スプリミナルも厄介になってきましたね…。まさか、同じ無効化を手に入れるなんて……」

間克さんの言葉から、話題は人外底いスプリミナルの話になった。

ついに私たちの特権だった無効化を、あいつらは手に入れた。

「ただでさえ、水使いや医者が邪魔なのに……。やだやだ……。ほんと、なんもウマイこといかねえや……」

「ムカつく……。ただでさえ、同胞が減ってきてるってのに……」

お互い、思い出すだけでも苛立ちが沸き上がる。

私らをこけにしてきた女医も、生意気な新入りも、なにもかもが腹立たしい。

リージェンを守ったって、人類にとっては後退でしかないのに、それを知らないふりして偉そうに……。

「いつかぶつ殺す…。リージェンを守るようなやつなんてろくでなし

だ……」

啖呵切つて思い出すは、今まで自分がされてきた仕打ち。

誰もが転がる石のような存在なのに、お前は特別じゃないだとか、自惚れるなだとか、そんなこと言われて腹立った事はザラだった。

けれど、リージエンが吐いてきた言葉や態度だけは、思い出したくなくても、脳内にこびりついている。

私は奴らを殺さなくてはならない。

人間よりも悪態ついたあいつらを……。

「……結果を急ぎすぎると、大切な過程を見逃す」

ふと、月村がため息混じりに伝う。

「ボスから直々のお達しだ。ありがたく思え」

彼は哀れみのような、慰めのような、何とも言えない表情を浮かべていた。

「あんたが言っても、心に響かないけどね」

ニヒルに笑って返してやると、月村はふんと嘲笑を浮かべながら出ていった。

あいつの事は嫌いだ。

けれど、この呉越同舟的な互いの思いだけはまだマシだ。

それだけが、この組織の中で月村と上手くやっていける理由なのだろうな。

「まあまあ……そんなに歪み合わないでください……。私達は私達に出きることをしましょう……」

にこりと微笑みながらも、私達を心配してくれる間克さん。

彼女は肯定も否定もしない、優しいお姉ちゃんみたいだから好きだな。

「そうだね……。マカツさん、改めて入りからやつても良い？」

「はい」

まあ、月村の態度は忘れてやろう。

そんな気持ちをギターと一緒に背負い、今一度A m 7を小さくならすと、間克さんは改めて鍵盤に手を添える。

次の瞬間、彼女が息を吸うと、私たちの旋律が奏でられた……。

スプリミナルも、武装警察も、苛立つ物をなにかも忘れられる誰にも邪魔をされない、評価などない、そんな空間……。



事件の後、僕らは傷を負いながらも、救援に来てくれた深山女医のお陰で、なんとかフェイバリットに帰ってこれた。

プリズンシールのお陰で赤城さんは一命を取り留めたが、副作用である莫大な疲労感や精神的なダメージが未だに解消されないらしく、今日は佑香ちゃんの看病の下、休暇をとって療養することだ……。

高坂沙羅に首を斬られた冴羽は、一応搬送はされたが間に合うはずもない上に身寄りもなく、人知れず処理されたとのことだ。

彼女が何故、同種族を恨むようになってしまったのかは、結局分かんず仕舞いだっとな。

一方、僕らが知らない場所でも、基山くんと水原くんがヴィーガレソンの幹部二人に襲われて、重症を負っていたらしい。

無事に生還した二人の内、水原くんはまだ動ける程度の傷だったよう、今日もフェイバリットに顔を出しているが、基山くんも赤城さんと同じく瀕死に値するダメージを負っていたらしく……。

僕はと言うと、確かに結構なダメージを負ってしまったが、この治療薬ってものは目覚ましく、事件翌日の昼出勤の頃にはもう万全な体制になっていた。

そして、僕が改めて深山女医こと、歌穂ちゃんと再会したのも翌日の昼のこと……。

ガチャン

本日正午、晴天。

桜が青葉に洋装を変え、数割の学生の持つ鞆が、少し大きくなる頃。本社エレベーター近くの勝手口の扉を開けると、僕の親友はそこにいた。

「やあ……」

窓から町の景色を眺めながら、ファミリー席に座る彼女に声をかけた。

「うん…」

僕の声に気づいた彼女は、ニコリと微笑んで手をヒラリと振る。

彼女と出会うのは実に約十一年ぶりだが、この美しく可愛らしい笑顔だけは変わっていない。

懐かしい感傷に浸りながら、僕は彼女の目の前の席に腰を掛ける。

昔はショートカットだった黒髪も、今や絹のように柔らかく美しい長髪に変わり、首には羽を模したネックレスを着飾っている。

勿論、スタイルも女性らしくなっていて、彼女も大人になったんだな…なんて、密かに時代の流れを感じていた。

「えつと、ここでは…はじめまして？になるのかな…。新人の…テツヤです」

「ここで…女医をやっています。カホです」

「プッフフ…」

「プッフフ…」

互いに自己紹介を交わしただけの、当たり障りない光景に、僕らは思わず吹き出した。

「なんか、久々すぎて、固くなっちゃうね」

「そうねえ…。もう小学校からずっとあつてなかったものね…」

二人で笑い合っているだけなのに、こんなにも尊い瞬間に感じるのは、今まで出会ってきた事を鮮明に覚えていたから。

職場でたまたま再会なんて、ありふれた事かもしれないけれど、僕にとつては、それがとても嬉しかったんだ。

「まさか…カホ先生とテツヤくんが幼馴染みだったなんてねえ…」

一方、カウンターではあおいちゃんが、再会を喜ぶシチュエーションに魅了されたかのように眺め、その隣の壁に寄りかかっている水原くんは、少し意地悪に微笑んでいた。

「そだね。あのNL好きDS女医とたればヘタレ男が友達だったなんて、天変地異級に驚…」

キーン！

冷やかしの途端、ちょうど水原くんの股間すれすれにメスがささった…。

「なんか言った…？」

「いえ…：なにも…：…」

地雷を踏まれた深山先生の悪魔のような笑みと共に、男にとって大事な部分を質に取られては、いつも生意気な水原くんも従わざるをえないよな…。

ホント…：彼女はたくましくなったんだな…。

話を戻そう。

「えつと…：元気にしてた？最後に話してから、大分時間が経っちゃったけど」

小学校卒業から今日までについてを聞いてみると、彼女は少し苦笑いを浮かべた。

「いろいろ…：大変だったかな…：。高校も結局いつてなかったし…：なんか…：変な能力目覚めちゃうし…：それに正直言うと、医師免許まだ持っていないし」

「持つてなかったんだ…：スプリミナルの女医なの…？」

「まあね、そこはやっぱり特別扱いだしねえ…：」

彼女が少しバツが悪そうな顔を浮かべるのは、きつとこの仕事場の環境のせいだろうな…。

「でも、直に手術とかはしてないからね？あくまでも主治医の助手や民間療法の範疇。私の特異の兼ね合いもあるから、緊急の場合は医師が認可をしてくれば大丈夫ーって、サトナカがなんとかしてくれたり。まあ、それでも特殊認可医の免許とるために勉強してるんだけどね」

歌穂ちゃんは苦くない笑顔を浮かべて、彼女の身の周りを説明する。

医者というのは、やはり想像以上に苦労しそうだな…。

「これまで大変だったけど…：ちゃんと新しい夢は見つけられたんだ。だから私は、なんとか元気でやれたよ」

そう伝う彼女の笑みから、もう苦味は一切なくなっていた。

これまでに彼女の身に起きたそれを思い出すと、深山歌穂という人物は、本当に強くなっているんだな…。

「そっか…：なんとかやってこれたんだね…」

けれど、苦勞していたのは、僕だけではなく、彼女も人知れず苦勞をしていた…。

きっと、僕が知らない間に、何もかもが嫌になったこともたくさんあったのかもしれない。

それでも彼女はがむしやらに頑張つて、スプリミナルにも入つて、こうやって僕らとまた再会できて…。

彼女がここでがんばっていたんだって思うと、僕は本当に嬉しかった。

正直、ずっと音信不通だったから、すごく心配してたし…。

「あのね…」

それを悟つたのか、彼女はおもむろに口を開く。

「覚えてるかどうかわからないけど…：ずっと前、あの時…：生きてとか、ずっと友達だよとか…：玄関越しに私に言ってくれたこと…：すつごく嬉しかったんだ」

あの時のこと…。

小学生の時から、自分は彼女の顔を見ていなかったが、今日までに一度だけ、彼女に話しかけたことがあった。

鏡面発光事件以前に、深山家に大きな不幸があり、その時に玄関越しに彼女に思いを伝えたのだ。

その時は、なにも反応してくれなく、心配のまま家に帰った事を覚えてる。

もう忘れていると思っていたけれど、ずっと覚えていてくれたんだ…。

「私、ようやくテツチャンと会えたんだって思うと、ここまで生きてよかった。スプリミナルって、大変なことばかりだけど、二人で一緒にやっていけるなら、辛いことも少しは忘れられるかもしれない」

彼女はそう言うと、僕の掌を覆い被せるように握る。

「私はもう絶望したりしない。死にたいなんて思わない。あなたがこ



ここに来てくれたから。だから改めて、これからよろしくね」

その時の声色は、子供時代、一緒に遊んでいた時から変わっていない。

「…うんー」

僕も小さかった頃のように、笑顔を浮かべ、彼女に返事をした。

僕は、ずっとこんな日を待っていたんだろう。

少しでも自分の罪や憎たらしい背後霊の事を忘れられるような、こんなに嬉しい出来事を、懐かしい再会を…。

「なんか…すつごく感動…。10年近く会えなかった二人が、職場でようやく会えるなんて…」

「いやあ…こんなの、な〇うとかP i O i vとかで書かれそうなほどありきたりな展開だろうし、大体、性格ドギつい女医がヘタレなユウキさんと身体的な意味でもやっていけるかが一番ふあ…」

ドスツ！ドスドスドスツ！

「あんたはいちいちうっさいのよ！」

「カホちゃん、死んじゃう死んじゃう…」

すっかり頭やら脇やら股間やら、マジで斬れたら大変な所をストレスで正確に当てているから、見てるこっちが怖い…。

さすがに水原くんだけじゃなく、隣にいるあおいちゃんもドン引いてる…。

「全く…。この組織、本当にバカが多いから疲れちゃうわ」

ふんと鼻息を漏らす彼女。

改めて再会した時のことを思い返してみると、なんだか昔よりもハッキリと物が言えるようになったな…。

「でも…前よりかは楽しいよ。ここに来るまでは…いろいろと大変だったし」

また詐欺をしていたことを思いだしながら呟くと、彼女は微笑んだ。

「そうね…私もいろいろあったけど…今が一番気楽かも」

やはり、歌穂ちゃんもそうだったのか。

今日までの僕らが受けてきた辛みを負債として換算して考えれば、

確かにここの方が楽に感じるよな。

「というか、テッチャンはどうしてここに？」

彼女の身を何気ない言葉にドキンと胸が波打つ。

やっぱり、そこは聞いてきちやうよね…。

「実は…：ちよつと、自分の発症した特異のせいで、前の職場で事故しちゃって…。それをミズハラくんが助けてくれて、そこからノリで…って感じかな…」

とりあえず取り繕った事の成り行きに、歌穂ちゃんは適当にふうんと頷いた。

嘘は言っていない。

本音は隠してるけど。

「私も少し似てるかもなあ…。自分の特異が暴走して、警察に捕まる寸前で、サトナカが助けてくれたのよ…」

「サトナカさんが…？」

彼があまり公に姿を現す印象がないのだが…。

「実は私、結構ここに入ったの早いよ。スプリミナルナンバー5番目だからね」

「そうだったんだーじゃあ大先輩だ…」

なるほど…：それくらいだと確かにここまで組織が発達していないか…。

ちなみに、スプリミナルナンバーは、入った順番で決まる。

自分は11番で、水原くんは2番、あおいちゃんは10番。

ただ、あおいちゃんは水原くんよりも先にここに居たらしいのだが…：まあ、それはまた別の話か。

「とにかく…：前は本当にひどかったかも…。蟹工船って作品があるけど、スプリミナルに入った今より入る前の方が、その作品と現実が一致してるわね…」

「そっか…。君も大変だったね」

蟹工船を引き合いに出されるとは思わなかったが、とにかく彼女も彼女で、別ベクトルの大変さがあったんだな…。

僕の場合は、人を殺してしまったけども…。

「まあ、ここにいて少しは楽しいと思えるようになったわ…。叶さんも優しいし、あおいちゃんも人懐っこいし。まあ、ミスハラやスミウラは生意気だけだね」

彼女の口角が上がると共に、僕の心に安堵が浮かんだ。

「僕も…今のところ楽しいかな。業務は色々大変だけど…前と比べたら…ずっとホワイトだよ…」

「本当？(´▽｀)、なかなか大変なのよ？この前の仕事なんかね…」

歌穂ちゃんのその言葉から、僕らはスプリミナルに入ってからのことと互いに話し始めた。

入社試験の時にここが大爆発した事とか、動画投稿者の裁判の事とか、陪川さんに振り回された事とか……。

歌穂ちゃんも歌穂ちゃんでも、近くの工場の爆発事件を解決した事や、殺人事件の動機が単純だった事、陪川さんには振り回された事など、僕の知らない事件を体験していたようだ。

「つか、スプリミナルに来る依頼が、変なのが多すぎるだけだけどね」

まあ、水原くんの言いたいこともわからなくもないが…。

でも、まだ1ヶ月にも満たないが、それでもここまで来た道のりはとても濃厚で、僕らが思い出話を弾ませるにも、十分な記憶だった。

ただ……ここに居ると言うことは、お互いに罪はあるのだと思うが、僕らはあえて聞かないことにした。

いつかはわかることだろうけども、今はただ、二人でまた出会えたことの喜びを、噛み締めていたかったから。

「てか…テツチャンの特異すごいわね…。無効化なんてなかなか見ないわよ…？」

スプリミナルに入ってた事を色々話してるうちに、各々の特異の話になった。

「まあ、自分は全然実感無いし、応用とかもまだできないけどね……。そう言えば…カホちゃんの特異って？」

「ああ、テツチャンや皆に注入した薬、あれが私の特異」

少し間の抜けた返答に僕は首をかしげる。

たった一日で粗方の傷を治せるほどの治療薬が彼女の特異であるとは、どう言うことなのだろうか…？

「さすがに、いきなり言われてもわかんないわよね。改めて説明するわ…」

彼女は腕捲りをしながら、白衣の内ポケットに入っている治療薬を取り出した。

「私の血液には、普通の人間には無い、特殊な欠損修復細胞が入っているの。それを他者の体内に注入することで、色んな傷を治すことができるの」

歌穂ちゃんの特異に驚愕した。

まさか回復薬が全部赤黒い色だったのは、彼女の血液だったからだなんて…。

自分の身体に入れられていたものがまさか親友の、しかも女の子の物だったと思っただら…：…なんだかすごく申し訳ない気持ちが出てしまう…。

というか、感染症とかは大丈夫なのだろうか。

まあ、それは特異そのものが何とかしてくれるって言う考えもなきにしもあらず…。

「すごいなあ…」

腕捲りされた白魚のような腕。

そこに微かに浮かんでいる血管の中に、治療薬が入ってるんだと思うと、なんだか彼女の身体が医療の世界に置いて、金の泉その物に見えるてきてしまうな…。

どんな傷も治せる特異点…。

これがよく傲慢な医者に悪用されなかった物だな…。

ん…？どんな傷でも治す…。

「…ってことは、例えば大きな怪我をしたとしても、特異でなんでも治せるってこと!？」

気づいた僕は興奮し、思わず椅子から立ち上がると、歌穂ちゃんはそれに肩をびくりと振るわせた。

この時の脳裏に浮かんでいるのは、勿論アヤのことだ。

あらゆる傷を治してくれるのなら、もしかしたら彼女の血液を注入すれば、アヤが治るかもしれないから…。

「ま…まあね。でも、粗方の血液がいきってしまったていたり、身体が殆んど形をとどめていなかったりすると、さすがに手遅れになる可能性が高いわね…。赤城の場合は本当にギリギリだった」

「そ…それは申し訳無い…」

興奮して熱くなっていた頭を、謝意の気持ちを押さえつける。

それと同時に、僕はしゅんとなりながら、椅子に座った…。

「それと治せるのは、なんでも」じゃない。あくまでも外傷が中心と  
言うだけ。だから、末期がんとか生活習慣病にはほぼ無意味なの…。  
それと、陰茎とか陰唇の内部や外部とかも治しても傷が残ることもあるわ」

「そ…そっか……」

彼女は単純に自分の事について話しているだけだが、僕からしたら  
厳しい現実だった。

外傷が中心であるなら…恐らく内科的な原因のアヤを治療するこ  
とは無理だろう…。

「陰茎って？」

「ち〇〇んのこと」

バシインツ！

「な…なんでやねん…」

僕らの横で夫婦コントみたいな事が繰り広げられてるけども、一旦  
無視しよう…。

「まあでも…この特異だけは、ハイドニウムでもなかなか排除できな  
いレアケースだから、もしもテツチャンがハイドニウムで傷つけられ  
ても、すぐに治せるのっ！だから、もしもなんかヤバい状況になつた  
ら気軽に呼んでね。すっ飛んでいくから！」

「そ…そうだね……」

少し邪な事を考えてしまったがゆえ、歌穂ちゃんの笑みがなんだか  
申し訳なく感じた…。

彼女を安易に利用するなんて、冷静に考えれば、さつき妄想したよ

うな傲慢な医者と全く同じじゃないか。

楽を考えるのはやめよう。

彼女との縁のために、なによりアヤのリスクのために…。

「……どうしたの？ なにか…気になることでもあった？」

僕の表情から暗然を察したのか、彼女は首をかしげる。

「いや…大丈夫だよ。うん…気にしないで…。」

愛想笑いで嘘ついて断った理由は、親友にあまり心配をかけさせたくないからだ。

せつかく再会したのに、いきなり重い話をするのも良くないだろうし…。

それに、彼女の特異を軽々しく使おうと思つてたなんて知られたら、それこそ悪い…。

「それよりさ…。」

ギョツ

「い、痛て…。」

話を明るくすげ替えようとした瞬間、歌穂ちゃんに両頬を強く引つ張られた。

「嘘。私、一応探偵業務もしてるんだから、それくらいの嘘わかるんだからね」

彼女はそう言うと、頬から手を離す。

「話して。今の私なら、どんなこと聞いても大丈夫だから…。」

彼女の顔は真剣で、机に乗せていた腕を仕舞い、背筋を伸ばした。

覚悟を決めたと物言う彼女の真っ直ぐな眼が、僕の心を揺さぶつた。

別れてから10年以上たった今でも、歌穂ちゃんは、ずっと僕ら二人の事を思ってくれていたのだろう。

そうじゃないと、ここまで僕に話してくれる理由なんてない。

そんな事を思うと、僕は彼女ほために嘘を塗り固めるようなことをしてはいけない気がした…。

アヤの過去のことを…彼女に話す時が来たのだ。

僕はそう決意し、誰にも聞こえないほどに小さく深呼吸をし、あの

日のことを話し始めた。

「……四年前の鏡面発光事件…覚えてる？」

「覚えてるわ…。目の前で妊婦さんがトラックに押し潰されて死にそうになっていた光景が…頭にこびりついているもの…」

苦しい顔をするが、その目は僕から逸れ<sup>そ</sup>ない。

やはり、彼女の記憶にまで刷り込むほど、あの災害は大きなものだったのか…。

「その被害者なんだよ…アヤが…」

僕の言葉を聞くと、歌穂ちゃん表情が驚きが変わった。

「アヤちゃんが…?! そんな…」

彼女のなかでは、きつとまだ向日葵みたいに元気なアヤの印象がついているのだろう。

しかし、今のアヤは、笑いも泣きもできない眠り姫だ…。

「あの光を浴びたアヤは、今も病院で眠ってるんだよ…。この四年間、ずっと様々な治療をしてきたけど…未だに目覚めないんだ…」

あの日の事は、未だに呪いのように付きまとっている。

仕事に行こうと家を出たアヤを見送ったのが最後、再会した頃には、目も開けられない姿になっていた…。

医者でも未だに説明ができていない症状なものだから、それを検査、治療するには莫大な医療費がかかる。

その頃には両親はこの世に居なかったから、僕が稼ぐしか方法は無い。

その為には、詐欺でもなんでも、ところ構わず金を集めるしか無かったのだ…。

全てはアヤのためだけ。

僕が儲かりたいだけなんかじゃない。

そう割りきっていた筈なのに、未だに罪悪感と言うものは、記憶や心にこびりついている…。

自分が罪を犯していたことも勿論だが、それよりも大きいのは、アヤのこと…。

「もしも…僕がアヤを引き留めていれば…もしも、僕が…もつと早く

起きていたら…。もしも僕がアヤと変われるなら…。いつ  
も考えてしまうんだ…。そんなたらればを……」

自分が変わってやれなかった事への恨みや辛み、悔やみや憎しみ。  
それが重なって生まれるのは、自責を現す”たられば”ばかりだ。

「カホちゃんの特異を聞いて…。これで遂に治せるのかつて光を見たけ  
ど…。無理だったから……。ごめんね、変なこと行って……」

謝意を込めて彼女にそう伝う。

そもそも、他人を頼ろうとするなんておこがましかつたのかもしれ  
ない。

自分の家の事なのに、他人の良いところに漬け込むのは寄生虫と同  
じとも考えられる……。

だから、結局は自分が誰かに頼ることなく、また金のために働かな  
いと行けないんだ。

金払いも対応も良いから、幸い蟹工船よりはマシだしな……。

「私は」

ふと、静かに話を聞いてくれていた歌穂ちゃんが口を開く。

「私は…。家族がそういうことになってないから、テツちゃんの気持ち  
は…。わかりかねるかもだけど……。家族がいなくなって、一人になった  
ときの怖さや不安は…。痛い程わかるよ……」

ふと彼女の顔を見ると、眉をひそめ、僕に哀れみに似た目を向けて  
いた。

忘れてた…。彼女も僕と同じだったんだ。

彼女にも僕と同様に愛していたお母さんがいたけれど、僕と別れて  
からその人を早くに亡くし、そのまま一人ぼっちになって……。

彼女は僕なんかよりも早く、そして長く、その苦しみを抱えていた  
……。

相も変わらず、僕は馬鹿野郎だ。

目の前に、もっと辛いことを体験してきた人間を差し置いて、なに  
自分だけ特別みたいになってるんだ……。

「……ごめん……。僕だけじゃないのにこんなこと……」

僕は僕への憐れみを持ってしまったことを反省すると、彼女は首を



横に振る。

「気にしてないわ。あなたはあなただから」

優しく微笑む彼女は、昔から変わららず白鳥や天使のように美しい物だった。

この笑みのお陰で自分が免罪されたような気がしたし、今日の再会に意味があると実感できる…。

「ありがとう…カホチャン」

感謝を込めて笑みを浮かべると、彼女も僕に笑みを返した。できるのならば、これからも彼女との縁を大切にしていきたい。

寄生虫的な感じではなく、ちゃんとまた友達としてやっていけるように。

ずっと僕やアヤの事を覚えてくれていてくれ、暗くなった僕らを元気づけてくれる彼女と…。

「まあ、いつもはサバサバしたDS女だけだね」

「ほっとけ、クソガキ」

まあ…ちよつと口は悪くなったけど…オーライオーライ…。

「あつ、そうだ！ねえ、今からアヤちゃんの病院に行っても良い？私、改めてアヤちゃんに会いたい」

髪を揺らしながら立ち上がる歌穂ちゃん。

そう言えば彼女は、まだ大人になったアヤに会ったことがなかったな…。

「…そうだね、行こっか。僕もお見舞い行こうとしてたし」

基本、アヤを人には会わせたくないが、歌穂ちゃんなら大歓迎だ。

アヤも面会してくれる人もほとんどいないし、きつと喜ぶだろう。

「でも、今から？大丈夫？お仕事もあるだろうに…」

「大丈夫よ。パトロールだって言っときゃ何してても大丈夫だし、こちらの病院には、私の顔が通ってるから、なにしてたかのアリバイにもなるしね」

「そ…そんなもんなの？」

「そんなもんそんなもん」

なんて適当な職場だ…。

まあ、いつでも気軽にサボる水原くんとか、いつ仕事してるのかわからない住浦さんもいるし…わからなくもないな…。

「あーんじや、私も行きたい！」

カウンターに乗り出すほどの拳手をするあおいちゃん。

「丁度、今日はお客さんも少ないみたいだし、テツヤくんの妹さん見てみたいもん！」

「いいよ。多い方が、きっとアヤも喜ぶだろうし…」

それに、妹に興味を持ってくれた事が、なによりありがたい物だ。

「んじや、アオイがいくなら僕も…」

ふうとため息をついて立ち上がろうとする水原くん。

あおいちゃんが彼の前に掌を向けてその動きを止めた。

「ダメ。カドヤは昨日無理した罰！今日一日店番してなさい」

店長からのストップに水原くんは鳩が豆鉄砲撃たれたような顔から、瞬時に臍まげて、半月状に拗ねた目に変わる。

「えー…コーヒーどうすんの？」

「ブルーアイ品切れって言つときや、大丈夫。普通のコーヒーの淹れ方は教えたでしょ？そっち淹れれば良いから」

「はあ…へいへい…。なんで今日は僕ばかり…」

水原くんは口を尖らせ、近くの椅子に腰を落とした。

スプリミナルで一番の面倒くさがりを、ここまで粛清できるあおいちゃんのお母さん感というか…。

「さっ、水原は放っておいてそろそろ行きましようか」

「あ、うん」

「はーいっ！」

すでに準備万端だった歌穂ちゃんの後を追うように、僕とあおいちゃんも店を出た。

…。こんな世の中だけど、今日はちよつとは楽しい日になりそうだな

## 9—2 『女医M、友との約束』

バラードディアTK市部総合病院。

相変わらず消毒液の匂いが鼻を通るこの施設の中で、今日も沢山の病人が、ショーケースの商品のように並んで座り、選ばれるのを待っている。

今日は平日だからか、子供はそこまで居ないようだ。

「へえ…奇遇ね。ここお得意さんじゃない…」

院内を歩きながら、歌穂ちゃんが艶のある黒髪を揺らして呟く。

「お得意さん…？」

「たまに、オペに参加してくれって頼まれるときあるのよ。免許持っていないし、あんまり好かれてないから、あくまでも特例だけどね」

そう言えば、さつきも主治医の助手として、医者としての活動をしてるって言ってたな。

多くの外傷を治せる特異点というのは、こう言う場でも使えるわけか…。

なんだか、利用されてる感はあるけど、彼女が特に気にしてないくらいいか…。

「カホちゃんどころか、私達もあんまり好かれてないもんね。さつきもなんか変なヒソヒソ声聞こえたし…」

あおいちゃんは敢えて大きな声でそう言うと、物陰から二人の女性の看護師がでてきて、そそくさと退散していくのが見えた。

免許がない。

スプリミナルである。

たったそれだけでも、それ程の偏見や格差、そして低い信頼度がラック付けされてしまうんだな…。

「テッチャンも注意しときなさいね。あらぬ噂かけられるから」

「了解…ちよつと怖いけど…」

苦笑を浮かべて彼女に返答する。

やはり、まだまだスプリミナルが罪人であることへの差別とか、特殊な能力があるが故に迫害されるのはザラにあることなんだな。

まあ、この苦しみを消そうとするのは、罪人としてはおこがましすぎるかもだけど…。

それでも、言葉や態度で傷つけられるのはちよつと嫌だな…。

「おお、深山先生！お疲れ様です」

「お疲れさまです」

そんな中、たまたま通りすがった白髪の男性医師は歌穂ちゃんを見てお辞儀をし、その当人はラフに手を振って返した。

「今の、私に良くしてくれるおじいちゃん先生なの。優しく教えてくれるから好きのよね」

廊下を歩くまま、ニコリと微笑んで僕らに彼を紹介してくれた。

彼女がさつきまで陰口を言われていたとは思えないな…。

僕には”注意しとけ”なんて言ってたが、彼女には何だかんだで交流してくれる人はいるようだから、なんか少しほつとした。

もしも自分にもそう言う人がいたら、気が楽なんだろうな…。

「あ、ここが病室だよ」

ようやく目的の場所についた僕は、部屋の引き戸を開けた。

ガラガラ

「アヤ、来たよ」

相変わらず、耳で感じれる返事はない。

午前中に看護師さんが世話をしてくれたようで、今日はカーテンが開いていた。

相変わらず、日光に照る白い肌が美しい。

「この子がアヤノちゃんなんだあ…」

あおいちゃんがいの一番に妹に駆け寄り、可愛いなんて呟きながら、アヤの顔を眺めていた。

いつもオカン気質でしつかりしてるけど、こう言うところは子供らしいな…。

「アヤちゃん…」

次に歌穂ちゃんが近づき、アヤの顔を見る。

彼女の顔に浮かんでいたのは、改めて大切な人間が植物状態になっていることを実感、そして現実へ失望しているという感情…。

僕が初めて被害に遇った妹を見たときと全く同じだ。

大切な家族が死の縁に立たされた時の、心臓が水を被ったように一気に冷やされる感覚…。

「アヤ、今日は珍しく人が沢山来てくれたね…よかったね…」

そんな嫌な感覚を少しでも緩和させようと、僕はアヤの頭をそっと撫でる。

もしも彼女が起きていたら、エへへなんて照れながら、少しは笑ってくれただろうか…。

「アヤちゃん…友達とかいないの？」

ふと、しゃがみながらアヤの顔を眺めていたあおいちゃんが聞く。

「ああ…ちよつと…色々あつて…」

アヤに友達はいない…。

いや…いなくなったと言うのが…早いのかもしれないな…。

「大きくなっただんだね…こんな可愛く綺麗に成長して…」

「でしよう？アヤは…いつでも可愛いくて、優しいんだよ……」

妹を眺める歌穂ちゃんに自慢するように言葉を返す。

シスコンとかそう言う訳じゃないけど、僕にとつて、アヤはずっと可愛くて、家族としてかけがえのない存在。

自分がどれだけ泥を被ろうが、どんなことを言われようが、妹の笑顔だけは守らないといけないんだ。

例え…植物状態であろうと…。

「…あのさ、テツヤくん」

ふと、あおいちゃんが口を開く。

「なに？」

「私さ、アヤちゃんと友達になりたいんだけど…良いかな？」

アンニユイな笑顔を向けながら、彼女は僕に問う。

「って言っても…私も友達なんてユイちゃんとフミカちゃんくらいしかいないけど…」。友達がいないって聞いたら…なんか、放つとけなくてさ」

少し照れ恥ずかしそうに伝う彼女。

あおいちゃんのオカン気質は、こう言うところでも働いているのかもしれない。

そう言うところが、彼女が愛される理由なのだろう。

例えこれが情けの物であっても、アヤの友達になつてくれるなら：それも悪くないのかもしれないな…。

「…多分、大丈夫だと思う。アヤ…そんなに人間嫌いじゃないからさ…」

「そんなに…つて？」

いけない、つい口を滑らせてしまった…。

「まあ…それもまた色々と言うか…」

「テツチャン」

適当にはぐらかそうとしたのを見抜かれたかのように、歌穂ちゃんが割り込む。

「ちよつとだけ…聞かせてもらっちゃダメかな…？私達が別れた後の事…」

悪気を感じているような彼女は、膝の上で指を組みながら僕に聞いた。

「なんとなく…気になるの。アヤちゃんつて、小学生の頃から笑顔満点で、誰とも明るく接してくれたじゃない？そんなアヤちゃんに友達がいらないなんて…やっぱりおかしいと思つて…」

やっぱり、探偵組織の先輩にとっては、こう言うのはお見通しつてわけか…。

「こんな聞いてちやつてしつこいかもしれない…でも、私はテツチャンもアヤちゃんも大好き。だからこそ、ここまでに通つてきた事を聞きたいの。どんな事情であっても、私は絶対に軽蔑とかもしないから」

歌穂ちゃんは真つ直ぐな目を向けているが、正直答えたくはないのが本音だ…。

この記憶は、アヤにとって人生の最大の汚点で、僕にとつても、たらればを繰り返してしまふほどに心が締め付けられるような苦しい

思い出だ。

だから…誰であつても、あまり話したくはなかった…。

「あんまり…詳しくは話せないけど…。」

けれど…これ以上隠した所で、歌穂ちゃんに心配させるかもしれない。

そんな結果になつたりするのも…僕は正直嫌だった。

折角、久方ぶりに友達が来てくれたんだから…少しでも話してあげた方が、二人に悩みや心配を作らずに帰せると思う…。

だからごめん、アヤ。

この二人にだけは…あの日の事を伝えさせてくれ。

「中学の頃…いじめられてたんだ。アヤ」

この一言で、言葉を失わない人を見たことは、今のところいない。

二人もそのありふれた悲痛な一言に、目を見開いていた…。

「発端は大きな意見のすれ違いからだっただけだ…。アヤが反発して、それを相手は悪くとってしまった。そこから、学校全体がアヤに牙を剥いた。幸いアザとかは残ってないけど…顔を水に浸けられたりとか…殴られたりとか…後は…。」

廊下に風が通り、カーテンがふわりと靡く。

自分の事ではないことを話すだけなのに、胸がギリギリと締め付けられる感覚がする…。

「殴られなくても、心に傷はどんどん増えていく…。そういう…なんと云うか…心が辛い目に遭い続けても…アヤはなんとか笑顔をやめなかった。けれど…あるときにそれが爆発して…そのまま不登校になつたんだよね…。」

日が影を作り始め、僕は僕の妹の暗がりやを、怖々と話す。

それを聞く彼女らは、瞳に悲観を浮かべながら、口を潜めている。「でも、僕は…不登校っていう選択であつてもよかつたと思つてる。そもそも単なるワガママって訳じゃないし、いじめから離れたことでアヤにも夢ができたし、やりたいこともできた…行かなかつたからこそ楽しかったことも…熱くなれたこともあつたらしいし…。」

あの日と同じように、大空が青く染まっている。

僕らの時間が止まったあの日のように…。

「本当に…これからつて時だった…。がんばるぞつて時だった…。  
なのに…あの光のせいだ…」

いくら歯を食い縛つて悔やんでも、拳を握つて怒りを消化しようとしても、アヤが今すぐに戻つてきてくれるはずなんかない。

あの光が憎い…。

彼女をここまでしたあの事件が憎い。

なんで変わつてやれないんだと後悔しかできない僕が憎い。

その憎いという感情を、彼女らに明かしてしまつた事すらも、僕は憎く感じ、負い目を感じ始めていた。

「ごめん…悲しい話しちやつたね…。この事は…三人だけの内緒で…」

まだ全ては語り終えていないけれど、半強制的に話を終える。

ギョツ…

その途端、急に歌穂ちゃんが僕に抱きついてきた。

「カホ…ちゃん…?」

「今まで…辛かつたんだね…ずっと…辛かつたんだよね…」

柔らかい感触の中で響く優しい鼓動と、子供の頃にずっと聞いてきた涙声、僕の耳に浸り始める。

「ごめん…私も…居てあげればよかつたんだ…。両親が居なくなつてから…私もずっと塞ぎこんでばつたかだつた…。なんで…なんでテツチャンやアヤちゃんと会わなかつたのかつて…。今、まさに強く後悔してる…」

「そんな…カホちゃんのせいじゃ…」

途端、歌穂ちゃんは僕の肩を掴むと、湿っぽい瞳のまま、強く熱い視線を僕に向ける。

「スプリミナルになつてから、発光事件で植物状態になつてから意識を取り戻した人、何人もみてきた。だから大丈夫…きつと良くなる！絶対に目覚めさせる！」

その言葉が真実かどうかはわからないが、彼女の笑顔には確実に、硬い決意が乗つかつていた。



その時の彼女は、僕らとの失った時間を必死に取り繕おうとしているのかもしれないし、ただ単純に、友達を守りたいって言う思いだけでも考えられる。

だが、それでも歌穂ちゃんが、アヤをタスケルト断言してくれた事自体、僕にとっては嬉しいことだった…。

「私も、アヤノちゃんの事ちゃんと待ってる。きっと、起きてくれるよ」

あおいちゃんが僕の隣に腰かける。

「それに、折角お友達になったんだから、ちゃんとお互いに目を見て挨拶できるようにしないとね」

ニツカリ、元気に愛らしく笑うその姿に癒されつつ、出会ってたった数分の植物状態の女の子を慕ってくれる彼女が、本当にありがたかった。

思えば、これがあおいちゃんなりのいじめという過去を持った子への慰めの一つだったのかもしれない…。

「そうね。私も、アヤちゃんと二人で思い出話したいものね」

眠る妹の頭を撫でる歌穂ちゃん。

「まだまだ長いかもしれないけど、私たちもずっと待ってるから。アヤちゃんが、ちゃんと目を覚まして、私たちにまた太陽みたいな笑顔を見せてくれるのを」

彼女は太陽と対照的、満月のように静かに綺麗な笑みを浮かべた。

「二人とも…ありがとう…」

僕は湿っぽく笑顔を振り撒いた。

大人になってから、やけに涙脆くて仕方がない…。

思えば大人になってからこれまで、助けてくれる人なんか一人もいなかった。

仕事なんて、みんな目の前の事で精一杯だし、普通に家にいるだけで小言を言われれば、ただ歩いているだけでも、なにか笑われているような気がしてならなかった。

けれど、今は少なくとも、妹への理解者が増えてくれた事が、なに

よりもありがたかった…。

アヤ、良かったな。

お前に出来た友達は、二人とも本当にいい人だよ。

「そうだ。カホ先生とテツヤくん兄妹の昔のお話、もつと聞きたい！」  
ふと、あおいちゃんが身を乗り出して聞いた。

「ええ〜？私、そんな面白い話ないわよ〜？」

「…あ、でも学芸会の時とか覚えてない？2年生の頃の…。」



「くっそ暇」

感動シーンで心を熱くしてたのに、突然シーン変わって冷めた？

残念、水原でした。

なんて、海外のクソ無責任ヒーローみたいな洒落は置いておくとして…。

正直、暇なものには変わらない。

カウンター前の適当な椅子に腰かけながら、頬杖をつけて景色を眺める始末だ。

あおい達が出かけてから、僕はこの客の全く来ない店の中で、如何にも暁を覚えなさそうなポカポカ陽気に、暇をもて余していた。

今日ほど平日だし、昼休みに使うとしても、商店街の方いけばここより安い惣菜買えるし、最近近くにレストランとかもできた物だから、こんな昼近い時間に客が来るわけがないんだよな…。

それに、ライバル店もこの世に沢山あるんだから、こんな素人が経営してる土鳩どぼとみみたいな店には、客が皆無の日だってたまにはある。

正直、こんなに人が来ないなら、占いをやりに外に出るか、昨日襲いかかってきた二人のヴィーガレンツ幹部に引導を明かすために、鍛練でもしたいものだ。

悠樹くんから聞けば、高坂沙羅まで現れたらしいじゃないか。

人間至上主義のヴィーガレンツも、リーゼン至上主義のミラーマフィアも、また少しずつ少しずつ、彼らの理想とした世界を作るため

に、この国を牛耳ろうと爪を研いでいる…。

「クソが…」

極めてうざったらしい。

自分のネタヲ面白いと勘違いしてふんぞり返って偉そうにしてる芸人よりもウザったらしい。

人間だろうがリージェンだろうが、どっちも屑な奴は屑なのに、奴らはそれを一向に知ろうとしない。

ミラーマフィアも同じだ。

人間を仲間にするにはあるが、それはあくまでも至上主義思想のみの場合だけだから、こいつらも対局を知ろうとしてない。

スプリミナルも、そろそろ気を引き締めないといけない気がする。

……まあとは言え、僕らがあいつらより弱い訳じゃないし、結構役に立つ特異を持った新人も入ってきたし、まだ少しは大丈夫なのかな。

「にしても……まーじで暇なんだけど……。がんばって文字数稼いでも、客が来やしない。暇すぎて別の小説サイトで上がってるスゲー一次創作読みたくなる位に退屈だ……」

こつもつまらない時間が続くなら、今すぐこの深緑のエプロンを脱ぎ捨てて、外へ飛び出したくなる。

まあ、そんなことしたらあおいだけじゃなくて叶くんにも、どやされそうだから否が応でも今日はサボれないけど。

やる気が起きないときに無理に仕事するのは良くと思うんだが、そう言うのは通じんだらうな。

「まあ、しゃーない……。折角、店番頼まれたんだから、あおいが帰ってくるまで……」

立ち上がり、やることは一つ……っ！

「大人しく太宰でも読むか。あ、でも芥川も読めてなかったな」

サボり用の小説を、近くの棚から持ってくるのだな。

外でサボるのが駄目なら、店内で適度にサボるが一番だ。

今日はなにを読もうかねえ……。

カランコロン……。

……まじか、客来た。

簡単にはサボれないってことかよ。

「いらつしやいまあ……」

ビジネス笑顔を浮かべて振り向いた途端、その笑みは一気に失せた。

「ああ、なんだ警察の人か」

一応お得意さんの斐川が、始堂を連れてやってきたのだ。

景気良く挨拶しようとして損した。

「なんだ、つて……お客ですよ私たちは……」

「はいはい。今日はなに？店長不在だから、ブルーアイは準備中だよ」  
カウンターに凭れかかりながら聞くと、始堂が少し落ち込んだのが見えた。

「なんだあ……今日コーヒー無しっすかあ……。なんか軽食ないっすか？」

わがままだなお前……。

まあ、カフェだから当たり前だが。

「軽食ねえ……。料理もあんま出来ないしな……」

自分が飯なんて作っても美味しい物なんてできない。

簡単に肉を焼くとか炒めるとかはできるけど、あおいと比べたら月とすっぽんの差がある。

でも、一応客なんだから、なにか出してやらないと信用問題に関わるしな。

「あつ、あおいが今朝作ってたカレー位ならあるよ」

「おっ！いつものカレーはあるんすね！じゃ、それ二つ！」

始堂の顔がパツと明るくなり、二人は近くの席に座った。

彼の笑顔はうざったくないが、警察に奉仕するのは好きじゃない。

「はいよ……」

まあ、仕事だからやるけどさ。

厨房の方に移動し、カレー用皿を取り出し、白米を盛り付ける。

それで、後はもう出来合いのカレーをを盛り付けるだけだから簡単だな。

何気に、今日の客が基本カレーを頼む警察二人だけで助かったし、なによりあおいがカレーだけでも置いてくれていてよかった…。

これで、なんちゃってインフルエンサーが来て、映える飯作れとか言われてたら、そいつのミノに肘を入れてやるところだったな…。

「はいお待ち」

なんて物騒なことを考えつつ、僕は警察二人の机にカレーを置いた。

「ありがとうございます」

斐川がクールに礼を言うと、先陣をきって始堂がカレーを頼張る。

「うん！美味いっすね！やっぱ！」

それに続いて、斐川も食す。

「ふむ…。確かに…なんかいつもよりもうまく感じる」

そりやそうだろう。

あおいが作ったものが不味かったなんてこと、生きてこの方一度もないんだからな。

それとついでに、料理上手の悠樹くんがいるもんだから、さらに磨きがかかる。

料理できないやつでもわかる簡単な掛け算だな。

「そうか。それ食ったら帰りな」

「あなた、本当に警察嫌いですね…」

塩対応に苦い顔をする斐川と、それを無視してカレーに夢中の始堂。

僕は警察嫌い…というより、警察が憎いだけだ。

こつちは長い間あんたらに追われてるような生活してたんだからな…。

なんて言ったら、まためんどくさくなりそうだから、適当にフンとそっぽを向いておいた。

「はあ…。まあ、それは良いとして。今日はランチに来ただけではないんですよ」

斐川は物憂げにそう言いながら、懐から資料のつまったフラットファイルを取り出し、僕に手渡した。

「知ってますか？或マスの運用しているカジノのこと…」

「は？なにそれ…聞いてないんだけど…」

首をかしげると、カレーを食い終えて満足気味の始堂が、改めて説明を続ける。

「現在、調査中ではありませんが、ミラーマフィア或マスが、バラードイアCB地区にて、違法カジノを運営していることがわかったんす。まだ細かい特定は出来てないんですが…間もなく潜入捜査の許可が下りるかもしれないとのことなんツス」

彼は説明を終えると、紙ナプキンを手にとって口を拭いた。

ミラーマフィア、或マス。

最近、僕らも追い始めているミラーマフィアの一角の一つ。

基本的に人口と特性持ちが多い虫型のリージェンが多く集まっており、普通警察が立ち向かおうとすれば、ほぼ全員の警官が命を落とすかもしれない危険な組織だ…。

階級は下級<sup>テッラ</sup>だが、その中でも団員の数に絶大な自信を持っており、信者の数がスプリミナルよりも多いヴィーガレンツでさえも、少し距離を置く程。

しかも、人が多いが故に小銭稼ぎも上手いから、下級<sup>テッラ</sup>の中でも最高の地位を持っているらしい…。

素人が手を出せば生きては帰れないような組織だろうが、それを粛清して均衡を保つのがスプリミナル。

どんな組織が来ようと、世界のバランスを保つために、僕らは血を流さなければならぬ。

……って、郷仲が言ってたな。

「なるほど……ついに尻尾の毛くらいは掴めたわけね…」

ファイルを開きながら応える。

何故こんな表現をするかと言うと、マフィアの稼ぎ場が見つかったところで、その親玉をつかまえられるわけではないからだ。

まあ、逆に言えば稼ぎ場を潰せば、少々の痛みにはなる。

だから”尻尾の毛”と言うことだ。

「近々、スプリミナルに捜査を頼むかもしれません。そのつもりでお

願いますと、郷仲社長にお伝えください」

「りょかい…」

なんか、また近い内に一悶着起きるって予告された感じ…。告知だけしといて自分達はまたランチに向かう。

この無責任さが気に入らん。

まるで経験無いくせに重役になった七光りみたいだな。

「後、おかわりくださいー」

それで、始堂オマエはまだ食うんかい。

「へいへい…」

まあ、客だし金になるから別に良いけど…。

改めてカレーを盛り付けて（今度は少し多めに）、この食欲旺盛な客に渡した。

さて：彼らが飯を食ってる最中、ファイルを改めてよく見てみようか。

そこに書かれているのは、大まかな目撃情報であったり、マフィア経営と思わしき場所のマーキング、推定される規模や、実際にその店に行ったと言う者達への聞き込み情報など…。

捜査記録には、必ず誰が捜査をしたかが書かれているが、よく見たらスプリミナル情報捜査員の名前も複数ある。

あらゆる情報を合算して、ようやく毛をつかんだ程度となると…：まだまだ或マス確保には及ばないと言うことだな…。

スプリミナル独自の特殊捜査の方も、苦戦してるって聞いたしな。

だが、警察的にはもう目星はつけているから、今日フエイバリットヒコに来たんだろう。

情報確認を終えてファイルを閉じると、僕はSHOUK（今着てる服のブランドのこと）のショップで貰ったコインを取りだし、それを指でピンと跳ね飛ばして、手の甲で受け止めた。

「裏か…」

所謂、コイントスによる簡単な占いだ。

僕の我流占いの場合は、さらにもう一度トスをする。

「それで表と…：やっぱコインはハッキリしてるな…」

まあ、最終的には悪い結果にはならなそうだ。

またタロットやらでも明確に調べてみるが…次回の或マス捜査は、  
一抹の波乱は起きそうだな…。

まあ、死なずに頑張れば良いだけか。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさん（僕が作った訳じゃないけど）」



「それで？その後どうなったの!？」

「その後はねえ…そのおじいさんが…」

ピコン♪

ふと、歌穂ちゃんのスマホにSNS通知が届いた所で僕らは、もう  
景色が夕方になっていていることに気づいた。

「あつ、ついつい話し込んでしまったわね。今日はこれでおしまい」

「えー…なんか残念…。借り物競争のお題で三丁目のトメ吉爺さんが  
出てからどうなったのか気になったのにい〜」

ブウと口を尖らせるあおいちゃん。

これまで、彼女は僕らの思い出話を目をかが瘦せながら聞いてくれ  
ていて、話しているこっちも楽しかった。

ただ、大人になってから思ったけど、知らない人にとっては結構カ  
オスな実話だよなこれ…。

「また話してあげるわよそれくらい」

「わーいー!」

歌穂ちゃんの言葉に、あおいちゃんは手を上げて喜んだ。

僕らの前には、夕日の光に照らされるアヤの寝顔。

静かに眠る彼女の表情は、なんだか今日は楽しかった、と喜んでい  
るように見えた…。

「久しぶりに話せてよかったよ…。嬉しかった」

僕も改めて感謝を述べると、歌穂ちゃんは僕の額を人差し指でツン



と押した。

「なにこれが最後みたいに言ってるのよ。これからも沢山話せるじゃない」

「……そうだね」

夕景が身を輝かし、にっこりと微笑む彼女。

僕も笑みを返すと、窓の外で電線に止まっていた鳥が、二匹揃って飛んでいく。

離ればなれだった筈の僕らは、何の運命か、また一緒の場所に立つことができた。

今日のこの楽しかった時間が、もう当たり前の日常になった事が、嬉しくて、友達と言う存在の有り難みが、これでもかと感じられた気がする。

この感情を、いつかアヤも味わえると良いな…。

「また来るからね。アヤ」

部屋のカーテンを閉めながら、僕は妹にまた一時の別れを告げる。

「アヤちゃん、またお話しに来るからね」

「私も、またお見舞い来るからね…」

それに続くように、二人も眠る彼女に別れの挨拶を置いていく。

アヤも、またね位は思ってくれていたらしいな。

折角、本当の友達ができたんだから…。

「さ、帰りましょうか」

「うん」

帰り支度を終え、僕らは出口の方へ向かっていく。

と、このままフェイバリットに帰る前に、今一度アヤに別れを言おうと振り向いた。

「ハア……ハア……」

また来るよ、と言おうとしたその時、彼女の呼吸が妙に荒くなっているように感じた…。

「アヤ……?」

ピリリリリッ！ピリリリリッ！

なにかおかしいと思つた瞬間、彼女のとなりに設置された心電図モニターから、けたたましく緊急アラートが鳴り始めた。

「アヤッ！」

異変に気がついた瞬間、僕とあおいちゃんが妹に駆け寄つた。

そんな…さつきまで呼吸も安定してたし…普通に眠っていた筈なのに…。

「急患！急患ですっ！」

僕らがアヤの容態に不安を感じている最中、医療関係者の歌穂ちゃん是比较的落ち着いていた。

病室の扉を開き、たまたま近くにいた看護師を呼び出すと、彼らを含めた数名の看護師が一気に病室に駆け込んできた。

「深山先生！来てらっしゃったんですか!？」

「挨拶は後！患者の容態が変わつた！緊急措置とこの子のカルテを！」

「は…はいっ！」

彼女の指示は鶴の一声となり、全ての看護師がすぐさま行動に移つた。

「アヤ！アヤッ！」

「さわらないで！お医者様にまかせて！」

命の危機に瀕した妹に必死に呼び掛ける僕らを、歌穂ちゃんが引き剥がした。

アヤの息が少しずつあらくなっていく。

医療機器を持つてきた看護師達が処置を始めた。

「先生」

一人の看護師がアヤのカルテを持ってきて、歌穂ちゃんに渡す。

「周期は安定してる…。呼吸や排泄にも異常はないわね…。でもこんな時に急変なんて…。もしや、臓器になにかしらの異常が…？」

カルテを見ながら考察する彼女。

只でさえ看護師さん達の仕事に緊張感が漂っているのに、ブツブツと状況整理を行う歌穂ちゃんの姿が、より恐怖と焦燥を感じさせる

…。

同じ想いなのか、あおいちゃんが僕の服の裾をキュツと握っている。

僕と言えば、目の前の医療関係者達の強い圧に、立ちすくんで見ていることしかできない。

「バイタル戻りません！」

「主治医の先生は!？」

「旧北海道地方からまだ帰ってきていません！」

けたたましく鳴るアラートの中、事態はゆっくりゆっくりと悪い方向に向かっているような気がした…。

もしも、妹が治らなかつたら。

もしも、このまま妹が空に上ってしまったら。

そんな一抹の不安を表すたられればが、呼吸と共に大きく大きくなつていく。

なんで、ここまで気づかなかつたんだ。

なんで、僕はまた気づいてやれなかつたんだ。

なんで…いつも僕のせいだ…。

「テツチャン、落ち着いて」

肩に手を置かれた感触と、歌穂ちゃんの声に我に返った。

「大丈夫だから…」

彼女が浮かべていたその笑顔は、仕事人でありつつも、誰かの緊張を拭うような優しい笑顔だった。

「医療機器の準備をして！緊急特異行使オペの準備をします！」

その笑顔の後に発せられたその言葉に、僕は驚いた。

「え…？でも、カホちゃんの特異って…。」

確かに、私の特異は外傷が中心。だけど、長くここで研究させてもらってたら、この鏡面発光の被害に少なからず有効であることがわかったの。パーセンテージは低いし、目覚めさせることはできないけど。発光事件の被害者を延命させることだけは必ずできる！」

「で…でも、カホちゃん大丈夫なの!?!だって…君は免許を…。」

「この病院だけは特別な。特異行使だけなら、私もオペへの参加を

許されてる」

僕の彼女への心配を、彼女自信が次々に潰していく。

「ですが、それには主治医の許可が！」

しかし、他の看護師からは彼女のオペの制止を要請される。

確かに、本来は免許がないと言うことは、そもそも医療現場に踏み込むこと自体が無理な話だ。

特例や誰かの特殊な許可がなければ、立ち会いが不可能ってことなんて、素人にも分かる。

やはり…責任と言うものからは決して逃れられない…。

「責任は…私が取る！」

だが、歌穂ちゃんはその静止要請に応じなかった。

「この子だけは助けなきやいけないの！何があっても！責任を負われて追い出されたとしても！」

彼女は無免許医として、人間として、看護師達に一切の紛いの無い眼を向ける。

例え、無鉄砲でも、罵倒されるような立場でも、ましてやスプリミナルの人間であろうと、彼女はその責任と戦う覚悟を持ち合わせていたんだ…。

「お願い…オペの準備をしてください…」

全員に頭を下げる深山女医。

その姿に看護師達は顔を見合わせて狼狽えていた。

どれだけ凄い特異点であっても、看護師達がその責任を負うにはさすがに大きすぎる…。

主治医がいなくても勝手に手術室に運びますっ！」  
「……了解……しました。患者を手術室に運びますっ！」

しかし、一人の看護師が勇気をもって声を上げ、ストレッチャーをもってくるために部屋を出た。

彼の行動が、鶴の一声となり他の看護師も、次々にアヤのために手術の準備を始めた。

「ありがとうございます…」

頭を下げたまま、歌穂ちゃんは礼を言うと、一人の女性看護師が、彼女の肩に手を置いて頷き、同義を表した。

「でもカホちゃん…そんなことしたら…君が…」

「テツチャン」

君がここに居れなくなる、と言おうとしたが、歌穂ちゃんはその言葉を遮った。

彼女は頭を上げ、背中を向けたまま話し始める。

「私…卒業式の日に言ったよね。またいつか出会うときは、もう守られてるだけの私じゃなくしたいって…」

彼女の言葉で思い出した。

離ればなれになるその日、彼女が泣きながら、その決意を僕だけに語ってくれた事を…。

「今日がそれ。アヤノちゃんはテツチャンにとって大切な家族。今度は私が守らなきゃ」

そう言っ、振り向いた彼女の顔は、緊張で少し歪んでいるけれど、極めて真剣な顔をしていた…。

「もう、弱くないよ。私」

美しく篤実なその姿と、自信に溢れた言葉に、僕の心から心配という物が突き放された。

「うん…そうだったね…」

もう、彼女は僕が守らないといけない程弱くない。

僕と同じく、この世界の荒波を越え、今では命からがらの僕らを助けてくれた位成長しているのだから…。

「妹をよろしくお願いします」

僕は深くお辞儀をすると、彼女は微かに笑みを浮かべながら、首を縦に振った。

「最善を尽くしますー!」

長く美しい黒髪を結びながら、深山医師は患者を救うためにこの部屋を出ていった。

これより…彼女だけが知る、険しく難儀な戦いが始まるのだ…。

## 9—3 『女医M、友との約束』

この瞬間がいつも緊張する。

エタノールと薬の匂いが自分の弱さを煽り、幼稚園児のスマックのような肌触りがする手術服が、頑張れなんて余計なプレッシャーを送ってくる気がした。

二重になっている手術室の扉を潜って、指紋を認証すると、とたんに微細な霧状の消毒液が吹き出して全身に浴びる。

リージエン社会になってから、未知の疫病から身を守るために、十分に滅菌された手術服のさらに上に消毒液を吹き掛けないといけないようになった。

いちいち面倒には感じるが、医療機関なのだから仕方がない。

まあ、専門知識もない馬鹿な役人が決めたことだろうから、本当に効果があるのかわかんないけど…。

改めてカルテに描かれていたことを思い返す。

悠樹綾乃、19歳。

患者は4年前に事故に遭ってから目覚めることなく、ひたすらに眠っていた。

主治医の先生は彼女を目覚めさせるためにいろんな処置を施してきたが、一度も目覚めたことはないし、かといって病状が悪化したようなことも一切ない。

そのため、今まで彼女に出会わなかったのは、私の特異が必要が無かったからだ。

延命をしたところで、目覚めるわけがないのだから、私が彼女の病室に居たところで意味がなかったのだろう。

「深山先生、お願いします」

でも、今は違う。

何人もの看護師が、私の大好きな人を救うために、私のわがままを聞いてくれた。

私は、また罪を重ねる。

それが、アヤちゃんを救うためなら、一つも惜しくはない…。  
「ふう…」

大きく息を吸い、緊張と共に息を吐く。

大丈夫、もう皮膚の解剖方法はわかっている…。

習ったことは全部頭の中にある。

絶対に失敗しない。

大丈夫だ……。

大きく波打つ心臓を押さえて言い聞かせた。

「これより……」

「少々お待ち下さい」

意を決して執刀を始ようとしたその瞬間、出入り口が開く音が響く。

振り向くと、そこには中年の少し小柄なベテラン医師が、万全の格好で立っていた。

「申し訳ございません。先ほど到着しました」

「ヒメモリ先生！よかった！」

彼の姿を確認した看護師達が次々に安堵の表情を浮かべる。

彼の名は姫森丈。

この患者の主治医であり、日本医師の五本の指にも入るのではないか？とも言われるほどの名医。

本来、彼女についていた主治医は別の人間だったらしいが、4年も植物状態で生きれている身体に興味を持ったらしく、無理を言っアヤちゃんの治療に就くようになったらしい。

笑みを見せることも少なく、性格的には少しサイコな気もしなくはないが、人情に熱く、基本的に人を怒ることもない。

その性格から多くの人間に信頼を寄せられており、なにより彼は私の師匠でもある…。

「看護師の方から、事の成り行きは大体聞いてます。ミヤマ先生、良いですか？」

彼の目を見て、私はすぐさま主の位置から退き、軽く頭を下げた。  
「勝手をして申し訳ありません、ヒメモリ先生…。よろしくお願いし

ます」

彼は何も言わずに優しく頷くと、私と立ち位置を変えた。

彼は私と違い、オペを同行する医師に弱気な部分を見せようともせず、すぐに仕事人の目に変化する。

「これより、ミヤマ女医参加認可、鏡面発光事件被害、回復手術を開始します」

彼の宣言により、ついにオペが開始された。

「先生、L<sub>t</sub>細胞を」

「はい」

L<sub>t</sub>細胞と言うのは、私の中にある欠損修復細胞の正式名称。

姫森先生の指示で、私は予め採取しておいた血液を彼に手渡すと、彼はアヤちゃんの腕に回復薬をそつと注入する。

L<sub>t</sub>細胞は白血球の遊送に似た行動が可能なため、何処に入れても効果は即座に発揮されるため、大概はここで一命を取り留める筈だ。

しかし残念ながら、この悪状況から変化はない…。

「やはり…これだけでは無理ですか……」

と言うことは、彼女が危険な状態に陥った理由は、他にあるということになる。

「切開します。メスを」

「はい」

別の看護師が、姫森先生にメスを手渡すと、彼女の滅菌された白く柔い肌にも、そつとその刃物が突きつけられた。

鏡面発光事件によって身体が植物状態になる原因は、”光を受けた人間の臓器が睡眠状態に入る”というのが、まず根本だ。

あの光の中には、人間の臓器の壁を内側から食い破って破裂させる、非化学物質が混じっている。

植物状態に陥った人間は、穴という穴から入ってきた非化学物質が臓器の内側に付着し、そのままゆっくりゆっくりと内蔵を破壊していった。

それはまるで、核の被害者のように…。



その上、非化学物質は細胞のように身体の養分も吸収して、少しずつ分裂や肥大もする。

その成長段階を食い止めることができるのが、私の特異だ。非化学物質は細菌ではないため、普通の怪我と同様に治すことはできないが、非化学物質の動きだけなら止めることができる。

長い投与を繰り返すことで、患者そのものの中にある免疫細胞に非化学物質を殺してもらい、目覚めさせる。

それが、このケースでの特異の使い方だ。

私を含めた医療関係者の人々は、約4年の長い研究を経て、それら全てを解明した。

しかし、その4年の歳月はあまりにも遅すぎた。

体内に入ってきた非化学物質が少なかったが故に、植物状態から目覚めたというケースもあったが、それはほんの一握り。

あの被害を受けて植物状態になった多くの人間が、帰らぬ人となった。

未だに目覚めていない人間も勿論いるが、全医療機関とその関係組織は”これ以上の混乱や不安を煽る事をしない方がいい”と判断したため、市民には未だにその真実が告げられていない……。

「綺麗なもののね…ほとんどの内蔵が……」

姫森医師の執刀によって開かれたその身体は、病人にしてはとても美しく健康的な物だった。

普通、光によって命を落とした物の臓器は、非化学物質によって灰色に変色させられるのだが、彼女の身体は朱や紅等、素人でも想像できる臓器の色そのものだ。

「しかし…少々危険な状態ではありません。ここを見てください……」

姫森先生の指示通り心臓を見してみる。

「心臓が弱ってきてますね……」

通常、ドクンドクンと波打つ心臓の鼓動が、明らかにゆっくりなのだ。

心臓自体の色も、よく見たら、灰色と赤の斑になりつつある……。

一見、綺麗な内蔵であっても、非化学物質は、心臓にまでその範囲

を広げているということだ。

「彼女は、4年も非化学物質と戦っている…。その負担が、心臓に少しずつ蓄積されていたのかもしれない…」

いつもは優しく冷静な姫森先生だが、言動が少々恐々としている気がする。

ここが彼女の容態に置いて一番の謎だ。

術前に見たカルテでは、悠樹綾乃という人間の臓器はこの4年において内蔵内部の侵食率が0. n%にも達していなかった。

害を被ってから半年よりも早く命を落とすほど、大量の光を浴びていた筈なのにこんなに少ないのはおかしい…。

この状況を少し簡単に説明してみると、彼女の内蔵は”非化学物質が単純にくっついていてだけの状態”のため、一切身体を壊されずに植物状態が保たれているようだ。

言い方を変えれば、彼女は今まさに”身体の中の細胞が長い年月をかけて非化学物質と互角の戦争をしている”という状態になる。

では、何故彼女の身体にL<sub>1</sub>t細胞が効かないのか。

まず一つ考えられるのは、”心臓が傷ついていない”ということ。

私の特異はあくまでも『傷があつた場合』と『体に傷をつける細菌を減らす』と言うのが効能。

顔で例を現すと、ニキビ等の肌を傷つける物に有効で肌も整うが、寿命や加齢によるシミには一つも効かない。

この心臓の弱り方は傷がつけられているわけではなく”疲労、または老化している”と判断され、私の特異は効果を発揮することが出来ないと考えられる。

しかし、それでは変化が一つも現れないのはおかしい。

心臓内にある疲労の原因である非化学物質が少しでも消えてくれれば、そこに休みが生まれ、心臓も一時的に回復してくれる筈だ。

なのに、周期が安定しないと、もう一つ考えられるのは、私の血液内の特殊細胞が心臓に至るまでに無くなってしまふ、ということ。

血液の中に細胞があるとは言っても、非化学物質を完全に削除する

ことはまだできない。

あまりにも物質が多かったり、患者の免疫細胞達が弱まっていれば、心臓までに到達することは困難だ。

ただ、これはあくまでも仮定だし、まだまだ気になるところは沢山あるのだが…。

「先生、どうしますか…?」

考察している間、看護師から次の指示要請が来るが、姫森先生はなにも言わずに私の方を見ていた。

恐らく、私自信が次に何の指示を出すのかを試しているのだろう…。

「一度…心臓に直接血液を送った方がいいのかも知れません…」

私の中での最適解はこれしかなかった。

このまま何もしないで死なしてしまうよりはマシだし、何処に刺しても一緒なら、やれることはこれしかないと思ったからだ。

しかし、看護師は私に驚きの表情を向けている。

「でも、どうやって…?!この弱りきった心臓を一度切開いたり針を突き刺したりするのは、あまりにも危険ですよ!」

彼の言うとおり、確かに心臓は極めてデリケートな部分。

ただでさえ非化学物質で弱ってきてるのに、むやみやたらに心臓に針を刺して注入するなんて、さすがに無茶な考えか…。

しかし、かといって心臓マッサージや電気ショック等の初歩的な処置も、非化学物質の前には無意味。

じゃあ、どうすれば良い?

ありったけのL<sub>T</sub>細胞を彼女に注ぐ?

いっそ心臓を人工物に交換する?

ダメだ、あまりにも時間がかかりすぎるし、第一効果が期待されない。

この子を救う手は、もうないの…?

「深山先生」

命を左右する困難な状況の中、私たちの動向を見ていた姫森先生がついに口を開いた…。

「最新医療機器は…使えませんか？」

「最新医療機器…？」

確かに…リージェン社会になってから、便利な医療機器が沢山増えた。

眼球の網膜を簡単に張り替えられる物や、血管の剥離した壁の修復や不純物を取り除ける薬剤、リージェン特有のいびつな内蔵でも代用出来る人工臓器。

心臓治療の最新機器と言えば……。

「……っ！そっか…LCSなら…！」

そうだ、未だに実装場所が少ないから忘れていた。

Life Cure Sniper 116、略称LCS。

臓器の切開や縫合をしなくても良くなる医療器具だ。

リージェンの内蔵は、歪な形であったり、人間よりも強固なものであったりと、人間よりも手術が厄介なものが多いため、執刀する医師も匙を投げたくなるほど難儀な場合もある。

そんな難儀な手術を格段に楽にするために、この機器が作られた。

LCSは主に、心臓によく使われており、人工弁等のパーツを安全に嵌めるための物で、Lt細胞の注入は二次だ。

ただ、これを扱うためには、かなりの技術がないと、臓器の破裂や大量出血で患者を死なせてしまう可能性があるため、LCSを使用するには免許が必要となっている。

楽にするための機械であっても、裏を返せばそれを巧みに操れないと、患者を大きく傷つけてしまうのだ。

幸い、ここら一带の病院を漁っても、この免許を持っているのは、目の前にいる姫森先生だけ。

彼が、彼女の主治医であってよかったと、今、心の底から先生を感謝している…。

「すぐに準備をお願いします！そこから私の血液を注入する…できま  
すか？」

「お任せください」

姫森先生が頷くと、手術室奥の壁に取り付けられた棚から、銀色の

細長いジエラルミンケースが取り出された。

その重々しい箱を開くと、そこから顔を出したのは、銀色の猟銃形状の機器。

それは、医療器具と呼ぶにはあまりにも大きく、命を狩りとるには物騒さが足りない。

戦闘軍人が持っていていそうな形をしているが、これで助けられた生命体は何百人もいる優秀な品であり、姫森先生にとっては鬼に金棒、虎に翼等の言葉が似合うレベルだ…。

「L<sub>t</sub>細胞の準備はできてます」

「逆流防止処置も出来ました」

私たちが報告すると、姫森先生は受け取った回復薬の入ったカートリッジをLCSにセットし、大きく深呼吸をした。

例え、どれだけの凄腕を持っていても、免許を要するような心臓の手術には緊張はするようだ…。

「いきます…。カミキさん！支えて！」

彼の合図で医療機器が持ち上げられ、指名された看護師がそれを支えた。

心臓に銃口が直接当てられると、そのままそれが水溜まりのような波紋を出しながら、ズブズブと臓器内に入る。

「血液注入します！」

合図と共に引き金が引かれると、カートリッジから血液が患者の体内へと流れ出した。

これがLCSの醍醐味。

LCSは微量の空間移動能力を持つ異能者の異能と私の特異が合わさって完成された物。

空間移動異能で機器を体内に挿入し、その際に傷ついた体内を微量の回復特異で修復するのが特徴。

しかし、異能と特異を同時にコントロールさせるための素材（アーツとほぼ同等）や、L<sub>t</sub>細胞血液を安全に体内に運ぶための医療部品等の諸々のテクノロジーが必要となってしまうため、このように巨大な機材になってしまったのだとか。

一応、小型化するための改良は進められているらしいが、それでもLCSの照準が狂うと、ここに入っている二つの能力がぶつかり合つて暴走し、LCSに入ってる量の回復薬では治療出来ない程、身体を大きく傷つけてしまうことになるため、免許は絶対に必要だと提言されている。

ちなみに、一般人にもわかるように言えば、河豚ふぐを捌くのと同じ。それ程にデリケートかつ難しいと言うことだ…。

「血液注入完了しました!!ゆっくり抜きます!」

血液が全て注入された頃、先生の指示で、LCSが一気に引き抜かれた。

パツと見、心臓に傷は付いていない…。

「どうだ…。」

ここでLCSを当てた場所が心臓の正しい位置でなかったり、回復薬が適切な量入っていないかったりすれば、患者の身体は大変なことになる。

例に上げれば、体内の穴という穴から血が吹き出したり、心臓の壁が避けて大出血を起こしたりする可能性も…。

それほどこの医療機器はデリケート且つ、この中に搭載された異形能力が強力であるということだ。

「……」

私たちは息を飲み、しばらく観察をしたが、心臓からは未だ傷が開いているようには見えない……。

「大丈夫…：な、ようです」

「すぐさま縫合!」

「はいっ!」

医師達が主治医の指示に動いた頃、私は一度肩を撫で下ろせた。

よかった…：一応、効果はあったようだ。

バイタルも安定してるし、とりあえずは一命を取り留めたようだ。

ちなみに、何故、縫合で回復薬を使わないのか?と思う人もいるだろう。

逆に聞くけど、そもそも傷とはなんだと思う?

皮膚を裂かれている状態か？値が吹き出している状態か？

それは勿論合っているだろうが、私の特異自体はそれを否定している。

この能力が示す傷とは、体内に細菌が入って、始めて『傷』と言うらしい。

そのため、完全に滅菌されているこの空間に置いて、細菌が体内に入っていない限り、私の特異を打ち込んでも無意味。

だからこそ縫合が必要であり、医者と言う職業が未だに求められ続けているのだ…。

「縫合、完了しました」

先生の言葉と共に、ようやくこの緊張しかない部屋の中で、医師達は全員息を付けた。

手術は一応、成功と…見た。

「これでまたしばらく様子を見ます。しかし…」

主治医が言いたいことはもうわかつている。

「彼女の寿命が…危ういんですね」

私の言葉に、姫森先生は頷いた。

私の特異は延命処置はできるが、寿命を伸ばすことはできない。

心臓があそこまで疲労していたら、普通死んでもおかしくはない状態だったのを、私達が無理やり延命処置をさせたのだから、身体自体に大きな負担が入っていない筈がない。

このまま生きれても…恐らく、余命半年か…それ以下は覚悟した方がいい。

この半年までに、この非化学物質の正体がわかれば処置は出きるし、恐らくそれさえ消えてしまえば、彼女は半年以上楽に生きられる元気な身体になれるのだが…。

「しかし、これで非化学物質が体内に長く定着していることで、心臓を疲労させる作用もあると言うことが解りました。彼女はどうなるかは予想もできませんが、彼女以外の、まだ目覚めていない人々を目覚めさせるために、LCSとあなたの血液は、これからも必要となるのかもしれないですね」

「はい…」

彼の言葉を心身に受け止めた。

先生のお陰でなんとか事なきを得たが、目の前で眠るこの子の戦いは、まだ始まったばかりだ。



ようやく手術が終わった…。

これでようやく肩の荷を下ろせるのだが、手術室から出るのも、また緊張する案件だ。

「カホチャンー！」

何故なら、患者の無事を必死に祈っている家族の前に立たなければならぬから。

家族が不安な顔で成功という文字を懇願しているのが、私にとって結構なプレッシャーになる。

もし失敗だったらどうするのかって考えてしまい、正直、私の口から結果を言うのが億劫に似た思いが湧き出る。

「手術成功」

そんな感情を噛み殺し、駆け寄ってきた彼を不安にさせないように、笑顔とピースを添えて応えた。

ほとんど姫森先生のお陰ではあるけど、アヤちゃんが無事に帰ってこれて本当によかった…。

「それで…：…うおっ！」

今後の話をしようとした時、突然テツチャンが私に抱きついてきた。

「よかった…：…よかった…：…」

彼の表情は、自分の胸で隠れて見えないが、彼の涙声と感謝の声色でその思いはしっかりと伝わった。

結果を告げるのは好きはなれないが、この瞬間のために医者をやっているようなものではあるな…。

「まだ余談は許さないけど。きつと良くなるから…：安心して…：…」



未だギュッと抱き締め続ける彼の頭を撫でながら、わたしは少しの嘘をついた。

このまま行けば半年までに死ぬなんて、自分の口からは言えないし、彼をまた不安の海に突き落とすような事もしたくない。

彼はまだ、私にとっては光でなければならぬのだ…。

「ミヤマ先生」

そんな中、手術室から、LCSの片付けを終えた姫森先生が出てきた。

それに気づいた私は、一度テツチャンを引き剥がし、彼に頭を下げる。

「ヒメモリ先生、申し訳ございませんでした。患者の危篤に耐えきれず、無免許医である上で勝手にしてしまいました。無免許医が執刀するのは違法と言うことは承知の上でしたが、それでも彼女は救わなければならぬ命でした。勝手に判断をしたこと、極めて危険な行いをしたこと、全て自覚しております。どんな処罰を受けることになっても構いません。どうぞ、私に処罰を」

謝罪する私を見て、スプリミナルの二人はまごついていた。

本当は離れたくはないが、元々の規約を破ったことには違いない。

それに、私がいなくてもここには先生がいるし、スプリミナルにいる限り、テツチャンの口からアヤちゃんの事を聞ける。

全ての病院に出入り禁止になったとしても、私はこの行動に後悔はしていない…。

「あなたが責任を取る必要はありません」

しかし、先生からの返答は、全く予想していなかった言葉だった…。

「確かに、あなたが本当に執刀したのであれば、それは違法となりますし、あなたの行動は然るべきだ。しかし、実際に執刀したのは私。それは違法でしょうか？」

「あつ……」

確かに、オペを指示したのは私だけど、結果的に執刀したのは姫森先生だった。

「ユウキ アヤノさんは、この病院に置いて発光事件被害者、最後の一

人……。多くの人が亡くなったが、逆に目覚めた人もいた……。どちらの囲いに彼女をいれるかと聞かれれば、私は必ず後者を選びます。だから、あれは私が執刀するための準備を整えてくれただけ」  
そう言つて、彼は私の肩に手を置く。

「……と、警視庁の方にも許可を入れさせていただきましたよ」

ふつと頭を上げると、普段、同職の人間にあまり笑みを見せない姫森先生が、私に優しい笑みを見せてくれていた。

それは彼から、真に信頼を得た証……。

「ありがとうございます……先生……」

自分のために、ここまでしてくれていた先生の行動に、感謝の意味でまた頭を下げた。

「命をすくうためです。これ位はさせてください。絶体に……この子を生かしてあげましょうね……」

「わかっております……」

「あと、まだ目覚めていない人もいますから、また出張も頼むことになります。能力と関係なく、私の仕事を助けてくれるのは、あなたしかないですからね」

「はい……」

頭が上がらない。

姫森先生の寛大な心と、優れた判断力に、圧倒されているから。

私は男という生物を基本的に信用していない。

今まで出会ってきた人間の多くが、私の身体目当てしかいなかったからだ。

けれど、こんなにも私を人間として必要としてくれる人間に出会えたのは、同じ職場の人間を差し引いて初めてだ。

年甲斐もなく、今にも泣きそうになる。

誰かに信頼されることが、こんなにも嬉しくなる事だなんて思つてもみなかった……。

「おっと……。すみません、今日は娘と久方ぶりに食事ですので……これで」

そう言うと、姫森先生は私達から背を向けた歩きだす。

「ありがとうございます！」

小さくも大きなその背中に向けて、私は大声で感謝を述べた。

医者という存在は、私たちが思っているよりも偉大だ。

人とリージエン、それぞれの悪意が蔓延る世界だが、姫森先生だけはどうか、この優れた技術と判断力を無くさないでいて欲しい…。

トンッ

「さすが、スプリミナルの頼れるお医者さんだね♪」

ふと、あおいちゃんが私の足にお尻をぶつけながら誉めてくれた。

「そう？ 私は仕事しただけだね」

いつも通りすかして見せると、彼女はニツと微笑む。

「でも、カホ先生のそういうところ、私は好きだよ」

「ありがと」

彼女は、いつもまつすぐに感情をぶつけてくれるから、接するこつちもなんだか清々しくなれる。

スプリミナルに入ってから、この子は、ちよつとした癒しでもあるな。

まあ、水原との関係もちよつと尊いから好きだし…。

「カホチャン」

なんていつもの悪いNL妄想癖が出た所で、テツチャンが私に声をかけてきた。

「妹を助けてくれて、本当にありが…」

彼が言葉を言い終える前に、私はその口を手でそつと塞いだ。

「感謝はまだ早い。ちゃんとアヤちゃんが目覚めてからね」

私がそう微笑むと、彼は私に真剣な目を見せながら、こくりと頷いた。

またすかして見せた私だが、彼に感謝をされたくないというのが本音かもしれない。

嘘を着いた代償として、彼からの眩しい信頼を裏切つてはいけけない訳だし、なによりアヤちゃんの生死はこれからのだから、ここで彼の感謝を聞くのは早すぎる。

彼からのありがとを聞くのは、彼女が目覚めてから。

人知れず、私は心の中で、そう決意した…。



あの後、私は術後の後片付けやカルテとレポートの作成等の作業があつた為、二人を先にスプリミナル本社へと帰した。

無免許の私にとって、そういう面倒事が沢山あつて大変ではあるが、自分は普通の看護師よりも数段も遅れているのだから仕方ない。

術後の疲労を踏みしめ、ようやく全ての作業が終わつて外に出た頃には、真つ黒い空に乙女座が輝いていた。

「ふう…」

病院を出て一つ息を吐くと、街路樹の葉が夜に照らされ、患者の眠る病室から、そつと明かりが消えた。

日陰者の私にとって、陽の側に出た時はとても緊張するのだが、今日ほどに強い緊張をした日はなかった。

大好きな人間の妹と再会したその日に、その子を手術するだなんて…。

正直、メスを投げて逃げ出してしまいたかった。

流れていった星のように、ふつと消え去つてしまいたかった。

けれど、逃げて助かる命があるなら、医者なんて職業の存在意義がない。

親友を助けられるようになりたいって、私は彼に初めて出会つてから、ずつとずつと思つていたんだ。

その信念から逃げたら、まさに卑怯者じゃないか…。

「今日の選択は正しかったわよね…」

未だ、自信が持てない事を吐露しながら、私は自販機で缶コーヒーを買い、その場で飲んだ。

不味くないが、やっぱりフェイバリット職場の方が美味しい。

できる事ならば、私がどんな選択をしても、結果的にはまだマシな道を選べるようになりたい物だ。

それが、あと半年か、それよりも短い間に来る、大切な患者の危機

のために。

その運命の瞬間までには、全てが解決できるように……。

「がんばらなきゃな」

缶の隙間から覗くコーヒーを眺めながら呟いた。

スプリミナルとして、藪医者として、友達として。

やると決めたことから逃げないように。

なにより、アヤちゃんを救い出すために、頑張らないといけないのだ……。

「随分、人助けが好きなんですね。結婚詐欺師で人殺しの癖に」

ふと、突然の声に顔を上げると、いつの間にか外灯の下に立っていた純人類を見つけた。

「……あんた誰？」

首をかしげた途端、スーツを着た純人類の女が、外灯からこちらへ歩いてくる。

「ミラーファイア、或マスが一人。カリユウ」

そう名乗る女は、ギリギリ剣がとどかない位の場所で止まり、恐らくハイドニウムが込められているであろう拳銃を構えた。

なるほど……上の命令で、わたしを殺しに来たわけか。

「人間の癖に、ミラーファイアに荷担するのね。他種迫害主義のヴィーガレンツとは違うわ」

「黙れ。その人間を守るお前を……私は殺されなきゃならない。我々、或マスのために」

洒落は通じなさそうだ。

「面白いわね。私が人殺しってのは、なんでわかったの？」

「スプリミナルのあなただからこそ分かるはずです。あの人のことを……」

「なるほど、あいつのせいか……」

あの人……と言われれば、なんとなく目星はつく。

裏切りついでに私の過去まで話しやがって……。

「それで……？そんな物騒なもん向けて、あんたは何をしたいの？」

「殺すだけ。全てはリージエンのために…」

「私を殺してどうなるの？」

「答える義理はない。殺せばすべて無意味になるのだから」

うーわ…威勢よく銃構えてるけど、これ多分、私が嫌いなタイプだ…。

「あわた、話を通じない子なのね…。そんなんじゃモテないわよ？強くもなれないし」

少々、油断させるために私はおどけて見せた。

水原だったら、少女向けアニメに出てくる3〜5話くらいで死ぬ噛ませ幹部キャラみたいだ、なんて言いそうだけど。

「黙れ！」

ダアン！

私のからかいが余程の地雷だったのか、彼女は不意に銃弾を放った。

全く…やっぱりマフィアはヴィーガレンツより嫌いだ。

「トランス肉体換装&amp; a m p ; アーツアンフールド特具武装」

ここまでの間、着弾する0・数秒前。

ネットワークを握って生体認証をすると、私の肉体は換装され、白ラインの入ったトランススーツへと変わった。

そして、それと共にレイピア型に具現化されたアーツで、目の前に接近していた弾丸を、病院とは逆方向に跳ね返した。

「なっ…！」

思わぬ早さに敵が狼狽えている瞬間、私は即座に彼女の背後を取り、首に手を回す。

「病院周辺地ではお静かに……」

グサツ！

「ぐっ！」

耳元で囁いた後に、レイピアの刃を彼女の背中に突き刺した。

「あなたは痛い目見ないと分からない…こんな単身で乗り込んで…私に喧嘩売るなんて…上等ね」

彼女の背中から血液が一筋流れ、上等そうな黒いスーツを赤い血で

濡らした。

「バカな…お前の特異は割れている…っ！たかだか回復術だけで私に  
対抗するなん…っ！」

虚勢を張って反論しようとしたその瞬間、彼女の身体から少しずつ  
力が抜けていくのが腕伝いにわかった。

「あ…あああ…ああっ…」

驚きと、私の特異の真の効果で、もう喉から言葉すらも出ないよう  
だ…。

「浅はかね…。私の特異は血液を媒体として回復するだけじゃないの  
…。その回復させる細胞を作るためには、他者の体内にある生体エネ  
ルギーを吸いとらないといけない。そして、それを吸いとられたもの  
は……」

「ああああああ…あああ…」

少しずつ少しずつ、彼女からシワが目立つようになってきた。

私の特異の真骨頂は『人間から摂取できる特殊な生体エネルギー  
(以降、Lt栄養素)を、万能細胞の栄養素とし、その入った血液であ  
らゆる外傷を治す』と言う物。

勿論、自分の身体からもLt栄養素は生成されるのだが、栄養素の  
数が多ければ多いほど、私のLt細胞は増殖し、多くの人間を助けら  
れる。

そして、Lt栄養素を吸いとられた者は老化したような姿へと変わ  
り、それを吸い尽くせば、一気に骨となり、絶命する。

「まあ…あなたは初回だから、こんくらいで許してあげるわよ」

汚物を捨てるように手を離すと、女は老婆のような姿になって地面  
に倒れた。

「まあ、生体エネルギーは細菌みたいに体温で日々増えていくから、せ  
いぜい数ヶ月位でその外見も治るわ。安心しなさい」

そうは言ってるが、一つも返事がない。

「って…聞こえてないかしらね……」

ちよつと吸いすぎてしまったか…。

まあ、Lt栄養素は時間が立てば回復するから、すぐに立ち上がる

だろう。

ただでさえちよつとナーバスなのに、ミラーマフィアもヴィーガレンツも飽きないものね。

私達を殺したところで、お互いが絶滅するはずがないのに…。

ふと風がそよぎ、長くなった黒髪がひらりと靡いた。

もう帰れと言っているわけか、それとも自分の罪について煽っているのかはわからない。

地面に転がっている彼女を肩で抱えてやり、適当な物陰にそつと置き、世界の言う通りに、帰路を歩み始めた。

「今夜は、月が綺麗ね……」

その衛星を眺めながら、今日、嬉しかった事を思い出す。

「テツチャン……」

正直、もう会えないと思っていた。

金のために身を売って、多くの男を騙し続けた私が会えるわけがない、自分の罪を数えれば何度死んだって再会なんて夢のまた夢なのだと信じていた。

けれど、あの日から凍りついた楽しかった時間は、ようやく解凍されて動き出した。

私はまだ、少しは罪を償えるくらいの猶予を貰えるんだ。

なんて思ってしまうと、こんな世界も悪くないと思える…。

「絶対に守るからね。あなたの大切なもの…」

満月映える、五月になったばかりの夜に私は誓う。

自分はもう弱かった自分とは違う、身売りし続けた私とは違うんだ。

…。そう言い聞かせながら歩く街路は、何故かいつもより明るく感じた…。

To be continue…



今日は少し早めに出勤をした。

なにか特質した理由があったわけではなく、単にあまり寝付けなかったから、出勤したまでだ。

オフィスの中、机に頬杖をつきながら、窓から見える町を眺めてみると、まだもう少し朝靄が晴れていなかったように見えた。

心地が悪いわけではないけれど、晴れ渡った青空をみたいと願う人間にとっては少し不快。

今の僕の心もそれと同じ。

本日は歌穂ちゃんとの再会から数日後。

あの緊急手術の後、主治医の先生曰く『深山女医のお陰でアヤの体調は安定したが、未だに彼女が死の危険に晒されているのは変わりない』とのこと。

歌穂ちゃんの特異でも、あの状態の本質から状況は変えられないのはわかっていたが、実感するとさらに心が痛くなる。

「コーヒーどうぞ」

けれど、これでまた全てが振り出してわけでは無かったりする。

いままでは姫森先生の処置だけしかできなかったけれど、これからは特異点になった歌穂ちゃんもいる。

「武装警察からの書類訂正要請がありましたので、置いておきます」

この窓の外で日の光が強まっていくように、まだまだ僕らにも晴れる機会は余っているんだ。

自分も、まだ絶望するには早すぎるのだ。

「これ、よろしければ。先日、依頼者様から頂いたビワです」

ただ少し引っ掛かるのは、未だに患者であるアヤが、淡々と完治へと進んで行けるのかだ…。

まだ光がないわけじゃないと言っても、手を伸ばして掴むことができず人なんて数少ない。

そもそも、世の中のあらゆるものには確証がないのだから、僕らは未だにもがくしかないんだ。

まだ靄は晴れない。

日差しは未だ輝かない。

雨が降らないのを待つばかり。

「あ、種はこちらのお皿に…」

それでも、僕は歩くしかない。

自分の罪と背後霊にしつこくすり寄られてきても、今はただ歩くしかないのだ。

どうせそれしか残っていない。

いつかこの代償が高くつくときが来るかもしれない。

それがなにより怖いけれど、僕は今を進むしか方法がないんだ…。

「こちら、武装警察からです。報告書を書き直してほしいと…」

「……いや、あんた誰だよ！」

「え？」

「え？じゃなくて！」

さつきから異様にデスクに書類や美味しいもの置いてきたりする人に、ようやくツツコめた。

坊主にならない程度のベリーショートヘアと、少し強面な仏頂面。

身体もガツチリとしており、如何にも戦闘員と言う感じではある。

ただ、こんなに存在感は大きいはずなのに、知らない間にフツと沸いて出てきたのが怖い…。

ガチャン

「あれ？今日はユウキくん早いね」

目の前の彼が何者か怖々と眺めていると、郷仲さんが入ってきた。

今日は社長室の扉ではなく、普通にオフィスの出入り口からのご出社だ。

「お、おはようございます…。サトナカさん、この人は？」

「ああ、セタくんだよ。うちの秘書をしてくれてる。ちなみに自称ね」

「秘書（自称）…」

郷仲さんの紹介を聞き、僕は改めて彼を見てみた。

確かに、服装自由のこの職場であっても、なんかすぐきつちりとしたスーツだし、手にはたくさん資料や手帳などを持っている。

先ほどから、口数も少ないし、秘書と言うには、確かにそんな雰囲気がある。

そう言えば確かに、僕が考え事をしている間にも、秘書らしく淡々と雑務をしていたような…。

テーブルの上にコーヒーとビワと皿がある上に、なんか出社してる時よりも部屋がきれいになってる気もするし、そもそもこの修正を受けた書類の付箋も、恐らく彼だろう。

図体と比べて、秘書としての腕はピカ一のようなのだが、やはり体つきや背丈も含めると、なんとなく秘書と言うよりもSPやボディガードに近い気もする。

まあ、そもそも自称だから、そこは気にしなくても良いか。

「申し遅れました。私、瀬田<sup>セタ</sup> 夢吾<sup>ユウゴ</sup>と申します。前職ではとある企業に勤めておりました。これからよろしくお願い致します」

改めて、瀬田夢吾という秘書は、僕に向けて背筋を伸ばして自己紹介をする。

「よ…よろしく…。ユウキ テツヤです」

彼から無自覚に出る圧のようなものに押され、此方からの挨拶の際、思わず頭を下げてしてしまった。

なんだか、すごく硬苦しい…。

ずっとゆるゆるな人々と行動を共にしてきたから新鮮すぎるんだよな…。

「セタクん、今日のシフトはどうなってる？」

「本日、イツジさんは旧中部<sup>アグアルファ</sup>地方AC地区にて集金。ミヤマさんは旧関東<sup>バラディ</sup>地方GM地区にて、事件被害者の治療。スミウラさんは恐らくズル休み。後は本社勤務となります。ちなみに、アカギさんは本日から復帰となります」

「そっか、ありがとう」

しかもすつごくしつかりしている…。

社長からの問いも、即座に返答する上に、全員の行動もしつかり把

握している。

なんでここまで詳しく報告できるのかはわからないが、彼はきつと、どこかの企業で秘書の勤務経験のある相当なやり手なのだろう。身体差で言えば僕より年上っぽいし…。

「それじゃ、教えてくれたお礼にこれ」

すると、郷仲さんが突然、彼に茶封筒を渡した。

首をかしげる瀬田さんは、今時珍しい紐で閉じられている封筒を迅速かつ丁寧に関き、中に入っていた資料をパラリと見た。

「なるほど…」

彼が書類内容を理解するまで10秒もかからなかった。

瀬田さんは、それをまた丁寧に封筒のなかにしまうと、郷仲さんではなく、此方に目を向けた。

「悠樹さん」

「は、はい？」

「今日の夜、武装警察からの依頼で出動だそうです。大丈夫ですか？」

夜に出勤…？

「え？ど…どう言うことですか？」

ここに夜勤があったなんて聞いていない気がするのだが…。

突然の夜勤指示に驚き、混乱していると、今度は社長が割って入ってきた。

「実はね。最近、武装警察とはあるミラーファイアの一角を追っているんだ。それが下級マフィア最大の組織、或マスさ…」

「或マス…」

聞き馴染みのない名詞を、思わず鸚鵡返おうむがえししてしまった。

そもそも、下級テッラという言葉でさえも、この前初めて知ったのに、また新しい単語が出てきて、参ってしまう。

それに、武装警察が追っている場所と言っても、此方には関係ないので…？

「スプリミナルは…武装警察の手が届かないアングラな場所への操作も、勤務の内だからね。どれだけ疑問に思っても、それが私たちのやるべき事だよ」

「そ…そうなんですな…」

まさに今、僕が疑問に思っていたことへの返答が来てビックリした。

郷仲さんはたまにテレパシーでもあるんじゃないかと少し怖くなる…。

「俺たちは、ミラーファイアのような至上主義の駆逐もしなければならぬいんす…。そのためには、昼夜問わず、調査をしていかなければならぬいんですよ…」

そんな中、瀬田さんは或マスとスプリミナルについての思いを、先程よりも少し低い声で語った。

確かに、世界の均衡を保つのが僕らスプリミナルなら、均衡を崩そうとする奴らに対処するのも、僕らの役目だった。

最近、ヴィーガレンツやら妹の事やらで、少し忘れてたな…。

「なるほど…でも、なんで今回は夜に…?」

「今回調査するのが、風俗営業店だからだよ」

社長が質問に答えると、瀬田さんが封筒から一枚の書類を取り出し、僕に渡した。

「そこに書かれている場所を見て欲しい。そこは一般市民が主に利用するための低級カジノなんだが…実は最近、そこに政治家等の上級国民や大富豪と言った、低級とは似つかわしくない人間多く出入りしていると言う情報が舞い込んできてね。店を利用するのが自由と言っても、少しきな臭い雰囲気が出てね…。私たちと武装警察は、そこを観察していたわけさ」

「そして先日、丁度その店のある地域が、或マスのシマであると調査報告が出たんです」

「国家でのカジノ運用は”利用者の使用金額上限を守る”という条件の下、現在黙認となっている。

二人の説明を聞く限り、確かに庶民用の大きなお金を賭けることができるに富豪が居るのは少し気になる場所ではある。

これがあくまでも富豪達が軽い遊びのためだけに出入りしてるなら良いのだが、もしか違うのなら…。

「なんとなくわかりました。とにかく、今夜はそのカジノと或マスつて言うマフィアの関係性を調べないといけないわけですね…」

瀬田さんは首を縦に振った。

入社して約一ヶ月に差し掛かるこの日、ついに敵対組織に突っ込む仕事を任されることになったわけか…。

自分が少しずつ認められていることへの嬉しきは2割程あるが、後の恐怖やチキンな心が8割もあるのが悩みだな。

「今回はあくまでも調査だ。だから、人数を君とセタクんの二人で最小限にしておいた。緊急事態がない限り、戦いには出なくても良い」社長から話される今回の作戦に、了解しましたと瀬田さんは頷いた。

あくまでも捜査だけ…と言われると、少しはホツとはするが、敵は変わらずにマフィアだとすると、やはり怖い物ではあるな…。

こんな元詐欺師のド素人が生きて帰れるのかがマジで不安だ…。

「まあ、あまり気にしすぎないことが任務完了への一手だよ。それに、ユウキくんはヴィーガレンツに出会ったばかりだろう…？だからこそ、いつそう危機感を待ち合わせていることもできている筈だ。だから、君に任せることができるのさ」

すると、郷仲さんは僕の肩にポンと手を置いて、ニヒルな笑顔を見せる。

「期待してるよ。ありし日のサグラダ・ファミリア位にはね」

「…はいっー」

相変わらずの独特な芸術比喩表現だが、なんとなく、彼からは期待されるような人間になれている。

そんな気持ちになれて、僕は少し嬉しかった。

「ちなみに、セタクんはスプリミナルで1番しっかりしてるから、わからないことがあつたら彼に聞くといい」

目線を向けると、瀬田さんは凜とした様相で、僕に向けてお辞儀をした。

確かに、自分から秘書を請け負うような人間らしいし、この部屋のピカピカ具合を見れば、彼がどれほど真面目なのか、手に取るように

分かる。

今回はもしかしたら赤城さんの時よりも頼もしく思えるかもしれないな…。

「んじや、それまでは通常勤務でよろしく。私は今日は警視庁に用事があるんで失礼するよ」

社長はそう言うと、デスクから多数の茶封筒とタブレット端末を手にとって僕の横を通りすぎた。

僕らが勤務をしている間、彼もきつと彼なりの戦いややるべき事をしているのだろうな…。

「……社長、手に持つてる異様に芯の長い鉛筆はなんですか？」

……………。

ダツ！ガチャツツ！バンツ！

「あつ、逃げた」

まさに脱兎のごとく走っていった。

さつき、ちよつとかっこいいと思ってしまった気持ちを返して欲しい…。

「サトナカさんって、本当に仕事してるんですか…？」

「一応、ちゃんとはしていますよ。ただ、内容は俺にも知らせてくれな感じです」

「ミステリアスにも程がありますね…」

郷仲凍利という人間がめちゃくちゃ強いのはわかっているけれど…サボり疑惑と秘密主義が強すぎるが故に、彼について行って本当によかったのか不安になるな…。

「こちらはこちらで、勤務に励みましょう。本日の勤務内容も聞いております、ミズハラさんとユウキさんとは書類整理が主で、手が空いたらカフェ勤務をお願いします。後、夜勤の為、ユウキさんは仮眠をお願いしますね」

お互いにデスクに座るタイミング、瀬田くんは僕に勤務について教えてくれた。

「セタさん…やっぱりなんかすごくしつかりしてますよね…」

このゆるゆるした職場で、すぐに予定がわかるのは大きいな…。

「これが仕事ですから…」

瀬田さんの言葉だけ見れば、冷たい返事に見えるが、型にいたような仏頂面を見れば、耳を赤らめて恥ずかしそうに目を反らしているのに気づいた。

彼は、素で飾らない人間なのだろうな。

誰かをサポートするのを当たり前だと思っっているように感じる。

言ってしまうえば、誰も好き勝手しているゆるゆるなこの職場が、仕事面だけでもきゅつと引き締まりそうな位…なんて言ったら、他の人に怒られそうだから、口に出すのはやめとこう。

「やっ…」

まだ始業時間ではないが、僕もチボチ仕事をやり始めた。

僕らがやる書類整理作業は、大体、報告書を中心としており、事件に基づく情報を書類にまとめたり、依頼書の記録等をするが多い。

勿論、勤務としてはそれだけではなく、武装警察へのスプリミナルとしての今後の対応だとか、戦闘で破壊してしまった物の報告と弁償費用について、自信の特異の結果報告など、もつともつと多くの書類を有さ無ければならぬため、少々面倒なのだ。

それでも、やらなければならぬから、今日も勤務に励むだけだが。

「……」

「……」

職場にカタカタとキーボードを叩く音が響く。

基本、休憩自由な職場だから自分のペースでやれるけど、貯まったら大変なことになるので気を付けないといけない。

現に、水原くんや住浦さんなんてどんだけ貯まってるか……。

「…あ、間違えた……」

カタカタカタカタ…カタツ…カタカタ…

「……」

カタカタカタツカタツ…カタカタカタカタ…

「……………はこれでいいか…」

カタカタツカタツ…カタカタカタ…カタツ…



「……」

カタカタカタカタカタカタ……  
にしても、すっごい静かだな。

各々の独り言はたまに聞こえるが、それ以外は正直、キーボードの音くらいしか響いてこない……。

それ程、集中してるって言われると分からなくもないけど、それにしては会話が無さすぎる。

別に支障という支障はないけど、なんか寂しいというかなんとか……。

「あの……」

静寂の中、ついに瀬田さんが口を開いた。

「はい……?」

「ユウキさん……好きな食べ物とか……ありますか?」

「あ……自分はカツ丼……かな」

「そうですね……」

「……」

カタカタカタカタカタ……。

何故にいきなりご飯の話……?

「あ、」

また口が開いた……。

「趣味とかは……?」

「趣味ですか……やっぱり、写真撮影ですね。色々撮るのが好きなんで……」

……

「へえ……そうなんすね……」

「……」

カタカタカタカタカタカタ……

「え……えと……俺は……A型っす」

「な……なにが?」

「あの……血液型……」

「へ……へえ……僕はB型だけど……」

「そうなんすね……」

「……」

カタツ！カタカタカタカタ……

……いや、どういう会話よこれ。

さつきから、ずっと素朴な質問しかしてこないし、かといって話が広がる訳じゃないし……。

なんか、お互いに初めてのお見合いって感じの状態っていうか……。

「……あのセタさん……もしかして、無理してます？」

違ったら悪いとは思ったが、恐る恐る彼に聞いてみた。

「すみません……俺……プライベート的なコミュニケーションとか……苦手なんス……でも、せっかく……スプリミナル来てくれたんで……ユウキさんのこと……色々聞きたいなって……」

「仲良くしたかった……ってこと？」

すると、瀬田さんは表情を変えずに顔を赤らめ、目線を反らした。

「は……はい……。俺……こんな図体ですし……不器用ですので……」

ああ、なるほどそう言うことか……。

「セタさんって、案外フレンドリーなんですね」

僕の言葉に、瀬田くんは目を丸くした。

「そう……なんですかね……？でも、近所の人からは……よく話しかけられます……。しっかりと返事ができてるか……わかんないっすけど……」

照れ、まごつき、返答する瀬田さんが、何となく微笑ましく思える。

この人は、別に気むずかし屋やしつかり者ってわけじゃないみたいだ。

真面目で几帳面だけど、対人はちよつと不器用で恥ずかしがり屋な心の優しい青年……。

だから、別にこちらが無理に気張らなくて良いのだと思うと、なんだか急に親近感が湧いてきた。

「今日は、夜に任務なんですよね？」

「あ、はい。さつきお伝えした通り、潜入捜査です。集合は夜の10時で、できれば正装で来るようにとのことです」

先程まで恥ずかしがっていた人間とは思えないほどの情報量と対

応だ。

「僕、まだまだ勝手がわからないんで、今日はご指導、よろしくお願ひしますね」

にこりと笑って指導を志願すると、彼はまた顔を赤くした。

「……はい。がんばります」

それは人見知りのな恥ずかしさではなく、頼られていると言うことへの謙遜を含んだはにかみ。

確実に威張れるくらいの能力を持っていても、決して偉そうにしない。

まるで宮沢賢治の一説を表したような人間で、なんだか少し憧れすらも持つてしまうくらいだ。

こんな大人に自分もなれたら良いんだけどな……。

「あと…それと……」

なんて思っていた途端、瀬田さんが口を開く。

「俺…まだ成人してないんで…あまりかしこまらないで良いですよ…」

「……うえっ!?!」

「今年でようやくやく20ですけど……」

さすがにこのカミングアウトには驚きを隠せるわけがない。

若い…若すぎる……。

プロのラグビーに出たら数日でレギュラー入りできそうな大きさなのにまだ19とは…。

てつきりそろそろ30行く位の年齢かと思つてしまつていた。

と言うことは、僕より年下…。

それで、こんなにしっかりしてるなんてショック…。

「ご、ごめんね…変な気使わせちゃったかな…」

「まあ、よく間違えられるんで、もう慣れてます。こちらこそすみません…」

「い、いや…間違えた僕の方が悪いんだし……」

「いえ…俺が紛らわしい背格好してるので……」

これ以上やったら赤城さんの時と同じことになりそうだからやめ

よう…。

ただ、彼が赤城さんと違うのは、自分の卑下が強いことかもしれない。

腰が低いとは言っても、自分のことを出すのも誰かと触れあうのも不器用だけど、真面目な人。

「まあ…そう言う訳なんで、そんなに気張りしなくて大丈夫っす…。俺は、どう呼ばれても特に傷ついたりとかはしなないですし…」

パツと聞くと自己犠牲のように見えるが、無理してそう言ってるようには見えない。

単純に自分自身に興味が沸かないのだろうか、それとも単にポーカーフェイスなのか…。

「わかったよ、セタクん」

とりあえず、故意に傷つけないよう、いつも年下につける敬称で呼んでみよう。

「セタクん…ですか…。赤城さんや水原くんと同じですね…」

表情はあまり変わらないけど、さつきと比べると、なんかうれしそうだ。

いつも仏頂面で静かな性格だが、誉められると少し喜ぶし、よつぽどでない限り怒る事はない。

本当、雨二モマケズって感じ…。

だからこそ、彼からは悪い人間という心が感じられなかった。

この組織には、罪があるとは信じられないような人間が何人かいるが、きつと彼もそのうちの一人だろう…。

それでも、彼の生真面目さから、彼自信に悪い心が感じられない。それだけで、なんとなく親しみやすさも沸いてきた…。

「今日の仕事、頑張ろうね」

「…はい」

相変わらずの変化のない顔だが、それでも彼の嬉しきはぐんと伝わってくる。

何気ないことでありがたみを感じてくれると、なんかこちらも嬉しくなるな。

ガチャ

「おう、てめえら早えな」

と…こんな時に来たのは、確実に悪い人という…。

「スミウラさん。おはようございます」

一応、対等な立場なのに、今日も偉そうにしている住浦さんにも、瀬田さんは律儀に頭を下げた。

「おう。お前は相変わらずだな」

欠伸あくび混じりに瀬田くんの肩を叩きながら、彼は自分のデスクに転がっていたゲーム機を手を取った。

「スミウラさん…今日はズル休みじゃないんですか」

「そうしたかったけど…ゲームの充電器を職場に忘れてきたから、取り来ようとして、その途中で郷仲に出会っちゃまってなあ…」

ゲームの電源を付けながら彼は後ろを向くと、彼の背中が亀の甲らのように凍らされているのに気づいた。

「また無謀に戦いを挑んだんだろうなあ…」

「よく来れましたねそんなので…」

「まあ…ここ来てもどうせ寝るかゲームするかだけだな…」

背中せなかの冷たさなんか気にせず、ジト目で耳を掻く住浦さん。

その後ろで、瀬田くんがドライヤーとヒーターで彼の背中の氷を溶かしていた。

さすが自称秘書、行動が隠密な上に早い…。

「…つか、悠樹てめえ。なんで俺がズル休みってわかんだよ。お前まだ新人だから、んなこと知らねえだろ？」

「えつと…」

僕は目線を背後の彼に向けると、住浦さんがそれにすぐに気づく。

「あっ！セタてめえつ！…こいつがいる前で郷仲に言いつけやがったなこのやろう！」

まだ氷が残っている状態で、住浦さんは猿の如く瀬田くんにしがみつくが、彼はびくともしないどころか無表情だ。

「つたく、昔っからてめえはノーリアクションだなクソ…ッ」

「ども…」

「誉めてねえよ！」

鈍感な瀬田くんを貶す住浦さんが、彼に負け台詞を吐き捨てるように見えた。

なるほど…彼の仏頂面はこう言うめんどくさい相手にも使えるわけか…。

「…あれ？昔からって…お二人は何かしら関係が？」

僕は首をかしげた。

そこまで人と馴れ合わない住浦が、瀬田くんにしがみつく位に話せてるのが、なんとなく引つ掛かったのだ…。

「あ、知らねえのか。んじゃ、特別に俺がちよつと解説してやろう」

住浦さんは背中の水を鉄の拳で叩きわって外しながら、僕の問いに応えてくれた。

「そもそも、俺が以前ゲーム会社の長をしていたってのは知っているよな？」

「水原くんから聞きましたね」

そこで汚職したとか何とか、とも聞いているが…。

「スプリミナルにはそのゲーム会社の社員が他にも二人いる。その内の一人が、瀬田だ」

住浦さんはいい加減な態度で瀬田くんを親指で指した。

「以前も同様に秘書をしていました。まあ…スミウラさんが会社に来るよりも前から…ですけどね」

彼が放った二言目が、住浦さんの目付きを変える。

「まだ引きずってんのかよ…アイツのこと」

「別に」

瀬田くんは、先程まで見たことのない程に、冷たい仏頂面を浮かべている。

なんか、たった一言だけでこんなに険悪なムードになるなんて…。

”アイツ”という言葉も気になるし、そもそも二人は仲が良いとかでは無く、なにかしらの因縁があるのかもしれない。

「ハア…んで、もう一人、イツジってオツサンがいて、俺たち三人で”TRYangle”ってグループに分けられている。ちなみに、その

懸案のTRYangleは現在リージェンに乗っ取られて、俺らは用済みになったって訳だ…」

億劫に自分達の経歴を話し終わった住浦さんを、瀬田くんが冷たい目で睨んでいた。

「まあ、スミウラさんの経営が悪かったから倒産したんですけどね」

「あ?」

「と、イツジさんがいつも言ってるのを聞きます」

「イツジイイツ!!」

「今日は会計の仕事で出張ツスよ」

そう言っただけで宥める瀬田くんが、元社長に呆れているように見えた。なるほど、だからこんな仲が悪いのか…。

水原くんから聞いてはいたが、本当に前職ではやらかしてたんだな  
スミウラ  
この人。

「つたく…まあ、追い出された後に、郷仲と会ったりだとか、何だかんだで色々あつてここに来たわけだよ…」

大きいため息をつきながら、彼はガサツに自分の椅子に座る。

なんか偉そうに言ってるけど、逆にこの人が一気に衰れに見えてきたな…。

「結局、簡単に言ったら、三人は同じ会社だったけど、乗っ取られて追い出された果てに、サトナカさんが皆さんを拾った…的な感じですかね?」

なんとなく自分の中で彼らの経緯を纏めると、住浦さんは眉間にシワを寄せた。

「大体あつてんのが腹たつんだよな…まあ、セタとイツジは俺より後だがな…」

入社時期の早さを負け惜しみのように語る彼は、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべつつ、デスクに頬杖をついた。

過去の事にはあまり触れられなくなかったのだろう。

まあ…自分の経営に自惚れて乗っ取られちゃあな…。

「ただ、前職の退社時期はスミウラさんの方が早いですけどね」  
「んだと?」

「つて、イツジさんがメールで」

「イツジイイイイツ!!」

「だから、出張ですつて」

言葉にいちいち怒る住浦さんと、それを宥める瀬田くん。

「てか、よくタイミングわかりましたね……イツジさんつて人」

これも長い間付き合ってきた彼らの団体芸なのだろうな。

「まあ、そう言うわけだ。セタもイツジも俺より弱いが、二人ともお前よりかは強いだろう。これからよろしく頼むな」

住浦さんは椅子から改めて立ち上がり、瀬田くんの背中をバンと叩いた。

相変わらず、彼の性格には難があるが、同じ会社で働いていた二人を、ないがしろにしているわけではないようだ。

「は、はい…」

まあ、瀬田くんは住浦さんよりかは仲良くしやすいし、心配は全く感じないんだけどね…。

「気にしすぎなくても良いですよ。俺は俺なんで」それに、サトナカにも勝てないのに強がってるバカの助言なんて、尻拭く紙にもならないからね」

「んだとテメエ!」

瀬田くん、もしくは井辻さん、彼が嫌いなのは分かるけどさすがにこれには住浦さんも大激怒なんじゃ…。

「今のはミズハラくんが電話で」

あつ…(察し)

「ミズハラアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

「今日まだ来てませんよ〜!」

怒りのまま突っ走る住浦さんに、ため息混じりに注意する瀬田くん。

結局、新しい人と出会っても、ここは相変わらずか…。

まあ、楽しい職場ではあるんだけどね。



夜。

まだ蛙の鳴き声は聞こえない宵の中、空に輝く明かりを隠すようにビル街の光がチカチカと点灯している。

いくら世の中の暮らしが昔よりも良くなつたからといっても、未だに労働の辛さは完全に緩和することはないようだ。

この明かりの中に、何人の罪人がいるのだろう。

何人の苦勞人がいるのだろう。

自分も罪人の癖に、そんな考えたくもない筈の事を、スーツの裾から覗かせていた。

「眠気、大丈夫ですか？」

街にアルコールの匂いが漂い始める中、瀬田くんが僕に問いかける。

「うん、一応仮眠はしたから大丈夫」

「なら、良かったです…」

そう言った彼の声色は安堵。

始めての夜勤を心配してくれているのだろう。

普段、あまり着ないスーツまで着込んでいるわけだし、緊張していると思われていても訳はない。

だが正直、今回の任務にあまり不安はない。

もちろん緊張感はあるが、あくまでも今回は戦闘ではなく捜査であるから気は楽だし、仕事の勝手もわかってきている。

心配された眠気に関しても、正直、前の職場で3徹したと言う絶対に自慢したくない栄光もあるから、問題はない。

まずは死なない。

ヤバかったら逃げる。

けれど、守るものは守る。

それを改めて肝に銘じておこう…。

「あつ！セタさん！ユウキさん！」

武装警察との待ち合わせ場所の路地裏につくと、顔見知りの二人がそこに居て、僕はさらにこの仕事に安心感を得た。

「シドウくん！ヒカワさんも！」

子供らしく駆け出し、再会した始堂くんと挨拶代わりのハイタッチをした。

「お久しぶりッス！お元気でしたか!？」

「うん。相変わらず大変だけど、元気にしてたよ」

久々に聞く始堂くんの後輩口調が一番嬉しい。

職が職だからお互いに会えてはいないが、あの事件の後に連絡先を交換してたから、実は結構親しくなっていたのだ。

「ミズハラくんにお伝えしていた件、受理してもらえたようで何よりです…。お二方、今は良い結果になることを期待しています」

「かしこまりました」

一方では、斐川さんの冷淡な励ましの瀬田さんが頭を下げたて応えていた。

斐川さんも相変わらずのようだ。

「それでは、今回の捜査作戦についておさらい致します」

瀬田くんの一言で僕らは姿勢を直し、一斉に彼に注目した。

「まず、我々二人が鏡から内部へ潜入し、警察の皆さんに場所をお伝えする。捜査の末、黒と判断した場合、先行して攻撃を仕掛け、関係者を全員確保。これで間違いありませんね？」

「はい。先に我々が要望した通りの作戦です」

武装警察の二人が頷いて応える。

「警察は、あくまでも民間の身を守らなければならぬので、連絡があるまでは怪しまれないよう行動することしかできないッスけど、お二人がなにあったときにはすぐ駆けつけますからね！安心してくださいっ！」

警察の行動理由の説明をした後、始堂くんはエネルギーシユに敬礼をする。

相変わらず、十分すぎるほどの気合いが入っているようだ。



スプリミナルの仕事に置いて、もう路地裏とは切っても切れない関係になってきてる気がするけど…。

「いえ、ここにはありません」

すると、瀬田くんは言い表せるような特徴が何もなさそうな場所で立ち止まる。

「正確には、これから現場に行くんです。あれを使って」

彼の指す方を見ると、路地裏のどん詰まりに、微かに漏れ出す町の灯を<sup>あかり</sup>反射するそれが、壁に貼り付けられていた。

「鏡？」

ふざけているのかとも思ったけれど、瀬田くんは至って真剣な表情をしている。

なぜ、こんなところに鏡が？

いや、それよりこんな物がなんの役に立つんだ…？

「先にトランスしといてくださいちょっと疲れるかもしれないので…」

「は…はい…」

とりあえず瀬田くんの言うとおりにトランスをすると、突然、彼が僕の手を握る。

「エンブレムと俺の手を、しっかり握つといてください」

「う…うん？」

疑問は残るが、また彼の指示通りに、腕とエンブレムをぎゅつと力強く握りしめた。

これから何をやる気だ…？

「行きます…走って！」

「うえ?!えっ?!」

突然の合図に足がもつれるが、瀬田くんはそれに気づかず、高速で走り出した。

体制を建て直そうとするが、力強い力で引っ張られているため、ほぼ引きずられている状態になってしまった。

「ま…まって!ストップ!ストップ!」

僕の言葉など通じないまま、瀬田くんはそのまま、目の前に貼り付

けられている鏡へと突っ走っていく。

「ちよーぶつかるぶつかるぶつかる!!」

僕が焦っても、彼を引っ張ろうとしても、もう止まることはない。

闇のなかで、鏡の中の彼と僕が迫る。

このままだとぶつかって大怪我するんじゃないっ!

「うわああああああ…」

「…ああああああああああいあいつ!!」

しかし、僕らが鏡に顔面を打ち付けるようなことはなかった。

「ぐふえっ!」

瀬田くんがようやく足を止めると、急ブレーキの影響で僕は頭から派手に転んだ。

「つきました」

「ど……どこ……に?」

ヒリヒリと痛む鼻を撫でる。

「懸案のカジノの近くですよ」

「ええっ!」

辺りを見回してみると、さっきの路地裏とほとんど変わり無いように感じるが、確かに路地から漏れ出す光が先程よりも明るくて彩り豊かだし、酔っぱらい達の酒浸り声も聞こえない。

本当に、先程とは全く違う場所に来たのだ。

「で……でもなんで!?!だって、さっきまで違う場所にいたじゃん!」

「これがトランススーツ……いや、ルストロニウムのもう一つの力なんです」

混乱する僕に、瀬田くんは落ち着いて説明をしてくれる。

「ルストロニウムは多能の元素。その特性が故に、ノーインの住まう鏡の世界を行き来する力を発揮することもできるらしいです。それを利用して、トランススーツは『人間でも鏡経由で移動が出来る』よ

うに開発されたようです。あくまでも、リーゼンと同じく移動だけですけどね」

「そ…そうなんだ…」

突飛な現実に驚きつつも、僕は弱々しく立ち上がった。

なるほど、トランススーツは身体強化だけじゃなかったわけか。

ホント、凄いなこのパーカー…。

「でも、なんでピンポイントに移動ができるの？」

「それは…少し秘密です」

「そ…そう…」

人差し指を立てて秘密を表す瀬田くん。

自分が身に付けている装備にはいったい、あと幾つの謎が隠れているのだろうか…。

なんか、ちよつと怖い気もしてきた。

そんな疑問はさておいて、僕らは本来の仕事に戻るとしよう。

暗い路地の物陰から、僕らは第三者に気づかれないうようにそつと顔を出し、カジノの様子を見てみた。

パチンコドームTK、中華・龍放、BarNody。

目がチカチカしそうな位、派手な電光飾の看板を携えた店ばかりが立ち並んでいる。

こんなごちゃごちゃした街なのに、夜の花菜村商店街のような酩酊した人々は一人もおらず、それどころかスーツや高級そうなコートを着こんだ、上品そうな者達ばかりが街を練り歩いていた。

というか、まず人やリーゼン達の質だけでもおかしいが、一番おかしいと思っただのは、懸案のカジノ自体だ。

他と同様に電飾看板は携えられているが、他の店よりも明らかに電気の量は控えめで、ベースの色も周りは黄色や赤と言った派手な原色なのに、この店だけは上品な黒。

その上、地面にはレッドカーペットが敷かれているし、入り口にはタキシードを着たタمامシ型リーゼンのスタッフが一人とゾウムシ型の屈強なガードマンが二名。

あんなに派手な様相をした店並びの中で、こんな上品なカジノが聳

え建っているのは、なによりも異端だ。

「ウフフフ…」

「ホホホ……」

様子を見てみると、メインクーンとアシユラの女リージェンが高飛車に笑い、カジノへと入って行くのが見えた。

店に入っていく人も街を歩いているような高級地位の人々だけのようだ。

「二名で」

彼女らの次には、小太りとやせ形の狸型リージェンが二人、カジノに足を運んでいた。

「いらつしやいませ。本日は？」

「今日もいつもの物を楽しみたいくてね。なに、金なら心配ない」

小太りな方の狸リージェンは傲慢にパイプを吹かすと、スタッフはビジネススマイルを浮かべて彼に頭を下げた。

「了解いたしました。どうぞ、お楽しみください」

ガードマンがゲートを開けると、小太りのリージェンは興奮しているのか足早にカジノに入ってしまった。

「毎回、お疲れ様です」

一方、やせ形のリージェンはスタッフとガードマンに金を渡した後、同行人の後を追っていく。

この如何にも金持ちだからという余裕が、なんだか嫌らしいとすらも感じた。

僕なんかカジノどころか、パチンコにすらも行ったこともないのに…。

ダッ!

「あつ、こらっつー!」

ふと、ガードマンが扉を閉めようとした瞬間、どぶにまみれたような態の鼠<sup>ナリ</sup>リージェンがカジノに突撃してきた。

彼は店に入る寸前に襟を捕まれて止められてしまったが、諦める様子はない。

「通してくれっ! まだ! まだもう一回やれば当たるんだ! きつと!

きつと!!」

今度は血気迫った顔で、ドブネズミのリージエンはスタッフに掴みかかる。

彼の煤けたスーツと言動を聞く限り、恐らくこの場所でカジノ中毒になったが故に、多額の金を失ったのだろう…。

「ガードマン!」

しかし、ドブネズミのリージエンは、二人の屈強なゾウムシ型リージエン達によってあっさりと捕まってしまう。

「連れていけ」

スタッフが表示すると、ガードマンは軽く会釈をして、中毒者になったリージエンを連れて歩きだす。

「うわああああ! 当たるんだあ! 絶対に当たるんだあああつ!」

二人のガードマンは、断末魔をあげ続けるカジノ廃人を連れて、どこかへ行ってしまった。

その直後、施設の中からまた新たなガードマンが出て来ると、スタッフの横に立った。

あのガードマン達と言うと、連れていった中毒重篤者に”もうカジノには来るな”と、身体で解らせているのだろう。

考えるだけで寒気がするな……。

「やはり、警備が嚴重ですね……」

こんな経験したことない僕はそう言ったけれど、瀬田さんの方はいつも通りの仏頂面だ。

「大丈夫です。そこら辺はしつかり調べられていましたので。忍び込みましょう」

すると、彼はまた物陰に隠れ、トランスを解除した。

「トランス解いてください。今回スーツを着てきてもらったのは、カジノ自体がドレスコード制だからなので、怪しまれないようにと…」

彼は緑色のネクタイをさっと結び直しながら指示した。

なるほど…確かに、現実であつても創作物フィクションの中であつても、ドレスコードというのは定番だ。

そりゃ、あんなに汚い様相になつてまで、ギャンブルをしにきたら、



追い出されるのも訳ないな…。

「さすが先輩、そう言う所しつかりしてるね」

「せ……先輩……」

トランスを解除して一張羅のスーツに着替え直すと、彼は顔を赤く染める。

「ど……どうかした？」

「い、いえ……。行きましょう。とりあえず着いてきてください」

そう言っつて、彼は赤面のままそそくさと先陣を切っつて歩きだした。

瀬田くんつて仏頂面で感情なさそうだと思つてたけど、結構分かりやすいんだな…。

彼の後ろを付きながら、そんな事を思つていた。

カジノ入り口前。

スーツでプライドを着飾つた、数名の利用客が並んでいる。

最後尾で待つている僕らは、このカジノの違法性に手がかりがないか、列に聞き耳を立てていた。

しかし、大体『今日も楽しみですね』や『今回こそは勝とうな』と、極めて単調な話しか聞こえない上に、周りの店の音のせいである程度小さい声なんて、ほぼかき消されているのも同然だった。

「本日は？」

「いつもので頼むよ。今日は楽しい日になりそうだ」

「承知いたしました。どうぞ、お楽しみください」

ようやく、僕らの前にいたキツネのリージェンがカジノへと入つていくと、ようやく僕らの順番が回つてきた。

「いらつしやいませ。お客様…本日ははじめてのご利用でしょうか？」

「はい。二名で」

瀬田くんが答えた瞬間、スタッフは眉をしかめ、タブレット端末を取り出した。

「申し訳ございませ。こちら、会員紹介制の施設となつてるのですが……？」

やはり、一筋縄では行かないようだ。

恐らく、スタッフの持っているタブレットには様々な顧客情報が記載されているのだろう。

これが所謂、一見さんお断りいちげんってやつか…。

「アロミリナ・デイコトマ」

この状況をどう打破するのか考えていた途端、不意に瀬田くんがその言葉を口にする。

「セタクン…？何を言って…」

聞いたことのないカタカナの羅列に混乱している中、何故か店員は青ざめた。

「し…失礼いたしました。本日は、どのようなご用件で？」

何故か突然、スタッフの腰が低くなり、僕らに頭を下げ始める…。

「はじめてなので、いろんな所を見て回りたいのですが、よろしいですか？」

淡々と話を進めていく瀬田くん。

「勿論でございます！二名様、どうぞ！」

スタッフの僕らへの最敬礼と共にカジノへの入り口は開かれた…。

「いきましよう」

瀬田くんはなにもなかったかのように、混乱する僕に声をかけて、堂々とカジノへと入っていく。

「う、うん……」

僕も彼の後ろに続いて歩きだした。

だが…たった一言の単語で、何故こんなことになったのだろうか…。

「あの…」

「あれは一種の合言葉なんです」

先ほどの事について、思いきって聞いてみようと思った刹那、それよりも先に瀬田さんの口が開いた。

「情報科の方達や武装警察の皆さんが調べてくれた所、或マスの上級幹部は特別なお客様をここに招待するために、合言葉を決めているそうなんです…」

「なるほど…だから、あんなに態度が変わったんだ…」

確かに、デジタル化の進んだ世界であつても、履歴が残らないように口だけの隠語を使用して情報を交換する場合だつてある。(これもフィクションだけの知識だけ)

それを既知していたという、瀬田くんの秘書としての心得が、こんな所でも発揮している…。

「ちなみに、アロミリナ・デイコトマとは、ノーマルなカブトムシの学名の事です。或マスは虫型リージェンが多いですから、あまり人に知られないように、このような長く、一目では覚えにくい合言葉にしたいでしょうね」

「へえ…」

全く知らなかった…。

と言うか、知る由もなかったし聞いてもない。

彼は秘書としての心得だけではなく、こんな雑学にも博識だなんて…。

瀬田夢吾という男は正に、スプリミナルのネットワーククラウド…と言つたところだろうか。

「やっぱり、セタクも探偵なんだね…そこまで考えられる上に、豆知識まで調べられてるなんて…」

何気なくそう言うと、また彼の顔が赤身を帯びる。

「い…いえ…：簡単な推測ですよ…：そんなに誇れるものでは…」

やっぱり意外にも表情分かりやすいな彼…。

それに、彼は赤城さん同様にそこまで威張らないし、先輩として頼りになる感じが身心に伝わってくるから、共にいて心地良い。

彼がいるなら、今回も生きては帰れそうだな…。

なんて思っていると、ついに僕らの前に、金の香りのする遊技場が、きらびやかにお目見えした。

カジノの内部は自分がフィクションから想像できる通りの内装だ。高級そうな模様の描かれたカーペットタイルの赤い床、上を見上げれば大理石のような白く斑な天井とシャンデリア。

その明かりに照らされているのは、数々の博打商材。

昔ながらのレバー式金色スロットに、緑のフロッキー風素材の甲板

の机、そこにルーレットやトランプが置かれ、ディーラーの女性がゲームを進行する。

リーゼン至上主義のマフィアが経営しているからか、人間よりもリーゼンの方が利用者は多いが、それを除けば、これぞまさにカジノ！という感じの内装だ…。

ただ、注意すべきはそこではない。

そもそも、今回は違法行為をしているかもしれないカジノを調査するという目的の下動いているのだから、なにか法的に問題のある行動をしていないか、違法薬物の売買がないか、主催側のイカサマはないか…。

そこをしつかりと調査しなければ、警察側も逮捕や検挙には至れない。

スプリミナルとして、目を離さないようにしなければ…。

だが…。

「一応なにか代わったものはなさげ…だよね…。」

ある程度の場所を何度か回ってみたのだが、特に大きな手がかりが無いのだ…。

自分が素人だからかとも思ったが、先輩である瀬田くんも釣果は無しと言いたげな、神妙な面持ちだ。

「そうですね…。カジノコインもなにかイカサマができそうには思えないですし、それに…」

ジャラジャラジャラジャラジャラ…。

「おおっ！当たった！当たった！」

あまり耳障りのよくない音と共に、長髪で無精髭を生やした男がスロットでジャックポットし、機械から出てくる大量のコインで私腹を増やしていた。

「普通に当たってる人もいる。怪しいと言えば怪しいですが、ここからみても、そこまで悪どそうな要素は見当たらないですね。やはり…真面目が悪を隠すのは容易いことなんでしょうか…。」

瀬田くんの言う通りかもしれない。

そもそも、正規のギャンブルなんてものは、守らなければいけない

規定を真面目に守ってあるだろうに、賭け事と言うだけでやはり怪しくて悪どい印象がついてしまうのが現実だ。

それに、もしかしたら僕らが気づかないだけで、触れてはいけない現実がある可能性だってある。

しかし、だからと言って、ここに悪そうな要素があるかと言われても……。

軽くもう一度店のなかを見てみよう。

スロットにルーレット、トランプ等のギャンブル機材に、人間がちらほら、そしてリージエンは沢山。

店内のディーラーやスタッフは、モルフオ蝶やタママシ、ニジイロクワガタ等の外見が良い綺麗な虫型のリージエンで固められており、客もオニキスのような美しい毛色の黒豹や鈴蘭のように麗しい白馬……と言った、いかにも外見だけ綺麗な者だらけだな

……いやまて、なにかおかしい。

なんで、この会場には”様相がきれいなリージエン”しかいないんだ??

「そういや、さつき僕らの前に並んでいた人、今日はどうしますか?? ってお客さんに聞いてたよね……?」

「そうですね……。でも、カジノの他にもビリヤードやダーツなどのゲームもあつたので……選択肢は限られないはず……」

「だったらさ……僕らの前にいた人はどこに行ったの……?」

僕の一言に瀬田くんもハツとした。

「……そう言われれば、一通り施設を回ったけれど、あの人の姿はない……」

やっぱりそうだ……ここはおかしい。

客からして如何にもクリーンなギャンブル会場に、僕らは騙されそうになっただけだったんだ。

今一度振り返ってみよう。

僕らがカジノ前に到着したときにいた時、カジノに入っていたのは綺麗な毛並みをした高級猫のリージエンで、僕らの前に並んでいたのはキツネのリージエン。

他にも、列には妖狐や烏骨鶏等の一般リージエンだけでなく、人間も数名いたはずだ。

しかし、その殆どがこの会場にはいない。

ということは、なにか綺麗なナリで隠さなければならぬ違法なインターテイメントが、ここにはあるという仮説が立てられる…。

僕の中にあつたこのカジノへの不信感が、ようやく解明された…。

「ちよつと、すみません」

そんな時、瀬田くんはすぐさま行動に出ていた。

「はい…う？」

彼が声をかけたのは、綺麗に毛並みを揃えている黒猫のリージエンと金髪に染めた人間のカップルだった。

「実は、私たちここが初めてで、少し色々と見て回つてるのですが、オススメな場所はありますか？」

自分達が警察の傘下であることを悟られないためか、彼はあくまでも初めての客として、この施設についてを聞き出した。

「はじめてなら…お連れ様に聞いたらどうですか？ここ、一見お断りでしょう？」

「それはそうなんですけど…ここを紹介してくれた人はすぐギャンブル好きで…到着した途端にもうスロットにのめり込んでしまつて、聞き耳を持たないんですよねえ…」

瀬田くんはそう言つて適当な所に目を反らすと、黒猫のリージエンはスロットの方にいる誰かを見つけて納得した。

「こういう、形の無い対策ありきで、聞き込みをしているのか…。

「とはいっても…オススメなあ…。うーん…私はカジノが一番好きですから、ここ以外には特には…」

「あつ、でもマニアにとってはあそこ良いかもね」

ふと、連れの女性が葉巻を吹かしながら割り込んできた。

「あそこ…とは？」

「地下遊技場のことだよ。よくストリップとかそう言うの良くやるんだけどさ、今日はオークションなんだつて聞いたよ。でも…エゴイストじゃないなら、行かない方が良くとおもう」

急に女性の顔が汚物でも見たかのように曇りだした。

「エゴイストじゃないなら…それってどういう…」

ジャラジャラジャラジャラジャラ!

瀬田くんが詳しく聞こうとした途端、この場所の闇から僕らを遮断するかのごとく、スロットから大量のメダルが流れ出してきた。

「うわー!また当たった!やるじゃん、ノブくん!」

「エツへへエー!カオリンのおかげだよお〜」

「やあだあ〜」

僕らの事なんかそつちのけで、彼らはイチヤイチャしだす。

金と愛に群がる本能は、リージエンも人間も変わらないつてのはわかるが…:…なんか、相思相愛が濃密すぎて吐きそうになるな。

「ありがとうございます。楽しんで」

瀬田くんは二人に丁寧な頭を下げ、大金を吹き出すスロットから離れた。

「地下演技場ですか…」

変なカップルではあったが、瀬田くんが掴んでくれた収穫はすごく大きかった。

そこへ急ごうと言いたかったが、駆けつけるにはまだ条件が足りない。

「でも…それっぽい入り口はなかったよね…?」

僕の疑問に、瀬田くんは頷く。

周りを見渡してみても、一般人が立ち入れそうな場所は、せいぜいトイレか喫煙所の入り口くらいだ。

ここが隠したいものは、それ程に目につけさせたくない程の強い悪がこもった物なのだろうか…。

「…:…少し、お力貸していただけますか?」

この場所の疑惑について考えていると、急に瀬田くんが援助を求めてきた。

「うん…:…?わ、わかった」

とりあえず二つ返事をする、瀬田くんは僕を連れてカウンターへ歩きだした。

彼が何をするのか分からないが、とりあえず役に立てるならそれで良いとしよう…。

金と大理石の素材で出来上がった総合カウンター。

「失礼いたします」

そこで裏方仕事をしていたパプアキンイロクワガタ型リージェンのスタッフに、瀬田くんは声をかける。

「いかなさいましたか？」

長い角（顎？）をゆらしながらスタッフは僕らに聞く。

「本日、オークションがあると聞きました、此方の社長が興味があると言うことなのですが、ご案内いただけませんか？」

「え…!？」

「しゃ…社長!？」

嘘をつくにしても、さすがにこんなヒョロヒョロが社長だなんて、この状況では不審なんじゃ…。

「すみません…オークションは、二度目のご来店でないと参加はご遠慮いただいております…。何卒、ご了承いただけるようお願い致します…」

スタッフが深々と丁寧に頭を下げた…。

正直、疑われてないだけかもしれませんが、それでもオークションとやらへのガードは固いようだ。

「そうですか…社長、いかなさいますか…?」

こ…こつちに振られても…。

でも、このまま引き下がるような馬鹿にはなりたくないし…かといつて、カジノ側が折れてくれるような言い訳が言えるかも自信がない。

じゃあ、どうする？

なにかスタッフを揺すれるようなことを言うか？

でも、どんな条件で相手を揺すれるかなんて僕なんかはわからない。

なら、どうしろって言うんだ。

策がないんだ。



そんなこと言っても仕方ないだろう！

なんて…脳内で何人もの人格が大きな会議で口論しているように、今の僕はパニックになっていた。

「お客様…？」

ついにはディーラーに心配の目を向けられる…。

「あ…アロミリナ・デイコトマ…」

「は…はい？」

しまった…パニックって変なことを返してしまった。

ええい、迷っていていも仕方がない、出任せで押し通すしかない。

「そ…そちらの運営様からのご招待なんです、我々は…各世界を巡って各商品の取引をさせてもらっていて…そちら、お得意様なんです…」

「はあ…」

…口からでまかせにしては良い線行ってるとはおもっただけど、全くといって自信がない。

目の前のディーラーさんは首をかしげてるし…これじゃあダメか…。

「あの…とは言っても…やはりオークションは…」

「君…」

諦めかけていたその時、突然カウンターの奥からもう一人違うスタッフが出てきた。

彼は血相を変えてパプアキンイロクワガタリージェンのスタッフに駆け寄り、二人で僕らから背を向けてこそそと話し始めた。

「ユウキさん…ナイスです」

え？と瀬田さんに振り向くよりも前に、二人のディーラーが改めて僕らの前を向いた。

「し…失礼いたしました！マスターの御客人で！いつもご贖目にさせていたいております！ご案内いたしますのでどうぞ！」

パプアキンイロクワガタのリージェンディーラーが、謝罪の時よりも更に腰を低くして、僕らをカウンターの奥に案内した。

どうやら、違法薬物やら武器やらの密輸業者と勘違いしてくれたよ

うだな…。

助かった…と、一息付きたかったが、怪しまれると嫌なので我慢しておこう。

「さすが…元詐欺師ですね…」

デューラーに気づかれぬ程度の小声で、瀬田くんが僕に耳打ちをしてきた。

「し…知ってたの!？」

「俺…知り合う前に基本的な情報だけは調べるタイプなので…。好きな食べ物とかは無理っすけど…。」

仏頂面に微かな笑みを浮かべる瀬田くん。

僕が騙し下手の人間であるにも関わらず、こんな所で僕の詐欺師であった経歴をナチュラルに生かしていたなんて…。

瀬田くん…なかなか恐ろしい子…。

10—3 『秘書Sと奴隷オークション』

地下演技場の中。

少し敷居が高めのライブハウスくらいの大きさの場所に、スーツやドレスでお洒落をしたつもりの人々が密集している。

もちろん人間だけではなく、リージェンもここで催し物の始まりを楽しみにしているようだ。

ここは人の匂いよりも香水と酒の匂いの方が強い。

西部劇のような下品な匂いではなく、フアンタジー洋画のような高飛車に着飾ったワインやウイスキーのような上品な匂いだ。

「ここがオークション会場…ですか……」

人並みを掻き分け、僕は会場内を進んでいく。

「今日の目玉はなんでしようね？」

「どんなものが出るか楽しみだ…」

「今日こそ目当ての物を手に入れてみせる…っ！」

通りすぎる度に耳に入るそんな言葉達が、非ソフィステイケート的な高貴装備で隠した野心のようで、なんだかうざったらしい。

「なんか…僕らちよつと場違い感あるね…」

「え、ええ…。なんか、社長や重役っぽそうな方が沢山…。それに、あの人雑誌に載ってた有名な医者様ツスよ」

周りが名のある人だらけで、なんだか僕らという人間の位置自体が潰されてしまいそうだ。

瀬田くんは元大企業の秘書だから、こういうの平気っぽそうだけど、僕なんか一般庶民出のド下手詐欺師なわけだから、こんな場所、お門違いにも程がある…。

やめよやめよ、こんな空しい想像…。

今は、勤務に集中しないと。

「それにしても、一体…なんのオークションなんでしようね……」

「さあ…」

僕の問いに瀬田くんは首をかしげるだけだった。

スプリミナルのネットワーククラウドでも、さすがにマフィアのオークションのことなんか、わかるはずがないか…。

ボタン！

すると突然、なにかが大きな音を立てながら、会場は暗転する。

おおおおおおおつ！！

暗闇の中、オークション目当ての人々が、一斉に歓声をあげた。

なにが彼らをここまで熱くするのだろうか…。

その答えは、ステージのスポットライトが明かす。

「夜行性の皆様！カジノアルケス、地下演技場へようこそ！」

タマオシコガネのリーゼンがスポットライトに照らされ、その姿を表した。

意気揚々と登場した司会者の体は、スポットライトに照らされて、マジョーラのようにキラキラと輝いている。

「本日も、柵から湧き出る樹液のように豊潤なラインナップを揃えております！是非とも！奮って落札をお願いします！！」

なにが面白いのかわからない司会者の昆虫洒落が、顧客達の笑い声こんちゅうしゃれと歓声を同時に呼んだ。

「それでは早速、皆様を興奮の森へのご招待致しましょう！一つ目の商品を！」

オークションが早速始まったようだ。

ここが違法な催しなんだとしたら、運営側の経営の問題か、今から出てくるものに違法性があるのだろうか…。

「…っ！」

違法オークション、と言われて自分が考えていたものは、像牙とか麻薬とか、そう言う違法取引物系統の品だと思っていた。

それを上物だと思って、ヨダレを垂らして手を上げ続ける、そんな狂ってしまった残念な人達の祭典。

しかし…そう思っていた僕らの目の前に現れた上品は、違法以前の問題…。

「商品番号105524、こちらユニコーンのリーゼン、50代女性となっております！」

司会者が持つてきたその巨大なガラス玉のような檻の中には、眠っている民間人が商品として捕えられていたのだ…。

「こちらは今回、幸運にも仕入れられた一級品！世界的に見ても、幻獣のリーゼンと言うのは、比較的少ない人数！中年のリーゼンであつても、一角型の角は希少研究対象の上に自らの研究に役立てたい方や、さらに富を養いたい方におすすめです!!」

物扱いされているのは、まるで奴隷のようにボロボロの布を着せられていた女性リーゼン。

幸運にも仕入れられたと言う言葉から読み解く限り、一般人の類いだであることが悲しいかな確定してしまった…。

「それでは、今回は100からスタート!!」

違法薬でも接種したかのようなオークシヨンが、壇上のリーゼンの一声で始まる。

1100…1300…1500…2000…3500…

多くの人々が番号札を続々と掲げながら、金額を提示し始めた。

「なん…っ！」

自分の口が異議を唱えるより先に、瀬田くんが僕の腕を強く掴んだ。

「今は声をあげてはダメです…」

「そんな！だってそれじゃ…」

この狂祭を見ないふりするというのか？と反論しようとしたが、彼の顔を見るなり、その意欲は消え去った。

「まだ…ダメなんです…」

瀬田くんが目を閉じて唇を噛み締めていた姿が、怒りを必死に抑えているように見えたのだ…。

ここで声を上げれば、一斉検挙が一気に難しくなる。

少し考えれば分かることなのに、この状況に冷静さを欠いたせいで忘れていた…。

僕が荒ぶれば全て無になる。

とりあえず落ち着け…おちつくんだ…。

カンカンッ！

「35番！800万で落札っ!!」

僕が突撃を必死に耐えているうちに、ついに司会者の小槌が下ろされ、遙か後ろにいるであろう客に、邪な心が混じった拍手が送られた。まだまだオークションは続いていく。

次に出てきたのは80代の純人類男性。

1円からのオークションで100万の値段がつき、買い手は富豪で錦鯉のリーゼンだった。

その次には人間の医者が30代の純人類を、その次には鶴リーゼンの学者が40代のリーゼレンスを、その次…その次…。

少し観察していくと、商品自体は比較的、人類の方が多めだと気づいた。

これもリーゼン至上主義団体が故の理由だろう。

計画の上、要らない思想を持つ命は捨てるべし。

そんな思想が、僕のような素人でも感じられる…。

次々に商品と札をつけられた人々が、買い手に買われて入れ替わっていくのを見て、僕らの苛立ちは、少しも治まることを知らない。

勿論この苛立ちが突き立てているのは、運営にも顧客にも…。

「いやあ…本日も皆様羽振りが良くてお目が高い！まさにベゴニアの蜜を見つけた蜂のよう！」

ウザったらしいほど面白味のない昆虫洒落に、顧客は大笑いだ。

自分達が人道外れたことをしているのを、彼らは自覚していないのだろうか。

なんて疑問も全て、この会場の前では、極めて無意味なんだろうな…。

「そんな本日は！いつもご愛好いただいている皆様のために！極めて特別な商品をご用意致しました!!」

司会者が舞台袖に向けて手招きをすると、また新たな被害者が運ばれてきた。

舞台上に上げられた透明な檻の中に入れられていたのはまだ小学生にも上がってなさそうな小さな男の子…。

「これのどこが特別なんだー!?!」

自分ができる義理のない多くの者が、舞台に向けてブーイングを共鳴させる。

極めて耳障りだ。

そもそも、こんな子供をこんな場所に商品として置くこと自体、異質すぎるだろう…。

「皆様！特異点と呼ばれる物はご存じでしょうか？」

次の瞬間、司会者は僕と瀬田くんに通ずるその単語を吐き、野次を飛ばす者達の声を遮った。

「この世には、未だに解明できていない謎が幾つもあります。この世界で生きる命の数、未だ解かれていない数学問題、開発されていない特効薬…。そのうちの一つが、この特異点です」

司会者の説明に、ジワジワと顧客達の意識が、否定から興味に変わっていく…。

「純人類だけが発症する特種異形能力…。その中でも発症が極めて希であり、強すぎる力を持った人間。それこそが特異点！」

僕らの胸が恐怖で高鳴ると同時に、顧客達はレアケースへの高揚で心臓をならしている。

「その特異点と言うものを！我が手に納めたいとは思いませんか!?」  
うおおおおおおおおおおおお!!!

先ほどまでの野次が、一気に歓声へと変わった。

特異点という存在が特別であることは重々承知していたが、まさかこんな異常者達に、欲望の目を向けられるような存在だったなんて…。

「それではこちらの特別な商品！張り切って5000からスタート!!」

510!520!550!700!880!

先程よりも無駄に威勢の良い声と共に、値段がどんどんつり上がっていく…。

小さな子供に馬鹿げた金額をつけていく者達への苛立ちと、未だに動けない事への悔しさのせいで、涙腺がじわりと震えてきた。

890!910!920!940!950!

中途半端な数が増えはじめ、小競り合いが始まっていく頃、檻の中

にいた少年の身体が、急に動き出した…。

「中の子が起きた……」

少年は、見たことの無い光景に混乱しているようで、必死にガラスを叩し始めた。

10000!11000!12500!14000!

しかし、少年の檻の中の行動を異常だと思う者は一人も居らず、しまいには司会がガラス玉を叩いて、少年の行動を止めさせる始末だ…。

15000!18000!20000!25000!

未だに上がる汚らしい歓声の中、男の子は唯一、札をあげていない僕らに気がついた。

35000!36000!42000!48000!

つり上がっていく値段の中で、彼は涙で顔を濡らしつつ、音を遮られた声で、必死に僕らへ思いを伝える。

50000!80000!90000!1億!

助けて…!と……。

「1億円であらうさあー……」

ダアン!ダアン!ダアン!!

少年が必死に伝えてくれた言葉により、僕の怒りが限界点に到達した頃、突然けたたましく銃声が響き、その下品極まりない会場の汚声を黙らせた。

小槌が鳴るよりも先に、その耳をつんざくような音を放ったのは、瀬田くんの持つ緑色に輝く弾倉付拳銃…。

「すみません…。あまりにも耳障りですので…静粛を願いたい…」

怒りに震える低音ボイスに振り向くと、瀬田くんの身体が肉體換装している…。

「我々…警察特殊認可特異行使結社なもので…」

銃を掲げる彼の顔は、ついに我慢の限界が来たと思わせるほどに、冷たく燃えている。



ついにやる気だ…っ！

「や…やべえぞ！サツの犬だ!!」

銃の煙の匂いが奇声で潰される。

罪を罪と思っていない多くの人々が、僕らから逃げ出し始めた。

バタアンツ！

しかし、その脱出口の扉を全て遮るように、また多くの人々が流れ込んできた。

「動くなあああつっ！」

聞き覚えの無い若々しく猛々しい声に、僕は暗夜の灯を感じる。

「貴様ら全員を、ここで拘束する！」

武装警察だ。

斐川さんも始堂さんも勿論いる。

武装警察の人間達は、警察用汎用型のトランススーツを着、盾や拳銃、警防等の形の決まっている汎用アーツを片手に、客やスタッフ目掛けて走り出した。

「先に呼んでおいてよかった…」

トランスが完了している瀬田くんが、フウと安堵の息を吐く。

「じゃないと俺…なにするかわからないですからね……」

彼の顔は、未だに怒りを保っている。

僕にもその苛立ちがわかる…。

それ程に、彼は僕と共にこの胸糞悪さに耐えていたのだ。

「この…国家権力どもが……」

客が捕まっっていく光景を見て、怒りだす司会者は、大きく片掌を前に出した。

「お前ら抗争だあ！大事なカモ共を守るためにっ！こいつら全員ぶち殺せえ!!」

彼の一言で、この会場にいるファイアの軍勢が影から流れだし、武装警察への攻撃を始め出した。

ついに警察VSミラーファイアの抗争が始まったのだ。

「させない…っ！」

はじめに対応に動いたのは瀬田くんだった。

彼は武装警察に向かっていくミラーマフィアを睨むと、突然、彼の身体の数ヶ所から、ポツポツと植物の芽のようなものが生えだす。

「エレクション…ッ！」

その次の瞬間、瀬田くんの身体全体の血管が根のように張り出すと共に、足から本当に樹の根子が伸び出した。

「ケヤキ!!」

合図と共に樹の根がコンクリートの地面に突き刺さり、そこから太く大きな一本の樹木が、地下演技場の中心にそびえ立った。

「うわあああッ！」

生え出す途中、ケヤキの枝に捕まってしまったミラーマフィア構成員数名が、情けない声を出しながら、天井高くに身体を拘束された。

なるほど…これで、ミラーマフィアの動きを制限した訳だ。

やはり…スプリミナルのする行動はいつだって大胆かつ凄まじいな…。

「武装警察の皆さん！カジノ構成員は私たちに任せてください！今はオークション会場にいる者達の確保を!!」

彼の性格からは想像できない程の大きな声をあげながら、武装警察に指示をする。

刑事達から了解の声があげられると、瀬田くんは頷き、アーツのハンドガンをリロードした。

「ユウキさん！手伝ってくださいー！」

「…っ！わかったー！」

即座に行動できなくて軽く見とれてしまっていたが、瀬田くんの一声中で、僕は気持ちを切り替えられた。

約一ヶ月の経験を生かせ。

そう言い聞かせて肉体換装<sup>トランス</sup>し、僕も戦闘態勢に入った。

陪川さんとの事件依頼、久々の抗争だ。

「くっ…！」

サングラスをかけた虫のリージエン達が撃ってくる弾丸をできる限り避けながら、僕は彼らに弾丸とプリズンシールを撃ち込み続けた。

飛び交ってくる弾丸やナイフが、ハイドニウムか鉛弾かわからないから、不良と戦ってたときよりも苦戦する…。

どれだけ特異が有益だとしても、ハイドニウムと不意打ちの前には無力だから、気を付けていないと…。

「てめえっ！」

一方、完全に目をつけられている瀬田くんには、ヒメカツオブシムシやシバンムシ等のリーゼンが大量に襲いかかる。

想像を越える量であっても、彼は相変わらず表情を変えず、そのまま飛んでくるナイフや弾丸を、デカイ身体なのに紙一重で避けた。

自分よりも背格好の大きい人間がするりと避けたのに驚いているのか、次に攻撃をするマフィア達の動きが緩んでいたのが、素人の僕にも分かる。

「ふっ！」

その機会を逃すまいかと、瀬田くんは彼らに向けて連続で引き金を引いた。

「ぐああっ!!」

弾丸必中。

攻撃も機械のように正確で、弾丸を撃ち込まれた者達は次々に倒れていき、プリズンシールで捕獲されていく。

瀬田くんの仕事の速さは、ここでも同じか…。

「この…デカブツがあ!!」

それでも、すぐに全員を捌けるわけがない。

未だに捕獲されていないリーゼン達が、様々な刃物を持ち、八方から瀬田くんを襲いかかる。

しかし、彼は臆すること無く、そつと腕を天に掲げた。

「エレクシオン」ランダム!!」

すると、同時に身体から多種多様の植物が、数えきれない程大量に生え出し、その植物がそれぞれ束を成し、襲いかかってくる敵に向かって、勢いよく伸びた。

「うわああっ！」

植物によって身体の自由を奪われた襲いかかってきたマフィアの

構成員達は、天井や地面、大木の肌等に、思い切り叩きつけられて失神してしまった。

拘束だけではなく、無駄に傷つけないようにするのもお手の物のようだ。

「デカブツで、悪かったですね……」

あ、そこは気にしてたんだ…。

「うおおおっ！」

彼の強さを軽く知った上でも、マフィア達は拳銃片手、貪欲に僕らに突っ込んでくる。

興奮状態で頭が働かないからか、なにか対策を立てているような様子はなさそうだった。

「スピードを早めましょうか…」

すると、瀬田くんは銃の前方についているマガジンを外す。

「プラントアルマ…」短機関銃<sup>P0</sup>」

そのまま、腕から生え出す葛とマガジンが接続され、再度マガジンをガチャンと音を立てながら挿入すると、マガジンから植物が生え出し、アーツ全体に巻き付いて銃本来の形状を変えた。

先程よりも少しだけ大きな機関銃を持ち、瀬田くんは素早く移動する。

「このっ！」

マフィアのリージェン達は敵に弾丸を撃ち込もうとがむしやらに発射するが、瀬田くんの動きと短機関銃の連射速度の方が、遥かに素早かった。

「ぐああ……あつ……」

マフィアの身体、縦方向に弾痕が残る。

倒れた瞬間、亡骸に近い物を回収する。

仲間が殺られた事を悔いて、他のマフィア組員達も反撃しようとするが、それよりも先に、瀬田くんの弾痕筋が奴らの身体につけられた。恐らく瀬田くんの能力は”自らの体に植物を生成する”ことだ。

身体から植物を生成することによって、

先程のように、腕を巨大な植物の束に変えて攻撃や防御をすること

ができる上に、生えた植物は手足のように動かすこともできるようだ。

その上、能力をアーツと組み合わせ、形状とスペックを変更させることもできる。

恐らく、自分自信の特異自体を調べ上げているからこそできる技であり、最も瀬田くんらしい力だ…。

「なるほど…これもなかなか使いやすい…。」

ただ、等の本人は、生成した短機<sup>短機</sup>関銃<sup>関銃</sup>を眺める余裕を持ちつつ、次々に敵を打ち倒しては確保していつている。

調べても解らない部分は実践でカバーしているようだ。

勉強熱心で慎重<sup>慎重</sup>つぽ<sup>つぽ</sup>ような頭脳型なのに、戦闘は結構大胆で献身的なパワー型。

身体は大柄なのに、小さな銃で素早く動ける瞬発力。

そう言う”異能や性能自体に順応する能力”が、まさに尊敬に値する…。

やはり、先輩と言う存在は凄いものだ。

僕なんかよりも何重にも経験を上乗せして、この人数を捌ききっている…。

”慣れてきた”なんて、少し自惚れていた自分が恥ずかしくなるくらいだ。

「こんのっ!!」

しかし、こちらも傍観してばかりではいられない。

マフィアなのに短刀<sup>短刀</sup>を僕に向けて振りかぶってくるが、僕が認識さえすれば、身体は透けてその攻撃を無効化できる。

「うわっ！なんなんだよ…くそがっ！」

攻撃が通らないことに戸惑う敵は何度も切りつけるが、それが通るはずもない。

ダアンツ！ダアンツ！ダアンツ！ダアンツ！

「ぐあっ!!」

僕は短刀を振ってきた彼の両手足に、それぞれ一発ずつ弾丸を撃ち込むと同時に、すばやくプリズンシールを敵の腹に突き刺した。

パンツ！

「ヒカワさん！」

収納完了の破裂音と共に、僕は近くにいた斐川さんに、プリズンシールを投げ渡した。

「承りました！」

彼は受け取った物を腰に付けているポーチの中に入れ、逮捕した客数名と共に会場の外へ出た。

傷をつけてプリズンシールに封じ込める…。

慣れては来たつもりだけど、やはりなかなか堪えるものはあるようで、まだ引き金を引いた方の腕が小刻みに震えている。

少しは罪悪感が薄れるようにした癖に、相手が悪人だってわかってる癖に、未だになにか残るものがあるのだ…。

「ああもうっ！」

そんな事、今だけは忘れる！

まずは目の前の敵に集中するんだっ！

「ぐああっ！」

突然、後方にいる人間の唸り声が聞こえる。

攻撃を無効化しながら振り替えると、そこには肩から血を流して跪いている警察官がいた。

「先輩！大丈夫ですか!？」

怪我に気づいた始動くんが駆け寄る。

恐らく…マフィアが放った流れ弾が彼に当たったのかもしれない。

「しまった…っ！エレクシオン”アロエ”、”クレマチス”」

自分が助けに向かうよりも先に、瀬田くんが特異で行動する。

彼の背中からアロエが生えだすと、それをクレマチスのツルが、手足のようにグニグニと動きながら引きちぎり、ついでに瀬田さんのポケットから包帯やメディカルテープ等の医療器具を取り出した。

応急処置セットを持ったクレマチスのツルは、急に高速で長く伸び始め、傷ついた武装警察巡査にアロエと包帯が届けられた。

「傷ついた方は後退を！それ使ってくださいっ!!」

「ありがとうございますっ!!」

怪我人の代わりに始堂くんが応急処置セットを受け取り、傷ついた  
巡査と共に外へ出た。

なるほど、薬草を生やして応急処置に対応することもできるのか  
…。

言葉を聞けば単純な物なのに、出きることは文字数と比例しない程  
多いのも、特異点の特徴だな。

「これでは…埒があきませんね…」

襲いかかってくるマフィアメンバーの顔にエルボーを打ち込みつ  
つ、瀬田くんは次の一手に出た。

「プラントアルマ…」<sup>M134</sup>「ミニガン」

先ほど同様にマガジンを入れ直すと、機関銃の時よりも大量の植物  
が出現し、その小柄なマシンガンの姿を、大きくて物騒なミニガンへ  
と変えた。

「気を付けてくださいいね…」

瀬田くんがミニガンを両手で構えると、ガチャリと金具が擦れる重  
低音が鳴る。

「これ、なかなかコントロールが難しいので…」

ダダダダダダダ！

「ぐああああつー！」

火花を散らしながら次々に打ち込まれる弾丸が、多くの敵達の身体  
に風穴を開けていく。

鮮血を吹き出しながら倒れていくマフィア組員。

それをすかさずプリズンシールで確保していく武装警察隊員。

その間、一分にも満たっていないように僕は感じた。

こんなに弾丸が乱射されるのは、戦争映画位でしか見たことがない  
が、本当に目の当たりにした時には、もう火薬と鉄の臭いがする位に  
しか思えなかった。

「ふう…」

瀬田くんは肩の荷を下ろすように、一つ息を吐く。

この一撃で、マフィアのほぼ半数は捕まった…。

「良かったですよ…仲間を撃たなくて」

仏頂面と安堵の言葉が、何故か敵達へ恐怖を掻き立てる。

相変わらず圧倒的な先輩達の力には、敵も味方も脱帽させられる物だな…。

「くそ……なにやってんだあ！もういい、とにかくサツだけを狙え！客は二の次だ！そうすりや犬どもも満足には動けねえはずだあ！」

先ほどまでディーラーをやっていた男が、焦りながら命令をすると、マフィアの組員達は瀬田さんや僕らから銃口や矛先を反らし始めた。

まずい、確かにスプリミナルにとって、警察も守らなければならぬ類い。

弱みに漬け込む卑怯さに苛立ちつつも、僕は警察の人たちの元へ駆け出そうとした。

「無駄ですよ…」

しかしその心配はなかった。

瀬田くんが大樹の根に触れると、床の根をはっている箇所から、メキメキと音がし始める…。

「うおっ！」

すると次の瞬間、幾つもの樹木が急成長して生えだし、会場の半分近くを区分するような大きな壁を作った。

僕らがいる側には、警察は一人もいない。

どうやらこの壁は、警察とマフィアを区分するために作った、防護壁のようだ。

「くっ…い！」

悔しがるマフィア組員達。

植物の性質を考えるに、彼がこんなに大きな防護壁を作れるには、恐らくビーコンのような種や根子が必要だろう。

と言うことは、最初に大きな樹木を会場に埋め込んだのは、フィールドを警察とスプリミナル側にとって有利な場所にするためだったわけだ…。

「ええいこんなもん…登っちまえば早いっ！」

しかし、天井にわずかな隙間が…マフィア組員の数名が、壁に生え



る草木を強引に掴んで上り始めたり、羽を広げて飛んだり、警察を殺すために壁の奥へ行こうとし始めた。

「発芽……！」

これはヤバイ、と彼らに銃口を向けようとしたその瞬間、先ほどのミニガンの弾痕が残っている者達に、悲劇が襲う。

「な……なんっ！ぐああっ!!」

なんと、傷口から蔓の長い植物が生えはじめ、周囲にいるリージェン達の身体と一緒に、身体を拘束し始めたのだ。

「やつ、くそっ！くそおっ！」

身体に植物が巻き付いていくことへの苛立ちを他所に、蔦はグングンと伸びながら植物の壁と絡み付き、そのまま敵の身体を壁に括りつけて動きを止めてしまった。

蔦から逃れようとするも、身体は動かないどころか、ナイフで草木を切っても、また新たな蔦が生えて拘束される。

その光景、まるで醜態を見せ付けるための磔はりつけかのように……。

瀬田くんが発射する弾丸は、植物の種だったのか。

しかも、それを自由に発芽させることもできるとは……。

「俺からは、逃れられないっすよ……」

手に持っているミニガンの形状を先程とは違う形の短機関銃に変えると、瀬田くんは銃口と眼光をマフィア組員たちに向けた。

「それでも勝てるかと踏んでるなら……かかって来い……」

眼と声色が怒りに燃えている。

彼の鋭い眼光に、マフィア組員のリージェン達は、ついにたじろぎを見せ始めた。

しかし、さすがは裏世界で生きる者。

そこにいる全員が彼に臆しているような様子はない。

未だ、この戦いに終わりは見えなさそうだ。

「くそっ！せめて……せめて商品を……っ！」

瀬田くんの力に、勝算が無いと踏んだのか、ついに司会者は囚われた少年を荷台に詰んで運びながら、舞台から袖へと逃げ出した。

「セタクん！男の子が！」

未だに襲いかかってくるマフィア数名に弾丸を撃ち込みながら、僕は彼に指示を仰ぐ。

「追ってください！こっちは俺に任せて！ユウキさんの特異ならいけますっ！」

特異を使って多くのリージェンを薙ぎ倒しながら、瀬田くんは僕に被害者の保護を託す…。

「…っ！うん！」

彼の指示通り、僕は救出のために走り出した。

正直、怖い。

お前なんかが出るのか？と背後霊が聞き積めてくる。

でも、期待されている以上、僕は走らなければならぬ。

瀬田くんのように状況に順応できる強さがない僕だからこそ、自分のできることをやるんだ…。

その一心で、僕は会場から舞台袖へと走った。

10—3 『秘書Sと奴隷オークション』

地下演技場の中。

少し敷居が高めのライブハウスくらいの大きさの場所に、スーツやドレスでお洒落をしたつもりの人々が密集している。

もちろん人間だけではなく、リージェンもここで催し物の始まりを楽しみにしているようだ。

ここは人の匂いよりも香水と酒の匂いの方が強い。

西部劇のような下品な匂いではなく、フアンタジー洋画のような高飛車に着飾ったワインやウイスキーのような上品な匂いだ。

「ここがオークション会場…ですか……」

人並みを掻き分け、僕は会場内を進んでいく。

「今日の目玉はなんでしようね？」

「どんなものが出るか楽しみだ…」

「今日こそ目当ての物を手に入れてみせる…っ！」

通りすぎる度に耳に入るそんな言葉達が、非ソフィステイケート的な高貴装備で隠した野心のようで、なんだかうざったらしい。

「なんか…僕らちよつと場違い感あるね…」

「え、ええ…。なんか、社長や重役っぽそうな方が沢山…。それに、あの人雑誌に載ってた有名な医者様ツスよ」

周りが名のある人だらけで、なんだか僕らという人間の位置自体が潰されてしまいそうだ。

瀬田くんは元大企業の秘書だから、こういうの平気っぽそうだけど、僕なんか一般庶民出のド下手詐欺師なわけだから、こんな場所、お門違いにも程がある…。

やめよやめよ、こんな空しい想像…。

今は、勤務に集中しないと。

「それにしても、一体…なんのオークションなんでしようね……」  
「さあ…」

僕の問いに瀬田くんは首をかしげるだけだった。

スプリミナルのネットワーククラウドでも、さすがにマフィアのオークションのことなんか、わかるはずがないか…。

ボタン！

すると突然、なにかが大きな音を立てながら、会場は暗転する。

おおおおおおおつ！！

暗闇の中、オークション目当ての人々が、一斉に歓声をあげた。

なにが彼らをここまで熱くするのだろう…。

その答えは、ステージのスポットライトが明かす。

「夜行性の皆様！カジノアルケス、地下演技場へようこそ！」

タマオシコガネのリーゼンがスポットライトに照らされ、その姿を表した。

意気揚々と登場した司会者の体は、スポットライトに照らされて、マジョーラのようにキラキラと輝いている。

「本日も、柵から湧き出る樹液のように豊潤なラインナップを揃えております！是非とも！奮って落札をお願いします！！」

なにが面白いのかわからない司会者の昆虫洒落が、顧客達の笑い声こんちゆうじゃれと歓声を同時に呼んだ。

「それでは早速、皆様を興奮の森へのご招待致しましょう！一つ目の商品を！」

オークションが早速始まったようだ。

ここが違法な催しなんだとしたら、運営側の経営の問題か、今から出てくるものに違法性があるんだろうが…。

「…っ！」

違法オークション、と言われて自分が考えていたものは、像牙とか麻薬とか、そう言う違法取引物系統の品だと思っていた。

それを上物だと思って、ヨダレを垂らして手を上げ続ける、そんな狂ってしまった残念な人達の祭典。

しかし…そう思っていた僕らの目の前に現れた上品は、違法以前の問題…。

「商品番号105524、こちらユニコーンのリーゼン、50代女性となっております！」

司会者が持つてきたその巨大なガラス玉のような檻の中には、眠っている民間人が商品として捕えられていたのだ…。

「こちらは今回、幸運にも仕入れられた一級品！世界的に見ても、幻獣のリーゼンと言うのは、比較的少ない人数！中年のリーゼンであつても、一角型の角は希少研究対象の上に自らの研究に役立てたい方や、さらに富を養いたい方におすすめです!!」

物扱いされているのは、まるで奴隷のようにボロボロの布を着せられていた女性リーゼン。

幸運にも仕入れられたと言う言葉から読み解く限り、一般人の類いだであることが悲しいかな確定してしまった…。

「それでは、今回は100からスタート!!」

違法薬でも接種したかのようなオークシヨンが、壇上のリーゼンの一声で始まる。

1100…1300…1500…2000…3500…

多くの人々が番号札を続々と掲げながら、金額を提示し始めた。

「なん…っ！」

自分の口が異議を唱えるより先に、瀬田くんが僕の腕を強く掴んだ。

「今は声をあげてはダメです…」

「そんな！だってそれじゃ…」

この狂祭を見ないふりするというのか？と反論しようとしたが、彼の顔を見るなり、その意欲は消え去った。

「まだ…ダメなんです…」

瀬田くんが目を閉じて唇を噛み締めていた姿が、怒りを必死に抑えているように見えたのだ…。

ここで声を上げれば、一斉検挙が一気に難しくなる。

少し考えれば分かることなのに、この状況に冷静さを欠いたせいで忘れていた…。

僕が荒ぶれば全て無になる。

とりあえず落ち着け…おちつくんだ…。

カンカンッ！

「35番！800万で落札っ!!」

僕が突撃を必死に耐えているうちに、ついに司会者の小槌が下ろされ、遙か後ろにいるであろう客に、邪な心が混じった拍手が送られた。まだまだオークションは続いていく。

次に出てきたのは80代の純人類男性。

1円からのオークションで100万の値段がつき、買い手は富豪で錦鯉のリーゼンだった。

その次には人間の医者が30代の純人類を、その次には鶴リーゼンの学者が40代のリーゼレンスを、その次…その次…。

少し観察していくと、商品自体は比較的、人類の方が多めだと気づいた。

これもリーゼン至上主義団体が故の理由だろう。

計画の上、要らない思想を持つ命は捨てるべし。

そんな思想が、僕のような素人でも感じられる…。

次々に商品と札をつけられた人々が、買い手に買われて入れ替わっていくのを見て、僕らの苛立ちは、少しも治まることを知らない。

勿論この苛立ちが突き立てているのは、運営にも顧客にも…。

「いやあ…本日も皆様羽振りが良くてお目が高い！まさにベゴニアの蜜を見つけた蜂のよう！」

ウザったらしいほど面白味のない昆虫洒落に、顧客は大笑いだ。

自分達が人道外れたことをしているのを、彼らは自覚していないのだろうか。

なんて疑問も全て、この会場の前では、極めて無意味なんだろうな…。

「そんな本日は！いつもご愛好いただいている皆様のために！極めて特別な商品をご用意致しました!!」

司会者が舞台袖に向けて手招きをすると、また新たな被害者が運ばれてきた。

舞台上に上げられた透明な檻の中に入れられていたのはまだ小学生にも上がってなさそうな小さな男の子…。

「これのどこが特別なんだー!?!」

自分ができる義理のない多くの者が、舞台に向けてブーイングを共鳴させる。

極めて耳障りだ。

そもそも、こんな子供をこんな場所に商品として置くこと自体、異質すぎるだろう…。

「皆様！特異点と呼ばれる物はご存じでしょうか？」

次の瞬間、司会者は僕と瀬田くんに通ずるその単語を吐き、野次を飛ばす者達の声を遮った。

「この世には、未だに解明できていない謎が幾つもあります。この世界で生きる命の数、未だ解かれていない数学問題、開発されていない特効薬…。そのうちの一つが、この特異点です」

司会者の説明に、ジワジワと顧客達の意識が、否定から興味に変わっていく…。

「純人類だけが発症する特種異形能力…。その中でも発症が極めて希であり、強力すぎる力を持った人間。それこそが特異点！」

僕らの胸が恐怖で高鳴ると同時に、顧客達はレアケースへの高揚で心臓をならしている。

「その特異点と言うものを！我が手に納めたいとは思いませんか!？」

うおおおおおおおおおおお!!!

先ほどまでの野次が、一気に歓声へと変わった。

特異点という存在が特別であることは重々承知していたが、まさかこんな異常者達に、欲望の目を向けられるような存在だったなんて…。

「それではこちらの特別な商品！張り切って5000からスタート!!」

510!520!550!700!880!

先程よりも無駄に威勢の良い声と共に、値段がどんどんつり上がっていく…。

小さな子供に馬鹿げた金額をつけていく者達への苛立ちと、未だに動けない事への悔しさのせいで、涙腺がじわりと震えてきた。

890!910!920!940!950!

中途半端な数が増えはじめ、小競り合いが始まっていく頃、檻の中

にいた少年の身体が、急に動き出した…。

「中の子が起きた……」

少年は、見たことの無い光景に混乱しているようで、必死にガラスを叩し始めた。

1000!1100!1250!1400!

しかし、少年の檻の中の行動を異常だと思う者は一人も居らず、しまいには司会がガラス玉を叩いて、少年の行動を止めさせる始末だ…。

1500!1800!2000!2500!

未だに上がる汚らしい歓声の中、男の子は唯一、札をあげていない僕らに気がついた。

3500!3600!4200!4800!

つり上がっていく値段の中で、彼は涙で顔を濡らしつつ、音を遮られた声で、必死に僕らへ思いを伝える。

5000!8000!9000!1億!

助けて…!と……。

「1億円であらうさあー……」

ダアン!ダアン!ダアン!!

少年が必死に伝えてくれた言葉により、僕の怒りが限界点に到達した頃、突然けたたましく銃声が響き、その下品極まりない会場の汚声を黙らせた。

小槌が鳴るよりも先に、その耳をつんざくような音を放ったのは、瀬田くんの持つ緑色に輝く弾倉付拳銃…。

「すみません…。あまりにも耳障りですので…静粛を願いたい…」

怒りに震える低音ボイスに振り向くと、瀬田くんの身体が肉體換装している…。

「我々…警察特殊認可特異行使結社なもので…」

銃を掲げる彼の顔は、ついに我慢の限界が来たと思わせるほどに、冷たく燃えている。



ついにやる気だ…っ！

「や…やべえぞ！サツの犬だ!!」

銃の煙の匂いが奇声で潰される。

罪を罪と思っていない多くの人々が、僕らから逃げ出し始めた。

バタアンツ！

しかし、その脱出口の扉を全て遮るように、また多くの人々が流れ込んできた。

「動くなあああつっ！」

聞き覚えの無い若々しく猛々しい声に、僕は暗夜の灯を感じる。

「貴様ら全員を、ここで拘束する！」

武装警察だ。

斐川さんも始堂さんも勿論いる。

武装警察の人間達は、警察用汎用型のトランススーツを着、盾や拳銃、警防等の形の決まっている汎用アーツを片手に、客やスタッフ目掛けて走り出した。

「先に呼んでおいてよかった…」

トランスが完了している瀬田くんが、フウと安堵の息を吐く。

「じゃないと俺…なにするかわからないですからね……」

彼の顔は、未だに怒りを保っている。

僕にもその苛立ちがわかる…。

それ程に、彼は僕と共にこの胸糞悪さに耐えていたのだ。

「この…国家権力どもが……」

客が捕まっていく光景を見て、怒りだす司会者は、大きく片掌を前に出した。

「お前ら抗争だあ！大事なカモ共を守るためにっ！こいつら全員ぶち殺せえ!!」

彼の一言で、この会場にいるファイアの軍勢が影から流れだし、武装警察への攻撃を始め出した。

ついに警察VSミラーファイアの抗争が始まったのだ。

「させない…っ！」

はじめに対応に動いたのは瀬田くんだった。

彼は武装警察に向かっていくミラーマフィアを睨むと、突然、彼の身体の数ヶ所から、ポツポツと植物の芽のようなものが生えだす。

「エレクション…ッ！」

その次の瞬間、瀬田くんの身体全体の血管が根のように張り出すと共に、足から本当に樹の根子が伸びだした。

「ケヤキ!!」

合図と共に樹の根がコンクリートの地面に突き刺さり、そこから大きく大きな一本の樹木が、地下演技場の中心にそびえ立った。

「うわあああッ！」

生え出す途中、ケヤキの枝に捕まってしまったミラーマフィア構成員数名が、情けない声を出しながら、天井高くに身体を拘束された。なるほど…これで、ミラーマフィアの動きを制限した訳だ。

やはり…スプリミナルのする行動はいつだって大胆かつ凄まじいな…。

「武装警察の皆さん！カジノ構成員は私たちに任せてください！今はオークション会場にいる者達の確保を!!」

彼の性格からは想像できない程の大きな声をあげながら、武装警察に指示をする。

刑事達から了解の声があげられると、瀬田くんは頷き、アーツのハンドガンをリロードした。

「ユウキさん！手伝ってくださいー！」

「…っ！わかったー！」

即座に行動できなくて軽く見とれてしまっていたが、瀬田くんの一声で、僕は気持ちを切り替えられた。

約一ヶ月の経験を生かせ。

そう言い聞かせて肉体<sup>トランス</sup>換装し、僕も戦闘態勢に入った。

陪川さんとの事件依頼、久々の抗争だ。

「くっ…！」

サングラスをかけた虫のリージエン達が撃ってくる弾丸をできる限り避けながら、僕は彼らに弾丸とプリズンシールを撃ち込み続けた。

飛び交ってくる弾丸やナイフが、ハイドニウムか鉛弾かわからないから、不良と戦ったときよりも苦戦する…。

どれだけ特異が有益だとしても、ハイドニウムと不意打ちの前には無力だから、気を付けていないと…。

「てめえっ！」

一方、完全に目をつけられている瀬田くんには、ヒメカツオブシムシやシバンムシ等のリーゼンが大量に襲いかかる。

想像を越える量であっても、彼は相変わらず表情を変えず、そのまま飛んでくるナイフや弾丸を、デカイ身体なのに紙一重で避けた。

自分よりも背格好の大きい人間がするりと避けたのに驚いているのか、次に攻撃をするマフィア達の動きが緩んでいたのが、素人の僕にも分かる。

「ふっ！」

その機会を逃すまいかと、瀬田くんは彼らに向けて連続で引き金を引いた。

「ぐああっ!!」

弾丸必中。

攻撃も機械のように正確で、弾丸を撃ち込まれた者達は次々に倒れていき、プリズンシールで捕獲されていく。

瀬田くんの仕事の速さは、ここでも同じか…。

「この…デカブツがあ!!」

それでも、すぐに全員を捌けるわけがない。

未だに捕獲されていないリーゼン達が、様々な刃物を持ち、八方から瀬田くんを襲いかかる。

しかし、彼は臆すること無く、そつと腕を天に掲げた。

「エレクシオン」ランダム!!」

すると、同時に身体から多種多様の植物が、数えきれない程大量に生え出し、その植物がそれぞれ束を成し、襲いかかってくる敵に向かって、勢いよく伸びた。

「うわああっ！」

植物によって身体の自由を奪われた襲いかかってきたマフィアの

構成員達は、天井や地面、大木の肌等に、思い切り叩きつけられて失神してしまった。

拘束だけではなく、無駄に傷つけないようにするのもお手の物のようだ。

「デカブツで、悪かったですね……」

あ、そこは気にしてたんだ……

「うおおおっ！」

彼の強さを軽く知った上でも、マフィア達は拳銃片手、貪欲に僕らに突っ込んでくる。

興奮状態で頭が働かないからか、なにか対策を立てているような様子はなさそうだった。

「スピードを早めましょうか……」

すると、瀬田くんは銃の前方についているマガジンを外す。

「プラントアルマ……短機関銃」

そのまま、腕から生え出す葛とマガジンが接続され、再度マガジンをガチャンと音を立てながら挿入すると、マガジンから植物が生え出し、アーツ全体に巻き付いて銃本来の形状を変えた。

先程よりも少しだけ大きな機関銃を持ち、瀬田くんは素早く移動する。

「このっ！」

マフィアのリージェン達は敵に弾丸を撃ち込もうとがむしやらに発射するが、瀬田くんの動きと短機関銃の連射速度の方が、遥かに素早かった。

「ぐああ……あつ……」

マフィアの身体、縦方向に弾痕が残る。

倒れた瞬間、亡骸に近い物を回収する。

仲間が殺られた事を悔いて、他のマフィア組員達も反撃しようとするが、それよりも先に、瀬田くんの弾痕筋が奴らの身体につけられた。恐らく瀬田くんの能力は”自らの体に植物を生成する”ことだ。

身体から植物を生成することによって、

先程のように、腕を巨大な植物の束に変えて攻撃や防御をすること

ができる上に、生えた植物は手足のように動かすこともできるようだ。

その上、能力をアーツと組み合わせ、形状とスペックを変更させることもできる。

恐らく、自分自信の特異自体を調べ上げているからこそできる技であり、最も瀬田くんらしい力だ…。

「なるほど…これもなかなか使いやすい…。」

ただ、等の本人は、生成した短機<sup>短機</sup>関銃<sup>関銃</sup>を眺める余裕を持ちつつ、次々に敵を打ち倒しては確保していつている。

調べても解らない部分は実践でカバーしているようだ。

勉強熱心で慎重<sup>慎重</sup>つぽ<sup>つぽ</sup>ような頭脳型なのに、戦闘は結構大胆で献身的なパワー型。

身体は大柄なのに、小さな銃で素早く動ける瞬発力。

そう言う”異能や性能自体に順応する能力”が、まさに尊敬に値する…。

やはり、先輩と言う存在は凄いものだ。

僕なんかよりも何重にも経験を上乗せして、この人数を捌ききっている…。

”慣れてきた”なんて、少し自惚れていた自分が恥ずかしくなるくらいだ。

「こんのっ!!」

しかし、こちらも傍観してばかりではいられない。

マフィアなのに短刀<sup>短刀</sup>を僕に向けて振りかぶってくるが、僕が認識さえすれば、身体は透けてその攻撃を無効化できる。

「うわっ！なんなんだよ…くそがっ！」

攻撃が通らないことに戸惑う敵は何度も切りつけるが、それが通るはずもない。

ダアンツ！ダアンツ！ダアンツ！ダアンツ！

「ぐあっ!!」

僕は短刀を振ってきた彼の両手足に、それぞれ一発ずつ弾丸を撃ち込むと同時に、すばやくプリズンシールを敵の腹に突き刺した。

パンツ!

「ヒカワさん!」

収納完了の破裂音と共に、僕は近くにいた斐川さんに、プリズンシールを投げ渡した。

「承りました!」

彼は受け取った物を腰に付けているポーチの中に入れ、逮捕した客数名と共に会場の外へ出た。

傷をつけてプリズンシールに封じ込める…。

慣れては来たつもりだけど、やはりなかなか堪えるものはあるようで、まだ引き金を引いた方の腕が小刻みに震えている。

少しは罪悪感が薄れるようにした癖に、相手が悪人だってわかってる癖に、未だになにか残るものがあるのだ…。

「ああもうっ!」

そんな事、今だけは忘れる!

まずは目の前の敵に集中するんだっ!

「ぐああっ!」

突然、後方にいる人間の唸り声が聞こえる。

攻撃を無効化しながら振り替えると、そこには肩から血を流して跪いている警察官がいた。

「先輩!大丈夫ですか!」

怪我に気づいた始動くんが駆け寄る。

恐らく…マフィアが放った流れ弾が彼に当たったのかもしれない。

「しまった…っ!エレクシオン”アロエ”、”クレマチス”」

自分が助けに向かうよりも先に、瀬田くんが特異で行動する。

彼の背中からアロエが生えだすと、それをクレマチスのツルが、手足のようにグニグニと動きながら引きちぎり、ついでに瀬田さんのポケットから包帯やメディカルテープ等の医療器具を取り出した。

応急処置セットを持ったクレマチスのツルは、急に高速で長く伸び始め、傷ついた武装警察巡査にアロエと包帯が届けられた。

「傷ついた方は後退を!それ使ってくださいっ!!」

「ありがとうございます!」

怪我人の代わりに始堂くんが応急処置セットを受け取り、傷ついた  
巡査と共に外へ出た。

なるほど、薬草を生やして応急処置に対応することもできるのか  
…。

言葉を聞けば単純な物なのに、出きることは文字数と比例しない程  
多いのも、特異点の特徴だな。

「これでは…埒があきませんね…」

襲いかかってくるマフィアメンバーの顔にエルボーを打ち込みつ  
つ、瀬田くんは次の一手に出た。

「プラントアルマ…」<sup>M134</sup>「ミニガン」

先ほど同様にマガジンを入れ直すと、機関銃の時よりも大量の植物  
が出現し、その小柄なマシンガンの姿を、大きくて物騒なミニガンへ  
と変えた。

「気を付けてくださいいね……」

瀬田くんがミニガンを両手で構えると、ガチャリと金具が擦れる重  
低音が鳴る。

「これ、なかなかコントロールが難しいので……」

ダダダダダダダ！

「ぐああああつー！」

火花を散らしながら次々に打ち込まれる弾丸が、多くの敵達の身体  
に風穴を開けていく。

鮮血を吹き出しながら倒れていくマフィア組員。

それをすかさずプリズンシールで確保していく武装警察隊員。

その間、一分にも満たっていないように僕は感じた。

こんなに弾丸が乱射されるのは、戦争映画位でしか見たことがない  
が、本当に目の当たりにした時には、もう火薬と鉄の臭いがする位に  
しか思えなかった。

「ふう…」

瀬田くんは肩の荷を下ろすように、一息を吐く。

この一撃で、マフィアのほぼ半数は捕まった…。

「良かったですよ…仲間を撃たなくて」

仏頂面と安堵の言葉が、何故か敵達へ恐怖を掻き立てる。

相変わらず圧倒的な先輩達の力には、敵も味方も脱帽させられる物だな…。

「くそ……なにやってんだあ！もういい、とにかくサツだけを狙え！客は二の次だ！そうすりや犬どもも満足には動けねえはずだあ！」

先ほどまでディーラーをやっていた男が、焦りながら命令をすると、マフィアの組員達は瀬田さんや僕らから銃口や矛先を反らし始めた。

まずい、確かにスプリミナルにとって、警察も守らなければならぬ類い。

弱みに漬け込む卑怯さに苛立ちつつも、僕は警察の人たちの元へ駆け出そうとした。

「無駄ですよ…」

しかしその心配はなかった。

瀬田くんが大樹の根に触れると、床の根をはっている箇所から、メキメキと音がし始める…。

「うおっ！」

すると次の瞬間、幾つもの樹木が急成長して生えだし、会場の半分近くを区分するような大きな壁を作った。

僕らがいる側には、警察は一人もいない。

どうやらこの壁は、警察とマフィアを区分するために作った、防護壁のようだ。

「くっ…い！」

悔しがるマフィア組員達。

植物の性質を考えるに、彼がこんなに大きな防護壁を作れるには、恐らくビーコンのような種や根子が必要だろう。

と言うことは、最初に大きな樹木を会場に埋め込んだのは、フィールドを警察とスプリミナル側にとって有利な場所にするためだったわけだ…。

「ええいこんなもん…登っちまえば早いっ！」

しかし、天井にわずかな隙間が…マフィア組員の数名が、壁に生え



る草木を強引に掴んで上り始めたり、羽を広げて飛んだり、警察を殺すために壁の奥へ行こうとし始めた。

「発芽……！」

これはヤバイ、と彼らに銃口を向けようとしたその瞬間、先ほどのミニガンの弾痕が残っている者達に、悲劇が襲う。

「な……なんっ！ぐああっ!!」

なんと、傷口から蔓の長い植物が生えはじめ、周囲にいるリージェン達の身体と一緒に、身体を拘束し始めたのだ。

「やつ、くそっ！くそおっ！」

身体に植物が巻き付いていくことへの苛立ちを他所に、蔦はグングンと伸びながら植物の壁と絡み付き、そのまま敵の身体を壁に括りつけて動きを止めてしまった。

蔦から逃れようとするも、身体は動かないどころか、ナイフで草木を切っても、また新たな蔦が生えて拘束される。

その光景、まるで醜態を見せ付けるための磔はりつけかのよう……。

瀬田くんが発射する弾丸は、植物の種だったのか。

しかも、それを自由に発芽させることもできるとは……。

「俺からは、逃れられないっすよ……」

手に持っているミニガンの形状を先程とは違う形の短機関銃に変えると、瀬田くんは銃口と眼光をマフィア組員たちに向けた。

「それでも勝てるかと踏んでるなら……かかって来い……」

眼と声色が怒りに燃えている。

彼の鋭い眼光に、マフィア組員のリージェン達は、ついにたじろぎを見せ始めた。

しかし、さすがは裏世界で生きる者。

そこにいる全員が彼に臆しているような様子はない。

未だ、この戦いに終わりは見えなさそうだ。

「くそっ！せめて……せめて商品を……っ！」

瀬田くんの力に、勝算が無いと踏んだのか、ついに司会者は囚われた少年を荷台に詰んで運びながら、舞台から袖へと逃げ出した。

「セタクん！男の子が！」

未だに襲いかかってくるマフィア数名に弾丸を撃ち込みながら、僕は彼に指示を仰ぐ。

「追ってください！こっちは俺に任せて！ユウキさんの特異ならいけますっ！」

特異を使って多くのリージェンを薙ぎ倒しながら、瀬田くんは僕に被害者の保護を託す…。

「…っ！うん！」

彼の指示通り、僕は救出のために走り出した。

正直、怖い。

お前なんかが出るのか？と背後霊が聞き積めてくる。

でも、期待されている以上、僕は走らなければならぬ。

瀬田くんのように状況に順応できる強さがない僕だからこそ、自分のできることをやるんだ…。

その一心で、僕は会場から舞台袖へと走った。

10—4 『秘書Sと奴隷オークション』

僕は司会者を追い続けていた。

匂いもなく光の少ない廊下の中、タンタンと足音を二つ鳴らしながら、二人と一人、タイルの床を走っていく。

「くそっ…くそっ…くそっ！」

目の前を走る司会者は、被害者の入った荷台を走らせ、僕から必死に逃げていた。

「逃げねえと…逃げねえと殺される！あいつに…奴に！」

ハアハアと息を切らしながら走る司会者。

先ほどまでの狡猾的な饒舌さのある言動は、もう微塵も感じない。

ドン！ドン！

自分が売られることへの恐怖からか、運ばれている少年がガラスをがむしやらに叩いている音が、同時に響いていた。

「うるせえ…うるせえうるせえ!!ちよつとは黙れよ糞ガキがあ!!」

ダアンツッ!

苛立ちで少年の口を紡ごうと振り上げたその右腕を、僕は弾丸で貫いた。

「うぐっ!!」

腕から鵜茶色をした血が勢い良く吹き出すと共に、司会者は痛みで腕を抑えながら、少年の入った檻と共に地面に転がる。

ようやく、足を止めることができたか…。

人を撃つ罪悪感は背後霊と共に染み込んでいるが、僕よりも未来があるはずの少年を見殺しにしたくない一心で、僕はその邪魔な感情を押し殺していた。

「その子を渡せ…っ！」

司会者に銃を向けながら、僕は被害者の解放を要求した。

遠目からだからわからなかったが、瞳孔狭めのつり細目で、なかなかの悪人面をしている。

「くっ…糞が…男の癖にピンク色つけやがって…」

その上こんな事を言いやがるもんだから、さらに嫌な奴に感じてきた。

「ピッ………ピンクじゃない、マゼンタだ！」

くそっ…僕が地味に気にしていることまで突っ込みやがった…。

今すぐ弾丸を脳天に撃ち込んでやりたいが、このまま殺してはスプリミナルの規約に引っ掛かる。

とりあえず、あくまでも奴が受け渡した上で、確保できるかを探らねば……。

「ハッ！こんなやつを救ってなんになる…？生かしておいても、こいつはてめえみたいに誰かを殺す事になるだろう…？」

急に彼が口に出した言葉が僕の正義感に引っ掛かった。

「なに…？」

「人間ってのは傲慢なクズだ！自分たちと違う形を嫌がり、しまいはそんな訳わかんねえ能力まで身につけやがって！」

非常口の明かりが点滅し、司会者の口からは、次々に悪態が溢れだしてくる…。

「その点、俺はなんだと思う？国によっては神の扱いを受ける種族…スカラベだ！貴様らみたいなのなんよ特別感も価値もねえ奴に！俺を止める義務なんか…」

ダアンツ！ダアンツ！

「ぐっ！あああつ！」

微かな灯りに蠅は焼かれ、司会者の身体からは血が吹き出した。

激怒を必死に抑えつけたから、こいつの両足に一つずつ弾丸を撃ち込む迄で済んだ…。

だが…それでも、僕の中からその怒りが消えることはない。

「ふざけんじゃねえよ………」

久々だ、自分以外の人に、腹が立ったのは…。

「幾らこの世界に置いてのカーストが上だと思っっているからといって…：僕はお前みたいに、別種を蔑んで、生き殺しにさせるような人間じゃないっ！」

上部だけ清潔な渡り廊下に、僕の怒声は響き渡った。

「じゃ…じゃあ、警察はどうなんだ！人間が俺らを捕まえて！収監して！それこそ生きごろ…っ！」

奴がまた僕を怒らせるよりも前に、傷ついたに力強くプリズンシールを刺した。

「それを悪人が喋るな……」

パンツ！

独特な破裂音がすると共に、奴の身体はその掌サイズの監獄のなかに格納された。

非常口ランプの明かりも、プツンと音を立てて消える。

熱湯のようにぐらぐらと沸き立っていた苛立ちは、奴を確保したタイミングで少しずつ治まり始めてきた。

だが、この組織があの子を邪険に扱ったこと、そして彼に罪の意識がなかったこと、そのどれもが、未だに怒哀として染み込んでいる。

この染みが落ちることは恐らく無いだろう。

罪のない人間を、自らの利益がために貶めるなんて間違ってる。

ましてや…こんな年齢の……。

「……なに言ってるんだよ……」

他者の行動を卑下すればするほど、自分自身が愚かに思えてきた。

罪のない人間を、自らの利益がためになんて間違ってる？

そんなの…僕が言えた義理じゃないだろう…。

罪のない人々に詐欺を繰り返して…それを自分の資金にして…。

「ああ……バカかよ…僕は……」

片手で軽く頭を掻き、自分に染み付いた罪を引き剥がそうとするが、そんなもので、その罪悪感が消えるわけがない。

自分のしでかした罪から目を反らすようなことをするな。

そう言っつて、背後霊にバカにされたような気がした。

「…あつ、そうだ！あの子を！」

自分の罪悪感に苛まれていた所で、この任務に置いて一番大切なことを思い出した。

僕は彼を確保したプリズンシールをポケットにしまいながら、急いで放置されていた球体の檻に近づいた。

「鍵…鍵…」

中にいる男の子がドンドンと檻を殴って鳴らす中、僕は必死にその檻に鍵穴やヒビ等の綻びがないかを探った。

しかし、いくら探しても、このA玉のようにつるつるの球体からは、そのような物は一つも見あたりない。

どうやら、これは一般的な方法で開けられるようなものではない。うだ。

恐らく、商品にする人間やリージエンを中に入れて、水晶のような形に溶接してあるのだろう。

音を吸い込む特殊なガラスで作られていて、男の子の声は全く聞こえてこない。

早く彼をこの鬱屈とした空間から出してあげないといけないけれど、試しに強く殴ってみても傷ひとつ付かない。

銃で撃つという手もあるが、仮に割れたとしても、この子に怪我をさせる可能性があるから使えない…。

僕の能力は、赤城さんみたいに火で炙ったりもできないし、あおいちゃんみたいに重力で割ることも無理だから、…。

「くそっ！」

やけくそにアーツで何度か殴ってみても、ガラスには傷すらも付かない。

それどころか、打撃の反動が大きいから、こっちの腕が壊れてしまいうさうだ…。

このままじゃダメだ…。

じゃあどうするんだ…？

なにをすればここから彼を出せる??

この組織に入ってから、いつも頭をフル稼働させられるから、即座に対策を考える位には慣れてきたが、まだまだ時間はかかるのだ。

溶接後も見当たらない上に、割れない最強の檻。

自分が持つてるのは、ルストロニウム性、アーツ銃と、無効化の特殊な異くらい…。

無効化って言っても、こんな所でなにを無効化すれば良いんだそも

そも…。

無効化…ん？

「…そうだー！」

特異点を利用して、このガラス自体を攻撃だと意識すれば、高坂沙羅のように物質自体を分解できるのでは？

そうだ…高坂だつてあくまでも『封印』から応用できるのだから…僕だつて…。

「よし…」

そうと決まれば、実践あるのみ。

僕はそつと、自らの手を玉の監に置いてみた。

内部からも外部からも叩いた影響からか、少しぬるい。

まずは深呼吸をして、集中しろ…。

これは攻撃だ、これは攻撃だ。

僕を倒そうとしてしかけた大きな爆弾だ。

爆弾の中には、罪のない人間がいる。

解体せよ…解体せよ…。

このくそつたれなごみ屑を、割り捨ててしまえ…。

……。

「さすがに無理かあ…」

手を離して地面に腰を落とす。

いくら特異点だからと言っても、やはり僕には高坂のような無効化の応用が全然できていないようだ…。

しかし、だからと言ってこのまま彼を出さないわけにはいかないし、この中に酸素が供給されてないと仮定されたら…。

”打つ手がない”って決めつけるのが早いのもわかってる。

でも、もうすればこれを壊せるんだ…。

なにか…僕よりも強くて、固い素材でも壊せそうな物があると良いんだが…。

ああ…やつぱり、ここは僕なんかじゃなくて瀬田くんみたいな先輩の方がよかつたんじゃないか…。

「…あつ」

先輩というワードで、僕はふと思い出したことがある。

確か今日の昼頃、まだ会社にいた時の事だ。

あの後、水原くんも出社してきたが、それからは特に山も谷も他愛すらもない、事務的な仕事を淡々としていただけだった…。

「すみません、先に仮眠取らせていただきますね」

「はい。僕も後で行きまゝす」

深夜に仕事をするため、瀬田くんと僕は仮眠を要されていた。

仕事をするのが早い瀬田くんは先に仮眠室に行ったが、未だ新人の身の僕はもう少し時間がかかったのだ。

「そーいや今日、夜勤だったね」

その時、話しかけてくれた水原くんは、書類やキーボードではなく、様々な占い道具を広げていた。

「うん…ちよつと怖いけど…まあ頑張んなきゃね」

「そう…。まあ、大きな事故にならないことを祈るよ」

いつも通り、ちよつとそっけなく返す水原くん。

相変わらず、相手に対して何を思ってるのか、いまいち読みづらい。

まあ、別に嫌な感じはしないけども…。

「よっし…これでいいか…」

思ったより早く仕事が終わって一息着こうと思った頃。

「あのさ、ちよつとこれ適当に引いてくれない？」

ふと、水原くんが机の上に円状に広げたカードを指す。

「ん？う、うん…」

何事かと思いつ、要望通りに目についたカードをピツと引いてみた。

カードの表面を見ると、なにか妖怪等を題材とした漫画に出てくるような木製の輪っかが描かれていた。

しかも、それを逆にとってしまったから、僕は位置を直そうとする。

「あ、そのままで」



だが、水原くんに止められてしまった。

「ごめん…で、これが…?」

絵柄の面を見せながら聞くと、彼は僕の持っていたカードを回収した。

「いや、特になんでもないよ。選んで欲しかっただけ」

カードを再度机に置くと、彼はコインを少し上からカードの円の上に落とした。

くるくると回りながらコインは僕の手に着地する。

面は表で、またそのまま彼はそれを回収する。

恐らく何かしらの占い遊びの一貫なんだろうけど…彼の我流占いは、素人が見てもよく意味が分からないな…。

「ちよつとアーツ貸してくれる?」

「アーツ? わかったけど…」

突然の要求に疑問は残ったが、僕は望み通りにエンブレムをアーツに変えて彼に渡した。

彼はその拳銃型アーツをパツと手に取ると、それをひっくり返して底面を見せる。

「ここにさ、スイッチあるでしょ?」

「ああ、確かにあるよね…」

グリップ底面の目立たない場所には、ポツンと四角いボタンのようなものが掘られていた。

以前、暇潰しにアーツを調べていたときに見つけ、なにか強化的なことが出きるのか? と少しワクワクしながら、押してみたけれどなんにもなかったのを覚えてる…。

ちよつと恥ずかしいから仲間には言えないけど。

「これをこうすると…」

水原くんが親指でそのボタンを押すと、元々のマゼンタ色から、水原くんのシアン色にぽうつと光り出した…。

「あつ、光った…けど?」

「これで、僕の特異がこの中に保存された」

何気なく明かされた新機能に、僕は驚いた。

「えっ!? そんなことできるの!?!」

そうか…だから、僕が押してもなんにも起きなかったのか…。  
まさか、こんなに小さなスイッチにそんなすごい機能の道標となっ  
ていたとはな…。

「ただ、使えるのは一回キリだけだね。アーツ本来の威力は上がるけ  
ど使いにくいからあまり使う時ないんだよね」

「へえ……」

一回だけ他者から特異を献上してもらえる機能。

けれど、能力と戦闘スタイルにも相性があるから、あまり推奨はさ  
れていないようだ。

それに大体、自分の特異で回避できそうだし、いざとなったら瀬田  
さんが助けてくれそうだから、今回は必要な時があるのか微妙だな  
…。

「ま、勉強程度に一応持つときなよ」

「わ…わかった」



「なるほど…だから…!」

ようやく水原くんの考えがわかった。

グリップの下にあるスイッチを押すと、マゼンタ色のアーツに水原  
くんのアーツのシアンが混ざる。

「これなら…っ!」

拳銃を逆手に持った瞬間、円月輪のような水の刃が出現する。

バギインツ!!

それをガラスに向けて思いきり打ち付けると、中にいる男の子の身  
体すれすれの場所を機転に、球体が綺麗に真っ二つに切り裂かれた。

「割れたっ!!」

二つに割かれた檻の片方は、地面を転がった挙げ句壁にぶつかって  
静止し、もう片方には被害者の身柄が、川を下る一寸法師のような状  
態で、僕の目の前をくると回りながら静止した。

それが確認されると同時に、アーツに浮かんだ水とシアン色は消え、元の色へと戻った。

まさか、こんな場所でも水原くんに助けられるとは……。本当に頼りになる先輩だ。

「よかったー早く行こうー！」

僕が手をさしのべると、男の子は怖々としながらも頷き、玉の檻から出て僕の手を握った。

「あっ」

よし行こうと僕がその手を引っ張った瞬間、男の子の温もりが消える。

違和感に振り向くと、地面の上に砂が溜まり、男の子の掌が消え、代わりに断面から大量の砂が小さい滝のように生成されていた……。

「ごめんなさい……」

ふと、少年が俯き加減で口を開く。

「ぼく……まえからこうなんだ……。わかんないけど……からだか……すなになつちやうんだ……」

未熟な言葉と声で、砂にまみれた体を震わせている……。

「だから……だから……すてられちゃったのかな……」

すると、貯まっっていく涙と共に、肌から淡香色の結晶がポツポツと生え始めた。

そうだ、彼は特異点だった……。

「へんなひとたちにさらわれてから……ずっとまってるのに……。おとうさんも……おかあさんも……ぼく、ずっとまってるのに……。ずっとずっと……だいすきなのに……」

嗚咽と共に次々に流れ出した涙すら、頬から落ちれば直ぐに砂となって溶ける……。

彼は、どれだけの恵まれた場所にいたのだろうか。

その喪失感、どれだけ大きなものだったのだろう。

大きな光が喪失することによる失望は、僕にだってわかる……。

それを考えれば考えるほど、彼自信を自分と重ねてしまう……。

この子を本当の意味で助けてあげないといけない。

どころか、絶対に助けなくてはならない存在だ。

僕のような存在にならないように、僕ら大人が見守っていないといけないんだ…。

「待っていて…」

僕はズボンの中からルストロニウム製の包帯を取り出し、彼の二の腕に結ぶ。

「これ…ほどけないようにね…」

その場でしゃがみ、結晶が消えていく少年と視線を合わせた。

「大丈夫。きつとお父さんもお母さんも、君のこと探してる。まだ見つけられていなかったただだよ」

少年がグスンと涙をすすると、僕は涙で濡れたその頬を撫でてあげた。

「必ず、家族に合わせるから。絶対に」

未熟な力のままで彼に誓うと、希望を感じてくれた少年は、ルストロニウムの効果で修復された腕で涙を拭いながら、大きく頷いた。

彼が未だに家族を愛している気持ちを理解した僕は、その小さな腕を力強く握り、出口へと歩きだした。

罪人のお前がこんなことしてなんの意味があるのか、そんな資格あるのか？と背後霊が五月蠅いが、それでも僕はこうすべきなのだと思っている。

まだ愛してくれる家族がいる彼は、まだひとりぼっちになっではない。

もう、彼が特異で泣かなくて良いように、必ず望む場所へ帰してあげないと…。

「その人…！大丈夫ですか！？」

二人で歩いていると突然、正面から一人の男性が走ってきたのに気づいた。

逆光で人間かりージェンか分別がつかない為、念のために男の子を僕の後ろに回して、アーツを握る…。

「ああよかった…：スプリミナルの人でしたか…」

しかし、走ってきた人の台詞と服装で、彼が武装警察だとり、ア―

ツからそつと手を離した。

「大丈夫でしたか？お怪我は…？」

逆光の中から、ようやく彼の顔面の形が見えた。

清潔感を感じないうねりのある長髪と、あまり映え揃っていない無精髭の男性…。

…あれ？この人どこかで見たような気が…。

「……あーあなた、さつきカジノで一発当ててた人！」

「わっ！シート！シート！」

いけない、つい驚いて大きな声を出してしまった…。

そうだ、カジノに入ったとき、あまりにも廃人っぽかったから、目に止まったんだ。

先ほどとは違い、服装はしっかりと制服を着ていたから、再認識するのに時間がかかった…。

「えっと…自分、武装警察巡査の竹村 旭タケムラ アサヒと言います。何かあったと  
きのために、自分も潜入捜査に回されていたんです。ちなみに…ス  
ロットはその…昔の名残で…」

「そ…そうでしたか…」

というか、僕ら以外にもカジノを張っていた人がいたのか…。

彼の昔に何があったのかは気になるが、とりあえず味方が来てくれて助かった。

ただ、これがバレたら処分は免れないだろうけど…。

「そつ、それよりも！救助対象者は彼だけですか…？」

彼が確認を取った瞬間、僕の脳内に観客席の光景がフラッシュバックした。

「いえ…。まだです」

まだ助けなきやいけない人がいる。

あのとき、この子と同じく、私利私欲にまみれた汚ならしい感情を向けられた人たち…。

まだ、オークションの引き渡しは終わってなかった筈だから、恐らくまだ何人かいるはず…！

「タケムラさん！この子、お願いします！」

「あつ！は、はい！」

僕は竹村さんに男の子を任せると、彼は心配そうな目をこちらに向けた。

「おにいちゃんは…？」

弱々しい言葉に、胸を締め付けられる。

恐らく、始めて見る人につれていってもらうのが怖いのだろう。

「大丈夫…。他に捕まってる人を助けてくるだけ。そのおじさんに着いていって」

僕は優しく男の子の頭を撫でると、心配を振り落とすように、彼は彼なりに逞しい顔を作って頷いた。

彼はそんなに弱虫じゃないようで、僕は親のように安心した。

「タケムラさん。この子、特異点です。ルストロニウム性の包帯があつたので、応急処置しましたが、気を付けてあげてください！」

僕の状況説明を聞くと、少し頼り無さげだった顔から一辺、武装警察としてのプライドを賭けて力強く敬礼をした。

「了解しました！…武運を！」

受命した彼へのエール代わりに、僕も同じく敬礼をする。

彼は腕を下ろすと、少年の腕を強く握り、二人で灯りのほうへと走り出した。

よかつた…彼はこれでもう大丈夫だ。

きっと両親にも会えるだろうし、特異点の事も郷仲さん達がなんとかしてくれるだろう…。

光に飲まれていく二人を見て、僕もとりあえずは安心だ。

「よう…」

さあ、僕も彼らを助けにいかなければ…。

今の自分ができることはきつと、涙を流させないことだけだ。奥で頑張ってる瀬田さんのため、皆の期待に沿うため。

僕は走りだ…。

ドスツ！！

「っ!!」

走り出そうとしたその瞬間、突然、背中から身体を貫く程の激痛を感じた。

何が起きた？

何があつた？

なんでこんなに…腹…が…。

「あっ……あああ……」

喉から鉄の味が漏れだした。

恐る恐る自分の体を見てみると、毒々しく禍々しい無数の黄色い足がついた細長く巨大な虫の胴体が、僕の腹を思いきり貫いていた……。

痛いすらも感じない。

怖い。

ヤバイ。

不意打ちだ。

なんでこんなものが……？

なんで…

なんで、なんで、なんで!?

「よかつたなあ。ガキを救える位の活躍はできて…」

少し高めの男声。

それが聞こえると共に、僕の体から、その禍々しい胴体が引き抜かれた。

風が通る腹で後ろを向くと、そこにいたのは、ムカデのリーゼン……。

「だが残念。お前みたいいなスプリミナルは高く売れるんでなあ?」

高級そうなスーツ姿に、なにかゾツとするようなハイライトの薄い目、そして腕から延びていた百足の胴体…。

間違いなくこいつはマフィアの一人。

しかし、彼を組員とだけ呼ぶには、あまりにも強すぎる力と、それを持って余せるだけの威圧感を、僕は肌でビリビリと感じていた…。

「まあ、そのまま眠ってくれりゃ悪いようにはしねえさ。こつちも利

益が大切なんでね…」

先程とは違い、好青年のように微笑む姿が、またこのムカデのリージエンの恐ろしきを感じさせる…。

「くっ…お前…」

特異がギリギリで仕事をしてくれているからか、血液もギリギリでとどまり、なんとか死なずにすんでいる…。

「このっ！」

それでも膝が落ちていく中、僕はなんとか取り出したアーツの引き金を引いた。

ダアン！

しかし、その弾丸は命中する筈もなく、ムカデリージエンの鞭のようにしなる胴体が、ハエを叩くかのように、軽々しく弾かれてしまった。

「お前素人だな…ダメージを負っているにしても、銃の照準が全然あっていない…」

嘲笑を浮かべながら、ムカデリージエンは懐から先端がドス黒く染まっている拳銃を取り出した。

「銃ってのはな…こう使うんだよ…」

ダアン!!

「いつ…だああっ！」

鈍い音を立てながら放たれた弾丸は僕の肩を貫通する。

激痛を抑えようと腕を伸ばした刹那、身体の活力が一気に削がれ、地面に片方の肩をつけて這いつくばるような体制になってしまった。

しまった、ハイドニウムか！

肩から血が流れると共に、腹に留まっていた血液もジワジワと滲み出してきたのを体感している…。

「頭じゃないだけかもしれませんが。大事な商品なんだから…殺しちやダメだろうか？」

彼の言っていることは意味不明だ。

奴は僕を失血死させようとしているのではないのか…？

ここまで僕に傷をつけておいて…こいつはなんなんだ…？



ダァンツ！

疑問が血のように滲んでいく中、新たに緑色の結晶弾丸が飛来し、ムカデリージエンの持つていを黒色の拳銃を弾いた。

「ツチ……今度は射撃の玄人か……」

その弾丸の威力は僕と違ったようで、ムカデの胴体からは赤い血液が流れ出していた。

「ユウキさんっ！」

聞き覚えのある少し低い声……

「セタ……くん……」

ダメージが蓄積されている中、なんとか首を回し、瀬田くんの怒りを含んでいる顔と姿を確認した。

彼は服もボロボロになりつつも、最後まで負けずに戦っていたようだ。

「アナタのことはわかってている……。緋伊戸<sup>ヒイド</sup> セイジ、組織のためなら拷問も殺人も厭わない要注意人物……」

通常状態の拳銃<sup>アーツ</sup>を向けながら罪状を告げると、緋伊戸は臆する様子などなく鼻で笑うだけだった。

「調べは付いてるわけか……。まあ、お前の性格だ。調べられる手の内はどことん調べてんだろう？」

鼻に着く口車だが、瀬田くんがそれに乗せられているような素振りは見られない。

これから戦闘に入るのかもしれないと思っていたが、逆に緋伊戸は拳銃を下ろした。

「だが……今日はやめた方がいいぜ？ちよいと面倒なことが起きそうだからなあ……？」

「なに……？」

他になにが起きるのかと、警戒するよりも先に、その”面倒なこと”と言うのは現れてしまった……

「ヒイド」

突然、緋伊戸の裏から、一人のリージエンが現れる。

刀のように巨大な二本の角と、四本の腕に、筋肉のついた体躯……

ヘラクレスオオカブトの姿をしたそのリーゼンに、瀬田くんの表情は絶句を表していた…。

「どうなっている？ここにネズミを呼んだ覚えはないが？」

見て数秒の僕でも分かる…。

この大きなリーゼンには…僕ら二人だけでは、絶対に歯が立たない…。

「これはこれはマイマスター…。申し訳ございません、私もこれは計算外でした…。しかしご安心を」

マスターと呼ばれるリーゼンに、頭を下げながら微笑む緋伊戸は、僕の髪を強く引つ張って、体を強制的に起こさせた。

「ぐっ…」

「新たな収益元も見つけましたし…あのデカブツはそこまで強くない」

僕への物化と瀬田くんへの罵倒に苛立たない筈がないが、今、自分になにかできる術は、残念ながらない…。

フカザワ ケイク  
「深澤 経九…。或マス首領のお前がなんでこんなところに…」

瀬田くんが感情を表すことはないが、自身のアーツの銃口を或マス首領に向けるが、相手も同様に顔色一つ変えることはない。

「煩わしい…」

すると、或マス首領は背中から、血管の通った透明な羽を大きく広げ、それを大きく前後に動かし始める。

「ぐ…っ…」

すると、彼の羽ばたきから瀬田くんに向けて暴風が吹き荒れ、軽い力では銃の照準すらも合わせられない程、体制を崩された。

「その名前は嫌いだ。今の俺は、マスターヘラクレス…。いずれ、リーゼンを統べる者になる名だ…」

涼しげな顔に、立てなくなるほどの攻撃を軽々と発動している事が、その言葉に重みを与えている。

アングラなリーゼンにとっての強く重い意志が乗った言葉が、一層このミラーファイアと言う組織の重鎮さを垣間見たような気がした。

ただ、名前が超ダサイな…マスターヘラクレス……。

「勝手に…決めるなっ！」

普段、仏頂面の瀬田くんが、風と怒りで顔を歪ませながら、火事場の馬鹿力で銃を再度掲げる。

「プラントアルマー！機関銃<sup>M4</sup>！」

災害球の爆風の中でも瀬田くんは、なんとか銃の形状を変えて、弾丸を乱射する。

「無意味なことを…」

ポツリと呟く緋伊戸。

その瞬間、或マス首領がまた強く風を呼び起こすと、強力な風圧によって、弾丸が宙で止まった…。

「ぐっ…そっそんな…っ！」

ダンダンダンダンッ！

狼狽えているその一瞬、4つの弾丸が、瀬田くんの身体に打ち込まれた。

「ぐああああっ…！」

発射したのは全て或マス首領の持つ拳銃。

「虫のリージエンは…手が二つ多くて助かる」

虫のリージエンの身体だからこそ持てる、4丁もの多くの銃口から、火薬の香りが舞っていた…。

「く…ああ…ぐっ！」

バランスを崩しそうになるも、彼は弾痕から血を吹き出しながら、なんとかその場に根を張っているが、もう一度攻撃を食らえば、恐らく足が使い物にならなくなる…。

「これで特異点が2体かあ……。だいぶ資産がたまりますね」

立っているのがギリギリの瀬田くんを眺める緋伊戸。

恐らく、この二人が瀬田くんの確保に協力すれば、ほぼ負けは確定だ…。

僕より強い瀬田くんが捕まってしまったら勝ち目はない。

僕のせいで…彼も捕まって競りに出される……。

「ううっ！」

そんなの嫌だ…っ！

ドンッ!!

「なに?」

一か八か、僕は弱った身体を無理やり動かし、瀬田くんを捉えようとする或マス首領の身体に抱きついて、動きを止めた。

「セタクン!逃げて!」

身体を動かして振り払おうとする或マス首領にしがみつきのながら、僕は瀬田くんへ退避を叫んだ。

「そんな…そんなこと、できません!俺は!」

「このっ!」

ダン!ダン!ダンッ!

瀬田くんの声を遮るように、或マス首領の銃声が鳴り響く。

しかし、彼の放たれた弾丸は普通の鉛弾丸だった上、ハイドニウムの効果はもう切れていたため、僕の身体には着弾しない。

「なんと!弾丸が体をすり抜けたっ!」

或マス首領の顔を伺いながら、オーバーに驚く緋伊戸。

僕は瀬田くんの顔色を好転させるために、彼に作り笑いを見せた。

「ほら…:僕なら大丈夫だから!今は全員撤退してっ!まだ、カジノを潰せるチャンスはあるっ!」

「…なりません!それでは、ユウキさんは?」

僕を心配してくれる間、或マス首領は僕にドスを突き刺したが、それも通らない。

未だ眉をひそめる瀬田くんの心を静めるために、僕の特異は未だに攻撃を避け続ける。

「僕は平気だ…:助けに来てくれることを願ってるから…っ!だから今は!」

ブスッ!

「ウグッ!!」

今は逃げてくれ。

そう伝えようとした瞬間、背中に多きな針の刺激が走った。

「う…:う…:う…:」

なんだ…急に眠気が…!?

「ハイドニウム製の超強力麻酔だ」

黒い針のついた注射器を持った緋伊戸が、僕の顔を覗いている。

「まさか、こいつが激レア特異点だったとは…。こりやあやべえ代物になりそうだな…」

ニヤリと微笑むその顔は、背筋に百足が這うかのような悪どさだ。

「ユウキさあんっ!」

また無理をしてアーツを構える瀬田くんは、僕は最後の力を振り絞って、彼の前に掌を広げた。

「はやく…この事を…ミズハラ君…達に…」

眠気とダメージで限界の中、僕はなんとか、彼に言葉を残して目を閉じた。

「行った方がいいんじゃないのぉ?早くしねえと…マイマスターが本気だしちやいますよ?」

耳に入る緋伊戸の声がうざったらしい…。

これ以上、煽ってやらないでくれ。

きつと…瀬田くんは、責任を強く感じるタイプの人間だから…。

「……っ…ごめんなさい…っ!」

震える低声が聞こえると、走り遠ざかる足音が耳に響いた。

「これで…良いんだ…」

掃討作戦関係者に置ける被害者は、僕だけで済んだ…。

それでももう…心配しなくて済む…。

「ようやく静かになりましたね」

「ああ…」

或マス二人の声が聞こえたから、恐らく瀬田くんを敢えて逃がしたのだろう…。

「それで、マイマスター?捕まった顧客や下っぱ達はどういたします?」

「放っておけ。そこまで大きな損害にはならんだろう」

薄れ行く意識の中、最後に聞こえたマスターヘラクレスと名乗る人間の一言が、飛散したペンキのように心にこびりつく…。

「第一……ここが崩壊したところで、損害は1%にも満たん」

投げつけられたその言葉が引き金のように、僕はそつと静かに眠りについてしまった。

これからどうなってしまうのかなんてわからない……。

ただ、これが絶望ではないことを、僕は麻酔と言う暗闇のなかで、必死に祈るしかなかった……。

To be continue…